大分市埋蔵文化財発掘調査報告書　第40集

下郡遺跡群　Ⅰ

大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1

2002
大分市教育委員会

下郡遺跡群　Ⅰ

大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

下郡遺跡群第90次調査
下郡遺跡群第91次調査
下郡遺跡群第92次調査

2002
大分市教育委員会



下郡遺跡群第90次・92次調査区（西方向より）



下郡遺跡群第90次・92次調査区

序　文

大分市教育委員会では、昭和62年度から大分市下郡地区土地区画整理事業対象地域内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。

本書は、これまで十数年にわたり調査をおこなってまいりました下郡遺跡群の正式報告書です。

下郡遺跡群は、大分川の河口に近い右岸の自然堤防上に広範に展開し、縄文時代後期から現代に至る大規模な複合遺跡であることが判明しています。特に弥生時代と奈良時代に遺跡の大規模化が顕著であり、弥生時代には環濠に囲まれた集落跡が造られ、奈良時代には多くの建物が各所に建てられています。これらの建物跡は、古代の大分郡衙との関連においても注目されるものです。

このたび十数年間､百数十次の調査におよぶ下郡遺跡群発掘調査報告書の第１巻を発行いたしました。今回は、下郡遺跡群の南西地域に所在する第90次調査から第92次調査までの３地点の調査報告を収録しており、時代も弥生時代、古墳時代、奈良時代、中世と多岐にわたり、各時代とも郷土大分の歴史を考える上で重要な内容を有しています。

本書に収録されたこれらの資料が、学術研究者のみならず広く市民の皆様に利用され、文化財に対するご理解を深め、さらに歴史研究に幅広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、本書の発刊にあたりご配慮ご協力頂きました下郡地区の方々、大分市都市計画部区画整理課、同下郡区画整理事務所に対し衷心より謝意を表すとともに、発掘調査並びに資料整理にご協力下いただきました関係各位に対しまして心より感謝申し上げます。

平成14年３月31日

大分市教育委員会

教育長　　御沓　義則

例　言

１．本書は昭和62年度から平成12年度までに大分市教育委員会が調査を実施した下郡遺跡群内での発掘調査の中で、第90・91・92次調査の内容をまとめたものである。

２．本書に掲載した調査内容（調査期間、面積、担当者）は各調査の報文中に記している。

３．調査の実測には国土座標第Ⅱ座標系を利用している。したがって本書に示される方位は特に注記のない限り（Ｇ・Ｎ・座標北）を示している。

４．遺跡・調査地点名称は、従来の慣例に従い小字名をもって呼称するには、その対象面積が96haと広大であり、また遺跡単位も複数の字地域に及ぶなどの状況が認められるため、遺跡名については、「下郡遺跡群」とし、主要路線等による大区画区分（第10図）と国土座標系による小地点表示（第11図）の２本柱で表示することとする。

⑴　小地点表示は国土座標第Ⅱ座標系（ｘ＝25.550　ｙ＝58.850）を基点として一辺50ｍの方形地区割を行った。（第４図）

⑵　遺跡名称表示は次のようになる。

下郡遺跡群　Ｈ区　ａ－２地点

（大区画表示）（小区画表示）

５．遺構の切り合い図の表記については、遺構の新旧関係を実線で示し、下層遺構は点線で記した。

６．各遺構番号は下記のように示した。

例　091　ＳＨ　020

（調査次）（種別）（番号）

７．遺構種別は下記の略号表記による。

ＳＡ	柵列状遺構	ＳＨ	竪穴住居跡
ＳＢ	建物跡（掘立柱建物跡等）	ＳＪ	土器棺墓
ＳＣ	廊状遺構	ＳＫ	貯蔵穴
ＳＤ	溝状遺構	ＳＴ	墓遺構
ＳＥ	井戸跡	ＳＸ	性格不明遺構（土坑、小ピットなどを含む）
ＳＦ	道路状遺構	ＳＺ	表土等から出土し、層位が不明な遺物に対して使用

８．遺跡地からは多量の遺物が出土している。これらの遺物をすべて図化し掲載するこが望ましいことは言うまでもないが、時間的制約、予算的制約などの諸事情から不可能である。したがって、図化遺物は一括性の高いと考えられるものを除き、遺構内出土遺物の中でも、所産時期を示すと考えられ、しかも出土遺物中で新出のものを基本的に選別し掲載している。このような方針を踏まえ、遺構台帳の記載にあたっては、特に未掲載遺物の内容を中心とすることを心がけた。種別の明らかなものについては種別名を、不明なものについては「土器片」「弥生土器片」「須恵器片」というレベルでの表記を行っている。台帳に記入した未掲載遺物については、可能なかぎり資料収蔵庫内で検索できるように努め、原資料へフィードバックできるように配慮している。

９．本書の執筆は坪根伸也のほか、宮田剛・幸しのぶ・井口あけみ・羽田野裕之が行った。なお執筆分担は下記の通りである。

第Ⅰ章……坪根伸也

第Ⅱ章……坪根伸也、宮田　剛、羽田野裕之、横山　歩

第Ⅲ章……坪根伸也、宮田　剛、幸しのぶ、羽田野裕之

第Ⅳ章……坪根伸也、井口あけみ

10. 遺構の実測は各現場担当者がおこなった他、一部は（株）埋蔵文化財サポートシステム、写真測量を（株）九州航空に委託した。
11. 出土遺物の実測は、坪根伸也、黒田きくみ、堤美智代、菅真奈美、甲斐光代、藤内美佐、石田直美、幸しのぶ、林潤也、中西武尚が行い、石器・石製品については宮田剛による。
12. 実測図製図は木村藍子、宮成美恵が行った。
13. 遺物整理は坪根伸也、井口あけみ、堤美智代、宮成美恵の他、稗田智美、松場泉の協力を得た。
14. 遺物写真撮影は㈲九州文化財リサーチに委託し、写真撮影のための復元、着色には主として今村信子、野崎香織、野崎豊子、三重野京子、藤内美佐、黒田きくみがあたった。
15. 遺物番号は遺構番号の末尾に遺構別の通し番号において表示する。

090SH001　－　001

（遺構番号）－（通し番号）

16. 遺物番号は本文・挿図・図版で一致する。
17. 遺物観察表は以下の記述基準により標記される。

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（㎝）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
①	②	③	③	④	⑤	⑤	⑥	⑥	⑦	⑦	⑦	⑦	⑧	⑨

①項目15に準ずる。　②挿図番号に一致する。

③判明する器種について記述する。　④胎土中に含まれる混和材について記述する。

⑤色調について記述する。

⑥器面調整について記述する。複数段で記述されるものは基本的に上位のものが上部調整を示す。

⑦計測可能な各部位のサイズを記入する。復元数値は（　）にて表示する。

⑧残存率について記述する。　⑨特記事項について記述する。

18. 本書に掲載される遺物の説明に際しては、次の文献を参考にした。

土師器・須恵器・陶磁器など

太宰府市教育委員会　1983「付編土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』

太宰府市教育委員会　1992「遺物各説」『宮の本遺跡Ⅱ』太宰府市の文化財　第10集

山本　信夫　1990「統計上の土器－歴史時代の土師器の編年研究によせて」『九州上代文化論集』　乙益重隆先生古希記念論文集

中島恒次郎　1992「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ　中近世土器研究会

中島恒次郎　1992「都へ行った土器」『古文化談叢』第28集　九州古文化研究会

小野　正敏　1982「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№２　日本貿易陶磁研究会

森　　毅　1995「16・17世紀における陶磁器の様相とその流通－大坂の資料を中心に－」『ヒストリア』第149号　大阪歴史学会

森田　　勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№２　日本貿易陶磁研究会

上田　秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№２　日本貿易陶磁研究会

乗岡　　実　2000「中世備前焼（壷）の編年案」『第２回中世備前焼研究会資料』中世備前焼研究会

乗岡　　実　2000「中世備前焼擂鉢の編年について」『第３回中世備前焼研究会資料』中世備前焼研究会

小柳　和宏　1991「中世土器生産小考－文書・地名から土器生産を探る－」『大分縣地方史』第143号　大分県地方史会

小林昭彦・玉永光洋　1988「出土遺物土器」『安岐城・下原古墳』大分県教育委員会

菊田　　徹　1986「東九州における中世土師質土器の様相－坏･皿形土器を中心として－」『専修考古学』第７号　専修考古学会
渋谷　忠章　1984「考察　出土遺物について　土師質土器」『伐株山城跡』玖珠町教育委員会
佐藤　浩司　1988「第Ⅴ章考察　平安時代の土師器編年試案と地域相の解明にむけて」『寺田遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第70集（財）北九州市教育文化事業団
坪根　伸也　1995「付章　羽田遺跡出土土器に関する二・三の問題」『羽田遺跡Ⅱ』大分市教育委員会
坪根伸也・塩地潤一　2001「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会

弥生土器など

高橋　　徹　1979「廃棄された鏡片－豊後における弥生時代の終焉－」『古文化談叢』第６集　九州古文化研究会
高橋　徹他　1989『大分県史　先史篇Ⅱ』大分県
柳田　康雄　1991「土師器の編年１　九州」『古墳時代の研究』６　雄山閣出版
坪根　伸也　1996「東九州（大分）の弥生前期土器－別府湾岸地域を中心として－」『山口考古学談話会百回記念大会－西部瀬戸内の弥生文化－前期弥生土器の諸相－』山口考古学談話会百回記念大会実行委員会

須恵器編年

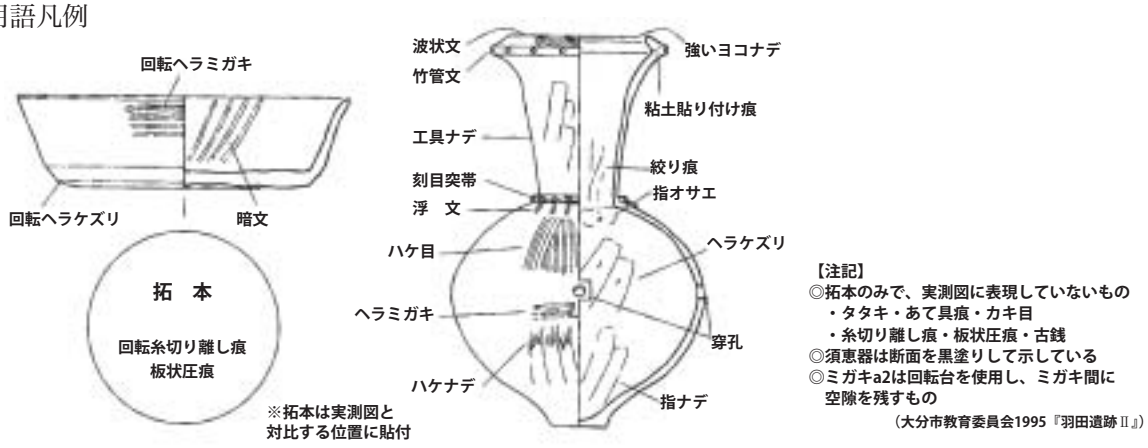
須恵器編年に関しては、陶邑編年、小田富士雄氏による九州須恵器編年を適宜使用しているが、両者の対応はおおよそ以下の年代観により使用している。

実年代（西暦）	500年			550年			600年			650年
田辺編年	ＴＫ-23	ＴＫ-47	ＭＴ-15	ＴＫ-10		ＴＫ-43	ＴＫ-209		ＴＫ-217	ＴＫ-46
陶邑編年	Ⅰ			Ⅱ					Ⅲ	
	4	5	1	2	3	4	5	6	1	2
小田編年	ⅠＢ	Ⅱ		ⅢＡ		ⅢＢ	Ⅳ		Ⅴ	Ⅵ

19. 報文中の弥生時代後期～古墳時代初頭の土器分類は090SH020出土土器群の分類（第368図）を使用している。
20. 本書の編集・校正については下記の体制にて行った。

チーフエディター　坪根伸也
メインエディター　黒田きくみ、堤美智代、宮成美恵、井口あけみ
（協力　稗田智美、松場泉、永井勝代）
整理スタッフ　穴井民子、阿部眞知子、伊東みほ、今井祐子、内田順子、沖　有子、沖本美和子、川野美和、釘宮香苗、笹垣美香、三宮多美子、首藤美千代、白坂直美、杉浦美和、高木麻奈美、中村由美子、成田千春、西嶋スミエ、野田友枝、秦由美子、飛高裕子、原田和代、渕野玲子、帆足みゆき、町田ユカリ、丸井久美子、三重野八重子、南　優子、宮崎里美、宮本早苗、本室初代、山下順子、結城由利恵、吉岡真由美、吉田純子、渡辺里美（以上　大分市臨時職員）

表現用語凡例



目　次

第Ⅰ章　総　説 …… 1
　１．調査に至る経過 …… 1
　２．調査組織 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 12
　第１節　下郡遺跡群の位置と環境 …… 12
　　（１）遺跡の地理的位置 …… 12
　第２節　遺跡周辺の歴史的環境 …… 14
　　（１）はじめに …… 14
　　（２）旧石器時代 …… 15
　　（３）縄文時代 …… 18
　　（４）弥生時代 …… 25
　　（５）古墳時代 …… 27
　　（６）古代 …… 30
　　（７）中・近世 …… 32
　第３節　調査の方法 …… 35
第Ⅲ章　調査の概要 …… 42
　第１節　下郡遺跡群第90次調査 …… 42
　　（１）はじめに …… 42
　　（２）土層 …… 42
　　（３）遺構と遺物 …… 55
　　（４）小結 …… 141
　第２節　下郡遺跡群第91次調査 …… 161
　　（１）はじめに …… 161
　　（２）土層 …… 161
　　（３）遺構と遺物 …… 161
　　（４）小結 …… 168
　第３節　下郡遺跡群第92次調査 …… 170
　　（１）はじめに …… 170
　　（２）土層 …… 170
　　（３）遺構と遺物 …… 180
　　（４）小結 …… 283
第Ⅳ章　総　括　－調査成果の整理とまとめ－ …… 307
　第１節　調査成果の時代別整理 …… 307
　第２節　出土遺物について …… 308
　　１．090SH020出土土器の時間的位置づけについて …… 308
　　２．都城系暗文土器について－下郡遺跡群での出土様相について－ …… 312
　第３節　大分県内出土の製塩土器について …… 314

挿図目次

第１図　下郡遺跡群の位置（大分全図・大分市域図）…… 13
第２図　下郡遺跡群とその周辺の遺跡 …… 15
第３図　大分川下流域の微地形分類図（千田氏原図に加筆）『大分川流域』…… 17
第４図　大分市内の旧石器時代遺跡分布図 …… 19
第５図　大分市内の縄文時代遺跡および遺物出土分布図 …… 20
第６図　大分市内の弥生時代遺跡分布図 …… 26
第７図　大分市内の古墳時代遺跡分布図 …… 29
第８図　大分市内の古代遺跡分布図（大分市歴史資料館『豊後国の眺め』「大分市内官衙関連遺跡位置図」）…… 31
第９図　平面直角座標系 …… 35
第10図　調査グリッド図（1/7,500）…… 38
第11図　下郡遺跡群調査地点位置図（1/4000）…39～40
第12図　第90・91・92次調査地点位置図（1/5000）… 42
第13図　基本土層断面図（1/50）…… 43
第14図　調査風景 …… 43
第15図　遺構配置図（1/250）…… 44
第16図　全体遺構図（1/250）…… 45
第17図　SA007遺構実測図（1/80）…… 55
第18図　SA007出土遺物実測図（1/4）…… 55
第19図　SB001平面・断面実測図（1/80）…… 56
第20図　SB001出土遺物実測図（1/4）…… 56
第21図　SB002平面・断面実測図（1/80）…… 57
第22図　SB003遺構実測図（1/80）…… 58
第23図　SB003出土遺物実測図①（1/4）…… 59
第24図　SB003出土遺物実測図②（1/2）…… 59
第25図　SB004遺構実測図（1/80）…… 59
第26図　SB008遺構実測図（1/80）…… 60
第27図　SB008出土遺物実測図①（1/4）…… 61
第28図　SB008出土遺物実測図②（1/4）…… 62
第29図　SB009平面・断面実測図（1/80）…… 63
第30図　SB178平面・断面実測図（1/80）…… 63
第31図　SB178出土遺物実測図（1/4）…… 64
第32図　SB294遺構実測図（1/60）…… 65
第33図　SB294出土遺物実測図①（1/4）…… 66
第34図　SB294出土遺物実測図②（1/4）…… 66
第35図　SB294出土遺物実測図③（1/4）…… 67
第36図　SB294出土遺物実測図④（1/4）…… 68
第37図　SB294出土遺物実測図⑤（1/2）…… 68
第38図　SB294出土遺物実測図⑥（1/2）…… 68
第39図　SB294出土遺物実測図⑦（1/3）…… 69
第40図　SD076平面・土層断面実測図（1/300）…… 69
第41図　SD076出土遺物実測図①（1/4）…… 70
第42図　SD076出土遺物実測図②（1/4）…… 71
第43図　SD076出土遺物実測図③（1/4）…… 72
第44図　SD076出土遺物実測図④（1/4）…… 72
第45図　SD076出土遺物実測図⑤（1/4）…… 72
第46図　SD076出土遺物実測図⑥（1/4）…… 72
第47図　SD201平面・土層断面実測図（1/200・1/100）…… 73
第48図　SD201土層断面実測図（1/40）…… 73
第49図　SD201出土遺物実測図①（1/4）…… 73
第50図　SD201出土遺物実測図②（1/2）…… 73
第51図　SH020遺構実測図（1/60）…… 74
第52図　SH020遺物出土状況（北西方向から）…… 75
第53図　SH020完掘状況（北西方向から）…… 75
第54図　SH020出土遺物実測図①（1/4）…… 75
第55図　SH020出土遺物実測図②（1/4）…… 76
第56図　SH020出土遺物実測図③（1/4）…… 77
第57図　SH020出土遺物実測図④（1/4）…… 78
第58図　SH020出土遺物実測図⑤（1/4）…… 79
第59図　SH020出土遺物実測図⑥（1/4）…… 79
第60図　SH020出土遺物実測図⑦（1/4）…… 80
第61図　SH020出土遺物実測図⑧（1/4）…… 81
第62図　SH020出土遺物実測図⑨（1/4）…… 82
第63図　SH020出土遺物実測図⑩（1/4）…… 83
第64図　SH020出土遺物実測図⑪（1/4）…… 83
第65図　SH020出土遺物実測図⑫（1/4）…… 84
第66図　SH020出土遺物実測図⑬（1/4）…… 85
第67図　SH020出土遺物実測図⑭（1/4）…… 86
第68図　SH020出土遺物実測図⑮（1/4）…… 86
第69図　SH020出土遺物実測図⑯（1/4）…… 87
第70図　SH020出土遺物実測図⑰（1/4）…… 88
第71図　SH020出土遺物実測図⑱（1/4）…… 89
第72図　SH020出土遺物実測図⑲（1/4）…… 90
第73図　SH020出土遺物実測図⑳（1/4）…… 91
第74図　SH020出土遺物実測図㉑（1/4）…… 91
第75図　SH020出土遺物実測図㉒（1/4）…… 91
第76図　SH020出土遺物実測図㉓（1/4）…… 92
第77図　SH020出土遺物実測図㉔（1/4）…… 92
第78図　SH020出土遺物実測図㉕（1/4）…… 93
第79図　SH020出土遺物実測図㉖（1/4）…… 95
第80図　SH020出土遺物実測図㉗（1/4）…… 95
第81図　SH020出土遺物実測図㉘（1/4）…… 95
第82図　SH020出土遺物実測図㉙（1/4）…… 96
第83図　SH020出土遺物実測図㉚（1/3）…… 96
第84図　SH020出土遺物実測図㉛（1/2）…… 97
第85図　SH069遺構実測図（1/60）…… 98
第86図　SH069出土遺物実測図①（1/4）…… 99
第87図　SH069出土遺物実測図②（1/3）…… 99
第88図　SH020・SH069完掘状況（北西方向から）…… 99
第89図　SH094完掘状況（北方向から）…… 99
第90図　SH094遺構実測図（1/60）…… 100
第91図　SH094切り合い略図（1/60）…… 101
第92図　SH094出土遺物実測図①（1/4）……102
第93図　SH094出土遺物実測図②（1/4）……103
第94図　SH094出土遺物実測図③（1/4）……104
第95図　SH094出土遺物実測図④（1/4）……105
第96図　SH094出土遺物実測図⑤（1/4）……106
第97図　SH094出土遺物実測図⑥（1/4）……106
第98図　SH173完掘状況（西方向から）…… 107
第99図　SH173遺構実測図（1/60）…… 107
第100図　SH200完掘状況（南東方向から）…… 108
第101図　SH200遺構実測図（1/60）…… 108
第102図　SH200出土遺物実測図①（1/4）…… 109
第103図　SH200出土遺物実測図②（1/4）…… 110
第104図　SH200出土遺物実測図③（1/4）…… 111
第105図　SH200出土遺物実測図④（1/4）…… 112
第106図　SH200出土遺物実測図⑤（1/3）…… 113
第107図　SJ398平面・断面実測図（1/20）…… 114
第108図　SJ398出土遺物実測図（1/4）…… 114
第109図　SX005遺構実測図（1/80）…… 115
第110図　SX005出土遺物実測図（1/4）…… 115
第111図　SX006出土遺物実測図（1/4）…… 115
第112図　SX019出土遺物実測図（1/4）…… 115
第113図　SX057遺構実測図（1/80）…… 116
第114図　SX059遺構実測図（1/80）…… 116
第115図　SX059出土遺物実測図（1/4）…… 116
第116図　SX080出土遺物実測図（1/4）…… 117
第117図　SX081出土遺物実測図（1/4）…… 117
第118図　SX087出土遺物実測図（1/4）…… 117
第119図　SX088出土遺物実測図（1/4）…… 117
第120図　SX095平面・断面実測図（1/80）…… 118
第121図　SX095出土遺物実測図（1/4）…… 118
第122図　SX115出土遺物実測図（1/4）…… 118
第123図　SX152出土遺物実測図（1/4）…… 119
第124図　SX153出土遺物実測図（1/4）…… 119
第125図　SX154出土遺物実測図（1/4）…… 119
第126図　SX175遺構実測図（1/80）…… 119
第127図　SX219出土遺物実測図（1/4）…… 119
第128図　SX231出土遺物実測図（1/4）…… 120
第129図　SX242出土遺物実測図（1/2）…… 120
第130図　SX258出土遺物実測図（1/4）…… 120
第131図　SX279出土遺物実測図（1/4）…… 120
第132図　SX285出土遺物実測図（1/4）…… 121
第133図　SX295出土遺物実測図（1/4）…… 121
第134図　SX311出土遺物実測図（1/4）…… 121
第135図　SX333出土遺物実測図（1/4）…… 121
第136図　SX363遺構実測図（1/80）…… 122
第137図　SX363出土遺物実測図（1/4）…… 122
第138図　SX390出土遺物実測図（1/4）…… 122
第139図　SX392出土遺物実測図（1/2）…… 122
第140図　SX401出土遺物実測図（1/2）…… 122
第141図　SX412出土遺物実測図（1/4）…… 123
第142図　SX413出土遺物実測図（1/4）…… 123
第143図　SX414出土遺物実測図（1/4）…… 123
第144図　SX427出土遺物実測図（1/4）…… 124
第145図　SX434遺構実測図（1/80）…… 124
第146図　SX434出土遺物実測図（1/4）…… 124
第147図　SX441遺構実測図（1/80）…… 125
第148図　SX441出土遺物実測図①（1/4）…… 125
第149図　SX441出土遺物実測図②（1/2）…… 125
第150図　SX448遺構実測図（1/80）…… 126
第151図　SX448出土遺物実測図①（1/4）…… 126
第152図　SX448出土遺物実測図②（1/3）…… 127
第153図　SX453出土遺物実測図（1/4）…… 127
第154図　SX464遺物出土状況（北方向から）…… 127
第155図　SX464遺構実測図（1/30）…… 128
第156図　SX464遺物出土ポイント配置図（遺構（1/30）・遺物（1/12））…… 129
第157図　SX464出土遺物実測図①（1/4）…… 130
第158図　SX464出土遺物実測図②（1/4）…… 131
第159図　SX464出土遺物実測図③（1/4）…… 131
第160図　SX464出土遺物実測図④（1/4）…… 132
第161図　SX464出土遺物実測図⑤（1/4）…… 133
第162図　SX464出土遺物実測図⑥（1/4）…… 134
第163図　SX464出土遺物実測図⑦（1/4）…… 134
第164図　SX464出土遺物実測図⑧（1/4）…… 135
第165図　SX464出土遺物実測図⑨（1/4）…… 135
第166図　SX464出土遺物実測図⑩（1/4）…… 135
第167図　SX464出土遺物実測図⑪（1/6）…… 136
第168図　表土出土遺物実測図①（1/4）…… 136
第169図　表土出土遺物実測図②（1/4）…… 137
第170図　表土出土遺物実測図③（1/4）…… 138
第171図　表土出土遺物実測図④（1/4）…… 139
第172図　表土出土遺物実測図⑤（1/2）…… 139
第173図　表土出土遺物実測図⑥（1/4）…… 140
第174図　基本土層断面模式図（1/30）…… 161
第175図　遺構配置図（1/100）…… 162
第176図　全体遺構図（1/100）…… 162
第177図　SH001遺構実測図（1/60）…… 164
第178図　SH001出土遺物実測図（1/4）…… 165
第179図　SX037遺構実測図（1/80）…… 166
第180図　表土出土遺物実測図（1/4）…… 167
第181図　基本土層断面模式図 …… 170
第182図　遺構配置図（1/250）…… 171
第183図　全体遺構図（1/250）…… 172
第184図　SB001平面・断面実測図（1/80）…… 180
第185図　SB001出土遺物実測図（1/4）…… 180
第186図　SB111遺構実測図（1/80）…… 181
第187図　SB111出土遺物実測図（1/4）…… 181
第188図　SD002平面・土層断面実測図（1/80）…… 182
第189図　SD002出土遺物実測図①（1/4）…… 182
第190図　SD002出土遺物実測図②（1/1）…… 182
第191図　SD003平面・土層断面実測図（1/80・1/40）…… 183
第192図　SD003出土遺物実測図（1/4）…… 183
第193図　SD300平面・土層断面実測図（1/200・1/80）…… 184
第194図　SD300出土遺物実測図①（1/4）…… 185
第195図　SD300出土遺物実測図②（1/4）…… 186
第196図　SD300出土遺物実測図③（1/4）…… 187
第197図　SD300出土遺物実測図④（1/4）…… 188
第198図　SD300出土遺物実測図⑤（1/4）…… 188
第199図　SD300出土遺物実測図⑥（1/4）…… 189
第200図　SD300出土遺物実測図⑦（1/4）…… 190
第201図　SD300出土遺物実測図⑧（1/4）…… 191
第202図　SD300出土遺物実測図⑨（1/4）…… 191
第203図　SD303遺構実測図（1/200・1/80）…… 192
第204図　SD303出土遺物実測図（1/4）…… 192
第205図　SE355平面・土層断面実測図（1/40）…… 193
第206図　SE355土層断面南側（北方向から）…… 193
第207図　SE355出土遺物実測図①（1/4）…… 193
第208図　SE355出土遺物実測図②（1/3）…… 194
第209図　SF310上位面確認遺構（1/40）…… 195
第210図　SF310下位面確認遺構（1/40）…… 196
第211図　SF310土層模式図 …… 197
第212図　SX325土層断面（東方向から）…… 197
第213図　SX325出土遺物実測図（1/4）…… 197
第214図　SF310遺構変遷模式図 …… 198
第215図　SX336土層断面（東方向から）…… 198
第216図　SX336出土遺物実測図（1/4）…… 199
第217図　SX337土層断面（東方向から）…… 199
第218図　SX337出土遺物実測図（1/4）…… 199
第219図　SX340土層断面（東方向から）…… 200
第220図　SX340出土遺物実測図（1/4）…… 200
第221図　SX354出土遺物実測図①（1/4）…… 201
第222図　SX354出土遺物実測図②（1/4）…… 201
第223図　SX354出土遺物実測図③（1/4）…… 202
第224図　SX354出土遺物実測図④（1/4）…… 203
第225図　SX354出土遺物実測図⑤（1/4）…… 203

第226図　SX354出土遺物実測図⑥（1/4）…… 203
第227図　SX354出土遺物実測図⑦（1/4）…… 204
第228図　SX354出土遺物実測図⑧（1/4）…… 204
第229図　SX354出土遺物実測図⑨（1/3）…… 204
第230図　SF310完掘状況（東方向から）…… 205
第231図　SF310出土遺物実測図（1/4）…… 205
第232図　SF310出土遺物実測図②（1/4）…… 206
第233図　SF310出土遺物実測図③（1/4）…… 207
第234図　SF310出土遺物実測図④（1/4）…… 208
第235図　SF310出土遺物実測図⑤（1/4）…… 209
第236図　SF310出土遺物実測図⑥（1/2）…… 210
第237図　SH060平面・断面実測図（1/60）…… 211
第238図　SH060出土遺物実測図（1/4）…… 211
第239図　SH070遺構実測図（1/60）…… 212
第240図　SH070出土遺物実測図（1/4）…… 212
第241図　SH155平面・断面実測図（1/60）…… 213
第242図　SH155出土遺物実測図（1/4）…… 213
第243図　SH160遺構実測図（1/60）…… 214
第244図　SH200遺構実測図（1/60）…… 215
第245図　SH200完掘状況（南方向から）…… 215
第246図　SH200出土遺物実測図①（1/4）…… 216
第247図　SH200出土遺物実測図②（1/4）…… 217
第248図　SH245出土遺物実測図（1/4）…… 217
第249図　SH250遺構実測図（1/60）…… 218
第250図　SH250平面・断面実測図（1/60）…… 219
第251図　SH250完掘状況（南方向から）…… 219
第252図　SH250出土遺物実測図①（1/4）…… 220
第253図　SH250出土遺物実測図②（1/4）…… 221
第254図　SH250出土遺物実測図③（1/4）…… 222
第255図　SH250出土遺物実測図④（1/4）…… 222
第256図　SH250出土遺物実測図⑤（1/4）…… 223
第257図　SH250出土遺物実測図⑥（1/3）…… 223
第258図　SX278出土遺物実測図（1/4）…… 223
第259図　SX299出土遺物実測図（1/4）…… 224
第260図　SH260遺構実測図（1/60）…… 225
第261図　SH260出土遺物実測図（1/4）…… 225
第262図　SH261平面・断面実測図（1/64）…… 226
第263図　SH261完掘状況（東方向から）…… 226
第264図　SH265遺構実測図（1/60）…… 227
第265図　SH265完掘状況（北西方向から）…… 227
第266図　SH270遺構実測図（1/60）…… 228
第267図　SH270完掘状況（南方向から）…… 229
第268図　SX290遺構実測図（1/20）…… 229
第269図　SH290焼土塊検出時（南方向から）…… 229
第270図　SX284平面・断面実測図（1/20）…… 230
第271図　SX284出土遺物実測図（1/4）…… 230
第272図　SH270出土遺物実測図①（1/4）…… 231
第273図　SH270出土遺物実測図②（1/1）…… 231
第274図　SH270出土遺物実測図③（1/3）…… 231
第275図　SH280遺構実測図（1/60）…… 232
第276図　SH280完掘状況（東方向から）…… 232
第277図　SH280出土遺物実測図（1/4）…… 233
第278図　SH285出土遺物実測図（1/4）…… 234
第279図　SH323遺構実測図（1/60）…… 235
第280図　SH323完掘状況（西方向から）…… 235
第281図　SH323焼土土層断面（東方向から）…… 235
第282図　SH323出土遺物実測図（1/4）…… 236
第283図　SH343遺構実測図（1/60）…… 237
第284図　SH343遺物出土状況（東方向から）…… 237
第285図　SH343出土遺物実測図①（1/4）…… 237
第286図　SH343出土遺物実測図②（1/4）…… 238
第287図　SH343出土遺物実測図③（1/4）…… 239
第288図　SH343出土遺物実測図④（1/4）…… 240
第289図　SH343出土遺物実測図⑤（1/4）…… 241
第290図　SH343出土遺物実測図⑥（1/4）…… 241
第291図　SH343出土遺物実測図⑦（1/4）…… 242
第292図　SX359出土遺物実測図（1/4）…… 242
第293図　SX388出土遺物実測図（1/4）…… 243
第294図　SH360遺構実測図（1/60）…… 243
第295図　SH360出土遺物実測図（1/4）…… 243
第296図　SH365遺構実測図（1/60）…… 244
第297図　SH365出土遺物実測図（1/4）…… 244
第298図　SH370平面・断面実測図（1/60）…… 245
第299図　SH370出土遺物実測図（1/4）…… 246
第300図　SH380完掘状況（北方向から）…… 247
第301図　SH380遺構実測図（1/60）…… 248
第302図　SH380出土遺物実測図①（1/4）…… 249
第303図　SH380出土遺物実測図②（1/4）…… 250
第304図　SH385完掘状況（東方向から）…… 250
第305図　SH385遺構実測図（1/60）…… 251
第306図　SH385出土遺物実測図①（1/4）…… 252
第307図　SH385出土遺物実測図②（1/4）…… 252
第308図　SH385出土遺物実測図③（1/4）…… 252
第309図　SH385出土遺物実測図④（1/4）…… 253
第310図　SH385出土遺物実測図⑤（1/4）…… 254
第311図　SH385出土遺物実測図⑥（1/4）…… 254
第312図　SH385出土遺物実測図⑦（1/4）…… 254
第313図　SH385出土遺物実測図⑧（1/4）…… 255
第314図　SH385出土遺物実測図⑨（1/3）…… 255
第315図　SH385出土遺物実測図⑩（1/4）…… 256
第316図　SH385出土遺物実測図⑪（1/4）…… 256
第317図　SH400完掘状況（北西方向から）…… 256
第318図　SH400遺構実測図（1/60）…… 257
第319図　SH400出土遺物実測図①（1/4）…… 258
第320図　SH400出土遺物実測図②（1/2）…… 258
第321図　SX020出土遺物実測図（1/4）…… 259
第322図　SX021出土遺物実測図（1/4）…… 259
第323図　SX041出土遺物実測図（1/4）…… 260
第324図　SX090出土遺物実測図（1/4）…… 261
第325図　SX100遺構実測図（1/80）…… 262
第326図　SX100出土遺物実測図（1/4）…… 262
第327図　SX130出土遺物実測図①（1/4）…… 262
第328図　SX130出土遺物実測図②（1/3）…… 262
第329図　SX140遺構実測図（1/80）…… 262
第330図　SX145遺構実測図（1/80）…… 263
第331図　SX145出土遺物実測図（1/4）…… 263
第332図　SX150遺構実測図（1/80）…… 264
第333図　SX150出土遺物実測図①（1/2）…… 264
第334図　SX150出土遺物実測図②（1/3）…… 264
第335図　SX158出土遺物実測図（1/4）…… 264
第336図　SX173出土遺物実測図①（1/4）…… 265
第337図　SX173出土遺物実測図②（1/3）…… 265
第338図　SX230平面・断面実測図（1/80）…… 265
第339図　SX240遺構実測図（1/80）…… 265
第340図　SX240出土遺物実測図（1/4）…… 266
第341図　SX195出土遺物実測図（1/4）…… 266
第342図　SX205遺構実測図（1/80）…… 267
第343図　SX205出土遺物実測図（1/4）…… 267
第344図　SX258出土遺物実測図（1/4）…… 267
第345図　SX295出土遺物実測図（1/4）…… 268
第346図　SX390平面・断面実測図（1/30）…… 268
第347図　SX390遺物出土状況（西方向から）…… 268
第348図　SX390出土遺物実測図（1/4）…… 269
第349図　表土出土遺物実測図①（1/4）…… 270
第350図　表土出土遺物実測図②（1/4）…… 270
第351図　表土出土遺物実測図③（1/4）…… 272
第352図　表土出土遺物実測図④（1/4）…… 273
第353図　表土出土遺物実測図⑤（1/4）…… 274
第354図　表土出土遺物実測図⑥（1/4）…… 274
第355図　表土出土遺物実測図⑦（1/4）…… 276
第356図　底部手持ちヘラケズリ痕を残す須恵器（060）…… 277
第357図　表土出土遺物実測図⑧（1/4）…… 277
第358図　表土出土遺物実測図⑨（1/4）…… 277
第359図　表土出土遺物実測図⑩（1/4）…… 278
第360図　表土出土遺物実測図⑪（1/4）…… 279
第361図　表土出土遺物実測図⑫（1/4）…… 280
第362図　表土出土遺物実測図⑬（1/2）…… 281
第363図　表土出土遺物実測図⑭（1/1）…… 281
第364図　表土出土遺物実測図⑮（1/2）…… 281
第365図　表土出土遺物実測図⑯（1/2）…… 282
第366図　表土出土遺物実測図⑰（1/4）…… 282
第367図　墨書土器（101）…… 282
第368図　090SH020出土土器分類表 …… 310
第369図　古墳時代製塩土器出土位置分布図（1/80万）…… 315
第370図　県内出土の脚台付製塩土器実測図①（1/3）…… 316
第371図　県内出土の脚台付製塩土器実測図②（1/3）…… 317

表目次

第１表　大分市内の縄文時代遺跡および遺物出土地点名① …… 21
第２表　大分市内の縄文時代遺跡および遺物出土地点名② …… 22
第３表　大分市内の縄文時代遺跡および遺物出土地点名③ …… 23
第４表　大分市内の縄文時代遺跡および遺物出土地点名④ …… 24
第５表　大分市内の縄文時代遺跡および遺物出土地点名⑤ …… 25
第６表　下郡遺跡群調査地点一覧 …… 41
第７表　遺構一覧表① …… 46
第８表　遺構一覧表② …… 47
第９表　遺構一覧表③ …… 48
第10表　遺構一覧表④ …… 49
第11表　遺構一覧表⑤ …… 50
第12表　遺構一覧表⑥ …… 51
第13表　遺構一覧表⑦ …… 52
第14表　遺構一覧表⑧ …… 53
第15表　遺構一覧表⑨ …… 54
第16表　遺物観察表① …… 144
第17表　遺物観察表② …… 145
第18表　遺物観察表③ …… 146
第19表　遺物観察表④ …… 147
第20表　遺物観察表⑤ …… 148
第21表　遺物観察表⑥ …… 149
第22表　遺物観察表⑦ …… 150
第23表　遺物観察表⑧ …… 151
第24表　遺物観察表⑨ …… 152
第25表　遺物観察表⑩ …… 153
第26表　遺物観察表⑪ …… 154
第27表　遺物観察表⑫ …… 155
第28表　遺物観察表⑬ …… 156
第29表　遺物観察表⑭ …… 157
第30表　遺物観察表⑮ …… 158
第31表　遺物観察表⑯ …… 159
第32表　陶磁器観察表 …… 159
第33表　石器観察表 …… 159
第34表　金属製品観察表 …… 159
第35表　土錘観察表 …… 160
第36表　土製品観察表 …… 160
第37表　遺構一覧表 …… 163
第38表　遺物観察表① …… 169
第39表　石器観察表 …… 169
第40表　遺構一覧表① …… 173
第41表　遺構一覧表② …… 174
第42表　遺構一覧表③ …… 175
第43表　遺構一覧表④ …… 176
第44表　遺構一覧表⑤ …… 177
第45表　遺構一覧表⑥ …… 178
第46表　遺構一覧表⑦ …… 179
第47表　遺物観察表① …… 287
第48表　遺物観察表② …… 288
第49表　遺物観察表③ …… 289
第50表　遺物観察表④ …… 290
第51表　遺物観察表⑤ …… 291
第52表　遺物観察表⑥ …… 292
第53表　遺物観察表⑦ …… 293
第54表　遺物観察表⑧ …… 294
第55表　遺物観察表⑨ …… 295
第56表　遺物観察表⑩ …… 296
第57表　遺物観察表⑪ …… 297
第58表　遺物観察表⑫ …… 298
第59表　遺物観察表⑬ …… 299
第60表　遺物観察表⑭ …… 300
第61表　遺物観察表⑮ …… 301
第62表　遺物観察表⑯ …… 302
第63表　遺物観察表⑰ …… 303
第64表　遺物観察表⑱ …… 304
第65表　遺物観察表⑲ …… 305
第66表　陶磁器観察表 …… 305
第67表　石器観察表 …… 305
第68表　金属製品観察表 …… 305
第69表　土錘観察表 …… 306
第70表　土製品観察表 …… 306
第71表　金属製品観察表 …… 306
第72表　玉類観察表 …… 306

第Ⅰ章　総　　説

１．調査に至る経過

下郡遺跡群は大分県大分市下郡に所在する。下郡遺跡群の所在する大分平野の西部には大分川が貫流し、河口に近い大分川流域には南北に延びる自然堤防を発達させている。下郡遺跡群は大分川河口付近の右岸にあたる約１㎞四方の自然堤防上に立地しており、標高４～７ｍの地点に遺跡が展開する。

遺跡の所在する大分市は、急激な都市化、人口増加に対応するため、住環境整備や効率的な土地利用が嘱望され、市内各所で積極的な土地区画整理事業が推進されている。下郡地区も市街中心部に至近な位置にありながら、永らく水田地帯としての景観を保持してきたが、機能的かつ快適な住環境を創造すべく昭和60年代に至り、土地区画整理事業が計画、着手されたのである。

遺跡の存在は昭和30年代に刊行された『大分市史』等により知られてはいたが、遺物の散布地として認識されていたにすぎず、その具体的内容を示す資料は皆無であった。当該地域の土地区画整理事業が実施されるに伴い、昭和62年３月、下郡土地区画整理事業対象地域内に夥しい遺物の散布が確認されたため、区画整理事務所と現場の立会を実施した。こうして遺跡の存在が改めて再認識されることになったとともに、当時「下郡第２段丘遺跡」として周知されていた当該遺跡が、当初の推定範囲よりも広範に展開することが明らかとなったのである。

以上の経緯を受け、大分県教育委員会及び大分市都市整備部下郡土地区画整理事務所と遺跡の取り扱いについて協議をかさねた。その結果、工事施工部分について、事前に発掘調査を実施することとし、以後現在まで継続して調査が実施され、平成13年12月現在、調査地点は137地点に及んでいる。これまでの各調査地点を第１表に示している。

また、下郡遺跡群の調査概要は以下の概報、および大分市埋蔵文化財調査年報に記載している。

大分市教育委員会　1990『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（1）
大分市教育委員会　1991『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（2）
大分市教育委員会　1992『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（3）
大分市教育委員会　1993『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（4）
大分市教育委員会　1990『大分市埋蔵文化財調査年報』1　―　平成元年度　―
大分市教育委員会　1991『大分市埋蔵文化財調査年報』2　―　平成２年度　―
大分市教育委員会　1992『大分市埋蔵文化財調査年報』3　―　平成３年度　―
大分市教育委員会　1993『大分市埋蔵文化財調査年報』4　―　平成４年度　―
大分市教育委員会　1994『大分市埋蔵文化財調査年報』5　―　平成５年度　―
大分市教育委員会　1995『大分市埋蔵文化財調査年報』vol．6　1994年度
大分市教育委員会　1996『大分市埋蔵文化財調査年報』vol．7　1995年度
大分市教育委員会　1997『大分市埋蔵文化財調査年報』vol．8　1996年度
大分市教育委員会　1998『大分市埋蔵文化財調査年報』vol．9　1997年度
大分市教育委員会　1999『大分市埋蔵文化財調査年報』vol．10　1998年度
大分市教育委員会　2000『大分市埋蔵文化財調査年報』vol．11　1999年度

2．調査組織

調査を実施した各年度の調査組織を列記する。職名等は調査当時のものである。

〔昭和62・63年度〕

調査主体者　　大分市教育委員会　教育長　　安東　　裕

調査指導

賀川　光夫（別府大学学長）　　小田富士雄（北九州市立考古博物館館長・現福岡大学教授）

橘　　昌信（別府大学教授）　　後藤　宗俊（大分県教育長文化課課長補佐）

山田　拓伸（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員）

佐藤　興治（大分市歴史資料館館長）

玉永　光洋（大分市歴史資料館学芸調査係係長）

事務局　　大分市教育委員会

太田　政司（大分市教育委員会社会教育課課長）

椎原　輝男（　　同上　　文化財室室長）

秦　　政博（　　同上　　主幹・昭和63年４月～）

是永　和英（　　同上　　文化財室主査・昭和62年６月～）

森　　弘（　　同上　　文化財室主任）

大分市都市整備部区画整理課

衛藤　福雄（大分市都市整備部区画整理課課長・昭和62年度）

田原　修二（　　同上　　課長・昭和63年度～）　菅原　春海（　　同上　　課長補佐）

竹本　信行（　　同上　　主任・昭和62年度）

長野　清尊（　　同上　　主任・昭和63年度～）

調査協力　下郡土地区画整理事務所

釘宮　勝正（下郡土地区画整理事務所所長）　　今村　富夫（　　同上　　換地工務係長）

木田　克己（　　同上　　補償係長）

宮下　照嘉（　　同上　　主任・昭和62年、専門員・昭和63年度）

調査担当

讃岐　和夫（大分市教育委員会社会教育課文化財室主任）

塔鼻　光司（　　同上　　文化財室技師）

坪根　伸也（　　同上　　文化財室技術員・昭和63年度～）

酒井いずみ（　　同上　　文化財調査員・昭和63年度）

調査補助員

河野　史郎・宮下　貴治・多田　　仁・塩地　潤一（以上別府大学学生）

後藤　　聰（福岡大学学生）

〔平成元年度〕

調査主体者　　大分市教育委員会　　教育長　　安東　　裕

調査指導者

賀川　光夫（別府大学教授）　　小田富士雄（福岡大学教授）

橘　　昌信（別府大学教授）

後藤　宗俊（大分県教育庁文化課課長補佐・現別府大学教授）

山田　拓伸（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員）

佐藤　興治（大分市歴史資料館館長）

木村幾多郎（大分市歴史資料館館長・平成２年４月～）

玉永　光洋（大分市歴史資料館学芸調査係係長）

事務局　　大分市教育委員会

山村　晃（大分市教育委員会社会教育課課長）　椎原　輝男（　　同上　　文化財室室長）

野尻　政文（　　同上　　文化財室室長・平成２年４月～）

秦　　政博（　　同上　　主幹）　　是永　和英（　　同上　　文化財室主査）

佐藤　小夜（　　同上　　文化財室主任）

大分市都市整備部区画整理課

田原　修二（大分市都市整備部区画整理課課長）　幸　　康美（　　同上　　平成２年４月～）

内田　　司（　　同上　　課長補佐）　　長野　清尊（　　同上　　主任）

調査協力　下郡土地区画整理事務所

釘宮　勝正（下郡土地区画整理事務所所長）　今村　富夫（　　同上　　換地工務係長）

木田　克己（　　同上　　補償係長）　　原　　和幸（　　同上　　専門員）

調査担当

讃岐　和夫（大分市教育委員会社会教育課文化財室主任）

塔鼻　光司（　　同上　　文化財室主任）　　坪根　伸也（　　同上　　文化財室技師）

池邉千太郎（　　同上　　文化財室技術員・平成２年４月～）

河野　史郎（　　同上　　文化財調査員）　　橋本　信和（　　同上　　文化財調査員）

調査補助員

塩地　潤一・兵谷　有利・松村　千里・飛田　桂子（以上別府大学学生）

後藤　　聰（福岡大学学生）・秦　　憲二（熊本大学学生）

〔平成２年度〕

調査主体者　　大分市教育委員会　教育長　安東　　裕

調査指導

賀川　光夫（別府大学教授）　　小田富士雄（福岡大学教授）

橘　　昌信（別府大学教授）

後藤　宗俊（大分県教育庁文化課課長補佐・現別府大学教授）

山田　拓伸（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員）

事務局　　大分市教育委員会

山村　　晃（大分市教育委員会社会教育課課長）　野尻　政文（　　同上　　文化財室室長）

秦　　政博（　　同上　　主幹）　　是永　和英（　　同上　　文化財室主査）
佐藤　良蔵（　　同上　　文化財室主査・平成３年６月～）
佐藤　小夜（　　同上　　文化財室主任）
大分市都市計画部区画整理課
幸　　康美（大分市都市計画部区画整理課課長）
奈須　正和（　　同上　　課長補佐）
長野　清尊（　　同上　　主任）
調査協力　下郡土地区画整理事務所
釘宮　勝正（下郡土地区画整理事務所所長）
池見陽一朗（　　同上　　所長・平成３年４月～）
今村　富夫（　　同上　　換地工務係長）
木崎　康雄（　　同上　　換地工務係長・平成３月６月～）
木田　克己（　　同上　　補償係長）
佐藤日出生（　　同上　　補償係長・平成３年６月～）
調査担当
讃岐　和夫（大分市教育委員会社会教育課文化財室主任）
塔鼻　光司（　　同上　　文化財室主任）　　坪根　伸也（　　同上　　文化財室技師）
池邉千太郎（　　同上　　文化財室技師）
渕野　玲子（　　同上　　文化財調査員・平成２年６月～）
調査補助員
塩地　潤一・兵谷　有利・松村　千里・飛田　桂子・白木　　守・小村　美義（以上別府大学学生）
後藤　聰（福岡大学学生）・秦　憲二（熊本大学学生）

〔平成３年度〕
調査主体者　　大分市教育委員会　教育長　安東　　裕
事務局　　大分市教育委員会
内田　　悟（大分市教育委員会社会教育課課長）　野尻　政文（　　同上　　文化財室室長）
秦　　政博（　　同上　　主幹）　　佐藤　良蔵（　　同上　　文化財室主査）
佐藤　小夜（　　同上　　文化財室主任）
大分市都市計画部区画整理課
幸　　康美（大分市都市計画部区画整理課課長）　奈須　正和（　　同上　　課長補佐）
長野　清尊（　　同上　　主任）
調査協力　下郡土地区画整理事務所
池見陽一朗（下郡土地区画整理事務所所長）　　木崎　康雄（　　同上　　換地工務係長）
佐藤日出生（　　同上　　補償係長）
調査担当
讃岐　和夫（大分市教育委員会社会教育課文化財室主任）

塔鼻　光司（　　同上　　文化財室主任）　　坪根　伸也（　　同上　　文化財室技師）
池邉千太郎（　　同上　　文化財室技師）

〔平成４年度〕
調査主体　　大分市教育委員会　教育長　安東　　裕
事務局　　大分市教育委員会
内田　　悟（大分市教育委員会社会教育課課長）
宮崎　英雄（　　同上　　文化財室室長）　　佐藤　良蔵（　　同上　　文化財室主査）
秦　　政博（　　同上　　主幹）　　村山　貴子（　　同上　　文化財室主事）
大分市都市計画部区画整理課
法華津修之（大分市都市計画部区画整理課課長）
奈須　正和（　　同上　　課長補佐）　　長野　清尊（　　同上　　主任）
調査協力　下郡土地区画整理事務所
衛藤　道男（下郡土地区画整理事務所所長）　　三代　文士（　　同上　　換地工務係長）
佐藤日出生（　　同上　　補償係長）
調査担当
讃岐　和夫（大分市教育委員会社会教育課文化財室主任）
塔鼻　光司（　　同上　　文化財室主任）　　坪根　伸也（　　同上　　文化財室技師）
池邉千太郎（　　同上　　文化財室技師）

〔平成５年度〕
調査主体者　　大分市教育委員会　教育長　清瀬　和弘
事務局　　大分市教育委員会
内田　　悟（大分市教育委員会文化振興課課長）　秦　　政博（　　同上　　参事）
宮崎　英雄（　　同上　　文化財室室長）　　佐藤　良蔵（　　同上　　文化財室主査）
村山　貴子（　　同上　　文化財室主事）
大分市都市計画部区画整理課
法華津修之（大分市都市計画部区画整理課課長）　倉原　宗人（　　同上　　課長補佐）
奈須　正和（　　同上　　課長補佐）　　長野　清尊（　　同上　　主任）
調査協力　下郡土地区画整理事務所
衛藤　道男（下郡土地区画整理事務所所長）　　安達　　明（　　同上　　換地工務係長）
畑山　伸一（　　同上　　補償係長）
調査担当
讃岐　和夫（大分市教育委員会文化振興課文化財室主任）
塔鼻　光司（　　同上　　文化財室主任）　　坪根　伸也（　　同上　　文化財室技師）
池邉千太郎（　　同上　　文化財室技師）

〔平成６年度〕

調査主体者　　大分市教育委員会　教育長　清瀬　和弘

事務局　　大分市教育委員会

内田　　悟（大分市教育委員会文化振興課課長）　秦　　政博（　　同上　　参事）

堀　　和則（　　同上　　文化財室室長）　佐藤　良蔵（　　同上　　文化財室主査）

徳丸ひとみ（　　同上　　文化財室主事）

大分市都市計画部区画整理課

倉原　宗人（大分市都市計画部区画整理課課長）　奈須　正和（　　同上　　課長補佐）

石坂紀久男（　　同上　　課長補佐）　渡辺　博文（　　同上　　主査）

調査協力　下郡土地区画整理事務所

宮下　照嘉（下郡土地区画整理事務所所長）　安達　　明（　　同上　　換地工務係長）

畑山　伸一（　　同上　　補償係長）

調査担当

讃岐　和夫（大分市教育委員会文化振興課文化財室専門員）

塔鼻　光司（　　同上　　文化財室主任）　坪根　伸也（　　同上　　文化財室技師）

池邉千太郎（　　同上　　文化財室技師）　塩地　潤一（　　同上　文化財室技術員）

〔平成７年度〕

調査主体者　　大分市教育委員会　教育長　清瀬　和弘

事務局　　大分市教育委員会

工藤　久典（大分市教育委員会文化振興課課長）　秦　　政博（　　同上　　参事）

堀　　和則（　　同上　　文化財室室長）　讃岐　和夫（　　同上　　文化財室専門員）

佐藤　宏明（　　同上　　文化財室主査）　徳丸ひとみ（　　同上　　文化財室主事）

大分市都市計画部区画整理課

倉原　宗人（大分市都市計画部区画整理課課長）　石坂紀久男（　　同上　　課長補佐）

三浦　能成（　　同上　　課長補佐）　渡辺　博文（　　同上　　主査）

調査協力　下郡土地区画整理事務所

宮下　照嘉（下郡土地区画整理事務所所長）　加藤　政則（　　同上　　換地工務係長）

畑山　伸一（　　同上　　補償係長）

調査担当

後藤　典幸（大分市教育委員会文化振興課文化財室指導主事）

塔鼻　光司（　　同上　　文化財室主任技師）　坪根　伸也（　　同上　　文化財室主任技師）

池邉千太郎（　　同上　　文化財室技師）　塩地　潤一（　　同上　　文化財室技師）

〔平成８年度〕

調査主体者　　大分市教育委員会　教育長　清瀬　和弘

事務局　　大分市教育委員会

工藤　久典（大分市教育委員会文化振興課課長）　秦　　政博（　　同上　　参事）

堀　　和則（　　同上　　文化財室室長）　佐藤　宏明（　　同上　　文化財室主査）

徳丸ひとみ（　　同上　　文化財室主事）

大分市都市計画部区画整理課

大山　晴久（大分市都市計画部区画整理課課長）　三浦　能成（　　同上　　課長補佐）

吉良　則生（　　同上　　課長補佐）

調査協力　下郡土地区画整理事務所

宮下　照嘉（下郡土地区画整理事務所所長）　井上　邦明（　　同上　　換地工務係長）

後藤　　修（　　同上　　補償係長）

調査担当

後藤　典幸（大分市教育委員会文化振興課文化財室指導主事）

塔鼻　光司（　　同上　　文化財室主任技師）　坪根　伸也（　　同上　　文化財室主任技師）

池邉千太郎（　　同上　　文化財室技師）　塩地　潤一（　　同上　　文化財室技師）

杉崎　重臣（　　同上　　文化財室嘱託）　新藤美由紀（　　同上　　文化財室嘱託）

中西　武尚（　　同上　　文化財室嘱託）　大野　康弘（　　同上　　文化財調査員）

奥村　義貴（　　同上　　文化財調査員）

〔平成９年度〕

調査主体者　　大分市教育委員会　教育長　清瀬　和弘

事務局　　大分市教育委員会

野尻　政文（大分市教育委員会文化振興課課長）　秦　　政博（　　同上　　参事）

玉永　光洋（　　同上　　主幹）　植木　正巳（　　同上　　文化財室室長）

讃岐　和夫（　　同上　　文化財室次長）　佐藤　宏明（　　同上　　文化財室主査）

安部貴美代（　　同上　　文化財室主任）

大分市都市計画部区画整理課

大山　晴久（大分市都市計画部区画整理課課長）　衛藤　道男（　　同上　　参事）

吉良　則生（　　同上　　課長補佐）

調査協力　下郡土地区画整理事務所

木崎　康雄（下郡土地区画整理事務所所長）　井上　邦明（　　同上　　換地工務係長）

後藤　　修（　　同上　　補償係長）

調査担当

藤沢　敏夫（大分市教育委員会文化振興課文化財室指導主事）

後藤　典幸（　　同上　　文化財室指導主事）　塔鼻　光司（　　同上　　文化財室主任技師）

坪根　伸也（　　同上　　文化財室主任技師）　池邉千太郎（　　同上　　文化財室主任技師）

塩地　潤一（　　同上　　文化財室技師）　高畠　　豊（　　同上　　文化財室技術員）

河野　史郎（　　同上　　文化財室技術員）　杉崎　重臣（　　同上　　文化財室嘱託）

新藤美由紀（　同上　文化財室嘱託）　大野　康弘（　同上　文化財室嘱託）
奥村　義貴（　同上　文化財室嘱託）　羽田野達郎（　同上　文化財室嘱託）
中西　武尚（　同上　文化財室嘱託）　幸　しのぶ（　同上　文化財調査員）
田淵　芳則（　同上　文化財調査員）　小野　貴史（　同上　文化財調査員）
林　潤也（　同上　文化財調査員）　大藤　弥生（　同上　文化財調査員）
永松　正大（　同上　文化財調査員）

〔平成10年度〕

調査主体者　大分市教育委員会　教育長　清瀬　和弘

事務局　大分市教育委員会

園田　裕彦（大分市教育委員会生涯学習課課長）
秦　政博（　同上　参事）　玉永　光洋（　同上　主幹）
植木　正巳（　同上　文化財室室長）　讃岐　和夫（　同上　文化財室次長）
佐藤　宏明（　同上　文化財室主査）　福田　誠一（　同上　文化財室主査）
安部貴美代（　同上　文化財室主任）

大分市都市計画部区画整理課

矢野　貞夫（大分市都市計画部区画整理課課長）
藤田　壽生（　同上　参事）　吉良　則生（　同上　課長補佐）
帯刀　修一（　同上　課長補佐）　立川　政道（　同上　主査）

調査協力　下郡土地区画整理事務所

木崎　康雄（下郡土地区画整理事務所所長）　井上　邦明（　同上　換地工務係長）
後藤　修（　同上　補償係長）

調査担当

藤沢　敏夫（大分市教育委員会生涯学習課文化財室指導主事）
後藤　典幸（　同上　文化財室指導主事）　塔鼻　光司（　同上　文化財室主任技師）
坪根　伸也（　同上　文化財室主任技師）　池邉千太郎（　同上　文化財室主任技師）
高畠　豊（　同上　文化財室技師）　河野　史郎（　同上　文化財室技師）
塩地　潤一（　同上　文化財室技師）　杉崎　重臣（　同上　文化財室嘱託）
大野　康弘（　同上　文化財室嘱託）　奥村　義貴（　同上　文化財室嘱託）
羽田野達郎（　同上　文化財室嘱託）　橋本　幸治（　同上　文化財室嘱託）
神尾　至（　同上　文化財室嘱託）　近藤　晃弘（　同上　文化財調査員）
中西　武尚（　同上　文化財調査員）　大藤　弥生（　同上　文化財調査員）
幸　しのぶ（　同上　文化財調査員）　野中　慶誠（　同上　文化財調査員）
田淵　芳則（　同上　文化財調査員）　水上　仁（　同上　文化財調査員）
苅谷　史穂（　同上　文化財調査員）　安部　知美（　同上　文化財調査員）
古木　裕文（　同上　文化財調査員）　栃原　嘉明（　同上　文化財調査員）
小野　貴史（　同上　文化財調査員）　永松　正大（　同上　文化財調査員）

林　　潤也（　　同上　　文化財調査員）

〔平成11年度〕

調査主体者　　大分市教育委員会　教育長　清瀬　和弘

事務局　　大分市教育委員会

安部　信孝（大分市教育委員会生涯学習課課長）　玉永　光洋（　　同上　　主幹）

植木　正巳（　　同上　　文化財室室長）　讃岐　和夫（　　同上　　文化財室次長）

福田　誠一（　　同上　　文化財室主査）　安部貴美代（　　同上　　文化財室主任）

大分市都市計画部区画整理課

矢野　貞夫（大分市都市計画部区画整理課課長）

宮下　照嘉（　　同上　　参事）　吉良　則生（　　同上　　参事）

河野　勝壙（　　同上　　課長補佐）

安達　　明（　　同上　　課長補佐兼区画整理係長）

帯刀　修一（　　同上　　課長補佐兼庶務係長）　立川　政道（　　同上　　主査）

調査協力　下郡土地区画整理事務所

吉良　則生（参事兼下郡土地区画整理事務所所長）

首藤　龍雄（　　同上　　換地工務係長）

後藤　　修（　　同上　　補償係長）

調査担当

藤沢　敏夫（大分市教育委員会生涯学習課文化財室指導主事）

後藤　典幸（　　同上　　文化財室指導主事）　甲斐　　猛（　　同上　　文化財室指導主事）

塔鼻　光司（　　同上　　文化財室主任技師）　坪根　伸也（　　同上　　文化財室主任技師）

池邉千太郎（　　同上　　文化財室主任技師）　高畠　　豊（　　同上　　文化財室技師）

河野　史郎（　　同上　　文化財室技師）　塩地　潤一（　　同上　　文化財室技師）

杉崎　重臣（　　同上　　文化財室嘱託）　高木　隆司（　　同上　　文化財室嘱託）

大野　康弘（　　同上　　文化財室嘱託）　奥村　義貴（　　同上　　文化財室嘱託）

羽田野達郎（　　同上　　文化財室嘱託）　橋本　孝治（　　同上　　文化財室嘱託）

神尾　　至（　　同上　　文化財室嘱託）　佐藤　道文（　　同上　　文化財室嘱託）

荻　　幸二（　　同上　　文化財室嘱託）　宮川　泰男（　　同上　　文化財室嘱託）

横山　　歩（　　同上　　文化財室嘱託）　早田　利宏（　　同上　　文化財室嘱託）

小野　貴史（　　同上　　文化財室嘱託）　永松　正大（　　同上　　文化財室嘱託）

栃原　嘉明（　　同上　　文化財室嘱託）　近藤　晃弘（　　同上　　文化財調査員）

幸　しのぶ（　　同上　　文化財調査員）　苅谷　史穂（　　同上　　文化財調査員）

古木　裕文（　　同上　　文化財調査員）　大藤　弥生（　　同上　　文化財調査員）

野中　慶誠（　　同上　　文化財調査員）　水上　　仁（　　同上　　文化財調査員）

安部　知美（　　同上　　文化財調査員）

〔平成12年度〕

調査主体者　　大分市教育委員会　教育長　清瀬　和弘

事務局　　大分市教育委員会

秦　　政博（大分市教育委員会文化財課課長）　　帯刀　修一（　　同上　　課長補佐）

玉永　光洋（　　同上　　主幹）　　讃岐　和夫（　　同上　　文化財係係長）

福田　誠一（　　同上　　文化財係主査）　　幸　　裕美（　　同上　　文化財係主任）

三浦　亜紀（　　同上　　文化財係事務員）

大分市都市計画部区画整理課

衛藤　道男（大分市都市計画部区画整理課課長）

山崎　文夫（　　同上　　参事）　　宮下　照嘉（　　同上　　参事）

山村　信幸（　　同上　　課長補佐）　　釘宮　久住（　　同上　　課長補佐）

安達　　明（　　同上　　課長補佐兼区画整理係長）

河野文四郎（　　同上　　課長補佐兼庶務係長）

調査協力　下郡土地区画整理事務所

山崎　文生（参事兼下郡土地区画整理事務所所長）

首藤　龍雄（　　同上　　換地工務係長）

後藤　　修（　　同上　　課長補佐兼補償係長）

調査担当

後藤　典幸（大分市教育委員会文化財課文化財係指導主事）

甲斐　　猛（　　同上　　文化財係指導主事）　　姫野　公徳（　　同上　　文化財係指導主事）

塔鼻　光司（　　同上　　文化財係主任技師）　　坪根　伸也（　　同上　　文化財係主任技師）

池邉千太郎（　　同上　　文化財係主任技師）　　高畠　　豊（　　同上　　文化財係技師）

河野　史郎（　　同上　　文化財係技師）　　塩地　潤一（　　同上　　文化財係技師）

永松　正大（　　同上　　文化財係事務員）　　杉崎　重臣（　　同上　　文化財課嘱託）

大野　康弘（　　同上　　文化財課嘱託）　　荻　　幸二（　　同上　　文化財課嘱託）

横山　　歩（　　同上　　文化財課嘱託）　　早田　利宏（　　同上　　文化財課嘱託）

宮田　　剛（　　同上　　文化財課嘱託）　　佐藤　孝則（　　同上　　文化財課嘱託）

小住　武史（　　同上　　文化財課嘱託）　　羽田野裕之（　　同上　　文化財課嘱託）

上野　淳也（　　同上　　文化財課嘱託）　　田中　　貴（　　同上　　文化財課嘱託）

〔平成13年度〕

調査主体者　　大分市教育委員会　教育長　御沓　義則

事務局　　大分市教育委員会

帯刀　修一（大分市教育委員会文化財課課長）　　玉永　光洋（　　同上　　主幹）

熊谷　一秋（　　同上　　課長補佐）　　讃岐　和夫（　　同上　　課長補佐）

幸　　裕美（　　同上　　文化財係主任）　　三浦　亜紀（　　同上　　文化財係事務員）

大分市都市計画部区画整理課

衛藤　道男（大分市都市計画部区画整理課課長）

山村　信幸（　　同上　　課長補佐）

調査協力　下郡土地区画整理事務所

山崎　文生（下郡土地区画整理事務所所長）　　首藤　龍雄（　　同上　　換地工務係長）

後藤　　修（　　同上　　補償係長）

調査担当

後藤　典幸（大分市教育委員会文化財課文化財係指導主事）

甲斐　　猛（　　同上　　文化財係指導主事）　　姫野　公徳（　　同上　　文化財係指導主事）

塔鼻　光司（　　同上　　文化財係主任技師）　　坪根　伸也（　　同上　　文化財係主任技師）

池邉千太郎（　　同上　　文化財係主任技師）　　塩地　潤一（　　同上　　文化財係主任技師）

高畠　　豊（　　同上　　文化財係技師）　　河野　史郎（　　同上　　文化財係技師）

永松　正大（　　同上　　文化財係技師）　　杉崎　重臣（　　同上　　文化財課嘱託）

荻　　幸二（　　同上　　文化財課嘱託）　　宮田　　剛（　　同上　　文化財課嘱託）

奥村　義貴（　　同上　　文化財課嘱託）　　羽田野達郎（　　同上　　文化財課嘱託）

梅田　昭宏（　　同上　　文化財課嘱託）　　上野　淳也（　　同上　　文化財課嘱託）

苅谷　史穂（　　同上　　文化財課嘱託）　　佐藤　孝則（　　同上　　文化財課嘱託）

松尾　　聡（　　同上　　文化財課嘱託）　　松竹　智之（　　同上　　文化財課嘱託）

羽田野裕之（　　同上　　文化財課嘱託）　　小住　武史（　　同上　　文化財課嘱託）

水町　裕子（　　同上　　文化財課嘱託）

調査作業員

秋吉幸彦・秋吉利恵子・麻生咲子・安部さな江・安部文生・安部道子・安藤カズ子・安東尚礼・井上弘美・井上真樹・岩尾正則・内山ツネ子・梅木好子・江藤和子・衛藤勝寛・江藤裕見子・大石妙子・大塚たま子・大山末喜・加藤香代子・加藤きよ子・辛島智栄・河野佳奈・河野久明・吉良二・工藤八重子・倉山香苗・栗原万実・久渡真・五所恵美子・古長静代・後藤昌子・坂元ヨシエ・佐藤剛・佐藤道文・重藤たま子・重松邦子・柴田カツ子・首藤小百合・首藤孝子・白石麻子・進司初恵・関愛子・関恵美子・関順子・関ナラエ・関ハツ子・関光子・高尾千代子・高野英子・高野スエ・高橋美佐子・高橋美代子・武石修吾・竹中エミ子・竹中房子・竹野内猛・田島正美・田代重豪・田代秀子・立石カズ子・伊達久美子・伊達円香・丹後文子・鶴田弘美・霍間幸子・時枝忠宏・土佐林恵子・友田ヌイコ・長見幸信・中村淑・西田恭子・野崎金一郎・野崎邦浩・野崎豊子・野田喜六・野田武志・野田友枝・野田守・野村節子・橋口真吾・羽田民子・秦野恒夫・林枝祐一・日野恭男・平田美代子・平林政子・広瀬敬子・藤本正和・古川一郎・松井千代子・松本昭治・松本道子・三浦ミヨ子・三重野京子・水嶋千枝子・溝口正人・宮迫喜久雄・宮下孝文・宮瀬知夫・柳井信二・山路康弘・山田美恵子・山本千加子・山元明・吉永匡史・渡部英子・綿丸るみ子

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　下郡遺跡群の位置と環境

（１）遺跡の地理的位置

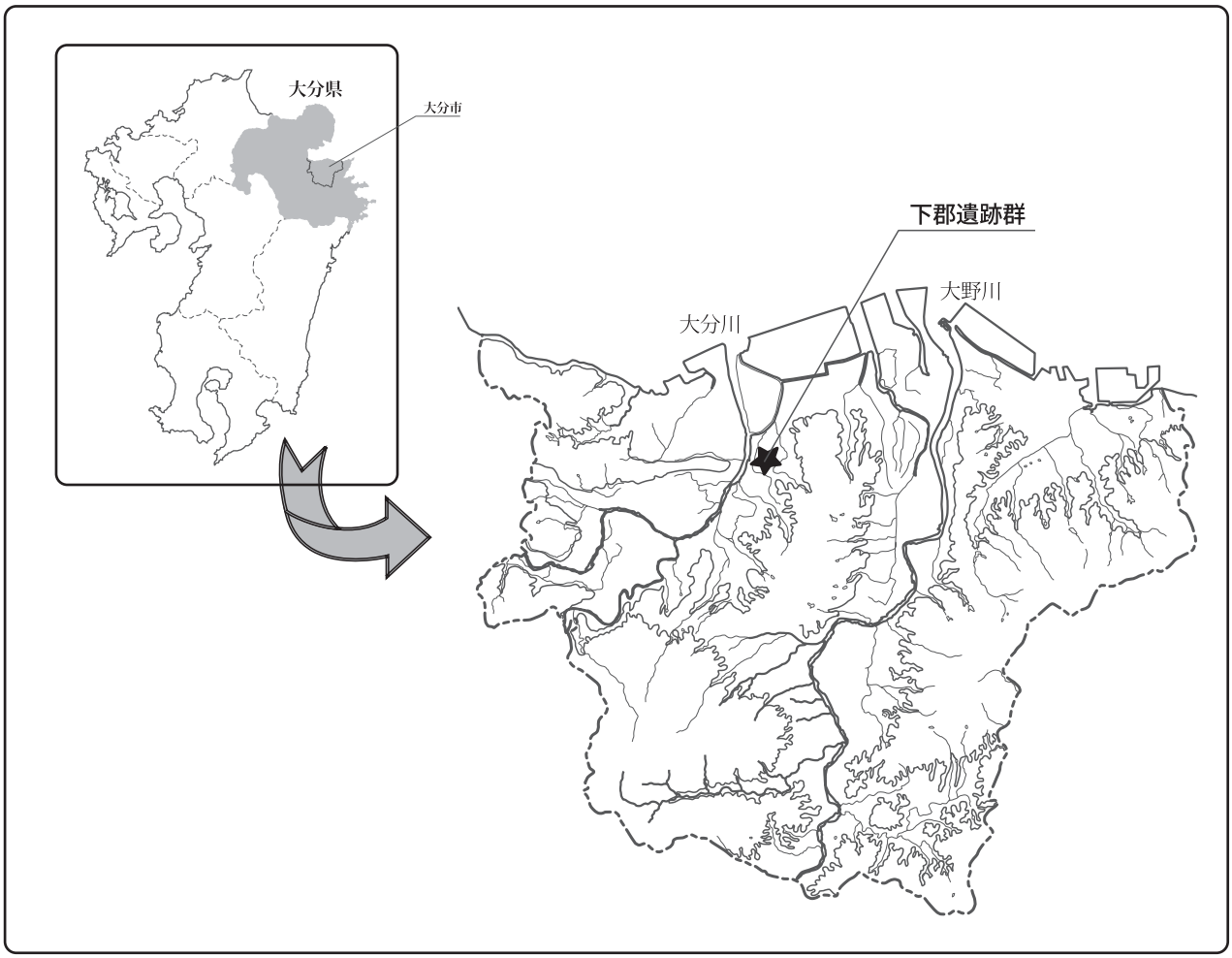
大分市は九州島の東部、瀬戸内海を介して本州、四国に対している。別府湾の深奥には由布岳や鶴見岳、高崎山などの第四紀火山が分布する。別府湾の南岸に位置する大分市の南東部には臼杵から九州を横断し熊本県八代に続く中央構造線が走り、その北側には白亜紀の三波川変成岩類からなるやや急峻な山地が佐賀関半島から南西方向に続いている。第四紀後期には阿蘇火砕流堆積物が山間地の盆地内を埋め、大分川流域には今市火砕流堆積物や由布川火砕流堆積物などが流下している。

大分平野を貫流する大分川・大野川の二大河川は、中流域では複数段の河成段丘面や狭い沖積低地を形成し、下流域には沖積平野を形成している。大分平野は主として三角州や後背湿地により形成され、自然堤防部分を除いて概ね低平である。大野川河口より東側の海岸平野には複数列の浜堤防と堤間湿地がみられる。大分川は九重火山山麓に源を発し、大野山地の北側を流れる七瀬川と大分平野で合流する。大野川は阿蘇火山外輪山東麓より、東流して別府湾に注いでいる。両河川とも流域に火山地帯をもち火山岩礫を主とする砕屑物の供給が多く、水量も多いことや下流域が低平なことと相まって、しばしば水害を発生させている。大分川の賀来地区より下流の地域や支流の七瀬川流域では顕著な蛇行や蛇行跡を示す旧河道がみられる。

大分平野に分布する丘陵は大分川・大野川により大きく三分割される。段丘堆積物は主要河川沿に分布し、市域西側から順に永興台地、鶴崎台地、丹生台地が所在する。鶴崎台地と丹生台地の北部には一部に海成段丘が認められるが、他の部分は河成段丘である。段丘は中期更新世に形成された高位段丘、最終間氷期に形成された中位段丘と最終氷期以降に形成された低位段丘からなり、それぞれ細分されている（吉岡・星住 1997）。それぞれの丘陵・台地の上部は比較的平坦であるが、小河川によって開析された谷は深く、台地縁辺は切り立っており段丘崖をなしている。丘陵・台地を構成する大分層群や火砕流堆積物などが下方浸食に対して極めて弱いことを示している。また開析する河川の丘陵・台地の裾部には小規模な扇状地がみられる。

下郡遺跡群は大分川右岸の沖積低地に存在する。遺跡群の展開する範囲には、鶴崎台地から発する小河川とその谷底の小沖積地、大分川の沖積作用による沖積低地上位面・埋没下の沖積低地下位面・旧河道・自然堤防・微高地などがある。大分川の対岸に位置する古国府付近の沖積低地上位面では明瞭な河道がみられず条里遺構が認められることから、古代には上位面はすでに段丘化し、比較的安定した地形面であったことが推定される。これに対して、下郡周辺では明瞭ではないが上位面にも旧河道が認められることから、古国府地区のようには安定していなかったようである。ボーリングデータなどからは、縄文海進の最盛期には海水は現在より２～３m程度高く、その後の海退に伴い陸化が進み、複数存在した自然堤防間は後背湿地的様相を示しすようになり、シルト質土の堆積がみられるようになる。

遺跡の立地する自然堤防上に生活の痕跡が認められるのは縄文時代後期であり、弥生時代前期末～中期初頭段階には近隣で水田稲作農耕が行われていたことを示す木製農耕具等が下郡桑苗遺跡から多量に出土している。下郡遺跡群の南に位置する羽田遺跡では、４世紀後半以降の水田跡が確認されており、



第１図　下郡遺跡群の位置（大分全図・大分市域図）

４世紀後半以降に自然堤防、沖積微高地や高位段丘より一段低い位置にある低位面などが水田化され、７世紀以降には更に下位面に耕地を拡大している状況が判明している。（宮田）

参考文献

日高　稔　1990 「ふるさとの自然（自然編）第一章ふるさとの山河　一　化石が語るふるさと」『大分市史』上巻　大分市

千田　昇　1990 「ふるさとの自然（自然編）第一章ふるさとの山河　二　大分平野のなりたち」『大分市史』上巻　大分市

吉岡敏和・星住英夫・宮崎一博　1997 「大分地域の地質　地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）」 地質調査所

佐々木章　1989 「下郡桑苗遺跡出土のプラントオパール分析」『下郡桑苗遺跡』大分県文化財調査報告書第80輯　大分県教育委員会

出田和久　1989 「下郡付近の地形環境」『下郡桑苗遺跡』大分県文化財調査報告書第80輯　pp.65-67　大分県教育委員会

高橋信武編　1992 『下郡桑苗遺跡』 大分県文化財調査報告書第80輯　大分県教育委員会

高橋信武編　1992 『下郡桑苗遺跡Ⅱ　－弥生時代のブター』大分県文化財調査報告書第89輯　大分県教育委員会

第２節　遺跡周辺の歴史的環境

（１）はじめに

下郡遺跡群が所在する大分市は、大分県のほぼ中央部に位置し、古来より東九州の中核都市として発展してきた。市中央部には大分川及び大野川が形成したデルタ地帯と沖積地からなる大分平野が別府湾に接し、その背後には多くの台地が所在する。当地域の気候は瀬戸内海式気候に属し、年間を通じて温暖である。

「大分」の地名は、『豊後国風土記』によれば、景行天皇がこの地を訪れた際に「広大なる哉、この郡は。よろしく碩田国（おおきたのくに）と名づくべし」と名づけたことに由来し、これが後に「大分」と標記されるようになったといわれている。しかし、実際の大分平野は平野と台地が入り乱れる狭く複雑な地形を呈しており、近年は、「多き田」が「大分」へと変化したとする見解が一般的である。『豊後国風土記』の景行天皇の言葉は、広大な平野の様子を表現したものでなく、多くの田が狭小な地形に並ぶ様子を描写したものとする見解が現況地形に合致すると解されている。

下郡遺跡群は大分川の河口に近い右岸地域に所在している。当該地域を含む大分平野の西部地域は古代には、大分郡（おおきたのこほり）と呼ばれ、豊後国府が置かれた。その推定地は、下郡遺跡とは大分川を挟んだ対岸にある上野台地、さらにその南に広がる古国府地域が想定されている。

中世以後も大分川下流域を中心とする一帯は府中（府内）と呼ばれ、特に大友氏第二十一代大友宗麟の治世には北部九州のほぼ全域を手中に収め最盛期を迎えた。豊後府内は南蛮貿易を介して西洋文化を積極的に受容し、我が国でも屈指の国際貿易都市として繁栄したことを各種の史料から伺い知ることができる。平成10年から本格化した中世府内の発掘調査では、当時の様子を示す多くの資料が出土し、往時の賑わいの一端を伝えている。こうした府内中心部に至近な位置にある下郡地区は、当時においても軍事的、政治的に重要な位置を占めていたと推定され、当該期の遺構・遺物の出土が注目されている。

江戸時代の大分市中心部には、東九州最大の商都府内城下町が形成された。大友氏第二十二代大友義統が文禄の役での失態を理由に改易され、その後、入府した福原直高は府内城の築城を開始した。城下町の建設は竹中重利に引き継がれ府内城と城下町が完成する。近世の下郡地区はこの府内城下町の商圏に含まれていた。

明治になって、府内には大分県の県庁が置かれ、1911年には市制が施行された。1963年には鶴崎市等と合併し、1964年１月に新産業都市に指定され、九州を代表する工業都市として急速に発展した。1997年４月１日には中核市に指定されている。

以上が下郡遺跡群を取巻く大分市の歴史変遷であり、次項には埋蔵文化財の調査により明らかとなっている周辺地域の歴史的環境についてみる。

参考文献

大分市史編纂委員会　1987『大分市史』上　大分市



1	牧　遺　跡	2	小池原貝塚	3	高城石棺群	4	松栄山横穴墓群
5	北下郡横穴墓群	6	大友館跡	**7**	**下郡遺跡群**	8	穴井前横穴墓群
9	上　原　館	10	大臣塚古墳	11	羽田遺跡	12	米良草遺跡
13	葛木遺跡	14	長谷横穴墓群	15	滝尾百穴横穴古墳群	16	岩屋寺遺跡
17	国府推定地	18	石明遺跡	19	津守遺跡	20	二目川遺跡

第２図　下郡遺跡群とその周辺の遺跡

（２）旧石器時代

大分市の旧石器時代の遺跡数は40数遺跡であり、昭和30年代に調査された丹生遺跡を始め、近年では2002FIFAワールドカップ開催に伴うスタジアム建設の事前調査として実施された一方平遺跡群等の調査成果など、旧石器時代研究において重要な遺跡が所在する。

大分市で現在まで調査された旧石器時代遺跡は、その多くが台地上や丘陵地帯に立地しており、さらに大野川下流域や大分川下流域に集中する傾向が見られる。

大分市域での旧石器時代遺跡の調査は、先述のように昭和37年（1962）の丹生遺跡の発掘調査を嚆矢

とする。この調査で最も注目されたのは各種の礫器類の発見である。これらの石器群は、当時前期旧石器時代のものと考えられ、大分県速水郡日出町に所在する早水台遺跡出土石器とともに大きな論議を展開した。近年、これらの石器群は縄文時代に帰属するものとの見解が出されたが(註1)その解釈は未だ様々であり、決着をみていない。

大分市内では丹生遺跡群をはじめ台地状に立地する猪野新土井遺跡、下黒野遺跡、尾崎遺跡や独立丘陵に立地する雄城台遺跡等で旧石器の出土が認められているが、その多くは後世の遺構埋土に混在する状況で検出されている。検出遺跡、出土遺物の時間軸上の分布をみると、そのほとんどが後期に属するものである。後期旧石器時代のものは、まずＡＴ上位と下位に区分され、更にそれぞれが前半・中頃・後半に細分される(註2)ＡＴ下位のものには、一方平Ⅰ遺跡第Ⅰ文化層と庄ノ原遺跡下層の２例がある。

一方平Ⅰ遺跡は、古城山・高尾山系の東側傾斜面の尾根筋上に立地している。旧石器時代遺物の出土層は第Ⅰｂ層から第Ⅳ層まで連続して確認されている。第Ⅰ文化層の相当する第Ⅳ層からは、二側縁加工・一側縁加工のナイフ形石器や縦長剥片・縦長剥片用石核が多く出土している。この二側縁加工ナイフ形石器は大野川流域の同時期のものと比べて、かなり小形のものが多い。

ＡＴ上位の前半の資料には一方平Ⅰ遺跡第Ⅱ文化層、庄ノ原遺跡上層が挙げられる。一方平Ⅰ遺跡第Ⅱ文化層からは剥片尖頭器・三陵尖頭器・国府型ナイフ形石器・今峠型ナイフ形石器・削器類などが出土している。これらの遺物は九州の当該期の遺跡で普遍的にみられる石器群である。庄ノ原遺跡上層からは、ナイフ形石器・剥片尖頭器・三陵尖頭器等が出土している。ＡＴ上位中頃の遺跡は現在のところ確認されていない。ＡＴ上位後半の遺跡は丹生遺跡群４－Ｂのナイフ形石器等がある。

旧石器時代終末期の細石器文化の遺物には雄城台遺跡と丹生遺跡から出土している細石核がある。出土層位は不明であるが大分平野の細石器文化の存在を示す資料として重要である。

以上の石器に使用された石材はほとんどが流紋岩である。流紋岩は東九州でよく使用されており、大分県においてこの流紋岩はこれまで大野川中流域産と考えられていたが、近年の調査によって大分平野にも複数の供給源が認められ、多極分散型分布である(註3)このように大分平野では、石材を身近で獲得できる環境にある。大分平野の旧石器時代遺跡の石器組成はこうした石材入手が容易な環境に適応した状況を示している。（羽田野）

註１　鈴木忠司編　1992「大分県丹生遺跡群の研究」『古代学協会研究報告』

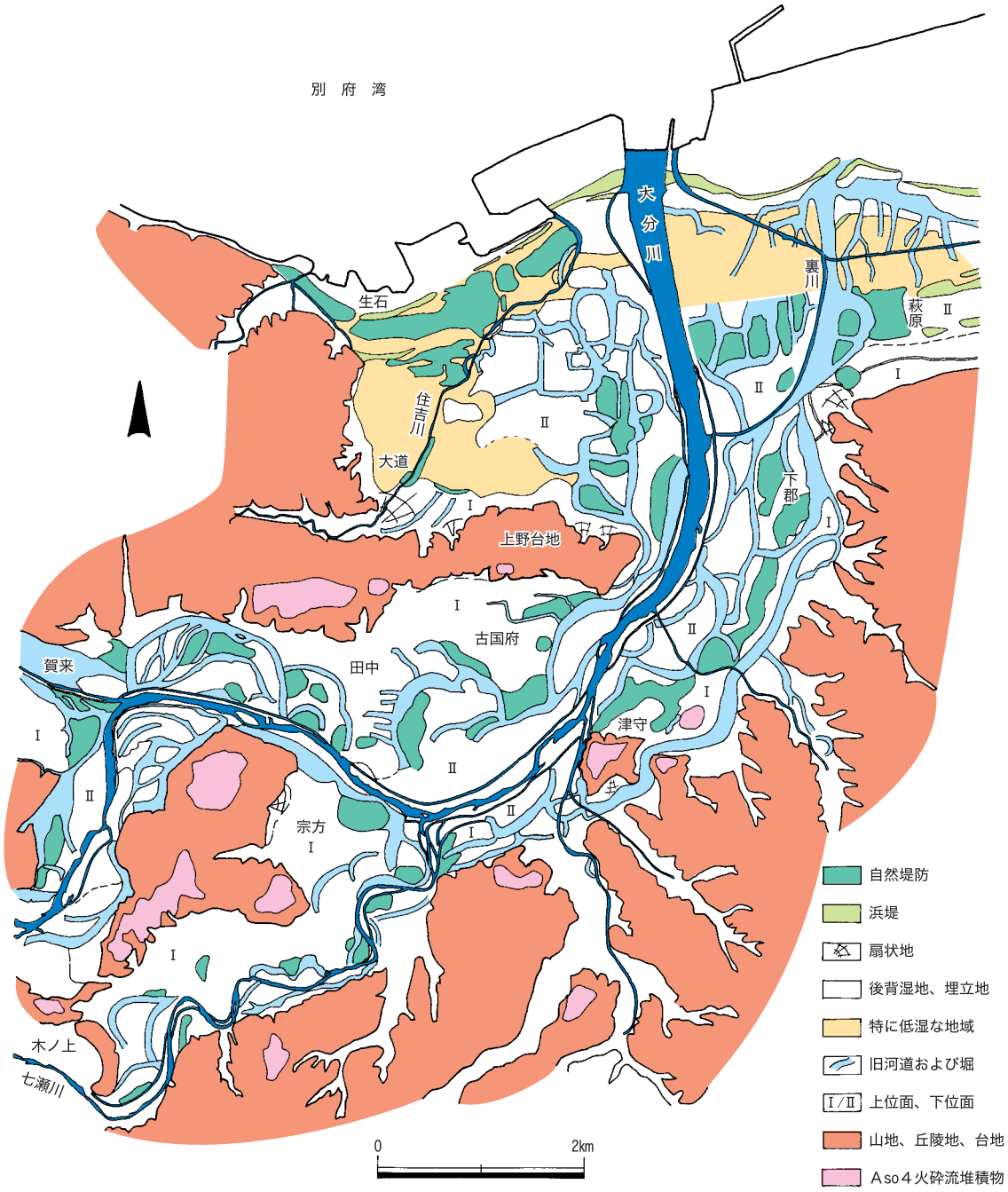
註２　荻幸二　1999「第Ⅷ章まとめ１旧石器（1）本遺跡の位置付け」『一方平Ⅰ遺跡』

註３　綿貫俊一　1999「第Ⅷ章まとめ１旧石器（3）大野川流域における流紋岩の分布と消費」『一方平Ⅰ遺跡』

参考文献

大分市　1987『大分市史』上巻

大分県教育委員会　1999「一方平Ⅰ遺跡」『スポーツ公園内遺跡群発掘調査報告書』大分県文化財報告書　第103輯



第３図　大分川下流域の微地形分類図（千田氏原図に加筆）『大分川流域』

（3）縄文時代

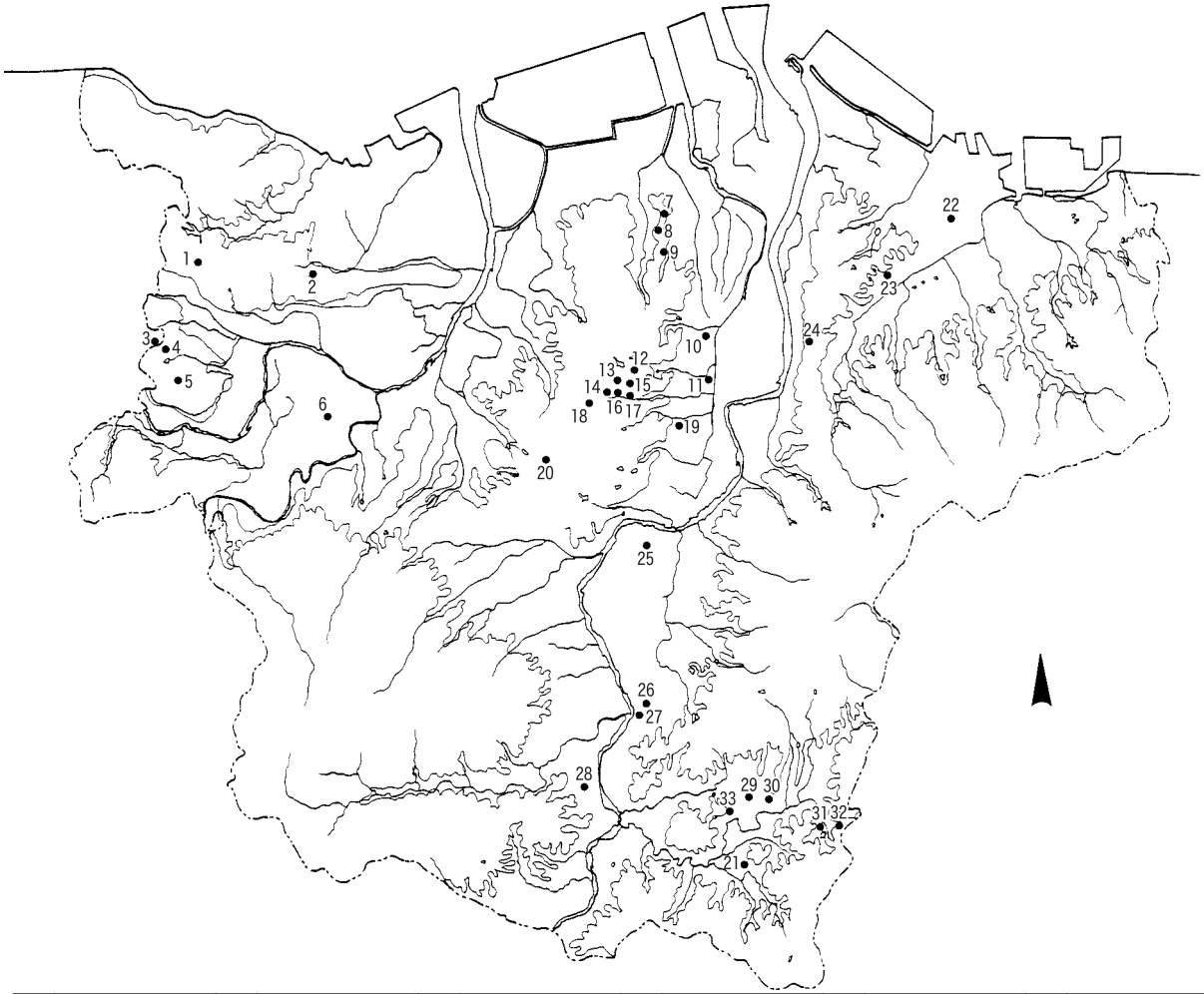
大分市域で縄文時代最古の遺跡は草創期初頭の船野型細石核やクサビ形細石核などを出土する遺跡である。草創期の土器は今のところ出土していないが、一方平Ⅰ遺跡では隆起線文土器段階の細石核、雄城台遺跡では爪形文段階の福井型細石核が出土している。丹生遺跡第７地区Ｄ地点では船野型細石核の調整剥片が出土し、第１地区Ｂ地点では神子柴・長者久保系の石斧が出土している。なお近接する犬飼町市ノ久保遺跡では神子柴・長者久保文化系の石斧がデポされていた状況で発見されている。これらの遺跡はいずれも台地・丘陵上に立地し、後期旧石器時代後半期の遺跡立地と変わらない。ただし、本地域では大野川中・上流域のような大規模な遺跡の形成は認められない。

早期になると遺跡数が増え、礫群・集石や炉穴などの遺構をもつ規模の大きな集落遺跡もみられるようになる。野田山遺跡は押型文を共伴せず、条痕文、無文尖底やコブ状突起付無文土器などが出土しており、早期前半に属すると考えられる。花弁状の配石炉、土坑に焼土を含むいわゆる炉穴や集石などが認められており、早期後半の押型文土器段階にはさらに遺跡数が増加する。押型文段階でも比較的古い時期の遺跡に猪野新土井遺跡があり、稲荷山式とコブ状突起付無文土器が出土している。下黒野遺跡では集石や花弁状の配石炉が検出されている。旦野原神原遺跡では早期末に近い時期の平栫式土器などが出土し、集石炉１基、連結土坑１基と炉穴10基が検出されている。連結土坑は南九州の草創期～早期の遺跡で見つかるものと類似しており、その用途の解明など関連が注目される。その他集石を持つ遺跡には、古城山遺跡、一方平Ⅰ遺跡、一方平Ⅱ遺跡、庄ノ原遺跡群県横断道調査Ａ～Ｄ区、丹生遺跡群などがある。

下黒野・野田山遺跡は、大分川とその支流賀来川（由布川）に挟まれた、西から東に次第に高度を下げながら続いている丘陵・台地上に位置する。下黒野・野田山遺跡の辺りは標高約100mで、中位Ⅱ段丘の東に向かって延びる舌状の段丘平坦面上に立地する。同じ丘陵上の挾間町側にも遺跡が点在し、遺跡群を形成している。机張原遺跡は高崎山から南東に流下した高崎山火砕流堆積物からなる東向き丘陵緩斜面の標高およそ 145 m地点に存在する。市域では最も高い位置にある縄文時代遺跡の一群である。庄ノ原遺跡群県横断道調査Ａ～Ｄ区は、永興台地の高位Ⅲ段丘北縁近く、標高約105mの地点（緩やかに東に傾斜するほぼ平坦面上）に位置する。Ｊ区は高位Ⅲ段丘の南縁に張り出した標高約95mの舌状丘陵上に所在する。机張原から永興台地上の庄ノ原遺跡群、さらに城南遺跡の辺りまで遺跡が点在し、遺跡群を形成している。一方平Ⅰ遺跡は、鶴崎台地の中位Ⅰ段丘端から斜面部の標高52～56mの地点に存在し、後期旧石器時代後半期と早期後半が主体を占める。斜面のため、堆積状況は良好でなく、多量の集石・礫群と用途不明の土坑、焼土跡（炉穴）などは無文土器・押形文土器、塞ノ神式土器・平栫式土器を主体とし、早期後半に帰属されるものである。一方平Ⅰ遺跡群などでは礫器が大量に出土するがそれには粗雑な流紋岩が多く用いられる。これらの石材は大野川流域の河岸段丘の礫層中に多くみられる。丹生遺跡群もやはり前記の遺跡と同じく丘陵・台地上に立地する。一方平Ⅰ遺跡などは礫器の製作遺跡の可能性が指摘されており、丹生遺跡群もそのような範疇で考える必要がある[註１]。

これらの旧石器時代以来の台地・丘陵という立地には、比較的規模の大きな遺跡とキャンプサイトのような規模の小さな遺跡が組合わさって遺跡群を形成していることが多い。

横尾貝塚は、大野川の支流乙津川左岸に展開する河岸段丘の低位Ⅰ段丘の左右が小河川によって開析され、尾根状に東に向かって張り出した先端部にある。海岸線からは約７㎞内陸部にある。東側水田面

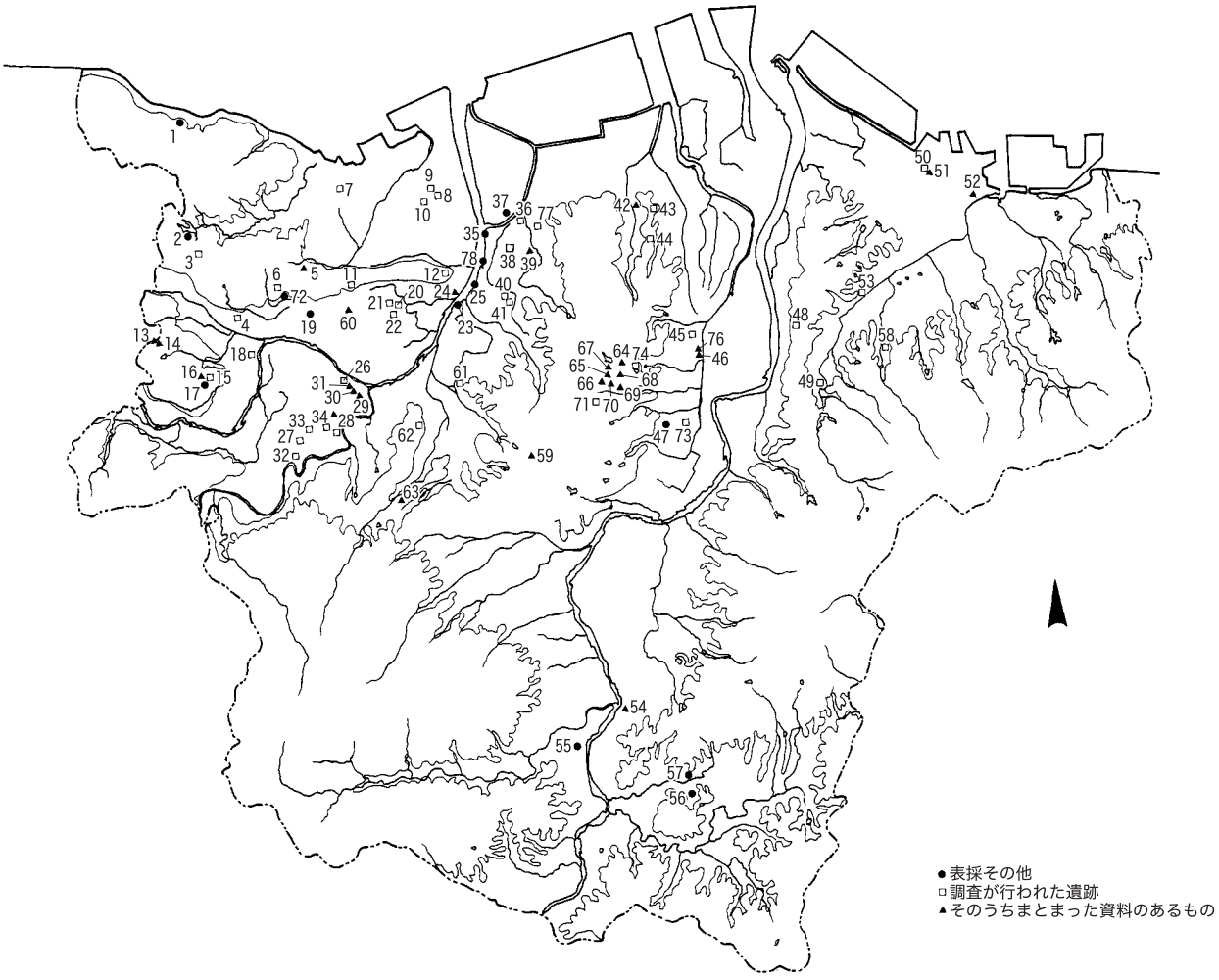


1	机張原遺跡	7	地蔵原遺跡	13	一方平Ⅱ遺跡	19	真萱遺跡	25	尾津留洞穴	31	月形遺跡
2	庄ノ原遺跡	8	尾崎遺跡	14	一方平Ⅲ遺跡	20	古城山遺跡	26	峰遺跡	32	亀甲遺跡
3	下野遺跡	9	猪野新土井遺跡	15	九池遺跡	21	狩野遺跡	27	利光遺跡	33	桑津留遺跡
4	野田山遺跡	10	多武尾遺跡	16	論出遺跡	22	中安遺跡	28	岩上遺跡		
5	野田遺跡	11	横尾遺跡	17	牧ノ内遺跡	23	一木遺跡	29	東津留遺跡		
6	雄城台遺跡	12	一方平Ⅰ遺跡	18	上牧ノ内Ⅱ遺跡	24	丹生遺跡群	30	辻遺跡		

第４図　大分市内の旧石器時代遺跡分布図

との比高が３～５ｍで、西側は道路に切られて南北24m、東西16mの独立丘陵状を呈している。古くから貝殻天神貝塚として知られ、大きく小礫混じりローム層、縄文時代早期の包含層、アカホヤとその風化土層、前期のヤマトシジミを中心とする貝層、中期のハマグリを中心とする貝層、後期の包含層、弥生時代以降の包含層が確認されている。アカホヤ降灰後縄文海進が進行する間は潮の出入りする汽水域で、中期には海岸線がこの近くまで迫り、後期には海岸線が後退していたものと推定される。県内でも縄文時代の早期・前期・中期・後期の各時代の遺物が層位的に出土した例はほとんどなく、前・中期の遺跡自体類例が少なく貴重である。さらに、竪穴住居と考えられる遺構があることや、総計17体もの埋葬人骨（前期２、後期９）が残されていたことも重要である。横尾貝塚人の形質は、低身長・短頭気味で九州縄文時代人の平均よりも瀬戸内縄文人に近いものとされている。

後期になると遺跡は広範な分布を示すようになり、瀬戸内地方から磨消縄文土器が伝播・流入する。遺跡立地の上でも、早期までに多かった台地・丘陵上のみでなく、低地を望む台地・丘陵端部や沖積低



第５図　大分市内の縄文時代遺跡および遺物出土分布図

地に遺跡が進出する。

小池原貝塚は、鶴崎丘陵を北流して開析する原川の右岸、丘陵の端部にある。小池原上層式土器は、瀬戸内から伝播してきた磨消縄文を取り入れ、在地の伝統と融合した土器で、東九州的な展開をよく示している。小池原貝塚では別府湾沿岸という立地を反映して、内湾･近海性の魚介類が採集されており、西北部九州の外洋性の貝塚とは様相を異にする。道具類もそれを反映し、小型の釣針や石錘などが中心である。横塚第２遺跡は丹生川河口近くの左岸にあり、横塚から王ノ瀬にかけての海岸に沿って３列みられる砂丘列の中の内陸側の１列の南斜面上に位置する。プライマリーな包含層は存在せず、二次堆積ではあったが、後期初頭の板状土偶が見つかっている。下郡桑苗遺跡は大分川の右岸の沖積低地にある旧河道の縁に存在し、貯蔵穴が発見されている。

晩期中頃～後半になると遺跡が再び増加し、大分平野の沖積地への進出が目立つようになる。沖積平野内の旧河道や後背湿地などに面した微高地や自然堤防上に多くの人類活動の痕跡が認められる。浜・長無田遺跡は、大野川河口の東側海岸に位置し、海岸から２列目の砂丘上に位置する。晩期後葉の中央に焼土を持ち円形に柱穴がめぐる円形住居址と考えられる遺構、晩期後葉～末の深鉢を用いた埋甕、晩

期末の土壙墓の可能性がある小型壺を出土した土坑などがあり、縄文時代から弥生時代への移行期の墓葬や集落構造の一端をかいまみることのできる貴重な遺跡である。また海岸部に立地し多量の石錘が出土していることから、漁撈に重きを置いた生業活動がなされていたことも推定されている。加えて、県内では類例の少ない孔列文土器も出土している。丹生川遺跡は丹生川に面した沖積地にあり夜臼式の丹塗磨研壺形土器などが出土している。晩期に始まる低地への進出は、遺跡立地の変化と大陸系の磨製石器などが出土しはじめるという石器組成からは、水田経営などの新たな生業形態を想定させるが、今のところ該期の水田跡は見つかっていない。今後の課題となろう。　　（宮田）

註１　荻　幸二　1999.3 「2. 縄文時代」『スポーツ公園内遺跡群発掘調査報告書（第２分冊）一方平Ｉ遺跡』大県文化財調査報告書第103輯　大分県教育委員会

参考文献

後藤一重　1983.3 「第三章　縄文時代　第三節大分県の縄文時代遺跡　二別府湾沿岸」『大分県史』先史篇Ｉ　　大分県

坪根伸也・幸しのぶ・坂本嘉弘　1996.3 『大分市の文化財－大分市域の縄文土器資料集成Ｉ－』　大分市教育委員会

坂本嘉弘　1994 「大分平野周辺の磨消縄文土器の編年」『大分市歴史資料館年報（平成６年度)』　大分市歴史資料館

荻　幸二　2001.8 「縄文時代早期の大分平野出土の礫器に関する一考察」『ＦＲＯＮＴＩＥＲ』vol.3　海部考古学研究会

坂本嘉弘　1982.12 「東九州における縄文後・晩期遺跡の動態－大分県を中心として－」『賀川光夫先生還暦記念論集』 賀川光夫先生還暦記念論集編集委員会

第１表　大分市内の縄文時代遺跡および遺物出土地点名①

番号	遺跡名	調査主体	調査面積	所在地	立地	標高(m)	土器	石器	時期
1	田ノ浦			大字神崎字田ノ浦	由布川火砕流堆積物丘陵斜面	20-40	西和田		後期初頭
2	放生池			大字机張原	高崎山火山火砕流堆積物丘陵端	130			
3	机張原	県教育委員会	250	大字高崎字女菰	高崎山火山火砕流堆積物丘陵緩斜面	142		石鏃，掻器	早期
4	宮苑	市教育委員会		大字宮苑字千代丸	低位Ｉ段丘上	35-38			
5	庄ノ原Ａ～Ｄ区	県教育委員会	2,400	大字荏隈字庄ノ原	高位Ⅲ段丘北縁近く	102-06	稲荷山，早水台，下菅生Ｂ，ヤトコロ，無文	石鏃，スクレイパー，石皿，磨石，凹石	早期
5	庄ノ原Ｅ区	県教育委員会	170	大字荏隈字庄ノ原	高位Ⅲ段丘北縁小谷頭	96-98	上菅生Ｂ		晩期後半
5	庄ノ原Ｊ区	県教育委員会	7,300	大字荏隈字庄ノ原	高位Ⅲ段丘南縁張出舌状丘陵	94-96			早期
5	庄ノ原遺跡	市教育委員会	3,685	大字荏隈字庄ノ原	高位Ⅲ段丘上	95	条痕文		早期
5	庄ノ原遺跡	市教育委員会	210	大字荏隈字庄ノ原	高位Ⅲ段丘上	95			早期
5	庄ノ原遺跡群	市教育委員会		大字荏隈字庄ノ原	高位Ⅲ段丘上	80-95	無文，山形・楕円押型文，手向山，刻目突帯文？	石鏃，焼礫，礫器	早前期
6	庄ノ原片面			大字荏隈字庄ノ原	高位Ⅲ段丘上	70-80	押型文		早期
7	東田室遺跡周辺	県教育委員会	10,000	南春日町	沖積平野	3-5	鐘崎，晩期粗製		後晩期
8	府内城三ノ丸	県教育委員会	2,120	大手町３丁目１番１号	沖積平野	3	小池原上層		後期
9	府内城三ノ丸北口跡	県教育委員会	2,600	荷揚町５番６号	沖積平野	3	轟，後期初頭深鉢，後期中頃深鉢，黒色磨研浅鉢，晩期浅鉢		前，後期初頭～後半，晩期
10	府内城城下町第７次	市教育委員会	866	都町３番３号	沖積平野低位段丘下位面？	2.5?	晩期粗製深鉢		晩期
11	城南遺跡群第２次	市教育委員会	6,800	大字永興	高位Ⅲ段丘南縁張出舌状丘陵	86-88	晩期浅鉢	石鏃	晩期
11	城南遺跡群第３次（千人塚古墳）確認	市教育委員会	1,700	大字永興字休地平 1019番１外	中位Ⅲ段丘 Aso-4 上	65	塞ノ神，黒川浅鉢，晩期深鉢	石鏃，スクレイパー，石核	早期，後期，晩期

第２表　大分市内の縄文時代遺跡および遺物出土地点名②

番号	遺跡名	調査主体	調査面積	所在地	立地	標高(m)	土器	石器	時期
11	城南遺跡第３次（千人塚古墳）本発掘	市教育委員会	1,700	大字永興字休地平 1019 番１外	中位Ⅲ段丘 Aso-4 上	65	黒川浅鉢，晩期深鉢	石鏃，スクレイパー	晩期中頃～後半
12	上野遺跡群竜王畑	県教育委員会	9,000	大字上野字竜王畑	低位Ⅰ段丘	26			晩期
13	下黒野	県教育委員会		挾間町大字古野字下黒野	中位Ⅱ段丘	100	厚手無文，早水台式山形押形文，貝殻条痕浅鉢，一条刻目突帯文甕，丹塗磨研壺	磨石，使用痕ある剥片	早期，晩期後半
14	野田山１次	市教育委員会	280	大字野田字野田山（学園台）	中位Ⅱ段丘	91	条痕文，無文尖底		早期前半
14	野田山２次	市教育委員会	494	大字野田字野田山（学園台）	中位Ⅱ段丘	91	条痕文，無文尖底，コブ状突起付無文		早期前半
15	野田	市教育委員会	1,000	大字野田	中位Ⅱ段丘野田面	85		石鏃	早期？
16	国分台			大字国分	中位Ⅱ・Ⅲ段丘	50-75			
17	六重原			大字野田字六重原（国分新町）	中位Ⅱ段丘野田面	85	早水台，撚糸文，条痕文，無文		早期
18	賀来中学校３次	市教育委員会	308	大字賀来字中島	沖積平野自然堤防上	16-17	後期沈線文，晩期深鉢底部		後晩期
19	上片面			大字賀来字上片面	沖積平野微高地	15	深鉢		後期中葉
20	豊府小学校	市教育委員会		大字古国府字雲田・国政・銅給	沖積平野	10-11	晩期黒色磨研鉢，深鉢		晩期
21	古国府遺跡群	県教育委員会	1,000	大字羽屋字太田・甲斐本・挾間・鋤崎	沖積平野微高地	10-11			
21	古国府遺跡群甲斐本地区	県教育委員会	1,300	大字羽屋字甲斐本	沖積平野	10	磨消縄文，晩期鉢		後期前半～晩期後半
21	古国府遺跡群上芦原地区	県教育委員会	800	大字羽屋字上芦原	沖積平野	11	磨消縄文，晩期深鉢		後期前半～晩期後半
21	古国府遺跡群土毛地区	県教育委員会	600	大字羽屋字土毛	沖積平野	10	磨消縄文，晩期鉢		後期前半～晩期後半
22	羽屋園１次	市教育委員会	1,000	大字羽田字園	沖積平野微高地	11	西平		後期後半
22	羽屋園２次	市教育委員会	1,300	大字羽田字園	沖積平野微高地	11			後期
23	大分川河川敷１			大字古国府字上河原	河川敷	2-3			
24	大分川河川敷２			大字曲	河川敷	2-3			
25	大分川河川敷３			大字津守字平田	河川敷	2-3			
26	北ノ後	県教育委員会		大字上宗方字北ノ後	河岸段丘	14		磨製石斧	
27	玉沢地区条里跡	市教育委員会		大字玉沢字長通 838 番地他	沖積平野				
28	玉沢地区条里跡稙田平石地区	県教育委員会	3,200	大字稙田字平石	沖積平野自然堤防上	13	二条刻目突帯文甕		晩期末～弥生初頭
29	玉沢地区条里跡二反田地区	県教育委員会	6,000	大字下宗方字二反田	沖積平野自然堤防東南端近く	10	上菅生Ｂ，下黒野，刻目突帯文，無刻目突帯文	扁平打製石斧，ノミ状石斧，石鏃，石錘，磨石	晩期前半，中葉～後半，
30	玉沢地区条里跡山伏田地区	県教育委員会	4,000	大字上宗方字山伏田	沖積平野自然堤防東端	11	片粕，西平，滋賀里Ⅰ？，無刻目突帯文	ノミ状石斧，石鏃，石錘	後期中葉～後半，晩期前半～後葉
31	玉沢地区条里跡六反田地区	県教育委員会	3,500	大字下宗方字六反田	沖積平野自然堤防東端	12		扁平打製石斧，凹石	
32	稙田市１～５次	県教育委員会	34,000	大字市	沖積平野微高地	16	下黒野	石鏃，石匙，石錐，ノミ状石器	晩期末
32	稙田市ｄ 90 年度調査区	県教育委員会	1,600	大字市大字木の上字垣ノ内ほか	沖積平野微高地	14-15	下黒野深鉢浅鉢	石鏃	刻目突帯文期
33	雄城台	県教育委員会	1,900	大字玉沢字宮ノ口	中位Ⅲ段丘 Aso-4 上	70	浅鉢	福井型細石核	草創期初頭，晩期前半
34	深町	県教育委員会	3,138	大字玉沢字深町	沖積平野河岸段丘	13			晩期
35	大分川河川敷４			大字下郡	河川敷	2-4	三万田	扁平打製石斧，十字形石器，円形石器	前期中期後期，後期末～晩期初，晩期前半
36	牧六分	市教育委員会	220	大字下郡字有岡	沖積平野自然堤防上	4-5	後期中頃粗製深鉢		後期中頃
36	牧六分			大字牧字六部	沖積平野自然堤防上	4-5	南福寺，沈線文，西平，鳥井原		中期末，後期後半
37	牧			大字牧	沖積平野微高地	4.5	刻目突帯文		晩期
38	下郡遺跡群第 10 次Ｂ区 c-14 地点	市教育委員会	383	大字下郡	低位段丘	4.6	中津，福田ＫⅡ，コウゴー松，北久根山		後期初頭・前半・中葉，晩期
38	下郡遺跡群第 20 次Ｂ区 c-13 地点	市教育委員会	240	大字下郡	低位段丘	4.5	磨消縄文		後期前半
38	下郡遺跡群第 25 次Ｂ区 g-14 地点	市教育委員会	900	大字下郡小中ツル	流路跡	4	北久根山，西平	石鏃，スクレイパー，扁平打製石斧，石核	後期前半～中葉

第３表　大分市内の縄文時代遺跡および遺物出土地点名③

番号	遺跡名	調査主体	調査面積	所在地	立地	標高(m)	土器	石器	時期
38	下郡遺跡群第 29･30 次Ｂ区 e･f-13･14 地点	市教育委員会	5,300	大字下郡	自然堤防上	4-5			後期
38	下郡遺跡群第 46 次Ｂ区 c-12･13 地点	市教育委員会	310	大字下郡	丘陵裾	4-5	中津，コウゴー松		後期初頭
38	下郡遺跡群第 47 次Ｈ区 q･r-20･21 地点	市教育委員会	589	大字下郡字柳ヤシキ	沖積平野微高地	4-5	西平，晩期黒色磨研精製浅鉢，粗製深鉢		後期中葉，晩期前半
38	下郡遺跡群第 5 次Ｈ区 p･q-19 ～ 22 地点	市教育委員会	2,007	大字下郡	流路跡	4-6	小池原上層，西平，浦久保		後期中葉，晩期前半
38	下郡遺跡群第 75 次Ｈ区 r-21 地点	市教育委員会	300	大字下郡	自然堤防上	6-7	西平，三万田，晩期浅鉢		後期中葉～後葉，晩期前葉～中葉
38	下郡遺跡群第 87 次Ｅ区 p-16 地点	市教育委員会	1,435	大字下郡	沖積平野自然堤防上	6	後期土器片		後期
38	下郡遺跡群第 89 次Ｇ区 s･t-3 地点	市教育委員会	210	大字下郡	自然堤防上	5	晩期精製鉢，刻目突帯文深鉢		晩期後半，晩期末
38	下郡遺跡群第９次Ｄ区 n-21・22 地点	市教育委員会	418	大字下郡	低位段丘	4-6	注口土器		後期
39	下郡桑苗１次Ⅰ区	県教育委員会	40	大字下郡字桑苗	沖積平野旧河道	4	巻貝条痕，西平		後期中葉
39	下郡桑苗１次Ⅱ区	県教育委員会	31	大字下郡字桑苗	沖積平野旧河道	4	晩期鉢		晩期
39	下郡桑苗１次Ⅳ区	県教育委員会		大字下郡字桑苗	沖積平野旧河道	3-4	鐘ヶ崎・北久根山・西平，晩期後半浅鉢		後期中葉，晩期後半
39	下郡桑苗２次	県教育委員会	230	大字下郡字桑苗	沖積平野旧河道	2-4	鐘ヶ崎・北久根山・西平，晩期後半浅鉢	磨製石斧	後期中葉，晩期後半
40	羽田			大字羽田	沖積平野微高地	6-8	北久根山		後期中葉
40	羽田１次	市教育委員会	608	大字羽田字大日前 386 番地	沖積平野微高地	7	晩期精製浅鉢，深鉢		晩期後半～終末
41	長谷横穴墓群	市教育委員会	500	大字羽田字穴井ヶ迫	台地裾斜面	30-40			後期
42	小池原貝塚１次	鶴崎市	65	鶴崎市大字小池原字宮田	中位Ⅰ段丘端部	20?	小池原Ⅰ～Ⅴ	石錘	後期前半
42	小池原貝塚２次	県教育委員会	600	大字小池原字宮田	中位Ⅰ段丘端部	20?	小池原下層・小池原上層	石鏃 1，石斧 1，石錘 5，敲石 2，磨石 1，砥石 1，姫島産石核	後期前半
43	地蔵原	市教育委員会		大字小池原字五反畑	中位Ⅰ段丘端部	39			後期
44	猪野新土井	市教育委員会	8,500	大字猪野字新土井	中位Ⅰ段丘端部	40	稲荷山，コブ状突起付無文	石鏃，打製石斧，礫器	早期中頃
45	多武尾	市教育委員会	3,394	大字横尾字下横尾	中位Ⅲ段丘	30-32		鐘崎	後期
46	横尾貝塚（貝殻天神）			大分郡明治村	低位Ⅰ段丘端	6-8	条痕文・隆帯文		前期，中期，後期
46	横尾貝塚１次	県教育委員会	15	大字横尾字下横尾，江又	低位Ⅰ段丘端	6-8	撚糸文，田村，轟，後期条痕文，磨消縄文	磨製石斧，石鏃，縦長剥片，石錘，石皿	早期，前期，後期
46	横尾貝塚２次	県教育委員会	176	大字横尾字下横尾，江又	低位Ⅰ段丘端	6-8	稲荷山，無文，条痕文，轟Ｂ，曽畑，船元，中津，西和田	石錘，磨製石斧	早期，前期，中期，後期
46	横尾貝塚３次	県教育委員会	176	大字横尾字下横尾，江又	低位Ⅰ段丘端	6-8			
46	横尾貝塚確認	県土木建築部	48	大字横尾字下横尾，江又	低位Ⅰ段丘端	6-8			
47	真萱			大字松岡字真萱	中位Ⅰ・Ⅲ段丘	50-20		礫器	
48	丹生遺跡群	大字丹生		高位Ⅰ・Ⅱ，中位Ⅰ段丘		40-80			
48	丹生遺跡第 11 地区Ｂ地点	財団法人古代学協会・平安博物館	37.5	大字丹川字原山	高位Ⅱ段丘	60	無文	尖頭器，石鏃，剥片，砕片	早期？
48	丹生遺跡第 12 地区Ａ地点	財団法人古代学協会・平安博物館	195	大字丹川字三世尾	中位Ⅰ段丘端	40	押型文	石鏃，剥片	早期
48	丹生遺跡第 13 地区Ａ地点	財団法人古代学協会・平安博物館	56.25	大字丹川字池ノ久保	高位Ⅱ段丘	60	撚糸文，無文，早水台，	石鏃，剥片	早期
48	丹生遺跡第 14 地区Ｃ地点	財団法人古代学協会・平安博物館	136	大字丹生字長迫	高位Ⅱ段丘	76	無文		早期
48	丹生遺跡第１地区Ｂ地点北区	財団法人古代学協会・平安博物館	700	大字丹生字長迫	高位Ⅰ段丘	78-80		神子柴・長者久保系石斧，石鏃，楔形石器，石核	草創期初頭，早期
48	丹生遺跡第１地区Ｂ地点東南区	財団法人古代学協会・平安博物館	700	大字丹生字長迫	高位Ⅰ段丘端	75-78	土器片	石鏃	早期
48	丹生遺跡第１地区Ｇ地点	財団法人古代学協会・平安博物館		大字丹生字長迫	高位Ⅰ段丘鞍部	72		石鏃	
48	丹生遺跡第２地区Ｂ地点	財団法人古代学協会・平安博物館		大字丹生字野間	高位Ⅱ段丘	76-77	土器片	石鏃	

第４表　大分市内の縄文時代遺跡および遺物出土地点名④

番号	遺跡名	調査主体	調査面積	所在地	立地	標高(m)	土器	石器	時期
48	丹生遺跡第２地区Ｅ地点	財団法人古代学協会・平安博物館	45	大字丹生字野間	高位Ⅱ段丘	75-76	土器片	石鏃，磨石，磨製石斧	早期？
48	丹生遺跡第２地区Ⅰ地点	財団法人古代学協会・平安博物館	26.25	大字丹生字野間	高位Ⅱ段丘端	60-64	土器片	石鏃	
48	丹生遺跡第４地区Ａ地点	財団法人古代学協会・平安博物館	160	大字丹川字池久保・辻山・原山	大在層高位Ⅰ段丘面	76-78	土器片		
48	丹生遺跡第４地区Ｂ地点	財団法人古代学協会・平安博物館	92	大字丹川字池久保・辻山	高位Ⅱ段丘	59-61	土器片		
48	丹生遺跡第７地区Ｄ地点	財団法人古代学協会・平安博物館	343.5	大字丹川字池久保ほか	高位Ⅱ段丘	60-68		船野型細石核関係体部調整・作業面調整剥片，石匙	草創期初頭，？
48	丹生遺跡第８地区Ａ地点	財団法人古代学協会・平安博物館	165	大字丹川字住信	中位Ⅰ段丘	49			
48	丹生遺跡第８地区Ｂ地点	財団法人古代学協会・平安博物館	392	大字丹川字辻川ほか	高位Ⅱ段丘端	54-57			
48	丹生遺跡第８地区Ｃ地点	財団法人古代学協会・平安博物館		大字丹川字百堂辻	高位Ⅱ段丘	65	土器片		
48	丹生遺跡第８地区Ｄ地点	財団法人古代学協会・平安博物館		大字丹川字百堂辻	高位Ⅱ段丘	64	土器片	石鏃未製品	
48	丹生遺跡第９地区Ｃ地点	財団法人古代学協会・平安博物館	52	大字丹生字清水迫・日暮	滝尾層高位Ⅰ段丘面	81-82	土器片	石鏃	早期？
49	延命寺			大字丹川字延命寺	低位Ⅰ・中位Ⅰ段丘	12-40		石鏃	
50	浜	県教育委員会		大字浜	砂丘	5-6	北久根山？		後期前半
51	浜・長無田	市教育委員会	1,300	大字浜・大在	砂丘	5	刻目突帯文，孔列文，小型壺	石錘，石鏃，磨製石斧，スクレイパー	晩期後葉，後葉～末
52	横塚第２	県教育委員会	280	大字里字王ノ瀬	古砂丘	5	福田ＫⅡ，宿毛，縁帯文，条痕調整無文	切目石錘，磨製石器	後期初頭～前半
53	丹生川坂ノ市条里跡（里・川田遺跡）	市教育委員会	315	大字里1402の23番地他	沖積低地	4	刻目突帯文		晩期後半
53	丹生川１次（一木中安）	大分大学		北海部郡坂ノ市町大字一木字平下 45-48（大字丹川字丹生）	沖積平野低湿地	10	磨消縄文，夜臼小壺，刻目突帯文		後期前半，晩期後半
53	丹生川２次	県教育委員会		大字丹川字丹生	沖積平野低湿地	10	小池原上層，下黒野壺，刻目突帯文		後期前半，晩期後半
54	利光遺跡鵜ノ木地区	県教育委員会	700	大字上戸次字鵜ノ木	低位Ⅱ段丘	18-19	早水台，無文，条痕文，轟Ｂ，西平，御領，無刻目突帯文	石鏃，剥片，打製石斧	早期，前期，後期，晩期
54	利光遺跡鵜ノ木地区	県教育委員会	693	大字上戸次字鵜ノ木	低位Ⅱ段丘	18-19	斜格子目文，早水台，無文，条痕文，轟Ｂ，西平，御領，無刻目突帯文	石鏃，剥片，打製石斧，スクレイパー	早期後半，前後期後半，晩期
54	利光遺跡タンクワ地区	県教育委員会	？	大字上戸次字タンクワ	低位Ⅱ段丘	18-19	土器片		
54	利光北遺跡脇ノ津留地区	県教育委員会	1,087	大字上戸次字脇ノ津留	低位Ⅱ段丘	18-19			
55	岩上			大字端登字岩上	台地	80-100			早期，後期後半
56	奥			大字奥字奥	台地	80-104			
57	杉原			大字吉野字杉原	台地低丘陵	85-100			早期
58	毛見所	県教育委員会	2,000	大字佐野字毛見所	堆積段丘	17			晩期
59	古城山	県教育委員会	1,350	大字滝尾字荷付 2456-22	谷頭を臨む丘陵支尾根斜面	82-90	条痕・ナデ調整無文，平椏，田村	クサビ形細石刃核，礫器	草創期初頭，早期初頭，早期後半
60	荏隈杉下	県教育委員会	21,500	大字荏隈字杉下	台地裾沖積地	13	刻目突帯文，無刻目突帯文	石鏃，石錐，打製石斧，磨製石斧，磨石，石皿	晩期後半
60	荏隈杉下試掘	県教育委員会	3,000	大字荏隈字杉下	台地裾沖積地	13			晩期
61	曲	市教育委員会	5,000	大字曲	片島層低位Ⅰ段丘裾沖積平野	10		黒耀石剥片	
62	下寒田試掘	市教育委員会	381	大字寒田 1369-1	阿蘇４火砕流堆積物中位Ⅰ段丘面	48			
63	旦野原神原	市教育委員会	600	大字旦野原字神原 378	中位Ⅱ段丘	79	無文，押型文，平椏	黒耀石剥片	早期末
64	一方平Ⅰ	県教育委員会	1,700	大字横尾字一方平	中位Ⅰ段丘緩斜面	52-56	無文，田村，平椏，塞ノ神	クサビ形細石核，礫器，石鏃，石匙，磨石，敲石，平打製石斧	草創期初頭，早期後半，前中後？晩期

第５表　大分市内の縄文時代遺跡および遺物出土地点名⑤

番号	遺跡名	調査主体	調査面積	所在地	立地	標高(m)	土器	石器	時期
65	一方平Ⅱ	県教育委員会	2,750	大字横尾字一方平	高位Ⅱ段丘細尾根鞍部	70-78	無文，早水台，下菅生Ｂ	鍬形鏃，五角形鏃，剥片，扁平打製石斧，磨製石斧敲石，磨石，石皿	早期，後期～晩期後半
66	一方平Ⅲ	県教育委員会	3,360	大字横尾字一方平	滝尾層鶴崎台地面	125	無文	礫器，剥片，石鏃，打製石斧，敲石，磨石，石皿	早期
67	一方平Ⅳ	県教育委員会	2,000	大字横尾字一方平	中位Ⅰ段丘斜面小河川沿い	60	条痕文轟，船元，西平，刻目突帯文	礫器・石匙・石鏃・扁平打製石斧・磨石・敲石・石庖丁形石器	前期，中期，後期，晩期終末
68	九池	県教育委員会	37,700	大字横尾字九池	高位Ⅱ段丘	74	隆起線文轟，後期底部	石鏃，扁平打製石斧，磨製石斧，磨石，敲石，凹石	早期，前期，後期？
69	牧ノ内	県教育委員会	12,000	大字松岡・横尾	高位Ⅱ段丘東緩斜面	70		石鏃，扁平打製石斧，	後期～晩期
70	論出	県教育委員会	5,000	大字横尾字論出	高位Ⅱ段丘	70		扁平打製石斧	早期，後期～晩期
71	小平ノ辻	県教育委員会	300	大字松岡字小平ノ辻	滝尾層鶴崎台地面	126		石鏃，スクレイパー未製品	後期～弥生前期
72	賀来			大字賀来	小扇状地	14-30	小池原上層，西平		後期前半～中葉
73	毛井遺跡Ａ地区	県教育委員会	3,000	大字毛井	沖積地	7	晩期浅鉢	局部磨製石斧，扁平打製石斧	晩期
74	虫喰谷	県教育委員会	500	大字松岡字虫喰谷	挟間川開析谷に面する丘陵裾部緩斜面	62	田村，無文，条痕文，轟Ｂ	礫器，磨石，磨製石斧	早期後半，前期
75	明治			大字明治	中位Ⅰ段丘	50-40			後期
76	横尾遺跡群第82次調査地点	市教育委員会	2,140	大字横尾字下横尾	低位Ⅰ段丘端～開析谷	3.5-9	押型文，条痕文，轟Ｂ，阿高，中津，西和田，福田ＫⅡ，小池原上層，コウゴー松，三万田，黒色磨研	石鏃，打製石斧，磨製石斧，石錘，磨石・敲石，石皿	早期，前期，中期，後期，晩期
77	長迫	市教育委員会	720	大字牧字長迫		82-84	鐘崎	磨製石斧	後期中頃
78	大分川河床				河川敷	2-4	轟Ｂ，船元系，阿高，西和田，福田ＫⅡ，コウゴー松，小池原上層，鐘崎，北久根山，西平，三万田	扁平打製石斧，十字形石器，円形石器	前期，中期，後期，後末～晩期初，晩期前半

（4）弥生時代

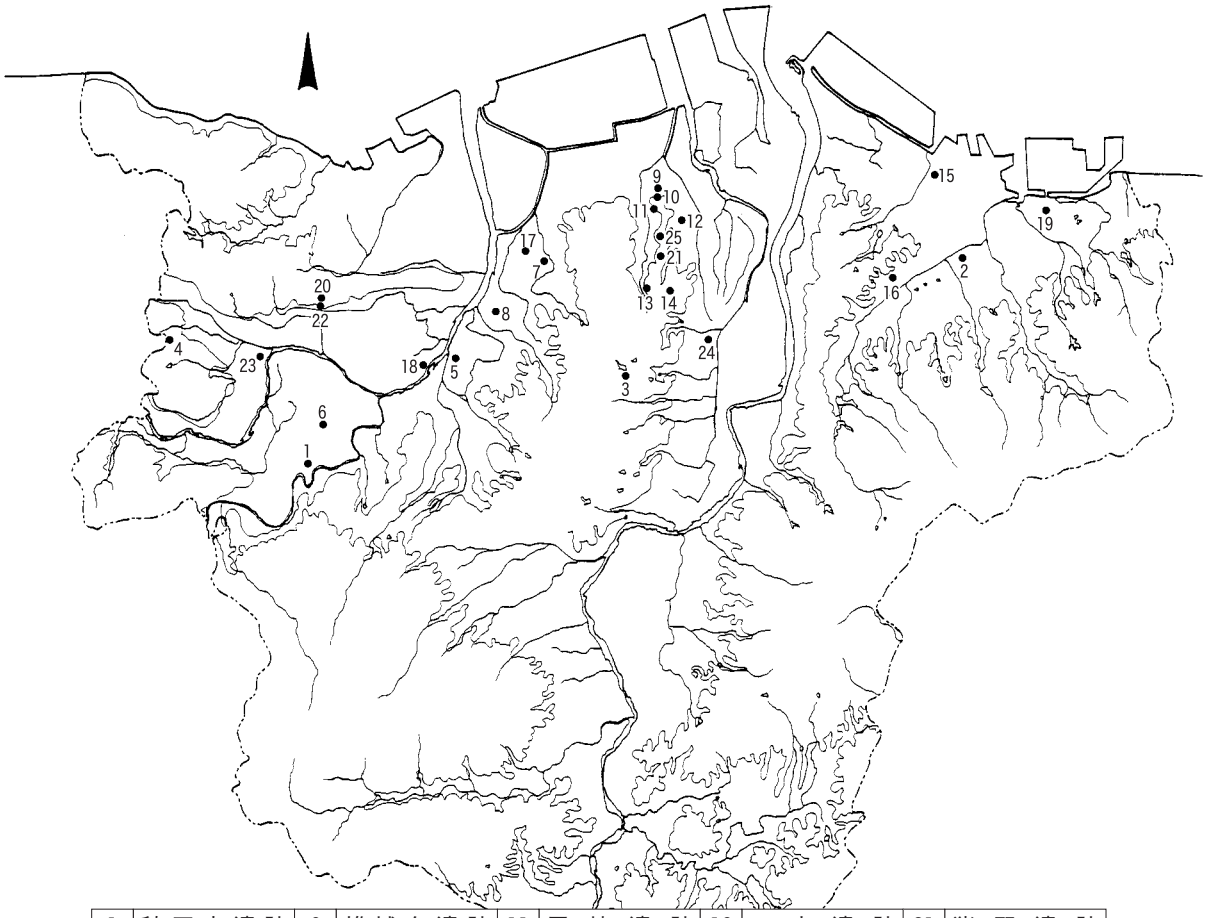
大分市内で弥生時代の遺構が確認されるのは早期からである。早期の遺跡として稙田市遺跡、丹生川遺跡があり、丹塗磨研壺と一条刻目突帯文甕が出土している。

また、低地の遺跡である稙田平石遺跡や下郡遺跡群の南に位置する羽田遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代早期に比定される刻目突帯文土器の破片が採集されている。出土する土器に付着した籾痕や炭化米、石庖丁状の石器の存在などから、この時期にはすでに水稲農耕が行われていた可能性が指摘される。しかし現在まで、大分市内ではこの時期の水田遺構は検出されていない。

前期末から中期初めのころになると前代に比べて、遺構および遺跡の数が増加する。小規模な河川沿いの沖積地、またはそれに隣接した台地や丘陵上に多くの集落が形成されるようになる。これらの集落は、比較的安定した可耕地を持っており、水稲農耕を生活の基本としていたが、地形環境や諸条件に制約されて、弥生時代の人々もまた狩猟・漁労という生活に頼るところが大きかったと考えられる。この時期の集落は、主に大分川右岸の沖積平野とそれらを見下ろす台地上、および乙津川左岸の沖積地に突き出る低位丘陵上に分布する。特に、鶴崎丘陵上の小池原地区には前期から中期にかけての集落遺跡が集中する。

前期末頃から中期を代表する遺跡としては次のようなものがあげられる。

大分川右岸の台地上に守岡遺跡、雄城台遺跡、低地の沖積平野には下郡桑苗遺跡、羽田遺跡等があり、



1	植田市遺跡	6	雄城台遺跡	11	尾崎遺跡	16	一木遺跡	21	猪野遺跡
2	丹生川遺跡	7	下郡桑苗遺跡	12	北の崎遺跡	17	下郡遺跡群	22	尼ヶ城遺跡
3	一方平Ⅳ遺跡	8	羽田遺跡	13	米良草遺跡	18	花園遺跡	23	賀来中学校遺跡
4	下黒野遺跡	9	米竹遺跡	14	葛木遺跡	19	久原遺跡	24	多武尾遺跡
5	守岡遺跡	10	地蔵原遺跡	15	浜遺跡	20	城南遺跡	25	猪野新土井遺跡

第６図　大分市内の弥生時代遺跡分布図

乙津川左岸の沖積地にのびる丘陵東端に米竹遺跡、地蔵原遺跡、尾崎遺跡、北の崎遺跡、米良草遺跡、葛木遺跡などがある。また、砂丘遺跡である大在浜遺跡、丹生川左岸に位置する一木遺跡、丹生川遺跡などがある。

大分川右岸の台地上に立地する守岡遺跡・雄城台遺跡では、遺構の時期は連続せず空白期間があるものの、前期末～中期、後期後半～古墳時代初頭に至るまで人々の居住地として断続的に使用されていたことが明らかとなっている。守岡遺跡では６基の住居跡、77基の竪穴・土坑 、貯蔵穴40基を検出している。また、雄城台遺跡では前期末と中期の竪穴住居跡、中期の土壙墓、貯蔵穴などを検出している。雄城台遺跡第９次調査では小ピットより巴形銅器が一点出土している。巴形銅器は、東九州では初例となるものである。

乙津川左岸の低位丘陵に位置する米竹遺跡では多数の貯蔵穴を検出している。地蔵原遺跡では、前期末～中期の貯蔵穴十数基と、中期後半の円形住居跡１基が検出されている。尾崎遺跡では21基の竪穴・土坑 が検出されており、そのうち中期の貯蔵穴が１基ある。調査では前期・中期の住居跡は確認されていないが、多くの貯蔵穴の存在から、集落の存在と規模をうかがい知ることができる。

大分市内の弥生時代集落は、大分川と大野川下流域、丹生川流域とその周辺台地、大在から浜地区にかけての海岸地帯に集中して分布する傾向にあることは先に述べた。その中でも中期末～後期にかけて続く、羽田遺跡・花園遺跡などの地域の拠点ともいえるような大集落に発展していくものがある。一方で、なぜか前期の終わり頃開始された雄城台遺跡・守岡遺跡といった台地や丘陵上の集落の大部分は、中期の終わり頃～後期の初めにかけ突然断絶してしまう。

この時期の遺跡としては鶴崎台地の猪野遺跡、海岸地帯の砂丘に立地する久原遺跡と浜遺跡、大分川下流域では羽屋・井戸遺跡、また庄ノ原台地の城南遺跡などがある。

城南遺跡では中期末を中心とする集落跡が確認されている。ほぼ須玖Ⅱ式期に相当する。「く」字形口縁の甕、鋤先口縁壺などを出土する住居跡３基と土坑 を検出している。遺物では石庖丁、石鎌、磨製石鏃、石皿、磨石等が出土している。 猪野遺跡では中期後半～後期初頭にかけての貯蔵穴、土壙墓および土器蓋土壙墓等を検出している。土器蓋土壙墓に使用されていた壺は、その特徴から検出例が乏しい後期初頭に編年されるものであり、注目される。浜遺跡は海岸部の砂丘遺跡であり、多数の供献土器を伴う土壙墓、壺棺墓及び箱式石棺墓を検出している。埋葬遺構のあり方から、被葬者間に階層差が生じる過程を読みとることができる遺跡として重要である。しかし今のところ、いわゆる王墓や首長の墓に相当するものは検出されていない。

後期後半以降になると、大分市内の台地・丘陵・低地のいたるところに集落遺跡が出現し、遺跡数が急激に増えるとともに、遺跡の規模が拡大する傾向が見られる。そして、後期終末～古墳時代初頭には、それまで集落が営まれていた場所から再び多くの遺跡が消失してしまう。

尼ヶ城遺跡、賀来中学校遺跡、尾崎遺跡、多武尾遺跡、米竹遺跡、一木遺跡などは集落の周囲にＶ字形の溝をめぐらすと考えられる集落跡である。これらの中で、賀来中学校遺跡を除く高位丘陵上に立地する集落遺跡は、低地の集落が洪水などで自然災害を受けやすいのに対して、より安定した立地環境にあるだけでなく、地形自体が集落の防衛に有効に機能する立地となっている。ちなみに最近の調査により、雄城台遺跡、猪野・新土井遺跡なども環濠集落であることが判明している。また、この様な遺跡は後期後半から終末にかけて、環濠内に大量の土器を廃棄し突然廃絶される傾向が共通して認められ、後期後半～終末に比定される住居跡からは廃棄された鏡片などが見つかることがある。そして、守岡遺跡にみられる様にこの時期の遺跡から外来系の土器の出土が増加する傾向が看取される。

このように、大分平野では弥生時代後期後半から終末及び古墳時代初頭にかけて、遺跡の動向において大きな画期を認めることができる。（横山）

（５）古墳時代

下郡遺跡群周辺に所在する古墳時代遺跡には、牧六分遺跡、羽田遺跡、津守遺跡、守岡遺跡などがあり、下郡遺跡群と同じ自然堤防上に連続して立地する。これらの遺跡からは古墳時代の水田跡、住居跡、溝跡、貯蔵穴等が確認されている。

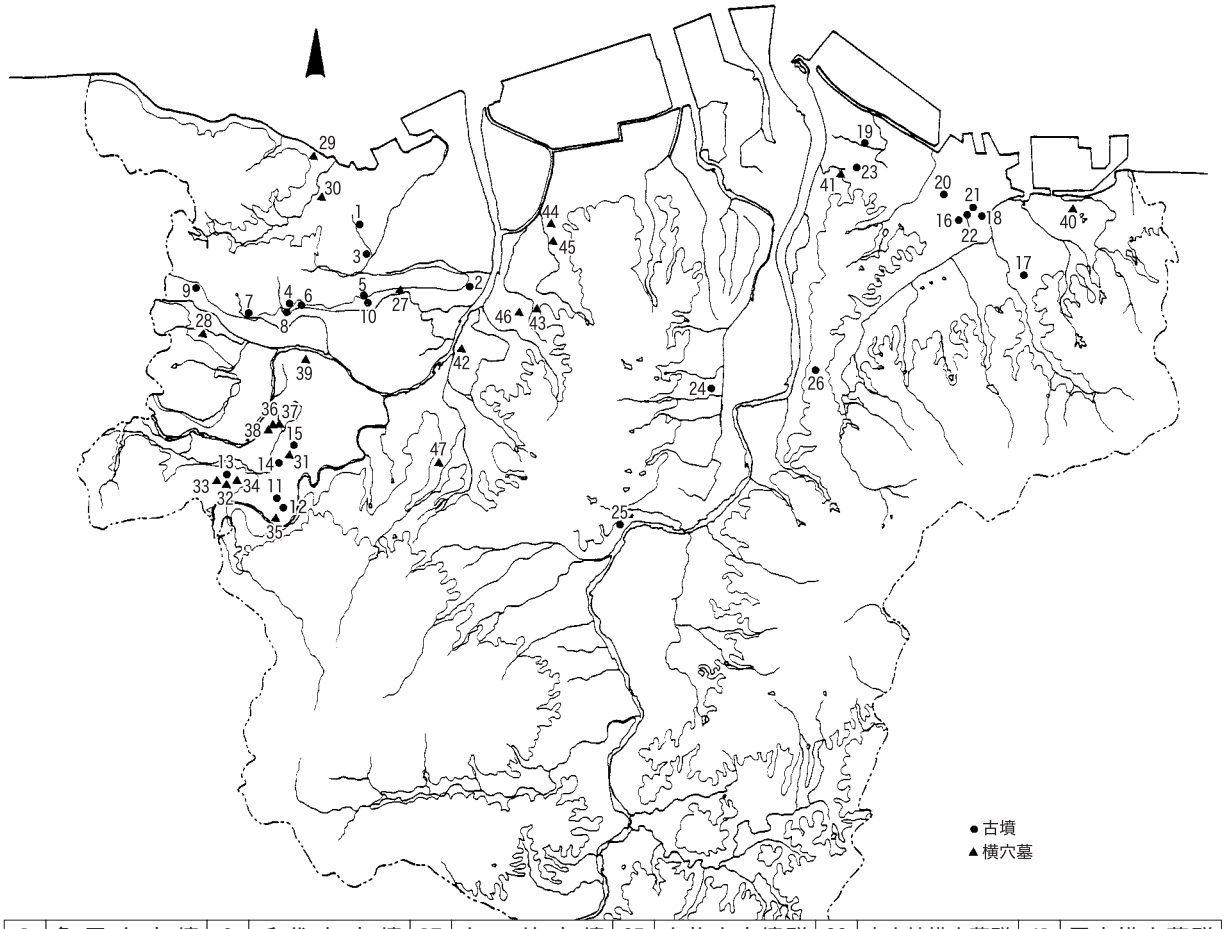
大分川右岸の河口に近い地域では、高塚古墳の存在は津守古墳１基を確認するのみである。これが古墳時代後期になると、大分平野でも有数の横穴墓群の集中地域となり、数十基単位の横穴墓が造営される。主要な横穴墓群には滝尾百穴横穴古墳群をはじめ、下郡横穴墓群、穴井前横穴墓群などがある。な

かでも、平成３年度に調査が実施された長谷横穴墓群では約50基に及ぶ横穴墓が調査されており、大分市内でも最大規模の調査事例として横穴墓の終末時期の様相解明に際し貴重な資料を提供した。 一方、大分川の対岸の地域には、舶載の三角縁神獣鏡を出土した前期古墳である亀甲山古墳が所在し、亀甲山古墳の造営を皮切りにこれ以後、蓬莱山古墳・大臣塚古墳といった前方後円墳が造営される。さらにその周辺には箱式石棺を主体とする小円墳群が群集し、右岸地域とは対象的な様相を示している。また、平成９年度の調査により、新たに発見された千人塚古墳は古墳時代中期末から後期前半（５世紀末～６世紀前半）頃の前方後円墳であり、大分平野部における最後の前方後円墳として注目されている。古墳時代後期にもこの地域には首長系譜の古墳は造営されつづけ、横穴式石室墳である千代丸古墳・丑殿古墳・弘法穴古墳へと続く。特筆される点は、大分平野部において、本格的な横穴式石室墳が造られるのは、唯一この大分川左岸地域のみであり、当地域を大分国造の本貫とする根拠のひとつとなっている。大分川左岸地域の古墳分布に示される優位性はその後も続き、国指定史跡古宮古墳へと引き継がれる。古宮古墳は、九州地方で唯一の畿内系石棺式石室をもつ方墳であり、７世紀後半頃の築造と推定されている。古墳の規模等から『日本書紀』に記述され、壬申の乱において武功をたてた「大分君恵尺」が古墳被葬者の有力候補と考えられている。古宮古墳の存在は、大分における古墳時代の終焉と古代律令体制の萌芽を示しており、その後も上野廃寺等の古代寺院の建設、羽屋・井戸遺跡等の評衙段階に相当する規格性の高い大型建物群の存在などへと継続していく。そして豊後国府の設置により、当地において豊後国の律令体制は完成をむかえるのである。

大分市域の東側を流れる大野川周辺には、その両岸に展開する台地上に多くの高塚古墳が所在する。右岸の丹生台地には、多くの前方後円墳を擁する野間古墳群が分布し、さらに東に近接する城原台地には県下最大級の前方後円墳である亀塚古墳が小亀塚古墳、辻古墳などと小古墳群を形成し所在する。これらの古墳は前期から中期に築造された古墳群である。また、大野川の左岸に位置する小牧山古墳群は方墳、円墳、前方後円墳からなり、丘陵頂部から斜面地へ順次造営されていったことが判明しており、４世紀後半に比定される６号墳（前方後円墳）を最後に築造が終了する。古墳時代前期における累代的な古墳変遷を如実に示す古墳群として貴重である。

大分川の少し上流に位置する木ノ上台地には全長約75mを測る前方後円墳である御陵古墳をはじめ、大小の高塚古墳の他、多くの横穴墓が分布する。高塚古墳は５世紀を中心とするものであり、凝灰岩製の組み合わせ式の箱式石棺をもつ下ヶ迫古墳、５世紀後半の築造になると推定され、凝灰岩製の家形石棺を主体部にもつ世利門古墳などがある。特に昭和30年に調査が実施された世利門古墳は、直径18mの円墳であり、石棺内には５体以上の人骨が合葬されているとともに、貝釧、竹製漆塗櫛、鉄剣、鉄鏃などが出土した。さらには、この世利門古墳の至近な位置にある高来山横穴墓は、平入り長方形の寄棟形の天井を有しており､床面には玉砂利が敷かれ､奥壁には二個の突起を造り出すという特異な構造をもっている。出土遺物には銅鏡、鉄剣、鉄鏃、鉄鉾、刀子などがある。５世紀後半～６世紀初頭頃の築造と推定される。大分平野では最古式の横穴墓である。高来山横穴墓と同一台地の北側斜面には大曽横穴墓群が分布する。その中の大曽２横穴墓群は16基の横穴墓から構成されるが、その中には羨門の壁を朱により赤く彩色した一群があり注目される。

御陵古墳の所在した地点の南側の台地部には浅草神社古墳群が所在する。８基の円墳と２基の方墳からなる。これらの古墳群の立地する台地の最高所の南側谷部は馬蹄形を呈しており、谷深部の崖面には



1	亀甲山古墳	9	千代丸古墳	17	上の坊古墳	25	小牧山古墳群	33	志土地横穴墓群	41	屋宗横穴墓群
2	大臣塚古墳	10	弘法穴古墳	18	辻2号古墳	26	野間古墳群	34	土肥横穴墓群	42	滝尾守岡横穴墓群
3	古宮古墳	11	御陵古墳	19	大在古墳	27	南太平寺横穴墓群	35	岩崎横穴墓群	43	長谷横穴墓群
4	蓬莱山古墳	12	浅草神社古墳群	20	大蔵古墳	28	小原横穴墓	36	大曽横穴墓群	44	下郡横穴墓群
5	千人塚古墳	13	山伏古墳群	21	辻1号古墳	29	蟹喰横穴墓群	37	大曽2横穴墓群	45	穴井前横穴墓群
6	田崎古墳群	14	世利門古墳	22	小亀塚古墳	30	穴蟹喰横穴墓群	38	大曽3横穴墓群	46	滝尾百穴横穴古墳群
7	餅田古墳群	15	下ヶ迫古墳	23	王越石棺	31	高来山横穴墓群	39	小野鶴横穴墓群	47	旦野原横穴墓
8	丑殿古墳	16	亀塚古墳	24	有田古墳	32	木ノ上横穴墓群	40	飛山横穴墓群		

第７図　大分市内の古墳時代遺跡分布図

３群28基の横穴墓からなる木ノ上峠横穴墓群が所在する。６世紀後半～７世紀前半に築造されたものと推定され、同一台地の古墳群の中では最も後出するもののひとつである。木ノ上峠横穴墓群の中の２基には、凝灰岩製の石蓋が残っている。石蓋の表の中央部には短冊形の突起が削り出されており、扉につける閂を模造したものと考えられている。

大分平野部の古墳分布には、前述のように大分国造の本貫地と推定される大分川下流域の左岸地域に後期、終末期の古墳が引き続き造営される以外は、他の地域での後期高塚古墳の築造はほとんどみられず、夥しい数の横穴墓に収斂されていく特徴がある。また、これらの多くの横穴墓が一定の地域空間を占有する状況で分布し、それぞれの小単位が古代律令体制下における郷域に相当するという興味深い指摘もある。

下郡遺跡群の東側台地崖面に数多く分布する横穴墓は、判太郷に比定される地域に包括されるものであり、滝尾百穴横穴墓群をはじめとする多くの横穴墓は、当地域の古墳時代終末期の活況状況を示して

いる。これらの墳墓群に対応する同時期の大規模集落の発見事例は今のところなく、今後の調査における大きな課題となる。（坪根）

参考文献
大分市教育委員会　1990『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（1）
大分市教育委員会　1991『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（2）
大分市教育委員会　1992『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（3）
大分市教育委員会　1993『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（4）
大分市教育委員会　1994『大分市埋蔵文化財調査年報』Vol.5　1993年度
大分市教育委員会　1995『大分市埋蔵文化財調査年報』Vol.6　1994年度
大分市教育委員会　1996『大分市埋蔵文化財調査年報』Vol.7　1995年度
大分市史編纂委員会　1987 『大分市史』 上　大分市
大分市教育委員会　1995 『木ノ上地区重要遺跡確認調査報告書』
大分県教育委員会　1996 『岩崎横穴墓』七瀬川河川改修工事に伴う発掘調査報告書
大分市教育委員会　1997 『大分市の文化財』

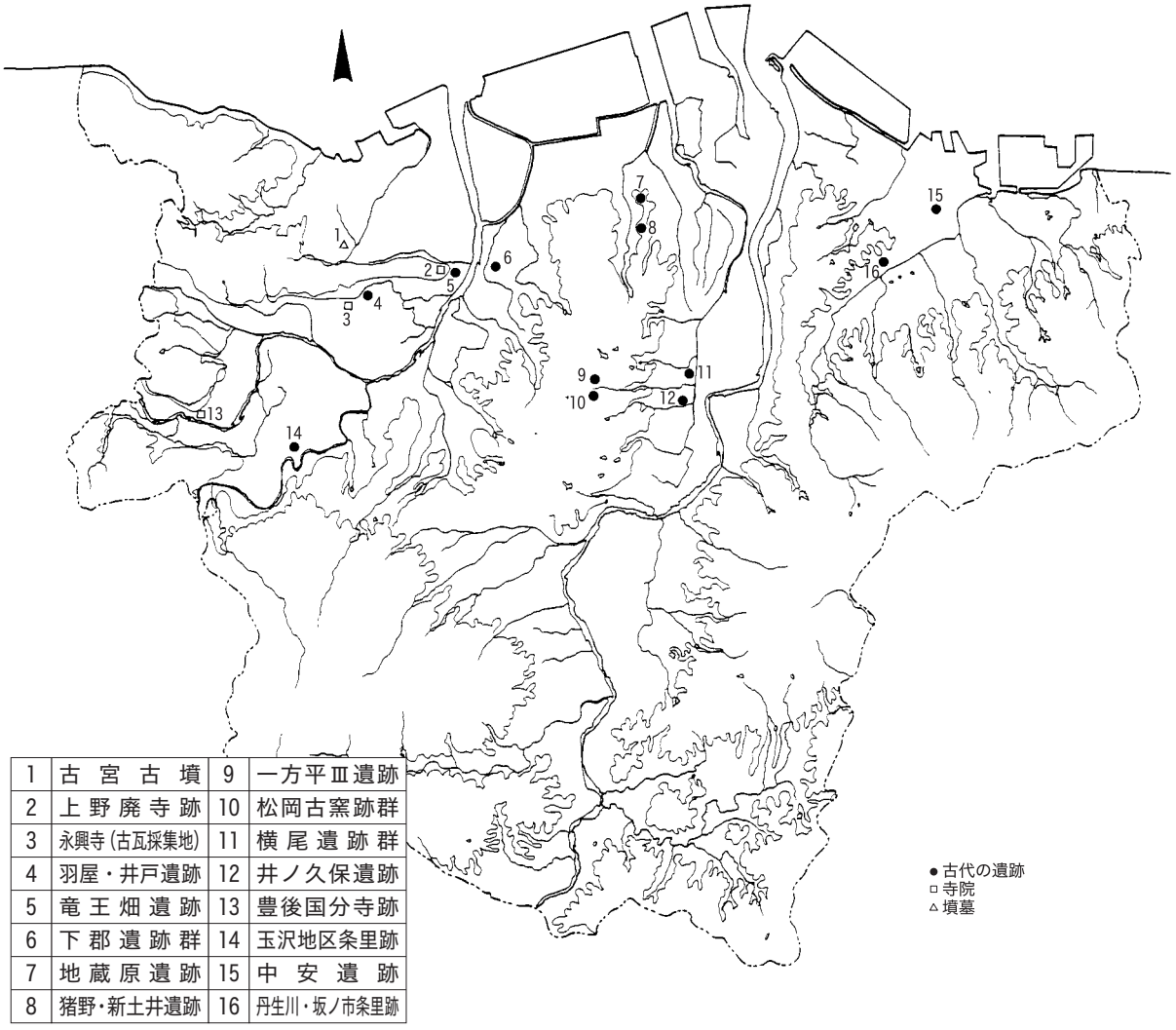
（6）古代

近年大分市内の古代遺跡の調査事例は増加傾向にあり、注目すべき発見が相次いでいる。現在の大分市域は古代の行政区画の中で「大分郡」、「海部郡」の２郡を包括する。

豊後国府がおかれた「大分郡」にあっては、九州で唯一の事例となる畿内型の石棺式石室をもつ古宮古墳が所在し、また、これに先行する後期の横穴式石室をもつ後期古墳が大分川の左岸地域に卓越した分布状況を示すことから、この地域に大分国造の本貫地があったと推定されている。このような変遷をたどり、特に大分川左岸地域は、律令体制下にはこの豊後国の中心地となっていくのである。

この地域は、上野廃寺などの初期寺院が建立されており、古墳から寺院への移り変わりが見られる地域でもある。さらに、７世紀後半～８世紀初頭と考えられる規格性をもった大型の建物遺構をもつ羽屋・井戸遺跡があり、豊後国府が成立する以前の評衙に関連する遺跡と考えられている。羽屋・井戸遺跡の所在する古国府・羽屋地区は、大分川の北側に位置する沖積地であり、現在でも県内最大規模の条里状地割を認めることができる。『豊後国風土記』大分郡条には、郡家の位置について「大分河郡の南にあり」と記述されており、古国府・羽屋地区はこの地理要件を満たしており、羽屋・井戸遺跡との関連が注視される。

上野廃寺は古国府・羽屋地区の北側に所在する比高20mの上野台地上に位置している。上野台地は平安時代後期の荘園関係文書に「高国府」という地名で登場することから、有力な国府推定地となっている。近年上野台地上で調査されている上野竜王畑遺跡や上野遺跡群では墨書土器や越州窯系青磁をはじめとした輸入陶磁器類が集中して認められている他、陶硯などが発見されている。特に上野竜王畑遺跡では、７世紀末段階から掘立柱建物が展開している点が明らかにされた他、９世紀に比定される築地を伴う国司館あるいは曹司と推定される建物跡が検出されており、上野台地上に豊後国府が所在した可能性が極めて高くなっている。上野廃寺跡では、礎石建物跡を伴う版築基壇遺構が検出されており、基壇



1	古宮古墳	9	一方平Ⅲ遺跡
2	上野廃寺跡	10	松岡古窯跡群
3	永興寺(古瓦採集地)	11	横尾遺跡群
4	羽屋・井戸遺跡	12	井ノ久保遺跡
5	竜王畑遺跡	13	豊後国分寺跡
6	下郡遺跡群	14	玉沢地区条里跡
7	地蔵原遺跡	15	中安遺跡
8	猪野・新土井遺跡	16	丹生川・坂ノ市条里跡

第８図　大分市内の古代遺跡分布図（大分市歴史資料館『豊後国の眺め』「大分市内官衙関連遺跡位置図」）

西側で確認された瓦溜まりからは均整唐草文軒平瓦、複弁七葉蓮華文軒丸瓦、百済系単弁軒丸瓦、豊後国分寺創建時軒平瓦、土製塼、鉄製飾り金具、緑釉陶器、刑州窯白磁などが出土している。

８世紀中頃に国の重要施設として造られたものに国分寺・国分尼寺がある。通常、これらの寺院は国衙の近辺に造られることが多いが、豊後国分寺の場合、国府推定地から直線距離にして約６㎞とかなり離れたところに位置している。大分川左岸の段丘上に立地しており、「好処」といえる場所に建立されている。国分尼寺については、その所在が明確ではないが、国分寺跡に西接する地点において造り出しのある礎石が発見されており、国分尼寺の存在の可能性を示唆している。加えて、国分寺跡の西側近接地からは「尼寺」と墨書された土器等も複数出土しており、前述の想定を支持している。

下郡遺跡群の所在する大分川右岸地域については、大野川との間に所在する鶴崎台地上を中心に古代に比定される遺跡が分布する。大野川左岸の台地先端部付近では地蔵原遺跡・猪野新土井遺跡などの調査がおこなわれており、溝で区画された中に大型の建物群が配置される状況が認められる他、円面硯や輸入陶磁器なども出土しており、官衙関連の遺跡と考えられている。また同一台地上のさらに南の地域では、４基の須恵器窯跡が確認された松岡古窯跡群や土師器の生産遺跡と考えられる井ノ久保遺跡など

が確認されている。これらは、須恵器や土師器を中心とした生産遺跡であり、規模や生産内容から官営工房のひとつであろうと考えられる。さらにこれらの遺跡の近隣には、土器生産に必要な粘土の採掘坑が発見された横尾遺跡群が所在する。前述の生産遺跡とは若干の時期差があり、直接粘土を供給したものではないが、当地域一帯に良質の粘土が産出する証左となるものであり、近隣にも各時期の粘土採掘坑が展開する可能性を強く示唆している。

一方、海部郡に関しては、『豊後国風土記』の記載から海部郡衙の所在について大分市の里・市尾の字界付近が候補地とされており、近年調査された中安遺跡において、この郡衙政庁と思われる遺構が確認されている。（坪根）

参考文献

大分市史編纂委員会　1987『大分市史』上　大分市

大分市教育委員会　1990『大分市埋蔵文化財調査年報』Vol.1　平成元年度

大分市教育委員会　1991『大分市埋蔵文化財調査年報』Vol.2　平成２年度

大分市教育委員会　1992『大分市埋蔵文化財調査年報』Vol.3　平成３年度

大分市教育委員会　1993『大分市埋蔵文化財調査年報』Vol.4　平成４年度

大分市教育委員会　1994『大分市埋蔵文化財調査年報』Vol.5　平成５年度

大分市教育委員会　1995『大分市埋蔵文化財調査年報』Vol.6　平成６年度

大分市教育委員会　1996『大分市埋蔵文化財調査年報』Vol.7　平成７年度

大分市教育委員会　1997『大分市埋蔵文化財調査年報』Vol.8　平成８年度

大分市教育委員会　1998『大分市埋蔵文化財調査年報』Vol.9　平成９年度

（7）中・近世

中世豊後の歴史は、大友氏の支配により幕を開ける。古代以来、文禄年間の大友氏の除国までの豊後は、古国府・上野台地上に推定される国衙・守護所を中心に、政治的・経済的・文化的な発展を遂げ、守護所を中心とした大分の地は「府中」（のちに府内）とよばれた。大友氏の豊後入国については、建久４年（1193）とも同七年ともいわれるが、初代能直・二代親秀が守護として入国した事実は認められない。文献上では、能直・親秀の庶子家が豊後に入り土着することが知られる。大友惣領家として最初に豊後に入ったのは、第三代頼泰である。頼泰は、これに先だつ仁治３年（1242）に「新御成敗状」二十八か条、続く寛元２年（1244）には「追加」十六か条を制定して豊後国統治の基本方針を表明した。「新御成敗状」には「府中地を給わる輩の事」をはじめとして、道祖神社の存続の禁止、町人の押し買いの禁止、政庁に通じるハレの大路に面した産屋の禁止、府中の墓所の禁止などが示されており、これらの記述から整然と整備された府中の状態が想定される。頼泰は鎮西探題として、元寇で豊後国の御家人を従い奮戦する。平成10年から本格化した戦国時代の府内推定地の発掘調査では、今のところ頼泰の時期の遺構・遺物、当該期の守護所等に関連する遺構の検出事例はなく、いまだ所在が不明であるとともに、「新御成敗状」から想定される整然としたまちの存在は確認されていない。

守護所についての記録は、相国寺の禅僧瑞渓周鳳の日記である『臥雲日件録』享徳４年（1455）正月

条に登場する。大友氏第十五代親繁の館の様子として紹介されており、ここに示された建物は、茅や茨で屋根をふき、竹を床にした極めて質素なものであったと記されている。前述の発掘調査では、万寿寺の創建（徳治元年：1306）以降の遺構・遺物の出土が顕著になることから、15世紀後半以降に相当する守護所は、南北2.1㎞、東西0.7㎞の範囲に所在する可能性が示唆される。

元寇後、全国は後醍醐天皇の号令により南北争乱の渦に巻き込まれる。大友氏第六代貞宗の治世である。貞宗はこのような情況に際し、巧みに両勢力を天秤にかけ、当時「首鼠両端」と評されながら大友家の進む道を模索した。また、これまでの慣習を改め嫡子単独相続の形態へと切り替えたのもこの貞宗の代である。続く第七代氏泰には、長兄であった貞順、四男の氏宗が氏泰に反発し、これに加えて一族の不満分子であった入田・出羽氏と賀来・敷戸氏などの大分郡の武士が加担することで、守護所攻略を目ざして霊山寺にこもるという事件が勃発した。

北朝方の九州の拠点であった豊後に、懐良親王の率いる南朝軍が浸入したのは第八代氏時の時である。当初の豊後への浸入では、大友軍は上野周辺にて善戦するが、なすすべもなく降伏することになる。その後、大友氏が北朝方に復帰することを契機に再三にわたり攻防がおこなわれるが、その舞台は高崎山城となる。難航不落をほこる高崎山城の戦闘では大友氏側は一度も敗れることはなかった。この間、大友家の当主は、一時南朝方に翻った第九代氏継から第十代親世の治世へと移行していった。親世は九州探題今川了俊に協力を惜しまなかったという。

その後、親著からは、親世の子持直へと家督が移ることを契機に氏継系・親世系の交替相続がおこなわれるようになる。こうした相続形態が親著の長男孝親による三角畠の乱を生み、そこに中国地方の雄、大内盛見の介入を許すことになるのである。大内盛見は、大友氏が領有していた博多港（息浜）を拠点とする対外貿易の利権をめぐって、大友氏第十二代持直と争い、大友氏側が勝利する。

戦国時代の開始を象徴する応仁の乱の当時、大友親繁・政親父子は豊後において中央の喧騒をよそに領国支配を進展させていく。続く親治・義長の代には、分国統治の末端機構である政所が各地に設置され、さらに、地域政治の責任者として方分（方面別政治責任者）が置かれるようになる。また、分国の直接的支配を強化するための基本である分国法についても、義長によって「条々」という形で定められた。これには家臣団集住についての記載も認められる。

大友氏第二十代義鑑から第二十一代義鎮への家督の移譲は、天文19年（1550）、大友家最後の内紛である「二階崩れの変」によっておこなわれた。義鎮が家督を継いだ翌天文20年（1551）７月には、ポルトガル船が日出沖に来航し、同年８月には義鎮の招きにより、フランシスコ・ザビエルが周防山口から府内を訪れた。

宗麟は天正６年（1578）に受洗してドン・フランシスコと称するようになる。同年、日向伊東氏の本拠地の奪還とキリスト教理想国家建設を目的に日向侵攻をおこなうが、鹿児島の島津軍に大敗する。豊後府内の発掘調査では、ちょうど16世紀中頃から遺構、遺物の出土が量、質ともに増大する傾向にあり、特に中世大友府内町跡第３次調査SX210とされる甕蔵跡では、備前焼大甕を５個２列に計10個体を埋設しており、内部からは、火災処理に伴う多量の焼土とともに、中国南部、東南アジアをはじめとする輸入陶磁器が大量に出土している。これはこれまで文献史料によって示されていた南蛮貿易の実態を具体的に示す物証として重要である。このような南蛮貿易によって府内にもたらされた陶磁器類は、量の多寡はあるものの、府内全域で出土するという傾向を示し、特に華南三彩と呼ばれる中国南部で製作された

軟質の施釉陶器の出土が目立つ。また、中国南部産の焼締陶器擂鉢や鉢などの出土も一定量認められ、府内に来た中国人が日常使用品として持ち込んだとする指摘もある。大友館については、推定域の南東部において、東西幅66m、南北16m以上の池を伴う庭園跡が整備されるのも16世紀後半の時期である。

府内でのキリシタンの布教に関連するものには、各種記録から住院の建設・育児院の設立・病院あるいは教会の建設がおこなわれたとされるが、これらに関する調査データは今のところ得られていない。

いわゆる府内中枢の周辺に目を転じると、南に位置する古国府町口遺跡では、16世紀後半に比定される間口22m程度の区画を伴う屋敷地が確認されており、武家地の可能性が考えられている。また、大分川の対岸には守岡遺跡があり、ここでは柵列や溝によって区画された掘立柱建物跡群が検出されている。守岡遺跡は比高60mの独立台地上に立地しており、『豊後国志』にみえる「守岡堡」にあたると想定される。さらに、守岡遺跡の大分川を若干遡った対岸部には守岡遺跡と同様の立地を示す尼ケ城遺跡が所在する。ここでは、繭形分銅の他、「天文年造」銘のある木瓜碗の出土が認められている。

南蛮貿易で栄えた豊後府内であるが、天正14年（1586）には島津軍の豊後侵入を許し、壊滅的なダメージを受ける。同年12月７日から12日におこなわれた鶴賀城をめぐる攻防戦では、城主・利光宗魚や秀吉の命により参戦していた四国勢の長宗我部信親らが戦死し、大友方は大敗する。府内はこの時戦火に巻き込まれ大半が灰燼に帰すのである。 鶴賀城では、多くの日常雑器類に混じり、茶器が出土している他、ベトナム産白磁印花文碗なども採集資料の中に認められる。 秀吉により豊後一国が安堵された大友義統は、文禄元年（1592）３月に六千名の士卒を率い、三番手黒田長政の指揮のもとに朝鮮に出兵するが、小西行長の援軍要請に対応できなかったという理由により知行を没収され、義統は毛利輝元に預けられる。こうして初代能直以来二十二代続いた大友氏の豊後支配は終焉する。大友義統は秀吉の没後に一度は赦免されるが、関ケ原合戦では西軍について豊後に入るものの、石垣原の合戦にて敗北を喫し、ついに大友家再興の夢を果たすことができなかった。以後、江戸時代には幕府の儀式をつかさどる高家として、義統の子正照の血統が仕えることになる。（坪根）

参考文献

大分市史編纂委員会　1987 『大分市史』中巻　大分市

大分市歴史資料館　1992 「明治時代字図に見る大友氏時代府内町」『開館５周年記念シンポジウム戦国大名大友宗麟－その実像にせまる』付図

大分市歴史資料館　1993 「明治時代字図に見る大友氏時代の府内町」『歴史資料館ニュース』21

大分市教育委員会・中世都市研究会　2001『南蛮都市・豊後府内』都市と交易

木村幾多郎　1997 「高国府・勝津留考」『Funai 府内及び大友氏遺跡関係総合調査研究所年報』Ⅴ　大分市歴史資料館

木村幾多郎　2001b 「豊後府内城下町移転と旧府内町」『大分・大友土器研究会論集』 大分・大友土器研究会

讃岐　和夫　1985 「豊後国府推定地周辺の発掘調査　大分市古国府・羽屋地区の近年の調査から」『大分縣地方史』117　大分県地方史研究会

玉永　光洋　1997 「豊後府内の形成と寺院」『中世都市研究会』４　新人物往来社

渡辺　澄夫　1992 「講演記録 ［大友氏と豊後］」『Funai 府内及び大友氏関係総合調査研究年報』Ⅰ　大分市

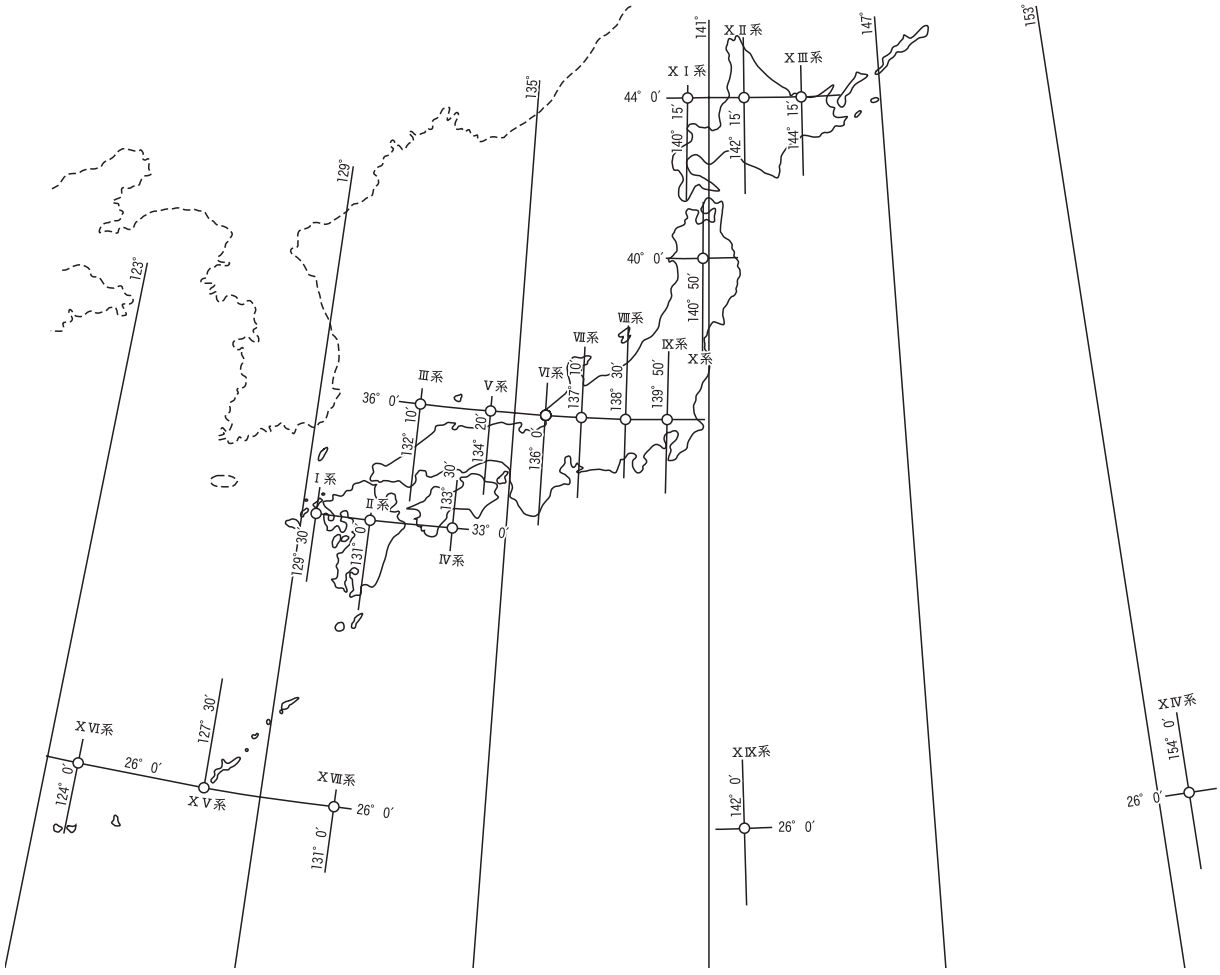
第３節　調査の方法

発掘調査については、表土は原則として機械力を使用し、除去、搬出をおこなった。

調査区の設定にあたっては、国土座標第Ⅱ座標系を使用し、下記の図郭に基づき、調査区内に４ｍ方眼の地区杭を設定しグリッド番号を決定した。こうして設定され、設置されたグリッドピン（基点）は調査終了段階まで使用され､図面の作成以外にも遺物取り上げの際の標記や調査単位等にも使用される。

遺構検出後は、このグリッドを基準に１:100の遺構配置略図を作成する。これに頭にＳを冠した遺構番号が付され、遺構番号として、遺物取り上げ、写真ボード、遺構実測図等の整理番号となる。これに対応して遺構番号台帳が作成され、各遺構に関する所見を記入していく。各遺構の性格付に関しては、調査途上では保留とし、最終的には調査終了後に決定する。その段階では、遺構番号は調査時のままとし、遺構種別により遺構の個別の性格を表記している。たとえば、現場段階でＳ80と付された遺構が、調査終了段階に竪穴住居跡と判断された場合SH080と表記されることになる。

個別遺構の完掘図面、遺物出土状況図面等については、対象ケースによるものの、原則的には１：20を基本とし作成している。また、遺跡の全体完掘図面に関しては、一定程度の遺構占有率と調査面積のある場合には、航空写真測量図化を積極的に利用している。



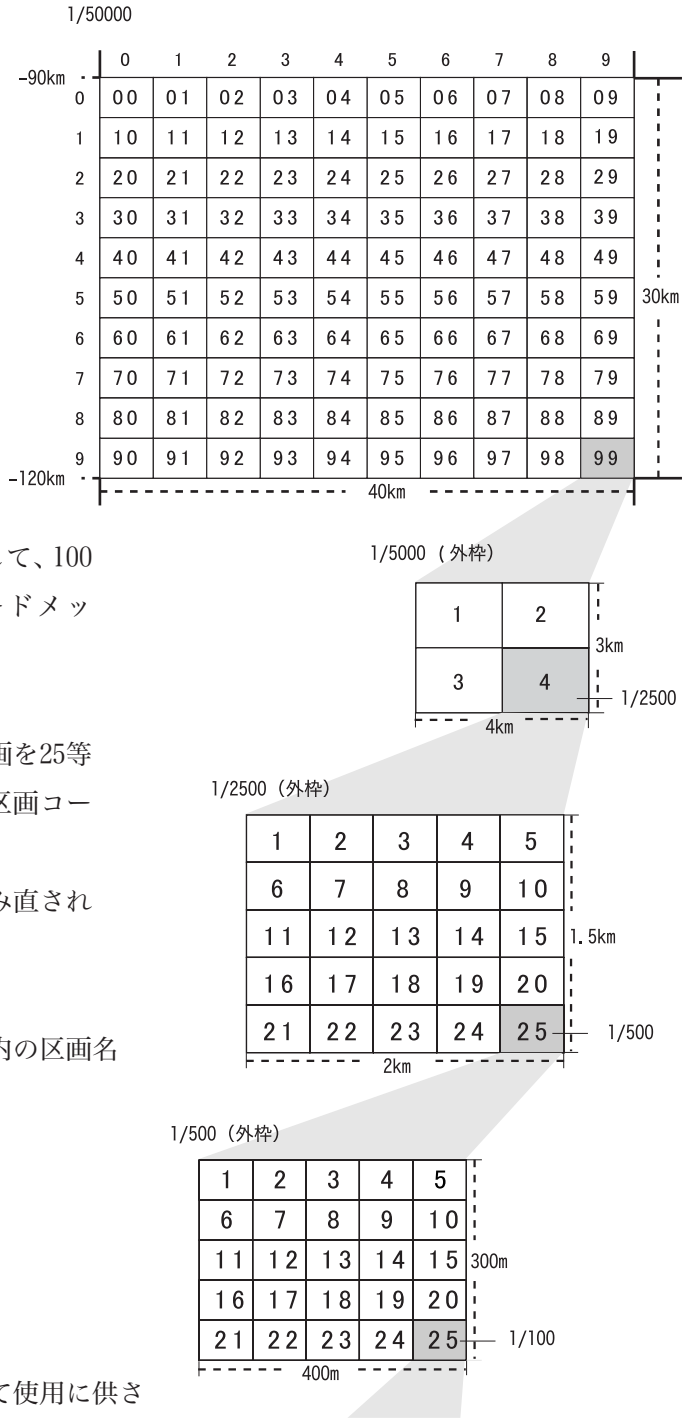
第９図　平面直角座標系

【図郭表示についての表記】

位置の基準は、平面直角座標系（昭和43年建設省告示第3059号）を用いて表示し、以下に示す区分単位により、大分市域を４ｍメッシュで区切った上での標記をおこなう。大分県の場合、平面直角座標系は第Ⅱ系であり、この座標系はさらに、各座標系のＹ軸及びＸ軸を基準として、南北300㎞、東西160㎞を含む区域を30㎞×40㎞の長方形に分割し、その区画はアルファベットの大文字の組み合わせにより表示される。大分市の場合、大半がこの区画のＪＦであり、当然ながら、下郡遺跡群が所在する地域の区画コード（第１次区画コードメッシュ）もＪＦとなる。

第１次区画コードメッシュは30㎞×40㎞の長方形であることはすでに述べたが、この座標系内をさらに100等分し、次図に示すようなアラビア数字で表示する。これにより示される図郭は、5000分の１の国土基本図に一致することになり、これをさらに４等分することで、国土基本図の2500分の１の図郭となり、アラビア数字で区画番号を定める（第２次区画コードメッシュ）。

次にこの2500分の１の図郭を25等分し、500分の１の図郭を生成し、これにアラビア数字の図郭番号を付し、これをさらに25等分して、100分の１の図郭を作成する（第３次区画コードメッシュ）。



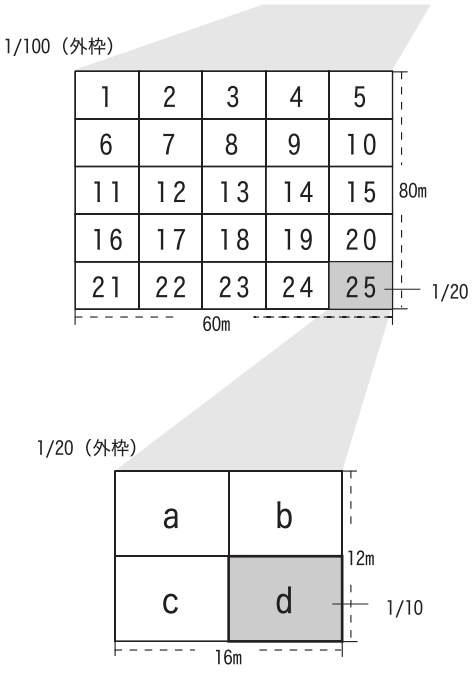
さらに、この100分の１の図葉に相当する区画を25等分したものが、20分の１の図郭となる（第４次区画コードメッシュ）。

以上の各コードメッシュは以下のように読み直される。

第１次区画コードメッシュ
　第１次地域区画：座標系番号と座標系内の区画名
第２次区画コードメッシュ
　第２次地域区画：国土基本図番号
第３次区画コードメッシュ
　第３次地域区画：遺跡図面番号
第４次区画コードメッシュ
　第４次地域区画：詳細遺跡図面番号

この区画コードは遺跡の図面整理番号として使用に供さ

れ、その際には、第４次区画コードメッシュにおいて、20分の１遺跡図面の図葉に相当する部分を４等分し、アルファベットの小文字で標記されることになる。また、このコードは現場段階においては、調査グリッド番号に準用される。すなわち、第３次区画コードメッシュにより生成された100分の１図郭を単位として、これを４ｍメッシュで区切り、北西角を基点としてアルファベットと数字による組み合わせにより標記される。この場合、４ｍメッシュ12マスの単位が20分の１の図郭と一致することになる。

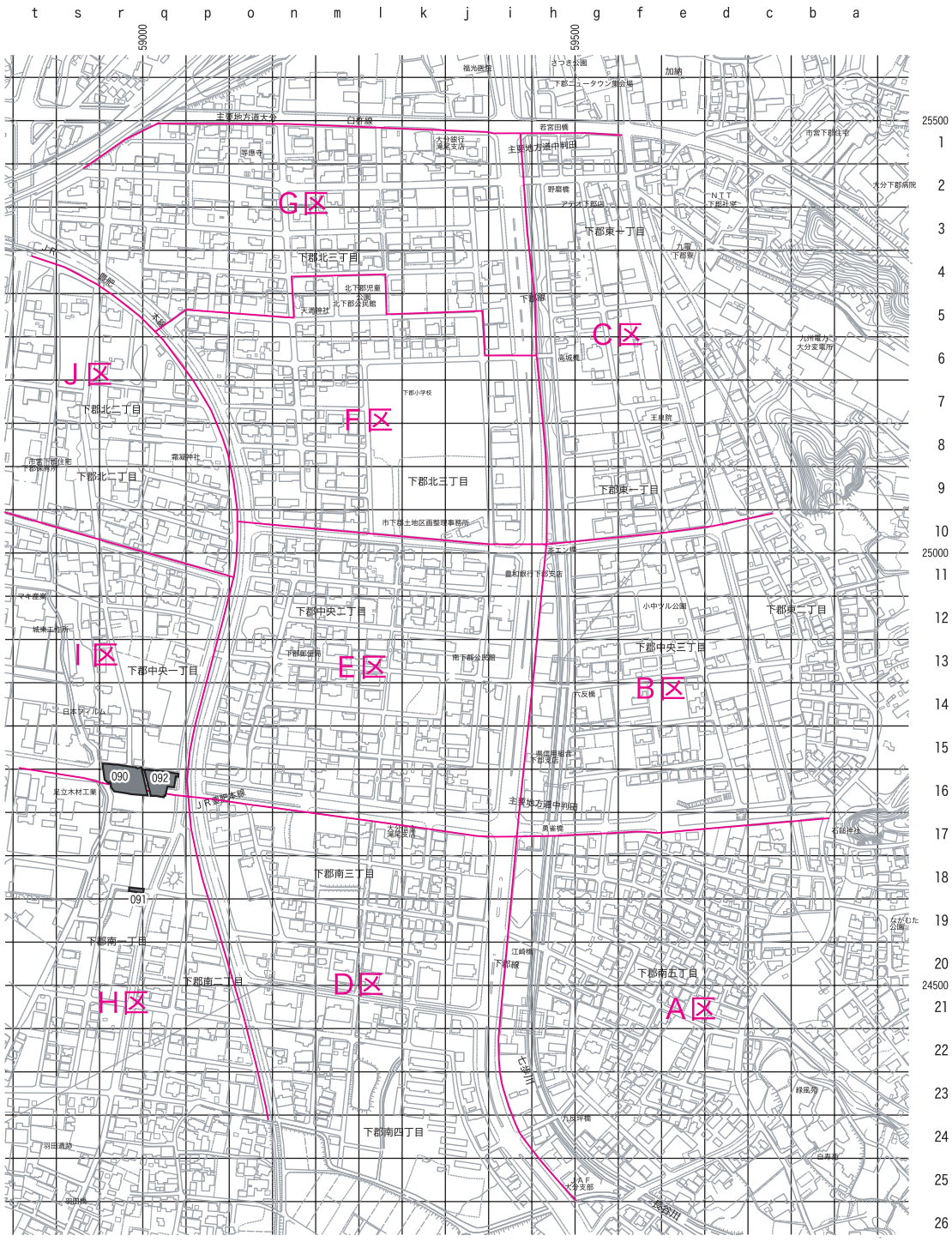


◎調査グリッド　(1/100　4m メッシュ)

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
A																				
B			1				2				3				4				5	
C																				
D																				
E			6				7				8				9				10	
F																				
G																				
H			11				12				13				14				15	
I																				
J																				
K			16				17				18				19				20	
L																				
M																				
N			21				22				23				24					
O																				

12m
16m

※外枠は１ /100 の図郭である。（範囲は60m×80mである。）
一つの太い枠は１ /20の図郭と番号である。（範囲は12m×16mである。）
一つの細い枠は４ｍピッチの杭幅を表している。
杭の番号は北西よりＡ－０として４m置きに増える。
グリッドは北西にあたる杭番号と同じである。
図郭はいづれも60cm×80cmである。



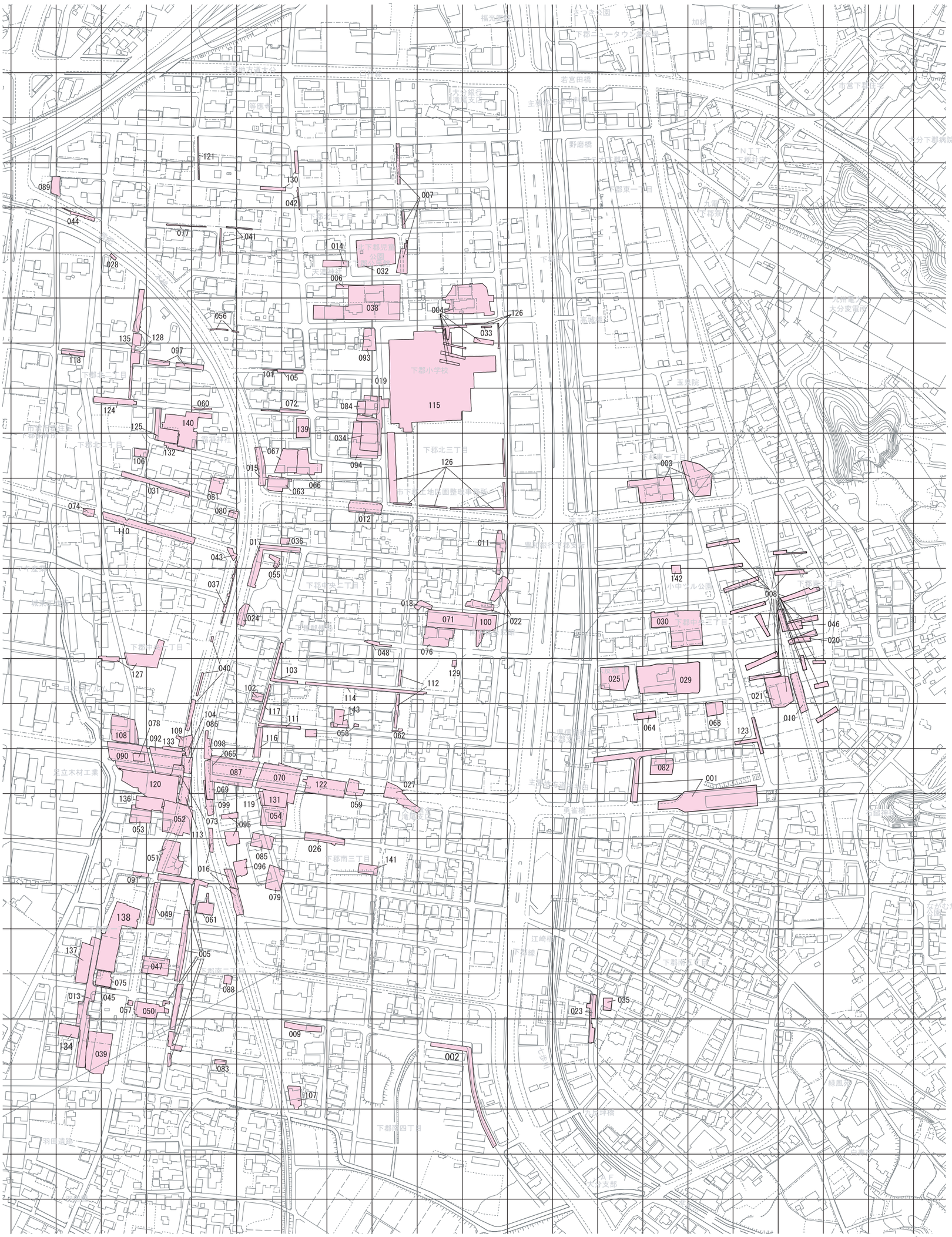
調　査　地	調査面積(㎡)	調　査　期　間	調 査 担 当 者
下郡遺跡群第90次調査地点	1315	1997年４月２日～1997年８月４日	坪根伸也、幸しのぶ
下郡遺跡群第91次調査地点	80	1997年３月３日～1997年３月28日	坪根伸也、林　潤也
下郡遺跡群第92次調査地点	850	1997年５月20日～1997年８月３日	坪根伸也、中西武尚

第10図　調査グリッド図（1/7, 500）

t s r q p o n m l k j i h g f e d c b a

59000 59500

25500 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 25000 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 24500 21 22 23 24 25 26



第11図　下郡遺跡群調査地点位置図（1/4000）

第６表　下郡遺跡群調査地点一覧

調査次数	調　査　地　点　名	面　積	調査年度
1	Ｂ区ｂ～ｇ-16・17地点	2130	昭和62年度
2	Ｄ区ｊ・ｋ-21～24地点	800	昭和62年度
3	Ｃ区ｅ～ｇ-9・10地点	2600	昭和62年度
4	Ｆ区ｊ・ｋ-5～7地点	1900	昭和62年度
5	Ｈ区ｐ・ｑ-18～22地点	2007	昭和63年度
6	Ｆ区m-5地点	120	昭和63年度
7	Ｇ区Ｉ-2～5地点	530	昭和63年度
8	Ｂ区トレンチ調査第1～第26トレンチ	2399	昭和63年度
9	Ｄ区ｎ-22地点	418	昭和63年度
10	Ｂ区ｃ-14・15地点	383	昭和63年度
11	Ｅ区ｊ-11・12地点	331	昭和63年度
12	Ｅ区Ｉ・m-10地点	450	昭和63年度
13	Ｈ区ｓ-20～23地点	2500	平成元年度
14	Ｆ区m・ｎ-5地点	200	平成元年度
15	Ｆ区ｏ-9・10地点	500	平成元年度
16	Ｄ区ｏ・ｐ-17～19地点	2200	平成元年度
17	Ｅ区ｎ・ｏ-11・12地点	700	平成元年度
18	Ｅ区ｋ・Ｉ-12地点	150	平成元年度
19	Ｆ区Ｉ-8・9地点	700	平成元年度
20	Ｂ区ｃ-13地点	240	平成元年度
21	Ｂ区ｃ・ｄ-14・15地点	1600	平成元年度
22	Ｅ区ｊ-12・13地点	791	平成２年度
23	Ａ区ｈ-21・22地点	850	平成２年度
24	Ｅ区ｏ-12・13地点	210	平成２年度
25	Ｂ区ｇ-14地点	900	平成２年度
26	Ｄ区m・ｎ-17・18地点	360	平成２年度
27	Ｅ区ｋ・Ｉ-16・17地点	450	平成２年度
28	Ｊ区ｒ-5地点	52.5	平成２年度
29	Ｂ区ｅ～ｇ-14地点	2800	平成３年度
30	Ｂ区ｅ・ｆ-13地点	2500	平成３年度
31	Ｊ区ｑ・ｒ-9・10地点	500	平成４年度
32	Ｆ区Ｉ・m-4・5地点	1400	平成４年度
33	Ｆ区ｊ-6地点	24	平成４年度
34	Ｆ区Ｉ・m-8・9地点	1000	平成４年度
35	Ａ区ｇ-21地点	6	平成４年度
36	Ｅ区ｎ-11地点	16	平成４年度
37	Ｉ区ｐ-11～13地点	110	平成５年度
38	Ｆ区Ｉ～ｎ-5・6地点	3196	平成５年度
39	Ｈ区ｒ・ｓ-22・23地点	1200	平成５年度
40	Ｉ区ｐ・ｑ-13～15地点	246	平成５年度
41	Ｇ区ｏ・ｐ-4・5地点	81.5	平成５年度
42	Ｇ区ｎ-3・4地点	48	平成５年度
43	Ｉ区ｐ-11地点	70	平成５年度
44	Ｇ区ｓ-４地点	120	平成５年度
45	Ｈ区ｒ・ｓ-21地点	41	平成５年度
46	Ｂ区ｃ-12・13地点	310	平成５年度
47	Ｈ区ｑ・ｒ-20・21地点	589	平成５年度
48	Ｅ区ｋ～m-13地点	96	平成５年度
49	Ｈ区ｑ-19地点	350	平成６年度
50	Ｈ区ｑ・ｒ-21地点	481	平成６年度
51	Ｈ区ｑ-18地点	936	平成６年度
52	Ｈ区ｑ-17地点	1088	平成６年度
53	Ｈ区ｒ・ｑ-17地点	460	平成６年度
54	Ｄ区ｎ・ｏ-17地点	203	平成６年度
55	Ｅ区ｏ-11地点	110	平成６年度
56	Ｆ区ｏ・ｐ-6地点	298	平成６年度
57	Ｈ区ｒ-21地点	16	平成６年度
58	Ｅ区m・ｎ-15地点	256	平成７年度
59	Ｅ区m-16・17地点	236	平成７年度
60	Ｊ区ｐ-8地点	46	平成７年度
61	Ｈ区ｐ-19地点	247	平成７年度
62	Ｅ区Ｉ-15地点	23.4	平成７年度
63	Ｆ区ｎ・ｏ-10地点	742.5	平成７年度
64	Ｂ区ｆ・ｇ-15地点	120	平成７年度
65	Ｅ区ｐ-16地点	93.3	平成７年度
66	Ｆ区ｎ・ｏ-9地点	1062	平成７年度
67			
68	Ｂ区ｅ-15地点	251	平成７年度
69	Ｅ区ｐ-16・17地点	405	平成７年度
70	Ｅ区ｎ・ｏ-16地点	1655	平成７年度
71	Ｅ区ｊ・ｋ-13地点	1050	平成７年度
72	Ｆ区ｎ・ｏ-8	113.5	平成７年度

調査次数	調　査　地　点　名	面　積	調査年度
73	Ｈ区ｑ-16地点	223	平成７年度
74	Ｉ区ｓ-10地点	100	平成７年度
75	Ｈ区ｒ・ｓ-20・21地点	300	平成７年度
76	Ｅ区ｊ・ｋ-13地点	660	平成７年度
77	Ｇ区ｐ・ｑ-3・4地点	315	平成７年度
78	Ｉ区ｒ-16地点	100	平成７年度
79	Ｄ区ｏ-18・19地点	468	平成７年度
80	Ｊ区ｐ-10地点	84	平成７年度
81	Ｊ区ｐ-9・10地点	238	平成７年度
82	Ｂ区ｆ-16地点	161.4	平成８年度
83	Ｈ区ｐ-22・23地点	65	平成８年度
84	Ｆ区m-8地点	120	平成８年度
85	Ｄ区ｏ-17・18地点	345	平成８年度
86	Ｉ区ｑ-16地点	339	平成８年度
87	Ｅ区ｏ・ｐ-16地点	1596.6	平成８年度
88	Ｈ区ｐ-21地点	300	平成８年度
89	Ｇ区ｓ・ｔ-3地点	210	平成８年度
90	Ｉ区ｑ・ｒ-15・16地点	1315	平成９年度
91	Ｈ区ｑ・ｒ-18地点	80	平成８年度
92	Ｉ区ｑ-16地点	850	平成９年度
93	Ｆ区Ｉ・m-6・7地点	467	平成９年度
94	Ｆ区Ｉ・m-8・9地点	1576	平成９年度
95	Ｄ区ｏ・ｐ-17・18地点	300	平成９年度
96	Ｄ区ｏ・ｐ-18地点	215	平成９年度
97	Ｊ区ｐ・ｑ-7地点	327	平成９年度
98	Ｅ区ｐ-15・16地点	207	平成９年度
99	Ｄ区ｐ-16・17地点	313	平成９年度
100	Ｅ区ｊ-13地点	543	平成９年度
101	Ｆ区ｏ-7地点	25	平成９年度
102	Ｅ区ｏ-14地点	200	平成９年度
103	Ｅ区ｎ・ｏ-13・14地点	270	平成９年度
104	Ｉ区ｑ-15・16地点	150	平成９年度
105	Ｆ区ｏ・ｎ-7地点	100	平成９年度
106	Ｊ区ｒ-9地点	120	平成10年度
107	Ｄ区ｎ-23地点	305	平成10年度
108	Ｉ区ｒ-15地点	771	平成10年度
109	Ｉ区ｑ-15地点	183	平成10年度
110	Ｉ区ｐ・ｒ-10・11地点	1434	平成10年度
111	Ｅ区ｎ・ｏ-15地点	165	平成10年度
112	Ｅ区Ｉ-14・15地点	160.5	平成10年度
113	Ｈ区ｑ-16・17地点	301	平成10年度
114	Ｅ区ｋ～ｎ-14地点	451	平成10年度
115	Ｆ区ｊ～Ｉ-6～8地点	8740	平成10・11年度
116	Ｅ区ｏ-15・16地点	246	平成10年度
117	Ｅ区ｏ-14・15地点	120	平成10年度
118	Ｊ区ｓ-7地点	149	平成10・11年度
119	Ｄ区ｏ-16・17地点	150	平成11年度
120	Ｈ区ｑ・ｒ-16・17地点	1600	平成11年度
121	Ｇ区ｐ-2・3地点	189	平成11年度
122	Ｅ区m・ｎ-16・17地点	800	平成11年度
123	Ｂ区ｄ-15・16地点	158	平成11年度
124	Ｊ区ｒ・ｓ-8地点	360	平成11年度
125	Ｊ区q-8・9地点	550	平成12年度
126	Ｆ区ｊ～Ｉ-6～10地点	1150	平成12年度
127	Ｉ区ｑ～ｓ-13・14地点	840	平成12年度
128	Ｊ区ｒ-5・6/r-7・8地点	523	平成12年度
129	Ｈ区ｋ-14地点	33	平成12年度
130	Ｇ区ｎ・ｏ-2・3地点	212	平成12年度
131	Ｄ区ｎ・ｏ-16・17地点	442	平成12年度
132	Ｊ区ｑ-9地点	188	平成12・13年度
133	Ｉ区ｑ-15地点	79	平成13年度
134	Ｈ区ｓ-22地点	416	平成13年度
135	Ｊ区ｒ-6・7地点	152	平成13年度
136	Ｈ区ｑ・ｒ-17地点	417	平成13年度
137	Ｈ区ｓ-20・21地点	508	平成13年度

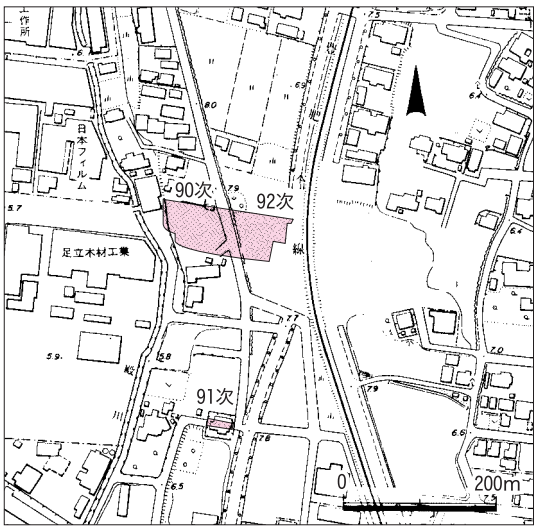
第Ⅲ章　調査の概要

第１節　下郡遺跡群第90次調査

（１）はじめに

調査地は大分市下郡字辻に所在する。調査は平成９年（1997）４月２日～８月４日まで実施し、調査は坪根伸也、幸しのぶが担当した。総調査面積は1315㎡である。調査段階においては、(有) 埋蔵文化財サポートシステムに調査補助業務を委託した他、全体図は（株）九州航空に写真測量を委託し、そのデータから作成した。

今次の調査は、都市計画街路庄の原・佐野線街路築造に伴う事前調査とし実施した。調査対象地の西側部分には、比高2.5m程度の段差が存在し、既往の調査データにより旧河道が存在することが判明している。この段部分には近世段階（18世紀）の人工的な造作（090SX004）が加えられており、階段状のテラスが形成されている。



第12図　第90・91・92次調査地点位置図（1/5000）

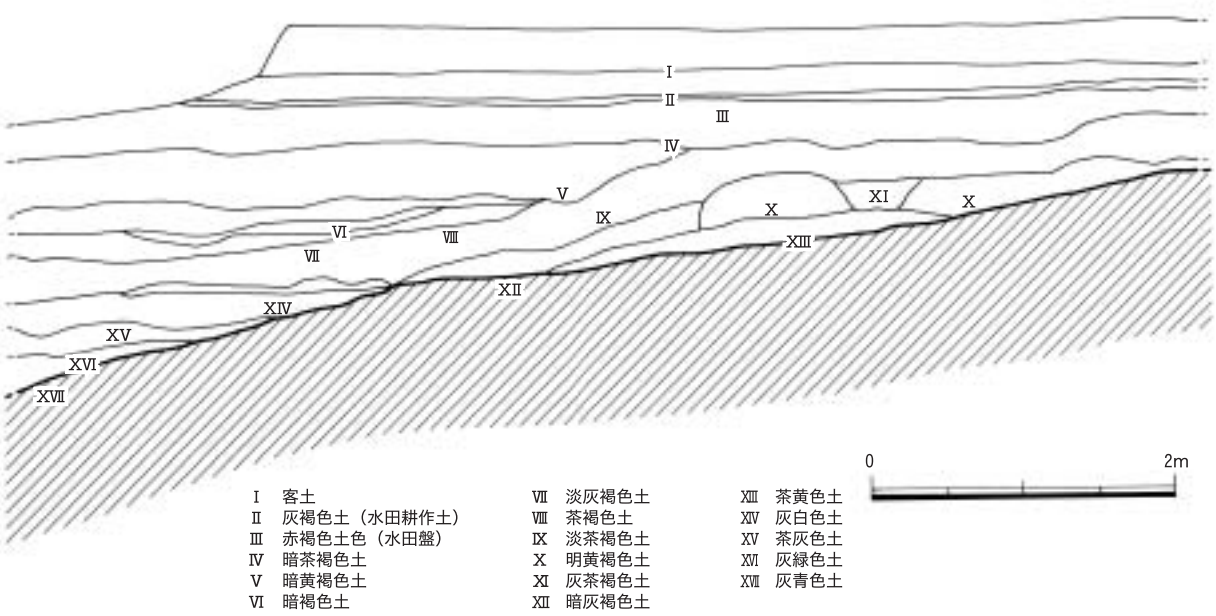
遺構は090SX004により一部欠失しているものの、東側部分に広範に分布しており、旧水田耕作土直下にあたる遺構検出面標高は約5.８ｍを測る。

調査は、機械力により約0.6mの旧水田耕作土を除去した後、あらかじめ設定しておいたグリッド単位に遺構検出作業を実施した。検出した遺構は、弥生時代～近世のものがあり、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝状遺構・土器焼成坑などの多種多彩な内容を備えている。出土遺物には弥生土器・土師器・輸入陶磁器類・中近世陶磁器などがある。

（２）土　層

約0.6mの水田耕作土下に明茶褐色の硬質の土層（水田基盤土層）が存在し、その直下に暗茶褐色土層を認めることができる。遺構はこの土層の最下面、すなわち、本地点の基盤土層である黄茶褐色土層の上面において検出することができるが、調査区西側が近世段階の造作（090SX004）によって切られており、この部分については遺構が欠失する。

第13図には調査区北壁の西側部分の土層断面図を掲載しているが、図中の第１層から第４層までが、第90次地点に通有な検出面上位の堆積土層であり、その下位の土層については、090SX004の埋土となる。090SX004は調査区の西端にあり、階段状に落ち込んでいる。下層には砂が堆積しており、最下層には砂に礫が交ざっている部分も認められた。検出面からの深さは最深部で1.8～2.0mを測る。階段状の落ち込みは自然に形成されたとは考えがたく、人為的に掘削、造成したものと考えられる。下層に砂や礫が混入し、基盤土層中にも同様の様相が認められることから調査区の西側部分には旧河道が存在すると考えられる。現況地勢もこの状況をよく示しており、大分川の方向に向かって次第に低くなっていく状況を看取することができる。埋土中から18世紀後半から幕末にかけての陶磁器が出土しており、土層観察



第13図　基本土層断面図（1/50）

ならびに遺物の出土状況から少なくとも18世紀後半以降には２度にわたって埋めたてられ、その後幕末段階にもう一度埋め立てられている状況を想定することができる。また、幕末段階の埋め立て土からは８世紀代の土師器、須恵器が多量に出土しており、当該遺構の分布する周辺部分を削平して埋め立てたものと考えられる。近世における土地開発の一端をうかがい知ることのできる資料といえよう。



第14図　調査風景



第15図　遺構配置図（1/250）



遺構記号変更表	
年報	本報告書
SB005	SB178
SB006	SB294
SB007	SA007
SK057	SX057
SK175	SX175

※本報告において遺構記号の表記が、調査当時及び、大分市年報（註1報告時とは異なるので、上記の変更表をもって訂正する。

註1　大分市教育委員会　1998『大分市埋蔵文化財調査年報』 vol.9　1997年度

第16図　全体遺構図（1/250）

第７表　遺構一覧表①

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
001	090SB-001	須恵器片、土錘		F・G-1
002	090SB-002	土器片		G-
003	090SB-003	陶胎染付口縁部、染付片、土器片	13C 前後	F・G-1・0
004	090SX-004	陶胎染付、外青磁染付、土師器、須恵器	幕末以降	F ～ K-1・2
005	090SX-005	須恵器片、骨片	14C 以降	H・I-2・3
006	090SX-006	須恵器蓋	8C 中頃以降	I-2
007	090SA-007	底部、土師器坏口縁部	8C 中頃～後半	J-2
008	090SB-008	土器片	8C 中頃～後半	K-2
009	090SB-009	土器片	13C 前後	K-2
010		土器片		L-2
011	090SB-011	須恵器蓋、須恵器甕胴部、須恵器坏底部、須恵器片、土師器蓋、土師器坏 、土師器坏口縁部、土師器片、豊後大分形甑、円面硯脚部、企救型甕、焼塩壺、焼塩壺口縁部、胴部 、土器片	090SB-011	L・M・N-2・3・4
012		土器片		L-2
013		土器口縁部、土器片		M-2
014		須恵器甕片、土器片		M-2
015		須恵器口縁部、土師器口縁部、土器片		J・K-2
016				K-2
017	欠番			
018	090SX-018	土器片		L-2
019	090SX-019	磁器、須恵器片		M-2
020	090SH-020	壺形土器、甕形土器、他	弥生時代終末～古墳時代初頭	H・I-3・4
021				
022	欠番			
023		土器片		I-4
024		土師器口縁部		I-4
025		須恵器坏、土師器胴部片		I-4
026		土器片		H-3
027	欠番			
028	欠番			
029	欠番			
030	欠番			
031	欠番			
032	欠番			
033	欠番			
034	欠番			
035				M-3
036		須恵器片		H-3
037		土器片		H-3
038		弥生土器		H・I-4
039	090SX-039			
040	090SX-040			
041		土器片		L-3
042		土師器口縁部		L-3
043		土器片		L-2
044	欠番			
045		土器片		M-3
046		土師器口縁部、胴部片		M-3
047	欠番			
048	090SX-048	土師器坏、須恵器蓋、土師器蓋、土器片		L-3
049	欠番			
050	欠番			
051	欠番			
052	欠番			
053	欠番			
054		土器片		M-3
055		須恵器甕胴部片、土器片		H-3
056		土器片		I-4

第８表　遺構一覧表②

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
057	090SX-057	直口壺、土器片		J・K-2
058		土器片		L-3
059	090SX-059	須恵器片、土師器坏	8C 中頃	H-3・4
060	090SX-060	須恵器甕片、須恵器蓋片、土師器蓋片、土師器片		L・M-3・4
061	欠番			
062	欠番			
063		須恵器甕、土師器坏口縁部		N-3
064	欠番			
065		土器片		N-3・4
066		須恵器片		M・N-3
067		土器片		M-3
068		土器片		M-3
069	090SH-069	ガラス小玉、弥生土器底部、下城式甕口縁部	弥生後期前葉～中葉	G・I-3・4
070		土器片		H-4
071		弥生後期複合口縁壺口縁部		H-3
072		土器片		L-1
073		土器片		L-1
074		土器片		L-2
075				H-2
076	090SD-076	須恵器蓋、須恵器坏、須恵器甕胴部片、土師器蓋、土師器坏、土錘	9C 初頭	F・G-2 ～ 7
077		土器片		
078	090SB-078	須恵器皿、須恵器片、甕形土器口縁部、土器片		F-2
079	090SX-079			G・H-6・7
080	090SX-080	土師器小皿、土師器蓋		G-6
081	090SX-081	土師器小皿、土器片		G-7
082	090SX-082	土器片		G-7
083		土器片		G-7
084		土師器蓋、土器片		G-7
085	090SX-085		8C 中頃～後半	G-8
086	090SX-086	須恵器高坏脚片、土器片		F・G-5・6
087	090SX-087	土師器片		
088	090SX-088	須恵器胴部片、土師器小皿		G-6
089	090SX-089			G-7
090	090SX-090	土器片		F・G-6・7
091		土器片		
092		土器片		G-8
093		土器片		G-8
094	090SH-094	甕形土器	古墳時代前期初頭～前半	K-3
095	090SX-095	土師器片、企救型甕、甑把手、東北部九州系甕口縁部		H-7
096		土器片		F・G-2・3
097		土師器坏口縁部		H-8
098		土器片		H-8
099		土器片		H-7
100	090SX-100	土器片		H-7
101	090SX-101	土器片		G・H-6・7
102	090SX-102	土器片		G・H-6・7
103	090SX-103	土器片		H-7-7
104	090SX-104			H-6-6
105	090SX-105	土器片		G・H-5・6
106	090SX-106	須恵器皿		G・H-5・6
107	090SX-107			G・H-5・6
108	090SX-108	須恵器坏身、土師器片		H-6
109		土師器		H-6
110		土器片		H-7
111				H-7
112				I-7
113	090SX-113			I-7
114		豊後大分形甑把手	8C 後半	I-7

第９表　遺構一覧表③

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
115	090SX-115	企救型甕	8C後半	I-7
116	欠番			
117				H-6
118		土師器片		I-8
119		土師器片		I-8
120		土器片		I-8
121		土器片		I-5
122		土器片		I-5
123		土師器小皿、土器片		I-5
124		須恵器片		I-5
125		土器片		I-5
126		土器片	弥生後期終末	I-3
127		土器片	弥生後期終末	I-3・4
128		土器片	弥生後期終末	I-3
129			弥生後期終末	H-3
130		土器片	弥生後期終末	I-4
131			弥生後期終末	I-3
132		土器片	弥生後期終末	I-3・4
133	090SX-133	土器片	弥生後期終末	H・I-3・4
134		土器片	弥生後期終末	H-4
135		須恵器口縁部、土師器片		I-4
136		土器片		I-4
137		須恵器蓋、土器片		H-4・5
138				J-8
139		土器片		J-8
140		土器片		
141		土器片		J-3
142		土器片		K-3
143				K・L-3
144		土器片		H-4
145				G-4
146				H-4
147				G・H-4
148				H-4
149				H-4
150				M-3
151		土器片		
152	090SX-152	土師器、土器片		I-5
153	090SX-153	土師器皿、土師器蓋ツマミ部分、豊後大分形甑	8C後半	J-5
154	090SX-154	白磁碗底部	11C後半～	J-5
155	欠番			
156		白磁片、須恵器片、土師器片		N-9
157		土師器片、土器片		O-9
158		土器片		N-9
159		土器片		N-8・9
160		須恵器片、土器片		N-9
161		土器片		N-9
162		土器片、姫島産黒曜石剥片		N-9
163		土器片		N-9
164		土器片		M-9
165		土師器坏口縁部、土器片		M-9
166		土器片		M-9
167		土器片		M-9
168		土器片		M-9
169		土師器、土器片		N-9
170		土器片		M-9
171				O-10
172		土師器、土器片		M-9

第10表　遺構一覧表④

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
173	090SH-173	須恵器片、弥生中期壺形土器、土器片、磨製石斧	古墳時代中期末前後	M・N-8・9
174				0-10
175	090SX-175	弥生複合口縁壺、土器片	弥生後期後葉～終末	K-8・9
176				J・K-8・9
177		土師器坏底部片		K-8・9
178	090SB-178	須恵器甕胴部片、須恵器片、土師器蓋、土師器坏口縁部、土師器坏底部片、土器片	13C 前後	K・L-7・8・9
179		東北部九州系甕口縁部片		K-8
180		土器片		K-8
181	090SX-181	土師器坏口縁部、土器片		K-8
182	090SX-182	須恵器甕片、土師器坏片		J・K-7・8
183		土器片		K-8
184		土師器		L-8
185		土器片		L-8
186		土器片	8C 代	L-7・8
187	090SX-187	須恵器坏身、土師器蓋		L-8
188	090SX-188			
189	090SX-189	土師器、土師器坏口縁部		L-8
190	090SX-190	須恵器片、土師器片		K・L-7・8
191		土器片		L-9
192		土師器坏口縁部、土器片		L-9
193	090SX-193	土師器片		K・L-8・9
194		土器片		L-8・9
195		須恵器坏口縁部、土師器片		L-8
196		土師器頸部～胴部片		L-8
197		土師器坏		M-9
198		土器片		M-9
199		土器片		M-8
200	090SH-200	須恵器、小型器台、砥石	古墳時代前期初頭～前半	K・L-2・3
201	090SD-201	土器片	弥生時代中期	G ～ N-2・3
202		土器片		K-3・4
203	090SX-203	土師器坏、土師器		M-2
204		土器片		M-2
205				M-2
206				M-2
207		土器片		M-3
208				M-3
209				M-2
210				M-1
211		須恵器甕、土器片		M-2
212		須恵器片、土師器蓋、土師器片		M-2
213		龍泉窯系青磁 、土師器片		M-3
214		土師器片		M-3
215		土師器片		M-3
216		白磁、須恵器片、土師器片		M-3
217		須恵器片、土師器片、土器片		M-3
218		須恵器片、土師器片		M・N-3
219	090SX-219	須恵器片、土師器蓋、土師器片		N-3
220		土師器片		N-3
221		土師器片		N-3
222		土師器片		N-3
223				L-2
224				K-2
225				L-2
226				K-2
227				K-3
228		土師器片		M-4
229		土師器片		M-4

第11表　遺構一覧表⑤

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
230		土師器片		M-4
231	090SX-231	須恵器、土器片		M-4
232		土器底部付近		M-4
233		土器片		M-4
234		須恵器甕胴部、土師器片		M-4
235		土師器片		N-4
236		土器片		N-5
237		土器片		N-5
238				M-3
239		土師器坏、土器片		N-10
240		土師器小皿、土師器片		N-10
241		土師器		N-10
242	090SX-242	土錘		O-10
243		土器片		L-7
244		下城式甕口縁部、土器片		L-7
245		土師器坏、土器片		L-7
246	090SB-246	須恵器甕頸部片、須恵器片、土器片		L・K-6・7
247		土器片		L-7
248	欠番			
249	090SX-249	土師器蓋、土師器坏		J・K-6・7
250		須恵器坏、土師器坏		K-7
251		土器片		K-7
252		須恵器蓋、土師器、土器片		K-7
253	090SX-253	青磁口縁部、土師器、土師器坏口縁部、土器片		K・L-7
254		土師器坏口縁部		K・L-7
255		弥生後期壺形土器突帯部分、土器片		J-4
256		須恵器片、土師器坏口縁部、土器片		J-4
257		須恵器蓋ツマミ部分、土師器口縁部		J-4
258	090SX-258	土師器皿、土師器坏底部片、土器片		J-4
259		土器片		J-4
260		須恵器甕、土師器蓋、土師器底部片		J-4
261		須恵器坏底部、土師器口縁部、土器片		J-4
262		須恵器甕胴部片、土師器坏口縁部		K-5
263		土器片		J-4
264		土器片		J-4
265		須恵器口縁部、須恵器甕胴部、土師器、土師器底部片		J-5
266		須恵器口縁部、土師器片		J-5
267		土器片		K-5
268		土師器口縁部、土器片		K-5
269		須恵器片		K-5
270		土器片		K-5
271	090SX-271	土師器坏底部、土器片		K-5
272		土器片		K-4
273		土師器坏底部、土師器坏口縁部 、土器片、土錘		K-4
274		須恵器片		K-4
275		土器片		K-3・4
276		土器片		J-4
277		須恵器片、土師器片、土器片		K-4
278	090SX-278	土師器口縁部		K-4
279	090SX-279	土器片		K-4
280	090SX-280	須恵器片、土器片		K-4・5
281	090SX-281			L-4
282				L-4
283				L-4
284				L-4
285	090SX-285	瓦器椀、須恵器片、土師器小皿		K・L-4
286				K-4
287	090SB-287	須恵器坏口縁部、土器片		J・K-4

第12表　遺構一覧表⑥

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
288				K-4
289	090SX-289	土器片、石		J・K-4
290				K-4
291	090SX-291	石		J・K-3・4
292				J-4
293	090SX-293	須恵器坏片、石		I・J-3・4
294	090SB-294	須恵器蓋、須恵器坏、須恵器坏口縁部、須恵器坏底部、須恵器皿、須恵器甕胴部、須恵器口縁部、土師器蓋、土師器皿、土師器坏、土師器坏底部、土師器坏口縁部、坏片、高杯脚、甑口縁部、土師質甕口縁部、、土師質甕胴部、土師器口縁部、土師器片、豊後大分形甑底部、下城式甕口縁部、企救型甕、瓦、土錘、黒曜石剥片	8C 中頃～後半	L・M・N-6・7・8
295	090SX-295	土師器小皿、土師器坏、土器片	K-6	L-4
296		土器片	K-6	K-4
297	090SX-297		K-6	K-6
298	090SB-298	白磁片、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、青磁碗口縁部、須恵器片、須恵器口縁部、土師器蓋、土師器底部片、土師器坏底部、土師器坏口縁部、土師器坏、土師器口縁部、土師器小皿、土師器片、甑把手、豊後大分形甑、土器片、土錘		K・L・M-4・5・6
299	090SX-299	須恵器片、土器片、石		J・K-5・6
300				L-6
301		土師器坏口縁部、土器片		I・J-4
302	090SX-302	土師器坏底部片、土師器小皿？、土器片		J・K-3・4
303				
304				
305				
306	090SX-306	土師器坏底部、甑把手、土器片		K・L-4・5
307		須恵器甕胴部片、土器片		K-6
308				J-5
309				K-6
310		土器片		K-5
311	090SX-311	土器片		J-4
312				J-4
313				J-4
314		土師器坏口縁部		J-4
315		須恵器片、土器片		J-4
316				J-4
317		土師器坏口縁部、土器片		K-4
318		土器片		L-4
319		土師器蓋、土師器坏底部		L-4
320		土器片		L-4
321		土器片		L-4
322		土器片		L-4
323		土器片		L-4
324		土器片		L-4
325		土器片		L-4
326		土師器坏口縁部、土器片		K-5
327		土師器坏底部		K-5
328	090SX-328	青磁碗片、土器片		K-4・5
329	090SX-329	土師器底部		K-5
330	090SX-330	須恵器片、土器片		J・K-4・5
331		土器片		K-5・6
332		土師器底部		L-5
333	090SX-333	土師器口縁部、土師器		L-5
334	090SX-334	土師器坏口縁部、土器片		L・M-5
335		土器片		L-5
336		土器片		L-5
337		土器片		L-5
338		須恵器片		L-5

第13表　遺構一覧表⑦

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
339		土器片		L-5
340		土師器口縁部、土器片		L・M-5
341	090SX-341	土師器口縁部、須恵器片		L・M-4・5
342	090SX-342	豊後大分形甑、土師器片、白磁片、土錘		K・L-5・6
343	090SX-343	企救型甕片、豊後大分形甑底部片、土師器蓋、須恵器片、土師器片		K・L-5・6
344	欠番			
345	090SX-345	土師器小皿、土師器坏、土器片		K・L-5・6
346	090SX-346	土師器蓋、土師器片、須恵器片		K・L-5・6
347	090SX-347	青磁片		K・L-5・6
348	090SX-348	須恵器甕片、須恵器片		
349	090SX-349	土器片		J・K-5・6
350	090SX-350	土器片		J・K-6・7
351	090SX-351	土器片		K・L-5・6
352	090SX-352	土器片		K・L-6・7
353	090SX-353	土器片、石		K・L-6・7
354	090SX-354	土師器坏片、土師器皿片、須恵器坏片、石		K・M-6・7
355	090SX-355			L・M-5・6
356		土器片		L-6・7
357		土器片		L-8
358		土師器、土器片		K-6
359		土師器片		K-6・7
360		須恵器片、土器片		L-6
361		須恵器片、土器片		L-6
362	欠番			
363	090SX-363	下城式甕口縁部、土器片		M-6
364				M-7
365				M-7
366		土師器口縁部、土器片		L・M-7
367	090SX-367	土師器坏片、青磁碗片、土器片、石		L-4
368		土師器坏口縁部、土器片		M-6
369	090SX-369	土器片		K-6
370		土器片		L-6
371		土師器坏口縁部、土器片		M-6
372		土器片		M-6
373		須恵器坏、土器片		M-6
374		須恵器口縁部、土師器口縁部		M-6
375		須恵器片、土師器、土器片		M-6
376				L-7
377	090SX-377	土師器蓋、土師器坏片、土器片、土錘		L・M-7・8
378	090SX-378	土師器坏、須恵器皿、須恵器坏、土師器片		K・L-7・8
379	090SX-379	土師器坏片、土師器皿片、土師器椀、土師器片		M-7・8
380	090SX-380	土師器坏片、土師器甕片、土師器蓋片、須恵器坏片		K・L-7・8
381	090SX-381	土師器蓋、土師器坏、須恵器坏片、瓦		K・L-7
382	090SX-382	土師器坏片、須恵器坏片		K・L-6・7
383	090SX-383	土師器坏片、土師器蓋、須恵器蓋		M-6・7
384	090SX-384	須恵器皿、須恵器蓋、土師器坏、土師器甕、土師器片		M-7
385	090SX-385	土師器片、石、土器片		M-7・8
386				M-5
387		土器片		M-7
388				M-7
389				M-7
390	090SX-390	須恵器蓋、土師器皿、土師器坏		M-7
391		須恵器片、土器片		M-7
392	090SX-392	須恵器蓋、須恵器片、土師質甕口縁部、　土錘		M-7
393		土師器蓋、土器片		L-7
394		須恵器坏口縁部、土器片		L・M-7
395				L-7
396		土師器坏		L-7

第14表　遺構一覧表⑧

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
397		土器片		M-8
398	090SJ-398	甕棺、弥生後期後葉甕形土器	弥生時代後期前葉～中葉	L-4
399		土師器坏口縁部、土器片		M・N-10
400		土師質甕口縁部		N-9
401		土器片、土錘		M・N-7
402		須恵器片		N-7
403	090SA-403	須恵器蓋ツマミ部分、須恵器蓋、須恵器坏、須恵器片、坏底部、土師器坏口縁部、土師器片、土師器坏、甕口縁部、土器片、土錘		N-6・7・8
404	090SX-404	土器片、土錘、須恵器片		M・N-7・8
405		土器片		M・N-5
406		土器片		M-5
407		須恵器蓋、須恵器甕胴部片、土師器片		M-5
408	欠番			M・N-8
409	090SX-409	須恵器蓋つまみ部、土師器片		M・N-6・7
410	090SX-410	土錘、土師器坏、須恵器坏		
411		土器片		N-7
412	090SX-412	須恵器口縁部、土師器坏		N-7
413	090SX-413	土師器口縁部、土器片		M-5
414	090SX-414	鉢形土器口縁部		N-9
415				M-9
416				N-9
417				M-9
418				M-9
419		下城式壺胴部片		N-9
420		土器片		N-3
421		土器片		M・N-3
422		土器片		M-6
423		土器片		M-6
424				N-9
425				M・N-9
426		弥生甕、土器片		L-5
427	090SX-427	須恵器坏、土師器坏、土器片		N-7
428	090SX-428	土師器、土器片		N-10
429	欠番			
430	090SX-430	須恵器蓋、土師器坏片、企救型甕、土師器皿片、土師器片		M-5
431		須恵器片、土師器片		M-5・6
432	090SX-432	須恵器蓋、須恵器坏片、土師器坏片、土錘、黒曜石		M-6
433		土器片		N-6
434	090SX-434	土器片		N-6
435		土器片		N-6
436	欠番			
437				N-6
438				N-6
439				N-6
440	090SX-440	須恵器蓋、土師器坏片		M・N-5・6
441	090SX-441	須恵器甕口縁部、坏、土師器蓋、土師器皿、土師器坏口縁部、企救型甕口縁部		N-6
442		須恵器蓋、須恵器甕胴部、土師器坏底部		N-2
443	090SX-443	豊後大分形甑片、土師器蓋		M・N-5・6
444		須恵器蓋		N-2
445		土器片		N-2
446	欠番			N-2
447	欠番			
448	090SX-448	甕形土器、高坏、小型甕、ミニチュア壺形土器、石器		L-5
449		須恵器甕胴部片、須恵器片、土師器蓋片、土師器坏		L-4
450		須恵器甕胴部片、土器片		N-2
451				N-2
452	090SX-452	土器片		J-4

第15表　遺構一覧表⑨

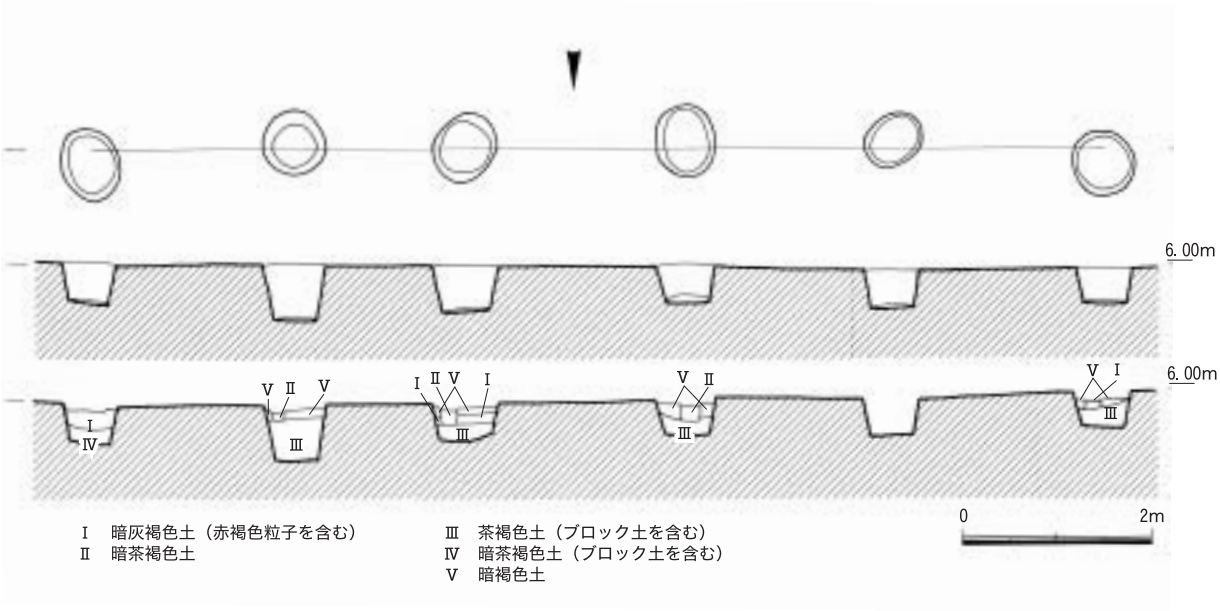
S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
453	090SX-453	須恵器甕胴部、土師器蓋		N-2・3
454	090SX-454	円面硯脚部片、土師器坏片、須恵器蓋片、企救型甕片、製塩土師片		L-3
455	090SX-455			L・M-3
456	090SX-456			M-3
457	090SX-457			M・N-3・4
458		須恵器坏口縁部、土師器坏口縁部、土錘		
459		土師器胴部片		N-7
460	090SX-460			L-6
461	090SX-461	須恵器片、土師器片		L-5
462		須恵器坏口縁部、須恵器坏底部、土師器坏口縁部		M-8
463	090SX-463	須恵器蓋、土師器坏口縁部、土師器坏底部、甑口縁部		L-7
464	090SX-464	甕形土器、壺形土器、台付鉢、高坏	古墳時代前期初頭～前半	M・N-5・6
465				H-7･8
466		土器片		H-8
467		土器片		H-7・8
468				H-8
469		甕口縁部、土器片		G・H-7
470		土器胴部片		H-8

（3）遺構と遺物

柵列跡（ＳＡ）

090SA007（第17図）

090SA007は調査区の南端において検出された柱列である。調査段階では、東側の柱穴が軸を揃えて南側へ展開しそうな状況を示していたため、建物跡と考えていたが、平成11年度に調査を実施した南接する下郡遺跡群第120次調査所見から柵列状の柱列であることが明らかとなった。090SB294のすぐ南側に位置し、090SB294と並立する。６個の柱穴による柱穴列であり、柱穴径約0.6m、検出面からの深さ0.4～0.5mを測る。土層断面の観察から建て替えが行われたと考えられる掘り返しの痕跡を確認している。



第17図　SA007遺構実測図（1/80）

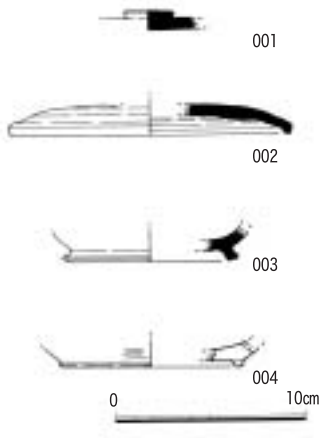
出土遺物（第18図）

001は須恵器蓋の頂部破片である。偏平なボタン状のツマミが付けられ、灰褐色を呈する。

002は須恵器蓋の端部破片である。復元口径14.8cmを測る。暗灰色を呈し、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられる。端部部分で約1/4が遺存する。

003 は須恵器高台付坏の底部破片である。外方に張りだす踏ん張り気味の角高台が貼付される。約1/4が遺存する資料であり、復元される底径は9.2cmを測る。灰色を呈している。

004 は土師器高台付坏の底部破片である。底部分には小さく低平な高台が付されている。内面はナデにより調整され、外器面はミガキａ$_2$により仕上げられている。橙色を呈し、復元底径は9.6cmを測る。

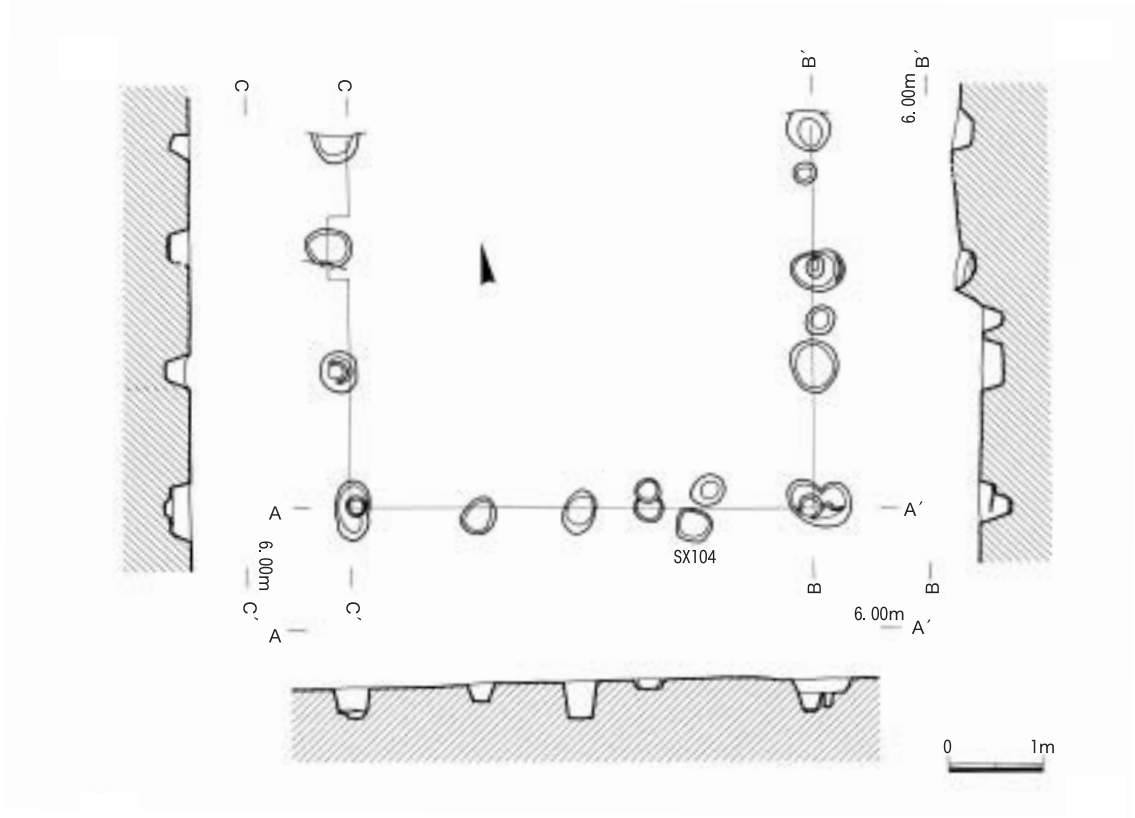


第18図　SA007出土遺物実測図（1/4）

掘立柱建物跡（ＳＢ）

090SB001（SX104）（第19図）

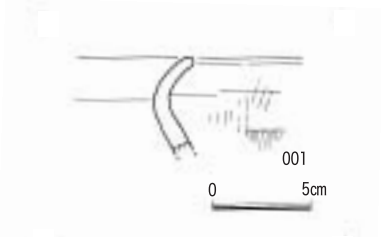
調査区北壁部分において確認された掘立柱建物跡である。現状で２間×３間＋αを確認している。北半は調査区外に展開し、全体規模等は不明である。柱筋、ならびに柱穴間の距離はまちまちで、がっしりとした本格的な建物といったような感はなく、むしろ簡便な仮小屋的なイメージを受ける。各柱間の平均長は、東西2.4m、南北1.4mを測るが、南北方向の柱間は一様でない。柱掘り方は円形を呈し、直径は約0.4m、深さは0.3m程度を測る。主軸方位はN-11°-Eである。



第19図　SB001平面・断面実測図（1/80）

出土遺物（第20図）

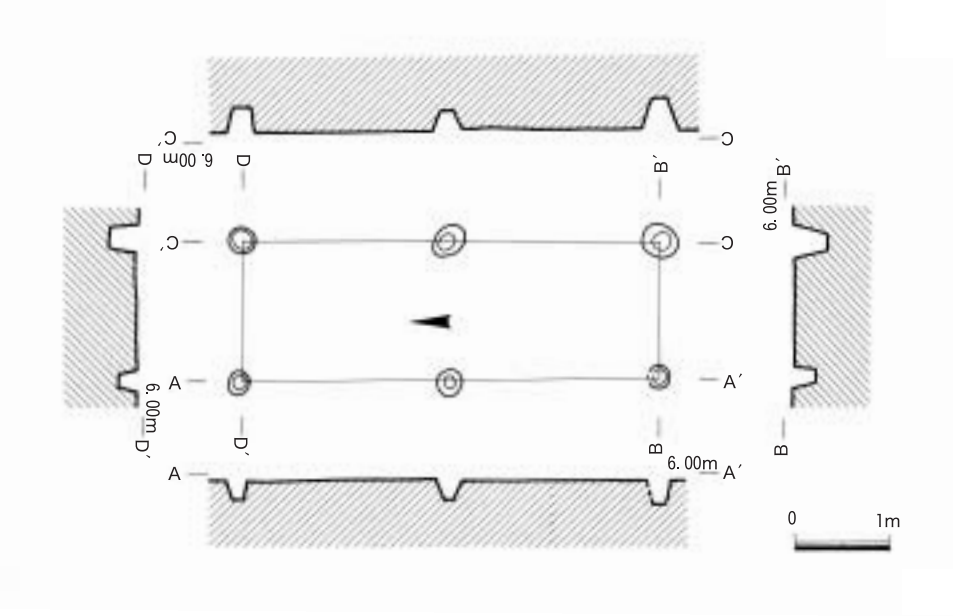
001は柱穴（090SX104）から出土した土師質甕口縁部である。内外面とも淡赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子を内包する。内器面はナデにより仕上げられ、外器面はハケ目の後丁寧なヨコナデにより調整される。焼成は良好である。所産時期は不明である。



第20図　SB001出土遺物実測図（1/4）

090SB002（第21図）

調査区のほぼ中央において検出した建物跡である。１間×２間の規模を有し、ほぼ南北方向に配置される。柱間総距離は桁行4.4m、梁行1.4mを測る。柱掘り方は円形を呈し、径約0.3mを測り、深さは0.3m程度のもので構成される。出土遺物が皆無であり、所産時期等の詳細は不明である。



第21図　SB002平面・断面実測図（1/80）

090SB003（SX299・302・306・342・345・367）（第22図）

090SB003は建物南側に庇をもつ２間×４間の掘立柱建物跡である。柱間総距離は、桁行で8.6m、梁行で5.8mを測る建物跡である。桁行の各柱間は、西から2.25m、2.2m、2.1m、2.15mを測る。梁行の各柱間は、西から2.25m、2.2mを測り、庇部分については1.7mを測る。建物主部の柱間に関しては、ほぼ等間隔に配置される。一部の柱穴に柱痕跡を残すものがあるが、大部分は茶褐色土を基調とし、灰褐色土ブロックを内包するものであり、建物廃絶時に柱の抜き取りがおこなわれた可能性が高い。また、建物北西角に相当する柱穴（090SX302）と南東部分に位置する柱穴（090SX342）の底面には扁平な川原石を利用した礎板が遺存していた。前者には複数個の礫が使用され、後者には上面に水平面を残す扁平な川原石が使用されている。柱掘り方はすべて円形であり、直径約0.4～0.5mで、深さは約0.3mを測る。主軸の方位はN-6°-Eである。

出土遺物には奈良時代に比定される土器小片が多数出土した他、底部糸切り離しの土師器坏、小皿の破片や輸入陶磁器破片、土錘などの出土が認められた。

出土遺物（第23・24図）

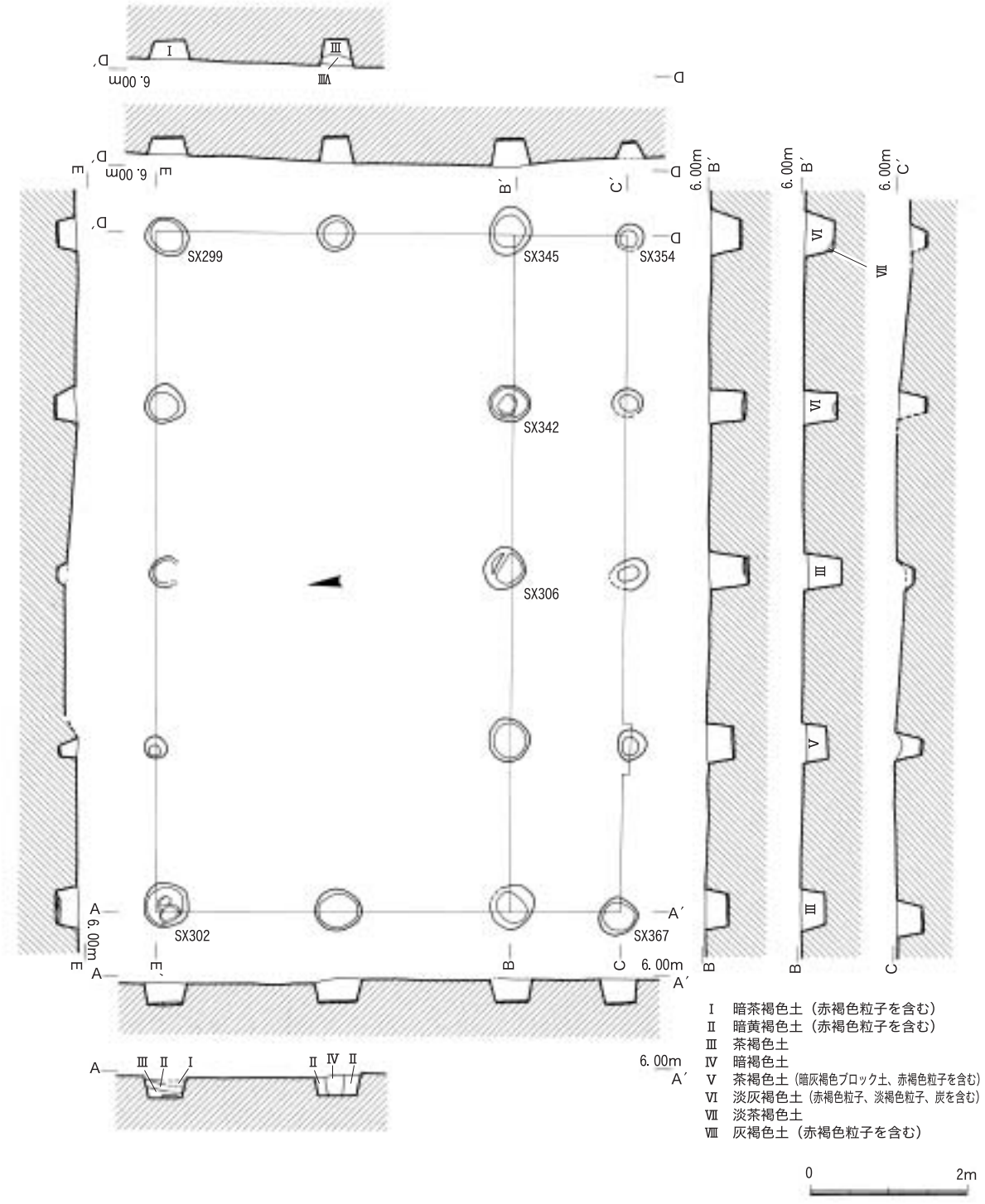
001は柱穴（090SX299）から出土した製塩土器（焼塩壺）の口縁部破片である。胎土中に角閃石、石英粒を含む。内外面とも明褐色を呈し、焼成は良好である。８世紀に比定されるものであり、周囲の遺構からの混入と考えられる。

002は柱穴（090SX306）から出土した土師器坏底部片である。底面には回転糸切り離し痕が認められる。淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、橙色粒子を含む。

003も002と同様の土師器坏底部破片である。底部は回転糸切り離しによる痕跡が明瞭に遺存する。

004も同様に底部に糸切り離し痕を残す土師器坏の底部破片である。柱穴（090SX302）からの出土資料である。

005は唯一全形を復元することのできる土師器小皿資料である。柱穴（090SX345）から出土した。色調は内外面とも明褐色を呈し、胎土中には角閃石を内包する。底部には糸切り離し痕跡が残り、復元口径



第22図　SB003遺構実測図（1/80）

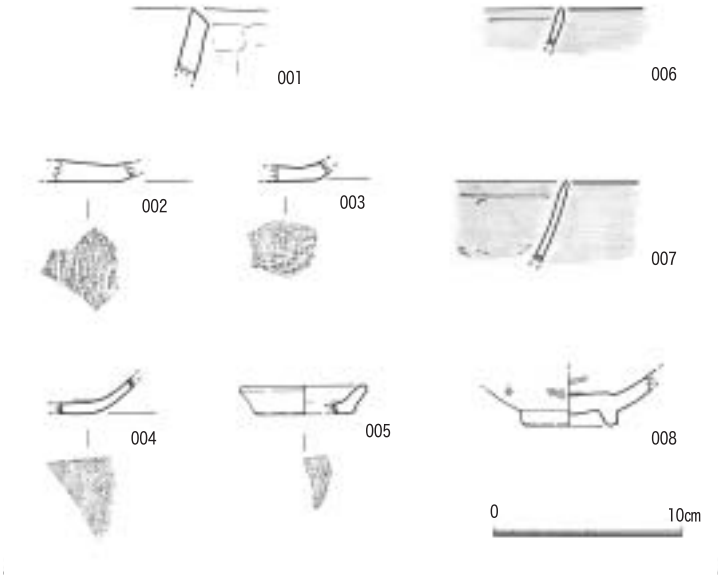
6.2cm、復元底径5.0cm、器高1.5cmを測る。

006は柱穴（090SX367）から出土した青磁碗の口縁部破片である。

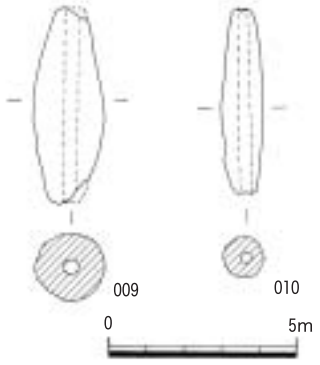
007は龍泉窯系青磁碗の口縁部片であり、大宰府陶磁器分類碗Ⅰ－２類である。

008は同安窯系碗の底部片であり、復元底径4.2cmを測る。大宰府陶磁器分類碗Ⅰ－１ｂ類に相当する。

009・010は土錘である。010は完存する。009は現存重量14.7ｇ、010は重量5.8ｇを測る。



第23図　SB003出土遺物実測図①（1/4）

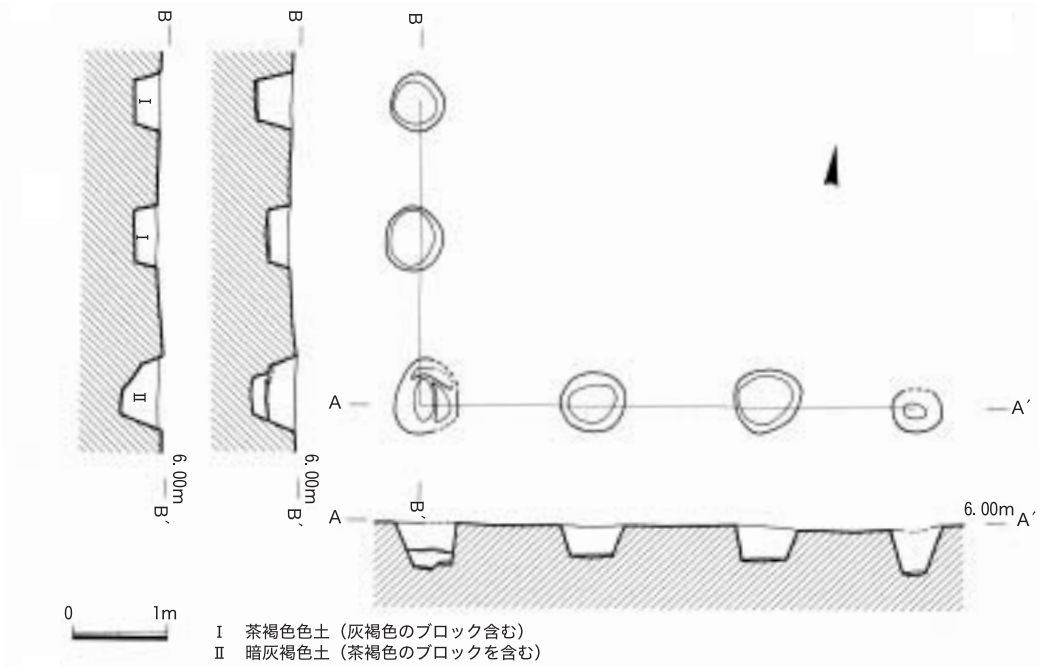


第24図　SB003出土遺物実測図②（1/2）

出土遺物、特に輸入陶磁器の様相は大宰府陶磁器出土傾向のD期に属し、古い様相を呈しているが、図上復元が可能な005の形態的特徴は14世紀前半代の特徴を有しており、この時期の所産である可能性が高いと考えられる。

090SB004（第25図）

調査区のほぼ中央、前述の090SB003の北東角に重複する形で検出した建物跡である。北側部分は撹乱穴に切られており、詳細は不明である。現在確認できる柱列は南北軸で２間、東西軸で３間である。周辺状況から東側部分はこの３間分で終息する可能性が高い。現状での東西方向長5.3m、南北方向長3.3mを測る。柱掘り方の平面プランは円形を呈し、径約0.5～0.6mを測り、深さはおよそ0.35mを測る。

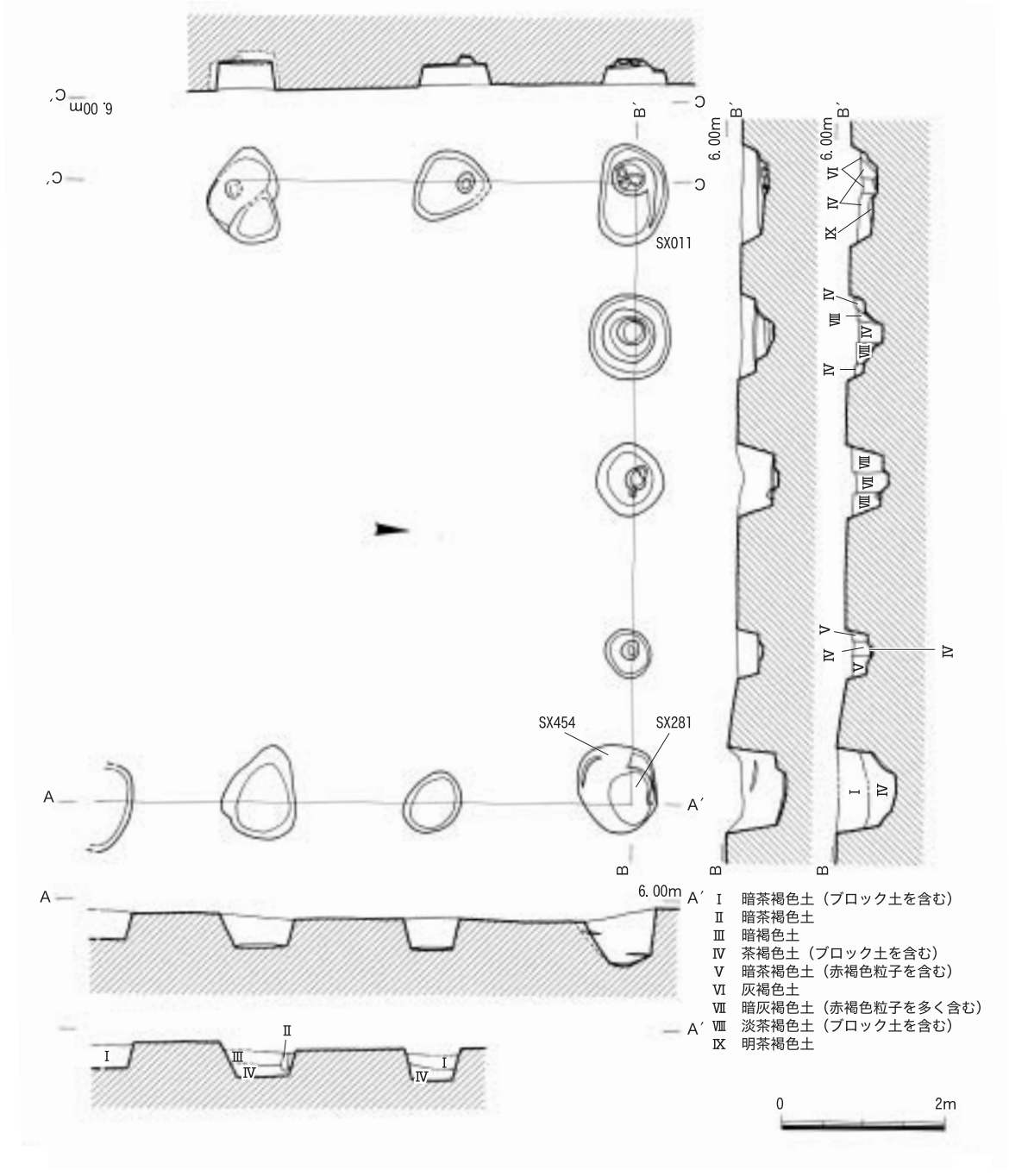


第25図　SB004遺構実測図（1/80）

埋土にはブロック土を内包する単一土が充填されており、最終段階に抜き取りが行われ、埋め戻しが行われた可能性を指摘できる。顕著な出土遺物がなく、所産時期の確定は行えない。

090SB008（SX011・281・454）（第26図）

調査区南西端で検出された建物跡である。東西４間、南北３間以上の南北棟建物と推定される。建物の南側部分は調査区外に展開している。東西方向の柱間総距離は7.7ｍを測り、各柱間の距離は西から1.8m、1.9m、2.1m、1.9mを測る。南北方向の柱間の距離は北から2.4m、2.2m、2.2mを測り、南側部分に関しては調査区の外に展開しているため不明である。柱掘り方は円形を基調とする不整形のも



第26図　SB008遺構実測図（1/80）

のが多く、直径は0.6～1.2mである。柱のいくつかには礎板として根石の存在が確認される。特に北西角にあたる柱穴には複数個の礫が使用されている。主軸の方位はN-2°-Eである。

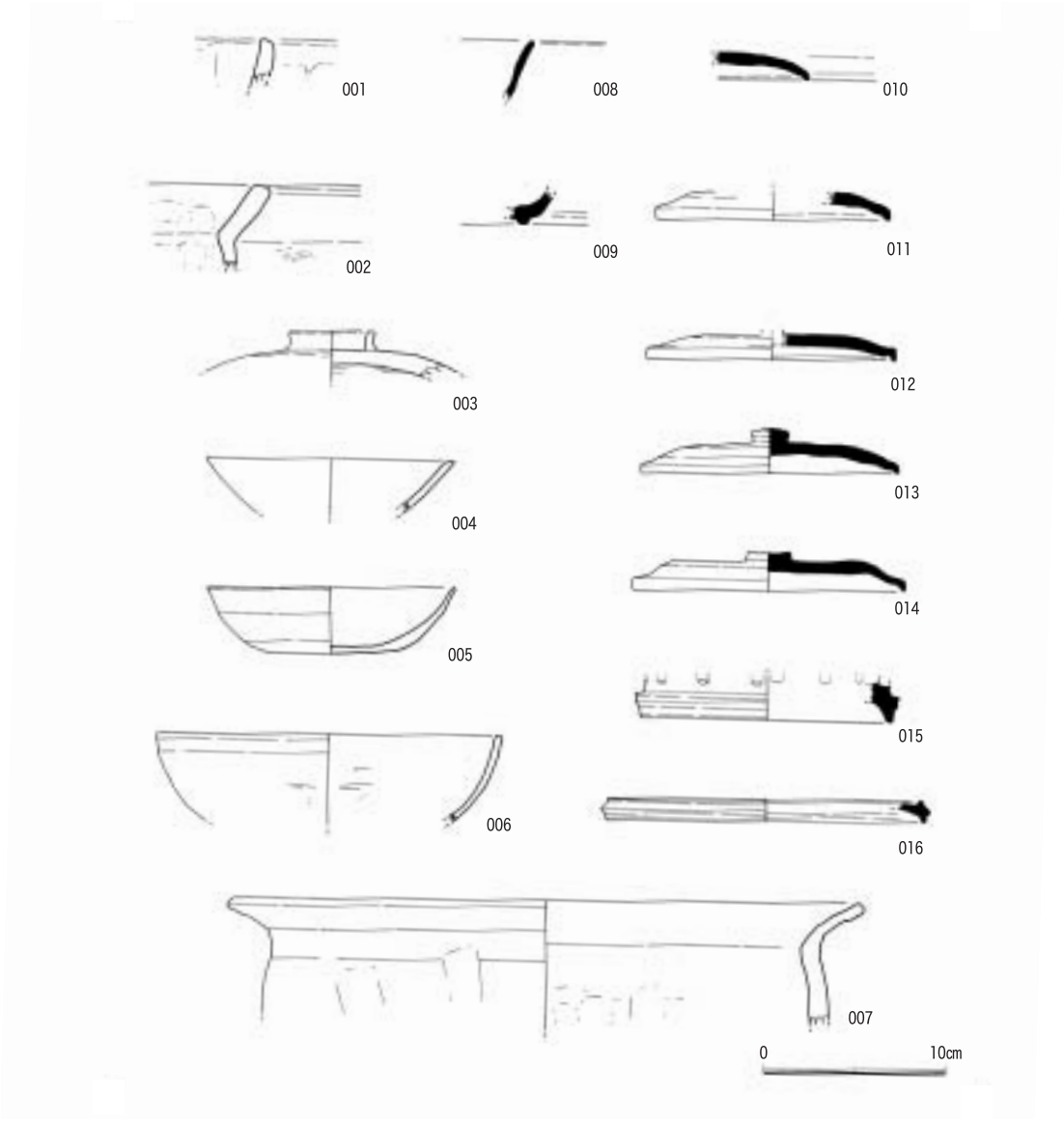
出土遺物（第27・28図）

001は北東角にあたる柱穴（090SX454）から出土した製塩土器（焼塩壺）の口縁部破片である。器表面には指頭による押圧痕が随所に認められる。また、二次被熱のために表面剥離が著しい。内外面ともに茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石粒を含む。

002はいわゆる企救型甕と呼ばれる甕形土器の口縁部破片である。淡茶褐色を呈し、外器面の頸部以下は縦方向のハケ目により調整される。胎土中には比較的大粒の石英、角閃石粒を含む。焼成は良好である。

003 は輪状ツマミをもつ土師器蓋の頂部破片である。表面の風化により器面調整の詳細は不明であるが、かすかに残る痕跡から内外器面ともミガキa_2による可能性が高い。焼成は良好である。

004は土師器坏の口縁部と思われるものである。内外器面の調整は回転ナデによってなされており、淡



第27図　SB008出土遺物実測図①（1/4）

赤橙色を呈している。

006は土師器坏の口縁部破片である。口縁端部には平坦面を形成する。復元口径19.0cmを測り、器表面は詳細は不明であるが、ヘラミガキによるものと考えられる。赤橙色を呈する。

008は須恵器坏の口縁部である。

009は須恵器高台付坏の底部破片である。逆台形気味の貼り付けによる高台を、体部の立ちあがりよりも若干内側にもつ。ナデにより調整されている。

010は須恵器蓋の端部破片である。淡灰褐色を呈する。

011は須恵器蓋である。淡灰褐色を呈し、復元口径12.6cmを測る。

005・007・013は建物柱穴の北東角にあたる柱穴の柱痕部（090SX281）から出土した遺物である。

005は土師器坏である。口径13.5cm、器高3.6cmを測る。内外器面ともヨコナデにより調整されるが、ナデによる最終調整前に、体部外器面下部に回転ヘラケズリが施されている。

007は土師質甕の口縁部である。復元口径34.4cmを測り、器内外面はヨコナデと工具ナデにより調整されている。淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。

013は須恵器蓋である。復元口径14.1cm、器高2.4cmを測り、頂部には宝珠が偏平化したようなツマミが付けられている。

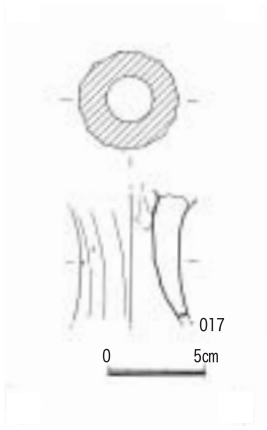
012は建物跡の北西角にあたる柱穴(090SX011)から出土した須恵器蓋の端部破片である。復元口径13.8cmを測る。灰色を呈している。

014は須恵器蓋であり、頂部には扁平なボタン状のツマミを有している。頂部は完存し、口縁端部で約１/10が遺存する。復元口径14.8cmを測る。色調は淡茶灰色を呈し、焼成は不良である。

015は須恵器圏足硯脚部である。脚部の透かし下端部が遺存しており、これから推定される透かし形状は長楕円形を呈するものと考えられる。灰褐色～暗灰褐色を呈し、焼成は良好である。北東角の柱穴（090SX454）からの出土である。

016は陶硯の脚裾部と推定される須恵器片である。灰黒色を呈し、復元底径は17.2cmを測る。

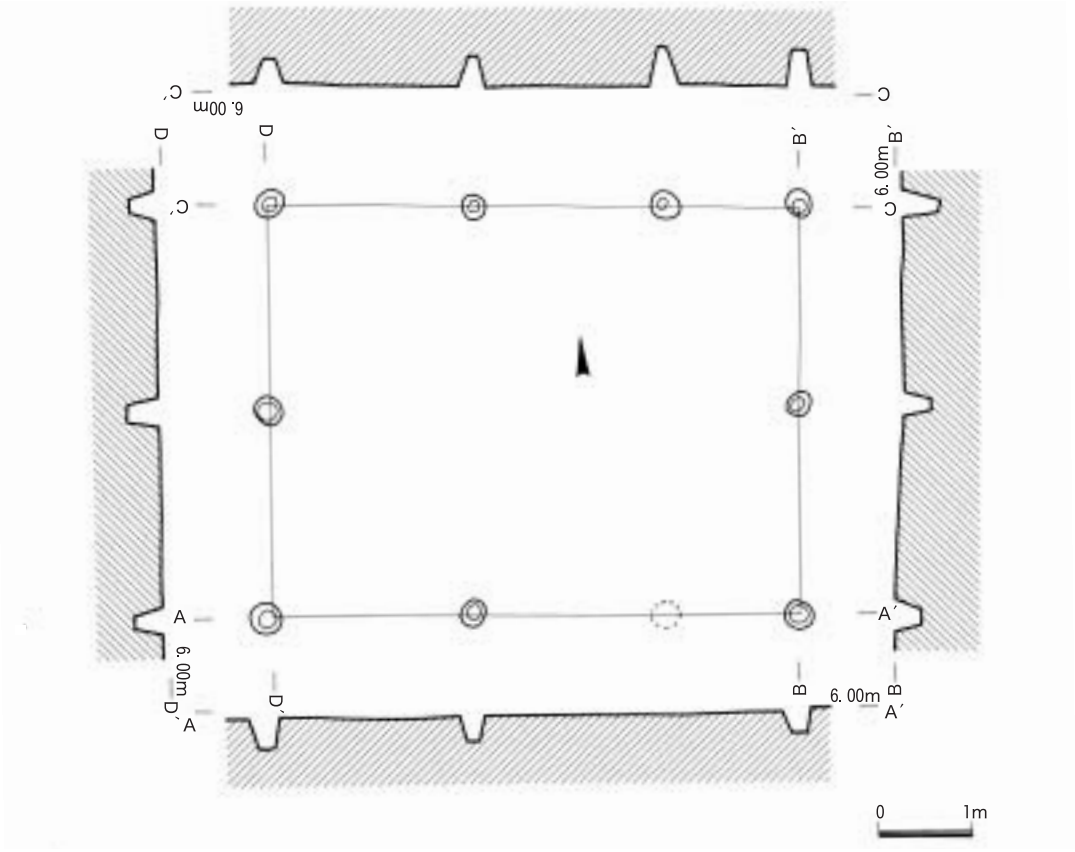
017は土師器高坏脚部片である。上部は坏部との接合面で外れており、いわゆる擬口縁を形成する。脚柱部はタテ方向のヘラケズリにより面取りがなされている。ヘラケズリは下方から上方へ実施され、14面を形成する。淡赤褐色を呈し焼成は良好である。



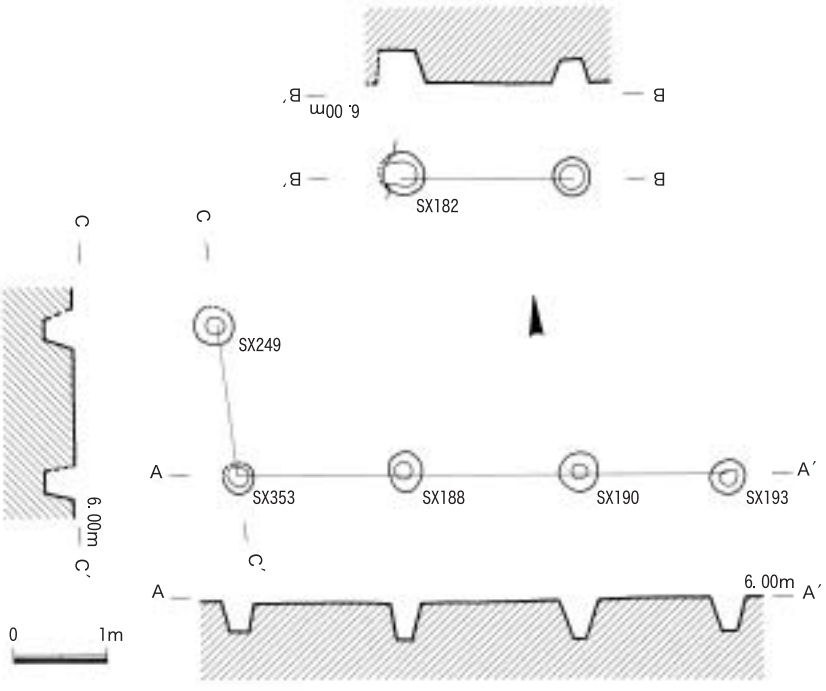
第28図　SB008出土遺物
実測図②（1/4）

090SB009（第29図）

調査区のほぼ中央、090SB003の北西角に重複する形で検出された建物跡である。南北２間、東西３間の建物と考えられるが、南側の中央東寄りの柱穴が撹乱穴のため欠失する。東西棟である090SB009の桁行の柱間総距離は5.6m、梁行は4.4mを測る。各柱間の距離は、東西方向が西から2.3m、2.1m、1.2mを測り、南北方向は北から2.3m、2.1mを測る。西側部分の柱間距離はほぼ等間隔であるのに対して、東側の柱間が約半分と極端に狭くなっている点を特徴とする。建物中央に規模の大きな撹乱穴があり、柱穴の存在を確認する術はないが、２間×２間の建物の東側に庇状の張りだしが付属した建物跡である



第29図　SB009平面・断面実測図（1/80）

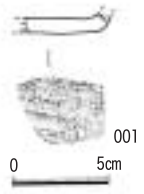


第30図　SB178平面・断面実測図（1/80）

可能性も考慮される。柱穴の径は0.25mと小型であり0.3m程度の深度を有する。主軸の方位はN-5°-Eである。建物跡の年代を推定できるだけの遺物の出土はない。

090SB178（SX182・188・190・193・249・353）（第30図）

調査区の東端で検出されたものである。北西角は撹乱により欠失し、さらに東側も現有道路下に位置していた大規模な撹乱により切られている。現存する柱穴から、幅約3.1mの並列する柱列の存在は明らかであるが、西側の梁行中央の柱穴が桁行となる柱列と直角な位置関係にはなく、外側に張りだした形となっている。したがって、想定される建物跡はいびつな形となり、建物跡とするには疑問が残るものの、ここでは、便宜的に建物跡として取り扱っている。主軸方位はN-5°-Eである。



第31図　SB178出土遺物実測図（1/4）

出土遺物（第31図）

001は土師器坏の底部破片である。小破片のために詳細は不明であるが、底部には回転糸切り離し痕が残っている。

090SB294（SX342・345・377～385・430・432）（第32図）

090SB294は２間×５間の建物規模を有する東西棟であり、柱穴の径が0.9～1.0m、検出面からの深さ0.6～0.7mを測る。身舎面積は52.5㎡であり、柱間総距離は東西方向に10.76m、南北方向に4.76mを測る。桁方向の柱間距離は、西側から2.1m、2.05m、2.5m、1.9m、2.2mを測り、ほぼ等間隔に配置され、梁行の各柱間は北から2.5m、2.26mと桁行の柱間距離よりも広い値を示している。柱掘り方は円形を呈し、直径1.1～1.4mを測り、殆どの柱穴に柱痕を認めることができる。土層断面の観察から掘り返しの痕跡が認められ、複数回の建て替えを想定することができる。また、建て替えを行った際に柱の下に礎板として石を埋置していたことも確認されている。出土遺物には土師器坏・皿、須恵器坏・皿、土師質甕、製塩土器などがあり、また、１点のみであるが格子目タタキ成形の瓦片が出土している。

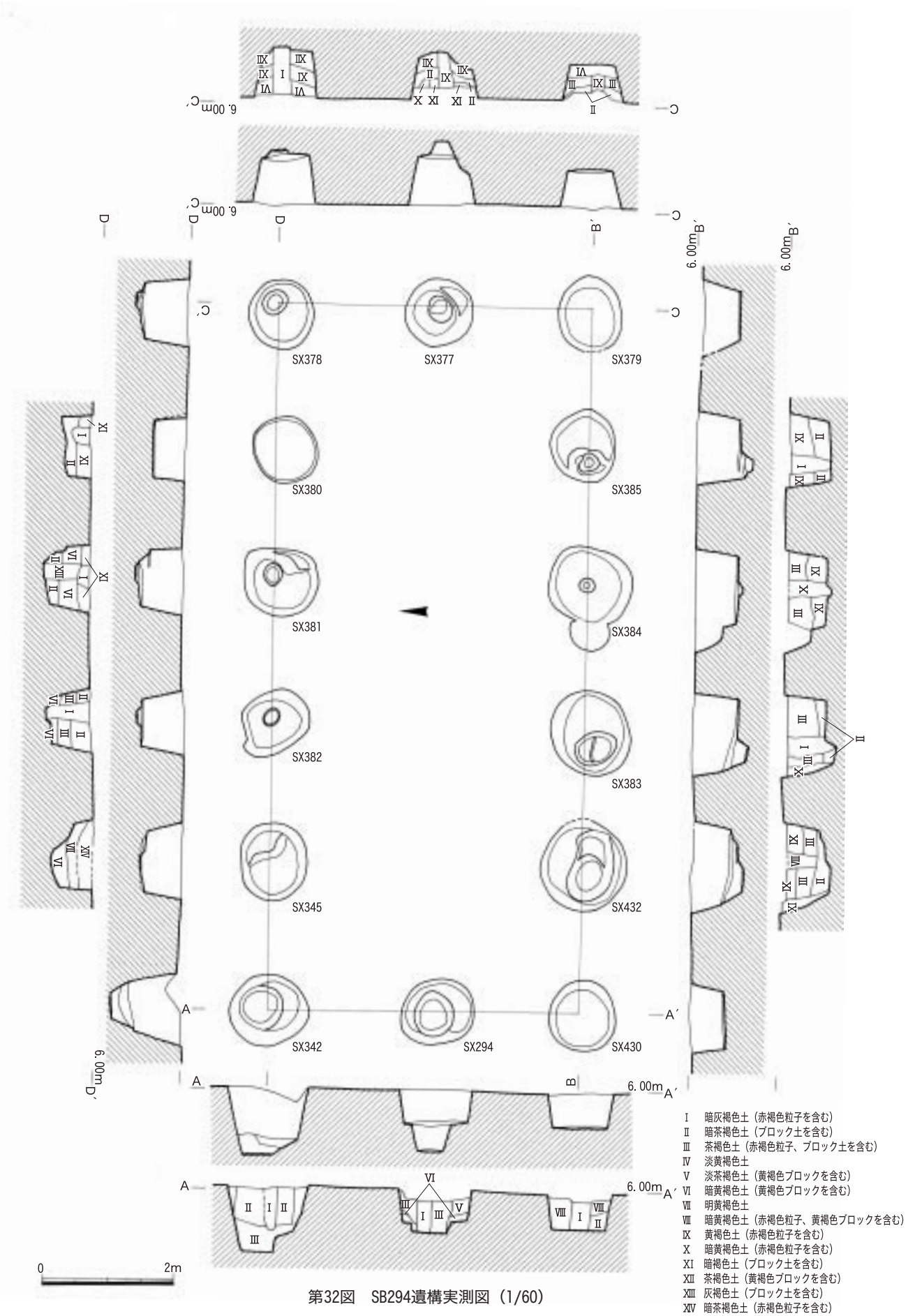
出土遺物（第33～39図）

001～004は焼塩壺の口縁部破片である。**001**は北西角に位置する柱穴（090SX343）から出土した製塩土器（焼塩壺）の口縁部破片である。柱穴埋土最上層から出土しており、周辺遺構からの混入と考えられる。

002も柱穴（090SX382）の裏込め埋土から出土した焼塩壺口縁部である。胎土中には荒い砂粒の他、石英粒、結晶片岩片などを内包する。

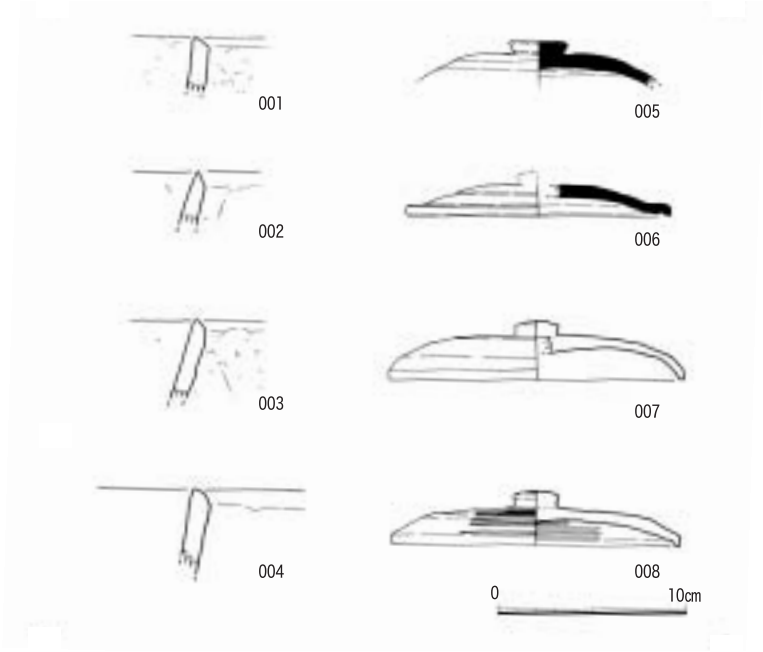
004もまた、001～003と同様の焼塩壺の口縁部破片である。柱穴（090SX378）の裏込め埋土から出土した。内外面とも淡茶褐色を呈し、器表面には著しい二次被熱の痕跡が認められる。

005・006は須恵器蓋破片である。**005**は二つの柱穴（090SX383・432）から出土した資料が接合した。頂部部分の破片であるが、頂部は回転ヘラケズリにより調整され、扁平なボタン状のツマミが貼付される。

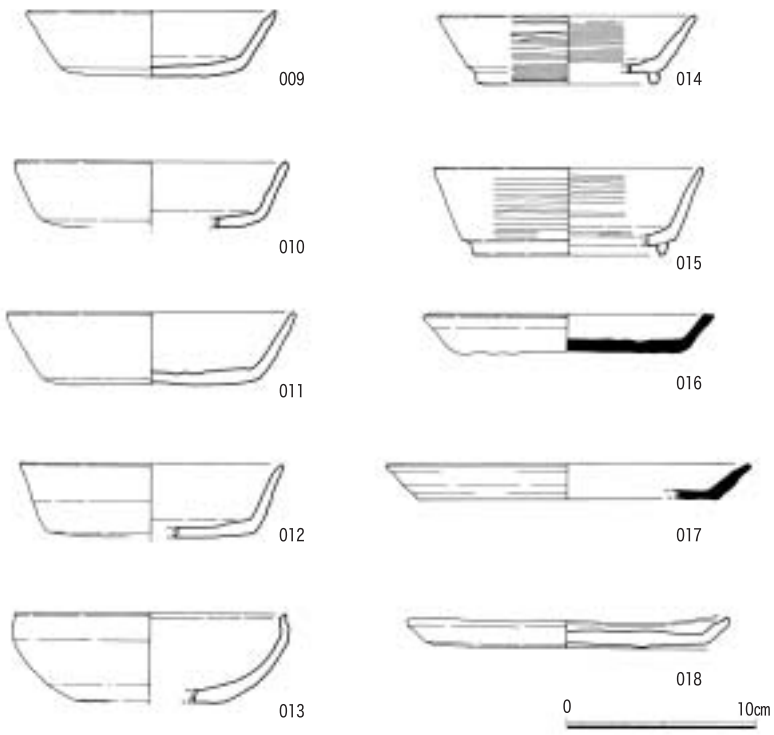


第32図　SB294遺構実測図（1/60）

Ⅰ　暗灰褐色土（赤褐色粒子を含む）
Ⅱ　暗茶褐色土（ブロック土を含む）
Ⅲ　茶褐色土（赤褐色粒子、ブロック土を含む）
Ⅳ　淡黄褐色土
Ⅴ　淡茶褐色土（黄褐色ブロックを含む）
Ⅵ　暗黄褐色土（黄褐色ブロックを含む）
Ⅶ　明黄褐色土
Ⅷ　暗黄褐色土（赤褐色粒子、黄褐色ブロックを含む）
Ⅸ　黄褐色土（赤褐色粒子を含む）
Ⅹ　暗黄褐色土（赤褐色粒子を含む）
ⅩⅠ　暗褐色土（ブロック土を含む）
ⅩⅡ　茶褐色土（黄褐色ブロックを含む）
ⅩⅢ　灰褐色土（ブロック土を含む）
ⅩⅣ　暗茶褐色土（赤褐色粒子を含む）



第33図　SB294出土遺物実測図①（1/4）



第34図　SB294出土遺物実測図②（1/4）

006は須恵器蓋の端部破片である。柱穴（090SX430）から出土しており、灰色を呈し焼成は良好である。復元口径は14.0cmを測る。

007は土師器蓋である。破片資料であるが、図上反転復元することが可能であり、復元口径15.4cm、器高3.1cmを測る。胎土中には長石、角閃石粒を含み、内外面とも淡橙褐色を呈している。

008も土師器蓋である。柱穴（090SX377）からの出土であり、胎土中には角閃石、長石粒を含み淡橙褐色を呈する。内外器面ともミガキａ$_2$により最終調整がなされ、復元口径15.0cm、器高2.8cmを測る。

009〜013は土師器坏である。

009は底部にヘラ切り離し痕を残す土師器坏である。復元口径13.0cm、器高3.4cm、復元底径9.6cmを測る。内外面とも淡橙褐色を呈し、器面はヨコナデにより調整される。

010は淡茶褐色を呈する土師器坏である。底部はヘラ切り離し後、ナデ調整が施され、内外器面はヨコナデにより調整される。柱穴（090SX378）の裏込土からの出土である。

011は柱穴（090SX378）の裏込土から出土した土師器坏である。底部処理は009・010と同様にヘラ切り離し後ナデ調整が施されている。復元口径15.0cmを測り、器高3.8cm、底径8.6cmを測る。

012は複数の柱穴（090SX383・432柱痕埋土）から出土した土師器坏である。胎土中には角閃石、長石粒を含み、色調は橙褐色を呈している。底部処理はヘラ切り離し後ナデが施され、器表面はヨコナデにより調整される。約1/4が残存し、復元口径13.8cmを測る。

013は内湾器形を呈する土師器坏である。柱穴（090SX377）の裏込埋土からの出土であり、淡橙褐色を呈する。器面の調整は基本的にヨコナデによるものであるが、外器面下部には回転ヘラケズリが施されている。復元口径14.3cm、復元底径8.0cm、器高4.5cmを測る。平底から内湾して立ち上がる器形と口縁端部内面に平坦面を形成する点を特徴とする。

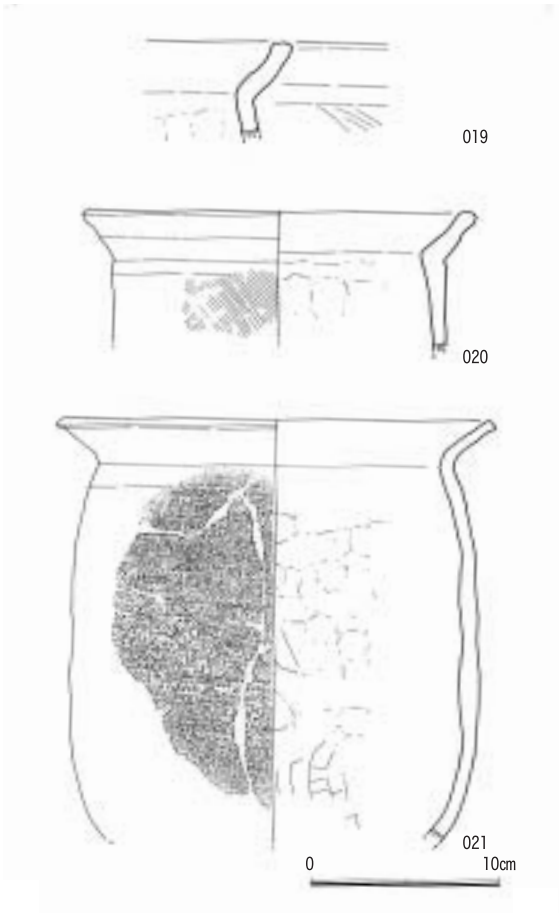
014・015は土師器高台付坏である。**014**は柱穴（090SX430）から出土し、復元口径13.4cm、復元底径8.8㎝、器高3.6cmを測る。内外器面とも回転ヘラミガキ（ミガキa）により調整される。

015も014と同様の土師器高台付坏である。淡橙褐色の色調を呈し､内外器面ともミガキａ$_2$により調整される。柱穴（090SX432柱痕埋土）から出土している。

016・017は須恵器皿である。**016**は淡灰褐色を呈し、内外器面とも回転ナデにより調整される。口縁部が一部欠損するが、ほぼ完存する資料であり、口径14.6cm、底径10.8cm、器高2.1cmを測る。

017も灰褐色を呈する須恵器皿口縁部である｡口縁部分で約1/8が遺存する資料であり、復元口径18.8cm、復元底径15.8cm、器高1.9cmを測る。内外器面の調整は主体的に回転ナデによるもので、底面には回転ヘラケズリ痕が残る。

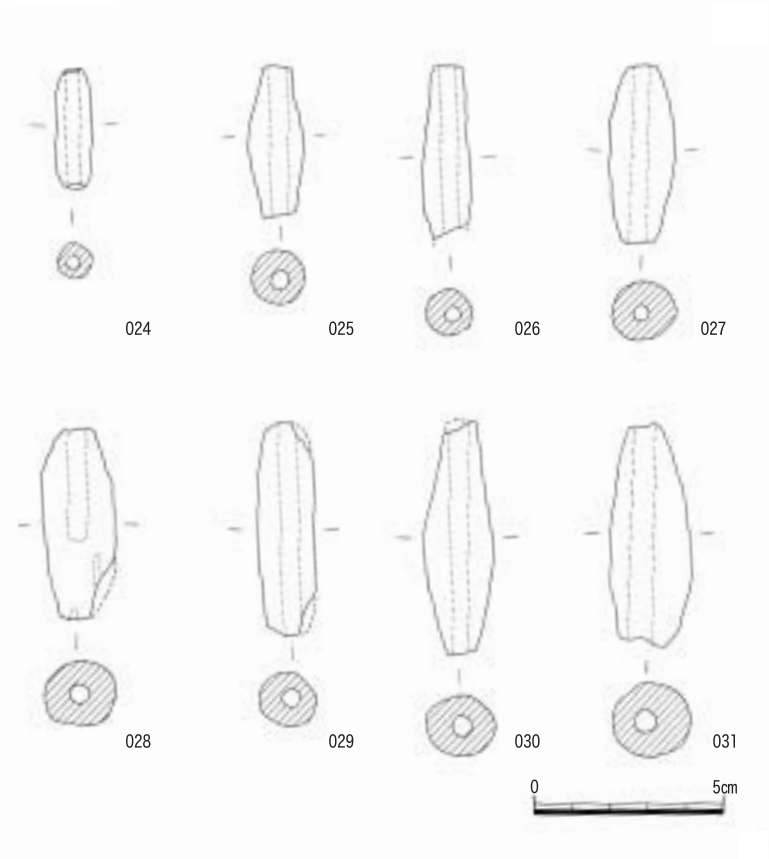
018は土師器皿である。柱穴（090SX379）から出土した。胎土中には石英、角閃石、白色砂粒、橙色粒子を内包し、器表面は橙色を呈する。内外器面はヨコナデにより調整され、底面は回転ヘラケズリ後にナデ調整により仕上げられる。焼成は良好で復元口径17.1cm、器高1.5〜1.6cmを測る。



第35図　SB294出土遺物実測図③（1/4）



第36図　SB294出土遺物実測図④（1/4）



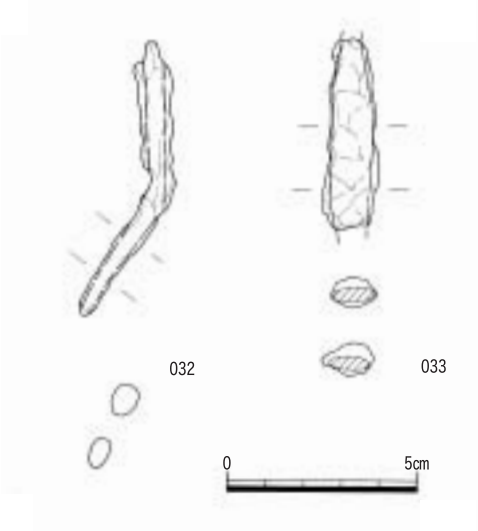
第37図　SB294出土遺物実測図⑤（1/2）

019～021は土師質甕である。019はいわゆる企救型甕であり、外面の口縁部下位に粗いタテ方向のハケ目が施される。胎土中には石英粒を比較的多量に含み、内外面とも淡茶褐色を呈する。

020も019と同様の企救型甕破片である。口縁端部上面に平坦面を形成し、口縁部外面に強いヨコナデによる稜線が明瞭に残る。内器面はナデ、外器面は縦方向のハケ目により調整されている。淡茶褐色を呈する外器面にはススの付着が認められ、内面には一部に接合痕が認められる。復元口径20.4cmを測る。

021は豊後大分形甕と呼称している土師質甕である。外器面下位には格子状のタタキ痕が残り、上位部にはヨコ方向のカキ目調整が施されている。また、内面下部には同心円状のタタキあて具痕が認められ、当該土師質甕がタタキ成形により製作されていることが知られる。内外面とも赤橙色を呈し、復元口径23.2cm、器高21.6cmを測る。

022は土師質甑の基底部の破片である。外面は丁寧なヨコナデ調整のため、明確に確認することはできないが、内面には同心円になると推定されるタタキあて具痕が明瞭に残る。これらの諸特徴は、本資料がタタキ成形により製作されていることを示しており、このような特徴から豊後大分形甑の基底部であると考えられる。



第38図　SB294出土遺物実測図⑥（1/2）

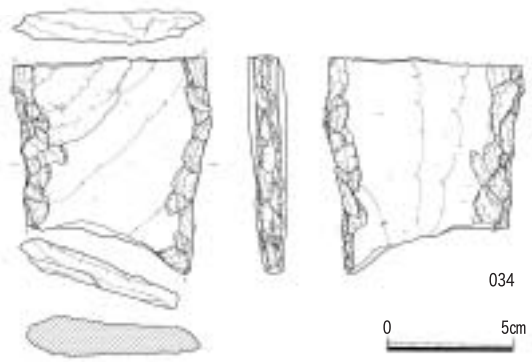
023は丸瓦破片である。胎土中に石英粒等が認められ、灰オリーブ色を呈している。また、内器面には布目痕が見られ、上面には格子目タタキ痕が明瞭に認められる。焼成は良好である。

024～031は090SB294の各柱穴から出土した土錘である。端部を欠損するものもあるが、全形を推定可能なものが多く、総体的に端部が先細り気味に窄まる紡錘形を呈するものである。

032・033は090SB294から出土した鉄製品である。**032**は現存長7.3cm、現存幅1.0cmを測る棒状の鉄製品であり、中位で屈折する。柱掘り方（090SX343）から出土した。鉄釘であろうか。詳細は不明である。

033は柱掘り方（090SX379）の第Ⅲ層から出土した鉄製品である。現存長5.1cmを測り、断面形状は扁平であり、長い部分で1.5cm、最短部で0.8cmを測る。鉄製の刀子の先端部分であろうと考えられる。

034は輝石安山岩製の打製石斧片と思われるものである。上下両端を折損するが、扁平な板状素材の両側面ともに表裏剥離を行い整形する。現存長8.7cm、現存部の最大幅8.0cmを測る。

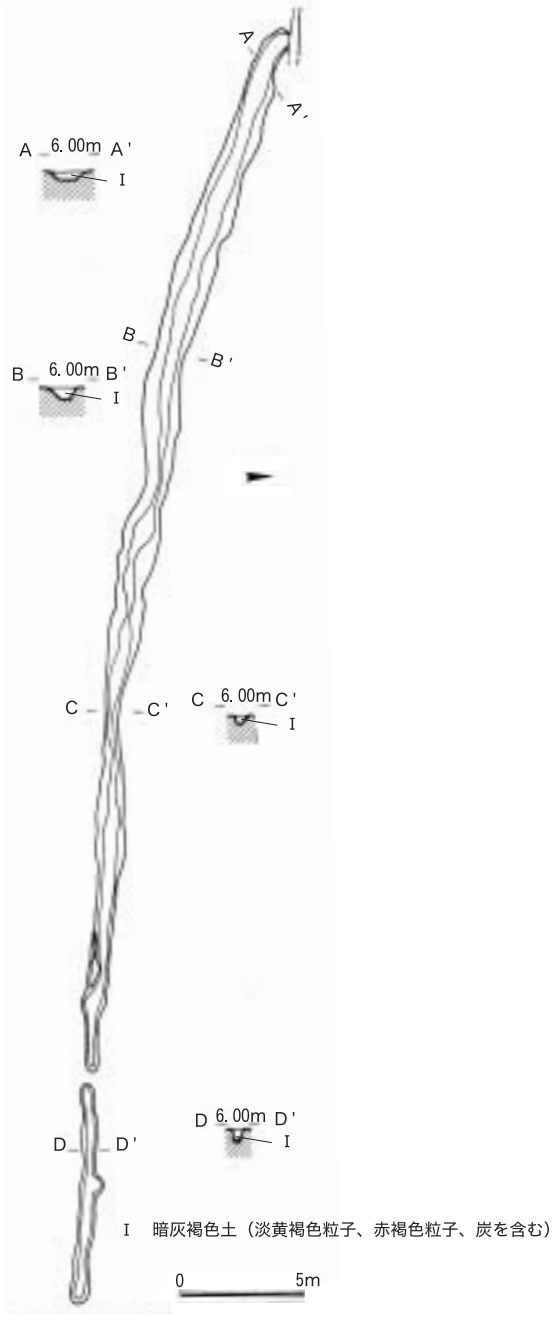


第39図　SB294出土遺物実測図⑦（1/3）

溝状遺構（ＳＤ）

090SD076（第40図）

090SD076は調査対象範囲の北側を北寄りに弧を描きながら東西方向に展開する溝状遺構である。総延長で54mを検出した。底面のレベルは一定しておらず、深い部分、浅い部分の差異が著しい。このため、溝自身は連続せず、長土坑が連続するような形となっているが、遺構上面の削平具合を考慮すると、本来、同一の溝状遺構内の底面レベルの差異が上面を削平されたことにより長土坑状になったものと推定される。つまり、本溝の基本構造は、最終的には同一軸線上に構築された連続長土坑の集合体により構成されていた可能性がある。遺存する溝埋土は、暗灰褐色土の単層であるが、土中に少量のブロック土を散見することができ、人為的に埋め戻されたものであることも考えられる。遺構の配置からは、本書に併載している第92次調査地点で



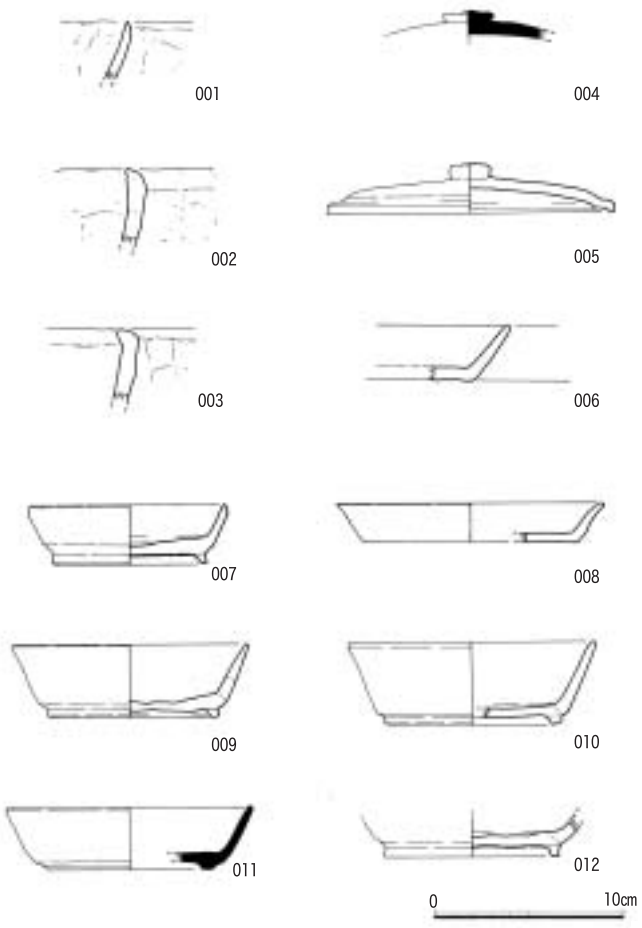
第40図　SD076平面・土層断面実測図
（1/300）

確認されている道路状遺構(092SF310)に伴う道路側溝の延長である可能性が高い。溝北側では第92次調査の092SF310で確認されたような路床上の連続土坑などは確認されておらず、この点も遺構上面が削平を受けていることを示唆しているといえる。

出土遺物には製塩土器、土師器蓋・坏・高台付坏、須恵器蓋・高台付坏、土師器鉢、土師器高坏、土師質甕、須恵器甕、土師質甑、土錘などがある。

出土遺物（第41～46図）

001 は焼塩壺の口縁部破片である。黄褐色の色調を呈し、器表面は強い二次被熱を受けている。胎土中には橙色粒子、白色粒子、角閃石粒を含み、表面はナデによる調整が施されている。



第41図　SD076出土遺物実測図①（1/4）

002・003とも001と同様な製塩土器（焼塩壺）の口縁部破片である。002も器表面に強い二次被熱の痕跡を認めることができ、橙色を呈している。表面にはケズリ風の工具ナデの後、ナデによる最終調整が行われる。

003は内外面とも茶褐色を呈し、002に類似する表面調整により仕上げられる。

004は須恵器蓋の頂部部分である。頂部には径2.6cmの低平なツマミが貼付される。

005は約1/2が遺存し、復元口径15.2cmを測る土師器蓋である。内外面とも橙褐色を呈し、回転ナデ調整により仕上げられる。外器面にモミ痕と思われる痕跡を確認できる。

006は土師器坏である。約1/8が遺存する。胎土中には角閃石、石英、橙色粒子を含み、内外面とも浅黄橙色を呈する。

007は土師器高台付坏である。色調は黄橙色を呈し、胎土中には角閃石、石英、白色粒子、橙色粒子、金雲母等を内包する。断面台形を呈する高台が貼付され、低く内湾気味に立ち上がる口縁部を有する。高台の貼付にあたっては、回転ヘラケズリを行い、その後に貼付する。約1/2が遺存し、復元口径10.3cmを測る。

008は外反気味に立ち上がる口縁を有する土師器坏である。底部には回転ヘラケズリが施され、内外器面は回転ナデにより調整される。口縁部分で約1/8が残存し、復元される口縁径は13.8cmを測る。焼成は良好である。

009は土師器高台付坏である。底部から直線的に立ち上がる坏部に低平な高台が貼付される。内面・

橙褐色、外面・暗茶褐色を呈する。復元口径12.1cm、器高4.0cm、底径9.0cmを測る。

010は土師器高台付坏である。約3/4が遺存し、復元口径12.8cm、復元底径9.4cm、器高4.4cmを測る。

011は須恵器高台付坏である。淡灰色を呈し内外器面とも回転ナデ調整が施される。復元口径12.6cm、器高3.3cm、復元底径8.9cmを測る。

012は土師器高台付坏の底部破片である。遺存部から推定される底径は9.2cmを測る。若干丸味をもって立ち上がる坏部に断面台形状を呈する高台部が回転ヘラケズリ後に貼付される。胎土中には角閃石、石英、白色粒子、橙色粒子を含み、内外面とも橙褐色を呈する。

013は土師器鉢である。約1/4が遺存する。内外器面とも器表面を手持ちヘラケズリにより調整し、その後、外器面については横位のカキ目風のナデ調整が施され、内器面上半部はナデにより調整される。胎土中には角閃石、石英、白色粒子、橙色粒子を含み、内面・褐色、外面・橙色を呈している。内面に若干突出気味に内傾する口縁部は復元口径18.8cmを測る。

014は土師器高坏である。口縁端部で上方に立ち上がる口縁部の復元径は26.4cmを測り、坏部外器面はミガキa_2、内器面はナデにより仕上げられている。脚部外器面は基本的にナデにより調整され、内器面はケズリ後ナデにより調整される。内外面とも橙色を呈し、調整は良好である。

015は橙褐色を呈する土師質甕である。復元口径15.4cmを測る。胎土中には角閃石、石英、橙色粒子、白色粒子を内包し、器表面はヨコナデにより調整される。

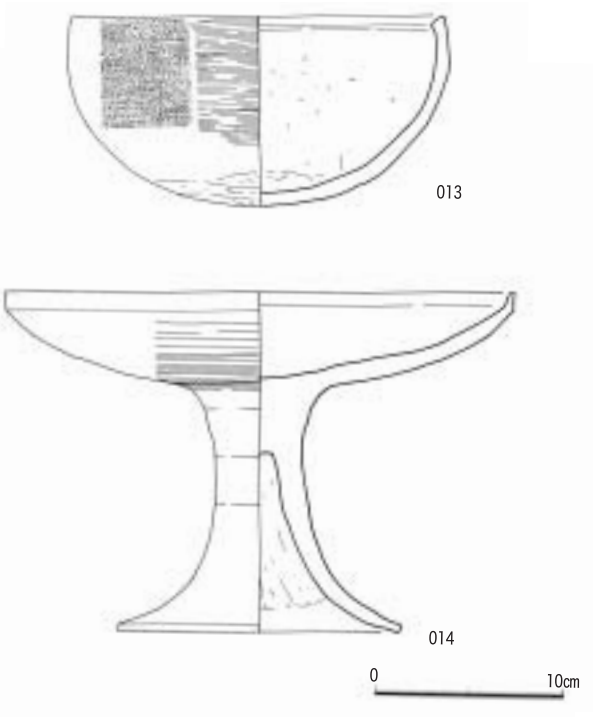
016は須恵器甕胴下半部の破片資料である。内外面とも暗灰色を呈し、内器面にはあて具痕、外器面にはハケ目調整を行った後に間隙を有するカキ目調整を施す。胴部～底部にかけて約1/2が遺存し、推定される胴部最大径は39.6cmを測る。

017は土師質甑基底部、いわゆる豊後大分形甑と呼称される甑の基底部破片である。胎土中には角閃石、石英等を含み、内外面とも茶褐色を呈する。内器面には同心円タタキ痕が認められ、ナデにより最終的に調整される。外器面には約２×３cmを基本サイズとする格子目タタキ痕が残り、内器面と同様に最終的にはナデ調整が施される。焼成は良好である。

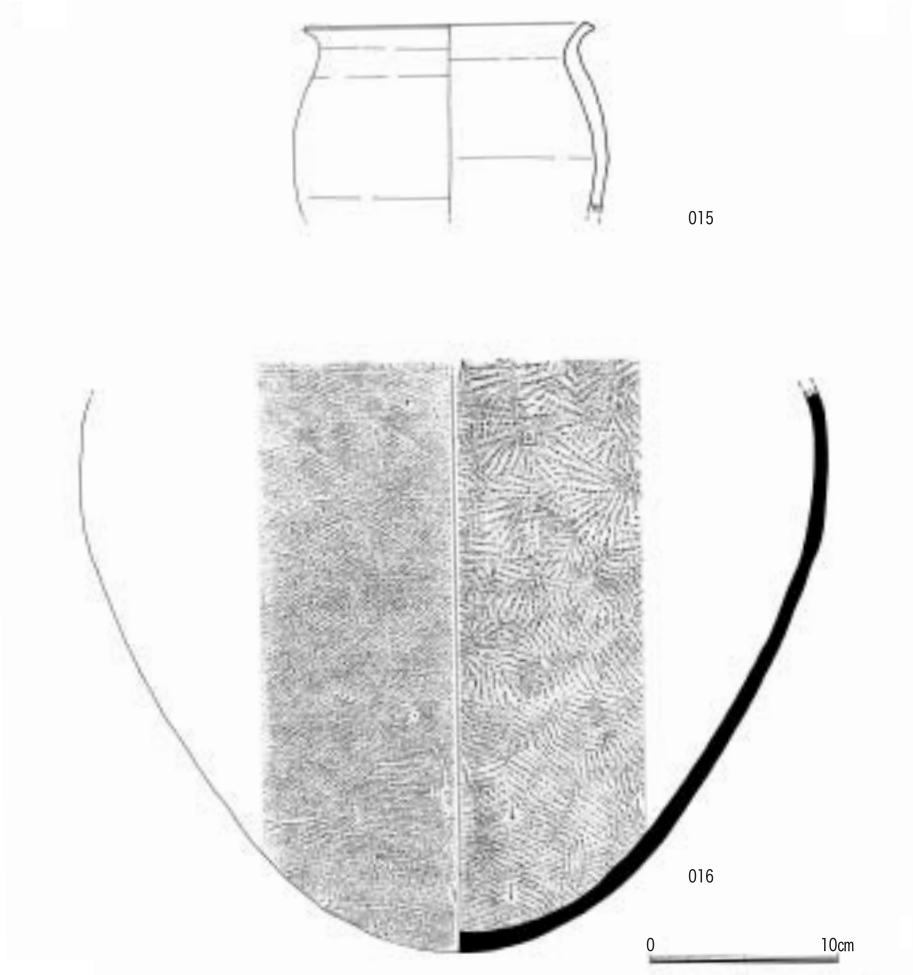
018は弥生土器壺の頸部の破片である。頸部には幅広の突帯が貼付され、突帯上面には竹管の刺突による竹管文が上下二段に施される。また、一部に浮文が認められ、突帯周囲には複数の浮文が存在していたものと推定される。内外面とも黄褐色を呈し、器表面はナデにより調整される。焼成は良好である。

019は長さ4.7cm、最大径1.3cmを測る土錘の完存品である。茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英粒を含む。

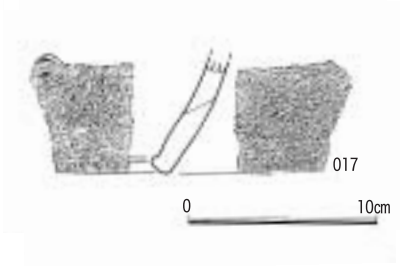
以上が090SD076から出土した主要遺物の概要である。018を除く他のものは概ね８世紀代に帰属されるものであり、前述したようにそのほとんどが破片資料である点、また出土状態に関しても、溝底に埋置あるいは一括廃棄をおこなったような状況は看取さ



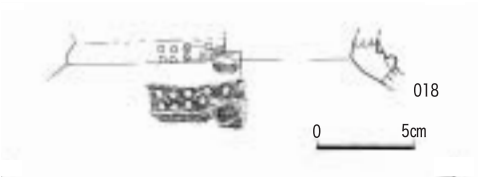
第42図　SD076出土遺物実測図②（1/4）



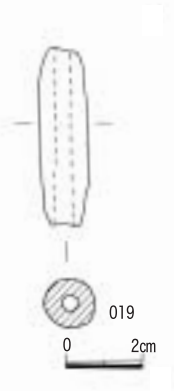
第43図　SD076出土遺物実測図③（1/4）



第44図　SD076出土遺物実測図④（1/4）



第45図　SD076出土遺物実測図⑤（1/4）



第46図　SD076出土遺物実測図⑥（1/4）

れないことなどから溝の埋め戻し作業時、あるいは埋没段階において埋土中に混入した資料であると判断される。しかしながら、出土資料の様相は８世紀後半～末に比定される属性要素を具備するものが大半を占めており、これ以降に帰属される遺物の出土が認められないことから、090SD076の機能停止時期をほぼ８世紀末前後と推定できよう。

090SD201（第47・48図）

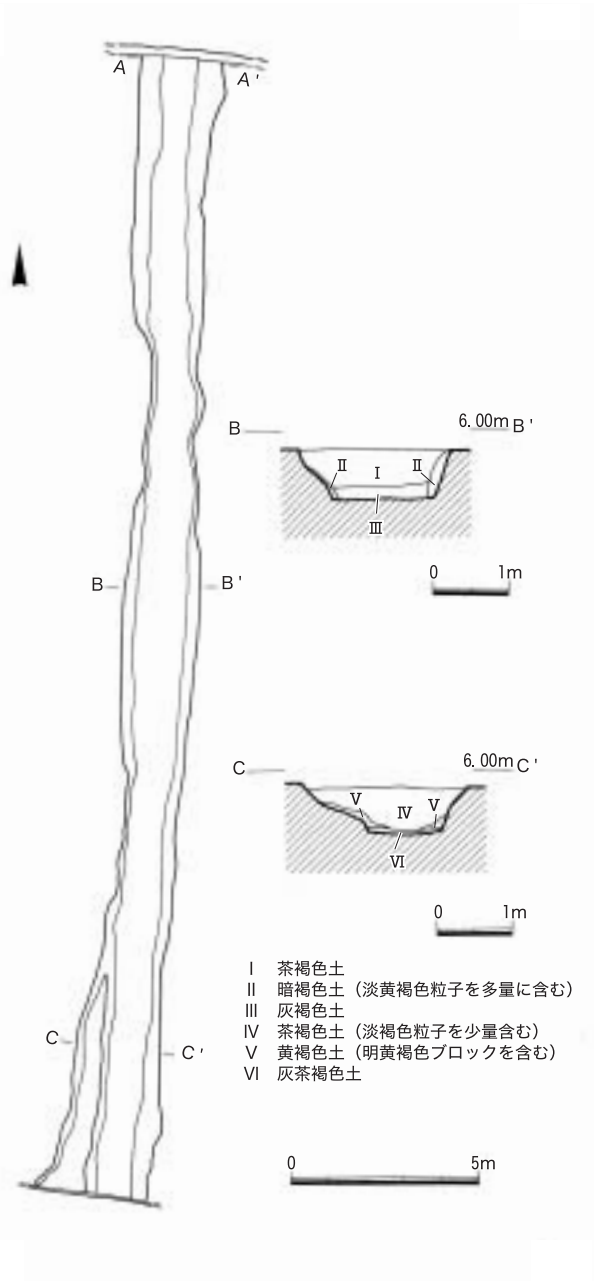
090SD201は幅1.7～2.0mを測る南北溝で断面形状は逆台形を呈す。遺物は概して少ないが、わずかに下城式甕形土器の口縁部が出土しており、中期前半以降の所産と推定される。

出土遺物（第49・50図）

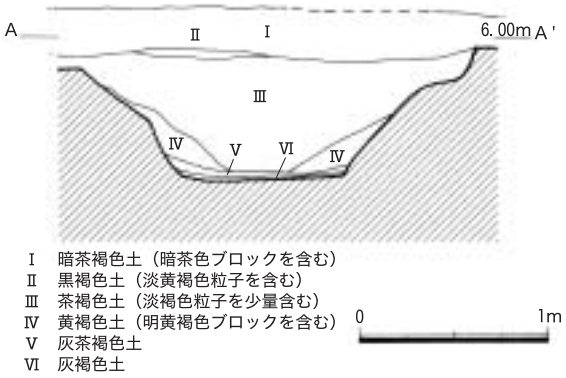
001は縄文時代後期に比定される鉢口縁部資料である。内外面とも淡黄白色を呈し、胎土中に角閃石、長石粒を含む。口縁部外面にはヨコ方向の沈線が施文される。

002は下城式甕の口縁部資料である。内面・淡茶色、外面・淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石粒を含んでいる。口縁端部は外方へわずかに反転し、口縁部外面下位に貼付された一条の突帯とともに刻みが施文される。内器面はナデ、外器面はタテ方向のハケ目により調整される。

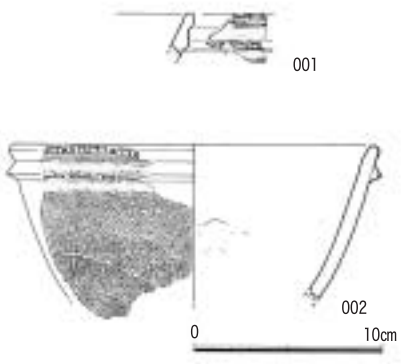
003は錘水形を呈する土錘片である。淡茶褐色を呈し、端部は欠損する。現存長3.2㎝、最大径1.3㎝、重さ5.3ｇを測る。



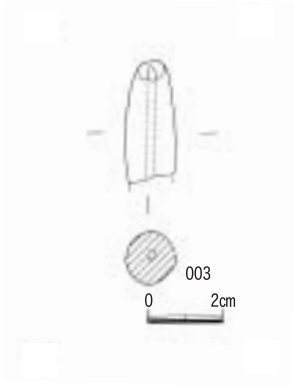
第47図　SD201平面・土層断面実測図（1/200・1/100）



第48図　SD201土層断面実測図（1/40）



第49図　SD201出土遺物実測図①（1/4）

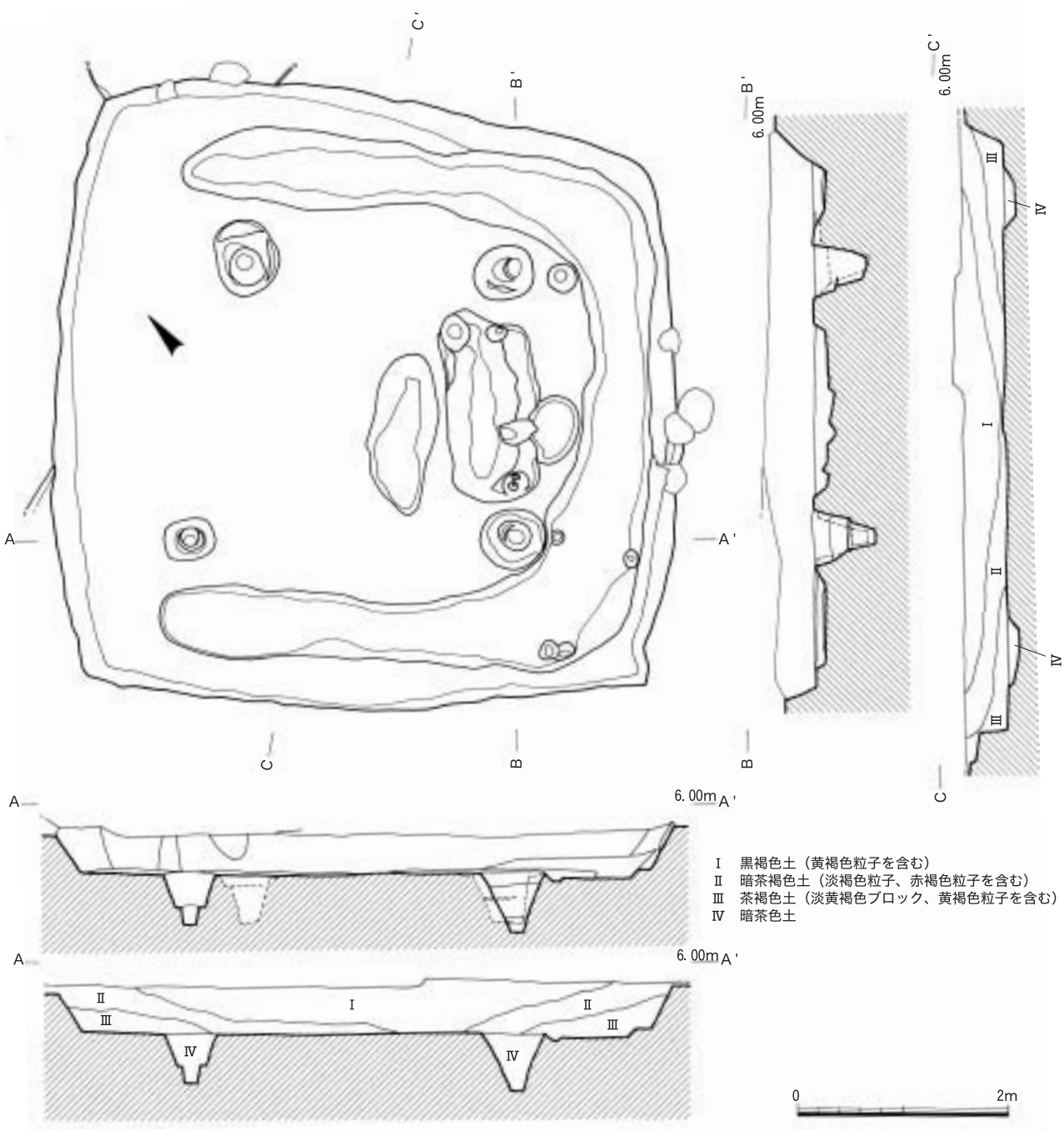


第50図　SD201出土遺物実測図②（1/2）

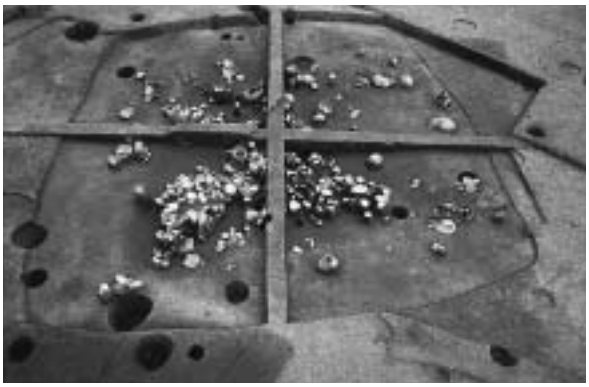
竪穴住居跡（ＳＨ）

090SH020（第51～53図）

090SH020は調査区の北西側Ｈ３区付近で検出した竪穴住居跡である。090SH069と090SX005と切り合い関係を有している。平面形は5.85m×5.75mのほぼ正方形を呈し、住居壁際３面に幅0.5m、深さ0.1mの壁溝がコの字状に巡る。壁溝に囲まれた中央部には主柱穴となる４基のピットと中央に地床炉と考えられる焼土が認められ、この南側には２基の楕円形土坑が付設される。楕円形土坑内には焼土とカーボン粒が堆積している。中央に近い土坑は1.55m×0.65m、最深部で0.10mを測る。その南側の土坑は平



第51図　SH020遺構実測図（1/60）



第52図　SH020遺物出土状況（北西方向から）



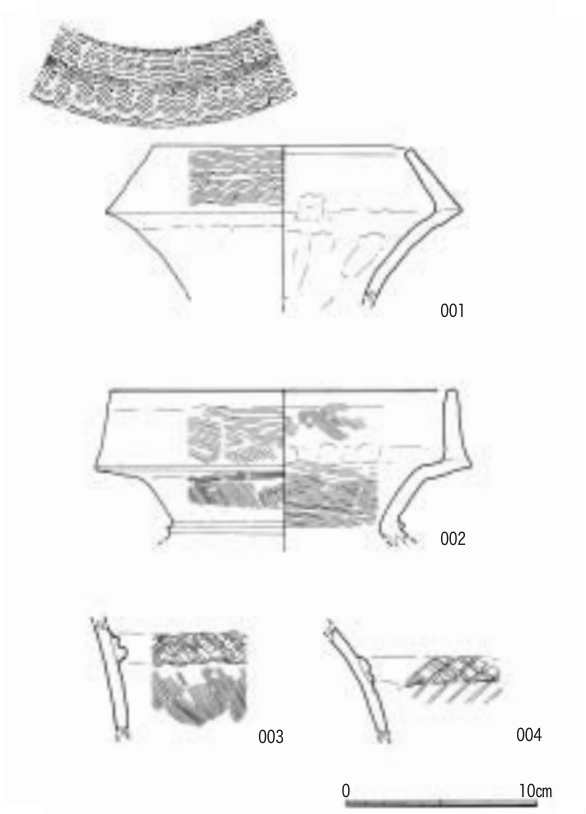
第53図　SH020完掘状況（北西方向から）

面規模が1.80m×0.9mと一回り大きく、深さ約0.2mと前者に比して深い。この２基は堆積埋土の状況などから同一機能を担っていたものと推定され、時期差が想定されるものの、両者の先後関係は不明である。住居の埋土はレンズ状の堆積をなしており、約0.45mの厚さを測る。住居内堆積土は３層に分別可能である。第１層の黒色土部分に大量の土器が廃棄されており、住居埋没途上に土器の大量廃棄が行われた状況を看取できる。これらの住居埋没途中に廃棄された土器の時期や、090SH020が090SH0069を切っていることを考慮すると090SH020の所産時期は後期終末～古墳時代初頭と考えられる。

出土遺物（第54～84図）

出土遺物には壺、甕、鉢、台付鉢、高坏、器台、小型器台、ミニチュア土器、製塩土器、すり石、鉄製刀子、鉄製鍬先がある。

壺形土器には「安国寺式土器」からの系譜を引く複合口縁壺、球形をした胴部に外方へ大きく開く短口縁をもつ弥生時代後期から系譜をたどることのできる壺、素口縁を有する壺、球形化傾向の胴部に外方へ立ち上がる口縁部をもつ壺、二重口縁壺、長胴器形に二重口縁を意識した外方へ開く口縁部をもつ壺などがある。



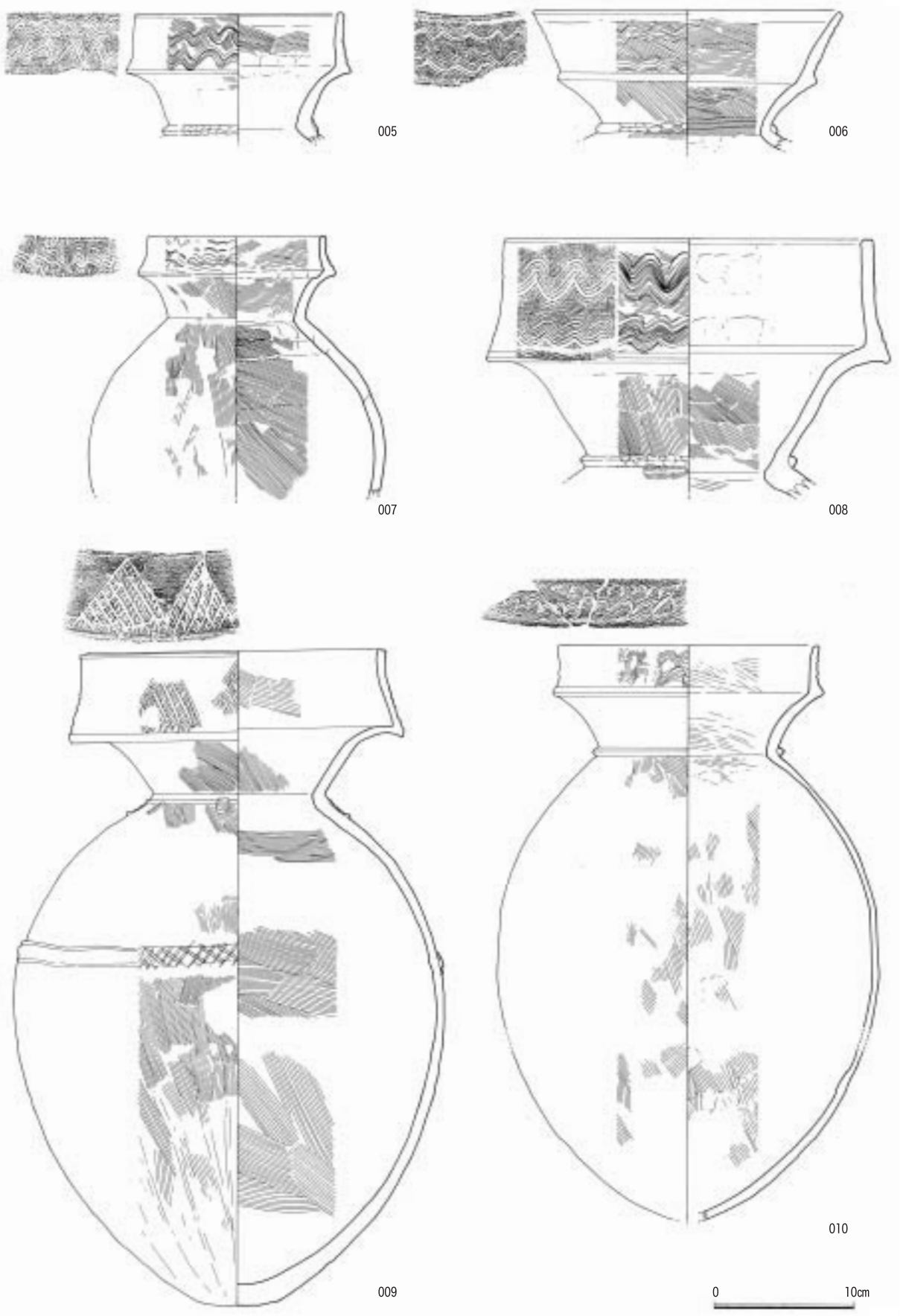
第54図　SH020出土遺物実測図①（1/4）

壺形土器

001～010は「安国寺式土器」からの系譜を辿ることのできる複合口縁壺である。

001は複合口縁壺の口縁部である。複合口縁部には単位七条の櫛描波状文が上下二段に施紋される。上段が小波波状文、下段が曲水波状文に相当する。かなり整備された「用意された櫛状工具」により施文されている。内外面ともに淡赤褐色を呈し、胎土中には角閃石等を含む。復元口径13.8cmを測る。

002は口縁部分が完存する複合口縁壺口縁部片である。内外面とも淡茶褐色を呈し、口縁部径17.8cmを測る。



第55図　SH020出土遺物実測図②（1/4）

003・004はいわゆるベルト状突帯と呼称される刻目突帯である。通常複合口縁壺に貼付される例が圧倒的に多く、同種の複合口縁壺の胴部破片と推定される。

003は内外面とも淡茶灰色を呈する。突帯上面には格子目状の刻目が施される。

004も同様の刻目突帯である。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石・長石粒を含む。

005は複合口縁部外面に櫛描波状文を上下二段に施す口縁部である。口縁部分は完存する。口径14.4cmを測る。

006は外方へ直線的に大きく開く口縁部を有する複合口縁壺である。ハケ目原体と同一と考えられる工具により上下二段に小波汲状文を施したものである。上下二段の施文工具は同一のものである。胎土中には角閃石、長石、金雲母粒を含む。内外面の色調は淡赤褐色～淡灰褐色を呈し、復元口径22.0cmを測る。

007は小振りな複合口縁部を有する複合口縁壺である。小汲波状文である。頸部ならびに胴部に突帯等は貼付しない。内外面とも淡茶褐色を呈する。

008は頸部に断面三角形の貼り付け突帯を貼付する複合口縁壺の口縁部である。ハケ目原体と同一と推定される櫛状工具により施文された櫛描波状文である。上下二段に施文されている。賀川光夫氏(註1)による分類の流水波状文に相当するものである。口縁端部で約1/2残存し、復元口径26.0cmを測る。

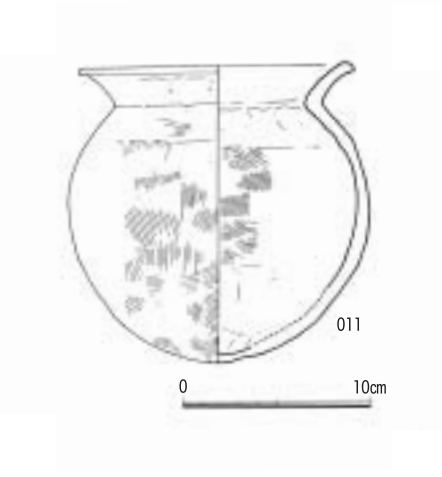
009は大きく外反した口縁部に若干内傾気味に立ち上がる複合口縁を有する。複合口縁部は連続鋸歯状文の中にヘラによる斜格子状の沈線文を施文し、さらに刺突文様により充填している。頸部に一条の貼り付け突帯を貼付し２本１単位の横刻みを施した縦長の浮文を垂下する。胴部には最大径部よりも若干上位の位置に偏平な突帯を一条巡らし、格子状の刻みを施す。淡黄褐色を呈し、胎土中に角閃石、橙色粒子を含む。復元口径21.7cm、器高46.6cm、胴部最大径30.5cmを測る。当該地域の壺Ａ(註2)における複合口縁部の施文文様は連続「ハ」字形文からの発展形態として櫛描波状文が成立、盛行すると考えられているが、本資料のような連続鋸歯文は弥生後期終末に出現し、古墳時代初頭頃に出現頻度のピークを迎える。

010は頸部に一条の貼り付け突帯を貼付する複合口縁壺である。口縁部外面に５本単位の櫛描波状文を２段施す。090SH020出土土器に示される時期は、相対的に壺Ａの複合口縁部の拡張化が認められ、それに伴い波状文は２段施される例が多い傾向にある。胴部は倒卵形を呈し、底部を欠損するが、残存部から推定される底部形状は尖り底気味の丸底である。

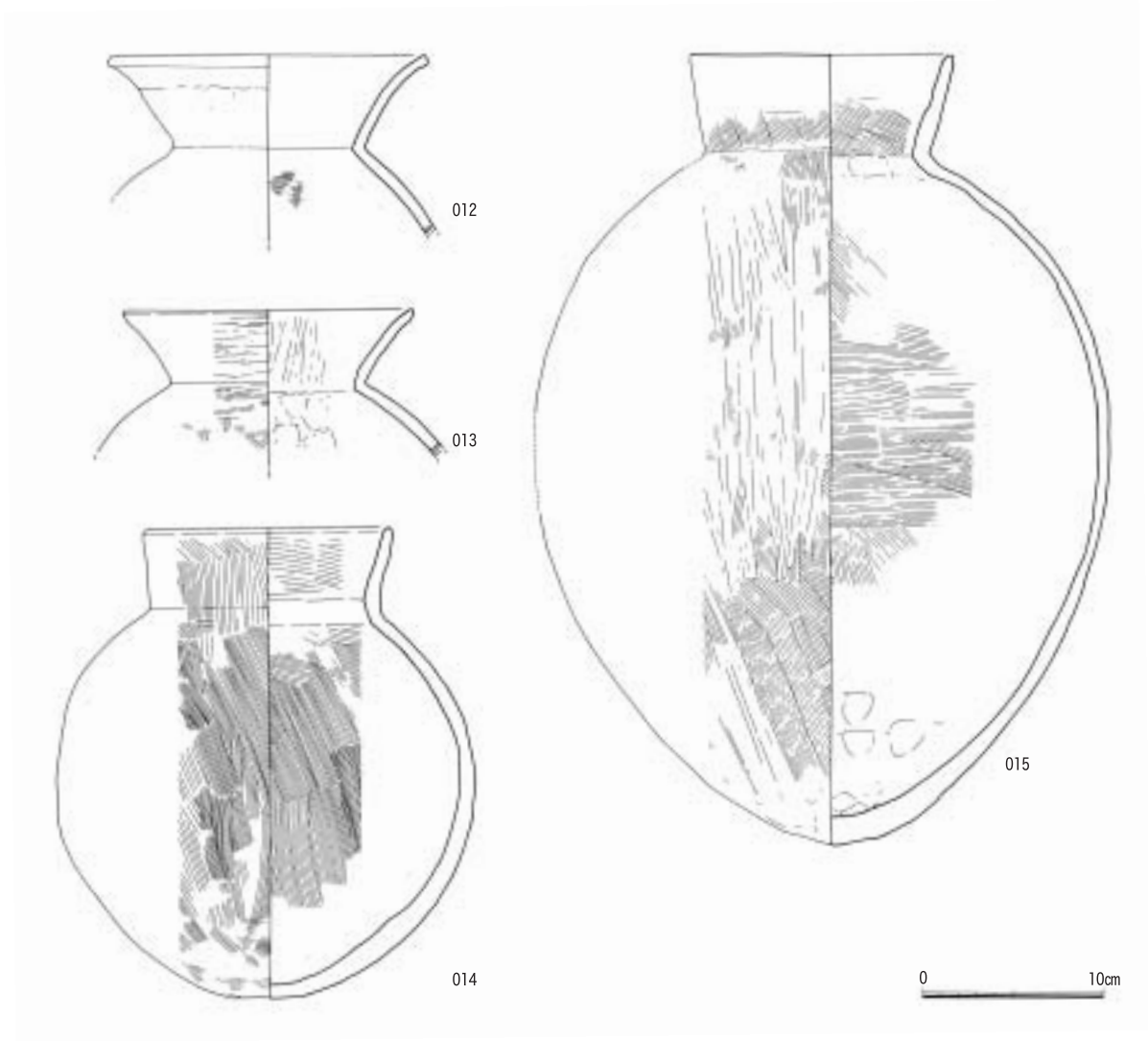
011は球形の胴部に外方へ開く短口縁をもつ壺である。完存品であり、外器面には赤色塗彩がなされている。内器面調整にはハケ目と工具によるナデが施され、外器面上半はヨコナデ、下半はタテ方向のハケ目により調整される。底部付近には環状にススの付着が認められる。

012～015は素口縁を有する壺形土器である。

012はなで肩状の肩部に締まった頸部が接続し、そこから外方へ大きく開く口縁部を有する。器表面は剥離しており、器面調整の詳細は不明であるが、一部にハケ目が認められる。



第56図　SH020出土遺物実測図③（1/4）



第57図　SH020出土遺物実測図④（1/4）

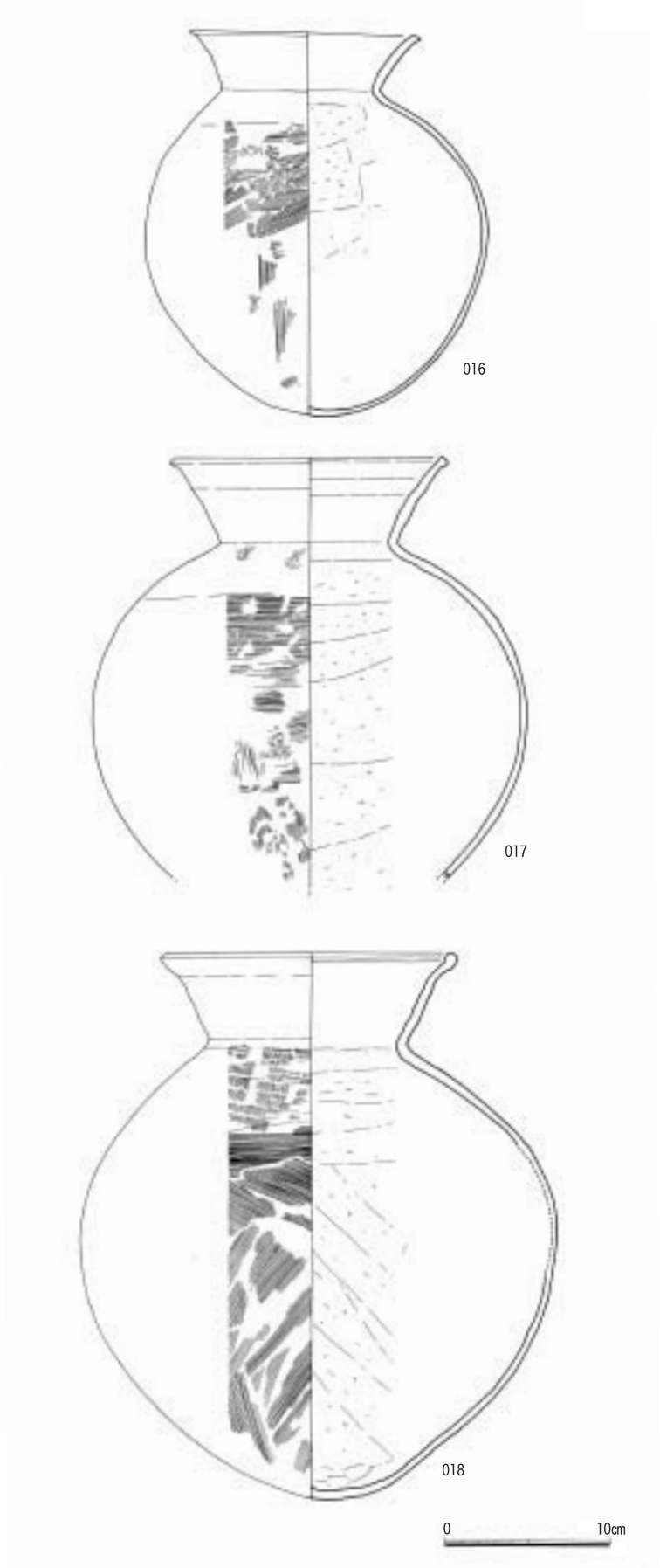
013も012と近似した形状を示す壺形土器である。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、橙色粒子、長石粒を含む。内器面はミガキ 、ナデ、工具ナデ、外器面はミガキ、ハケ目後ナデによって調整される。

014は球形気味の胴部に直立する口縁をもつ壺形土器である。完存品であり、淡茶褐色を呈し、内外器面ともハケ目により調整される。

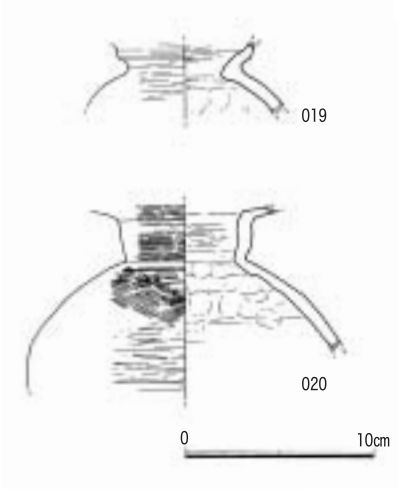
015は倒卵形の胴部に直口縁が接続する壺形土器である。器表面はハケ目、ナデ、ミガキ等により調整される。

016〜018は球形化傾向にある胴部に外反気味に開く広口の口縁を持つ壺形土器である。内器面にヘラケズリを施す点で３資料とも共通する。

016は、丸底の底部を有し、胴部内器面は入念なヘラケズリが施される。胴部外器面の調整は、肩部がヨコ方向のハケ目調整の後ヨコナデを実施し、その下位から胴中位までにはヨコ方向のハケ目調整痕を



第58図　SH020出土遺物実測図⑤（1/4）



第59図　SH020出土遺物実測図⑥（1/4）

残す。胴部下半にはタテ方向のハケ目調整が施される。胎土中には金雲母、石英粒を内包する。

017も016と同様の形態的特徴を持つ壺形土器である。ヘラケズリにより薄く形成された胴部器壁から外方へ立ち上がる口縁部が接続する。外面の器面調整についても016と同様の特徴を示し、底部から肩部に向かいタテハケ→ヨコハケ→タテハケ＋ヨコハケ＋ヨコナデが施されている。胎土中に石英、長石、金雲母粒を含み、内外面とも淡茶褐色を呈する。016との相違点は、口縁部形状にある。具体的には口縁端部を肥厚させる点にあり、この特徴は018により顕著である。

018は前二者と諸特徴を同じくするが、口縁端部形状と底部形状を異にする。口縁端部は内面を強く肥厚させ、内面に隆起部を形成する。底部は丸底化を指向しているものの、若干凸レンズ状を呈するような形状となっている。内底

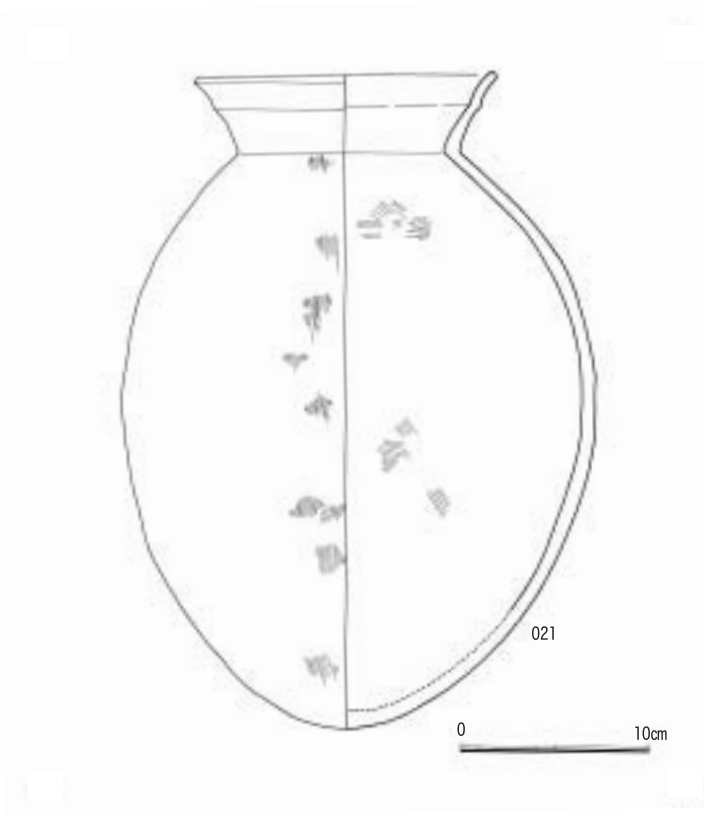
面には指頭痕が明瞭に残る。胎土中には石英、角閃石、金雲母粒を内包し、淡茶褐色を呈する。

019・020は二重口縁壺である。二重口縁壺についてはこの２点のみが確認されているが、いずれの資料も頸部から肩部にかけての破片資料であり、全体形状は不明である。

019 は球形になると推定される胴部から、殆ど頸部を経ずに二重口縁部へと至る。内外器面とも丁寧なヨコ方向のミガキにより仕上げられている。

020 は球形胴からやや外方へ立ち上がる頸部上端から二重口縁部が展開する二重口縁壺である。内外面とも赤橙色を呈し、器面調整はハケ目とヘラミガキにより実施される。外面調整、口縁内部調整は入念に行われているのに対し、胴部内面には粘土接合痕が明瞭に残り、最終調整として施されるナデ調整も総じて雑である。

021 は口縁部形状に二重口縁形状への意識が感じられる壺形土器である。倒卵形を呈する胴部は完存し、これに続く口縁部は約 1/2 が遺存する。淡黄褐色を呈し、器面調整はハケ目とナデにより行われる。胎土中には金雲母、石英、角閃石、橙色粒子を含む。



第60図　SH020出土遺物実測図⑦（1/4）

甕形土器

本遺構から出土した甕形土器は、形態、成形調整技法等により以下のように大別することができる。

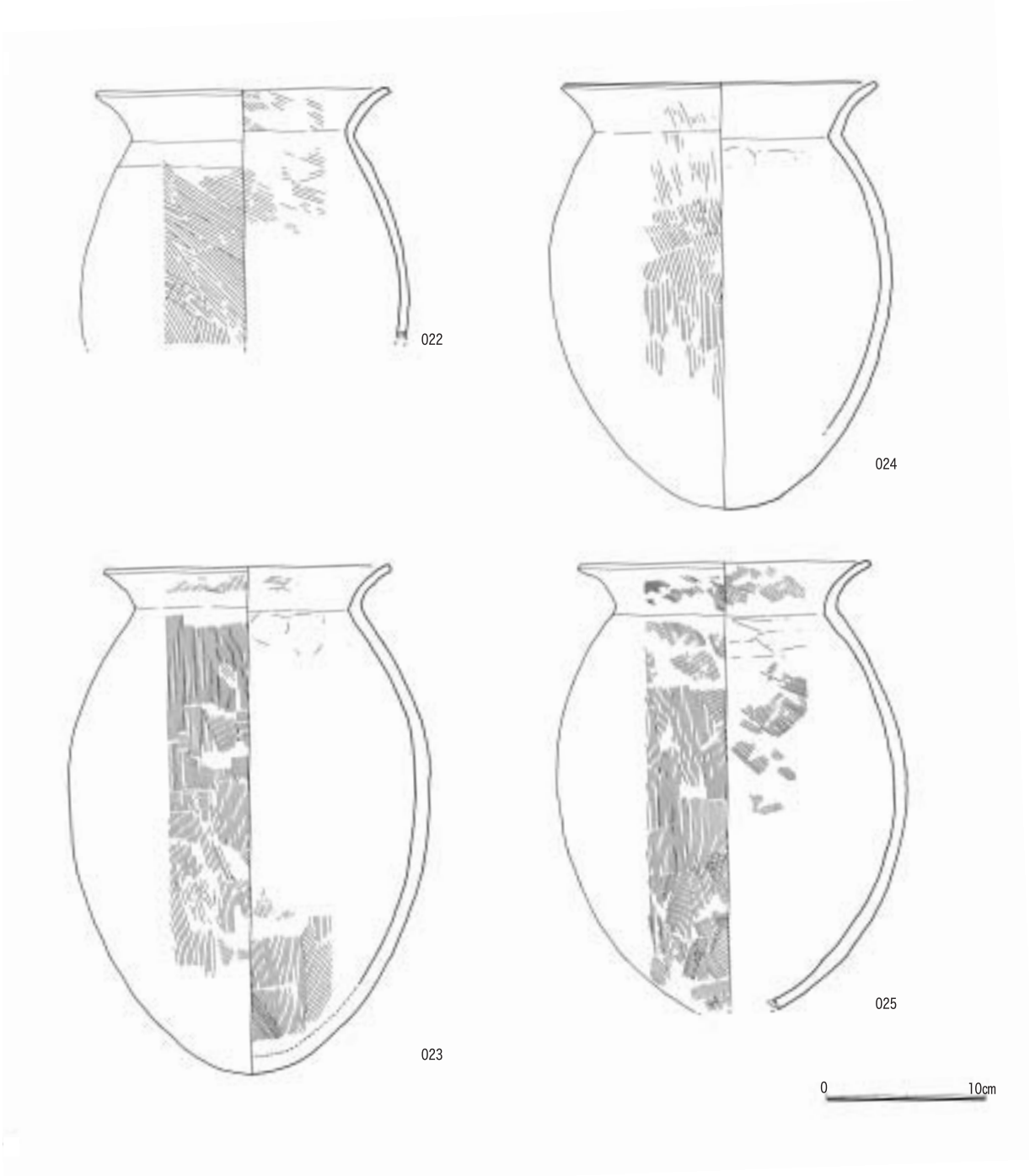
・弥生時代後期甕から直接系譜を辿ることのできる長胴形態を呈するもの。（Ａ類甕）
・器形上は長胴形態を呈するが、内面にヘラケズリなどの新来の技術導入がなされているもの。（Ｂ類甕）
・明らかに布留式等の技術導入と模倣を意図して製作されたと想定されるもの。（Ｃ類甕）

Ａ類甕

在来の弥生時代後期甕からの直接系譜の甕であり、022～034がこれに相当し、長胴傾向の胴部に凸レンズ状の丸底底部を有する。

022は淡黄褐色を呈する甕口縁部破片である。内外器面ともハケ目により調整されるが、内器面および外器面上部はナデにより仕上げられる。胎土中には石英、長石、角閃石粒を含む。

023は図上において完形復元の可能な甕である。

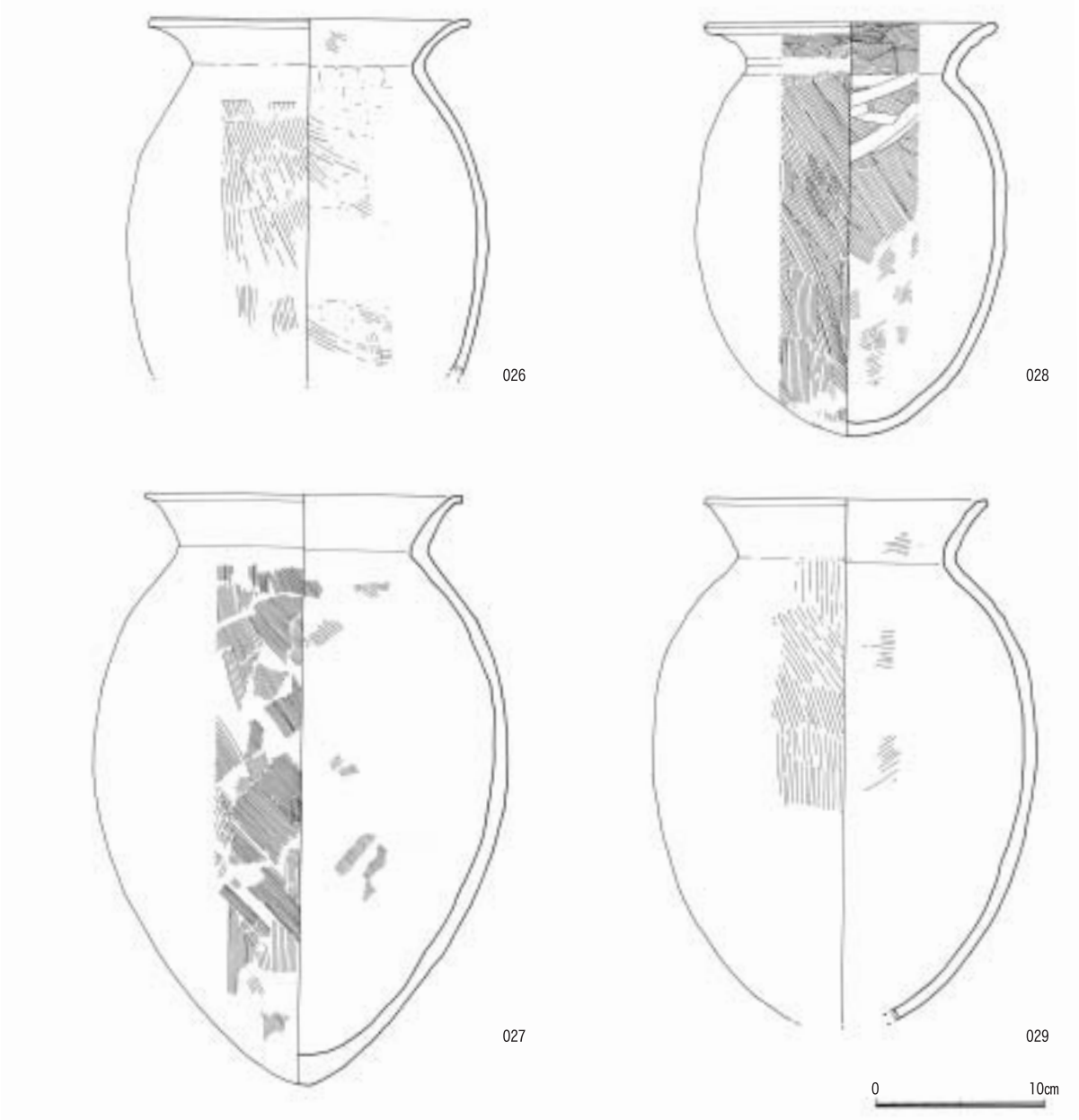


第61図　SH020出土遺物実測図⑧（1/4）

024は内外面とも淡茶黄色を呈する甕であり、口径19.2㎝、器高26.7㎝を測る。器表面の随所には二次被熱による剥離が認められ、また、外面には環状にススの付着が認められる。

025は底部を欠損するが、ほぼ完形に復元することのできた甕である。口径17.8㎝、胴部最大径21.7㎝を測る。胎土中には角閃石、長石、石英粒等を含み、淡茶褐色～黒色を呈する。本資料も024と同様に外器面に環状のススの付着が認められる。

026は淡黄褐色を呈する甕であり、胎土中には角閃石粒等を内包する。内外器面ともタテ方向のハケ目により調整される。底部を欠損する。



第62図　SH020出土遺物実測図⑨（1/4）

027は尖り気味の底部を有する甕である。住居埋土中の破片接合により図上復元の可能なまでの資料となった。胎土中には金雲母、石英、長石粒を含み、淡茶褐色を呈する。

028は入念なハケ目により調整された甕である。底部は丸底を呈し、頸部から外反して開く口縁部は厚ぼったく、全体のイメージも鈍重である。色調は茶褐色～赤褐色を呈し、器外面に環状に付着したススを確認することができる。

029は住居埋土中の暗茶土層から出土した資料である。胎土中には角閃石、長石粒を含み、淡黄褐色を呈する。

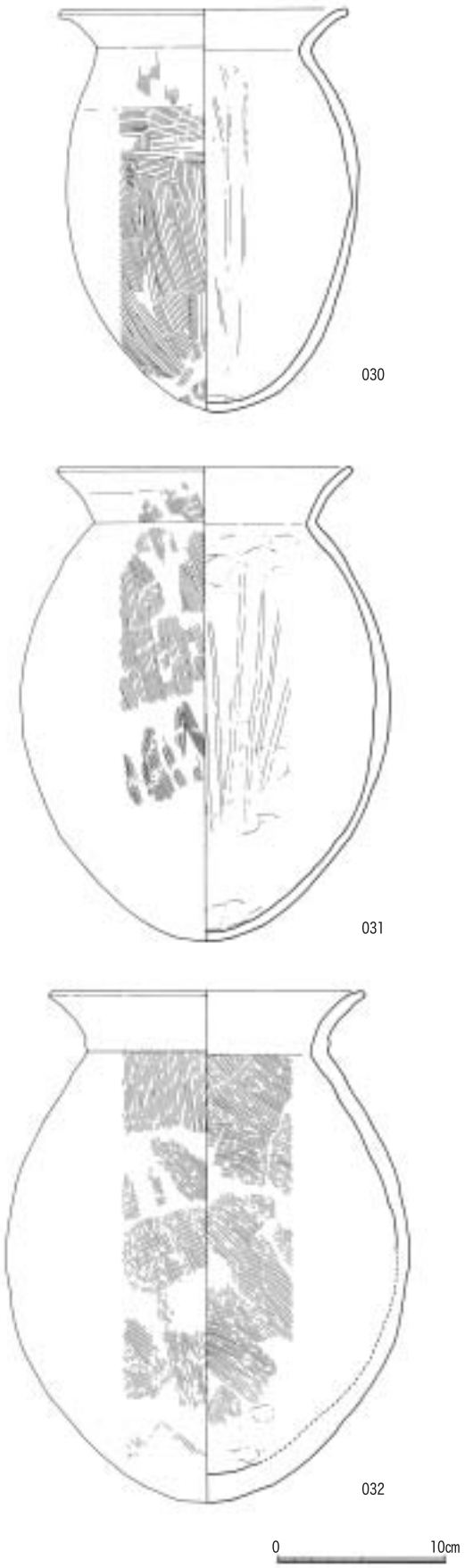
030は丸底を呈する甕である。内外の器面調整は他のものと同じくハケ目主体の調整となるが、内器面はその後丁寧なナデの後、タテ方向のヘラミガキが施される。ほぼ完存する資料である。外器面底部に

スの付着が認められる。口径16.6cm、器高23.9cm、胴部最大径17.1cmを測る。

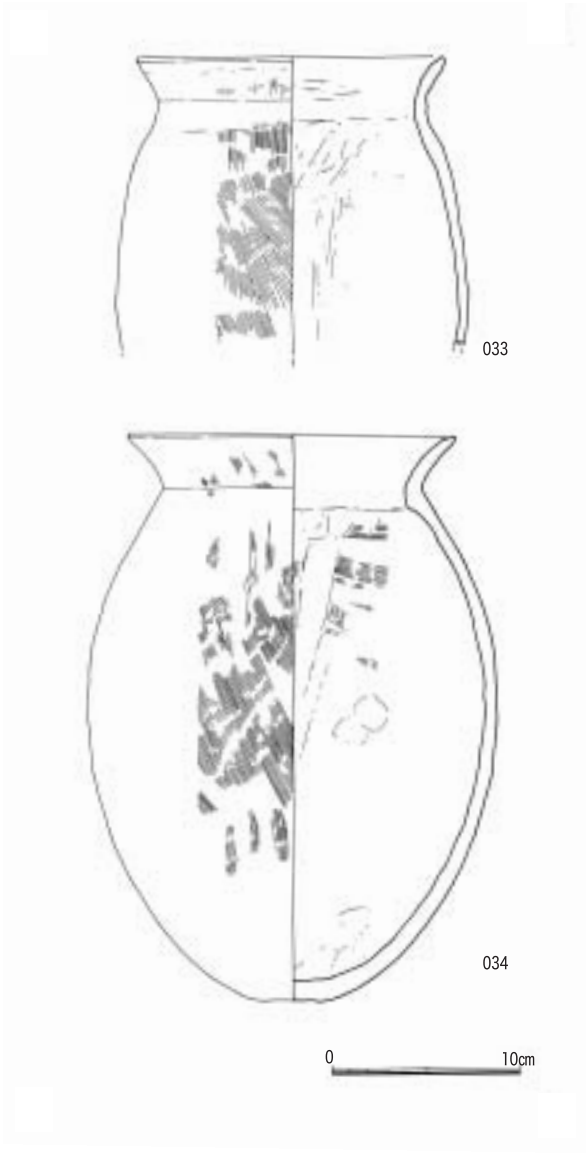
031 は住居埋土中の暗茶褐色土と黒色土出土資料が接合した資料である。内外面は茶褐色を呈し、底部は丸底形状をなす。本資料も030と同様に内面の最終調整にタテ方向のヘラミガキが施される。

032は、重心が他のものに比べ、下位にある器形をなす甕である。復元口径18.2cm、器高30.4cm、比較的下位に位置する胴部最大径は23.7cmを測る。器壁は他のものに比して厚く、重厚感をもっている。

033 は胴部から口縁部に緩慢な屈曲をもって立ち上がる甕である。淡黄褐色を呈し、外器面は細密な



第63図　SH020出土遺物実測図⑩（1/4）



第64図　SH020出土遺物実測図⑪（1/4）

ハケ目により仕上げられる。内器面はナデ主体の調整となっているが、ヘラミガキ風のナデ調整が一部に認められる。上半部はほぼ完存し、外器面には環状にススの付着が認められる。

034は黒色土埋土から出土した甕である。底部は平底のような形状を示しているが自重による押圧により変形したと考えられ、本来は丸底であったと考えられる。復元口径17.3cm、器高30.5cm、復元される胴部最大径は21.3cmを測る。

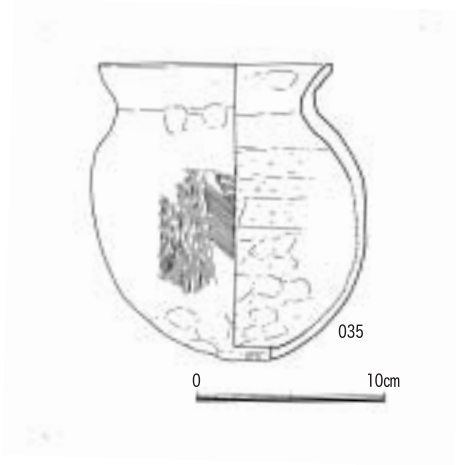
B類甕

035〜041は弥生時代からの在地色の強い甕に、新来の製作成形技術が導入された甕である。具体的には長胴傾向の甕に内器面にヘラケズリを施した甕である。

035は扁球形の胴部に短い口縁部がつく甕である。内器面はヘラケズリの後にナデにより仕上げられ、外器面はタテ方向のハケ目とナデにより調整される。淡赤橙色を呈する。復元口径12.3cm、器高15.7cm、胴部最大径14.3cmを測る。底部には焼成後に内側から穿たれた穿孔が1ヶ所認められる。

036はほぼ完存する資料である。色調は淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、長石、角閃石粒を含む。内底面付近にはヘラケズリ技法を摸したと思われる工具ナデの痕跡が残る。しかしながら、器壁の薄壁化は進行しておらず、あくまで技法の模倣段階に留まっている。

037は内底面付近に036と同様のヘラケズリを意識したと考えられる工具ナデの痕跡が残り、口径19.8cm、器高36.2cm、胴部最大径26.1cmを測る完存資料である。焼成は良好である。



第65図　SH020出土遺物実測図⑫（1/4）

038も前二者と同様に内器面の底部付近にケズリ風の工具調整を残す資料である。内外器面はタテ方向、あるいは斜方向のハケ目によって調整される。内器面の工具調整による器壁の薄壁化は達成されていない。胎土中には角閃石、金雲母、石英、長石粒を含む。

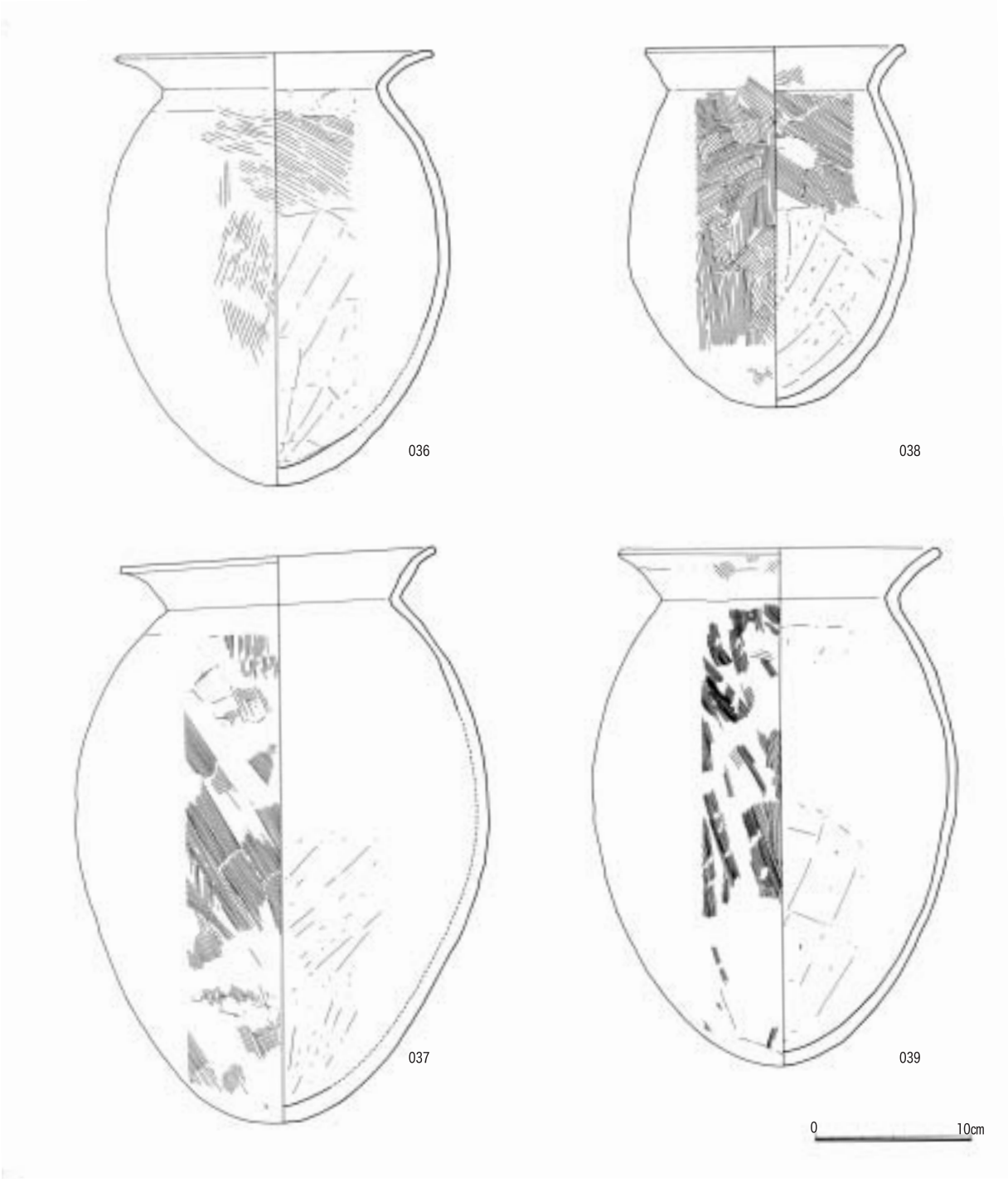
039も036〜038と同様の資料といえる。外器面は細密なタテ方向のハケ目とナデにより調整され、内器面はケズリ風の工具ナデが施される。本資料の内面整形も本来のヘラケズリのようなダイナミックな薄壁化は達成されず、あくまで技法の模倣レベルを越えるものではない。口径19.8cm、器高33.2cm、胴部最大径22.4cmを測る。

040・041もB類甕の範疇で考え得る資料である。内器面は最終調整に丁寧なナデ調整が施されるために工具痕を明瞭に残さないが、基本的にはヘラケズリを意識した工具ナデが実施された資料である。

040は胎土中に角閃石、石英、長石粒を含み、淡褐色を呈する。概して調整は丁寧であり、ハケ目もあまり残さない。口縁内面にはミガキ風のナデ調整が施される。

041は赤褐色を呈し、内器面は丁寧なナデ調整、外器面はタテ方向のハケ目調整が施される。器外面には環状にススの付着が認められる。

042は復元口径16.2cmを測り、内面・淡茶灰色、外面・淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。内器面の調整はヘラケズリと工具ナデ、外器面はヨコナデによる器面調整がなされている。外器



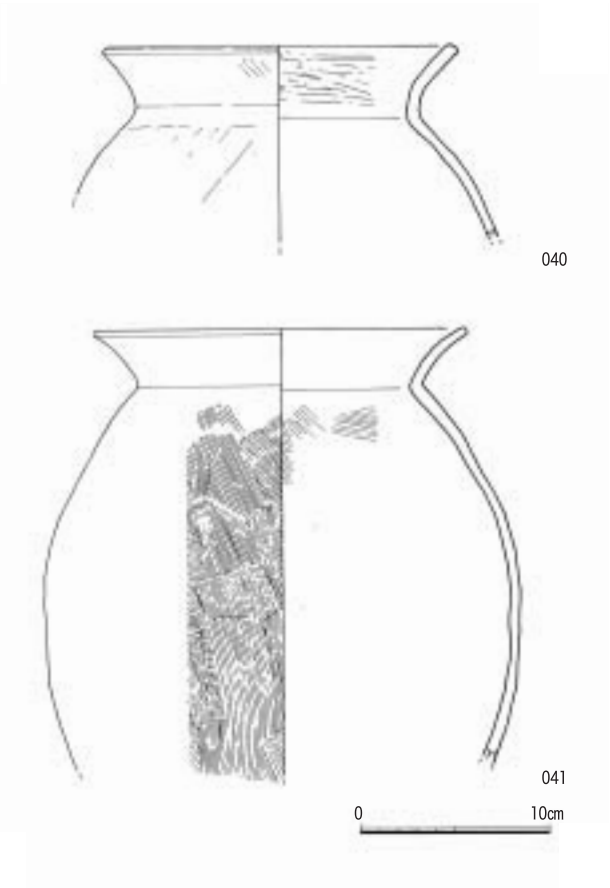
第66図　SH020出土遺物実測図⑬（1/4）

面にはススの付着が認められる。

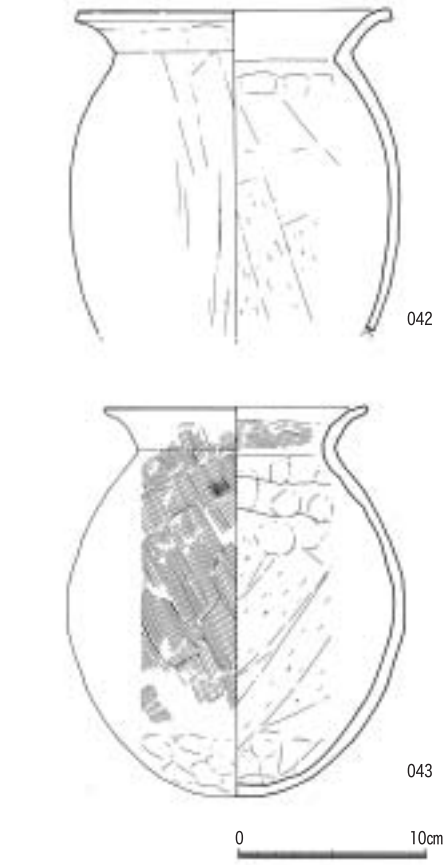
043は復元口径13.6cm、器高20.7cmを測る甕形土器である。内外面とも淡茶褐色を呈し、内器面はヘラケズリとナデ、外器面は斜方向のハケ目とナデにより調整される。

C類甕

044～055はいわゆる布留式系甕の属性を具備した甕資料である。甕資料に現れる属性には、個体別に



第67図　SH020出土遺物実測図⑭（1/4）



第68図　SH020出土遺物実測図⑮（1/4）

強弱が認められ、便宜的にC類甕として一括しているが、その様相は一様でない。

044は口縁部分で約1/6が遺存する資料である。胴部下半が欠損し、B類甕との分別が困難な資料であるが、肩部の張り具合や内面ケズリの薄壁化の達成度などを考慮して一応C類甕に帰属させた資料である。淡茶褐色を呈し、復元口径14.6㎝を測る。

045も044と同様に口縁部分で約1/6程度が遺存する資料である。内器面はケズリ後に丁寧なナデ調整が施されており、ケズリ痕を明瞭に認めることはできない。口縁端部と肩部の形状、並びにハケ目後の頸部下のヨコナデ調整に布留式系甕に通じる属性への強い意識が感じられ、C類甕に帰属させている。色調は淡茶褐色を呈し、復元口径16.0㎝を測る。

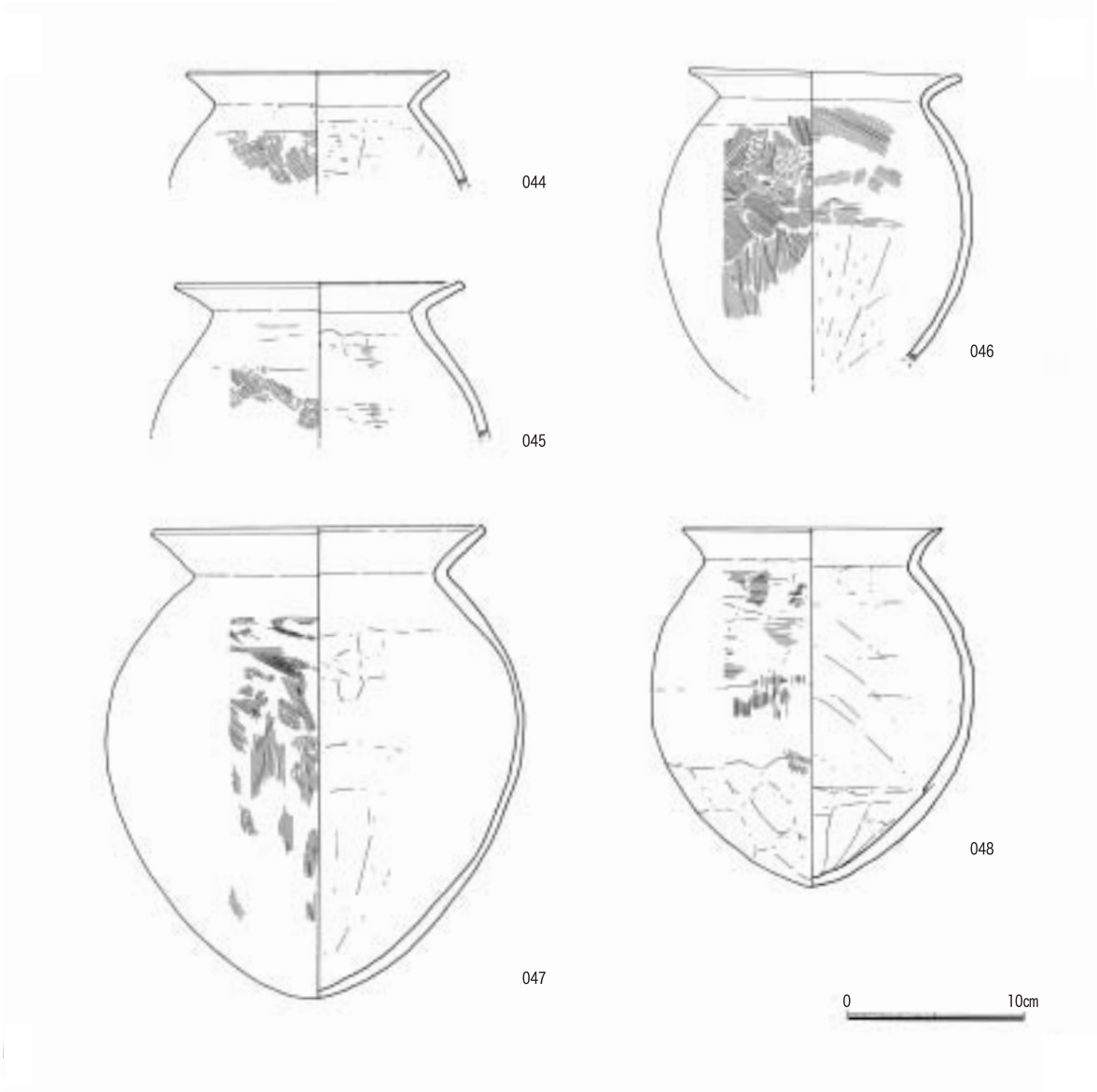
046もまた、B類甕との分別が難しい資料であるが、044あるいは045と同様の理由によりC類甕とした。胎土中には金雲母、角閃石、石英粒を含み、淡褐色を呈する。口径15.1㎝を測り、器表面は被熱のため部分的に剥離する。

047は口径18.2㎝、器高26.9㎝、胴部最大径23.0㎝を測る。口縁部内面は肥厚を意識し、まさに布留式系甕の特徴を摸している。内器面はケズリの後にナデ調整を施しているため、ケズリ痕を明瞭に認めることはできないが、在地系譜の土器とは明らかに異なる薄壁は、そこにケズリ技法の導入を示唆している。外器面についても、タテ方向のハケ目の後に体部上半はヨコ方向のハケ目が施され、布留式系甕の諸特徴の模倣がおこなわれている。胎土中には角閃石、長石粒等を含み、色調は内面が淡茶褐色～黒

色、外面が茶褐色～灰黒色を呈する。口径18.2cm、器高26.9cm、胴部最大径23.0cmを測る。器外面にはススの付着が認められる。

048もまた、随所に属性模倣が認められる資料である。底部は尖り気味に仕上げられ、口縁部は先細り気味に整形される。器形もさることながら、外器面調整においても、タテ方向のハケ目の後に胴部上半部については、ヨコ方向のハケ目調整がなされている。胎土中には金雲母、橙色粒子、長石粒等が内包され、淡茶褐色を呈している。

049は甕口縁部である。小型の鉢形状を呈するものである。口縁部片で約1/6が遺存する。口縁端部を若干肥厚させ、内器面はヨコ方向のヘラケズリが施される。色調は淡茶褐色を呈し、復元口径14.4cmを測る。



第69図　SH020出土遺物実測図⑯（1/4）

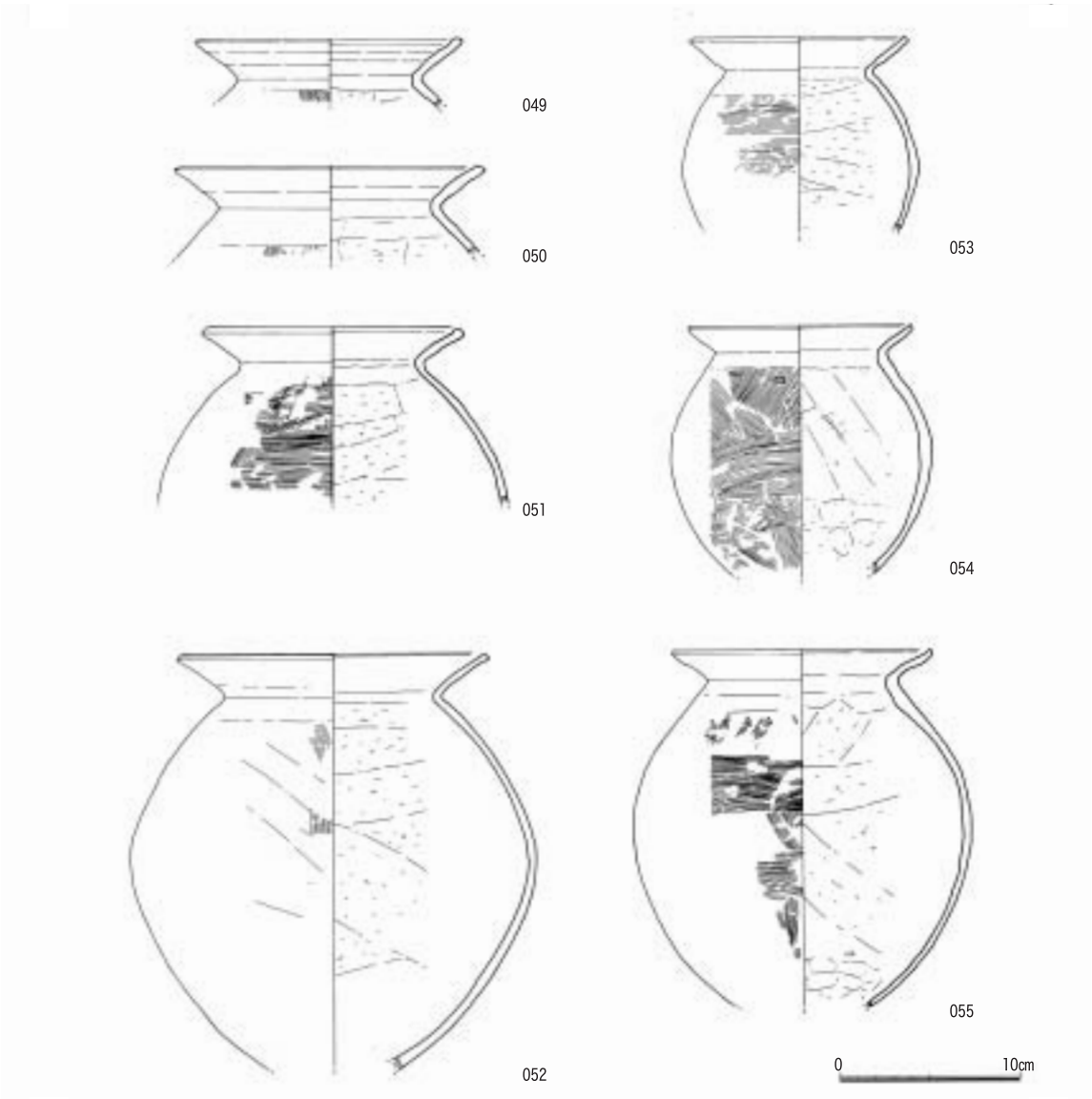
050は049と類似の特徴を有する甕口縁部である。長胴傾向を残す甕で、内器面にケズリ整形痕を残す。淡赤橙色～淡黄白色を呈し、胎土中には石英、長石、金雲母粒等が混和材として混入される。口縁端部内面は肥厚を意識した有段があり、端部上面には平坦面が形成される。復元口径17.2cmを測る。

051も布留式系甕の影響のもとに製作された甕である。口縁端部には肥厚化が認められる。外器面にはタテ方向のハケ目調整の後にヨコ方向のハケ目が最終調整として施される。内器面のヘラケズリは050などと同様に口縁屈曲部より若干下がった位置からなされている。復元口径13.6cmを測り、焼成は良好である。暗茶土層からの出土である。

052は内器面をヘラケズリし、外器面はハケ目の後に板状工具により仕上げられる。口縁端部外面につまみ上げ状の肥厚部を形成する。器外面にはススの付着が認められる。

053・054は少し小振りな形態を示す甕である。053は約1/2が遺存する資料であり、復元口径11.6cmを測る。内器面はヘラケズリ、外器面はタテ方向のハケ目を施した後に外器面上半にはヨコ方向のハケ目による調整により仕上げられる。

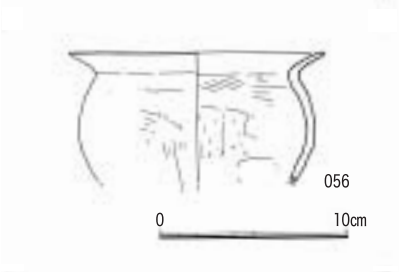
054も内外器面とも053と同様の器面調整により調整されるが、本資料の肩部には櫛状工具による水平



第70図　SH020出土遺物実測図⑰（1/4）

方向の刺突文が認められ、特徴のひとつとなっている。復元口径は12.2cmを測る。

055は復元口径14.0cmを測る甕である。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、金雲母、長石粒等を含む。内外器面の調整は、上述の甕Cと同様に外面にタテ方向を主体とするハケ目を施した後に胴上半部にヨコ方向のハケ目により調整するもので、054と同じように肩部に刺突列点文が認められる。内器面は比較的丁寧なヘラケズリが実施され、底部付近には無数の指頭圧痕が観察される。



第71図　SH020出土遺物実測図⑱（1/4）

056は復元口径13.2cmを測る鉢である。内面・淡茶褐色、外面・淡茶褐色～淡茶黒色を呈し、内器面はヘラケズリにより調整される。

鉢形土器

057～060は口径が30.0cm内外を測る大型の鉢である。頸部に貼付突帯をもつものともたないものの二者が存在する。

057は復元口径25.4cmを測る広口の鉢である。内外面とも淡茶褐色を呈する。内器面は斜方向のハケ目により仕上げられ、外器面はハケ目の後、丁寧なナデにより調整される。

058は頸部の屈曲部に断面三角形の貼り付け突帯を貼付する広口鉢である。復元口径28.8cmを呈する。内外器面の調整はハケ目による調整を主体とするが、内器面には最終調整にヘラミガキが施される。

059は口径31.6cm、器高24.5cm、胴部最大径30.6cmを測る完存する鉢である。内外面とも淡赤褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石粒等を含む。頸部に断面三角形を呈する貼付突帯を貼り付ける。外器面底部付近に黒斑が認められ、また、器面各所に焼成時のものと思われる剥離痕が存在する。

060は、頸部に断面三角形を呈する刻目突帯一条をもつ鉢である。内面・茶褐色、外面・淡茶褐色を呈する。内器面は細密なハケ目調整の後にミガキにより仕上げられる。外器面はハケ目主体に調整がおこなわれるが、上半部と下半部は幅等の異なるハケ目原体が使用されている。口径34.7cm、器高28.5cm、胴部最大径34.2cmを測る。

061は片口を有する鉢である。内外面は淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、金雲母等を含む。焼成は良好で、器表面はヘラ状の工具により調整される。

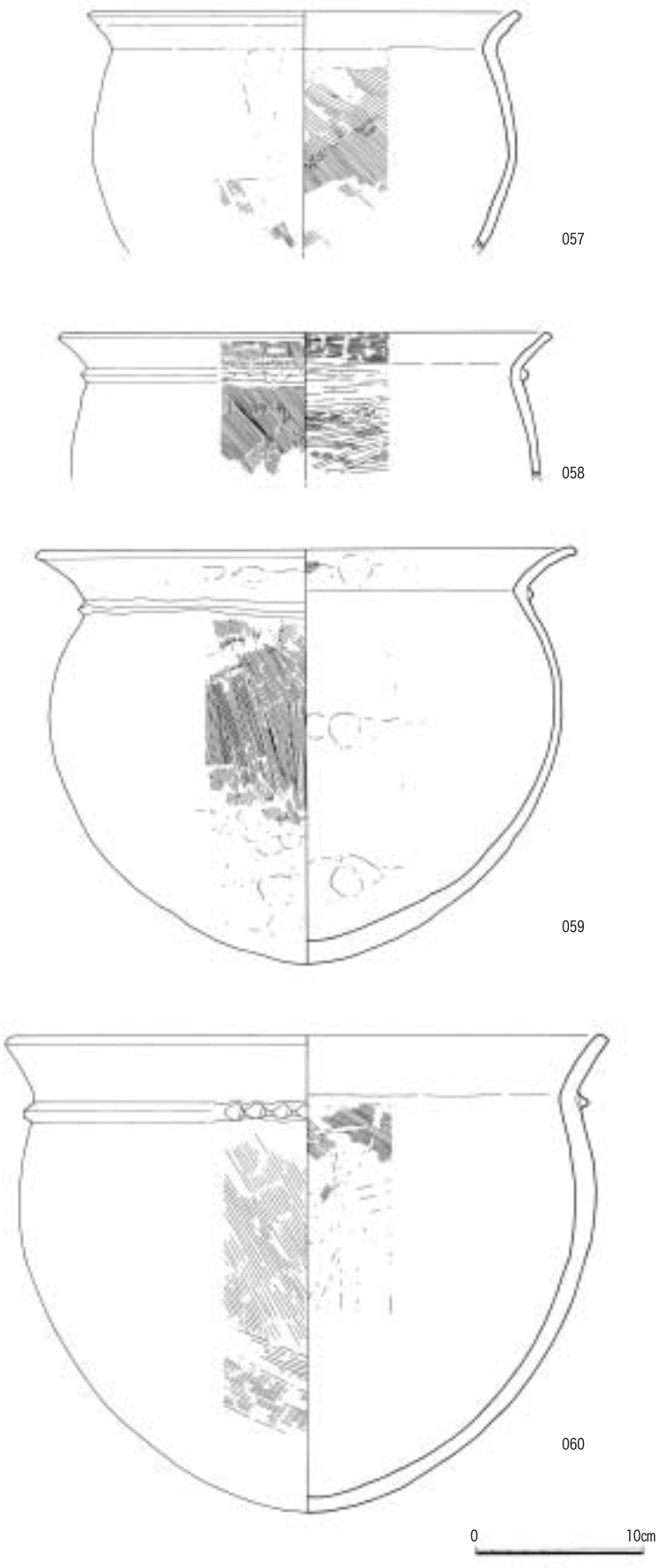
062は尖り底を呈する鉢である。底部先端部には土器焼成前にあけられた孔が貫通する。胎土中には長石、石英、角閃石粒等を内包し、内外面とも淡赤褐色を呈する。

063～066は小型の鉢である。063は口径12.9cm、器高7.9cmを測る。淡茶褐色を呈し、内外器面とも最終調整にミガキが施されるなど、丁寧なつくりとなっている。

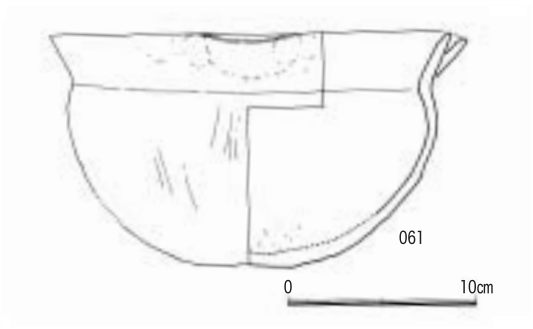
064は復元口径18.4cm、器高14.6cmを測る小型鉢である。胎土中には角閃石、長石粒を含み、内外面とも淡黄褐色を呈し、器面調整はハケ目とナデによる。

065は凸レンズ状の底部から直線的に立ち上がる口縁部を有する鉢である。器面調整はハケ目とナデを主体におこなわれる。色調は淡茶褐色を呈する。

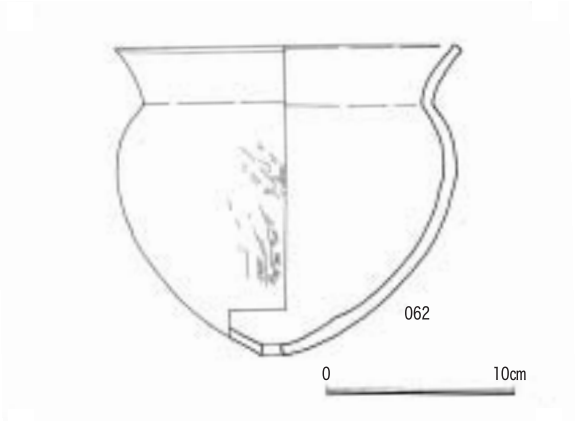
066はやや深めの砲弾形を呈する鉢である。内外器面ともハケ目あるいはヘラ状の工具により調整した後にナデにより仕上げをおこなう。淡褐色を呈する。



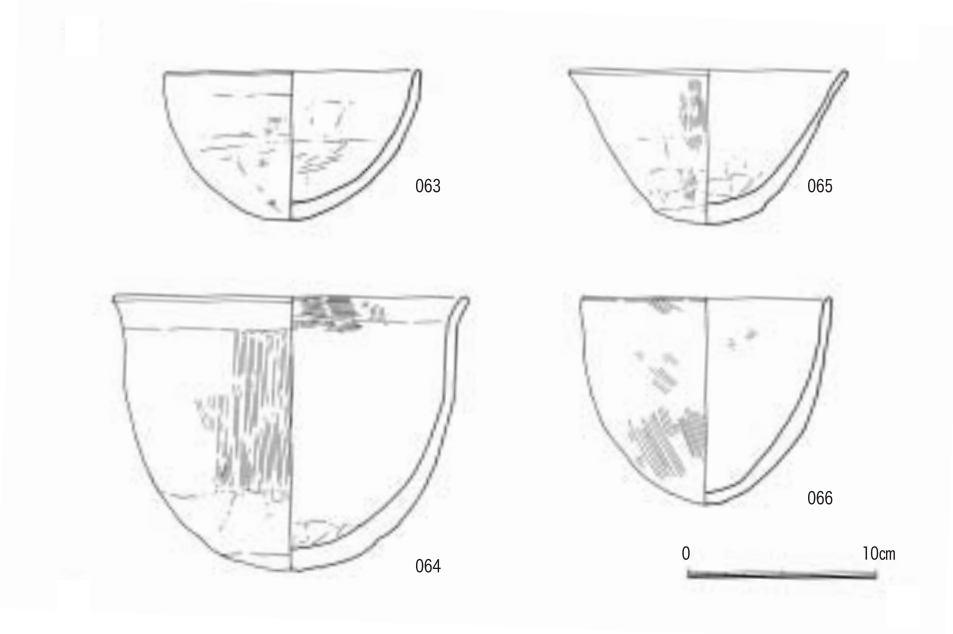
第72図　SH020出土遺物実測図⑲（1/4）



第73図　SH020出土遺物実測図⑳（1/4）



第74図　SH020出土遺物実測図㉑（1/4）



第75図　SH020出土遺物実測図㉒（1/4）

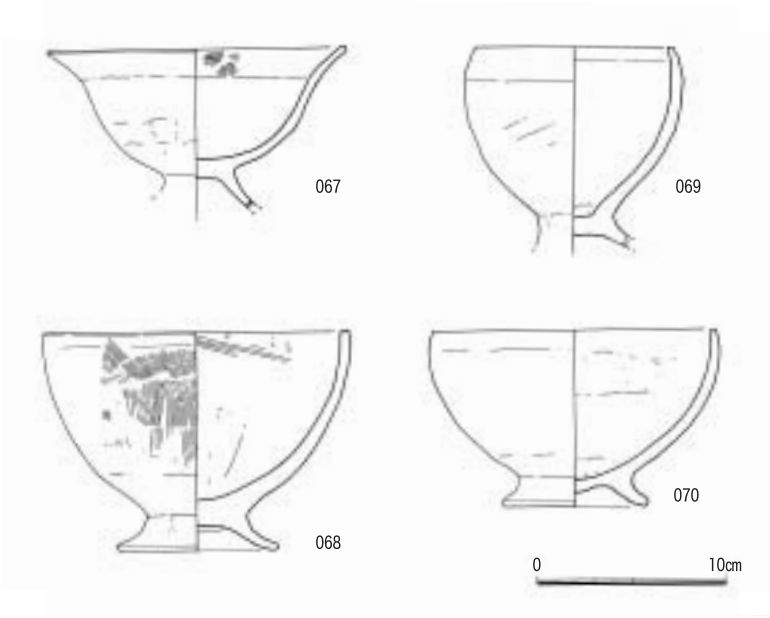
067～070は台付鉢である。067は口縁下から外方へ開く鉢部に断面「ハ」字状を呈する脚部をもつ台付鉢である。淡褐色を呈する。

068は若干内湾気味に立ち上がる口縁部に低平な脚部をもつ台付鉢である。復元口径15.8㎝、器高11.6㎝。復元底径8.2㎝を測る。淡黄褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石粒を含む。

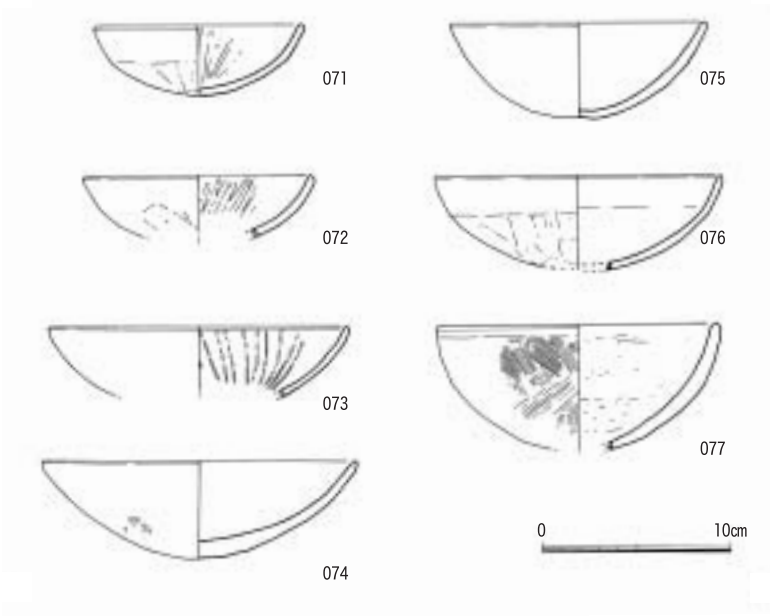
069は深めの鉢部に脚部が接続する台付鉢である。脚端部を欠損する。口縁部は内湾し、内外器面ともに丁寧なヨコナデが施される。復元口径10.0㎝を測る。内面・淡茶褐色、外面・淡橙褐色～淡茶褐色を呈する。

070は椀状の鉢部に低平な脚部が接続する台付鉢である。復元口径14.8㎝、器高9.4㎝、復元底径7.4㎝を測る。淡灰褐色を呈し、内外器面はナデ主体の調整により仕上げられる。

071～077は浅い鉢状を呈する一群である。 **071**は精製土を使用した鉢であり、内外器面とも丁寧なミガキ、またはナデにより仕上げられる。また、内器面には放射状の暗文風にミガキが施される。復元口径10.6㎝、器高3.8㎝を測り、淡茶褐色を呈する。



第76図　SH020出土遺物実測図㉓（1/4）



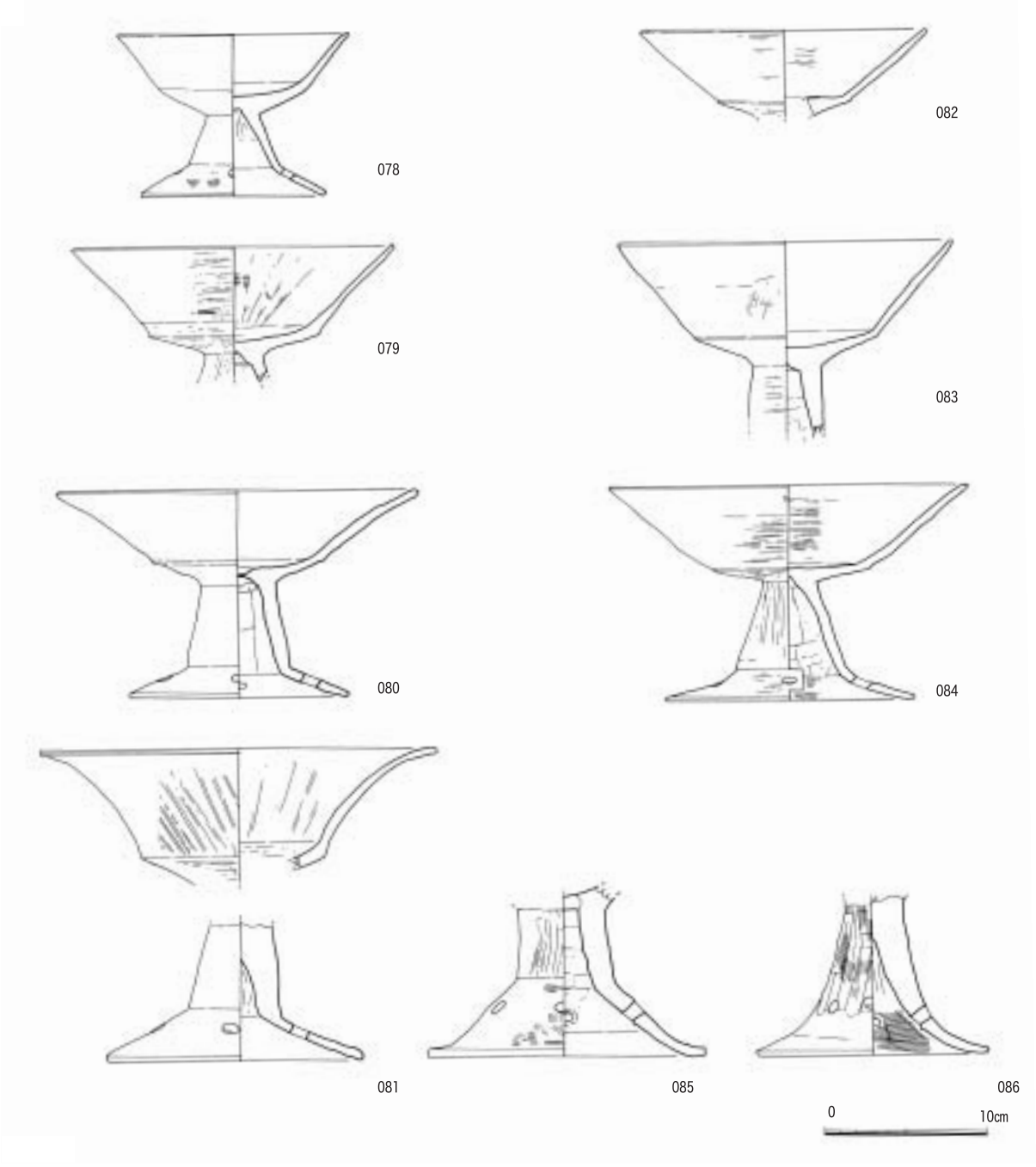
第77図　SH020出土遺物実測図㉔（1/4）

072も同様の鉢であり、器内面に暗文風のミガキが認められる。淡茶褐色を呈し、胎土中には石英粒を内包する。

073は浅い坏、あるいは皿状を呈する鉢であり、器内面に暗文風にミガキを施す。器壁は薄く、焼成は良好で、内外面とも淡茶褐色を呈している。復元口径15.6cmを測る。

074は復元口径16.2cm、器高5.2cmを測る。淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、長石、金雲母、角閃石粒を含む。

075は復元口径13.2cm、器高5.1cmを測り淡茶褐色を呈する。器面は丁寧なナデにより調整され、胎土内には金雲母、長石、角閃石、橙色粒子を含む。



第78図　SH020出土遺物実測図㉕（1/4）

076は住居埋土中の黒色土と暗茶土から出土した破片が接合した資料である。口径14.8㎝を測る。内外口縁部は強いヨコナデにより調整される。

077は口縁端部を舌状に仕上げる鉢であり、淡茶褐色を呈する。復元口径14.4㎝を測る。内器面はケズリ後のナデにより平滑に調整され、外器面はハケ目により仕上げられる。胎土中には角閃石、石英粒を内包する。

高坏形土器

078～086は高坏である。坏部形状と脚部の形状によりそれぞれ二分される。坏部については、直線的

に坏部にいたるものと大きく外方へ展開するもの（081）の二種であり、脚部に関しては、脚柱部から屈曲部をもち脚裾部へといたるものと脚部から屈曲部を持たずにスムーズに脚裾部へといたるもの（086）の二種により構成される。前者をＡ・Ｂ類に、後者をａ・ｂ類と仮称すると、その組合せから都合４組の形式が成立するが、090SH020ではｂ類脚に接続する坏部が判明する資料が存在しないため、Ａａ、Ｂａの二種の組合せが確認できるのみである。

078は図上復元をおこなうことのできた資料であり、復元口径14.1㎝、器高10.0㎝、復元脚裾部径10.1㎝を測る。淡褐色を呈し、器面はハケとナデにより仕上げられる。「ハ」の字状に開く脚裾部には４ヶ所に円孔が貫通する。

079は脚部を欠損し、坏部のみが遺存した資料である。前述の坏部分類のＡ類に属するものであり、外器面はヨコ方向のヘラミガキ、内器面に関しては、ヨコナデによる調整後に放射状の暗文風にヘラミガキが実施される。口縁部分で約1/6が遺存する資料であるが、これから復元される口径は19.4㎝を測る。内外面とも赤褐色を呈する。

080もまた図上復元をおこなうことのできた資料である。Ａａ類に属する。赤橙色を基調とし、胎土には石英、長石、角閃石粒等を内包する。器面調整の詳細は風化のため不明である。坏部内面中央に脚部中空部に貫通する土器焼成後に穿孔された小孔が認められる。脚裾部に穿たれた穿孔は残存孔の位置関係から４ヶ所であったと推定される。復元口径22.0㎝、器高12.8㎝、復元脚裾部径13.4㎝を測る。

081は脚部と坏部との接点が風化のため完全に接合することはできなかったが、器面調整、胎土状況等から同一個体と判断される資料である。坏部は唯一Ｂ類形状を呈するものであり、Ｂａ類に属するものといえる。口縁部は外方向へ大きく開き、内外器面ともに暗文風にタテ方向のミガキが認められる。脚部は脚柱部に「ハ」の字状の脚裾部が接続するもので、円孔は４ヶ所に存在する。口径24.0㎝、脚裾部径15.6㎝を測る。色調は淡茶褐色～淡灰黒色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英、金雲母を含む。

082はＡ類坏部をもつ高坏であり、脚部を欠失する。復元口径15.0㎝を測り、淡茶褐色を呈する。器面の調整はナデおよびミガキにより実施され、平滑な器表面を実現する。

083は復元口径20.4㎝を測る高坏Ａ類坏部であり、脚裾部が欠損する。器面調整に関しては器表面が荒れており、詳細は不明である。

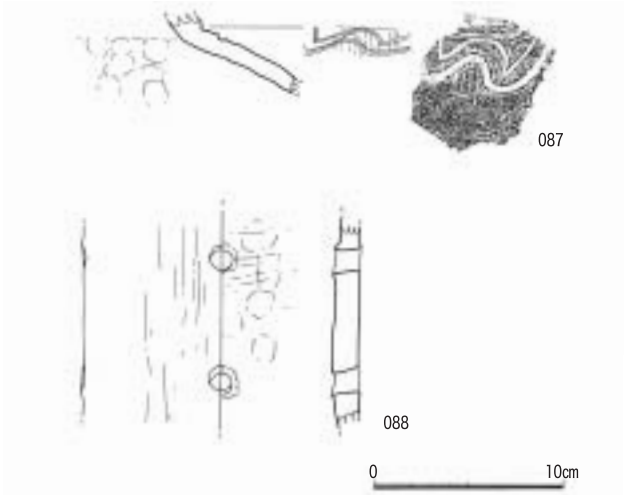
084は坏部1/2、脚裾部1/4が遺存する資料であり、復元口径21.9㎝、器高13.3㎝、復元脚裾部径15.2㎝を測る。色調は赤橙色を呈し、器面は細密なミガキによって仕上げられる。脚裾部の穿孔は４ヶ所にあったものと推定され、外面から内面へと貫通している。

085 は坏部を欠損する高坏脚裾部である。脚部は柱状の脚柱部に外方へ膨らみ気味の脚裾部が接続する。器面の調整はハケ目とヘラミガキ主体におこなわれており、胎土中には角閃石、長石、石英、橙色粒子を内包する。遺存する脚裾部に認められる円形の穿孔は５ヶ所存在する。

086もまた坏部を欠損する高坏脚部であり、090SH020から出土した資料中唯一ｂ類に分類される高坏脚部である。坏部接点は粘土接合部から離脱しており、接合部は丁寧なナデが施されている。脚柱部外面にはハケ目の後にタテ方向のヘラミガキがなされ、内面はヘラケズリ後粗いナデにより調整される。色調は暗褐色をベースとし、胎土中には石英、長石、角閃石、金雲母粒を含む。

その他の器種

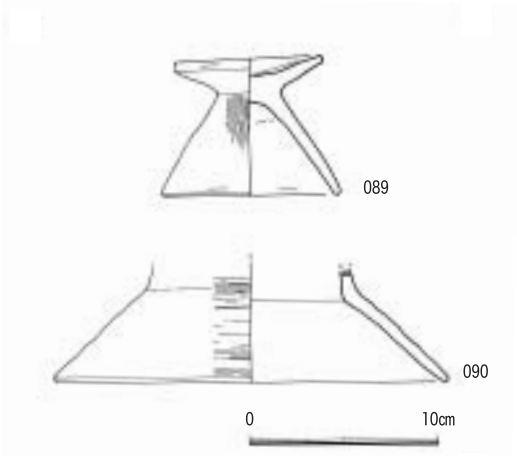
087は壺の肩部破片であり、肩部に二条１単位の波状文が施されている。淡茶褐色を呈し、胎土中に角閃石、長石粒を内包する。肩部を施文部位に選択するのは、既存資料をみると今のところ弥生時代後期の初頭前後に限られ、出土資料の胎土状況などからも本資料は直接090SH020に伴う、あるいは住居埋没途上の廃棄行為に直接関連するものではなく、090SH020構築以前に帰属されるものである。



第79図　SH020出土遺物実測図㉖（1/4）

088は大型器台の胴部破片である。上下２ヶ所に円孔が穿たれる。遺存部位が少ないため、円孔の配置状況は不明であるが、外器面数列に配置されていたものと考えられる。淡黄白色を呈し、角閃石、石英粒などを胎土中に含む。穿孔はいずれも土器焼成前に穿たれたもので、外から内方向へ貫通する。器面の調整はヘラ状工具によるナデとタテ方向のヘラミガキが主体となる。本資料も087と同じく前代の遺物の混入である。090SH020からは２点の器台が出土している。

089は小型器台であり、直線的に口縁端部へ開く皿状の坏部に台形状の脚部が接続する。坏部内器面にはミガキ風の丁寧なナデが施され、外器面はハケ目とナデにより調整される。口縁部径7.6cm、器高6.3cm、復元脚裾部径8.9cmを測る。

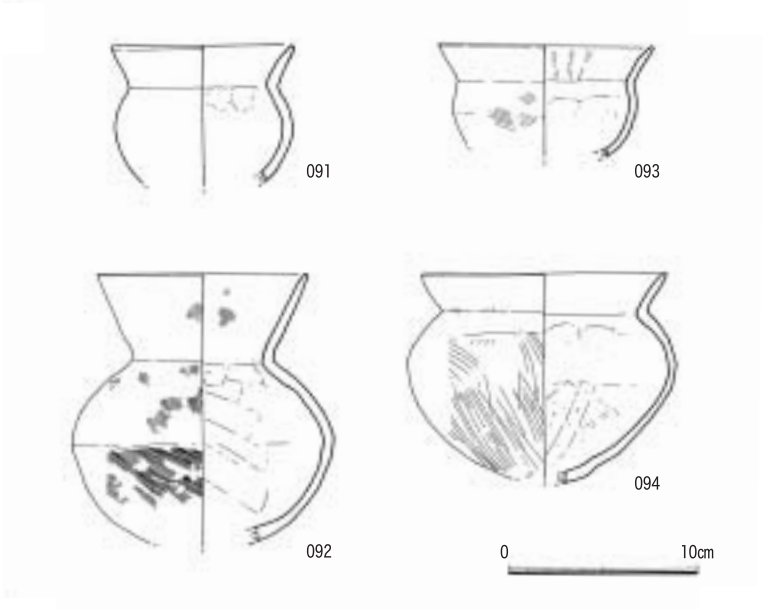


第80図　SH020出土遺物実測図㉗（1/4）

090 は器台脚裾部と推定される資料である。胎土には精製土が使用されるが、内外器面とも表面風化が著しく器面調整の詳細については不明である。

091・093・094 は小型丸底壺である。**091**は暗茶土から出土したもので、全体のおよそ 1/4 が遺存する。外器面はヨコナデとミガキ風ナデによって調整される。復元口径9.4cmを測る。

093 も同じく小型丸底壺と考えられる資料である。内外器面とも



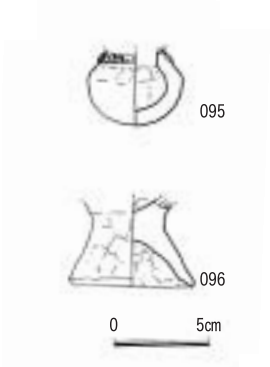
第81図　SH020出土遺物実測図㉘（1/4）

丁寧なナデ調整により仕上げられる。外方へ直線的に開く口縁部内器面には放射状の暗文を認めることができる。土器埋土中には金雲母、石英、角閃石粒等を含み、淡褐色を呈する。

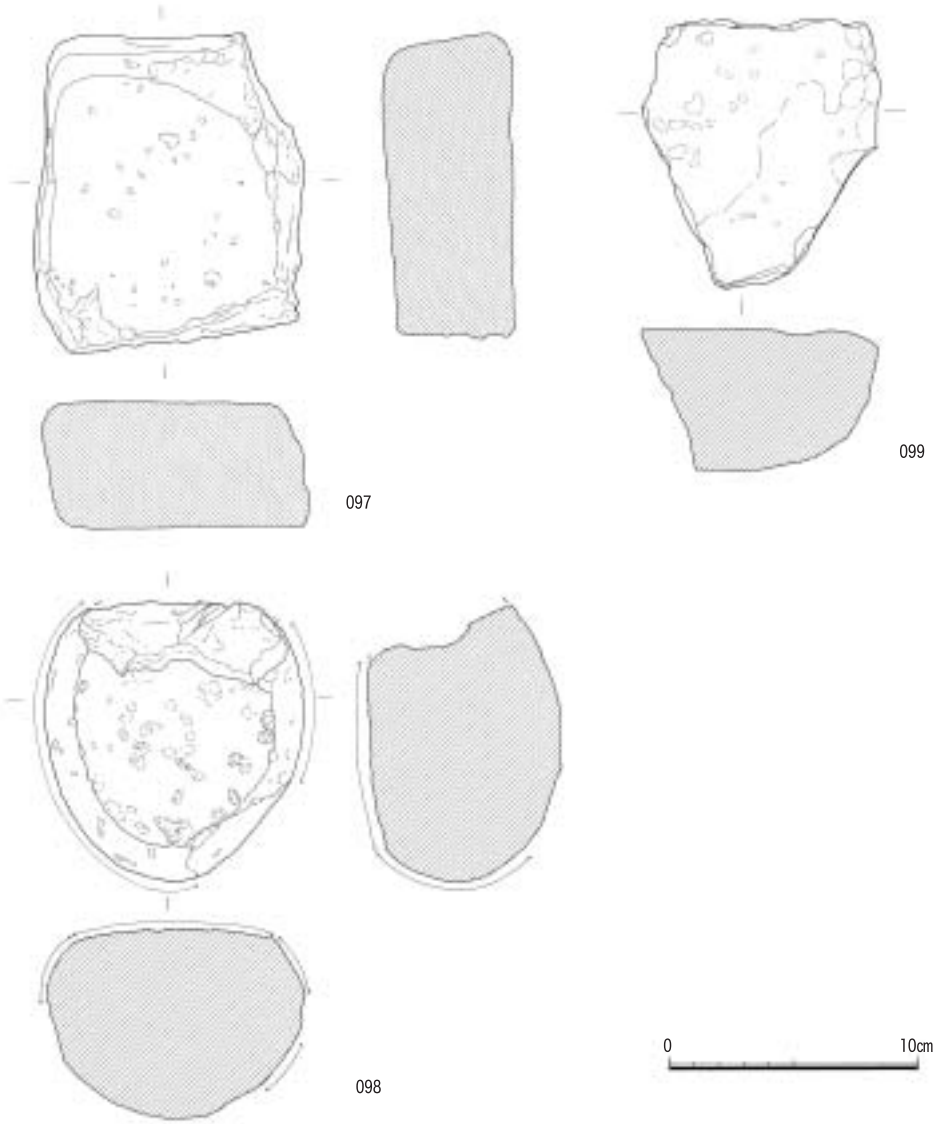
094も小型丸底壺の一種と考えられる資料である。口径12.6cmを測るやや大振りなものであるが、内器面はケズリとナデ、外器面はハケ目とナデにより調整される。

092は直口壺である。復元口径10.8cmを測る。色調は淡茶褐色を呈し、角閃石、長石、石英粒を含む。体部はハケ目とナデにより調整され、体部の最大径はほぼ体部中央に認められる。

095はミニチュアの壺である。約1/2が遺存する。頸部に刻目突帯を一条貼



第82図　SH020出土遺物実測図㉙（1/4）



第83図　SH020出土遺物実測図㉚（1/3）

付する。淡茶褐色を呈する。

096 は製塩土器の脚台部と推定される資料である。内外器面には指頭圧痕が数多く残り、淡茶褐色を呈する。調整はナデのみである。明確な二次被熱の痕跡は認められないが、丁寧なナデ、あるいはミガキにより調整される当該期の小型精製器種とは胎土状況、器面調整等において明らかに一線を画する資料である。

石製品

090SH020からは数点の石器を含む石製品が出土している。

097は安山岩製の台石である。板状の礫を使用する。厚さ5.2cm、現存重量1400.0ｇを測る。

098は安山岩製の磨石である。一部を欠損する。幅10.4cm。厚さ7.7cmを測り、欠損する長軸部の現存長は11.1cmである。現存重量1220.0ｇを測る。

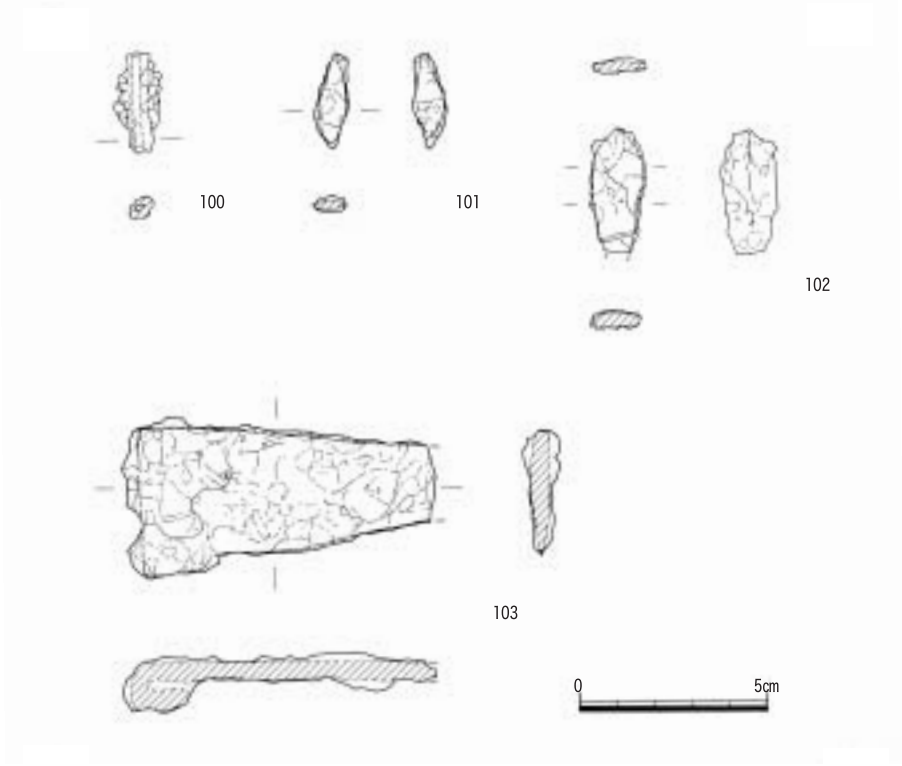
099 は全面が被熱する礫である。安山岩製であり、扁平な形状から台石として使用されていたことも考えられる。10.4cm×9.4cm×5.9cmの法量を示し、現存重量870.0ｇを測る。

鉄製品

住居埋土から数点の鉄製品が出土している。

100は棒状の鉄製品である。両端を欠損する。断面形状は0.7cmの円形を呈するものと考えられる。詳細については不明である。

101も鉄製品の一部であるが、細片化しており、詳細は不明である。



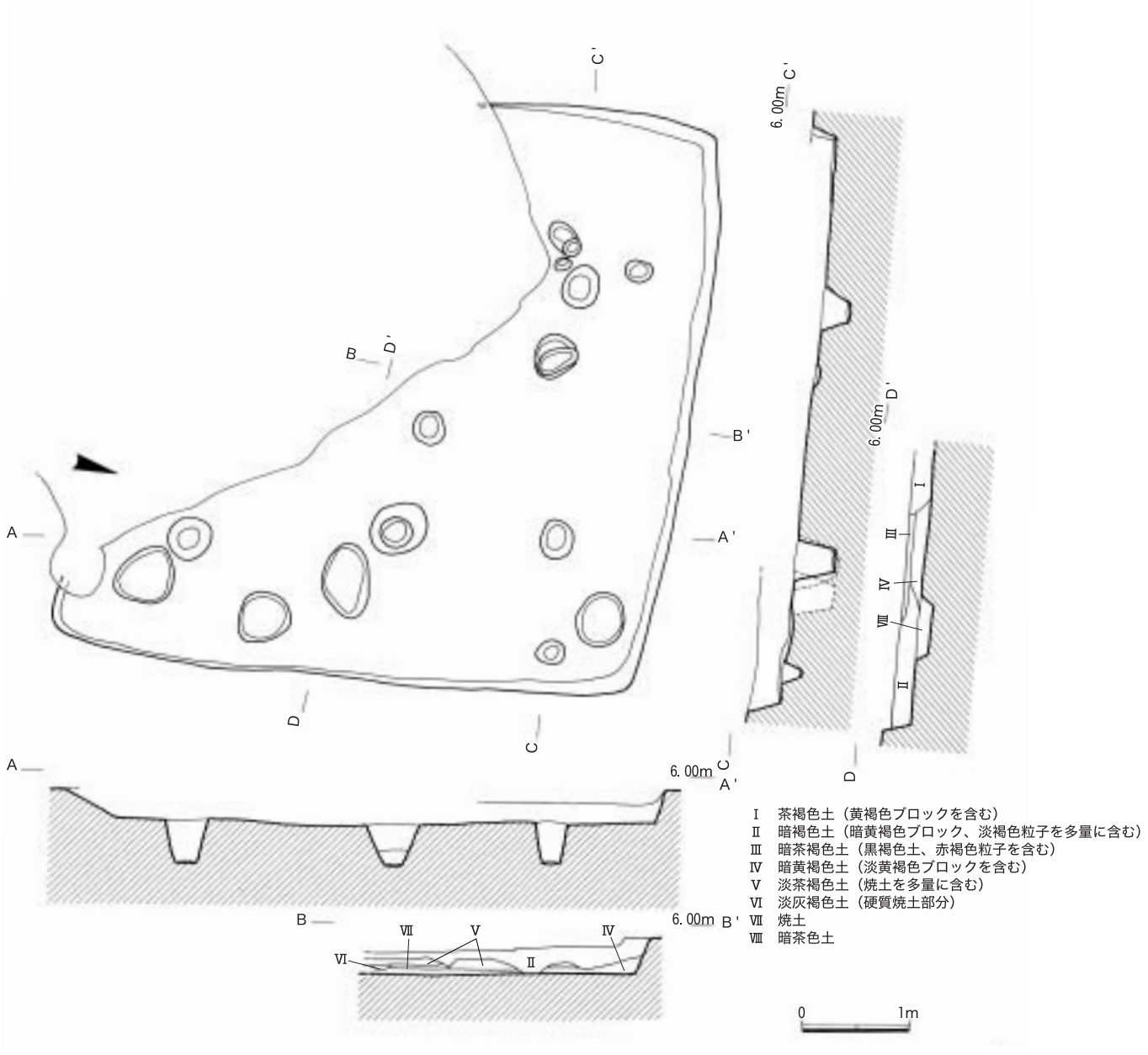
第84図　SH020出土遺物実測図㉛（1/2）

102は刀子片と考えられる鉄片である。住居埋土中の暗茶土から出土した。扁平な断面形状を呈する。

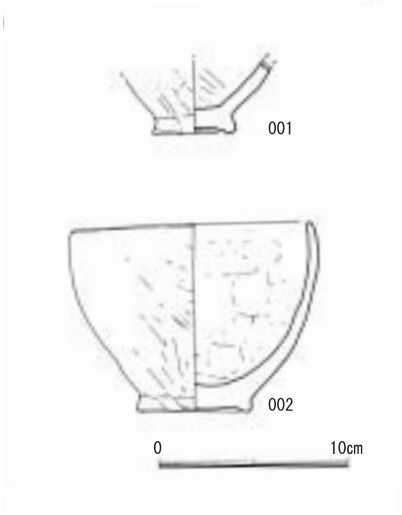
103は手鎌と考えられる鉄製品である。黒色土中から出土した。8.3㎝×4.2㎝の法量を示し、現存重量50.4ｇを測る。

090SH069（第85・88図）

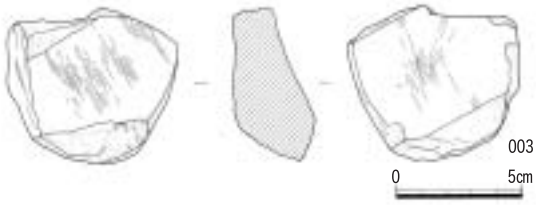
調査区Ｈ４区付近で検出した竪穴住居跡である。全体面積の約1/2を090SH020により切られている。平面規模は5.45m×5.5m、現存壁高約0.25mを測るほぼ正方形を呈する竪穴住居跡である。住居床には貼床（第４層）が施され、住居中央と想定される部分に焼土が認められた。主柱の位置は当初６本柱構造も想定してみたが、対応する柱穴列の配置が認められないことから東西方向に並行する２本柱構造と思われる。西側主柱は090SH020の掘り込みによりすでに欠失し存在しない。埋土中から出土する遺物は概して少ないものの弥生後期中葉～後葉と思われる甕の底部破片が出土しており遺構はこの時期のもの



第85図　SH069遺構実測図（1/60）



第86図　SH069出土遺物実測図①（1/4）



第87図　SH069出土遺物実測図②（1/3）

と思われる。

出土遺物（第86・87図）

001は甕の底部破片である。底部は粘土円盤状を呈しており、底面は上げ底状を呈する。淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英粒等を含む。本資料は090SH020出土土器分類における甕Ａ形式の系譜上に位置付けられるものである。

002 はほぼ完存する資料であり、口径 12.0cm、器高9.6～10.0cm、底径5.9cmを測る鉢である。器表面はナデにより調整され、内外面とも赤褐色を呈する。外面には赤色顔料が塗彩される。鉢Ｃ１形式に相当するものである。

003は凝灰岩製と考えられる砥石である。色調は淡灰白色を呈し、現状での長さ6.2cm、幅6.8cm、厚さ2.7cm、重さ126.0ｇを測る。



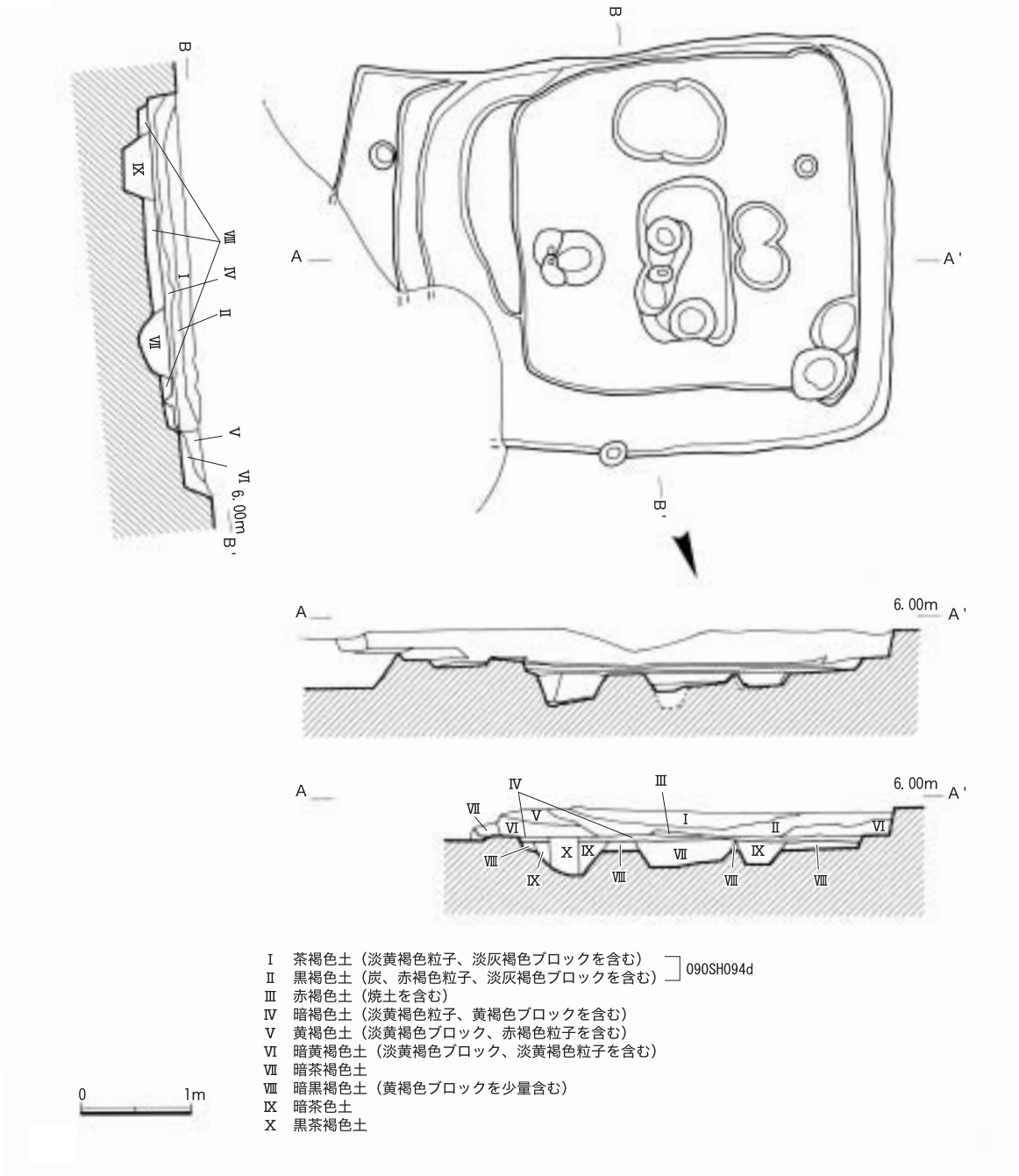
第88図　SH020・SH069完掘状況（北西方向から）



第89図　SH094完掘状況（北方向から）

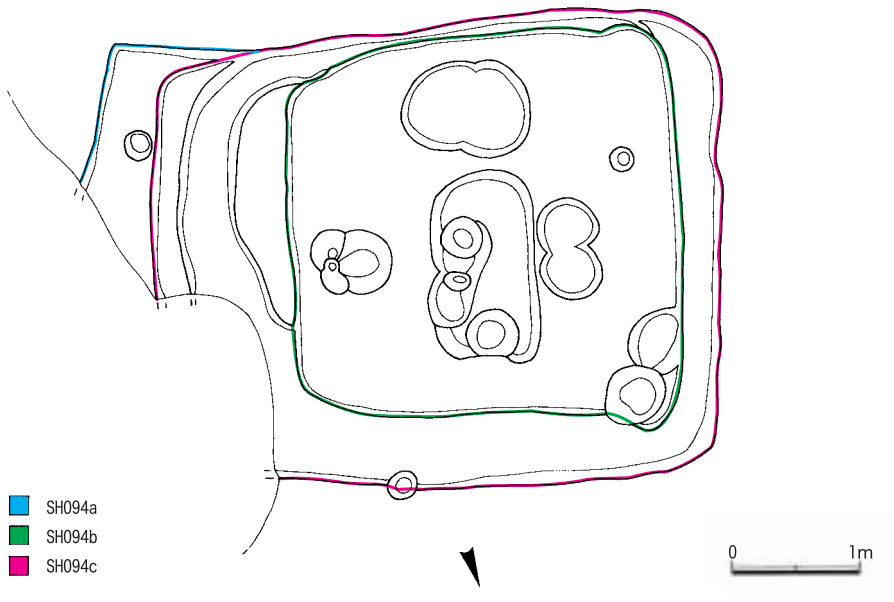
090SH094（第89・90図）

090SH094は方形プランを呈する竪穴遺構が重複するものであり、調査の進展に伴い３基の竪穴遺構が切り合っていることが判明した。第91図に模式図を示しているが構築順位は、090SH094aないしは090SH094bを初現とし最終的に090SH094cの最終拡張段階をもって住居としての機能を終了する。090SH094aと090SH094bは積極的な根拠とはなりえないが、090SH094bの主軸が090SH094cとほぼ一致する点から、090SH094cに近接する時期すなわち、090SH094cの間に位置づけられる可能性が高いものと考えられる。したがって想定される構築順位は、090SH094a→ 090SH094b→ 090SH094cである蓋然性が高いと考えられよう。



第90図　SH094遺構実測図（1/60）

また、住居の最終段階である090SH094cの埋没途中には掘り返し痕跡が認められ、散在的ながら焼土・炭化物の分布も認められる。残念ながら当掘り込みの明確な平面プランを把握することはできなかったが、土層の堆積状況などはセクションベルトの所見を通じてある程度の復元は可能である。この遺構を便宜的に090SH094dとし、以下に遺構ごとの詳細説明を行う。なお090SH094a～cには目立った遺物の出土はないが090SH094dの最終段階には比較的まとまった状況での土器廃棄行為が認められている。



第91図　SH094切り合い略図（1/60）

090SH094 a（第90・91図）

現存深度約0.1m程度の竪穴遺構であり、僅かにコーナーの一部が遺存する。当竪穴に対応する主柱穴は確認されておらず、住居として機能していたかどうかは不明である。遺物の出土がなく帰属年代は不明である。

090SH094 b（第90・91図）

090SH094cの床面において確認することのできる竪穴住居跡である。平面プランは3.0m×3.05mのほぼ正方形を呈しており、床面から約0.1mが遺存する。炉跡などは明確に確認することはできなかったが、位置関係からほぼ中央に位置するPit1が090SH094bの主柱となる可能性を指摘できる。

090SH094 c（第90・91図）

最も新出の竪穴住居跡である。数回の東方向への拡張痕跡が認められ、最終的な規模は4.5m×3.7mの東西に長い長方形を呈している。Pit2ならびにPit3が本住居の主柱穴になるものと推定され、拡張に伴う掘り直しの状況が認められる。最終段階には土層断面図上の第4層暗褐色土を貼り床とした床面が形成されている。ほぼ中央の南北方向に長い1.5m×0.8mの規模を持つ略長方形の土坑が認められ埋土中には焼土粒やカーボン粒が認められるが、これは最終拡張段階には先述の貼り床土によって被覆されており、最終段階には機能していない。初期の段階に構築され使用されたものと考えられる。所産時期を示す明確な遺物の出土はなく、当該遺構の帰属年代を明らかにすることはできない。

090SH094 d（第90図）

本項の冒頭でも述したように、本来であれば性格不明遺構とすべき内容を有しているが、090SH094の一連の拡張・埋没過程の延長線上にあるものと考え、便宜的に090SH094dと呼称する。090SH094dは土層

断面図上の第１層と第２層がこれにあたり、推定平面分布範囲はほぼ090SH094cの平面プラン西側部分にあたるものと考えられる。

掘り返しによる掘削深度は、090SH094cの貼り床上面を若干掘り窪める部分にまで達している。掘り込み床面には散在状況で焼土・炭化物の分布がみられ、その上部に土器を中心とする遺物群が廃棄されている。

前述のように090SH094は切り合い関係を有する都合４つの遺構により構成されているが、出土遺物の大半は090SH094dに帰属するものである。出土遺物には壺Ｆ、壺Ｃ、甕Ａ、甕Ｂ、甕Ｃ、鉢Ｂ、鉢Ｃ１などがある。

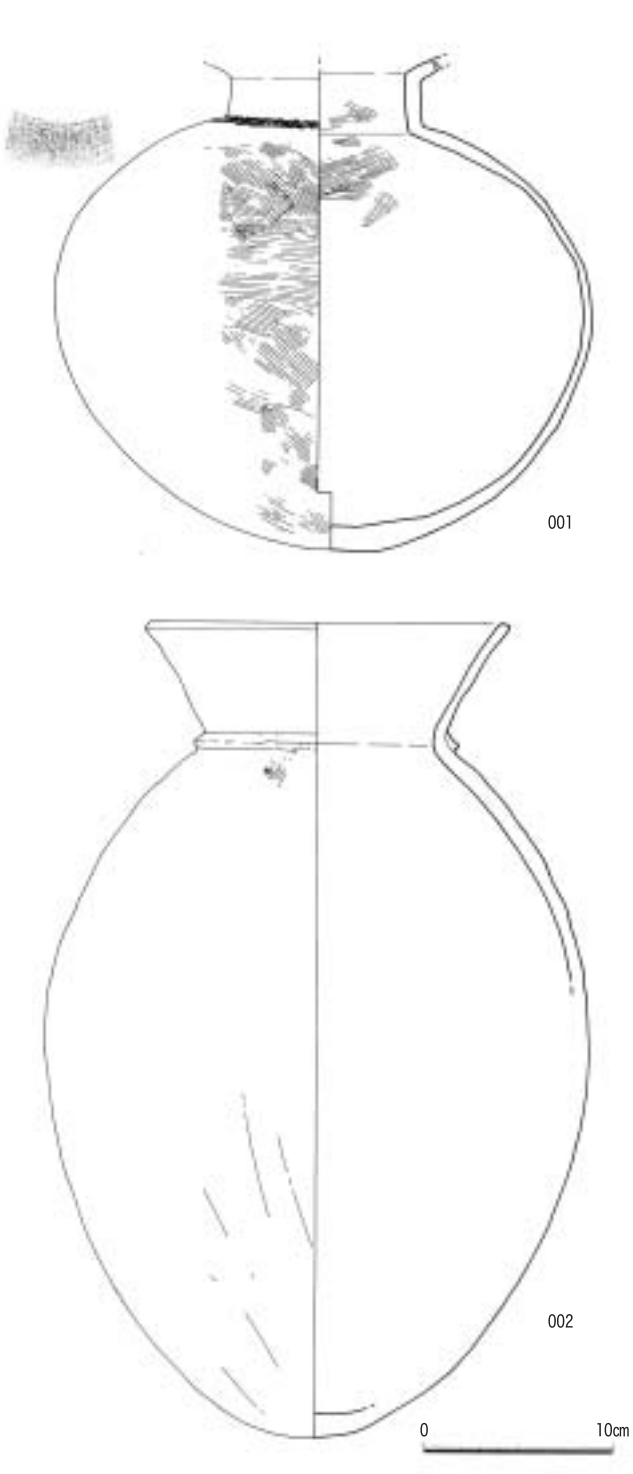
出土遺物（第92～97図）

001は壺Ｆ、いわゆる二重口縁壺の胴部である。口縁部上端を欠失する。扁球形の胴部にやや内傾気味に立ち上がる頸部をへて、口縁部にいたる。外器面の調整はハケ目主体でなされ、内器面は上半部にハケ目調整痕を残すが、基本はヘラケズリ後ナデという組合せにより仕上げられる。明茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英粒、白色粒子を内包する。肩部上端部には櫛状工具による櫛描波状文が施文される。

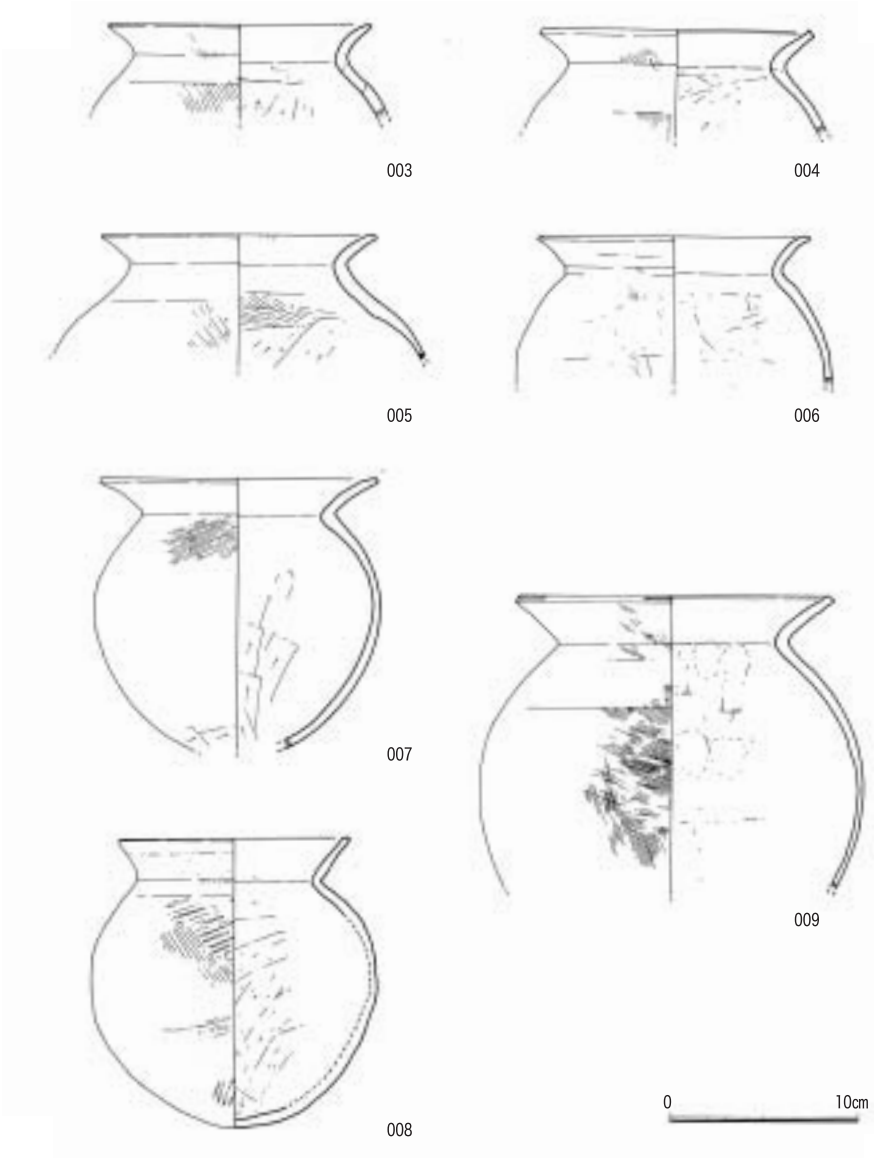
002は倒卵形の体部に、外方へ開く口縁部を有する壺Ｃである。橙褐色～暗茶褐色の色調を呈し、頸部には一条の三角突帯を貼付する。完形品であり、口径18.5㎝、器高43.4㎝、胴部最大径28.7㎝を測る。

003～008は甕Ｂである。いずれの甕にも在地系譜の甕Ａと外来系譜の甕Ｃとの両者の特徴を具備している。

003は口縁部分で約１/４が遺存する資料であるが、復元口径13.4㎝を測り、明茶褐色を呈している。内器面はヘラケズリの後にナデにより調整され、外器面は



第92図　SH094出土遺物実測図①（1/4）



第93図　SH094出土遺物実測図②（1/4）

ハケ目とヨコナデにより仕上げられる。

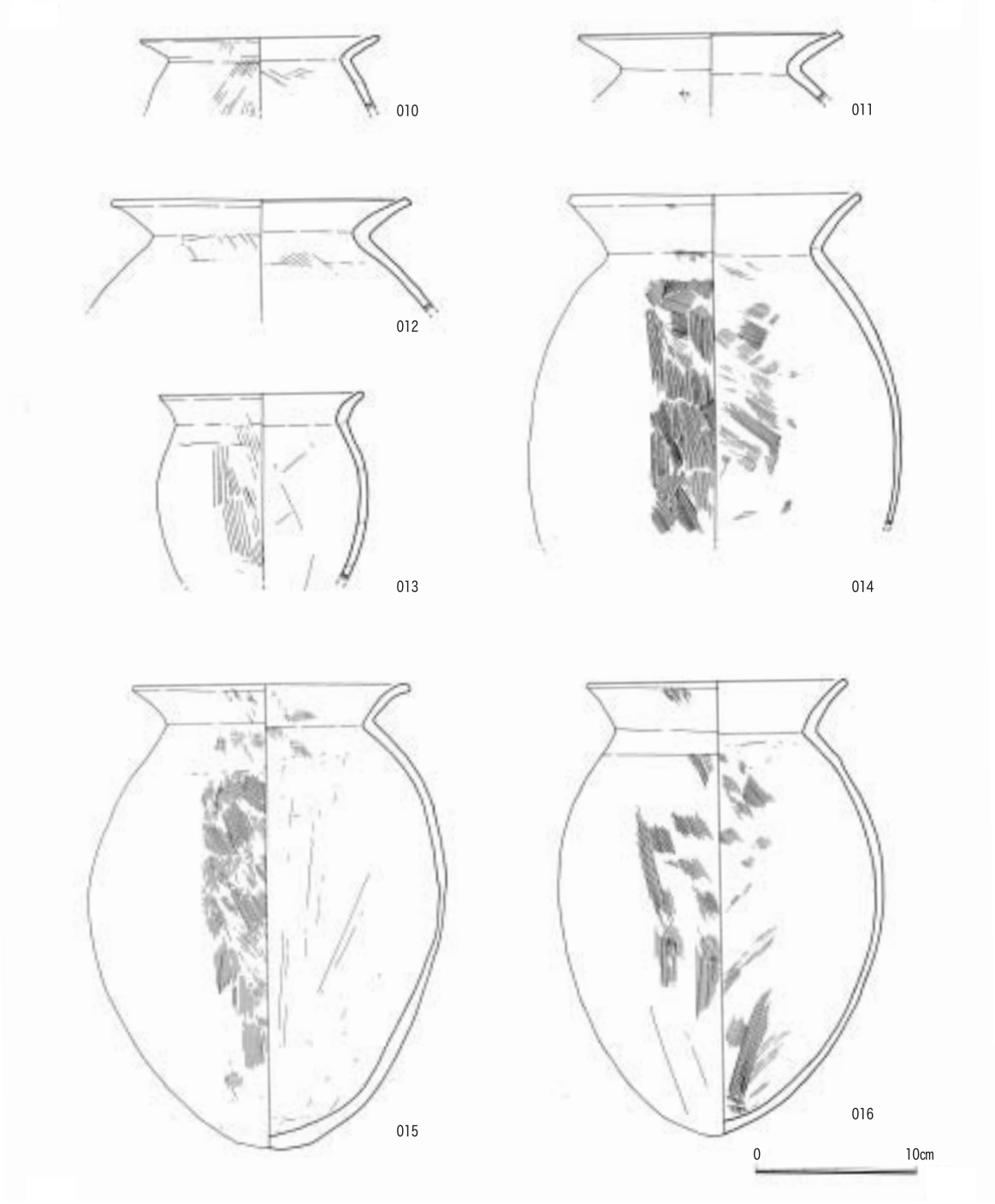
004も同様の特徴を有する甕Ｂである。復元口径13.8㎝を測り、淡茶褐色を呈する。

005は復元口径14.0㎝を測る甕Ｂであり、明茶褐色を呈する。胎土中には角閃石、石英粒を含む。焼成は良好である。

006は復元口径13.8㎝を測り、淡黄褐色を呈する。口縁部分で約1/4が遺存する。胎土中には石英、角閃石粒を含む。焼成は良好である。

007は底部の一部を欠損する。暗褐色を呈し、口径14.3㎝を測る。内器面はヘラケズリが施され、外器面は基本的にナデにより仕上げられるが、肩部に斜方向のタタキ痕を残す。胎土中には角閃石、石英、金雲母を含む。

008はほぼ完形に復元することのできた甕であるが、器全体にかなりの歪みがあり、また随所に剥離痕が認められる。茶褐色を呈する。復元口径11.6㎝を測り、胎土中には角閃石、石英を含む。内器面は粗いケズリで整形され、外器面はタタキにより成形後ハケ目により調整する。肩部に斜方向のタタキ痕が

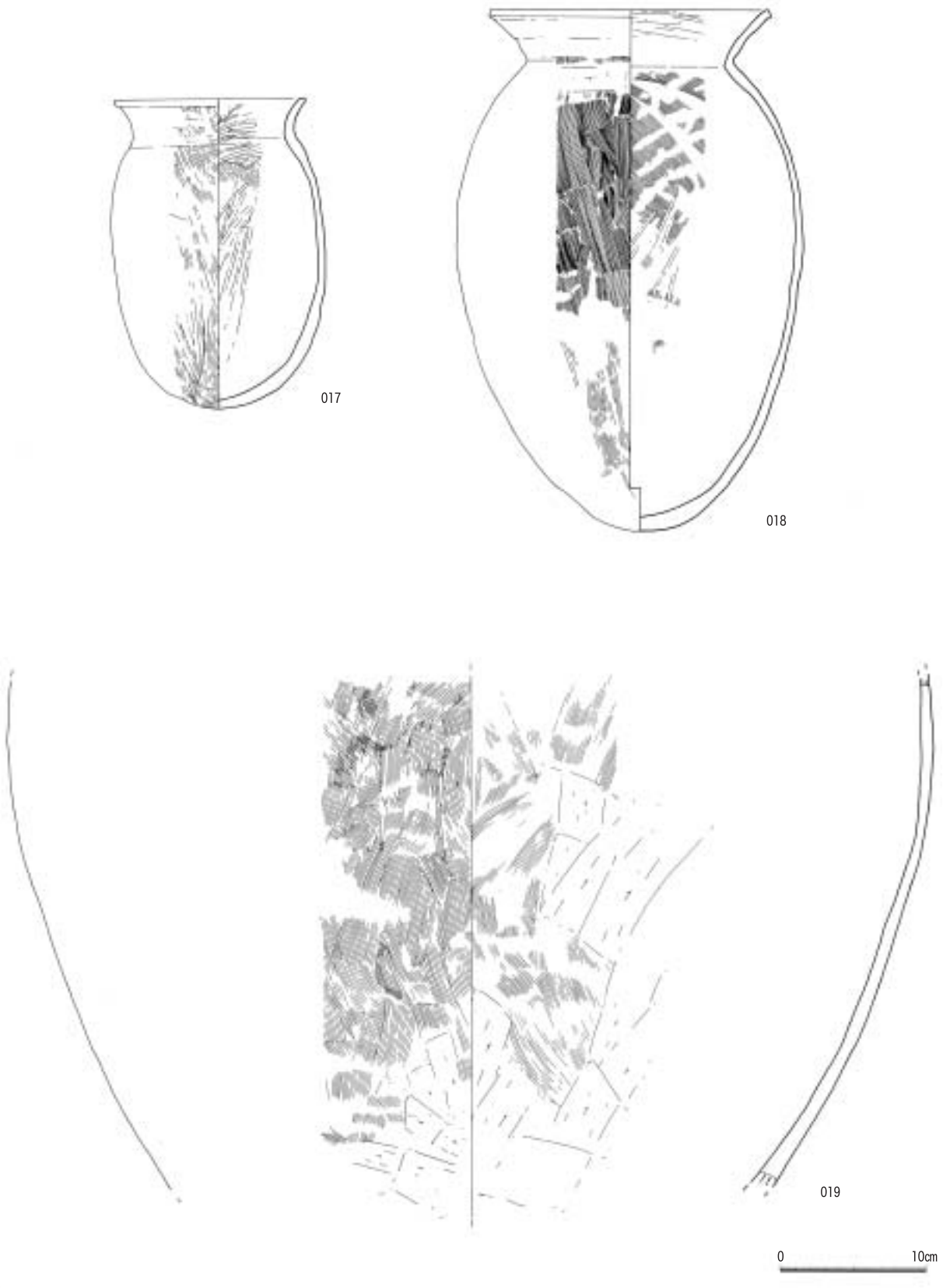


第94図　SH094出土遺物実測図③（1/4）

残る。007や008は便宜上甕Ｂとしたが胴部の球形化はかなり進行しており、より甕Ｃに近い属性をもつものと理解される。

009は甕Ｃである。茶褐色を呈し、器壁はヘラケズリにより薄く仕上げられる。口縁端部をはね上げ状に肥厚させる。

010は甕Ｂの口縁部破片である。内面・灰茶褐色、外面・茶褐色を呈する。内外器面とも最終調整は工具によるナデ調整がなされ、資料が細片であることもあり、明確にヘラケズリの状況は確認できない。復元口径14.4㎝を測る。焼成は良好である。



第95図　SH094出土遺物実測図④（1/4）

011・012は甕Ｃの口縁部から肩部にかけての破片である。

011は明茶褐色を呈し、復元口径15.8㎝を測る。口縁端部内面にはつまみ上げ状の強調がなされている。内外器面の最終調整はナデにより実施される。012も同様の特徴を有する甕であり、復元口径17.2㎝を測る。橙褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、白色粒子を含む。内器面にはヘラケズリ痕が認められる。また、口縁内面端部はつまみ上げ状の強調がなされている。

013は明茶褐色を呈し、内器面を工具ナデにより、外器面をタテ方向のハケ目により調整する。復元口径12.2㎝を測る。

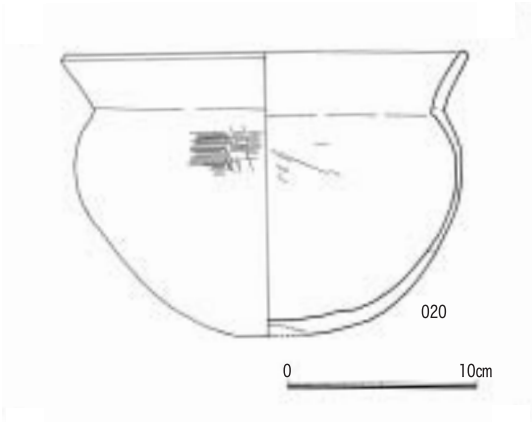
014は復元口径17.7㎝を測る甕Ｂである。形態的な特徴は甕Ａの属性を色濃く残すが、胴下半の器壁は著しく薄く仕上げられており、ヘラケズリにより整形されている。最終調整には内外器面ともハケ目とナデが多用される。焼成は良好である。

015は甕Ａである。明茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英粒を含む。外器面の調整はハケ目とナデ、内器面調整はナデ調整を主体とするが、部分的にヘラミガキが認められる。ほぼ完存する資料であり、口径17.0㎝、器高28.6㎝、胴部最大径22.2㎝を測る。外器面周囲には環状にススの付着が認められる。

016もほぼ完存する甕Ａ資料である。口径15.7㎝、器高28.2㎝、胴部最大径19.9㎝を測る。明茶褐色を呈し、内外器面ともハケ目による調整が実施される。

017は茶褐色を呈する甕Ａ資料である。本資料もほぼ完存する。口径12.4㎝、器高16.1㎝を測り、底部は丸底である。内器面はナデにより仕上げられた後、タテ方向のミガキが施され、外器面はハケ目調整が施される。

018は上半部が完存する甕Ａ資料である。内外面とも茶褐色を呈し、長胴傾向を堅持している。口径18.7㎝、器高35.7㎝、胴部最大径12.6㎝を測る。器外面にススの付着が認められる。



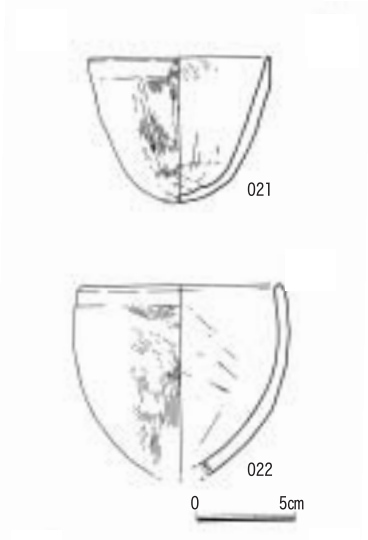
第96図　SH094出土遺物実測図⑤（1/4）

019は器種の不明な大型土器の胴部破片である。外器面調整は、細密なハケ目調整が施された後に下半部には粗いケズリが実施される。内器面についても同じようにハケ目調整の後にヘラケズリがなされるが、内器面については特定部位についてヘラケズリされるのではなく、比較的ランダムに実施される。焼成は良好であるが、現状で計測される胴回り径は63.0㎝を測る。甕棺か壺棺等に使用されるものであろうか。

020は鉢Ｂである。口径21.5㎝、器高15.0㎝を測る。明茶褐色を呈し、外器面には随所に剥離痕が認められる。特に底面の剥離は著しい。内器面はヨコナデおよびナデにより調整され、外器面はヨコナデとハケ目調整により仕上げられる。

021・022は鉢Ｃ１形式である。

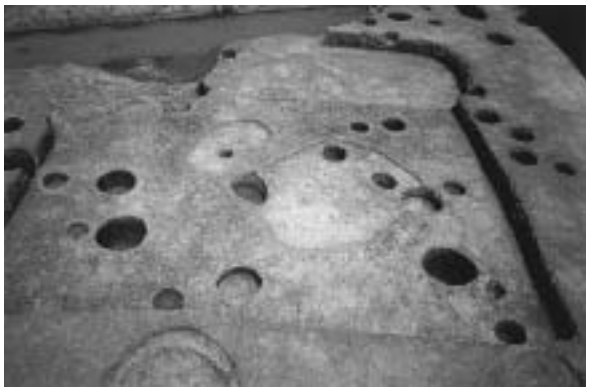
021は完形資料であり、口径9.2㎝、器高7.6㎝を測る。胎土中には角閃石、石英、橙色粒子を含み、焼成は良好であるが、器表面



第97図　SH094出土遺物実測図⑥（1/4）

の随所には表面剥離が観察される。外器面はハケ目による調整の後にタテ方向のヘラミガキが施される。明茶褐色を呈する。

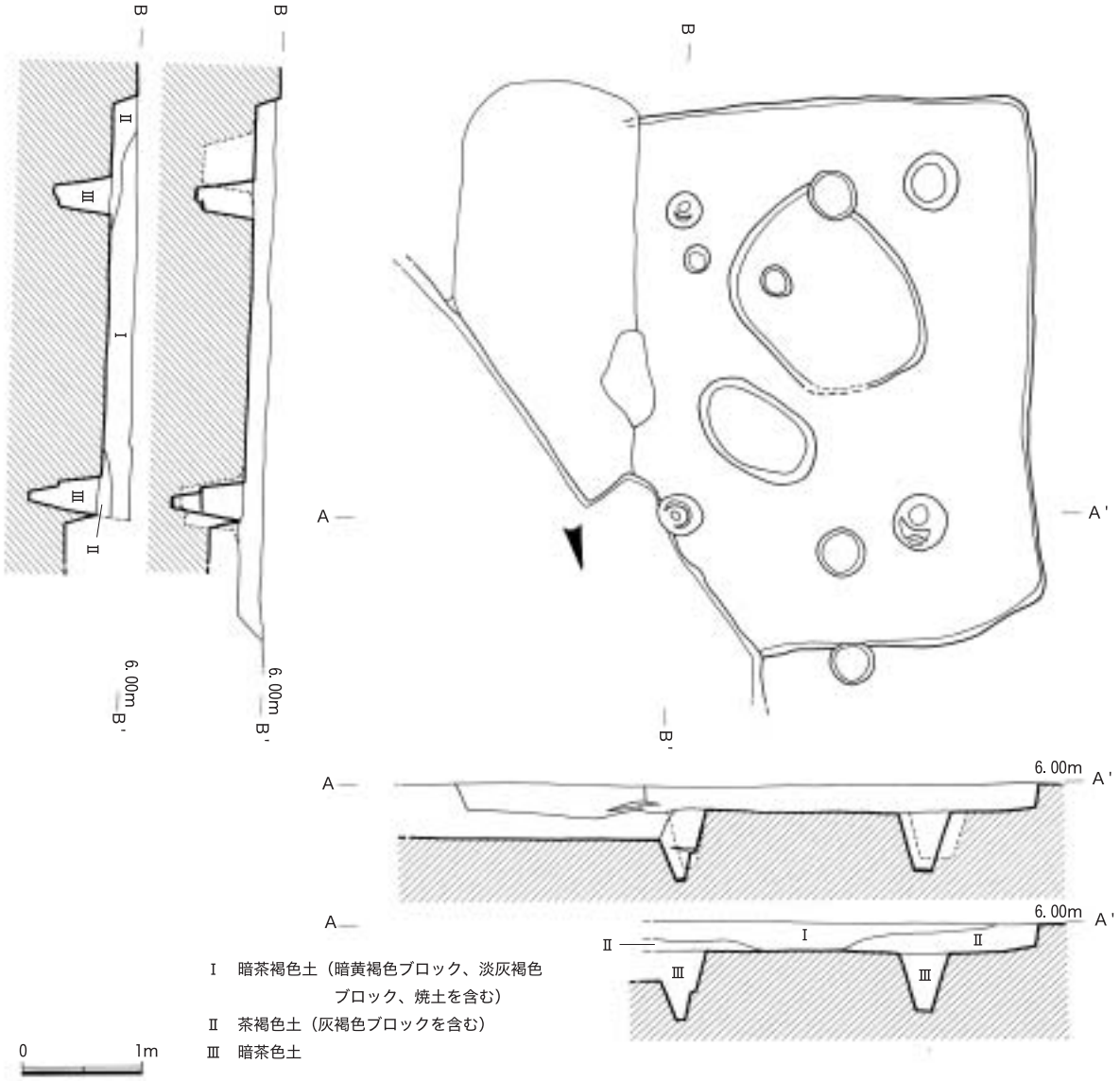
022は復元口径10.4cmを測る鉢である。明茶褐色を呈し、焼成は良好である。



第98図　SH173完掘状況（西方向から）

090SH173（第98・99図）

090SH173は方形プランを呈し、東側を近来の撹乱によって切られている。主柱は４本と考えられ、住居内の東側部分で焼土が検出された。焼土は住



第99図　SH173遺構実測図（1/60）

居内での検出位置と断面土層の観察所見から、竈であった可能性も考えられる。

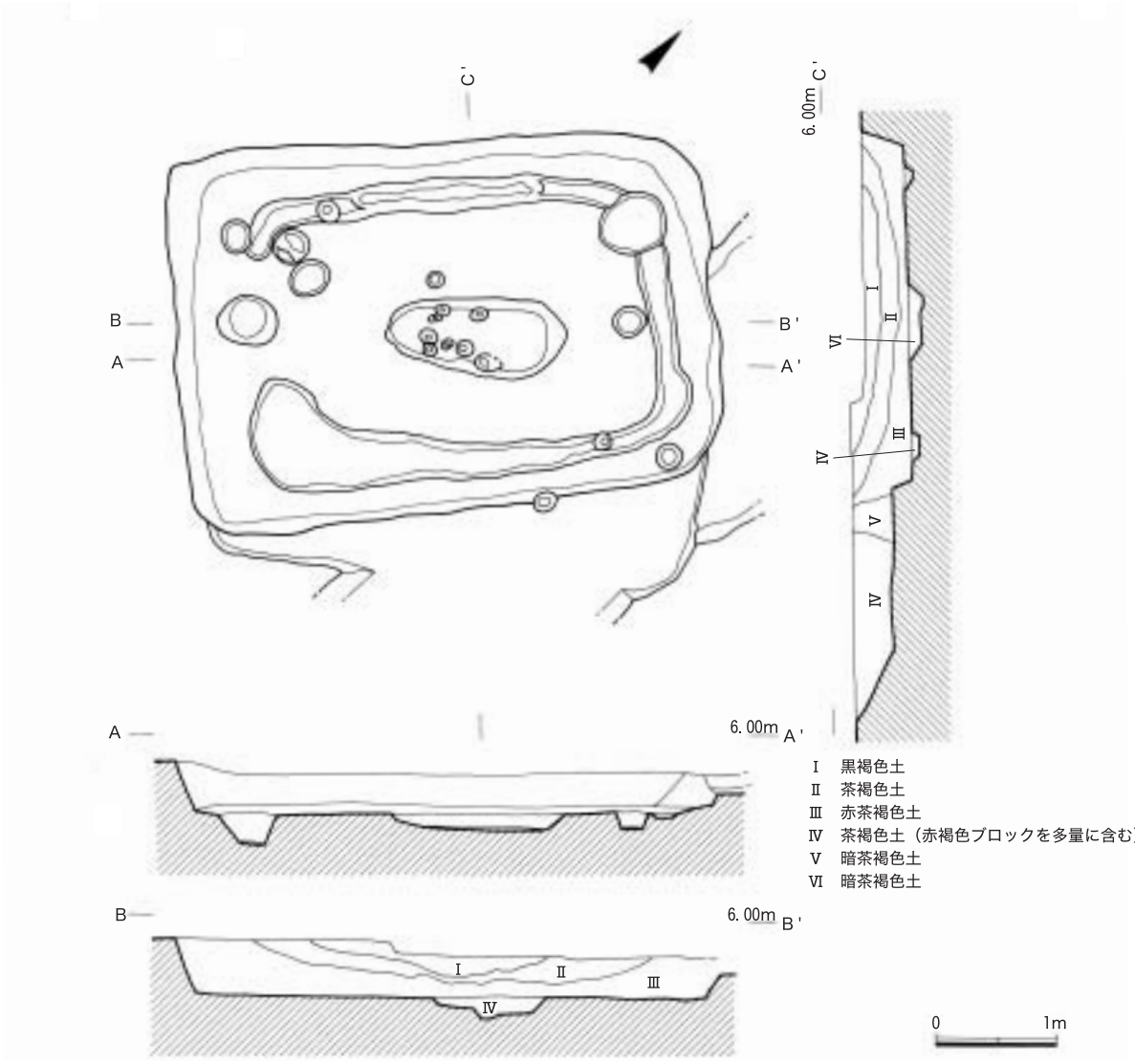
遺物は概して少なく小破片のみであるが、土師器に混ざり、須恵器の破片が少量認められた。また出土している鉢形土器の形態が５世紀末頃に出土事例のあるものに類似することなどから住居の時期を５世紀末前後と考えることができよう。



第100図　SH200完掘状況（南東方向から）

090SH200（第100・101図）

090SH200はＫ２区周辺で検出された竪穴住居跡である。全体の平面形は南北に長い長方形になる。南北0.45m、東西3.15m、壁高は遺存状況の良好な所で約0.45mを測る。柱穴は南北両端に配置され二本柱構造であったと考えられる。住居内壁の３面に深さ0.1m程度の浅い凹上を呈する壁溝が巡る。住居中央には、主柱の配置ラインに軸を揃えるように楕円形土坑が付設される。土坑は1.45m×0.65mの規模



第101図　SH200遺構実測図（1/60）

を測り最深部で約0.15mの深度を有する。土坑内には焼土とカーボン粒が堆積する。この土坑の南側には焼土が分布しており、地床炉であった可能性が考えられる。住居の堆積埋土は大きく３層に分層が可能であり、出土土器の大半は第１層ならびに第２層から出土する。堆積様態はレンズ状を呈しており、自然堆積によるものと判断される。したがって出土土器はその大部分が住居埋没途中に廃棄されたものと考えられる。

出土遺物（第102～106図）

出土遺物には、壺Ｂ、壺Ｃ、壺Ｇ、壺Ｈ、甕Ａ、甕Ｃ、鉢Ｂ、鉢Ｃ、鉢Ｅの他、小型器台、高坏などが出土している。

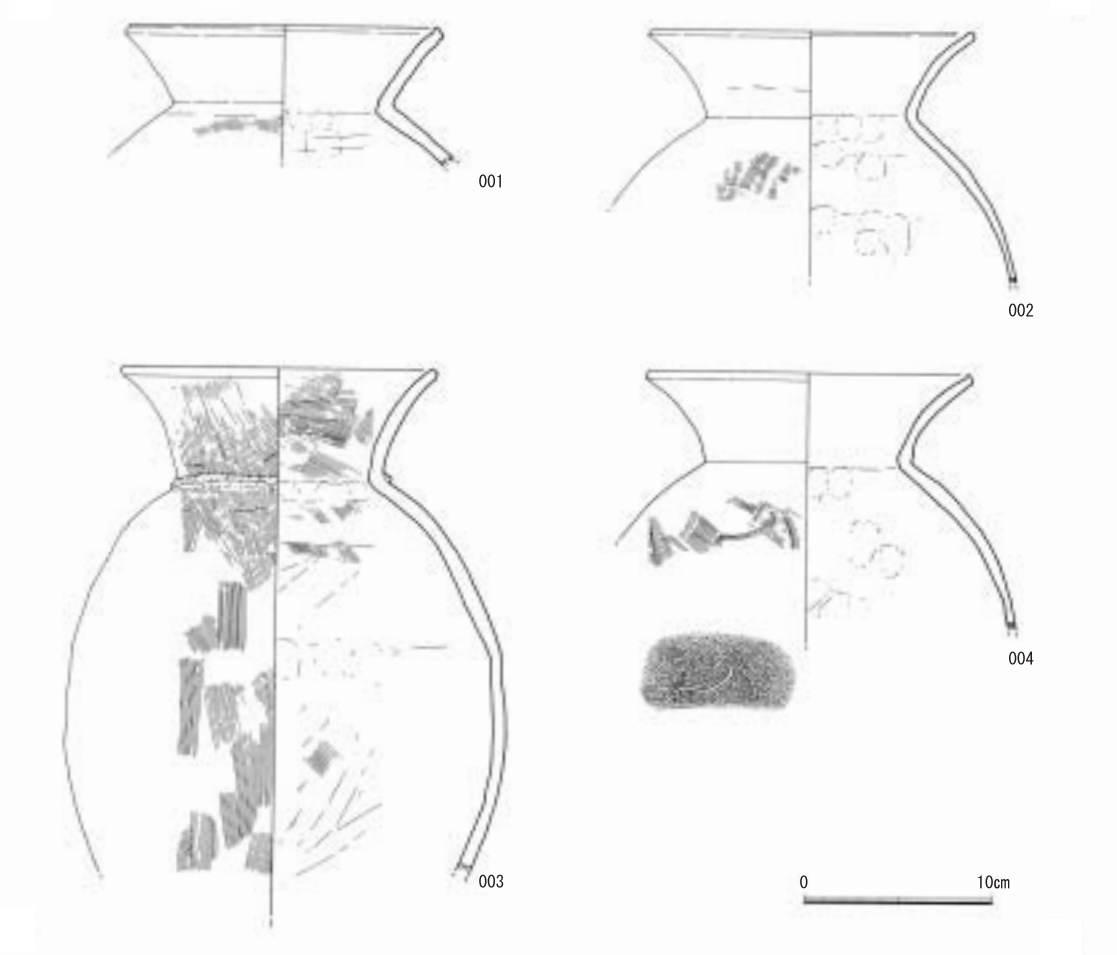
001～004は壺Ｃ形式である。

001 は住居埋土第Ⅱ層から出土したもので、淡茶褐色を呈する。復元口径16.2㎝を測る。内器面はナデ、外器面はナデとハケ目により調整され、焼成は良好である。口縁端部に若干のつまみ上げによる強調がおこなわれており、いわゆる布留式土器の影響を感じさせる。

002 も住居埋土第Ⅱ層から出土したＣ形式の壺である。外方へ開く口縁部になで肩気味の体部が接続する。淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石等を含む。口径16.9㎝を測る。

003 もＣ形式の壺であるが、頸部に貼付突帯をもつ点で他と異なっている。口径16.6㎝を測る。赤褐色を呈し、焼成は良好である。外器面には環状にススの付着が認められる。

004 は住居埋土第Ⅱ層出土破片と第Ⅲ層出土破片が接合した資料である。淡茶橙色を呈し、内器面は



第102図　SH200出土遺物実測図①（1/4）

ナデ主体の器面調整、外器面はハケ目調整が実施される。肩部にはヘラ描きによる線刻が認められるが、破片資料のため、線刻の意匠等は不明である。

005は壺Ｂである。約１/２が遺存し、図上復元の可能な資料であり、復元口径11.0㎝、器高9.2㎝、復元胴部最大径は12.2㎝を測る。胎土中には角閃石、石英、長石、金雲母を含み、淡黄褐色を呈する。器面の調整はナデが主体として多用され、外器面には赤色顔料が塗布される。

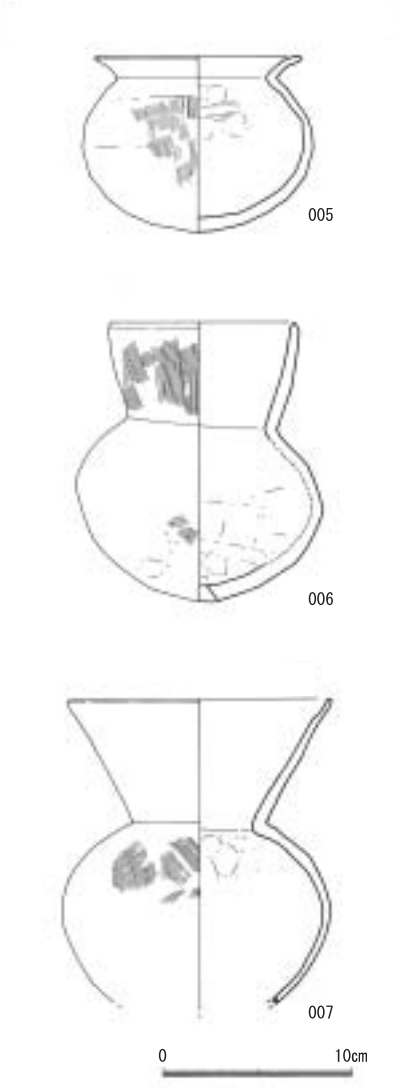
006・007は壺Ｈである。**006**は淡赤橙色を呈する。口径10.0㎝、器高14.7㎝を測る。器面調整はハケ目とナデによりおこなわれる。口縁部はやや内湾しながら直立気味に立ち上がる。底部に外側から内側に貫通する円孔が土器焼成前に穿たれている。

007は球形の胴部から逆「ハ」字状に直線的な展開をみせる口縁部をもつ壺Ｈである。住居埋土第Ⅰ層と第Ⅱ層の出土破片が接合した。色調は淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石粒を含む。内器面調整はナデ調整が主体として施され、外器面にはハケ目調整の後に最終調整としてナデが実施される。口径13.8㎝を測る。焼成は良好である。

008～011は甕Ｃである。

008は淡茶褐色を呈する布留式系甕口縁部であり、石英、金雲母等を胎土中に含む。口縁端部は肥厚気味に強調される。

009も口縁端部を強調する布留式系の甕である。第Ⅱ層から出土した。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には金雲母、角閃石等を含む。復元口径19.0㎝を測る。



第103図　SH200出土遺物実測図②（1/4）

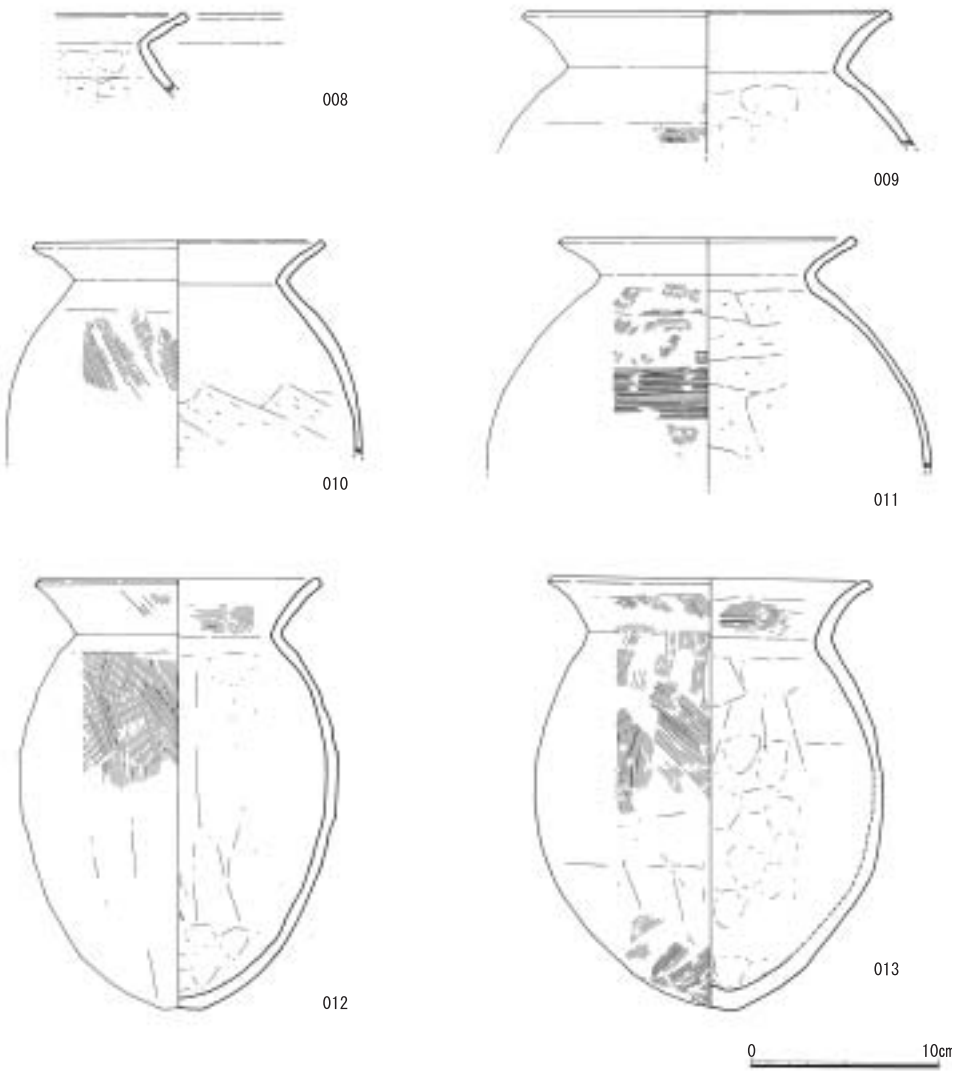
010も布留式系の甕であり、口縁端部は若干つまみ上げたように強調される。色調は淡茶褐色～暗茶褐色を呈し、胎土中には長石、角閃石粒を内包する。焼成は良好である。

011も甕Ｃの特徴をもつ布留式系甕で、色調は淡茶褐色～黒色を呈し、焼成は良好である。復元口径15.2㎝を測る。外器面にはススの付着が認められる。

012・013は胴部の球形化が比較的進んでおり、より甕Ｃあるいは甕Ｂへ近い形状へと変化しつつあるが、製作技法、調整技法の点で在来の甕Ａに通有に見られる技法を踏襲する。

012は第Ⅱ層と第Ⅲ層出土資料が接合したもので、復元口径15.0㎝、器高22.8㎝を測る。内器面はハケ目調整の後、工具によるナデ調整がおこなわれ、外器面はハケ目調整の後に下半部を中心にナデが実施される。外面下部にススの付着が認められる。

013は口径16.7㎝、器高22.7㎝、胴部最大径18.4㎝を測る。色調は淡茶褐色を呈し、外器面はハケ目調整後ナデにより調整され、内器面も当初はハケ目調整がなされるものの、最終的にヘラ状工具による工具ナデにより平滑に仕上げられる。

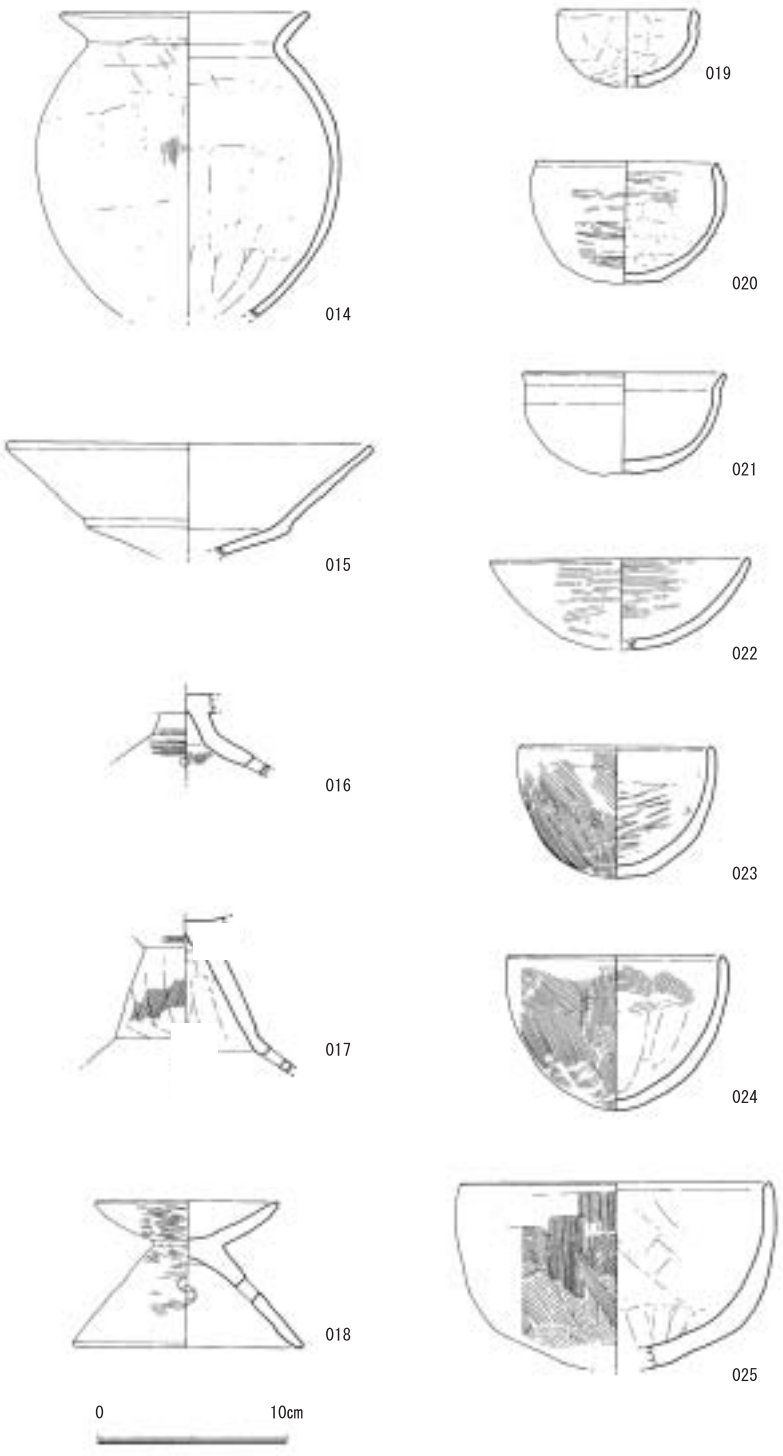


第104図　SH200出土遺物実測図③（1/4）

014は淡黄橙色を呈する甕Ｂである。口径12.4㎝を測り、角閃石、石英粒等を胎土中に含む。外器面調整は工具によるナデ調整の後ハケ目調整をおこない、最終調整としてナデを実施する。内器面の調整に関しては、ヘラケズリの後、ナデにより仕上げられている。外器面にはススの付着が観察される。

015は完存する高坏坏部である。第Ⅱ層から出土した。淡茶褐色を呈し、口径19.1㎝を測る。本資料は090SH020出土高坏坏部分類のＡ類に帰属するものであるが、脚部形状が不明なため、形式分類上の明示はおこなえない。器表面の調整に関しては風化のため不明である。

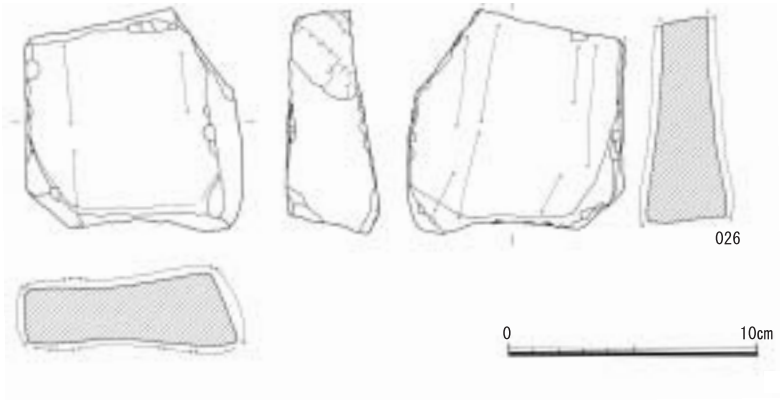
016・017は高坏の脚部である。**016**は脚部のみ遺存する資料であり、形態から大きくは090SH020出土土器分類の脚ａに相当するが、短い脚柱部に低平に開く脚裾部が接続する資料は、いずれの資料とも趣を異にし、さらに他遺跡出土資料の例から同種の脚部には鉢状の坏部が組み合う例が知られている（大分市守岡遺跡(註3)）。したがって、ここでは090SH020出土土器の分類に新たな形式を付加し、同種の高坏資料を高坏Ｃ形式としよう。色調は赤橙色を呈し、胎土中には角閃石、石英、金雲母が含まれる。外器面は細密なヨコ方向のヘラミガキにより仕上げられ、脚部には外方から貫通する穿孔が４ヶ所に認められる。焼成は良好である。



第105図　SH200出土遺物実測図④（1/4）

017は脚ａに相当する高坏脚部である。色調は淡褐色～赤橙色を呈し、ハケ目、ナデにより器面は調整される。

018は小型器台である。坏部は完存し、脚部は約1/2が遺存する。第Ⅱ層から出土した。口径9.7㎝、器高7.7㎝、復元脚裾部径12.2㎝を測る。本器台の形態的特徴は浅い椀状の坏部に山形に開く坏部にあり、090SH020出土土器分類の際の小型器台Ａとは明らかに異なっている。したがって、016の高坏Ｃと同



第106図　SH200出土遺物実測図⑤（1/3）

様の理由から新たに018と同種の器形的特徴を有する小型器台を小型器台Ｂとし、先の土器分類に新たな新分類を加えることとする。

019～025は鉢である。形状の上から鉢Ｂ、鉢Ｃ１、鉢Ｅに帰属するものがある。

019は復元口径7.0㎝を測る小型の鉢Ｃ１である。丸底の底部から口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は舌状に整形される。淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。器面はナデを主体として調整される。

020も019と同様に鉢Ｃ１形状を呈する鉢である。淡赤褐色を呈する。口径9.5㎝を測り、内外器面の最終調整にはヘラミガキが施される。

021は口縁部が外方へ「く」字状に若干折れ曲がる鉢Ｂ形状を呈する鉢である。第Ⅱ層から出土した。090SH020出土土器分類においては鉢Ｂは口径30㎝前後のものばかりであったが、本資料の存在から小型のものが存在することが明らかとなった。淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、長石、角閃石粒を含む。本資料は完存品であり、外器面に黒斑を確認することができる。

022は鉢Ｅ形状を呈するものである。口径13.5㎝を測り内外器面は最終調整にヨコ方向のヘラミガキが施される。淡橙褐色を呈する。

023は鉢Ｃ１形状を呈するもので、淡茶褐色を呈する。胎土中には角閃石、長石、石英粒を含む。口径9.9㎝を測る完存資料である。第Ⅱ層から出土した。

024もまた第Ⅱ層中から出土した鉢Ｃ１である。口径11.5㎝を測る。外器面はハケ目による調整がおこなわれ、内器面はハケ目調整の後に内底面についてはヘラ状工具によるナデ調整が実施される。

025も形態は鉢Ｃ１形状を呈するが、復元口径16.4㎝と非常に大振りである。外器面はタテ方向のハケ目調整が実施され、内器面はヘラ状工具によるナデ調整により平滑に仕上げられる。外底面にススの付着が観察される。住居埋土第Ⅲ層からの出土である。

026は砂岩製の砥石である。掲載図の位置関係において上端を欠失する。下端にあたる面を除き、他の面はすべて使用されており、現存重量361.0ｇを測る。

土器棺墓（ＳＪ）

090SJ398（第107図）

090SJ398は墓壙規模が0.95ｍ×0.6ｍ、現存深度0.1ｍを測る楕円形プランを呈する小型の土器棺墓で

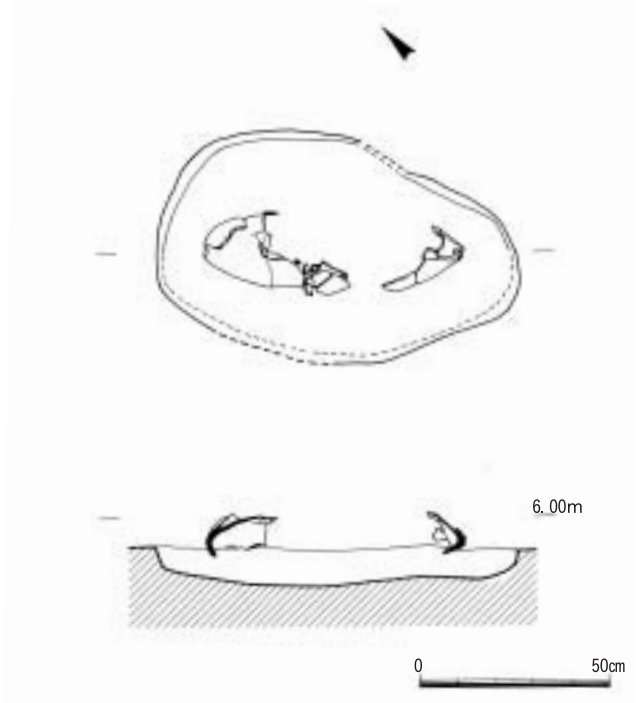
ある。上部は削平されており遺存状態はよくないが、土器を打ち欠き遺体の上にかぶせるような状態で出土した。甕形土器の底部形態から後期後葉の所産であると考えられる。

出土遺物（第108図）

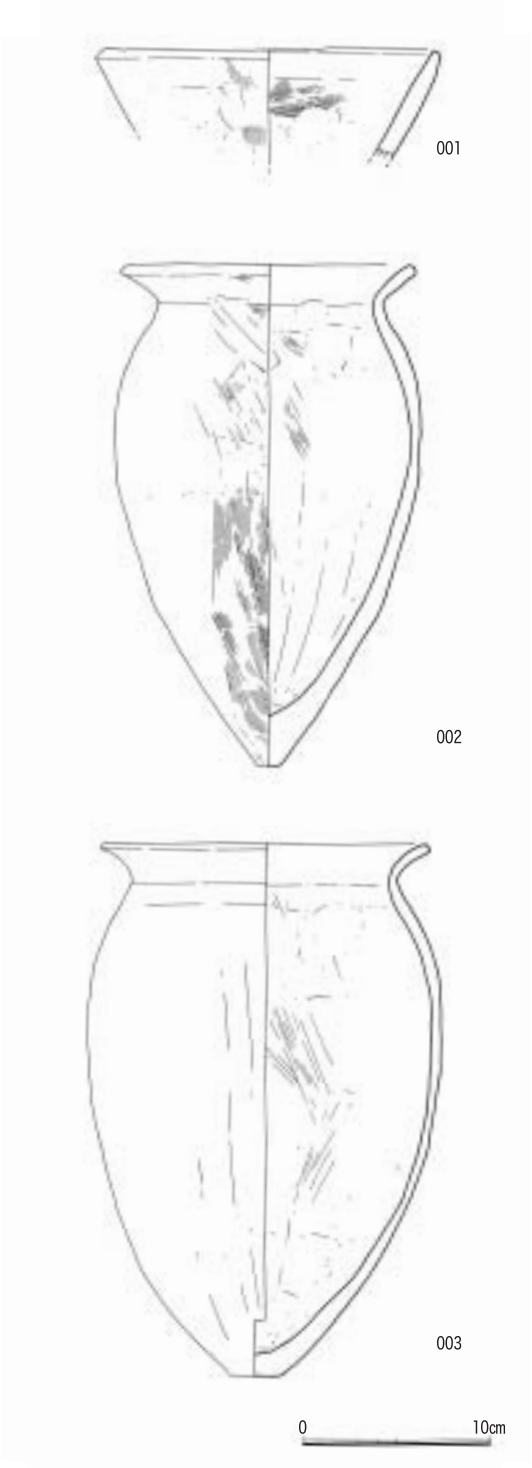
001は淡黄橙色を呈する土器口縁部である。器種は不明であるが、壺形土器の口縁部ではないかと考えられる。復元口径17.2cmを測り、内外器面はハケ目後ナデにより調整される。焼成は良好である。土器棺墓のほぼ中央南側に配置される。

002は甕であり、約1/2が遺存する資料である。甕を二分し、蓋状に土器棺として使用している。明茶褐色を呈し、内外器面はハケ目を主体とする工具ナデにより仕上げられている。胎土中には角閃石、石英粒を含んでいる。

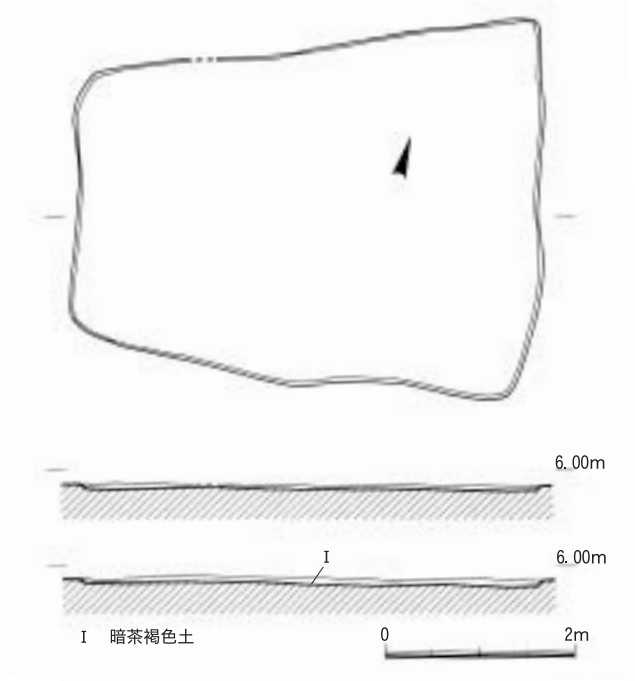
003も甕であり、002と同様に半個体を土器蓋状に使用している資料である。茶褐色を呈し、内外器面とも工具ナデにより調整される。外器面には環状にススの付着が認められ、日用の甕を転用して土器棺に利用していることを示している。002・003とも甕Aの系譜上に位置付けられるものである。小さな平底を残す器形は、大分平野における弥生時代後期後葉に編年される土器資料の特徴であり、本遺構の帰属年代もほぼ弥生時代後期後葉を中心とする時期のものと考えられる。



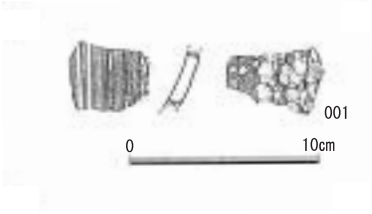
第107図　SJ398平面・断面実測図（1/20）



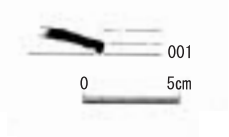
第108図　SJ398出土遺物実測図（1/4）



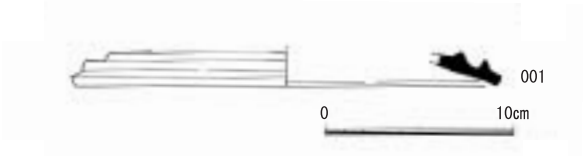
第109図　SX005遺構実測図（1/80）



第110図　SX005出土遺物実測図（1/4）



第111図　SX006出土遺物
実測図（1/4）



第112図　SX019出土遺物実測図（1/4）

その他の遺構（ＳＸ）

090SX005（第109図）

090SX005は調査区の北西部分に位置し、090SH020と切り合い関係を有する。平面プランは台形状の不整方形を呈し、2.64m×5.0m×4.05mの規模を測る。検出面から底面までの深さ約0.1ｍを測り、暗茶褐色土の単一層を埋土とする。底面はフラットである。出土遺物には瓦質の擂鉢片がある。

出土遺物（第110図）

001は瓦質の擂鉢破片である。色調は灰白色を呈する。３本の擂目を確認することができる。焼成は良好である。破片が小さく、所属時期を確定するだけの属性の抽出は困難である。ただ、大分平野での瓦質擂鉢の出現は、14世紀を遡ることはなく、したがって本遺構も14世紀以降のものであると判断される。

090SX006（第16図）

090SX006は090SX005のすぐ西側で確認されたピット状の遺構である。径0.2mの円形プランを呈している。

出土遺物（第111図）

出土遺物には、須恵器蓋の端部片がある。**001**は090SX006から出土した須恵器蓋の端部片であり、淡灰色を呈している。頂部に近い部分には、回転ヘラケズリが施され、内外器面は回転ナデにより調整される。

090SX019（第16図）

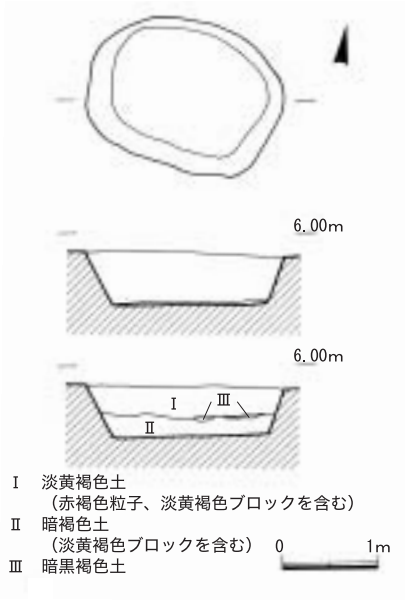
090SX019は調査区の南西部、Ｍ２区で検出された土坑状の掘り込みである。楕円形を呈し、長軸長約0.7mを測る。出土遺物は少なく、001の須恵器片が１点出土したのみである。

出土遺物（第112図）

001は復元口径25.0㎝を測る須恵質の脚裾部片である。おそらく器台などの裾部端になるものと考えられるが、小破片のため詳細は不明である。暗灰色を呈し、裾部に沿って２本の貼付突帯が貼付される。焼成は良好である。

090SX057（第113図）

090SX057 は楕円形のプランを呈し、検出面からの深さは約 0.6 mを測る。断面観察により検出面から約0.35mのところで掘り返しの痕跡を確認できる。掘り返しは当初の土坑に重なるように掘られており、掘り返し段階に当初の土坑を意識していた様子を伺い知ることができる。この点から両者の時間差は極めて短いと考えられる。出土遺物は概して少ないが、上層から直口壺の小破片が出土しており、弥生時代後期中頃以降の所産と考えられよう。



第113図　SX057遺構実測図（1/80）

090SX059（第114図）

090SX059は090SH020並びに090SH069と切り合い関係を有する楕円形を呈する土坑である。３者の遺構の中で、切り合い関係上最も後出する遺構である。長軸2.2ｍ、短軸1.28ｍを測り、現存深度0.18mを測る。茶灰色土の単一土を埋土とする。

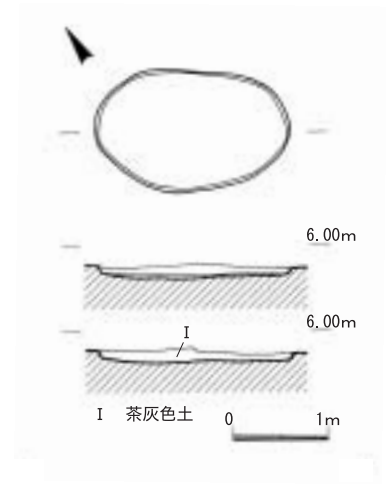
出土遺物（第115図）

001は土師器坏の口縁部破片である。淡茶褐色を呈し、胎土中には長石粒を内包する。内外器面ともヨコナデにより調整される。

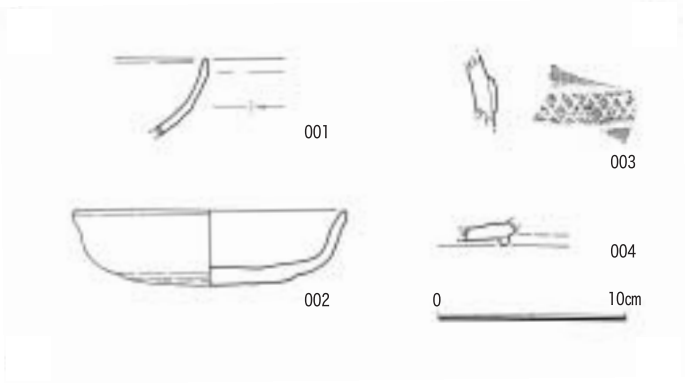
002も土師器坏である。角閃石、長石粒を含み、復元口径14.2㎝、器高3.9㎝、復元底径10.0㎝を測る。底部は回転ヘラ切り離し後、手持ちヘラケズリにより調整されている。これらの諸特徴は８世紀中頃前後に特徴的に認められるものであり、本遺構の帰属年代もこれにより示される時期と考えて大過ないであろう。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。

003 は弥生時代後期終末～古墳時代初頭の壺Ａの胴部に認められる突帯部である。幅広の突帯を巡らし、突帯上にはヘラ刻みによる格子目文が施される。090SH020埋土からの掻きあげ遺物であろう。

004 は土師器高台付坏の底部破片である。体部の立上り部分よりも若干下がった位置に角高台が貼付される。外面は淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石粒を含む。焼成は良好である。002 に近接した時期の所産と考えられる。



第114図　SX059遺構実測図（1/80）



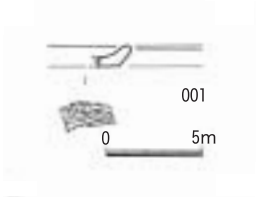
第115図　SX059出土遺物実測図（1/4）

090SX080（第16図）

090SX080は調査区の北東部分、７Ｇ区に位置する。ピット状の遺構であり、径約0.3ｍを測る。

出土遺物（第116図）

001は土師器小皿の口縁部破片である。小片のため、全体形状を知ることはできず、具体的な時期比定は困難を伴うが、口縁部形状と底部に回転糸切り離し痕が認められる点から、おおよそ13～14世紀頃の所産になるものと推定される。淡茶褐色を呈し、角閃石、長石粒を胎土中に内包する。焼成は良好である。



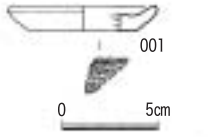
第116図　SX080出土遺物実測図（1/4）

090SX081（第16図）

090SX081は090SX080の東約1.0ｍに位置する同様のピット状の遺構である。090SX080よりもひとまわり大きく、検出面での径約0.4ｍを測る。

出土遺物（第117図）

001は土師器小皿である。復元口径7.6㎝、器高1.3㎝、復元底径5.6㎝を測る。内外器面ともナデにより調整され、底部には回転糸切り離し痕を残す。法量および口縁部形態からおおよそ14世紀前後の所産と推定される。



第117図　SX081出土遺物実測図（1/4）

090SX087（第16図）

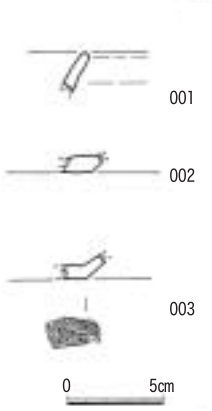
090SX087はピット状の遺構である。径約0.2ｍを測る。数点の遺物が出土しており、第118図には図化可能なものを示している。

出土遺物（第118図）

001 は土師器坏の口縁部破片である。淡茶色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。内外器面ともナデにより調整される。

002 は土師器坏と考えられる底部破片である。底部は風化磨滅のため、切り離し痕を確認することはできない。内外器面ともナデにより調整される。

003 は土師器小皿の底部破片である。底部には回転糸切り離し痕を確認できる。淡茶色を呈し、内外器面ともナデにより調整される。

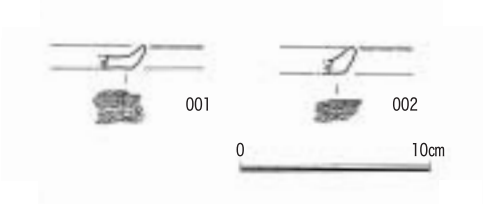


第118図　SX087出土遺物実測図（1/4）

090SX088（第16図）

090SX088は090SX087の東約2.5ｍに位置する柱穴状の遺構である。数点の土師器片が出土している。

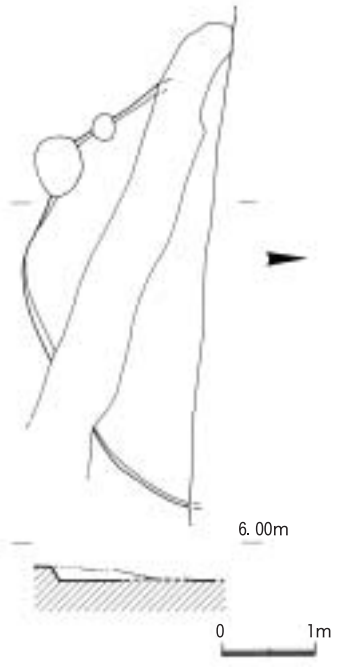
出土遺物（第119図）



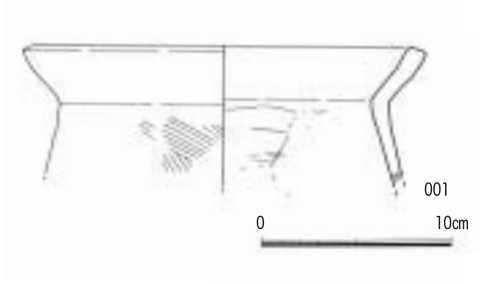
第119図　SX088出土遺物実測図（1/4）

001は土師器小皿の口縁部破片である。外方へ直線的に立ち上がる口縁部形状を呈している。淡茶色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。底部には回転糸切り離し痕が認められる。

002もまた、土師器小皿の口縁部破片である。小片のため全形は不明であるが、底部には回転糸切り離し痕が明瞭に残る。淡茶色を呈し、焼成は良好である。



第120図　SX095平面・断面実測図（1/80）



第121図　SX095出土遺物実測図（1/4）

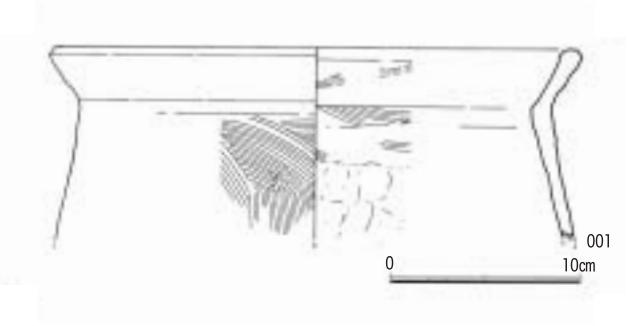
090SX095（第120図）

090SX095は調査区北東端部分に位置する竪穴遺構である。遺構の大部分は調査区の北側外に展開し、中央部は090SD076によって切られている。最も遺存状況の良好な場所で約0.18mの深度を有する。全体形状、規模等の詳細については不明である。

出土遺物（第121図）

出土遺物には土師質甕があり、甕の諸特徴から８世紀代の所産になるものと考えられる。

001 はいわゆる企救型甕と呼称される甕形土器の口縁部破片である。復元口径19.6㎝を測る。内外器面ともナデ調整が施され、外面胴部は最終調整にタテ方向の粗いハケ目が施される。胎土中には比較的大粒の石英粒を含み、色調は明黄茶褐色を呈する。



第122図　SX115出土遺物実測図（1/4）

090SX115（第16図）

090SX115は090SH094の南側の約３ｍに位置する柱穴状の遺構である。

出土遺物（第122図）

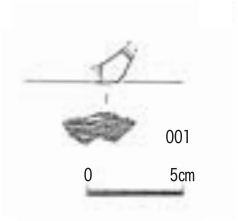
001 は090SX115から出土した企救型甕である。復元口径27.4㎝を測る。内外面とも茶褐色を呈し、胎土中には石英粒等を含む。

090SX152（第16図）

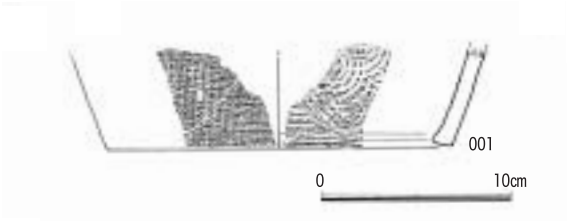
090SX152は調査区のほぼ中央付近で検出した柱穴状の遺構である。出土遺物には土師器坏底部がある。

出土遺物（第123図）

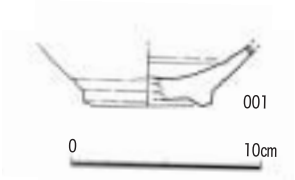
001は土師器坏底部である。淡茶色を呈し、底部には回転糸切り離し痕が残る。内外器面ともナデにより調整される。



第123図　SX152出土遺物
実測図（1/4）



第124図　SX153出土遺物実測図（1/4）



第125図　SX154出土遺物
実測図（1/4）

090SX153（第16図）

090SX153もまた、柱穴状の遺構であり、090SX152の南側約2.0mに位置する。径0.4mの円形を呈している。埋土中からは第124図に示した土師質甕の基底部片が出土した。

出土遺物（第124図）

001は土師質甕の基底部片である。外器面には格子目タタキが明瞭に残り、内器面にも同心円状になると推定されるタタキあて具痕が残る。復元基底部径18.0cmを測り、淡茶褐色を呈する。

090SX154（第16図）

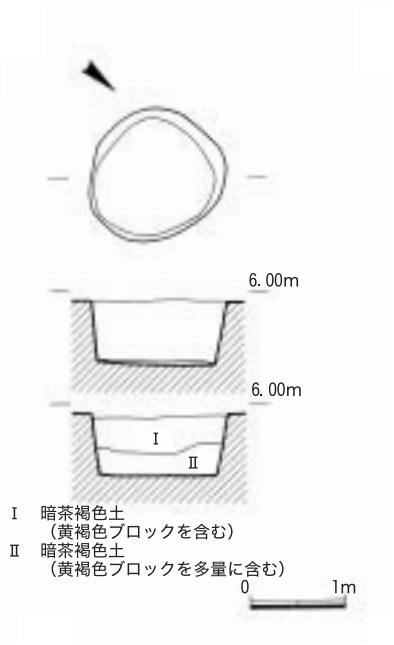
090SX154は調査区のほぼ中央で検出された遺構である。柱穴状の小ピットであり、径0.25mを測る。

出土遺物（第125図）

001は白磁碗の底部破片である。復元底径5.8cmを測る。底部形状から大宰府陶磁器分類白磁碗Ⅳ類の底部破片と判断される。

090SX175（第126図）

090SX175は径1.2m程度の円形のプランを呈し、検出面からの深さは約0.6mを測る。堆積埋土は二層に分層することが可能であるが、いずれの土層にもブロック土を内包し、人為的な埋め戻しがなされた可能性を指摘できる。出土遺物は090SX057と同様に少ないが、弥生時代後期終末の壺形土器の口縁部破片が出土していることなどから弥生時代後期後葉～終末の所産と考えられる。



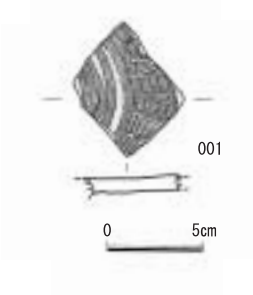
第126図　SX175遺構実測図（1/80）

090SX219（第16図）

090SX219は調査区南側の南壁付近で検出した柱穴状の遺構である。３Ｎ区において検出された。

出土遺物（第127図）

001は090SX219埋土から出土した内器面に暗文を施す高坏坏部片である。施される暗文はミガキａ$_2$様のミガキを施した後にヘラによりジグザグ模様のミガキが施される。赤褐色を呈し、焼成は良好である。



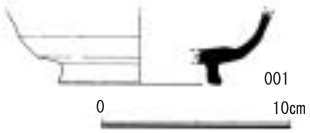
第127図　SX219出土遺物
実測図（1/4）

090SX231（第16図）

090SX231は４M区において検出された柱穴状の遺構である。円形を呈しており、径約0.3mを測る。

出土遺物（第128図）

001は須恵器高台付坏の底部破片である。高台が高く、腰高になっている。復元底径8.4cmを測る。淡灰褐色を呈し、焼成は良好である。



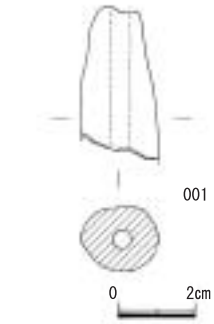
第128図　SX231出土遺物実測図（1/4）

090SX242（第16図）

090SX242は調査区南東端で検出された柱穴状の遺構である。出土遺物は極めて少なく土錘片が１点出土したのみである。

出土遺物（第129図）

001は090SX242から出土した土錘片である。復元される最大径2.0cmを測り、現存重量12.4ｇを測る。



第129図　SX242出土遺物実測図（1/2）

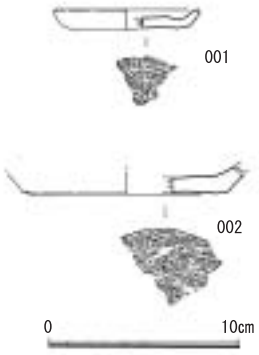
090SX258（第16図）

090SX258は４Ｊ区で検出された遺構である。土師器小皿、坏の破片が出土している。

出土遺物（第130図）

001は底部に回転糸切り離し痕を残す土師器小皿である。復元口径7.5cm、器高1.0cm、復元底径5.4cmを測る。淡茶白色を呈し、焼成は良好である。

002は土師器坏と考えられる底部破片である。復元底径10.8cmを測り、淡茶褐色を呈している。焼成は良好である。これらの資料は、その形態や法量からおおよそ12世紀前後の所産になるものと推定される。



第130図　SX258出土遺物実測図（1/4）

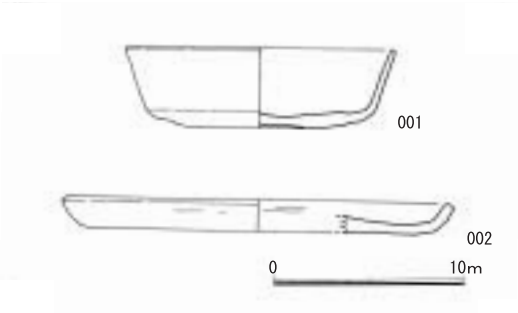
090SX279（第16図）

090SX279は調査区の中央付近で検出された柱穴状の遺構である。出土遺物は概して少ないが、土師器坏、土師器皿などの破片が出土している。

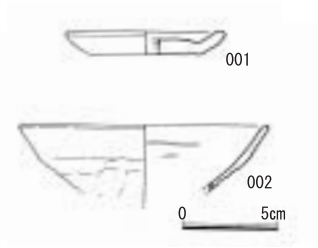
出土遺物（第131図）

001は土師器坏である。復元口径14.0cm、器高4.2cmを測る。底部は回転ヘラ切り離し後にナデにより調整される。体部は内外面とも丁寧なヨコナデ調整がなされている。これらの特徴は豊後大分平野において８世紀中頃から後半にかけて認められるものである。

002は土師器皿の破片である。復元口径20.0cm、器高1.7cm、復元底径16.8cmを測る。淡茶褐色を呈し、内器面はミガキ調整により仕上げられる。外器面は表面が磨滅しており、詳細は不明である。



第131図　SX279出土遺物実測図（1/4）



第132図　SX285出土遺物
実測図（1/4）

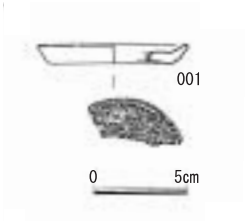
090SX285（第16図）

090SX285は090SB002の南側において検出された柱穴状の遺構である。

出土遺物（第132図）

001は土師器小皿である。復元口径8.2cm、器高1.2cm、復元底径5.8cmを測る。器面が磨滅しており、調整等の詳細は不明である。

002は復元口径13.0cmを測る和泉型瓦器椀の口縁部破片である。色調は淡黒色を呈し、器内面には暗文が認められる。



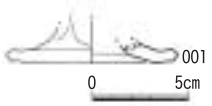
第133図　SX295出土遺物
実測図（1/4）

090SX295（第16図）

090SX295は090SB008の北側に位置する柱穴状の遺構である。

出土遺物（第133図）

001は土師器小皿の口縁部破片である。復元口径7.8cm、器高1.0cm、復元底径6.6cmを測る。胎土中には長石、角閃石、橙色粒子を内包する。底部には回転糸切り離し痕を残し、淡茶色の色調を呈している。



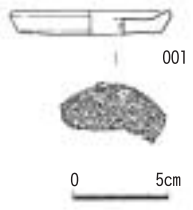
第134図　SX311出土遺物
実測図（1/4）

090SX311（第16図）

090SX311はＪ４区において検出された遺構である。高坏脚裾部片が出土している。

出土遺物（第134図）

001は埋土中から出土した土師器高坏の脚裾部である。復元底径8.8cmを測る。上端部は欠損しており、全容は不明であるが、脚柱部にはヘラケズリによって面取りがなされている。いわゆる都城系と呼ばれる高坏の脚部である。淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。



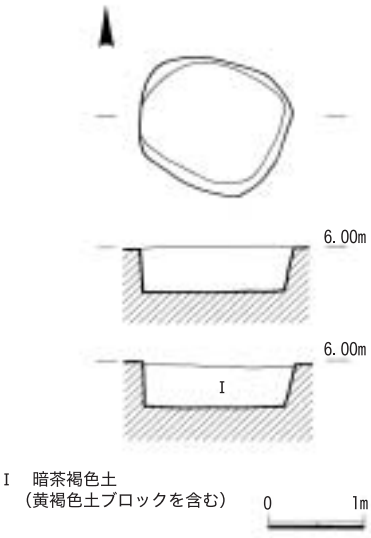
第135図　SX333出土遺物
実測図（1/4）

090SX333（第16図）

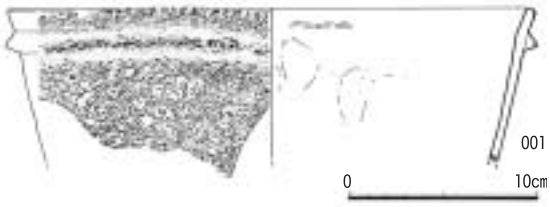
Ｌ５区において検出された柱穴状の遺構である。

出土遺物（第135図）

001は土師器小皿の破片である。底部は回転糸切り離しがなされており、胎土中には角閃石、長石、石英粒を含む。復元口径8.2cm、器高1.2cmを測り淡茶褐色を呈する。



第136図　SX363遺構実測図（1/80）



第137図　SX363出土遺物実測図（1/4）



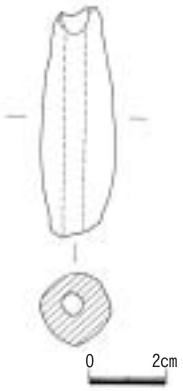
第138図　SX390出土遺物
実測図（1/4）

090SX363（第136図）

Ｍ６区で検出された土坑である。径約1.5ｍを測る円形基調の土坑であり、壁面は垂直に近い状況で立ち上がる。現存深度0.5ｍを測り、黄褐色土ブロックを含む暗茶褐色土の単一土を埋土とする。出土遺物は極めて少なく、図化できたものは001の１点のみである。

出土遺物（第137図）

001は下城式甕形土器の口縁部破片である。外方へ大きく直線的に開く器形をなし、口縁部下の若干下がった位置に一条の刻目突帯が貼付される。また、口縁部外面外側にもヘラ状工具による刻目が施されている。胎土中には長石、石英粒の他に緑色結晶片岩片を含む点が特徴的である。復元口径27.0㎝を測り、淡茶褐色を呈している。器形的な特徴から弥生時代中期に編年されるものと判断される。



第139図　SX392出土遺物
実測図（1/2）

090SX390（第16図）

090SX390は090SB294の内部で検出された遺構である。

出土遺物（第138図）

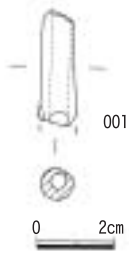
001は遺構埋土から出土した製塩土器の口縁部破片である。胎土中には角閃石、石英、長石粒を含み、淡黄褐色を呈している。二次被熱を受けているためか、表面はかなり脆弱になっている。

090SX392（第16図）

090SX392もまた、090SX390と同様に090SB294の内部で検出された遺構である。土坑内部には柱痕状の遺構が認められることから、090SX390と対になり090SB294に付随する可能性も考えられるが、090SB294を構成する柱掘り方とは、規模、構造等が大きく異なり、深度が浅い点や形状も不整形である点などから、積極的に随伴する遺構とする確証は得られていない。ほぼ完存する土錘が１点出土している。

出土遺物（第139図）

001は出土した土錘であり、淡茶褐色を呈した胎土には角閃石、長石等を内包する。長さ6.1㎝、最大径1.9㎝を測り、重量は19.1ｇを測る。



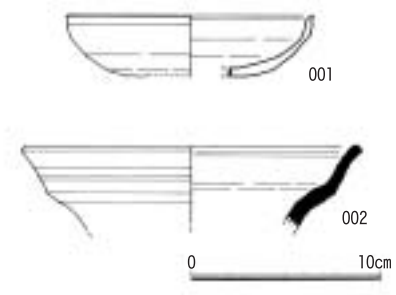
第140図　SX401出土遺物
実測図（1/2）

090SX401（第16図）

Ｍ７区において検出された柱穴状の遺構である。090SB294を構成する柱穴により切られており、090SB006に先行するものであることは明らかである。

出土遺物（第140図）

001は土錘である。片端を欠損する。



第141図　SX412出土遺物実測図（1/4）

090SX412（第16図）

Ｎ７区に位置する柱穴状の遺構である。数点の破片遺物が出土している。

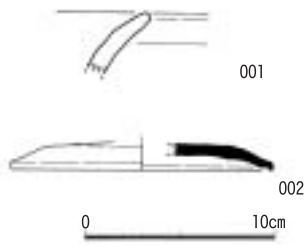
出土遺物（第141図）

001は土師器坏である。復元口径13.0cm、器高3.2cmを測る。底部は回転ヘラ切り離し後にナデ調整が施されている。淡赤橙色を呈している。焼成は良好である。

002 は須恵器壺の口縁部破片である。口縁部分は二重口縁状をなし、復元口径18.0cmを測る。暗灰色～淡灰色の色調を呈する。焼成は良好である。

090SX413（第16図）

後述する090SX464の西側に位置するＭ５区において検出された柱穴状の遺構である。数点の遺物が出土している。



第142図　SX413出土遺物実測図（1/4）

出土遺物（第142図）

001 は土師質甕の口縁部片である。外側に大きく外反する器形をなしている。淡茶褐色を呈し、胎土中には長石、角閃石粒を含む。また、内面にはススの付着を認めることができる。

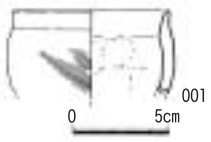
002 は須恵器蓋の端部破片である。復元口径13.6㎝を測り、内外器面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

090SX414（第16図）

090SX414はＮ６区において検出された土坑状の遺構である。

出土遺物（第143図）

001 は090SX414埋土から出土した小型の鉢である。長石粒を含み、淡茶褐色を呈する。器形は、若干膨らみ気味の体部から舌状に外方へ展開する小さな口縁部を有する。外器面はハケ目によって調整される。



第143図　SX414出土遺物実測図（1/4）

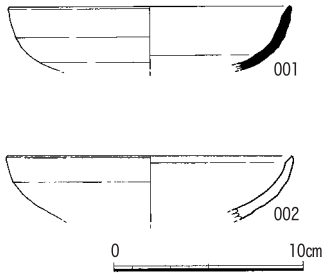
090SX427（第16図）

調査区南壁際、Ｎ７区で確認された土坑状の遺構である。

出土遺物（第144図）

001は須恵器の坏である。復元口径14.8cmを測る。淡灰褐色を呈している。

002 は復元口径15.0cmを測る土師器坏である。淡茶色を呈し、内外器面ともにナデにより調整される。口縁端部内面に面取り風の平坦面を形成する点を特徴とする。



第144図　SX427出土遺物実測図（1/4）

090SX434（第145図）

調査区の南端に位置し、090SX464の東側に位置する土坑状の遺構である。不整円形を呈すると考えられるが、北側部分を090SX452に切られており、全体形状は不明である。短軸1.2m、長軸1.4m＋αの規模を有し、現存深度0.36mを測る。底面はフラットであり、ブロック土を含む茶褐色土の単一土層で埋土を構成する。出土遺物には弥生時代中期に比定される土器片が数点あり、土坑 の帰属年代をほぼこのあたりに想定して大過ないものと考える。

出土遺物（第146図）

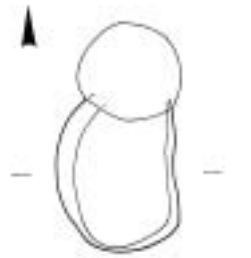
001 は広口壺の口縁部と推定される口縁部破片である。淡茶灰色を呈する。内器面は丁寧なナデ調整がなされ、外器面はハケ目による調整とミガキにより仕上げられる。焼成は良好である。

002 は下城式と呼称される甕形土器の口縁部破片である。体部から直線的に開く器形を呈し、口縁部外面下に一条の刻目突帯を貼付する。淡茶褐色を呈する。焼成は良好である。

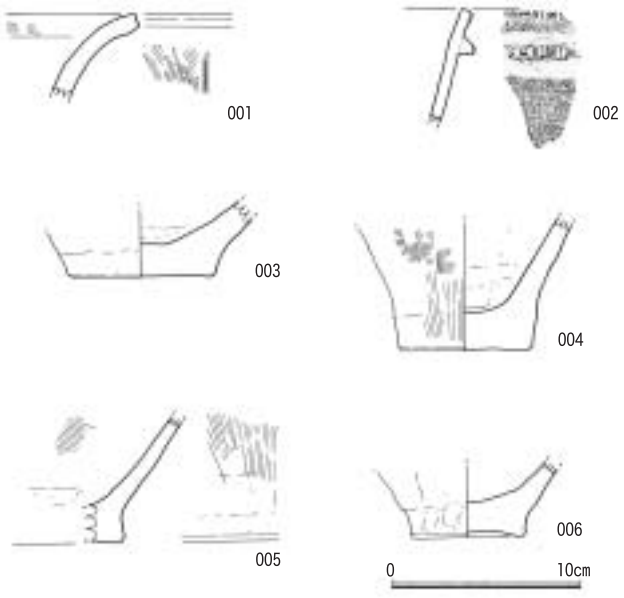
003・005 は壺の底部破片である。**003** は淡茶褐色～黒色を呈する底部破片である。底部径7.0cmを測る。胎土中には石英、長石等を含むが、他に緑色結晶片岩片を含んでおり、ひとつの特徴といえる。一部にススの付着が認められる。

005 も壺の底部破片である。色調は淡茶褐色～淡橙褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。内外器面とも基本的にはハケ目により調整される。

004・006 は甕の底部破片である。**004** は底径6.6cmを測り、淡茶褐色～淡橙褐色の



第145図　SX434遺構実測図（1/80）



第146図　SX434出土遺物実測図（1/4）

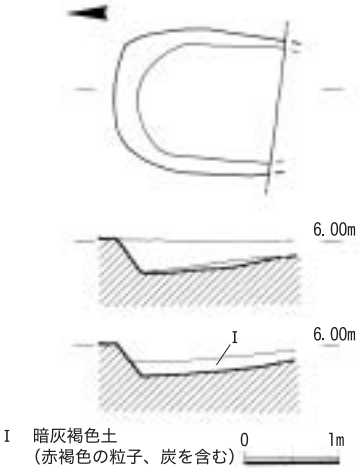
色調を呈している。分厚い円盤状の底部から上方へ展開する器形は特徴的であり、002のような下城式甕の底部になるものと推定される。

006は復元口径5.6cmを測る甕の底部破片である。色調は淡茶色～黒色を呈し、底部は若干の上げ底状を呈する。外器面は指により押えられ、ナデ調整により仕上げられる。

以上の出土資料の中で001～005の資料は、おおよそ弥生時代中期の範疇で理解できるものと考えるが、006資料に示される特徴は、大分平野の弥生時代後期前葉から後葉にかけて認められる特徴であり、090SX434の帰属年代は、この006により示される時期のものであると考えられる。

090SX441（第147図）

楕円形を呈する土坑である。調査区南壁際において確認され、南側部分は調査区外に展開する。規模は短軸1.45m、長軸1.7m＋αである。底面は北側に傾斜し、北側部分が若干深くなっている。最深部である北側壁面付近で0.36mを測る。暗灰褐色土を埋土とする。埋土中から少量の土器と石鏃片と考えられる石片が出土している。



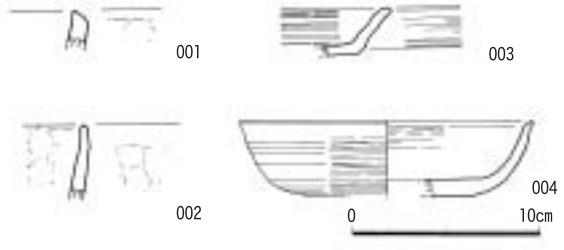
第147図　SX441遺構実測図（1/80）

出土遺物（第148・149図）

001・002は製塩土器の口縁部片である。

001は器面調整の詳細は小片のため不明であるが、ヘラにより切り取られた口縁端部はナデにより調整されている。胎土中には特徴的に結晶片岩片を包含しており、002とは異なる趣をかもしている。

002も001と同様の製塩土器の口縁部破片であるが、端部形状、胎土内含有物の２点において異なっている。すなわち、端部の形状については、001が厚手で、口縁端部が斜め方向にヘラ切りされるのに対して、002は薄手であり、端部まで先細り気味に成形され、ヘラによる切面をもたない点が異なっている。胎土は長石粒を含み、淡茶褐色を呈する。

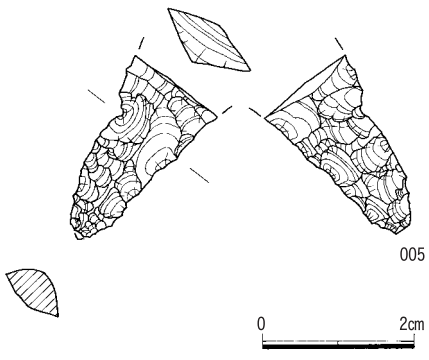


第148図　SX441出土遺物実測図①（1/4）

003は土師器皿破片である。赤橙色を呈し、内外器面とも最終調整にミガキａ$_2$が施されている。

004は土師器坏である。淡茶褐色～暗茶褐色の色調を呈し、復元口径15.4cm、器高4.0cm、復元底径9.6cmを測る。外器面下位に回転ヘラケズリをおこない、最終調整にミガキａ$_2$が施される。焼成は良好である。以上の資料はおおよそ８世紀後半前後の年代観が推定される。

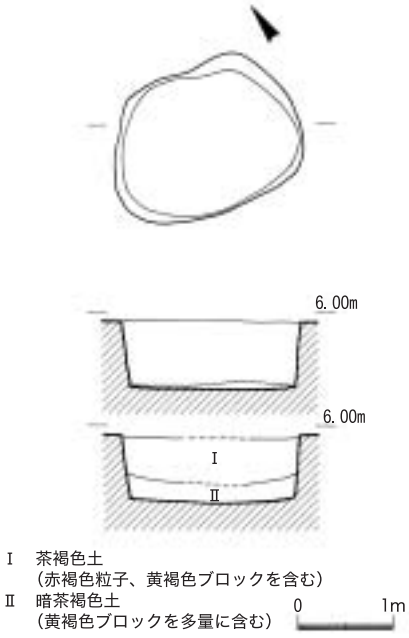
005は姫島産黒曜石製の石鏃の脚部破片である。現存重量1.2ｇを測る。前述のように、他の出土遺物から当該遺構の年代には８世紀後半前後の想定がなされる点から、005は先行する時期の混入であると判断される。



第149図　SX441出土遺物実測図②（1/2）

090SX448（第150図）

090SX448は楕円形のプランを呈し、現存深度約0.65mを測る。第Ⅱ層暗茶褐色土層上面からミニチュアの壺形土器や甕形土器が出土しており、何らかの祭祀行為がおこなわれた可能性がある。また、二層に分層可能な埋土は両者ともにブロック土を多量に内包しており、人為的な埋め戻しによるものと考えられる。したがって、第Ⅱ層充填後、土器を遺棄し、さらに第Ⅰ層土により埋め戻したものと推定される。土坑の帰属年代はこれらの土器から弥生時代後期終末～古墳時代初頭の所産と推定される。



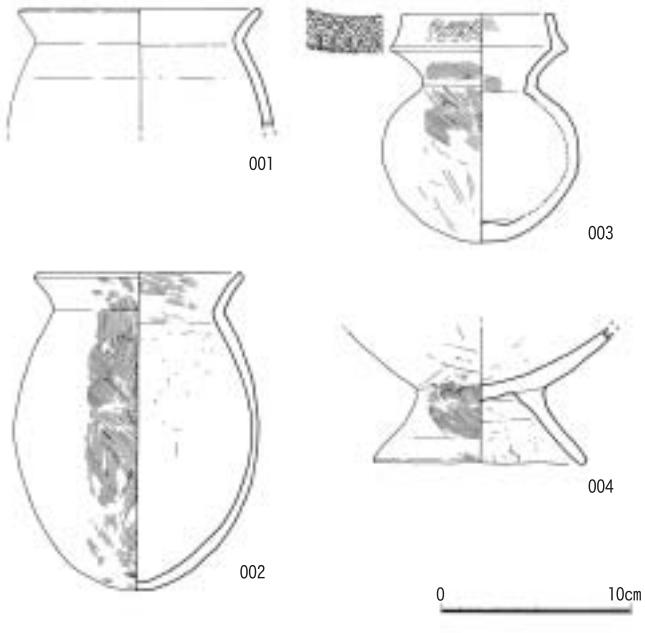
第150図　SX448遺構実測図（1/80）

出土遺物（第151・152図）

001 は甕の口縁部破片である。土坑の床面直上から出土している。甕Ｂに分類されるもので、形態には弥生時代以来の伝統的な器形を示しながら、内器面にはヘラケズリ技法が導入されている資料である。淡黄橙色の色調を呈し、焼成は良好である。復元口径12.4cmを測る。

002も甕であるが、001と同様に甕Ｂに分類されるものである。器内面に不明瞭ながらヘラケズリ技法が導入されている。復元口径10.4cm、器高16.9cmを測る。淡黄橙色を呈する。外器面には環状にススの付着が認められる。

003 は壺Ａであり、複合口縁壺のミニチュア土器である。複合口縁部には六本１単位の櫛状工具による櫛描波状文が施され、安国寺式壺形土器の特徴をよく写している。復元口径7.9cm、器高12.1cm、胴部最大径10.3cmを測る。本資料で特徴的なのは、器外面にタテ方向の均等な位置に３ヶ所赤色顔料により帯状の塗彩を実施している点である。明らかに文様を意識した意匠となっている。焼成は良好である。

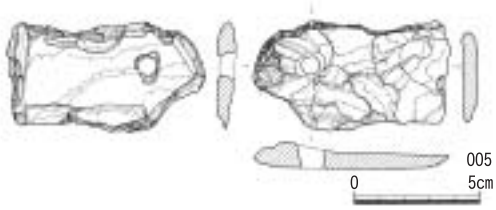


第151図　SX448出土遺物実測図①（1/4）

004は鉢Ｄに分類される台付鉢である。本資料も001とともに遺構床面直上から出土している。胎土中には角閃石、石英等を含む。復元脚部径は11.2cmを測る。

005は緑色結晶片岩製の石製品である。オリーブ灰色を呈する。一端を欠損しており、全形は不明であ

る。遺存端付近に円形の穿孔が認められる。現状で推定される器種としては、打製石包丁、磨製石包丁未製品、石鎌などが考えられるが、現段階ではいずれに相当するのかを判断することは困難である。



第152図　SX448出土遺物実測図②（1/3）

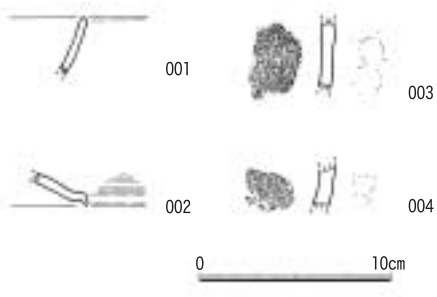
090SX453

090SX453はＮ２区において確認された柱穴状の遺構である。

出土遺物（第153図）

001 は土師器坏と考えられる口縁部破片である。淡茶色を呈する。

002 は土師器蓋の端部破片である。淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。外器面の調整にはミガキａ$_2$が施されている。



第153図　SX453出土遺物実測図（1/4）

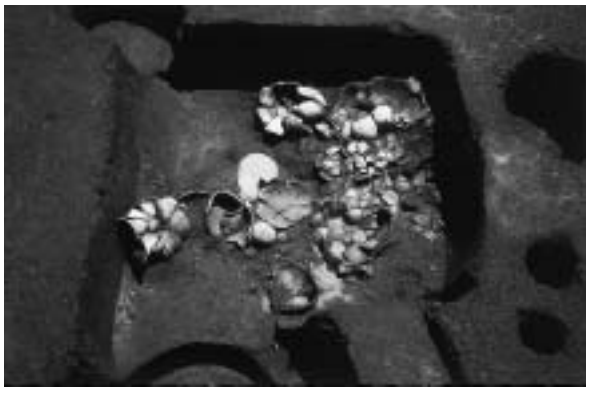
003・004はいずれも製塩土器の胴部片である。**003**は淡茶褐色を呈し、胎土中には長石、角閃石、緑色結晶片岩片を内包している。内器面に布目痕が残っている。

004は淡茶褐色を呈する製塩土器の胴部片である。内器面に明確な布目痕が認められる。

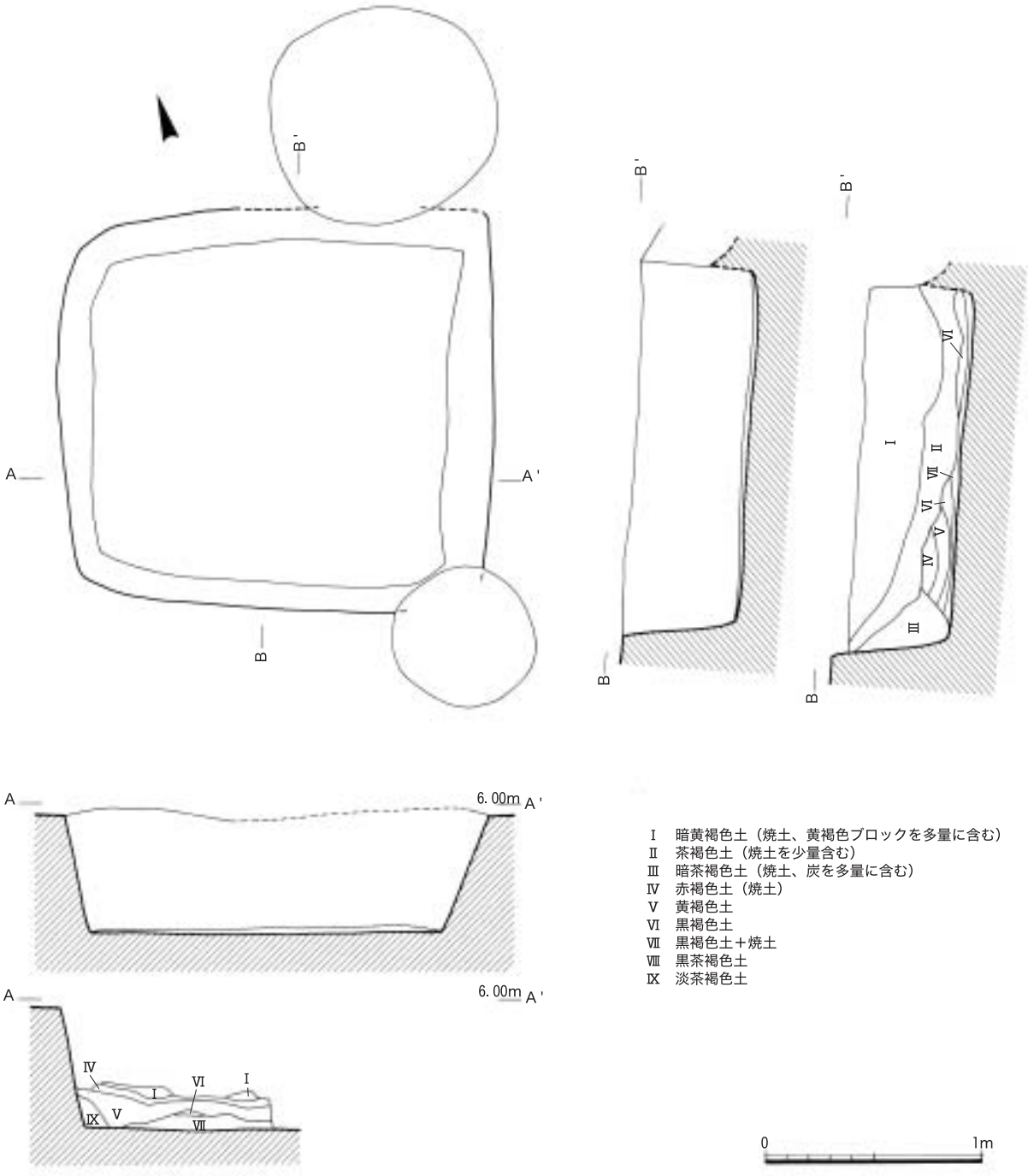
090SX464（第154・155図）

090SX464は方形プランを呈し、現存規模が1.7m×1.7m、深さ0.56mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、西側を除く３面は被熱していない。床面直上に焼土の堆積が認められ、焼土の上面には弥生時代後期終末～古墳時代初頭の甕、壺、台付鉢、高杯などが廃棄された状態で出土した。焼土部分は焼土粒を含む粘土の層と焼土の層が交互に２回ずつ堆積している状況が認められた。このことから土坑使用時には底面に粘土を貼っていたと想定される。粘土層に挟まれた焼土内には表面に微細な剥離が認められる土器の小片が少量ながら認められることから、本土坑において土器焼成がおこなわれた可能性が高いと推定される。また、土坑底面には粘土層と焼土層の互層が堆積していることから090SX464では複数回の土器焼成が行われていたと考えられる。

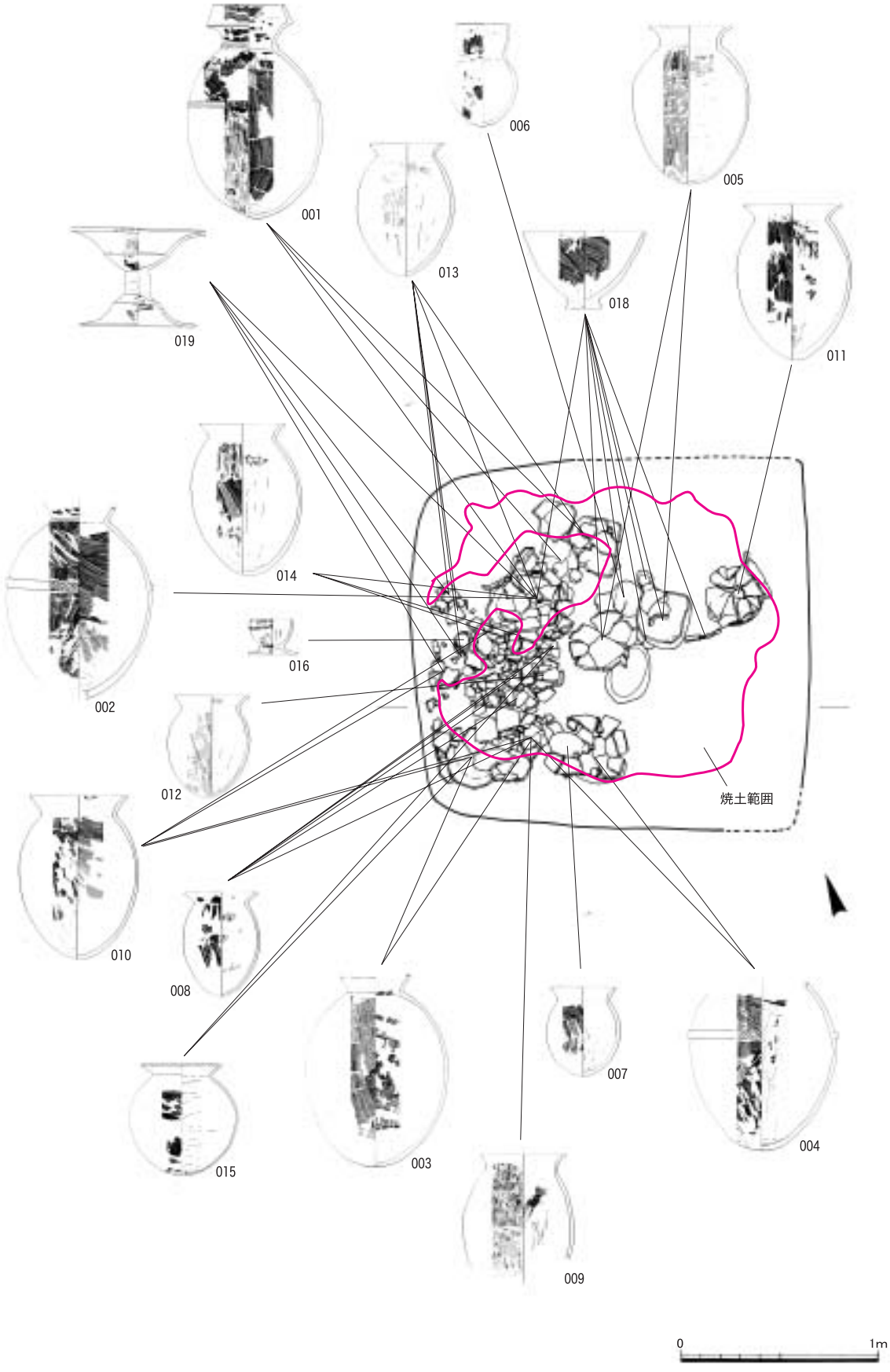
出土した多量の土器は、表面に土器焼成時に被熱による剥離が認められない点や、甕などの外器面にススが付着するなど、明らかな使用痕が確認できることから、本土坑において焼成された直後に廃棄されたものではなく、090SX464の機能停止直後に使用した後に廃棄されたものと判断される。



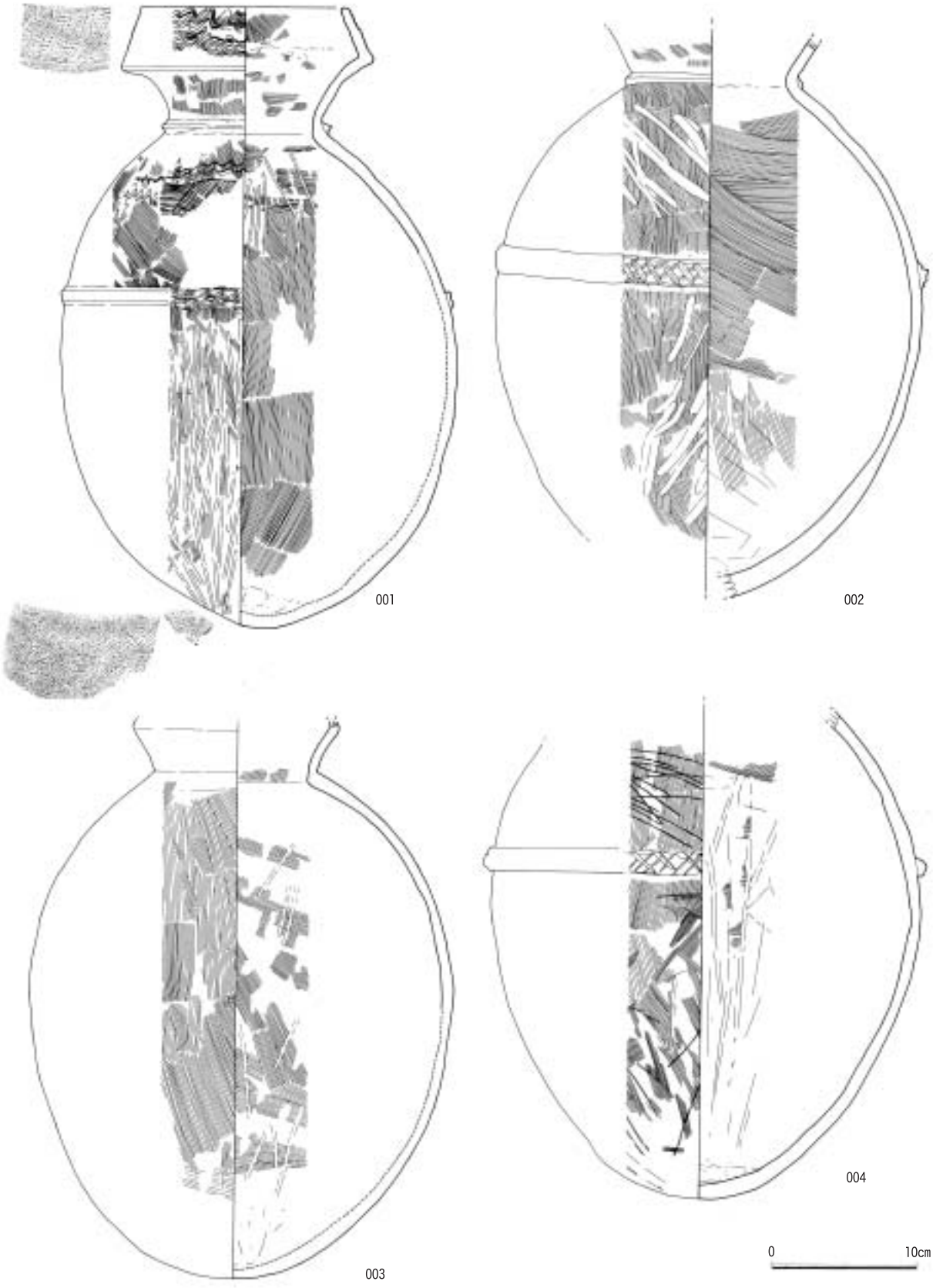
第154図　SX464遺物出土状況（北方向から）



第155図　SX464遺構実測図（1/30）



第156図　SX464遺物出土ポイント配置図（遺構（1/30）・遺物（1/12））



第157図　SX464出土遺物実測図①（1/4）

出土遺物（第156～167図）

出土遺物には、壺A、壺C、壺H、甕A、甕B、甕C、鉢B、鉢D、鉢F、高坏、ミニチュア土器の出土が認められる。

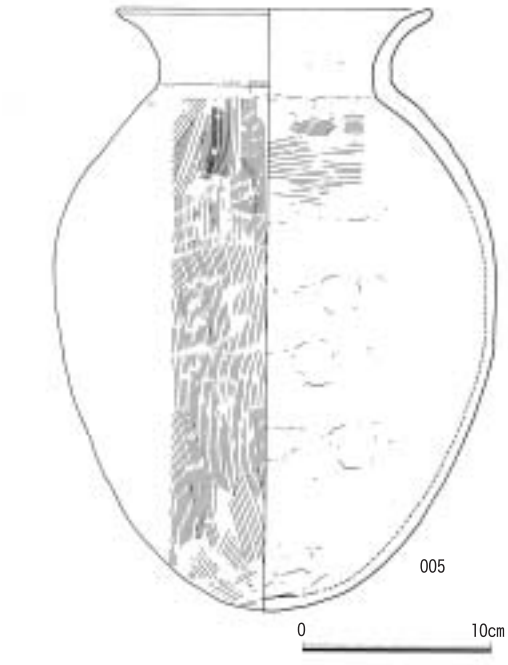
壺形土器（第157～159図）

001 は壺Aである。倒卵形の胴部に凸レンズ状の丸底底部をもつ。複合口縁部外面には二段に櫛描波状文が施文される。上段は流水波状文、下段は小波波状文を施文する。施文方向は上方からみた場合、右まわりに施文されている。胴部には胴部最大径より若干上位に格子状の刻目を有するベルト状の突帯が貼付される。また、肩部にはヘラ状の工具により線刻が施される。線刻の下部が欠損するため、その意匠については不明である。ヨコ方向の波状文と充填鋸歯状文の組み合わせによる四辺形が配置される。施文される波状文は複合口縁部の波状文の施文原体とは異なる原体により施文されている。淡茶褐色～淡黒色を呈し、胎土中には、角閃石、長石、金雲母等を含む。基本的な器面調整はハケ目によりなされるが、外器面下部については、最終調整としてタテ方向のヘラミガキが施されている。

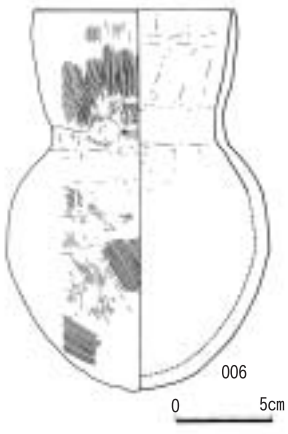
002 は口縁先端部と底部部分を欠損する。胴部の形態や頸部の状況などから、壺Aであると推定される。淡赤褐色を呈し、胴部には001と同じく、ベルト状の突帯を有している。外器面には赤色顔料の塗彩が認められる。胎土中には角閃石、石英、橙色粒子、金雲母粒を含んでいる。

003は口縁部の複合口縁部を欠損している壺Aである。頸部や胴部に突帯は持たない。淡茶褐色を呈し、土器胎土中には角閃石、長石粒を含む。丸底であり内外器面とも基本的にハケ目により調整される。

004 は口縁部を欠失する壺の胴部である。胴部最大径の若干上位の位置に、格子目刻みを施すベルト状の突帯を貼付する。色調は淡茶灰色を呈する。内器面は工具ナデによる調整後、タテ方向のヘラミガキ、外器面はハケ目後多方向の細いヘラミガキが施される。外面底部にススの付着が認められる。



第158図　SX464出土遺物実測図②（1/4）



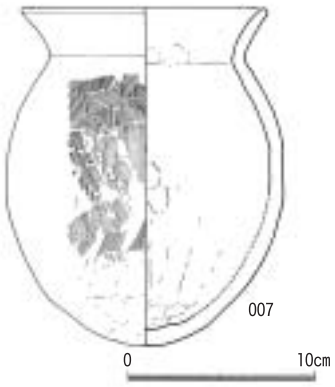
第159図　SX464出土遺物実測図③（1/4）

005は口縁部の一部を欠損するものの他はほぼ完形となる壺Ｃである。復元口径16.4㎝、器高32.0㎝、胴部最大径23.2㎝を測る。内外面ともに淡茶褐色を呈し、内器面はハケ目調整後にナデ、外器面はタテ方向を基調とするハケ目調整が施される。胎土中には角閃石、石英、長石等を含む。焼成は良好である。

006は壺Ｈである。長胴気味の球形体部に内湾しながら直立する口縁部を有する。復元口径10.7㎝、器高20.1㎝、胴部最大径13.9㎝を測る。土器胎土中には石英、長石、金雲母等を含み、内外面ともに赤褐色～赤橙色を呈する。内器面は丁寧なナデにより仕上げられ、外器面は細密なハケ目とナデにより調整される。

甕形土器（第160～163図）

007は甕Ａに分類され、球形胴化が進んでいる資料である。復元口径12.7㎝、器高17.9㎝、胴部最大径14.6㎝を測る。淡赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石、金雲母等を含む。焼成は良好である。



第160図　SX464出土遺物実測図④（1/4）

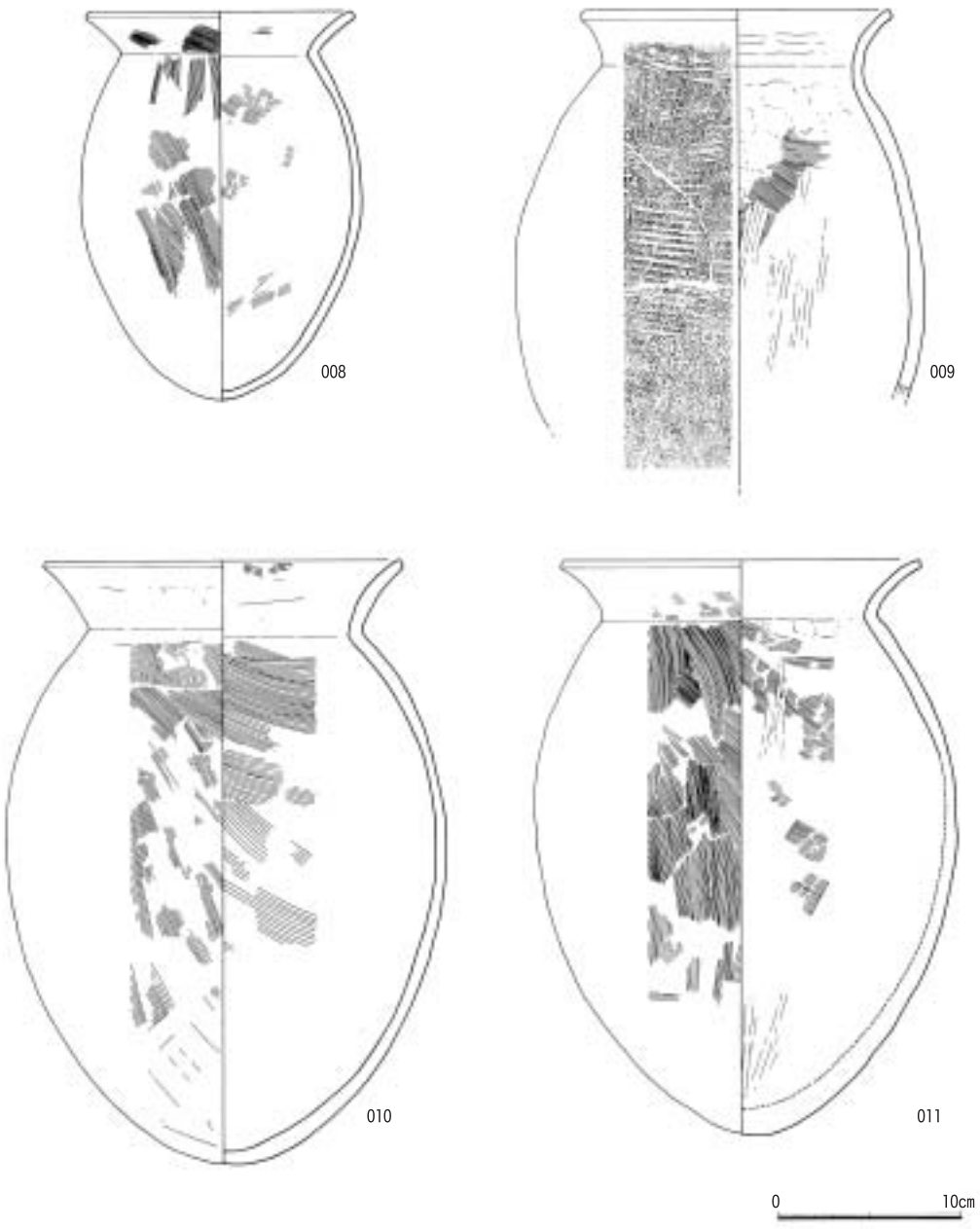
008～011もまた甕Ａに分類されるものである。**008**は復元口径14.2㎝、器高21.1㎝、復元される胴部最大径15.2㎝を測る。色調は外面・淡茶褐色～淡赤褐色、内面・淡茶灰色を呈し、外面の一部にススの付着が認められる。焼成は良好である。第Ⅱ層から出土した。

009は口縁部がすぼまる形状を示す甕である。外器面には平行タタキの痕跡が残る。元来、大分平野の弥生時代後期の甕にタタキ技法は顕著でなく、そういった点において異質な感じを受けるが、タタキ以外の成形技法、整形技法が在来のものと共通し、他のものと同じく長胴傾向を示す点から甕Ａに分類した。口径16.3㎝を測る。器面調整に関しては、外器面がタタキの後に細密なタテ方向のハケ目がなされ、さらに部分的にミガキ調整がなされる。内器面はハケ目調整の後、ナデ調整が施され、やはり部分的にタテ方向のミガキがなされている。色調は内外面ともに淡茶褐色を呈し、胎土中には長石、角閃石を含む。焼成は良好であり、外器面にススの付着が認められる。

010は淡赤褐色～淡茶褐色を呈する甕であり、細片の接合により、ほぼ完形に復元することのできた資料である。口径19.0㎝、器高33.0㎝、胴部最大径23.7㎝を測る。内器面調整はハケ目の後ナデにより調整され、外器面はタテ方向のハケ目後にナデが施されるとともに、底部付近にはヘラ状工具によるナデにより調整される。外面の一部にススの付着が認められる。

011は口径19.1㎝、器高31.4㎝、胴部最大径22.7㎝を測る甕である。外面・淡茶褐色～淡茶黒色、内面・淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、金雲母粒を含む。内器面はハケ目の後にナデにより調整され、外器面は比較的細密なタテ方向のハケ目が施される。内器面の底付近に部分的ながらタテ方向のヘラミガキが認められる。本資料の外面にもススの付着が認められた。

012～014は甕Ｂに分類される資料である。胴部形態において顕著な球形化は進行していないものの、内器面にはケズリ技法が導入されている。

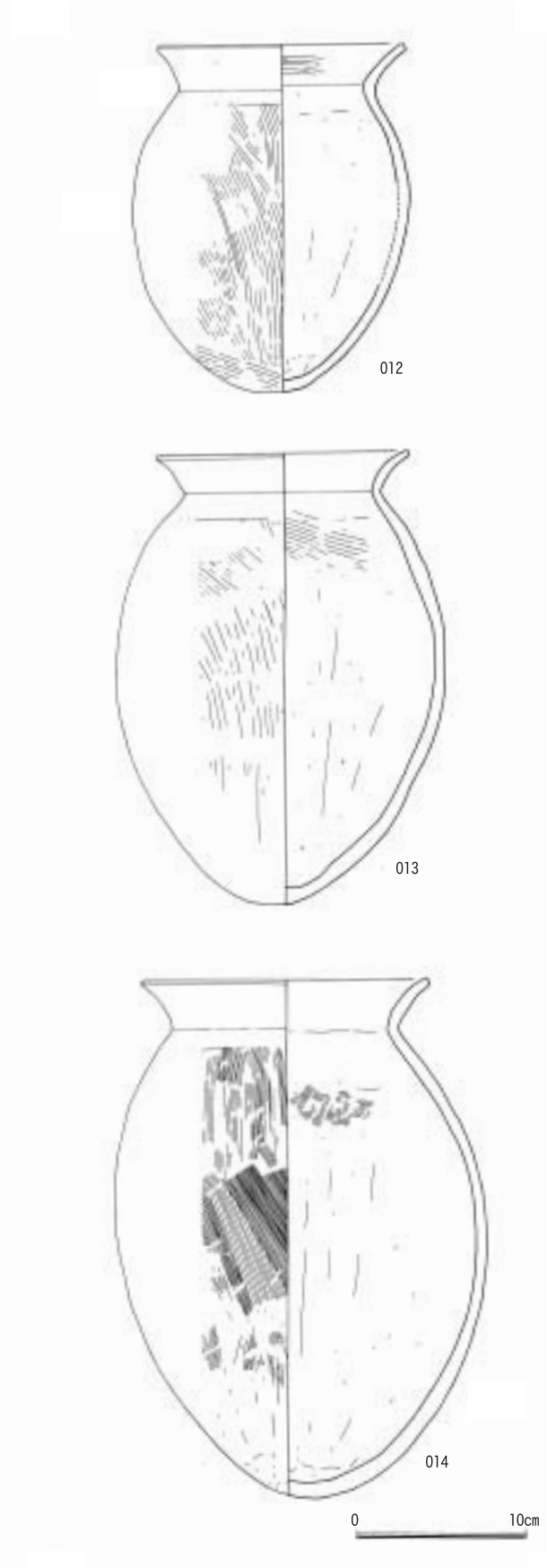


第161図　SX464出土遺物実測図⑤（1/4）

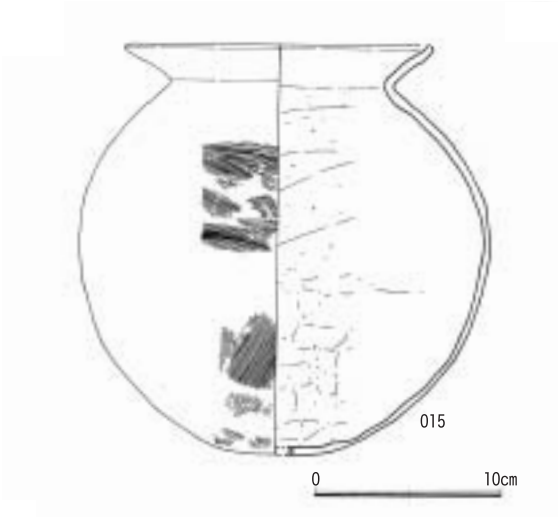
012はほぼ完形となる甕である。内外面ともに淡黄灰色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。口径14.2cm、器高20.6cmを測り、底部は丸底になっている。内器面のケズリ痕はナデのため不鮮明となっているが、一部に認めることができる。

013 もまた甕Ｂに分類される資料である。細片の接合によりほぼ完形となった。内外面ともに淡赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石粒が認められる。口径14.5cm、器高26.7cmを測る。内器面はヘラケズリ後にナデ調整され、外器面はタテ方向のハケ目調整の後にナデが施される。

014は口径16.6cm、器高30.7cm、胴部最大径21.8cmを測る甕である。内外面の色調は淡茶褐色を呈し、



第162図　SX464出土遺物実測図⑥（1/4）



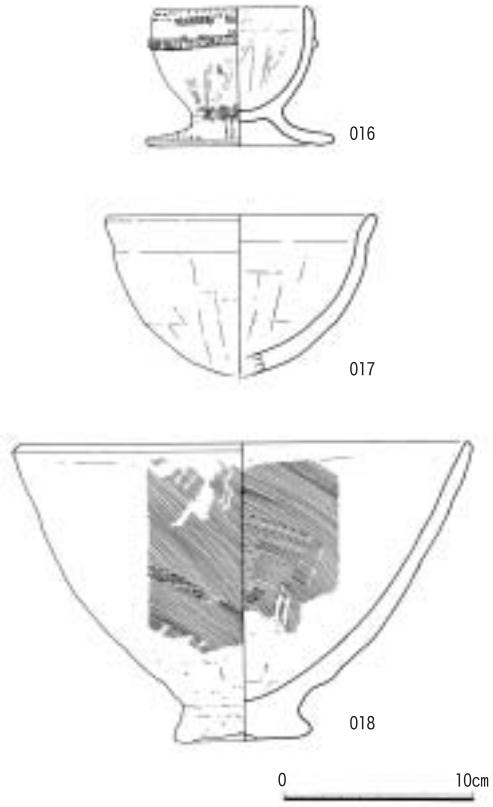
第163図　SX464出土遺物実測図⑦（1/4）

角閃石、長石粒を含む。外器面に環状に全周するススの付着が認められる。

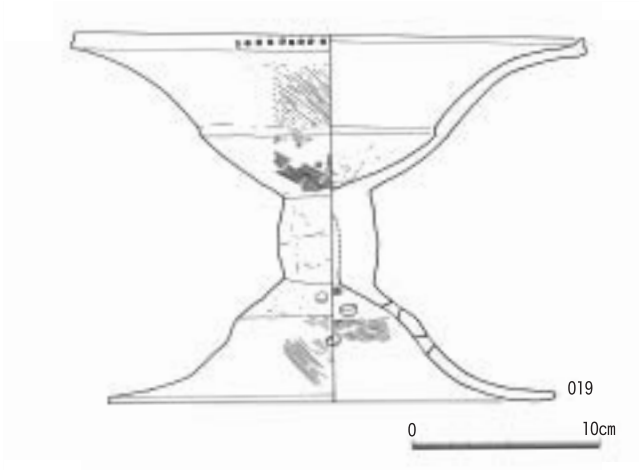
015は本遺構から出土した唯一の甕Ｃに分類される布留式系甕である。球形の胴部に大きく開く口縁部を持ち、口縁端部はつまみ上げたような形状を呈し強調される。復元口径15.6㎝、器高21.8㎝を測り、ヘラケズリにより薄く仕上げられた土器胎土には石英、金雲母、角閃石粒等を含む。外器面の調整はタテ方向の細密なハケ目調整の後に、体部上半にヨコ方向のハケ目、ならびにヨコナデを施し、内器面には明確なケズリ痕を残す。底部周辺には多数の指頭痕が認められる。内外面ともに淡茶褐色～淡黒色を呈し、器面にはススの付着が認められる。第Ⅱ層からの出土である。

鉢形土器（第164図）

016～018は鉢である。**016**は鉢Ｄに分類される台付鉢である。口径8.0㎝、器高7.3㎝、復元裾部径9.8㎝を測る。直立気味に立ち上がる口縁部下には突帯が貼付され、「×」字を連続する刻目を施す。また、脚裾部には６ヶ所に細い棒状工具による刺突文を配置する。外器面には赤色顔料が塗彩される。器面調整にはハケ目、ナデが駆使され、内外器面とも最終調整にはヘラ



第164図　SX464出土遺物実測図⑧（1/4）



第165図　SX464出土遺物実測図⑨（1/4）

ミガキが実施される。

017 は鉢Ｂに分類される資料である。焼土第Ⅲ層から出土した。復元口径14.0cmを測り、橙褐色を呈する。器面はナデ調整主体で行われるが、外器面の最終調整にはヘラ状工具による工具ナデが実施される。

018 は粘土円盤状の底部に直線的に立ち上がる素口縁を呈する鉢である。同種の形態をなす鉢は先に土器の分類をおこなった090SH020やその後に説明を加えてきた資料にはなく、ここで新たに先の分類に追加し、鉢Ｆとしよう。口径23.5cm、器高15.6cmを測る。内外面ともに淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。内外器面はハケ目により調整され、内器面の一部にはヘラミガキが施される。

高坏形土器（第165図）

019 は土師器高坏である。段を有する脚部に膨らみをもつ脚柱部が接続し、外方へ大きく展開する口縁部をもつ。口縁端部は拡張され、竹管状の工具による連続刺突文が施文される。復元口径26.9cm、器高23.1cm、復元脚裾部径19.3cmを測る。内外面とも赤色顔料による塗彩がなされている。脚裾部には総計８ヶ所の円孔が穿たれる。色調は内外面ともに淡灰褐色～赤橙色を呈し、器面はナデ、ハケ目、ミガキにより調整される。

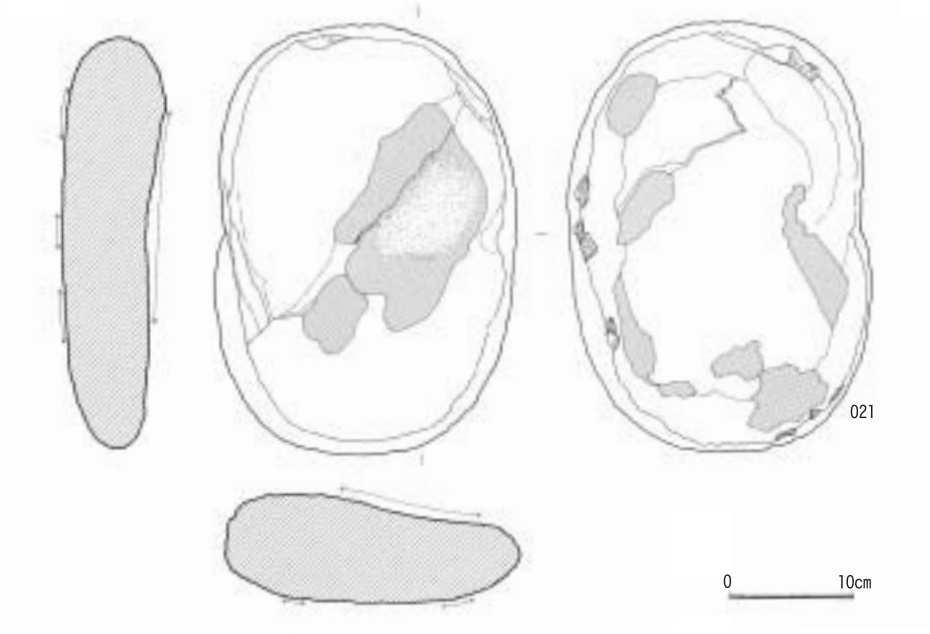
ミニチュア土器（第166図）

020 は壺Ａを模したミニチュア土器である。約半分が遺存する資料であり、復元口径9.2cm、器高15.4cm、胴部最大径11.8cmを測る。表面は風化により器面調整の詳細は不明であるが、外面全面に赤色顔料の塗彩がなされている。複合口縁部には櫛描波状文が施されている。上方向からみた場合右まわりの施文方向を確認できる。器形の上でも尖り気味の丸底を呈する



第166図　SX464出土遺物
実測図⑩（1/4）

など、当該期の壺Ａの特徴を良く写している。



第167図　SX464出土遺物実測図⑪（1/6）

石器（第167図）

021は土器群の下面、遺構のほぼ中央において確認された結晶片岩製の石皿ないしは台石と考えられる石器である。表面の右側に偏ってやや凹んだところがあり、その部分を中心に擦痕が認められ、使用部位と考えられるが、擦り面の状況から長期に使用されたものではないと判断される。

表土出土遺物（第168～173図）

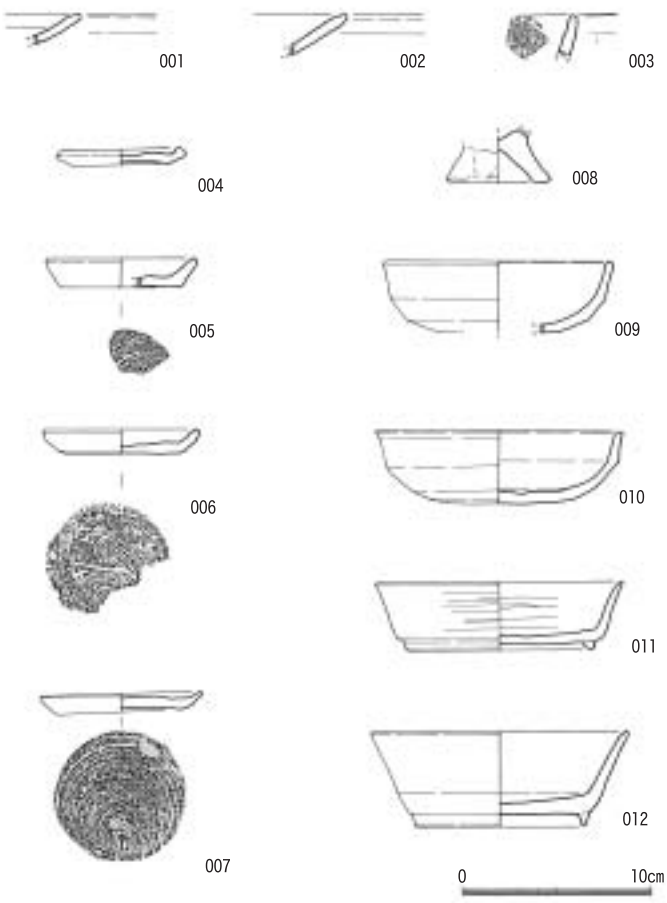
本項では、第90次調査区において、遺構外で確認された主要遺物について解説を加える。

001・002は京都系土師器皿の口縁部破片である。**001** は淡茶褐色を呈し、口縁端部には強いヨコナデが施される。

002も001と同様の京都系土師器皿の口縁部破片である。胎土には精製土が使用され、少量の角閃石粒を含む。中世末期のものである。表土層からの出土である。

003は製塩土器（焼塩壺）の口縁部破片である。淡茶褐色を呈し、石英粒を胎土中に含む。内器面には布目痕が認められ、外器面はナデにより調整される。

004 はＨ４区、Ｉ４区の隣接



第168図　表土出土遺物実測図①（1/4）

するグリッドにおいて出土した破片が接合した土師器小皿である。復元口径6.2cm、器高0.8cm、復元底径5.2cmを測る。内外面ともに淡茶褐色を呈しており、底部は回転糸切り離し痕がかすかに残る。中世前期の京都系土師器を在地において模倣し製作したものである。

005は土師器小皿の口縁部破片である。復元口径7.8cm、器高1.6cm、復元底径6.4cmを測る。内外面ともに淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石粒等を含む。底部には回転糸切り離し痕が残る。おおよそ12世紀頃の所産になるものと推定される。

006はＨＯ区の遺構検出時に出土した土師器小皿である。色調は内外面ともに淡赤橙色を呈する。口径8.2cm、器高1.3cm、底径6.6cmを測る。底部には回転糸切り離し痕が残る。形態的特徴、法量などからおおよそ11世紀頃の所産と考えられる。

007もＬ４区において出土したほぼ完存する土師器小皿である。淡黄白色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石、金雲母を含む。口径8.5cm、器高1.0cm、底径6.6cmを測る。口縁端部は舌状に整形される。

008は脚台付の製塩土器の脚部である。Ｈ４区において出土した。内外面ともに淡赤褐色を呈し、胎土中には石英粒を含む。090SH020から同種の製塩土器が出土している。弥生時代終末～古墳時代初頭に比定されるものと推定される。

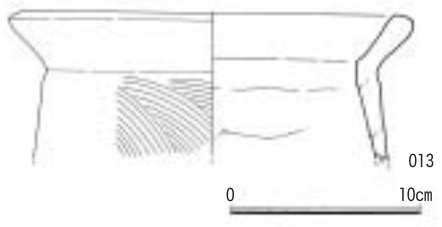
009はＬ５区において確認された土師器坏である。約1/4が遺存する資料であり、復元口径12.0cm、器高3.8cm、復元底径6.4cmを測る。色調は内外面ともに淡赤橙色を呈する。器面調整は風化のため不明であるが、うっすらと暗文の可能性のある痕跡が認められる。８世紀前半～中頃に比定される。

010はＨ３区で検出された土師器坏である。復元口径12.8cm、器高3.8cmを測る。胴部外器面下部には回転ヘラケズリが施され、回転ナデ調整により仕上げられる。

011は土師器高台付坏である。内外器面ともミガキａ$_2$により調整される。復元口径13.0cm、器高3.7cm、復元底径9.6cmを測る。

012 もまた土師器高台付坏である。Ｍ８区から出土した。内外面ともに淡茶褐色を呈する。口径13.4cm、器高5.0cm、復元底径9.0cmを測る。内外器面ともナデにより調整される。

013 は口縁部分が約１/３遺存する企救型甕である。内外面ともに淡茶褐色を呈し、胎土中には石英粒を含む。内器面には一部に粘土接合痕が認められる。外器面は粗いタテ方向のハケ目により調整される。復元口径19.2cmを測る。



第169図　表土出土遺物実測図②（1/4）

第170図には須恵器を掲載した。

014 はＧＯ区で出土した須恵器皿である。復元口径16.0cm、器高2.3cm、復元底径13.8cmを測る。内外器面とも回転ナデにより調整され、灰褐色を呈する。８世紀中頃～後半に比定される。

015は須恵器の坏身である。内外面とも淡灰色を呈し、外器面は回転ヘラケズリ後、回転ナデにより調整され、ヘラによる文様が施される。口径9.7cm、器高3.7cm、底径5.0cmを測る。陶邑編年Ⅱ型式５段階に編年されるものであり、７世紀初頭前後の年代が考えられる。Ｈ４区において検出した。

016はＧ４区で出土した須恵器蓋である。頂部付近には回転ヘラケズリが施され、扁平なボタン状のツ

マミが貼付される。内外面ともに淡灰白色を呈し、復元口径14.1cmを測る。焼成は良好である。８世紀中頃～後半に比定される。

017・018 は須恵器小壺である。**017** は内外面とも暗灰色を呈する須恵器短頸壺である。復元口径 5.1cm、器高6.2cm、底径5.9cmを測る。内外器面とも丁寧なヨコナデにより調整される。

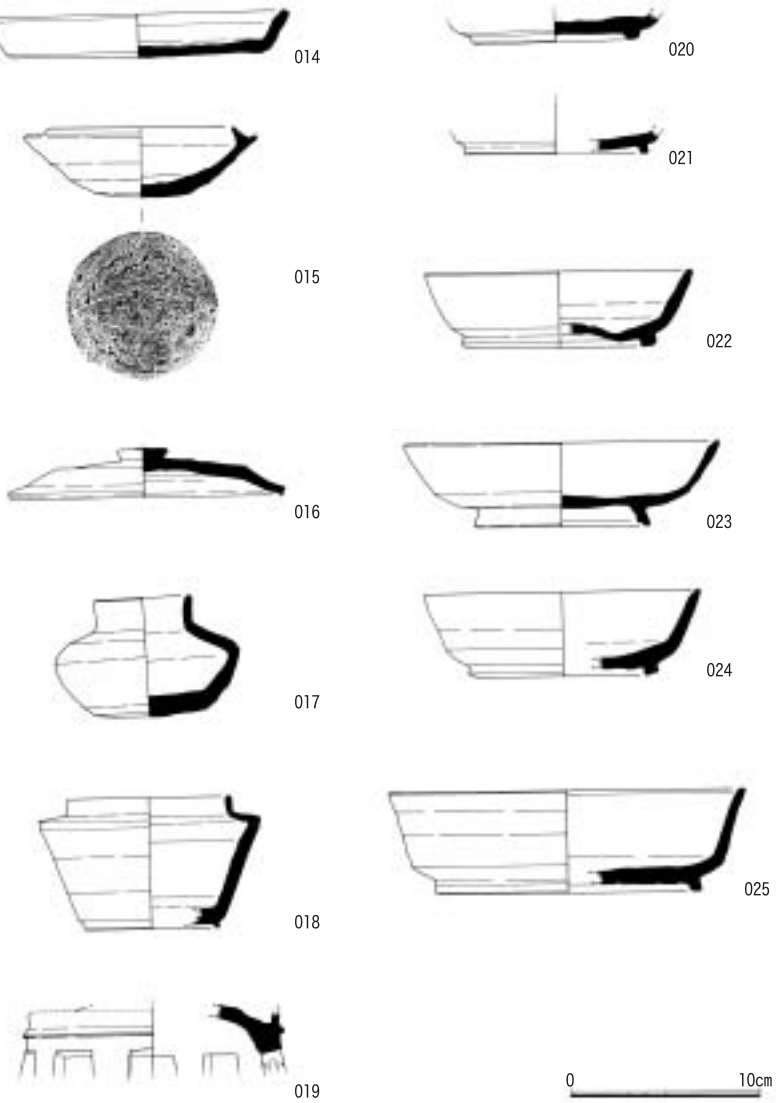
018も短頸の須恵器小壺である。約 1/5 が遺存する資料であり、内外面とも淡灰白色を呈する。外器面下半には回転ヘラケズリが施され、他所は丁寧なヨコナデにより仕上げられている。焼成は良好である。Ｃ４区から出土した。

019は須恵器圏足硯の破片資料である。内外面とも灰褐色を呈し、回転ナデにより仕上げられる。

020～025は須恵器高台付坏である。**020**は低平な角高台が貼付され、復元底径8.8cmを測る。内面に赤色顔料による塗彩が認められる。８世紀中頃のものか。

021もまた高台付坏の破片資料である。内外面とも淡灰色～茶褐色を呈し、復元底径9.6cmを測る。

022は丸みを帯びた坏部に低平な小さな高台が貼付される高台付坏である。復元口径14.0cm、器高4.1cm、復元底径10.1cmを測る。



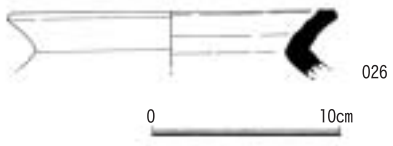
第170図　表土出土遺物実測図③（1/4）

023もやはり丸みを帯びた坏部を持ち、かなり内側に長めの高台が貼付される。復元口径16.4cm、器高4.4cm、復元底径9.0cmを測る。Ｍ４区で出土した。８世紀初頭～前半に比定されるものか。

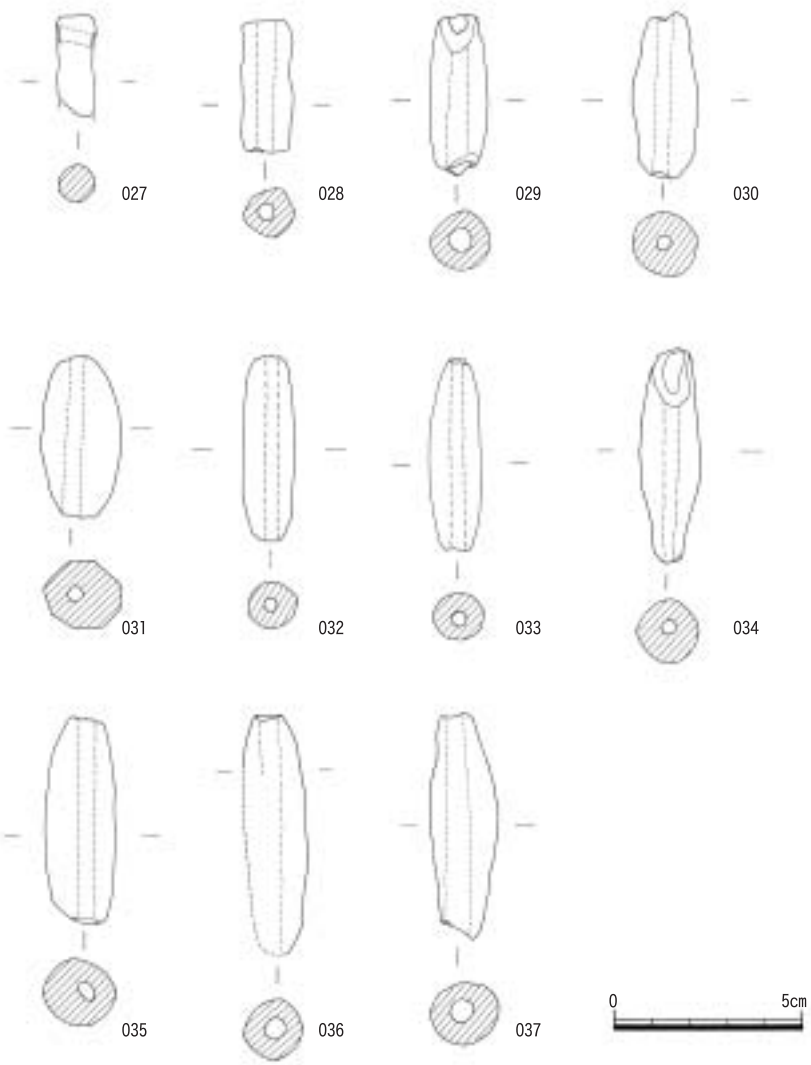
024は約1/4が遺存する高台付坏である。内面・淡灰褐色～暗灰色、外面・暗灰色を呈する。復元口径14.6cm、器高4.5cm、復元底径10.0cmを測る。

025は復元口径18.8cmを測る高台付坏であるが、口縁端部内面に一条の沈線をめぐらす点を特徴とする。坏部底部から口縁部へは稜線をもって立ち上がる。内外面とも暗灰色を呈し、内外器面は丁寧なヨコナデ調整により仕上げられる。８世紀中頃前後の所産と考えられる。

026は復元口径17.0cmを測る須恵器甕の口縁部片である。口縁端部上面に平坦面を形成する特徴的な器形を呈



第171図　表土出土遺物実測図④（1/4）



第172図　表土出土遺物実測図⑤（1/2）

する。内外面とも淡灰褐色を呈し、ヨコナデによる丁寧な仕上げが行なわれている。

027は「両端穿孔土錘」、「双孔棒状土錘」と呼称される土錘を示した。028～036は管状形状をなす土錘である。

027は、いわゆる双孔棒状土錘とよばれるものである。一方の端を欠損する。淡茶褐色を呈し、現存重量3.2ｇを測る。

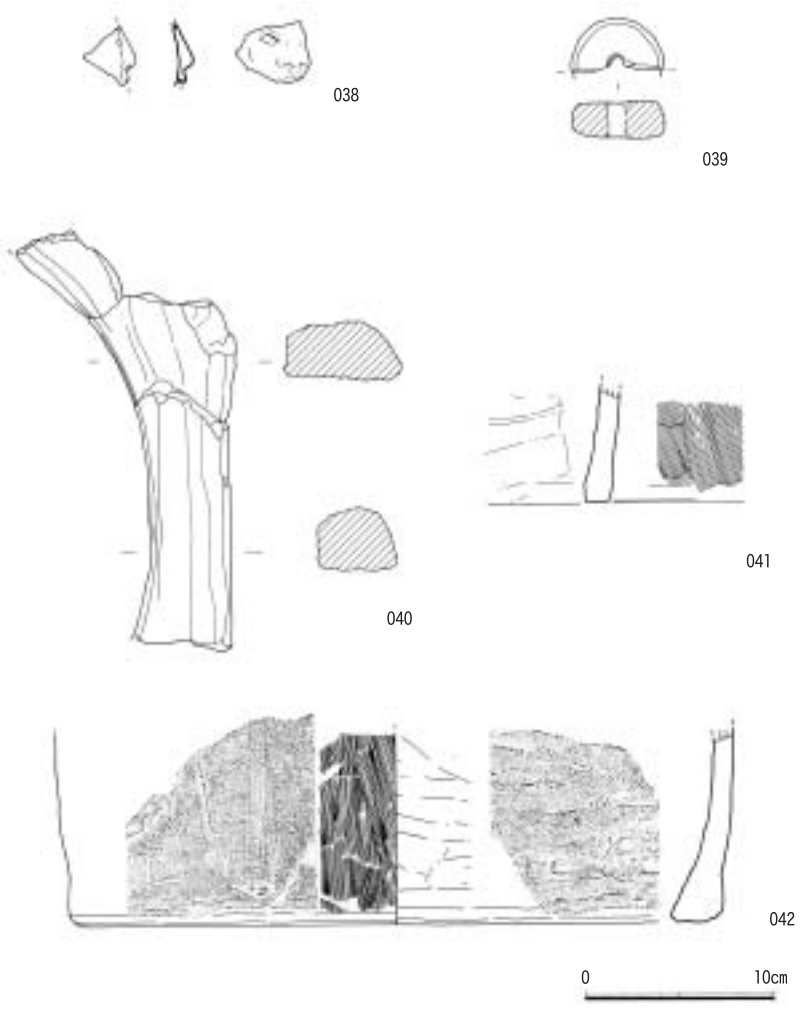
028は管状をなす土錘である。完存資料であり、長さ3.5cm、最大径1.4cm、重量6.2ｇを計る。端部はヘラにより垂直に切断される。

029は長さ4.3cm、最大径1.5cmを測る土錘資料であり、現存重量8.5ｇを測る。淡茶褐色を呈し、胎土中には長石粒を含む。

030は長さ4.4cm、最大径1.7cm、重量10.6ｇを計る土錘である。淡茶白色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。

031は紡錘形を呈する土錘である。淡赤褐色を呈し、重量15.1ｇを計る。Ｎ２区からの出土である。

032はやや細身の土錘であり、Ｋ１区から出土した。淡茶褐色～淡灰黒色を呈し、胎土中には角閃石、



第173図　表土出土遺物実測図⑥（1/4）

長石粒を含む。長さ4.9㎝、厚さ1.4㎝、重量8.9ｇを計る。

033はＮ８・Ｎ９区において出土した。淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。長さ5.1㎝、最大径1.4㎝を測り、重量8.1ｇを計る。

034は埋土中から出土した土錘である。端部の一部を欠損する。胎土中には角閃石、長石粒を含み、淡茶褐色～淡灰黒色を呈する。現存長5.7㎝、最大径1.6㎝、現存重量11.6ｇを測る。

035は淡茶褐色を呈し、長さ5.5㎝、厚さ1.9㎝、重量17.3ｇを計る管状土錘である。完存品である。

036は長さ6.5㎝を計る土錘である。側面の一部を欠損する。茶褐色を呈する。

037 はＨ０区で出土した紡錘形の土錘である。色調は赤橙色～淡赤褐色を呈し、全面丁寧なナデにより仕上げられている。焼成は良好である。

038 はＨ０区で出土した土製人形の顔面の一部である。型作りによるもので、資料は右目と鼻の部分が遺存しているものである。胎土中には角閃石、金雲母を内包し、淡黄色の色調を呈する。内器面には指オサエの痕跡が明瞭に残っている。

039はＣ４区で出土した土製紡錘車である。約半分が遺存する。淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。現存重量23.9ｇを計る。

040 はＭ４区から出土した不明土製品である。下端は平坦面を有するが、上面はかまぼこ状の形状をなし、ヘラ状工具による面取りがなされている。掲載図の位置関係において、左側に若干のカーブが認められ、直線的な右側側面とは対象的である。淡茶褐色を呈し、焼成は非常に良好である。なにかのパーツの可能性も考えられるが、現状では上下左右の位置関係さえ不明である。

041は040と同じくＭ４区で出土したもので、諸特徴から円筒埴輪の基底部と考えられる。焼成は良好で、胎土中には角閃石、石英、長石等を含む。内器面はヘラ状工具による工具ナデが実施され、外器面には細密なタテ方向のハケ目調整がなされている。

042も041と同じく円筒埴輪の基底部と考えられる破片である。内器面は粗いヘラ状の工具によるヨコ方向のナデ調整がなされ、外器面にはタテ方向の細密なハケ目が施されている。

（4）小　結

下郡遺跡群第90次調査では、弥生時代から近世の遺構を確認した。下記には時代別の遺構変遷を示しまとめとしたい。

弥生時代

弥生時代の遺構には住居跡２基・溝状遺構１条、土坑３基・甕棺墓１基がある。

弥生時代に比定される遺構の中で最も古いものは、溝状遺構（090SD201）であり、出土する下城式甕形土器等の諸特徴から弥生時代中期前半以降の所産になると推定された。

土坑は調査により３基確認されており、楕円形プランと円形プランのものがある。いずれも弥生時代後期中葉～終末の所産である。

住居跡には090SH020・090SH069の２基がある。090SH020は090SH069を切って構築されている。方形プランを呈する090SH069は出土遺物から、弥生時代後期中葉～後葉に比定されると考えられる。090SH020は方形プランを呈し、４本の主柱、住居中央に地床炉、南側の主柱の間にはカーボンが堆積した楕円形

土坑、北側をのぞく３辺に壁溝を有する。住居の埋土はレンズ状の堆積をなし、最上層に相当する部分において弥生時代後期終末～古墳時代初頭にかけての土器が大量に廃棄された状況を確認した。遺物は出土状況から住居埋没途中に廃棄されたものと想定され、出土遺物、遺構の切り合い関係から所産時期は弥生時代後期終末～古墳時代初頭と想定される。甕棺墓（090SJ398）は、甕資料から弥生時代後期前葉～中葉の所産と考えられるものであり、１基のみの確認である。

したがって、弥生時代に比定される遺構は、弥生時代中期まで遡る可能性のある090SD021を除き、弥生時代後期前葉～中葉、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭のほぼ連続する２時期のものが確認されたことになる。

古墳時代

古墳時代の遺構には、住居跡３基（090SH094・090SH173・090SH200）、土器焼成坑１基（090SX464）がある。

090SH094は複数の建て替え状況が認められるが、最終段階が古墳時代前期前半から中頃であり、住居の機能時期は古墳時代前期前半頃を中心とするものと考えられる。

090SH200は長方形プランを呈する２本の主柱を有する竪穴住居跡である。出土土器から古墳時代初頭前後の所産と判断された。

090SX464は土器焼成坑であり、機能停止直後に甕、壺、台付鉢、高坏などが大量に廃棄された状態で出土した。これらの土器から古墳時代初頭と判断される。

090SH173は４本主柱をもつ方形プランの住居であり、住居跡内の東側部分で検出された焼土の位置から、これが造り付けのカマドである可能性も示唆された。埋土内から出土した須恵器破片や出土土器の形態から、５世紀末前後の所産と推定される。

上述のように、古墳時代の遺構に関しては、古墳時代前期初頭から前半のものと古墳時代中期末の２時期のものを確認した。

古代

８世紀から９世紀に比定される遺構には柵列跡（090SA007）、掘立柱建物跡２棟（090SB008・090SB294）、溝状遺構１条（090SD076）がある。

掘立柱建物跡はいずれも出土遺物から８世紀中頃から後半の時期のものと推定され、陶硯の出土なども認められた。建物跡は調査区外にあたる南方向に展開しており、具体的な建物配置の全容は不明であるが、いずれの建物方位もＮ－20°－Ｗの近似値を示し、規格性の高い建物配置が想定される。

090SD076は調査区の北側において検出した東西方向の溝状遺構である。溝の主軸と前述の建物跡の方位が異なる点、加えて出土遺物の様相から建物跡と溝は若干の時間差を有し、９世紀初頭前後の所産年代を推定した。

中世・近世

古代以降の主要な遺構には掘立柱建物跡（090SB003）と090SX004がある。

090SB003は片面庇付きの建物跡であり、身舎面積は39.15㎡、主軸方位はＮ－８°－Ｅを示す。出土遺

物から13世紀前後の所産年代を推定した。さらに、出土遺物から所産時期を想定することのできなかった090SB004と090SB178についても、090SB003と主軸方位が同一である点から、近接した時期の所産である可能性を指摘できる。これらの建物跡は一部で切り合い関係を有することから、建て替えなどによる配置を違えた２小期の建物群によって構成されると推定される。

090SX004は調査区の西端で検出され、調査区西側方向に階段状に落ち込んでいる大型遺構である。階段状の落ち込みは、人為的に掘削、造成されたものと考えられ、出土遺物や土層観察から、18世紀以降において、少なくとも２度にわたって埋め立てられ、その後、幕末の頃に改めて埋められている状況を看取することができた。近世における土地開発状況の一端を窺い知る資料として興味深い状況であるといえる。

以上が各時代における主要遺構である。これらのなかでも古代の建物跡群は、建物規模や円面硯、製塩土器、瓦などの出土遺物から何らかの官衙施設の一部である可能性を示唆しており、大分郡衙推定地のひとつと目されている下郡地区にあって、その可能性を増大させるものとして注目される。

【主要検出遺構一覧】

弥生時代

(中期)	090SD201
後期前葉から中葉	090SH069・090SJ398
後期後葉から終末	090SH020

古墳時代

前期初頭から前半	090SH200・090SH094・090SX464
中期末	090SH173

古　代

８世紀中頃から後半	090SA007・090SB008・090SB294
９世紀初頭	090SD076

中・近世

13世紀前後	090SB003・(009・178)
18世紀から幕末	090SX004

註１　賀川光夫　1958　大分県国東町『安国寺』弥生遺跡の調査　九州文化総合研究所編　毎日新聞社刊
註２　壺Ａ（報文中）第４章　総括第１節参照
註３　大分市教育委員会　1979『守岡遺跡』昭和50・51年度発掘調査概報

第16表　遺物観察表①

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SA007-001	18	須恵器	蓋	白色粒子	灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	(2.6～2.8)				ツマミ部	※口径はツマミ径
090SA007-002	18	須恵器	蓋	石英 白色粒子	暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	(14.8)				全体1/4	
090SA007-003	18	須恵器	高台付坏	白色粒子 橙色粒子	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ				(9.2)	底部1/4	
090SA007-004	18	土師器	高台付坏	石英 角閃石 白色粒子	橙色	橙色	ナデ	ミガキa2				(9.6)	底部	
090SB001-001	20	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（3～4・5～6本/cm）
090SB003-001	23	製塩土器		石英 角閃石	明褐色	明褐色	ナデ	ナデ 指オサエ					口縁部片	
090SB003-002	23	土師器	坏	石英 角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ナデ	ナデ 回転糸切り離し					底部片	
090SB003-003	23	土師器	坏	石英 白色粒子 橙色粒子	明茶褐色	明茶褐色	回転ナデ	回転糸切り離し 回転ナデ					底部片	
090SB003-004	23	土師器	坏	石英 角閃石	淡黄色	淡黄色	ナデ	ヨコナデ 回転糸切り離し					底部片	精製土
090SB003-005	23	土師器	小皿	角閃石	明褐色	明褐色	回転ナデ	回転糸切り離し 回転ナデ	(6.2)	1.5		(5.0)	全体1/4	
090SB003-006	23	陶磁器												別表
090SB003-007	23	陶磁器												別表
090SB003-008	23	陶磁器												別表
090SB003-009	24	土錘												別表
090SB003-010	24	土錘												別表
090SB008-001	27	製塩土器		石英 角閃石	茶褐色	茶褐色	ナデ ケズリ 指オサエ	ナデ 指オサエ					口縁部片	
090SB008-002	27	土師質	甕	石英 角閃石 白色粒子	淡茶褐色	茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ					口縁部片	企救型 ハケ目（5本/cm）
090SB008-003	27	土師器	蓋	石英 角閃石 白色粒子	橙褐色	橙褐色	ミガキ a2	ミガキ a2	(4.6)				頂部	※口径はツマミ径
090SB008-004	27	土師器	坏	石英 角閃石	淡赤橙色	淡赤橙色	回転ナデ	回転ナデ	12.6				口縁部1/4	
090SB008-005	27	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	13.5	3.6			口縁部～底部	
090SB008-006	27	土師器	坏	石英 角閃石 白色粒子	赤橙色	赤橙色	ミガキa2	ミガキa2	(19.0)				口縁部1/8	
090SB008-007	27	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡橙褐色	淡橙褐色	ヨコナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ 工具ナデ	(34.4)				口縁部～頸部	
090SB008-008	27	須恵器	坏	角閃石	淡灰褐色	淡灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
090SB008-009	27	須恵器	高台付坏	角閃石	淡灰色	淡灰褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ					底部片	
090SB008-010	27	須恵器	蓋	角閃石	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ	回転ナデ					口縁部片	
090SB008-011	27	須恵器	蓋	角閃石	淡灰褐色	淡灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	(12.6)				口縁部1/10	
090SB008-012	27	須恵器	蓋	石英 角閃石 白色粒子	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	(13.8)				全体1/8	
090SB008-013	27	須恵器	蓋	角閃石	灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	(2.0)	2.4		(14.1)	頂部～口縁部	※口径はツマミ径・底径は口径
090SB008-014	27	須恵器	蓋	角閃石 長石	淡茶灰色	淡茶灰色	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ 回転ヘラケズリ	2.2	2.1		(14.8)	頂部～口縁部	※口径はツマミ径・底径は口径
090SB008-015	27	須恵器	圏足硯	石英 長石 白色粒子	灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ	回転ナデ				(13.6)	脚部	
090SB008-016	27	須恵器	陶硯	角閃石	灰黒色	灰黒色	回転ナデ	回転ナデ	(17.0)			(17.2)	脚部	

第17表　遺物観察表②

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SB008-017	28	土師器	高坏	石英 角閃石 長石 白色粒子	淡赤褐色	淡赤橙色	ナデ ミガキ 回転ナデ	ミガキ ケズリ					脚部	都城系 面取り14面
090SB178-001	31	土師器	坏	石英 金雲母	明茶褐色	明茶褐色	ケズリ後 ナデ	ヨコナデ 回転糸切り離し					底部片	
090SB294-001	33	製塩土器		角閃石 白色粒子	茶褐色	茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ケズリ 指オサエ					口縁部片	
090SB294-002	33	製塩土器		石英 緑色結晶片岩片	橙色	橙色	ナデ	ナデ 指オサエ					口縁部片	
090SB294-003	33	製塩土器		石英 白色粒子	茶褐色	茶褐色	ナデ	ナデ 指オサエ					口縁部片	
090SB294-004	33	製塩土器		石英 角閃石	淡茶褐色	淡茶灰色	布目	不明瞭					口縁部片	
090SB294-005	33	須恵器	蓋	石英 角閃石 橙色粒子	灰色	灰色	ハケ目後 ナデ	ナデ ケズリ	2.9～ 3.0				頂部	※口径はツマミ径
090SB294-006	33	須恵器	蓋	石英 角閃石 橙色粒子	灰色	灰色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ケズリ	(14.0)				頂部～口縁部	
090SB294-007	33	土師器	蓋	角閃石 長石	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	(2.3)	3.1		(15.4)	頂部～口縁部	※口径はツマミ径・底径は口径
090SB294-008	33	土師器	蓋	角閃石 長石	淡橙褐色	淡橙褐色	ミガキa2	ミガキa2	(2.3)	2.8		(15.0)	頂部～口縁部	※口径はツマミ径・底径は口径
090SB294-009	34	土師器	坏	角閃石 長石	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し	(13.0)	3.4		(9.6)	口縁部～底部	
090SB294-010	34	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	(14.2)			(11.6)	口縁部～底部	
090SB294-011	34	土師器	坏	石英 角閃石 長石	茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	(15.0)	3.8		8.6	口縁部～底部	
090SB294-012	34	土師器	坏	角閃石 長石	橙褐色	橙褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	(13.8)	3.9		(10.8)	全体1/4	
090SB294-013	34	土師器	坏	角閃石 長石	淡橙褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ 回転ヘラケズリ	(14.3)	4.5		(8.0)	口縁部～底部	
090SB294-014	34	土師器	高台付坏	角閃石	淡橙褐色	淡橙色	ミガキa2	ナデ ミガキa2	(13.4)	3.6		(8.8)	口縁部～底部	※口径はツマミ径・底径は口径
090SB294-015	34	土師器	高台付坏	角閃石	淡橙褐色	淡橙褐色	ミガキa2	ナデ ヨコナデ ミガキa2	(14.0)	4.6		(9.6)	口縁部～底部	
090SB294-016	34	須恵器	皿	角閃石 長石	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	14.6	2.1		10.8	完存	
090SB294-017	34	須恵器	皿	角閃石 白色粒子	灰褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ ケズリ	(18.8)	1.9		(15.8)	口縁部1/8	
090SB294-018	34	土師器	皿	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	橙色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ ケズリ後ナデ ヘラケズリ	17.1	1.5～ 1.6			口縁部～底部	
090SB294-019	35	土師質	甕	石英 白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	企救型 ハケ目（3～4本/cm）
090SB294-020	35	土師質	甕	角閃石 長石 白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色 ～赤褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ	(20.4)				口縁部1/5	企救型 ハケ目（5本/cm） 外面スス
090SB294-021	35	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	赤橙色	赤橙色	ナデ ヨコナデ 指オサエ あて具痕	ナデ ヨコナデ カキ目ナデ タタキ	(23.2)		(21.6)		口縁部～胴部	豊後大分形
090SB294-022	36	土師質	甑	石英 角閃石 白色粒子	茶褐色	茶褐色	あて具痕	ヨコナデ タタキ					底部片	豊後大分形
090SB294-023	36	瓦	丸瓦	石英 白色粒子	灰オリーブ色	灰オリーブ色	布目	タタキ					一部片	

第18表　遺物観察表③

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SB294-024	37	土錘												別表
090SB294-025	37	土錘												別表
090SB294-026	37	土錘												別表
090SB294-027	37	土錘												別表
090SB294-028	37	土錘												別表
090SB294-029	37	土錘												別表
090SB294-030	37	土錘												別表
090SB294-031	37	土錘												別表
090SB294-032	38	金属製品												別表
090SB294-033	38	金属製品												別表
090SB294-034	39	石器												別表
090SD076-001	41	製塩土器		角閃石 白色粒子 橙色粒子	黄褐色	黄褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ					口縁部片	
090SD076-002	41	製塩土器		石英 角閃石	橙色	橙色	ケズリ風 工具ナデ 後ナデ 指オサエ	ケズリ風 工具ナデ 後ナデ 指オサエ					口縁部片	
090SD076-003	41	製塩土器		石英 角閃石	茶褐色	茶褐色	ナデ	ナデ 指オサエ					口縁部片	
090SD076-004	41	須恵器	蓋	角閃石 白色粒子	灰黄褐色	灰黄褐色	ケズリ後 ナデ	ヨコナデ	2.6				頂部1/4	※口径はツマミ径
090SD076-005	41	土師器	蓋	石英 角閃石 白色粒子	橙褐色	橙褐色	回転ナデ	回転ナデ	2.2	2.6		(15.2)	全体1/2	外面ハジキ痕 ※口径はツマミ径・底径は口径
090SD076-006	41	土師器	坏	石英 角閃石 橙色粒子	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ 回転ヘラケズリ	(18.2)				全体1/8	
090SD076-007	41	土師器	高台付坏	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子 金雲母	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ	(10.3)	3.1		8.0	全体1/2	
090SD076-008	41	土師器	坏	石英 角閃石	橙茶褐色	橙茶褐色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	(13.8)	2.0		(11.3)	全体1/8	
090SD076-009	41	土師器	高台付坏	角閃石 白色粒子	橙褐色	暗茶褐色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ	(12.1)	4.0		9.0	全体1/2	
090SD076-010	41	土師器	高台付坏	石英 角閃石 橙色粒子	橙色	橙色	ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	(12.8)	4.4		(9.4)	全体3/4	
090SD076-011	41	須恵器	高台付坏	角閃石 橙色粒子	淡灰色	淡灰色	ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	(12.6)	3.3		(8.9)	全体1/8	
090SD076-012	41	土師器	高台付坏	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	橙褐色	橙褐色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ				(9.2)	底部3/4	
090SD076-013	42	土師器	鉢	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	褐色	橙色	ナデ ケズリ	カキ目風 ナデ ケズリ	(18.8)				全体1/4	
090SD076-014	42	土師器	高坏	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	橙色	橙色	ナデ ケズリ後 ナデ	ナデ ミガキa2	(26.4)			(15.0)	口縁部～脚部	
090SD076-015	43	土師質	甕	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	浅黄橙色	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	(15.4)				口縁部～胴部1/3	
090SD076-016	43	須恵器	甕	石英	暗灰色	暗灰色	タタキ あて具痕	ハケ目 カキ目		(39.6)			胴部～底部1/2	ハケ目（5本/cm）
090SD076-017	44	土師質	甑	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	茶褐色	茶褐色	あて具痕 後ナデ	格子目 タタキ後ナデ					底部片	豊後大分形
090SD076-018	45	弥生土器	壺	石英 角閃石	黄褐色	黄褐色	ナデ	ハケ目 ハケナデ					頸部片	
090SD076-019	46	土錘												別表

第19表　遺物観察表④

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SD201-001	49	縄文	鉢	角閃石 長石	淡黄白色	淡黄白色	ナデ	ナデ					口縁部片	
090SD201-002	49	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石	淡茶色	淡茶褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ	(19.0)				口縁部～胴部	下城式 ハケ目（7～8本/cm） 外面スス
090SD201-003	50	土錘												別表
090SH020-001	54	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ナデ	13.8				口縁部	複合口縁壺 外面黒斑
090SH020-002	54	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	指オサエ ハケ目後 工具ナデ	ハケ目 ハケ目後 ヨコナデ	17.8				口縁部	複合口縁壺 ハケ目（内面6～9本　外面5～6・7～9本/cm）
090SH020-003	54	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石	淡茶灰色	淡茶灰色	ナデ	ハケ目 ナデ					胴部片	複合口縁壺 ハケ目（10～12本/cm）
090SH020-004	54	弥生土器	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ					胴部片	複合口縁壺
090SH020-005	55	弥生土器	壺	角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ ハケ目後 ナデ	ハケ目後 ヨコナデ	14.4				口縁部	複合口縁壺 ハケ目（8～10本/cm）
090SH020-006	55	弥生土器	壺	角閃石 長石 金雲母	淡赤褐色 ～淡灰褐色	淡赤褐色 ～淡灰褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ ハケ目後 ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	(22.0)				口縁部	複合口縁壺 ハケ目（7～8・10～11本/cm）
090SH020-007	55	弥生土器	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	指オサエ ハケ目	ハケ目後 ナデ	(12.4)		(20.8)		口縁部～胴部	複合口縁壺 ハケ目（6～7本/cm）
090SH020-008	55	弥生土器	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ ハケ目後 ナデ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(26.0)				口縁部1/2	複合口縁壺 ハケ目（内面6～8本　外面5～6・5～7本/cm）
090SH020-009	55	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ハケ目後 ナデ	ナデ ハケ目後 ナデ ハケ目後 ケズリ風 工具ナデ	(21.7)	46.6	30.5		口縁部～底部	複合口縁壺 ハケ目（内面6～7本　外面9～10・6～7本/cm）
090SH020-010	55	弥生土器	壺	石英 角閃石 橙色粒子 金雲母	淡赤褐色	淡赤褐色 ～淡黄褐色	指オサエ ハケ目後 ナデ	ナデ ハケ目後 ナデ	(28.6)		(27.0)		口縁部～底部	複合口縁壺 ハケ目（6本/cm）
090SH020-011	56	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ハケ目 ナデ ヨコナデ 指オサエ ハケナデ	ハケ目 工具ナデ ヨコナデ	14.0	15.6	15.8		完存	ハケ目（6～8本/cm） 外面赤色塗彩 外面スス
090SH020-012	57	弥生土器	壺	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目	不明	17.0				口縁部～肩部	ハケ目（8～10本/cm） 内外面剥離
090SH020-013	57	弥生土器	壺	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ 工具ナデ	ミガキ ハケ目後 ナデ	(15.6)				口縁部～肩部	ハケ目（5～6本/cm）
090SH020-014	57	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目 ナデ	ハケ目 ハケ目後 ナデ	13.1	26.0	22.8		完存	ハケ目（6～8本/cm）
090SH020-015	57	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	指オサエ ハケ目後 ナデ	ハケ目 ナデ ミガキ	(14.4)	43.4	(31.6)		口縁部～底部	ハケ目（6～7本/cm）
090SH020-016	58	弥生土器	壺	石英 金雲母	淡褐色	淡褐色	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(12.8)	23.2	20.4		口縁部～底部	ハケ目（8～10本/cm）
090SH020-017	58	弥生土器	壺	石英 長石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(16.0)		(26.3)		完存	ハケ目（8本・12本/cm）
090SH020-018	58	弥生土器	壺	石英 角閃石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後 ミガキ風 ナデ	(17.1)	33.2	28.8		完存	ハケ目（12～13・9～10・13～15本/cm） 外面黒斑

第20表　遺物観察表⑤

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SH020-019	59	弥生土器	壺	石英 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ミガキ					頸部～肩部	二重口縁壺
090SH020-020	59	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	赤橙色	赤橙色	指オサエ ミガキ	ミガキ ハケ目後 ミガキ					頸部～胴部	二重口縁壺 ハケ目（16～17本/cm）
090SH020-021	60	弥生土器	壺	石英 角閃石 橙色粒子 金雲母	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	ナデ ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(15.5)	34.6	24.9		全体3/4	ハケ目（7～10本/cm）
090SH020-022	61	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ハケ目後 ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	(18.0)				口縁部～胴部	ハケ目（8～6本/cm）
090SH020-023	61	弥生土器	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目 ナデ ヨコナデ 指オサエ ハケ目後 ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ ハケ目後 ヨコナデ	(17.4)	31.8	(22.4)		口縁部～底部	ハケ目（8～10本/cm）
090SH020-024	61	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 白色粒子 橙色粒子	淡茶黄色	淡茶黄色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ ハケ目後 ナデ	19.2	26.7	21.2		完存	ハケ目（6～8本/cm） 外面スス
090SH020-025	61	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色 ～黒色	淡茶褐色 ～淡赤褐色	ナデ ハケ目後 ナデ 工具ナデ	ハケ目 ハケ目後 ナデ	17.8		21.7		口縁部～底部	ハケ目（6～7本/cm） 外面スス
090SH020-026	62	弥生土器	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	指オサエ ハケ目後 ナデ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(18.4)		(21.0)		口縁部～胴部	ハケ目（内面4～5本　外面4～5・5～7本/cm） 外面スス
090SH020-027	62	弥生土器	甕	石英 長石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ ハケ目後 ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	(18.4)	35.0	(24.2)		口縁部～底部	ハケ目（7～8本/cm）
090SH020-028	62	弥生土器	甕	石英 角閃石 橙色粒子	茶褐色～ 赤褐色	茶褐色～ 赤褐色	ハケ目 ナデ ハケ目後 工具ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	(17.1)	24.4	17.9		口縁部～底部	ハケ目（7～8本/cm） 外面スス
090SH020-029	62	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ハケ目後 ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	(16.2)		(22.4)		口縁部～底部	ハケ目（6～7本/cm） 外面スス
090SH020-030	63	弥生土器	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後 ナデ	16.6	23.9	17.1		完存	ハケ目（5～7本/cm） 外面スス
090SH020-031	63	弥生土器	甕	角閃石 長石 橙色粒子	茶褐色	茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ナデ ハケ目後 ヨコナデ	(17.0)	28.2	(21.6)		口縁部～底部	ハケ目（7本・12本/cm） 外面スス 外面剥離
090SH020-032	63	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ハケ目 ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ 工具ナデ	(18.2)	30.4	(23.7)		口縁部～底部	ハケ目（約7本/cm）
090SH020-033	64	弥生土器	甕	角閃石	淡黄褐色	淡黄褐色	ハケ目 ヨコナデ ミガキ風 ナデ	ハケ目 ヨコナデ	16.0		18.4		口縁部～胴部	ハケ目（8～10本/cm） 外面スス
090SH020-034	64	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色 ～淡黒色	淡黒色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ハケ目後 ナデ	ハケ目 ハケ目後 ナデ	(17.3)	30.5	(21.3)		口縁部～底部	ハケ目（11本/cm） 外面スス
090SH020-035	65	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤橙色	淡赤橙色	ナデ ケズリ 指オサエ	ハケ目 ナデ ヨコナデ 指オサエ	(12.3)	15.7	14.3		口縁部～底部	穿孔1ヶ所 ハケ目（9～10本/cm） 外面黒斑
090SH020-036	66	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目 ナデ 工具ナデ	ハケ目 ナデ	(19.8)	27.8	21.8		完存	ハケ目（3～4本/cm） 外面スス
090SH020-037	66	弥生土器	甕	石英 角閃石	淡赤褐色	淡黄褐色	ナデ 工具ナデ	ナデ ヨコナデ ハケ目後 ナデ	19.8	36.2	26.1		口縁部～底部	ハケ目（8～9本/cm） 外面スス

第21表　遺物観察表⑥

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SH020-038	66	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色 ～暗茶褐色　淡灰黒色～黒茶褐色	ハケ目 ヨコナデ ケズリ風 工具ナデ	ハケ目 ヨコナデ	16.2	23.1	18.1		口縁部～底部	ハケ目（8本/cm）
090SH020-039	66	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	赤褐色	ナデ ケズリ風 工具ナデ	ハケ目 ハケ目後 ナデ	19.8	33.2	22.4		口縁部～底部	ハケ目（10～12本/cm）
090SH020-040	67	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石	淡褐色	淡褐色	ナデ ヨコナデ 後ミガキ 風ナデ	ヨコナデ	18.0				口縁部～肩部	
090SH020-041	67	弥生土器	甕	石英 角閃石 金雲母	赤褐色	赤褐色	ナデ ハケ目後 ナデ	ハケ目	(19.2)		(24.8)		口縁部～胴部	ハケ目（内面6～8本　外面8～10本/cm） 外面スス
090SH020-042	68	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡茶灰色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 工具ナデ ケズリ 指オサエ	ヨコナデ 工具ナデ 指オサエ	(16.2)		(17.4)		口縁部～胴部	外面スス
090SH020-043	68	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目後 ナデ ケズリ後 ナデ 指オサエ	ハケ目 ハケ目後 ナデ 指オサエ	(13.6)	20.7	(17.6)		口縁部～底部	ハケ目（7本/cm）
090SH020-044	69	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ケズリ後 ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	(14.6)				口縁部～胴部	ハケ目（6～7本/cm）
090SH020-045	69	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(16.0)				口縁部～肩部1/6	ハケ目（7～8本/cm）
090SH020-046	69	弥生土器	甕	石英 角閃石 金雲母	淡褐色	淡褐色	ハケ目 ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	15.1		17.6		口縁部～胴部	ハケ目（8～10本/cm） 外面剥離
090SH020-047	69	弥生土器	甕	角閃石 長石 白色粒子	淡茶褐色 ～黒色	茶褐色～ 灰黒色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ケズリ後 ナデ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後 ナデ	18.2	26.9	23.0		口縁部～底部	ハケ目（8～6本/cm） 外面スス
090SH020-048	69	弥生土器	甕	長石 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	指オサエ 工具ナデ	指オサエ 工具ナデ ケズリ	(14.6)	20.4	(18.0)		口縁部～底部	
090SH020-049	70	弥生土器	甕	石英 長石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(14.4)				口縁部～頸部1/6	ハケ目（10～12本/cm）
090SH020-050	70	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 金雲母	淡赤橙色 ～淡黄白色	淡赤橙色 ～淡黄白色	ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(17.2)				口縁部～頸部1/2	ハケ目（8～10本/cm）
090SH020-051	70	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 金雲母	淡茶褐色	茶褐色	ナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(13.6)				口縁部～胴部	ハケ目（7～12本/cm）
090SH020-052	70	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ ケズリ	ナデ ヨコナデ ハケ目後 工具ナデ	(16.6)		(22.2)		口縁部～底部	ハケ目（9本/cm） 外面スス
090SH020-053	70	弥生土器	甕	石英 長石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(11.6)		(13.1)		口縁部～胴部1/2	外面スス ハケ目（10本/cm）
090SH020-054	70	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ 工具ナデ	ハケ目 ヨコナデ	(12.2)		(14.4)		口縁部～胴部	ハケ目（8本/cm）
090SH020-055	70	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後 ヨコナデ	(14.0)		18.4		口縁部～底部	ハケ目（12～13本/cm）
090SH020-056	71	弥生土器	鉢	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色 ～淡茶黒色	ナデ ハケナデ ケズリ	ヨコナデ 工具ナデ	(13.2)		(12.4)		口縁部～胴部	
090SH020-057	72	弥生土器	鉢	石英 角閃石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ハケ目後 ナデ	ナデ ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(25.4)				口縁部～胴部1/6	ハケ目（6～7本/cm）

第22表　遺物観察表⑦

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SH020-058	72	弥生土器	鉢	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ハケ目後ナデ ハケ目後ミガキ	ハケ目 ハケ目後ナデ	(28.8)				口縁部～胴部1/6	ハケ目（8～9本/cm）
090SH020-059	72	弥生土器	鉢	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ハケ目後ナデ ミガキ風ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ ヨコナデ 指オサエ	31.6	24.5	30.6		完存	ハケ目（8～9本/cm） 内外面黒斑 外面剥離
090SH020-060	72	弥生土器	鉢	角閃石 長石 橙色粒子	茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ ハケ目後ミガキ ミガキ風ナデ	ナデ ヨコナデ ハケ目後ナデ	34.7	28.5	34.2		口縁部～底部	ハケ目(内面8～10本　外面5～6本/cm)
090SH020-061	73	弥生土器	片口鉢	石英 角閃石 橙色粒子 金雲母	淡黄褐色	淡黄褐色～赤褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 工具ナデ 工具ケズリ 指オサエ	(22.0)	12.4			口縁部～底部	外面黒斑
090SH020-062	74	弥生土器	鉢	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ ケズリ	ナデ ヨコナデ ハケ目後ナデ	(18.1)	16.3	17.7		全体3/4	穿孔1ヶ所 ハケ目（7～8本/cm） 外面黒斑
090SH020-063	75	弥生土器	小型鉢	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ミガキ	ヨコナデ ハケ目後ミガキ	12.9	7.9			口縁部～底部	ハケ目（10～12本/cm）
090SH020-064	75	弥生土器	小型鉢	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	(18.4)	14.6			口縁部～底部	ハケ目(内面8～10本　外面5～6本/cm)
090SH020-065	75	弥生土器	小型鉢	角閃石 長石 白色粒子 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ハケ目後ナデ 指オサエ	(14.4)	8.2			口縁部～底部	ハケ目（8本/cm）
090SH020-066	75	弥生土器	小型鉢	角閃石 長石 金雲母	淡褐色	淡褐色	ナデ ヨコナデ ハケ目後ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ ハケ目後ナデ	12.8	11.0			口縁部～底部	ハケ目（5～6本/cm）
090SH020-067	76	弥生土器	台付鉢	石英 角閃石 金雲母	淡褐色	淡褐色	ハケ目後ナデ 工具ナデ	ナデ ハケ目後ナデ 指オサエ	15.4				口縁部～脚部	ハケ目（8～9本/cm）
090SH020-068	76	弥生土器	台付鉢	石英 角閃石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ハケ目後ナデ 工具ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	(15.8)	11.6		(8.2)	口縁部～脚部	ハケ目（7～8本/cm）
090SH020-069	76	弥生土器	台付鉢	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡橙褐色～淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 工具ナデ	(10.0)		(11.0)		口縁部～脚部	外面黒斑
090SH020-070	76	弥生土器	台付鉢	石英 角閃石 長石	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ	(14.8)	9.4		(7.4)	口縁部～脚部	
090SH020-071	77	弥生土器	鉢	角閃石	淡茶褐色	淡茶褐色	ミガキ 暗文風ミガキ	ケズリ後ナデ	(10.6)	3.8			全体1/6	精製土
090SH020-072	77	弥生土器	鉢	石英	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 暗文風ミガキ	ヨコナデ ケズリ	(11.8)				口縁部片	
090SH020-073	77	弥生土器	鉢	長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ 暗文風ミガキ	ナデ ヨコナデ	(15.6)				口縁部片	
090SH020-074	77	弥生土器	鉢	石英 角閃石 長石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ ハケ目後ナデ	(16.2)	5.2			口縁部～底部	ハケ目（10本/cm）
090SH020-075	77	弥生土器	鉢	角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(13.2)	5.1			口縁部～底部	ハケ目（10本/cm）
090SH020-076	77	弥生土器	鉢	石英 橙色粒子 金雲母	赤橙色	淡黄褐色～赤橙色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 工具ナデ	14.8	5.1			口縁部～底部	外面黒斑

第23表　遺物観察表⑧

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SH020-077	77	弥生土器	鉢	石英 角閃石	淡茶褐色 ～淡茶灰色	淡茶褐色	ヨコナデ ハケ目後 ナデ ケズリ後 ナデ	ハケ目 ヨコナデ 工具ナデ	(14.4)				全体1/3	ハケ目（内面10～12本 外面10～12･6～8本/cm）
090SH020-078	78	弥生土器	高坏	石英 白色粒子 橙色粒子	淡褐色	淡褐色	ナデ	ナデ ハケ目後 ナデ	(14.1)	10.0		(10.1)	口縁部～脚部	穿孔4ヶ所 ハケ目（10本/cm）
090SH020-079	78	弥生土器	高坏	角閃石 長石	赤褐色	赤褐色	ヨコナデ ハケ目後 ナデ 暗文風ミガキ	ミガキ ケズリ風 工具ナデ	(19.4)				坏部1/6	ハケ目（8本/cm）
090SH020-080	78	弥生土器	高坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色 ～赤橙色	淡黄褐色 ～赤橙色	ナデ ケズリ後 ナデ	ナデ	(22.0)	12.8		(13.4)	口縁部～脚部	穿孔
090SH020-081	78	弥生土器	高坏	石英 角閃石 長石 金雲母	淡茶褐色 ～淡灰黒色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 暗文風ミガキ	ナデ ヨコナデ 暗文風ミガキ	24.0			15.6	口縁部～脚部	穿孔4ヶ所
090SH020-082	78	弥生土器	高坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	(15.0)				坏部	
090SH020-083	78	弥生土器	高坏	石英 長石 橙色粒子	淡黄褐色 ～淡赤橙色	淡黄褐色 ～淡赤橙色	ナデ	ナデ ミガキ	(20.4)				坏部	
090SH020-084	78	弥生土器	高坏	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	赤橙色	赤橙色	ミガキ ケズリ後 ナデ	ナデ ヨコナデ ミガキ	(21.9)	13.3		(15.2)	全体2/3	穿孔 ハケ目（6～7本/cm）
090SH020-085	78	弥生土器	高坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡灰褐色 ～淡黄色	淡赤褐色 ～淡黄白色	ヨコナデ ケズリ後 ナデ	ヨコナデ ハケ目後 ミガキ ハケ目後 ナデ				17.2	脚部	穿孔5ヶ所 ハケ目（10本/cm）
090SH020-086	78	弥生土器	高坏	石英 角閃石 長石 金雲母	暗褐色	黒茶褐色 ～暗褐色	ハケ目 ナデ ケズリ後 ナデ	ナデ ヨコナデ ハケ目後 ミガキ				14.3	脚部	穿孔5ヶ所 ハケ目（6～7本/cm）
090SH020-087	79	弥生土器	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ					肩部片	ハケ目（3～4本/cm）
090SH020-088	79	弥生土器	大型器台	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄白色	淡黄白色	ナデ 指オサエ 工具ナデ	ミガキ					胴部片	穿孔
090SH020-089	80	弥生土器	小型器台	石英 角閃石 長石	淡褐色	淡褐色	ナデ ヨコナデ ミガキ風 ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	7.6	6.3		(8.9)	口縁部～脚部	ハケ目（6～7本/cm）
090SH020-090	80	弥生土器	器台	石英 長石 橙色粒子	淡茶褐色	赤色	ナデ	ミガキ	(20.4)				脚部	精製土 外面赤色塗彩
090SH020-091	81	弥生土器	壺	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶灰色	淡茶褐色	ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ ミガキ風 ナデ	(9.4)		(9.3)		全体1/4	小型丸底壺
090SH020-092	81	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石	淡茶褐色 ～淡茶黒色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ ハケ目後 ヨコナデ	ハケ目後 ナデ	(10.8)		(13.6)		口縁部～胴部	直口壺 ハケ目（10本/cm）
090SH020-093	81	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 金雲母	淡褐色	淡褐色	ナデ 指オサエ	ナデ	(11.2)				口縁部～胴部	小型丸底壺 暗文
090SH020-094	81	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後 ナデ	12.6		14.0		口縁部～底部	小型丸底壺 ハケ目（5～6本/cm）
090SH020-095	82	弥生土器	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色 ～黒色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ			(5.0)		全体1/2	ミニチュア土器 黒斑
090SH020-096	82	製塩土器		石英 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ				6.1	脚部	
090SH020-097	83	石器												別表
090SH020-098	83	石器												別表
090SH020-099	83	石器												別表

第24表　遺物観察表⑨

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SH020-100	84	金属製品												別表
090SH020-101	84	金属製品												別表
090SH020-102	84	金属製品												別表
090SH020-103	84	金属製品												別表
090SH069-001	86	弥生土器	甕	石英 角閃石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ ケズリ 指オサエ				4.3～ 4.7	底部	
090SH069-002	86	弥生土器	鉢	石英 角閃石 金雲母	赤褐色	赤褐色	ナデ 指オサエ	ナデ	12.0	9.6～ 10.0		5.9	完存	外面赤色塗彩
090SH069-003	87	石器												別表
090SH094-001	92	土師質	壺	石英 角閃石 白色粒子	明茶褐色	明茶褐色	ハケ目 ハケ目後 ナデ ケズリ後 ナデ	ハケ目 ナデ ケズリ後 ハケ目			28.0	2.4	頸部～底部	ハケ目（8本/cm）
090SH094-002	92	土師質	壺	石英 角閃石 金雲母	橙褐色～ 暗茶褐色	橙褐色～ 暗茶褐色	不明	工具ナデ	18.5	43.4	28.7		完存	
090SH094-003	93	土師質	甕	石英 角閃石 白色粒子	明茶褐色	明茶褐色	ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(13.4)				口縁部～肩部1/4	ハケ目（4～5本/cm）
090SH094-004	93	土師質	甕	石英 角閃石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ ケズリ後 ナデ	ハケ目 ヨコナデ	(13.8)				口縁部～肩部1/2	ハケ目（6本/cm）
090SH094-005	93	土師質	甕	石英 角閃石	明茶褐色	明茶褐色	ハケ目 ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(14.0)				口縁部～肩部1/2	ハケ目（5本/cm）
090SH094-006	93	土師質	甕	石英 角閃石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ケズリ後 ナデ	ハケ目後 ナデ	(13.8)				口縁部～胴部1/4	ハケ目単位不明
090SH094-007	93	土師質	甕	石英 角閃石 白色粒子 金雲母	暗褐色	暗褐色	ケズリ後 ヨコナデ ケズリ後 ナデ ケズリ	タタキ タタキ後 ナデ ケズリ	14.3		(15.0)		口縁部～底部	
090SH094-008	93	土師質	甕	石英 角閃石	茶褐色	茶褐色	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ タタキ後 ハケ目	(11.6)	15.2	15.1		口縁部～底部	ハケ目（4～5本/cm） 内外面剥離
090SH094-009	93	土師質	甕	石英 角閃石 白色粒子	茶褐色	茶褐色	指オサエ ハケ目後 ナデ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後 ナデ ケズリ	16.2		(20.4)		口縁部～胴部	ハケ目（8～10本/cm）
090SH094-010	94	土師質	甕	石英 角閃石 白色粒子	灰茶褐色	茶褐色	ハケ目後 ナデ ハケナデ	ナデ ハケ目後 ナデ	(14.4)				口縁部～肩部1/4	ハケ目（4～5本/cm）
090SH094-011	94	土師質	甕	石英 角閃石 白色粒子	明茶褐色	明茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(15.8)				口縁部～肩部1/2	ハケ目単位不明
090SH094-012	94	土師質	甕	石英 角閃石 白色粒子	橙褐色	橙褐色	ハケ目後 ナデ ケズリ後 ナデ	ハケ目後 ナデ 工具ナデ	(17.2)				口縁部～肩部1/2	ハケ目（4本/cm）
090SH094-013	94	土師質	甕	石英 角閃石	明茶褐色	明茶褐色	ヨコナデ 工具ナデ	ハケ目 ヨコナデ	(12.2)				口縁部～胴部1/4	ハケ目（3～5本/cm）
090SH094-014	94	土師質	甕	石英 角閃石	橙色	橙色	ハケ目 ナデ ヨコナデ ケズリ後 ハケ目 ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(17.7)				口縁部～胴部1/2	ハケ目(内面8～10本　外面10～12本/cm)
090SH094-015	94	土師質	甕	石英 角閃石	明茶褐色	明茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ ハケ目後 ヨコナデ	ハケ目後 ナデ	17.0	28.6	22.2		完存	ハケ目（8～10本/cm） 外面スス
090SH094-016	94	土師質	甕	石英 角閃石	明茶褐色	明茶褐色	指オサエ ハケ目後 ナデ	ハケ目 ハケ目後 ナデ 工具ナデ	15.7	28.2	19.9		完存	ハケ目（10～12本/cm） 外面スス
090SH094-017	95	土師質	甕	石英 角閃石 白色粒子	茶褐色	茶褐色	ナデ後ミガキ ハケ目後 ミガキ	ハケ目 ハケ目後 ヨコナデ	12.4	16.1			完存	ハケ目（7本/cm） 外面スス

第25表　遺物観察表⑩

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SH094-018	95	土師質	甕	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ ミガキ ハケ目後 ナデ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後 ヨコナデ	18.7	35.7	12.6		口縁部～底部	ハケ目(内面7～10本　外面12～14本・18本/cm) 外面スス
090SH094-019	95	土師質	不明	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	明黄褐色	明黄褐色	ハケ目 ケズリ	ハケ目 ケズリ			(63.0)		胴部	ハケ目（8～10本/cm）
090SH094-020	96	土師質	鉢	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	明茶褐色	明茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	21.5	15.0			口縁部～底部	ハケ目（8～10本/cm） 外面黒斑 外面剥離
090SH094-021	97	土師質	鉢	石英 角閃石 橙色粒子	明茶褐色	明茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目後 ミガキ	9.2	7.6			完存	ハケ目（9～10本/cm） 外面剥離
090SH094-022	97	土師質	鉢	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	明茶褐色	明茶褐色	ヨコナデ ケズリ後 ナデ	ハケ目 ヨコナデ ケズリ後 ハケ目	(10.4)				全体1/3	ハケ目（6～8本/cm） 内面黒斑
090SH200-001	102	土師質	壺	角閃石 長石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(16.2)				口縁部～肩部1/2	ハケ目（7本/cm）
090SH200-002	102	土師質	壺	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色 ～淡茶灰色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ハケ目後 ナデ	16.9				口縁部～胴部	ハケ目（7～9本/cm）
090SH200-003	102	土師質	壺	石英 角閃石 長石	赤褐色	赤褐色	ハケ目 ミガキ ハケ目後 ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ ハケ目後 ナデ	16.6		(23.1)		口縁部～胴部	ハケ目（8～9本/cm） 外面スス
090SH200-004	102	土師質	壺	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶橙色	淡茶橙色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	16.9				口縁部～胴部	ハケ目（8～9本/cm）
090SH200-005	103	土師質	壺	石英 角閃石 長石 金雲母	淡黄褐色	淡黄褐色 ～淡赤橙色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(11.0)	9.2	(12.2)		全体1/2	外面赤色塗彩 ハケ目（8本/cm）
090SH200-006	103	土師質	壺	石英 角閃石 橙色粒子 金雲母	淡赤橙色	淡赤橙色 ～淡黄褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目後 ナデ 指オサエ	10.0	14.7	13.1		口縁部～底部	穿孔1ヶ所 ハケ目（10～11本/cm）
090SH200-007	103	土師質	壺	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ハケ目後 ナデ	13.8		14.2		口縁部～胴部	ハケ目（7～8本/cm） 外面黒斑
090SH200-008	104	土師質	甕	石英 白色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ケズリ	ヨコナデ					口縁部片	布留式系
090SH200-009	104	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ	(19.0)				口縁部～肩部1/2	布留式系 ハケ目（約7本/cm）
090SH200-010	104	土師質	甕	角閃石 長石	淡茶灰色	淡茶褐色 ～暗茶褐色	ナデ ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	14.9				口縁部～胴部	布留式系 ハケ目（7～9本/cm）
090SH200-011	104	土師質	甕	石英 角閃石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色 ～黒色	ナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(15.2)				口縁部～胴部	布留式系 ハケ目（8～9本/cm） 外面スス
090SH200-012	104	土師質	甕	石英 角閃石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ ハケ目後 ナデ 工具ナデ	ハケ目 ナデ ハケ目後 ナデ	(15.0)	22.8	(16.6)		全体2/3	ハケ目（6～7本/cm） 外面スス
090SH200-013	104	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色 ～黒色	ナデ 指オサエ ハケ目後 ナデ 工具ナデ	ハケ目後 ヨコナデ ハケ目後 ナデ 工具ナデ	16.7	22.7	18.4		口縁部～底部	ハケ目（7～8本/cm）
090SH200-014	105	土師質	甕	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	浅黄橙色	浅黄橙色	ケズリ後 ナデ	ハケ目 ヨコナデ ナデ	12.4				口縁部～胴部	ハケ目（8本/cm） 外面スス
090SH200-015	105	土師質	高坏	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	不明	不明	19.1				坏部	

第26表　遺物観察表⑪

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SH200-016	105	土師質	高坏	石英 角閃石 金雲母	赤橙色	赤橙色	ハケ目 ナデ	ミガキ					脚部	穿孔４ヶ所 ハケ目（7～8本/cm）
090SH200-017	105	土師質	高坏	長石 橙色粒子	淡褐色～ 赤橙色	淡褐色～ 赤橙色	ハケナデ	ナデ ミガキ ハケ目後 ハケナデ					脚部	穿孔４ヶ所 ハケ目（11～12本/cm）
090SH200-018	105	土師質	小型器台	石英 角閃石 長石 橙色粒子	黄褐色	黄褐色	ナデ	ミガキ後 ナデ	9.7	7.7		(12.2)	全体2/3	穿孔４ヶ所 内外面黒斑
090SH200-019	105	土師質	小型鉢	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	(7.0)	4.0			全体1/4	
090SH200-020	105	土師質	鉢	角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ 指オサエ ミガキ	ヨコナデ ミガキ	9.5	6.4			全体3/4	
090SH200-021	105	土師質	鉢	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ	10.5	5.3			完存	外面黒斑
090SH200-022	105	土師質	鉢	角閃石 長石	淡橙褐色	淡橙褐色	ミガキ	ミガキ	13.5				口縁部～底部	
090SH200-023	105	土師質	鉢	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ナデ後ミガキ	ハケ目 ナデ	9.9	6.9			完存	ハケ目（約6～7本/cm）
090SH200-024	105	土師質	鉢	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目後 ヨコナデ 工具ナデ	ハケ目 ハケ目後 ヨコナデ	11.5	8.2			口縁部～底部	ハケ目（5～7本/cm）
090SH200-025	105	土師質	鉢	角閃石 長石 白色粒子	赤茶褐色	赤茶褐色	ナデ ヨコナデ 工具ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	(16.4)	9.9			全体1/2	ハケ目（9～10･6～7本/cm） 外面スス
090SH200-026	106	石器												別表
090SJ398-001	108	弥生土器	不明	石英 角閃石 橙色粒子	浅黄橙色	浅黄橙色	ヨコナデ 指オサエ ハケ目後 ナデ	ハケ目後 ナデ	(17.2)				口縁部	ハケ目（8～10本/cm）
090SJ398-002	108	弥生土器	甕	石英 角閃石	明茶褐色	明茶褐色	ナデ 指オサエ ハケ目後 ヨコナデ ハケナデ	ハケ目 ハケ目後 ヨコナデ	(15.6)	26.4	(16.2)		全体1/2	ハケ目（10～11本/cm） 外面黒斑
090SJ398-003	108	弥生土器	甕	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	茶褐色	茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ハケナデ 後ナデ	ヨコナデ 工具ナデ	(28.1)	17.0	(18.8)	2.6	全体1/2 全体1/2	外面スス
090SX005-001	110	瓦質	擂鉢	石英	灰白色	灰白色	ヨコナデ	不明					胴部片	
090SX006-001	111	須恵器	蓋	角閃石	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ					口縁部片	
090SX019-001	112	須恵質	不明	角閃石 長石	暗灰色	暗灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	(25.0)				端部	
090SX059-001	115	土師器	坏	長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
090SX059-002	115	土師器	坏	角閃石 長石	淡橙褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	回転ヘラ切り離し後手持ちヘラケズリ	(14.2)	3.9		(10.0)	口縁部～底部	
090SX059-003	115	弥生土器	壺	石英 角閃石	淡茶色	淡茶色	ナデ	ナデ					胴部片	
090SX059-004	115	土師器	高台付坏	角閃石	淡橙褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ					底部片	
090SX080-001	116	土師器	小皿	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し					全体片	
090SX081-001	117	土師器	小皿	長石 橙色粒子	淡茶色	淡茶色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し	(7.6)	1.3		(5.6)	口縁部～底部	
090SX087-001	118	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶色	淡茶色	ナデ	ナデ					口縁部片	
090SX087-002	118	土師器	坏	角閃石 長石	淡茶色	淡茶色	ナデ	ナデ					底部片	

第27表　遺物観察表⑫

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SX087-003	118	土師器	小皿	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶色	淡茶色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し					底部片	
090SX088-001	119	土師器	小皿	角閃石 長石	淡茶色	淡茶色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し					全体片	
090SX088-002	119	土師器	小皿	角閃石 長石	淡茶色	淡茶色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し					全体片	
090SX095-001	121	土師質	甕	石英 角閃石 白色粒子	明黄茶褐色	明黄茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	(19.6)				口縁部1/8	企救型 ハケ目（4～6本/cm）
090SX115-001	122	土師質	甕	石英 白色粒子	茶褐色	茶褐色	ハケ目 ナデ ヨコナデ 指オサエ ハケ目後ナデ	ナデ ヨコナデ ハケ目	(27.4)				口縁部～肩部	企救型 ハケ目（4～5本/cm）
090SX152-001	123	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶色	淡茶色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し					底部片	
090SX153-001	124	土師質	甑	角閃石	淡茶褐色	淡茶褐色	あて具痕	ナデ タタキ				(18.0)	底部	
090SX154-001	125	陶磁器												別表
090SX219-001	127	土師器	高坏	角閃石 長石 白色粒子 橙色粒子	赤褐色	赤褐色	ミガキ	ミガキ					坏部片	都城系 暗文
090SX231-001	128	須恵器	高台付坏	角閃石	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ 回転ナデ	ナデ 回転ナデ				(8.4)	底部	
090SX242-001	129	土錘												別表
090SX258-001	130	土師器	小皿	角閃石 長石	淡茶白色	淡茶白色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し	(7.5)	1.0		(5.4)	口縁部～底部	
090SX258-002	130	土師器	坏	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し				(10.8)	底部	
090SX279-001	131	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	(14.0)	4.2		(10.6)	口縁部～底部	
090SX279-002	131	土師器	皿	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ミガキ	不明	(20.0)	1.7		(16.8)	口縁部～底部	
090SX285-001	132	土師器	小皿	長石 橙色粒子	淡茶色	淡茶白色	ナデ	ナデ	(8.2)	1.2		(5.8)	全体1/5	
090SX285-002	132	瓦器	椀	長石	淡黒色	淡黒色	ナデ	ヨコナデ 指オサエ	(13.0)				口縁部	和泉型 暗文
090SX295-001	133	土師器	小皿	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶色	淡茶色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し	(7.8)	1.0		(6.6)	全体1/4	
090SX311-001	134	土師器	高坏	石英 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ナデ ケズリ				(8.8)	脚部	都城系 面取り
090SX333-001	135	土師器	小皿	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し	(8.2)	1.2		(7.6)	全体1/4	
090SX363-001	137	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 白色粒子 緑色結晶片岩片	淡茶褐色	淡茶褐色	指オサエ ハケ目後ナデ	ナデ ヨコナデ	(27.0)				口縁部～胴部	下城式 ハケ目単位不明
090SX390-001	138	製塩土器		石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ 指オサエ					口縁部片	
090SX392-001	139	土錘												別表
090SX401-001	140	土錘												別表
090SX412-001	141	土師器	坏	石英 角閃石 橙色粒子	淡赤橙色	淡赤橙色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	(13.0)	3.2		(6.8)	口縁部～底部	
090SX412-002	141	須恵器	壺	石英 白色粒子	淡灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	(18.0)				口縁部	
090SX413-001	142	土師質	甕	角閃石 長石	淡茶黒色	淡茶褐色	ナデ	ヨコナデ					口縁部片	内面スス

第28表　遺物観察表⑬

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SX413-002	142	須恵器	蓋	角閃石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 回転ナデ	回転ナデ	(13.6)				口縁部1/10	
090SX414-001	143	土師質	小型鉢	長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目	(8.0)				口縁部～胴部	ハケ目（約7本/cm）
090SX427-001	144	須恵器	坏	白色粒子	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ	ナデ 回転ナデ	(14.8)				口縁部	
090SX427-002	144	土師器	坏	角閃石	淡茶色	淡茶色	ナデ	ナデ	(15.0)				口縁部	
090SX434-001	146	弥生土器	壺	角閃石	淡茶灰色	淡茶灰色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ハケ目後 ミガキ					口縁部片	広口壺 ハケ目（約5本/cm）
090SX434-002	146	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ハケ目 ナデ					口縁部片	下城式 ハケ目単位不明
090SX434-003	146	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 緑色結晶 片岩片	淡茶褐色 ～黒色	淡橙褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ				7.0	底部	外面スス
090SX434-004	146	弥生土器	甕	石英 長石	淡茶褐色	淡橙褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ				6.6	底部	下城式 ハケ目（約4・8本/cm）
090SX434-005	146	弥生土器	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡橙褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ 指オサエ					底部片	ハケ目（内面4～5本　外面5本/cm）
090SX434-006	146	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡茶色～ 黒色	淡茶色～ 淡茶黒色	ナデ	ナデ 指オサエ				(5.6)	底部	
090SX441-001	148	製塩土器		石英 白色粒子 緑色結晶 片岩片	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ 指オサエ					口縁部片	下城式 ハケ目単位不明
090SX441-002	148	製塩土器		長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ					口縁部片	
090SX441-003	148	土師器	皿	角閃石 長石	赤橙色	赤橙色	ミガキa2	ナデ ミガキa2					全体片	
090SX441-004	148	土師器	坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	暗茶褐色	ナデ ミガキa2	ナデ ミガキa2 回転ヘラ ケズリ	(15.4)	4.0		(9.6)	口縁部～底部	
090SX441-005	149	石器												別表
090SX448-001	151	弥生土器	甕	石英 角閃石 白色粒子	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ ケズリ後 ナデ	ナデ	(12.4)				口縁部～肩部1/2	
090SX448-002	151	弥生土器	甕	石英 角閃石	浅黄橙色	浅黄橙色	ケズリ後 ナデ	ハケ目 ハケ目後 ナデ	(10.4)	16.9			全体1/2	ハケ目（10～12本/cm） 外面黒斑 外面スス
090SX448-003	151	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	赤橙色～ 淡黄褐色	ナデ ハケ目後 ナデ	ハケ目 ナデ ミガキ ハケ目後 ヨコナデ	(7.9)	12.1	10.3		口縁部～底部	ミニチュア土器 複合口縁壺 ハケ目（10本/cm） 外面赤色塗彩 外面黒斑
090SX448-004	151	弥生土器	台付鉢	石英 角閃石 橙色粒子	茶褐色	浅黄橙色	ヨコナデ 工具ナデ	ハケ目 ヨコナデ 工具ナデ				(11.2)	底部	ハケ目（10～12本/cm）
090SX448-005	152	石器												別表
090SX453-001	153	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶色	淡茶色	ナデ	ナデ					口縁部片	
090SX453-002	153	土師器	蓋	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ミガキa2					口縁部片	
090SX453-003	153	製塩土器		角閃石 長石 緑色結晶 片岩片	淡茶褐色	淡茶灰色	布目	ナデ 指オサエ					胴部片	
090SX453-004	153	製塩土器		角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	布目	ナデ 指オサエ					胴部片	
090SX464-001	157	土師質	壺	角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色 ～淡黒色	淡茶褐色	ハケ目 指オサエ ミガキ ハケ目後 ナデ	ハケ目後 ナデ ハケ目後 ミガキ	14.1	42.7	27.1		口縁部～底部	複合口縁壺 ハケ目（9～12本/cm） 外面黒斑 外面剥離

第29表　遺物観察表⑭

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SX464-002	157	土師質	壺	石英 角閃石 橙色粒子 金雲母	淡赤褐色	淡赤褐色	ハケ目 ナデ 工具ナデ	ハケ目 ナデ ミガキ			(29.7)		口縁部～胴部	複合口縁壺 ハケ目（内面10～11･7本 外面10～11本/cm） 外面赤色塗彩 内面黒斑
090SX464-003	157	土師質	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ミガキ ハケ目後 ヨコナデ ハケ目後 ミガキ	ハケ目 ナデ ヨコナデ			29.0		口縁部～底部	複合口縁壺 ハケ目（8～10本/cm）
090SX464-004	157	土師質	壺	角閃石 長石	淡茶灰色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ ハケ目後 工具ナデ	ナデ ハケ目後 ミガキ			30.3		肩部～底部	ハケ目（6～8･7～9本/cm） 外面スス
090SX464-005	158	土師質	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ハケ目後 ナデ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(16.4)	32.0	23.2		口縁部一部欠損	ハケ目（4～6･7～8本/cm）
090SX464-006	159	土師質	壺	石英 角閃石 長石 金雲母	赤褐色～ 赤橙色	赤褐色～ 赤橙色	ナデ 工具ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ 指オサエ	(10.7)	20.1	13.9		口縁部～底部	ハケ目（9～10本/cm）
090SX464-007	160	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ ヨコナデ 指オサエ	(12.7)	17.9	14.6		全体3/4	ハケ目（10～11本/cm）
090SX464-008	161	土師質	甕	角閃石 長石	淡茶灰色	淡茶褐色 ～淡赤褐色	ハケ目後 ナデ	ハケ目 ナデ	(14.2)	21.1	(15.2)		口縁部～底部	ハケ目（7～10本/cm） 外面スス
090SX464-009	161	土師質	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	指オサエ ミガキ ハケ目後 ナデ後ミガキ	ヨコナデ タタキ後 ハケ目後 ミガキ	16.3		22.0		口縁部～胴部	ハケ目（8～10本/cm） 外面スス
090SX464-010	161	土師質	甕	角閃石 長石	淡赤褐色	淡赤褐色 ～淡茶褐色	ハケ目 ハケ目後 ナデ 工具ナデ	ハケ目 ヨコナデ 工具ナデ	19.0	33.0	23.7		完存	ハケ目（内面5～7本　外面6～8本/cm） 外面スス
090SX464-011	161	土師質	甕	角閃石 長石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色 ～淡茶黒色	ナデ 指オサエ ミガキ ハケ目後 ナデ	ハケ目 ナデ ハケ目後 ヨコナデ	19.1	31.4	22.7		口縁部～底部	ハケ目（9～12本/cm） 外面スス
090SX464-012	162	土師質	甕	角閃石 長石	淡黄灰色	淡黄灰色	ナデ 指オサエ ナデ後ハケ目 ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	14.2	20.6	16.3		完存	ハケ目（5本/cm）
090SX464-013	162	土師質	甕	石英 角閃石 長石	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ ケズリ後 ナデ	ハケ目後 ナデ	14.5	26.7			口縁部～底部完存	ハケ目（4～5本/cm）
090SX464-014	162	土師質	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ハケ目後 ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ ヨコナデ 指オサエ	16.6	30.7	21.8		口縁部～底部	ハケ目（内面11本　外面6･9～11本/cm） 内外面スス
090SX464-015	163	土師質	甕	石英 角閃石 白色粒子 金雲母	淡茶褐色 ～淡黒色	淡茶褐色 ～淡黒色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(15.6)	21.8	(21.7)		口縁部～底部	布留式系 ハケ目（10～11本/cm） 内外面スス
090SX464-016	164	土師質	台付鉢	角閃石 長石	茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ 工具ナデ 後ミガキ	ナデ ミガキ ハケ目後 ミガキ	8.0	7.3		(9.8)	口縁部～底部	外面赤色塗彩 ハケ目（13本/cm）
090SX464-017	164	土師質	鉢	石英 角閃石 長石 白色粒子	橙褐色	橙褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 工具ナデ	(14.0)				全体1/3	
090SX464-018	164	土師質	鉢	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目 ナデ ヨコナデ ミガキ 指オサエ	ハケ目 ナデ ヨコナデ 指オサエ	23.5	15.6			口縁部～底部	ハケ目（9～10本/cm）
090SX464-019	165	土師器	高坏	石英 角閃石 長石 金雲母	淡灰褐色 ～赤橙色	淡赤褐色 ～赤橙色	ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ ミガキ 指オサエ	(26.9)	23.1	(19.3)		口縁部～脚部	穿孔8ヶ所 内外面赤色塗彩 ハケ目（9～10本/cm）

第30表　遺物観察表⑮

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SX464-020	166	土師質	壺	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色 ～赤色	ナデ 指オサエ	ヨコナデ ナデ後ミガキ 指オサエ	(9.2)	15.4	11.8		全体1/2	ミニチュア土器 複合口縁壺 外面赤色塗彩
090SX464-021	167	石器												別表
090SZ000-001	168	土師器	皿	角閃石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ					口縁部片	京都系土師器
090SZ000-002	168	土師器	皿	角閃石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	京都系土師器 精製土
090SZ000-003	168	製塩土器		石英	淡茶褐色	淡茶褐色	布目	ナデ 指オサエ					口縁部片	
090SZ000-004	168	土師器	小皿	角閃石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し	(6.2)	0.8		(5.2)	口縁部～底部	ハケ目（7～10本/cm） 外面スス
090SZ000-005	168	土師器	小皿	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し	(7.8)	1.6		(6.4)	全体1/5	
090SZ000-006	168	土師器	小皿	石英 長石 橙色粒子	淡赤橙色	淡赤橙色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し	8.2	1.3		6.6	全体2/3	
090SZ000-007	168	土師器	小皿	石英 角閃石 長石 金雲母	淡黄白色	淡黄白色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し	8.5	1.0		6.6	完存	
090SZ000-008	168	製塩土器		石英	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ナデ 指オサエ				5.1	脚部	
090SZ000-009	168	土師器	坏	石英 長石 橙色粒子	淡赤橙色	淡赤橙色	不明	ナデ	(12.0)	3.8		(6.4)	全体1/4	
090SZ000-010	168	土師器	坏	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	12.8	3.8		7.4	口縁部～底部	
090SZ000-011	168	土師器	高台付坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡赤橙色	ナデ ミガキa2	ナデ ミガキa2 ケズリ後 ナデ	(13.0)	3.7		(9.6)	全体1/2	
090SZ000-012	168	土師器	高台付坏	石英 角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ 回転ヘラ切り離し 後ナデ	13.4	5.0		(9.0)	口縁部～底部	
090SZ000-013	169	土師質	甕	石英	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ナデ	(19.2)				口縁部1/3	企救型 ハケ目（約3本/cm）
090SZ000-014	170	須恵器	皿	石英 長石	灰褐色	灰褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ケズリ後 ナデ	(16.0)	2.3		(13.8)	全体1/4	
090SZ000-015	170	須恵器	坏	石英 角閃石 長石	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	9.7	3.7		5.0	口縁部～底部	陶邑編年Ⅱ型式5段階
090SZ000-016	170	須恵器	蓋	石英 角閃石	淡灰白色	淡灰白色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ後 ナデ	2.6	2.7		(14.1)	全体4/5	※口径はツマミ径・底径は口径
090SZ000-017	170	須恵器	小壺	石英 長石	暗灰色	暗灰色	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(5.1)	6.2		5.9	口縁部～底部	短頸壺
090SZ000-018	170	須恵器	小壺	石英 角閃石	淡灰白色	淡灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	(8.4)	7.0		(7.0)	全体1/5	短頸壺
090SZ000-019	170	須恵器	圏足硯	長石 白色粒子	灰褐色	灰褐色	ナデ	ミガキ 回転ナデ					脚部	
090SZ000-020	170	須恵器	高台付坏	石英 白色粒子	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ				(8.8)	底部1/4	内面赤色塗彩
090SZ000-021	170	須恵器	高台付坏	石英 角閃石 長石	淡灰色～ 茶褐色	淡灰色～ 茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ				(9.6)	底部1/4	
090SZ000-022	170	須恵器	高台付坏	石英 角閃石	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ	(14.0)	4.1		(10.1)	口縁部～底部	外面黒斑
090SZ000-023	170	須恵器	高台付坏	角閃石 長石	淡茶黒色	淡茶黒色	ヨコナデ	ヨコナデ	(16.4)	4.4		(9.0)	口縁部～底部	口縁部～底部
090SZ000-024	170	須恵器	高台付坏	石英 白色粒子	淡灰褐色	暗灰色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(14.6)	4.5		(10.0)	全体1/4	
090SZ000-025	170	須恵器	高台付坏	石英	暗灰色	暗灰色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	(18.8)	5.4		(14.0)	全体1/2	

第31表　遺物観察表⑯

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
090SZ000-026	171	須恵器	甕	角閃石	淡灰褐色	淡灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	(17.0)				口縁部	
090SZ000-027	172	土錘												別表
090SZ000-028	172	土錘												別表
090SZ000-029	172	土錘												別表
090SZ000-030	172	土錘												別表
090SZ000-031	172	土錘												別表
090SZ000-032	172	土錘												別表
090SZ000-033	172	土錘												別表
090SZ000-034	172	土錘												別表
090SZ000-035	172	土錘												別表
090SZ000-036	172	土錘												別表
090SZ000-037	172	土錘												別表
090SZ000-038	173	土製品												別表
090SZ000-039	173	土製品												別表
090SZ000-040	173	土製品												別表
090SZ000-041	173		円筒埴輪	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡黄褐色	ナデ 工具ナデ	ハケ目 ナデ					底部片	ハケ目（10～11本/cm）
090SZ000-042	173		円筒埴輪	角閃石 長石	淡黄茶色	淡黄茶色	ナデ	ハケ目 ナデ				(32.8)	底部1/4	ハケ目(約10～12本/cm)

第32表　陶磁器観察表

遺物番号	挿図番号	器種		器種		法量（cm）			産地	備考
		種類	器種	種類	器種	口径	器高	底径		
090SB003-006	23	青磁	碗							
090SB003-007	23	青磁	碗							龍泉窯系 大宰府陶磁器分類碗Ⅰ－2類
090SB003-008	23	青磁	碗					(4.2)		同安窯系 大宰府陶磁器分類碗Ⅰ－1ｂ類
090SX154-001	125	白磁	碗					(5.8)		大宰府陶磁器分類碗Ⅳ類

第33表　石器観察表

遺物番号	挿図番号	器種	石材	法量（cm）				備考
		種類		長さ	幅	厚さ	重さ(g)	
090SB294-034	39	打製石斧	輝石安山岩	(8.7)	8.0	1.6	(136.0)	上下両端を折損する
090SH020-097	83	台石	安山岩	(12.8)	(10.8)	5.2	(1400.0)	
090SH020-098	83	磨石	安山岩	(11.1)	10.4	7.7	(1200.0)	
090SH020-099	83	台石	安山岩	(10.4)	(9.4)	5.9	(870.0)	
090SH069-003	87	砥石	凝灰岩	(6.2)	(6.8)	2.7	(126.0)	
090SH200-026	106	砥石	砂岩	(9.0)	8.7	3.7	(361.0)	
090SX441-005	149	石鏃	姫島産黒曜石	(2.4)	(2.0)	(0.6)	(1.2)	脚部のみ残存
090SX448-005	152	不明	緑色結晶片岩片	7.9	4.5	1.1	(40.0)	
090SX464-021	167	石皿	結晶片岩	34.5	24.4	8.8	12000.0	

第34表　金属製品観察表

遺物番号	挿図番号	器種	石材	法量（cm）				備考
		種類		長さ	幅	厚さ	重さ(g)	
090SB294-032	38	釘	鉄	(7.3)	(1.0)		(10.9)	
090SB294-033	38	刀子	鉄	(5.1)	(1.5)	0.8	(7.6)	
090SH020-100	84	不明	鉄	(2.7)	0.7	0.7	(3.3)	
090SH020-101	84	不明	鉄	(2.5)	(8.5)	(4.5)	(1.0)	
090SH020-102	84	刀子	鉄	(3.3)	14.0	0.5	(4.1)	
090SH020-103	84	手鎌	鉄	(8.3)	(4.2)		(50.4)	

第35表　土錘観察表

遺物番号	挿図番号	器種	石材	法量（cm）			備考
		種類		長さ	径	重さ(g)	
090SB003-009	24	土錘	石英 角閃石 長石 白色粒子 橙色粒子	5.1	1.9	(14.7)	
090SB003-010	24	土錘	石英 角閃石 白色粒子	4.8	1.1	5.8	完存
090SB294-024	37	土錘	石英 角閃石	3.2	1.0	2.5	完存
090SB294-025	37	土錘	砂粒	4.0	1.5	6.9	完存
090SB294-026	37	土錘	石英 白色粒子	(4.6)	1.3	(6.9)	完存
090SB294-027	37	土錘	石英 角閃石 白色粒子	4.8	1.7	11.3	完存
090SB294-028	37	土錘	石英 角閃石 長石	5.1	1.9	(14.9)	未完成品か
090SB294-029	37	土錘	石英 角閃石 白色粒子	(5.8)	1.6	(11.1)	
090SB294-030	37	土錘	石英	(6.2)	1.9	(13.2)	
090SB294-031	37	土錘	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	5.9	2.1	23.6	完存
090SD076-019	46	土錘	石英 角閃石	4.7	1.3	6.6	完存
090SD201-003	50	土錘	角閃石 長石	(3.2)	1.3	(5.3)	
090SX242-001	129	土錘	角閃石 長石	(4.0)	2.0	(12.4)	
090SX392-001	139	土錘	角閃石 長石	6.1	1.9	19.1	完存
090SX401-001	140	土錘	石英 長石	(3.0)	1.0	(2.2)	
090SZ000-027	172	土錘	角閃石 長石	(2.7)	1.0	(3.2)	
090SZ000-028	172	土錘	角閃石	3.5	1.4	6.2	完存
090SZ000-029	172	土錘	長石	4.3	1.5	(8.5)	
090SZ000-030	172	土錘	角閃石 長石	4.4	1.7	10.6	完存
090SZ000-031	172	土錘	石英 長石	4.3	2.0	15.1	完存
090SZ000-032	172	土錘	角閃石 長石	4.9	1.4	8.9	完存
090SZ000-033	172	土錘	角閃石 長石	5.1	1.4	8.1	完存
090SZ000-034	172	土錘	角閃石 長石	(5.7)	1.6	(11.6)	
090SZ000-035	172	土錘	角閃石 長石	5.5	1.9	17.3	完存
090SZ000-036	172	土錘	角閃石 長石	6.5	1.6	(12.0)	
090SZ000-037	172	土錘	石英 角閃石 長石 橙色粒子	6.0	1.8	15.9	完存

第36表　土製品観察表

遺物番号	挿図番号	器種	石材	法量（cm）			備考
		種類		長さ	径	重さ(g)	
090SZ000-038	173	土人形	角閃石 金雲母				
090SZ000-039	173	紡錘車	石英 角閃石 橙色粒子	2.0	4.9	(23.9)	※長さは厚さ
090SZ000-040	173	不明	角閃石 長石 橙色粒子				面取り

第２節　下郡遺跡群第91次調査

（１）はじめに

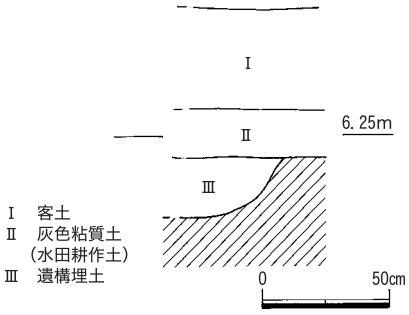
今回の発掘調査地点は下郡遺跡群Ｈ区ｑ・ｒ－18地点に相当し、昭和62年度に調査を実施した第５次調査、および平成６年度の第49次・第50～53次調査地点に近接する。過去に行われたこれらの調査では弥生時代中期～古墳時代におよぶ集落跡が確認されており、今回の調査区も当該集落エリアの一角に相当する。

調査は平成９年（1997）３月３日～３月28日まで実施し、坪根伸也、林潤也が担当した。

今次の調査は道路建設に伴うもので、調査の結果、弥生時代後期終末～古墳時代に比定される竪穴住居跡、古墳時代以降の所産になると考えられる柱穴群などを確認し、前述の想定を追証する結果を得ることができた。調査面積は約80㎡である。

（２）土　層

当地点の基本土層は第174図に示すように約0.4mを測る客土層が存在し、その直下に0.2ｍの旧耕作土を確認することができる。遺構検出面はこの灰色粘質土層直下において確認することができる。遺構検出面標高は約6.0mである。



第174図　基本土層断面模式図（1/30）

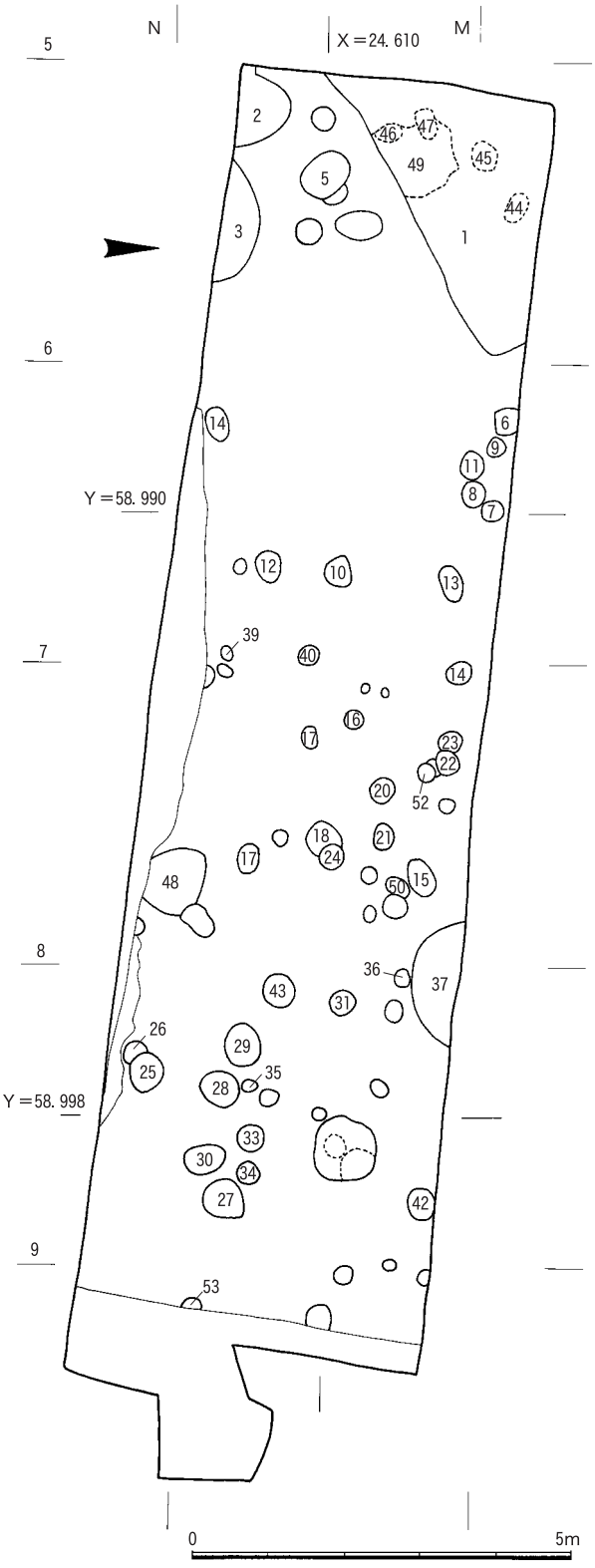
（３）遺構と遺物

竪穴住居跡（ＳＨ）

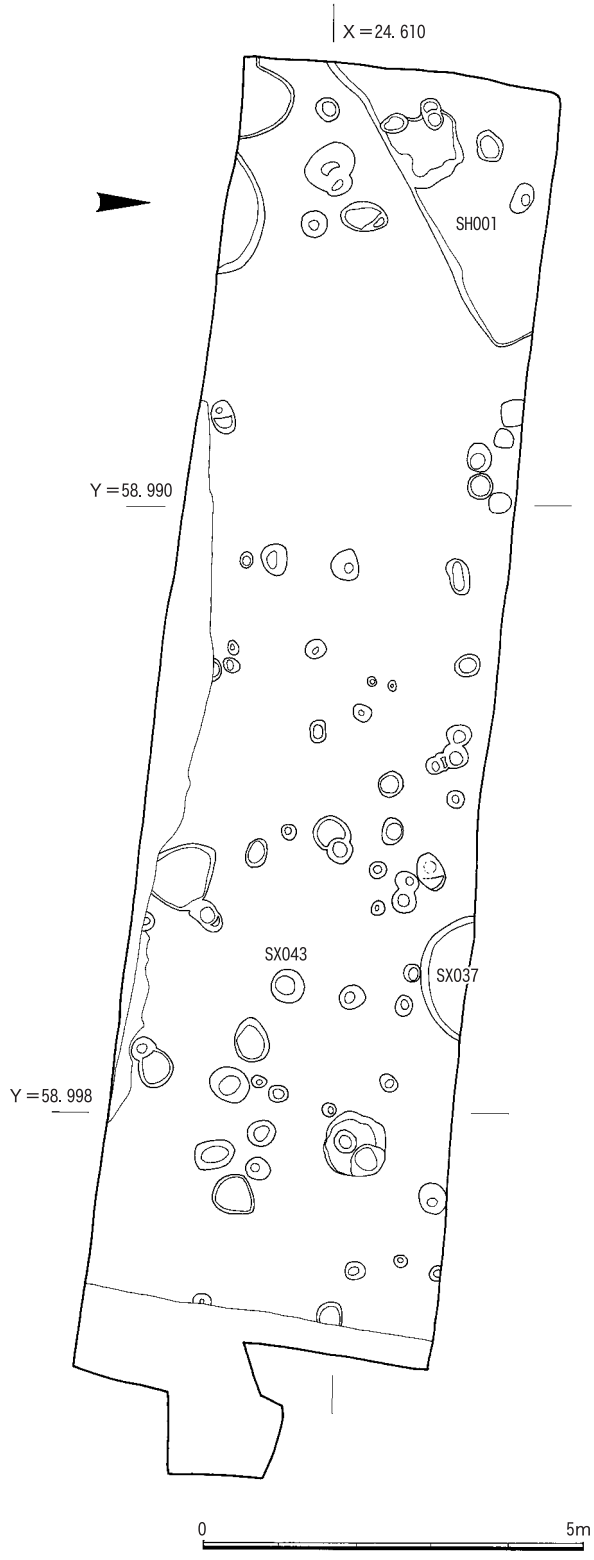
091SH001（第176図）

091SH001は方形プランを呈する竪穴住居跡である。調査区の北西部分で検出されており、大半が調査対象地外に展開するため、規模、主柱の位置などの詳細は不明である。今次の調査では住居の南辺部分について調査を実施した形となり、南東コーナーと南壁を確認している。住居跡検出面から床面までの現存深度は0.63mを測り、この南壁に沿って構築された長径約1.0mを測る屋内土坑を確認した。また、住居床面において東西方向にふたつの柱穴を検出しているが、東側に位置する柱穴は約0.48mの深度を有し、主柱穴のひとつである可能性が高い。これまでの周辺地域での弥生時代から古墳時代の竪穴住居構造との比較から推定される形態は、屋内土坑が壁面の中央に配置される例が多いことから、今回の柱穴、屋内土坑、住居コーナーとの位置関係に留意すると、南壁中央に屋内土坑を配置した４本の主柱を有する竪穴住居である可能性が高い。

住居埋土は大きく３層に分層が可能である。最上層に位置するのは第Ⅳ層であり、灰褐色土により構成される。第Ⅳ層下には第Ⅴ層暗茶黒色土層が存在する。この土層は後述する第Ⅷ層堆積後に実施された掘り返しの埋土に相当する。灰褐色粘質土ブロックを含む単一土層により構成されるが、土層状況から一気に埋め戻された状況が想定される。基底部には焼土を含む茶褐色土層（第Ⅵ層）の堆積も認められる。埋土の最下層に位置するのが第Ⅶ層茶黒色土層である。本層も第Ⅴ層と同じくブロック土を内包



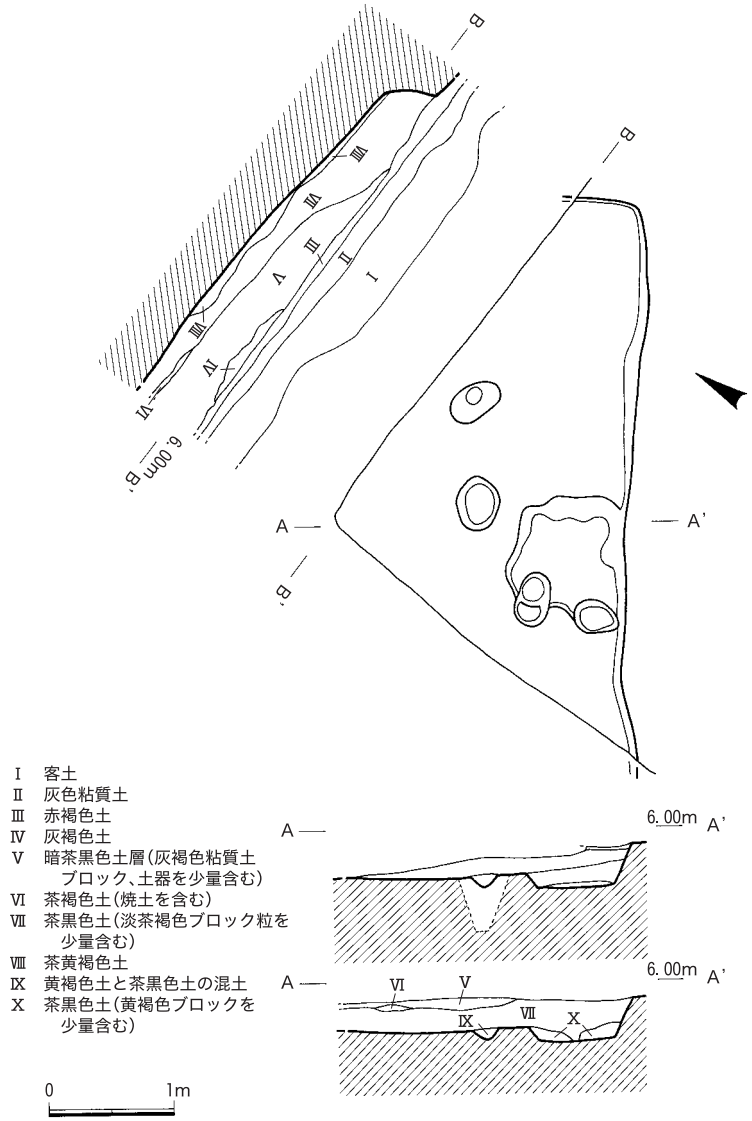
第175図　遺構配置図（1/100）



第176図　全体遺構図（1/100）

第37表　遺構一覧表

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
001	091SH-001	器台、甕、ベルト状突帯壺、砥石	弥生後期終末	L・M-6
002		複合口縁壺	弥生後期	M-6
003		弥生土器片		M-6
004				M-6
005		弥生土器片、片岩系石片		M-6
006		弥生土器片		L-7
007				L-7
008				L・M-7
009				L-7
010				M-7
011				L・M-7
012				M-7
013				M-7
014				M-7
015				M-8
016				M-8
017		弥生土器片		M-8
018		弥生壺胴部		M-8
019		弥生土器片、土器片		M-8
020				M-8
021		弥生土器片		M-8
022				M-8
023				M-8
024		脚部		M-8
025				N-9
026				N-9
027				M-9
028		弥生土器片、姫島産黒曜石、石鏃未製品	弥生	M-9
029				M-9
030		弥生土器片		M-9
031				M-9
032		弥生土器片		M-9
033				M-9
034		弥生土器片		M-9
035		弥生土器片		M-9
036		弥生土器片		M-9
037	091SX-037	台付鉢		M-8・9
038		弥生土器片		M-8
039		弥生土器片		M-7
040		弥生土器片		M-8
041				M-9
042		須恵器口縁部片、弥生土器片		M-9
043	091SX-043	須恵器蓋口縁部片、土師器片、弥生土器片		M-9
044		弥生土器片		L-6
045				L・M-6
046		弥生土器片		M-6
047		弥生土器片		M-6
048				M-8
049		弥生土器片		M-6
050		弥生土器片		M-8
051		弥生土器片		M-9
052		須恵器片、弥生土器片		M-8
053		弥生土器片		M-10



第177図　SH001遺構実測図（1/60）

しており、この点から住居機能停止直後に埋め戻された土層であると考えられる。

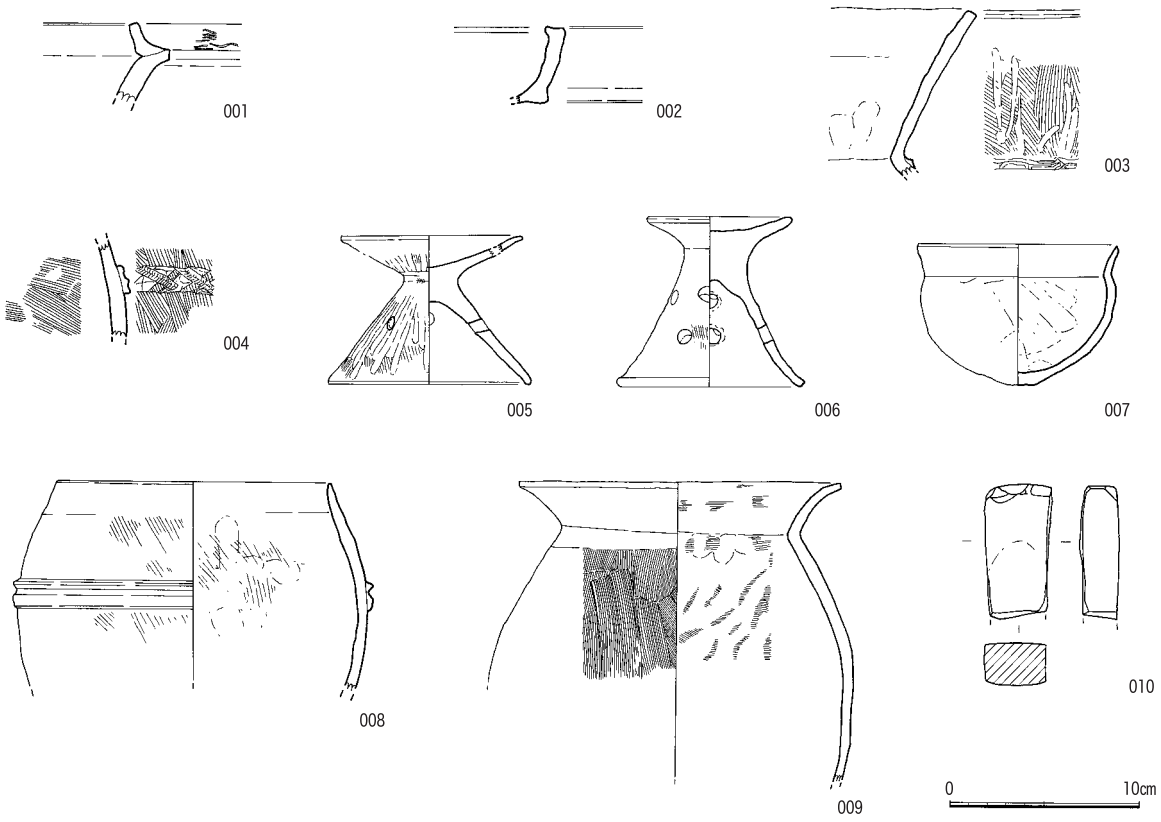
出土遺物（第178図）

出土遺物は大半が住居埋土からの出土であり、出土状況から明確に住居機能時のものと判断されるものはない。出土資料には壺、甕、鉢、小型器台、砥石等がある。

001 は複合口縁壺の口縁部破片である。外反気味の口縁部に短い低平なタガが貼付され、外器面には櫛描波状文が施文される。淡黄褐色を呈し、内外器面ともナデにより調整される。

002 は二重口縁壺の口縁部破片と考えられる資料である。口縁部は内湾気味に外方へ立ちあがり、口縁端部は平坦面を形成し、内面へ若干張り出す。内外面とも淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒等を内包する。器面には丁寧なヨコナデが実施される。本資料のような器形的特徴を有するものは在地系譜の中に求めることはできず、外来系のものと考えられる。住居埋土の最上層（第Ⅰ層）中から出土した。

003 は口頸部に一条の貼付突帯をもつ壺口縁部破片である。締まった頸部から直線的に外方へ延びる口縁部を有する。内外面とも淡茶褐色を呈する。内器面にはナデが施され、外器面はタテ方向のハケ目調整の後、ヘラミガキが施される。



第178図　SH001出土遺物実測図（1/4）

004 は壺胴部破片である。扁平な突帯上にハケ目工具と同一と思われるヘラ状の工具による刺突による格子状の刻目が施される。いわゆるベルト状突帯と称されるものである。内外器面ともハケ目により調整される。002と同様に第Ⅰ層から出土した。

005・006は小型器台である。

005は淡茶褐色を呈する小型器台である。復元口径9.8cm、底径10.8cmを測る。第Ⅲ層からの出土であり、出土層位から住居機能時に最も近い時期の所産である可能性が高い遺物である。脚部に穿たれた円孔は006と同じく外側から内側へと穿孔される。胎土には精製土が使用され、角閃石、長石、石英、金雲母、橙色粒子を含んでいる。内器面はナデにより調整され、外器面はタテ方向のハケ目調整の後にヘラミガキが施される。

006 は復元口径7.4cm、器高9.0cm、底径10.0cmを測る。脚部には不規則に８ヶの円孔が穿たれる。いずれも外方から穿孔されたものである。内面色調は淡黄褐色～黒灰色を、外面は淡赤橙色を呈する。胎土中には角閃石、石英、長石、金雲母粒等を内包する。器面調整は内器面が不定方向のナデにより調整され、外器面がハケ目の後、ナデにより仕上げられる。

007は小型の鉢形土器である。口径10.4cm、器高7.4cmを測る。内器面はヨコナデと工具ナデにより平滑に仕上げられ、外器面はヨコナデとミガキ風ナデにより丁寧に仕上げられている。底部には小さな平底が痕跡的に残る。第Ⅱ層からの出土である。

008 は直立する素口縁をもつ鉢形土器である。形態的に脚台が付く可能性も考えられる。口縁部は舌

状に仕上げられ、胴部の最大径の位置には突帯が貼付される。突帯は見かけの上では二条に見えるが、１本の幅広の粘土帯を貼り付け、その中央に沈線状の窪みをつくり、見かけ上の二条突帯を形成する。胎土中には角閃石、長石粒を内包し淡黄褐色を呈する。第Ⅰ層から出土した。

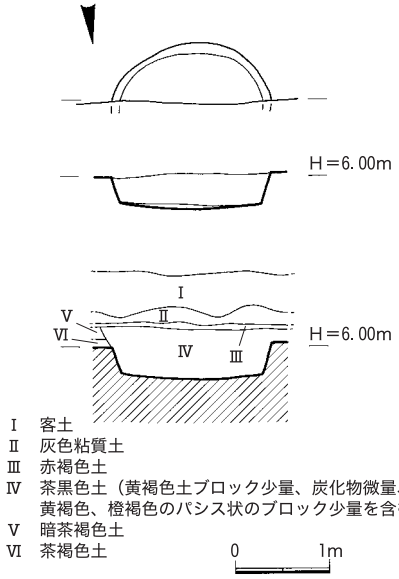
009は第Ⅰ層から出土した甕形土器である。口径17.0㎝、復元される胴部最大径18.6㎝を測る。内器面はヨコ方向のハケ目の後、ナデ調整により仕上げられ、外器面はタテ方向のハケ目により調整される。明茶褐色を呈している。

010は現存長7.1㎝、幅3.2㎝、厚さ2.2㎝を測る砂岩製の砥石である。色調は淡黄白色を呈し、現存重量85.8ｇを測る。

その他の遺構（ＳＸ）

091SX037（第179図）

調査区の北壁の中央付近で検出した土坑である。半分以上が調査区外に展開しており、全体様相は不明であるが、検出部分の形状から径1.5～2.0ｍを測る円形になるものと推定される。現存深度0.4ｍを測り、遺構内堆積埋土は黄褐色土ブロックを含む茶黒色土の単一土層により構成される。図化可能な遺物は出土しておらず、遺構の帰属年代を明示できるだけの資料はない。調査区西側に位置する091SX003も同様の様相を呈しており、同種の遺構である可能性を指摘できる。



第179図　SX037遺構実測図（1/80）

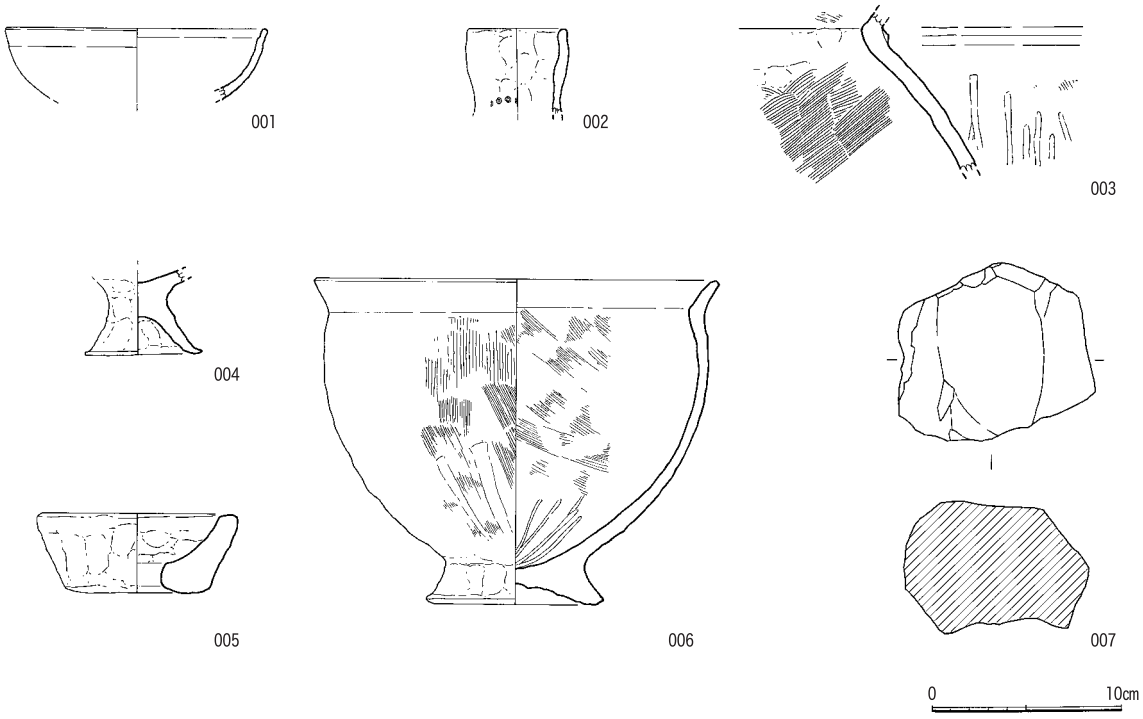
091SX043他からの出土遺物

調査区内には上述の遺構と混在し、多数の柱穴が点在する。これらの柱穴に関して今回の調査範囲の中で建物等として完結する規則的な配列を認めることはできなかった。各柱穴から出土する遺物は少なく、厳密な所産時期の特定は困難であるが、唯一091SX043から時期特定の可能な須恵器蓋微細破片が出土しており、時期推定の参考となる。出土した須恵器蓋は陶邑編年のⅢ型式２～３段階に相当するものであり、７世紀後半の年代観を付与できる資料である。他の柱穴からも形状は不明瞭ながら同種の須恵器破片が出土しており、柱穴群の構成時期の一定点を示唆している。

表土出土遺物（第180図）

調査を実施するにあたり、遺構検出時、あるいは表土除去段階に出土した遺物がある。帰属遺構を明らかにすることはできないが、遺跡の時期的な様相把握等に有効と考え、図示の可能なものについて、第180図に掲載した。

001 は土師器坏の口縁部破片である。口縁部内面に段状の沈線を一条巡らし、外面は強いヨコナデ調整により凹線状に若干窪む。内外面とも淡茶褐色を呈し、回転ナデにより仕上げられる。８世紀中頃に比定されるものである。



第180図　表土出土遺物実測図（1/4）

002 は長頸壺の口縁部片である。淡黄白色を呈し、復元口径5.0㎝を測る。仕上げはあまり丁寧ではなく、器表面には指頭痕が明瞭に残る。また、頸部付近には竹管状工具による刺突文が施文される。

003 は壺肩部の破片である。頸部に一条の三角突帯を貼付する。内器面はハケ目により調整され、外器面はナデ調整後タテ方向のミガキが部分的に施される。

004は底部径5.6㎝を測る焼塩壺の脚台部片である。暗赤褐色～赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。外面には指頭痕が明瞭に認められる。

005 は底部中央に円孔を有する土器である。一見すると甑を想定させる形状を示すが、具体的な用途等については不明である。内外器面ともに指頭痕が明瞭に残り、器面の調整は総じて雑である。胎土中には角閃石、石英、長石粒等の微粒を含む。

006 は口縁部から底部まで約２分の１が遺存する台付鉢である。外方にふんばり気味に開く低い脚部に胴の張る鉢部が接続する。口縁部は直立気味に「く」字形に立ち上がり、内面の稜線はそれほどシャープではない。外面の器面調整はタテ方向のハケ目を基本とし、体部下半にヘラによるケズリ調整が施される。内器面は斜方向のハケ目により調整され、内底部付近に放射状のヘラミガキが施される。

007は凝灰岩質砂岩製の砥石であり、現存重量605.0ｇを測る。

（4）小　結

第91次調査は、区画街路建設に伴う小規模な調査であったが、調査の結果、弥生時代終末から古墳時代初頭の集落の一角を検出した。調査地点は第90・92次調査の南側150ｍに位置しており、第90・92次調査で確認されている集落跡の延長部分にあたると考えられる。

下郡遺跡群での弥生時代終末期から古墳時代初頭の集落跡について、これまでの調査によって２地点（Ｅ区・Ｈ区）で環濠が確認されており、第91次調査区はこのふたつの環濠集落のほぼ中間に位置している。環濠の廃絶に関しては、Ｈ区よりもＥ区の環濠のほうが若干先行するようであるが、基本的には、庄内式新段階～布留式最古段階頃と想定される。その後の段階においては、住居跡は広範に、しかも散在的に分布するようになる。

こういった状況に対して、第91次調査地点が立地する周辺エリアについては、同じように弥生時代終末期から集落が継続するものの、既往の調査では他の２地点（Ｅ区・Ｈ区）で認められるような環濠の存在は確認されていない。加えて、他集落が庄内式新段階～布留式最古段階頃に検出遺構密度等に画期が看取されるのに対して、第91次調査地点周辺に展開する集落は、確実に一定量の密度をもって布留式古段階まで集落が継続するという特徴を有している。このような違いは、第91次調査地点周辺の集落と環濠を有する他のふたつの集落（Ｅ区・Ｈ区）との集落自体の質的な差異を反映している可能性があり、極めて興味深い事象といえる。

ところで、第91次調査で検出した住居跡は１基のみであったが、破片資料ながら比較的まとまった器種組成を示しており、ある程度の時期比定が可能である。本稿では、091SH001の所産時期の検討をもって第91次調査のまとめにかえたい。

091SH001所産時期

上記の出土遺物から推定される091SH001の帰属年代を検討する。上述のように091SH001は、機能停止直後に埋め戻され、その後掘り返しが実施され、再び埋め戻されていた状況が堆積埋土の状況から想定された。また、二次的な掘り返しに関しては、その範囲を平面的に確認することはできなかったが、南北・東西方向の土層観察ベルトから推定される掘削範囲は 091SH001 のプラン内におさまることから、091SH001の痕跡が残っている状況の中で掘り返された可能性が高いと考えられる。両者の時間的な距離は不明であるが、それぞれの埋土から出土する土器資料には大きな型式差は認められず、それほど大きなものでなかったと推定される。

第Ⅳ層埋土内から出土のベルト状突帯と呼ばれる壺胴部突帯（004）があり、これが大分地域の弥生時代後期編年のⅣ期（終末）以降に出現するものである点や、唯一第Ⅶ層から出土した小型器台（005）の存在などから、091SH001は古墳時代初頭頃の所産となる可能性が高いと考えられる。

第38表　遺物観察表①

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
091SH001-001	178	弥生土器	壺	石英 角閃石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	複合口縁壺
091SH001-002	178	弥生土器	壺	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	二重口縁壺
091SH001-003	178	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケ目後 ミガキ					口縁部片	ハケ目（6本/cm）
091SH001-004	178	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	暗黄褐色	暗黄褐色	ハケ目	ハケ目					胴部片	ハケ目（内面約9本　外面約10/cm）
091SH001-005	178	弥生土器	小型器台	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ナデ後ミガキ ハケ目後 ミガキ	(9.8)	7.9		0.8	口縁部～脚部	精製土 ハケ目（約6本・6～7本/cm） 穿孔3ヶ所
091SH001-006	178	弥生土器	小型器台	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡黄褐色 ～黒灰色	淡赤橙色	ナデ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(7.4)	9.0		10.0	口縁部～脚部	ハケ目（8～9本/cm） 穿孔8ヶ所
091SH001-007	178	弥生土器	小型鉢	石英 角閃石 長石 橙色粒子	赤橙色	淡赤橙色 ～淡黄褐色	ヨコナデ 工具ナデ	ヨコナデ ミガキ風 ナデ	10.4	7.4			口縁部～底部	外面黒斑
091SH001-008	178	弥生土器		角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	指オサエ ハケナデ	ヨコナデ ハケナデ	14.4		19.0		口縁部～胴部	内外面赤色塗彩
091SH001-009	178	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	明茶褐色	明茶褐色	ヨコナデ 指オサエ ハケ目後 ナデ ハケナデ	ハケ目 ヨコナデ	17.0		(18.6)		口縁部～胴部	ハケ目（10本/cm）
091SH001-010	178	石器												別表
091SZ000-001	180	土師器	坏	角閃石 長石 砂粒	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ナデ	ヨコナデ 回転ナデ	(13.8)				口縁部	
091SZ000-002	180	弥生土器	壺	角閃石 長石	淡黄白色	淡黄白色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	(5.0)				口縁部	長頸壺
091SZ000-003	180	弥生土器	壺	角閃石 橙色粒子 金雲母	淡赤黄色	淡赤褐色	ハケ目 指オサエ	ナデ ヨコナデ ミガキ					肩部片	ハケ目（7～8本/cm）
091SZ000-004	180	製塩土器	焼塩壺	角閃石 長石	暗赤褐色 ～赤褐色	暗赤褐色 ～赤褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ				5.6	脚台部	
091SZ000-005	180	弥生土器	不明	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡赤褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	(10.0)	4.2		(7.6)	口縁部～底部	
091SZ000-006	180	弥生土器	台付鉢	角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	赤褐色	淡赤褐色	ハケ目 ナデ ヨコナデ ミガキ	ハケ目 ヨコナデ 指オサエ ケズリ	21.0	17.2		9.4	口縁部～底部	全体1/2　　ハケ目 （内面9～11本　外面6～7・9～11本/cm）
091SZ000-007	180	石器												別表

第39表　石器観察表

遺物番号	挿図番号	器種	石材	法量（cm）				備考
		種類		長さ	幅	厚さ	重さ(g)	
091SH001-010	178	砥石	砂岩	(7.1)	3.2	2.2	(85.8)	
091SZ000-007	180	砥石	凝灰岩質砂岩				(605.0)	

第３節　下郡遺跡群第92次調査

（１）はじめに

調査地は大分市大字下郡字辻2872―１番地に所在し、ほぼ併行して調査をおこなった下郡遺跡群第90次調査地点とは、南北道路を挟み東接する位置にあたる。調査は平成９年（1997）５月20日～８月３日まで実施し、調査は坪根伸也、中西武尚、田淵芳則、大藤弥生が担当した。調査対象面積は約850㎡である。

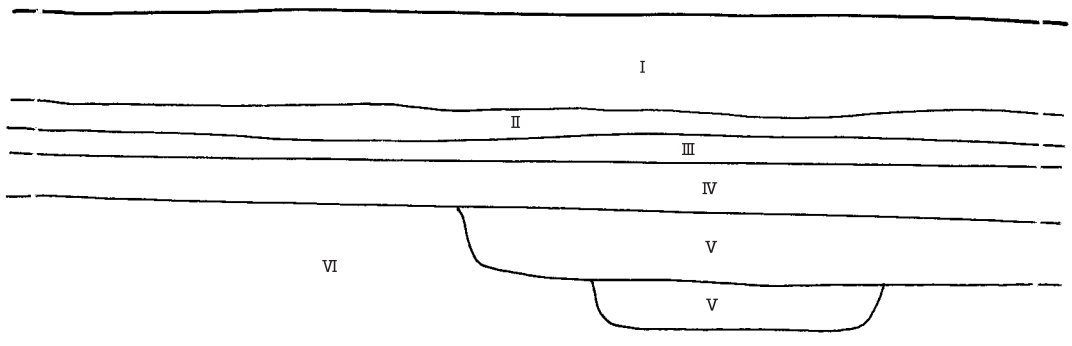
現地調査においては、(有) 埋蔵文化財サポートシステムに調査補助業務を委託した他、全体図の作成には（株）九州航空に写真測量データからの図化作成を委託した。

調査原因は、第90次調査と同様に都市計画街路庄の原・佐野線街路築造に伴うものであり、一連の調査である。

（２）土　層

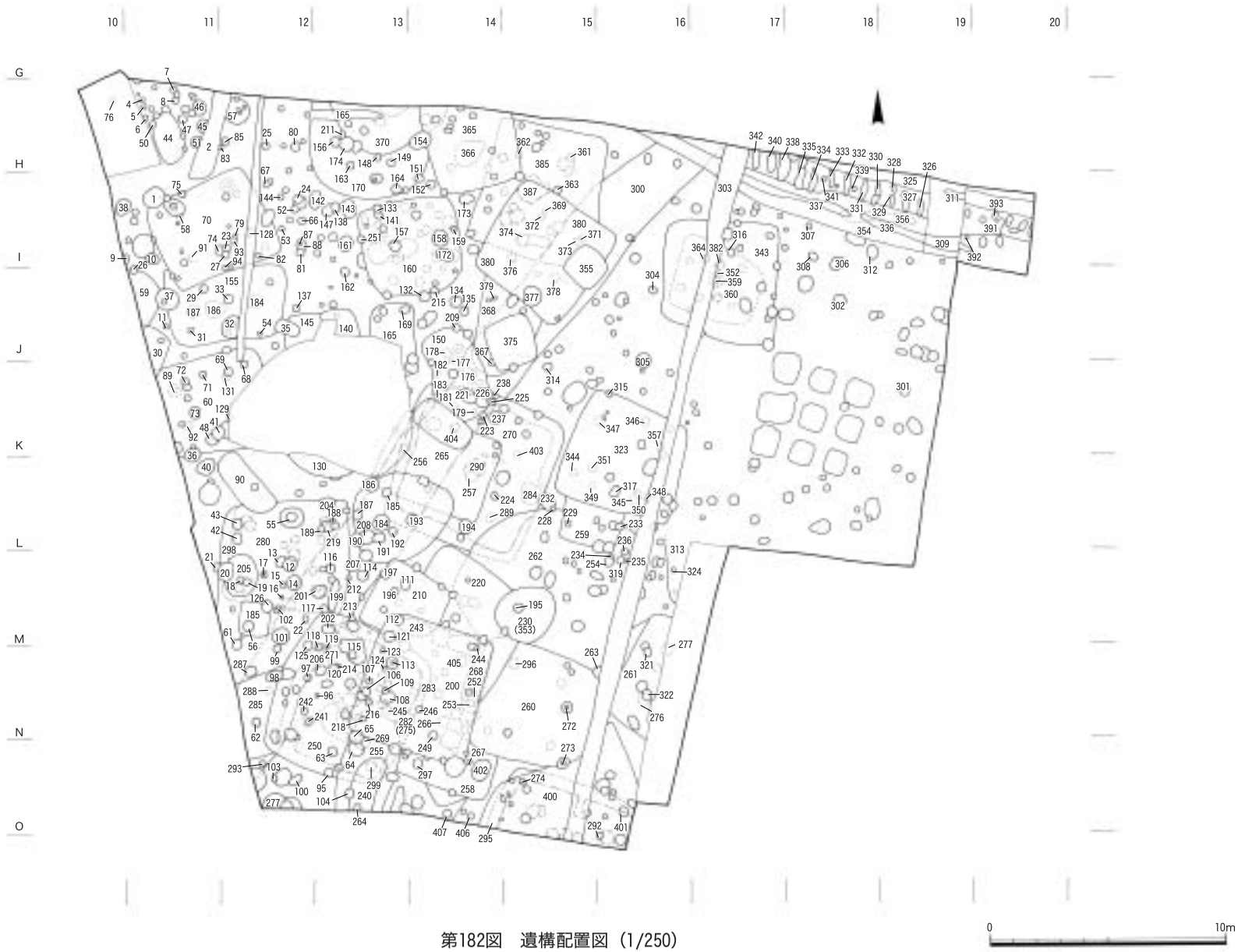
調査対象地の東側にはＪＲ豊肥線が走り、調査着手前の対象地の大部分は宅地として利用されていた。標高6.5mを測り、対象地全面には約0.2～0.3mの厚さのバラスを含む客土が持ち込まれており、この客土を除去すると約0.05～0.1mの層厚を示す灰色粘質土の水田耕作土が堆積している。さらにその下位には0.05m程度の水田基盤土（赤褐色土）があり、これを除去すると暗褐色土が現れる。標高約6.3mの地点である。本来であればこの暗褐色土上面で遺構を確認することができるのであるが、上位にある水田基盤土からの鉄分の沈下が著しく、結果として標高6.1ｍ付近の暗褐色土層中位において遺構の確認をおこなうことのできた事例が多い。暗褐色土は調査区内でも層厚は一定でなく、0.3～0.5m程度の厚さを測り、調査区東側に向かい厚くなっていく傾向を看取することができた。暗褐色土の下位には黄褐色土層が存在する。

調査にあたっては、暗褐色土の上面まで機械力による掘り下げをおこない、これより下位については人力による掘り下げと遺構検出を実施した。



Ⅰ　客土
Ⅱ　灰色粘質土（水田耕作土）
Ⅲ　赤褐色土、鉄分沈下多量（水田基盤土）
Ⅳ　暗褐色土
Ⅴ　遺構埋土
Ⅵ　基盤土層①（黄茶褐色土）

第181図　基本土層断面模式図



第182図　遺構配置図（1/250）



第183図　全体遺構図（1/250）

第40表　遺構一覧表①

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
001		陶器片、磁器片、瓦質土器片、土器片		I-11
002	092SD-002	同安窯系青磁碗、白磁碗、龍泉窯系青磁碗、備前擂鉢、須恵器片、土師器片	15C ～	H－11・12
003	092SD-003	底部糸切り土師器小皿、須恵器溶着片（蓋他）	13C 中頃～後半	H-12
004		土師器坏片		H-11
005		土師器底部片	8C 中頃以降	H-11
006		土器片		H-11
007		須恵器胴部片、土師器片		H-11
008		弥生土器片		H-11
009		弥生土器片		I-11
010		甕片、弥生土器片		I-11
011		弥生土器片		J-11
012		土師器坏片、土器片		M-12
013		土器片		M-12
014		土器片		M-12
015				M-12
016				M-12
017				M-12
018				M-12
019		弥生土器片		M-12
020	092SX-020	白磁、土師器底部糸切坏、土器片		M-12
021	092SX-021	土師器底部糸切坏		M-11
022				M-12
023		土師器坏口縁部片	8C 代	I-12
024	092SX-024	須恵器蓋片、須恵器胴部片、須恵器片、土師器高台部片、土師器胴部片、土師器坏片、土師器口縁部片、土師器片、甑把手、土器片	8C 代	H・I -12・13
025	092SX-025			
026				J-11
027	092SX-027	土器片		I-12
028	欠番			H-12
029				J-11
030		土師器片		J-11
031		弥生土器片		J-11
032		土器片		J-12
033		土師器片		J-12
034		土師器片		J-12
035		須恵器片、土師器片、甑把手他	現代	J-12
036		須恵器口縁部片、土師器坏片、甕口縁部片、弥生土器片	8C 後半～	K-11
037				J-11
038				I-10
039				
040		須恵器坏片、土師器片	8C 代～	L-11
041	092SX-041	土師器底部片、土師器片、土師質土器片、弥生底部片	8C 代～	K-11
042				L-12
043		弥生土器片		L-12
044		土器片		H-11
045				H-11
046		土師器片		H-11
047		甕	8C 後半～	H-11
048				K-11
049	欠番			
050		土師器坏口縁部片		H-11
051		土師器蓋片、弥生土器片、甕口縁部片	8C 代～	H-11
052		須恵器蓋片、土師器坏底部片	8C 代～	I-12
053		土器片		I-12
054		須恵器坏片、土師器坏片	8C 代～	J-12
055		弥生土器片、土器片		L-12
056		弥生土器片		M-12

第41表　遺構一覧表②

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
057				H-12
058				I-11
059		土器片		J-11
060	092SH-060	下城式甕口縁部片、弥生底部片		K-11
061		土師器蓋、土師器坏片、甑把手、鉄製品	8C後半～	M-12
062		須恵器底部片	8C代～	N-12
063		須恵器片、土師器口縁部片、土師器底部片	8C代～	O-13
064		土師器片、甕口縁部片	8C代～	O-13
065		須恵器坏片、須恵器片、土師器底部片、土師器片、大型土師器脚部片	8C代～	O-13
066		須恵器坏身	6C後半～	I-12
067		土器片		I-12
068				K-12
069				K-12
070	092SH-070	須恵器坏口縁部片、土器片、土師器坏	7C後半～	I-11･12
071		土器片		K-11
072		土器片		K-11
073				K-11
074		土師器口縁部片、土師器片	8C代～	I-12
075		須恵器蓋片	7C後半～	I-11
076		須恵器胴部片、土師器蓋片	8C代	H-10
077		土師器坏口縁部片	8C中頃・後半以降	I-12
078	欠番			
079		土器片		I-12
080	092SX-080			H-12
081	092SX-081			I-12
082	092SX-082			I-12
083	欠番			
084	欠番			
085	092SX-085			H-12
086	欠番			
087		土師器片		I-12
088		土師器坏底部片、土師器片	8C代～	I-12
089				K-11
090	092SX-090			L-12
091		土器片		I-11
092				K-11
093				I-12
094		土器片		I-12
095		須恵器片、土師器高台片	8C代～	O-13
096		土師器片		N-13
097		土師器口縁部片、甕口縁部付近	8C代～	N-12
098		須恵器蓋片、土師器片		N-12
099		土師器片		N-12
100	092SX-100	土師器坏片、土師器片、圏足硯脚部、大形底部片	8C代～	O-12
101		須恵器片、土師器片		M-12
102		土師器片		M-12
103		土師器坏片、弥生土器片		O-12
104		須恵器片、土師器片、大形土器片		O-13
105		土師器片		N-13
106		土師器片		N-13
107		甕口縁部片		N-13
108		薄手甕口縁部片		N-13
109		須恵器底部片、土器片		N-13
110		須恵器、土師質把手、土師器片		O-12
111	092SB-111	須恵器蓋片、須恵器片、土師器坏片、土師器口縁部片、土師器片、甕口縁部片、甕片、土器片	8C代中頃～後半	M-13
112	092SX-112			M-13
113	092SX-113			M-13

第42表　遺構一覧表③

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
114	092SX-114			M-13
115	092SX-115			N-13
116	092SX-116			M-13
117	092SX-117			M-13
118	092SX-118			N-13
119		土師器片		N-13
120		土器片		N-13
121		須恵器片、大型土師器片		M-13
122		須恵器、土師器片		M-13
123		須恵器胴部片、土師器片		N-13
124		土器片		N-13
125		弥生複合口縁部、土器片		N-12
126		土師器片		M-12
127				I-12
128		弥生後期甕口縁部片		I-12
129				K-12
130	092SX-130	須恵器坏、須恵器甕片、蓋片、土師器坏片、豊後大分形甑片、石製紡錘車（片岩系）	8C 末～	L-12・13
131				K-12
132				J-14
133		弥生土器片		I-13
134				J-14
135		土器片		J-14
136				J-14
137		須恵器口縁部片、土師器蓋、坏片	8C 代～	J-12
138		土器片		I-13
139	欠番			
140	092SX-140	土師器高台付坏、甕	8C 後半	J-13
141				I-13
142				I-12
143				I-13
144		土師器坏底部付近		I-12
145	092SX-145	長頸壺、甑把手、土師器片	7C 末～ 8C 初	J-12
146	欠番			
147		下城式甕		I-13
148				H-13
149				H-13
150	092SX-150	須恵器坏、大形須恵器底部片、土師器坏、蓋、高坏脚、企救型甕、滑石製紡錘車	8C 後半	J-14
151				I-14
152				I-14
153				I-14
154		土器片		H-14
155	092SH-155	弥生底部片		J-11
156				H-13
157		須恵器、土器片		I-13
158	092SX-158	土師器坏片、土師器鉢、下城式甕、東北部九州系甕		I-14
159				I-14
160	092SH-160	複合口縁壺、弥生壺頸部片、弥生土器片	弥生終末	I-13
161		甕片、土器片、土錘		I-13
162		土器片		J-13
163				H-13
164		土器片		H-13
165				H･J-13
166				J-14
167				J-14
168		土器片		K-14
169		土器片		J-13
170				H-13・14

第43表　遺構一覧表④

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
171				I-14
172		下城式甕、弥生土器片		I-14
173	092SX-173			I-14
174				H-13
175	欠番			
176		東北部九州系甕、弥生土器片		K-14
177				K-14
178		土器片		J-14
179		土器片		K-14
180	欠番			
181		土器片		K-14
182				K-14
183				K-14
184		下城式甕片、土器片		J-12
185		弥生壺頸部片		M-12
186		土器片		J-11
187		土器片		J-11
188		須恵器片		L-13
189		土器片		L-13
190		須恵器坏片、下城式甕、弥生土器片		L-13
191		須恵器片、土器片、鳥骨片		L-13
192		東北部九州系甕、弥生壺頸部片、弥生土器片		L-13
193		土師器坏片、甕口縁部片		L-14
194		弥生土器片		L-14
195	092SX-195	土器片		M-15
196		須恵器坏片、土師器坏片	8C 代～	M-13
197		土器片		L-13
198	欠番			
199		土器片		M-13
200	092SH-200	須恵器蓋片、須恵器片、土師器片		M・N-13・14
201		土器片		M-13
202		弥生土器片		M-13
203		須恵器片、大形須恵器片、土器片	7C 末～	N-13
204				L-13
205	092SX-205		弥生終末～	M-12
206		弥生土器片、土器片		N-13
207		土器片、甕		M-13
208		甕口縁部片、下城式甕片、壺頸部片、壺片		L-13
209		土器片		J-14
210		須恵器坏片、須恵器片		M-13
211		土器片		H-13
212		土器片		M-13
213		薄手須恵器片、土器片		M-13
214		土器片		N-13
215		須恵器		I-14
216		土師器坏片、土器片		N-13
217		高坏片		N-13
218		土師器片、土器片		N-13
219		土器片		L-13
220		須恵器片、複合口縁壺片		M-14
221		高坏片、弥生土器片		K-14
222		土器片		K-14
223		土器片		K-14
224		弥生土器片		L-14
225		土器片		K-14
226		土器片		K-14
227		須恵器坏片、土器片		O-12
228		土器片		L-15
229		土器片		L-15

第44表　遺構一覧表⑤

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
230	092SX-230	須恵器坏片、須恵器胴部片、土師器坏、弥生土器片	8C 代～	M-15
231		土器片		H-13
232		土器片		L-15
233		土器片		L-16
234		土器片		M-16
235		土器片		M-16
236		土器片		M-16
237		弥生土器片、土器片		K-14
238		土器片		K-14
239		土器片		I-14
240	092SX-240	須恵器高坏、土師器坏、甕口縁部片、甑片	7C 後半～	O-13
241		弥生土器片		N-12
242		土器片		N-12
243		土器片		M-13・14
244		須恵器		N-14
245	092SH-245	土師器高坏		N-13
246		須恵器、土器片		N-14
247	欠番			
248	欠番			
249		土師器片、土器片		N-14
250	092SH-250	布留式（古）甕、 高坏、複合口縁壺	4C 前	N・O-12・13
251		土器片		I-13
252		土器片	7C 中頃～後半	N-14・15
253		土器片		N-14
254		土器片		M-16
255		直口壺、高坏、薄手甕口縁部片		N・O-13
256		甕口縁部片		K-13
257		弥生複合口縁部片		K-14
258	092SX-258	土器片		O-14
259		東北部九州系甕、土器片		L-15
260	092SH-260	須恵器蓋、須恵器片、土師器坏		N・O-14・15
261	092SH-261	須恵器蓋片、須恵器胴部片、土錘	8C 代	N-16
262		須恵器高坏、土器片		M-15
263		土師器蓋片、京都系土師器		N-15
264		土器片		O-13
265	092SH-265	甕口縁部片、高坏脚部、薄手甕口縁部片		L-14
266		土器片		N-14
267		須恵器片、下城式甕、土器片		O-14
268		土器片		N-14・15
269		薄手甕胴部片		O-13
270	092SH-270	布留式甕、鉄製品	4C 前	K・L-14・15
271		甕胴部片		N-13
272		柱痕あり		N-15
273		柱痕あり		O-15
274		土器片		O-15
275		土器片		N-13・14
276		土器片		N-16
277		須恵器胴部片		N-16
278	092SX-278	布留式甕、複合口縁部片		N-13
279		薄手土器片		
280	092SH-280	高坏、薄手甕、ベルト状突帯、小型台付鉢	弥生終末	L・M-12
281				N-13
282	欠番			
283		土器片	4C 前	N-14
284	092SX-284	複合口縁部片		L-15
285	092SH-285	弥生壺口縁部片	弥生後期中葉から後葉	N-12
286				M-12
287		土器片		N-12
288		土器片		N-12

第45表　遺構一覧表⑥

S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
289		下城式甕、土器片		L-14
290	092SX-290	土器片		L-14
291		土器片		L-12
292		土器片		O-16
293		弥生土器片		O-12
294		土師器片		O-13
295	092SX-295	須恵器高坏片、小型丸底壺		O-14
296		土師器片、土器片		N-15
297		土器片		O-14
298				L・M-12
299	092SX-299	小型丸底壺		O-13
300	092SD-300			I-16
301				K-19
302				J-18
303	092SD-303	同安窯系青磁片、京都系土師器皿		I-17
304				J-16
305				K-16
306		須恵器 土師器坏		J-18
307		土師器蓋		I-18
308		須恵器片、土器片		I-18
309		須恵器片、土師器片		I-19
310	092SF-310		8C 中頃～ 9C 代	H ～ J-16 ～ 20
311		土師器片		I-19
312				L-16
313		須恵器片、胴部片		M-16
314		土器片		K-15
315		須恵器片		K-16
316		高坏		I-17
317		土師器坏口縁部、土師器片		L-16
318	欠番			
319		須恵器蓋		M-16
320	欠番			
321		土師器		N-16
322				N-16
323	092SH-323	須恵器片		K・L-15・16
324				M-16
325	092SX-325	土師器、 土師器蓋		H・I-18・19
326	092SX-326	土師器片、092SF310 の連続土坑		I-19
327	092SX-327	092SF310 の連続土坑		I-19
328	092SX-328	土器片、092SF310 の連続土坑		I-19
329	092SX-329	092SF310 の連続土坑		I-19
330	092SX-330	土師質甕、092SF310 の連続土坑		I-18・19
331	092SX-331	須恵器片、092SF310 の連続土坑		I-18
332	092SX-332	弥生底部、092SF310 の連続土坑		I-18
333	092SX-333	土師器片、092SF310 の連続土坑		I-18
334	092SX-334	土師器片、092SF310 の連続土坑		I-18
335	092SX-335	土器片、092SF310 の連続土坑		H・I-18
336	092SX-336	須恵器坏、土師器蓋		I-18・19
337	092SX-337	土師器、壺		H・I-16 ～ 18
338	092SX-338	092SF310 の連続土坑		H・I-17・18
339	092SX-339	092SF310 の連続土坑		I-18
340	092SX-340	092SF310 の連続土坑		H-17
341	092SX-341	092SF310 の連続土坑		I-18
342	092SX-342	092SF310 の連続土坑		H-17
343	092SH-343			I・J-17・18
344				L-15
345				L-16
346				K-16
347				K-16

第46表　遺構一覧表⑦

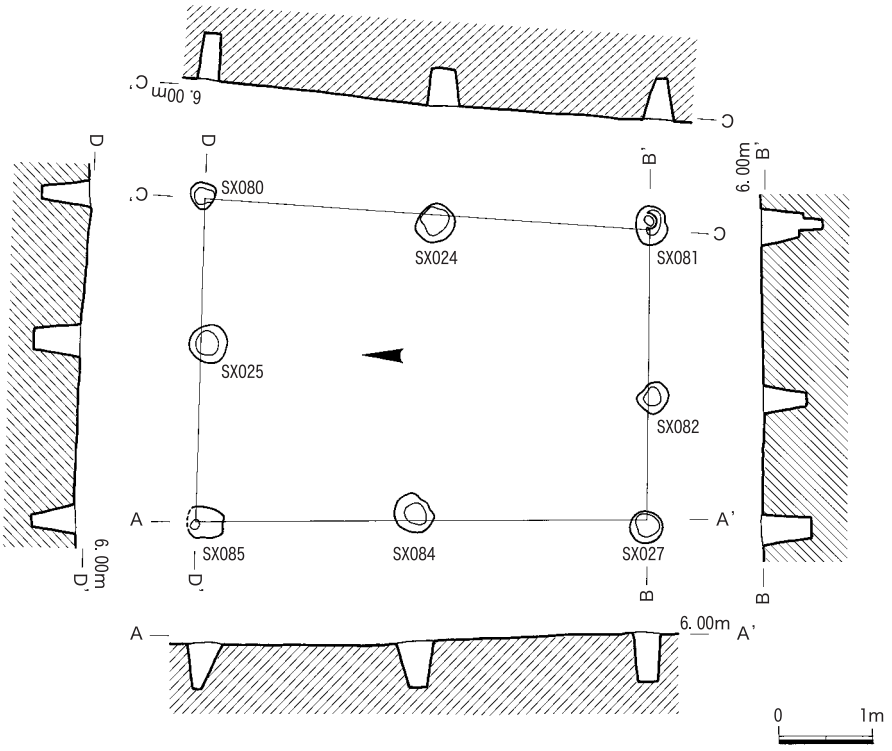
S番号	遺構番号	遺　物　・　そ　の　他	時　　期	地　　区
348				L-16
349				L-15
350				L-16
351				L-15
352				J-17
353	欠番			
354	092SX-354			H・I-16 ～ 19
355	092SE-355	白磁碗、同安窯系青磁皿、擂鉢、土師器坏	古代末～中世初	J-15・16
356				I-18・19
357				K-16
358		弥生土器片		
359	092SX-359	土師質甕		J-17
360	092SH-360			I・J-16・17
361		弥生土器片		I-15
362		弥生土器片		I-15
363		弥生土器片		I-15
364				I-17
365	092SH-365	複合口縁壺	弥生後期	I-14
366				I-14
367		弥生土器片		K-15
368		土師器片		K-15
369		弥生土器片		I・J-15
370	092SH-370	弥生土器甕、土師質甕	古墳後期	H-13・14
371		弥生土器片		J-15
372		弥生土器片		I-15
373		土器片		I・J・K-15・16
374				J-15
375		方形土坑		J・K-15
376		弥生土器片		I-15
377		須恵器片		J-15
378		土器片		J-15
379		土師器片		J-14
380	092SH-380	布留式甕		I・J-14 ～ 16
381				J-17
382		土器片		H-15
383				I-14
384		土器片		I-14
385	092SH-385	二重口縁壺		I・J-14・15
386				
387				I-15
388	092SX-388	092SH343 の主柱穴		J-17
389				
390	092SX-390		弥生後期	I-16
391	092SX-391	092SF310 の連続土坑		I-20
392		092SF310 の連続土坑		I-19
393	092SX-393			I-20
394	092SX-394	092SF310 の連続土坑		
395	092SX-395	092SF310 の連続土坑		
396				
397				
398				
399				
400	092SH-400	小型丸底壺、布留式甕口縁部片	4C 前	O-15・16
401		土器片		O-16
402		土器片		O-14
403		土器片		L-15
404		土器片		K-14
405		土器片	8C 初	N-14
406		土器片		O-14
407		土器片		O-14

（3）遺構と遺物

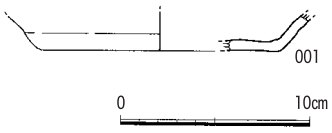
掘立柱建物跡（ＳＢ）

092SB110（092SX024・025・027・080～082・084・085）（第184図）

調査区北西角付近において検出した掘立柱建物跡である。２間×２間の南北棟であり、ほぼ真南北方向に構築されている。梁行3.44m、3.12m、桁行4.68mを測る。柱穴の深さは検出面から約0.6m前後のものが多い。身舎面積は15.4㎡である。



第184図　SB110平面・断面実測図（1/80）



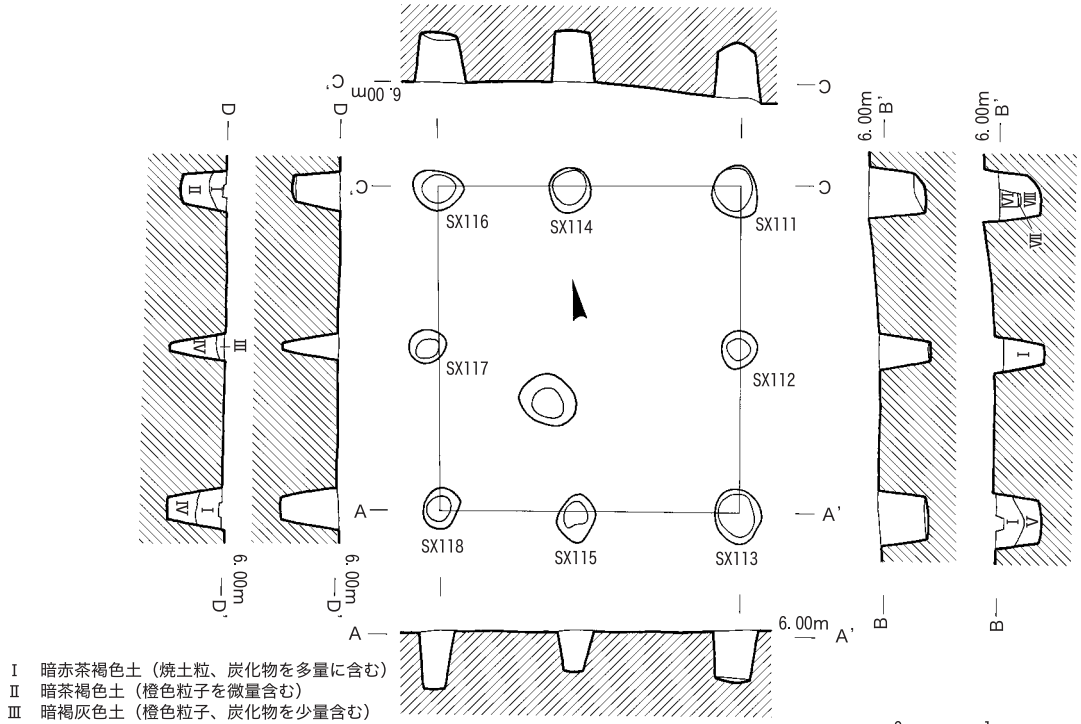
第185図　SB110出土遺物実測図（1/4）

出土遺物（第185図）

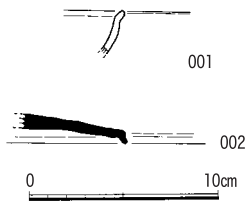
001は092SX025から出土した土師器皿あるいは坏の底部資料である。外面・淡茶褐色～淡茶白色、内面・淡茶褐色を呈し、角閃石、長石粒を含んでいる。復元底径12.6㎝を測り、底部は回転ヘラ切り離し後ナデにより調整されている。

092SB111（092SX111～118）（第186図）

調査区の南東エリアで確認した掘立柱建物跡である。２間×２間の規模を測る。規模は3.44m×3.12mと方形に近いプランを呈し、身舎面積 10.73 ㎡を測る。柱穴内の堆積埋土にはブロック土を多量に含むものが多く、検出した柱穴のいくつかには柱痕と思われるものも認められたが、大部分の柱穴は建物跡の機能停止後に人為的に埋め戻されたような状況を示している。



第186図　SB111遺構実測図（1/80）



第187図　SB111出土遺物
実測図（1/4）

出土遺物（第187図）

001 は092SX113の柱痕部から出土した土師器坏の口縁部資料である。口縁端部は外方へ折り曲げられ、内面端部には斜め方向の平坦面が形成される。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石粒を含む。器面の調整は内外器面ともナデによるものである。

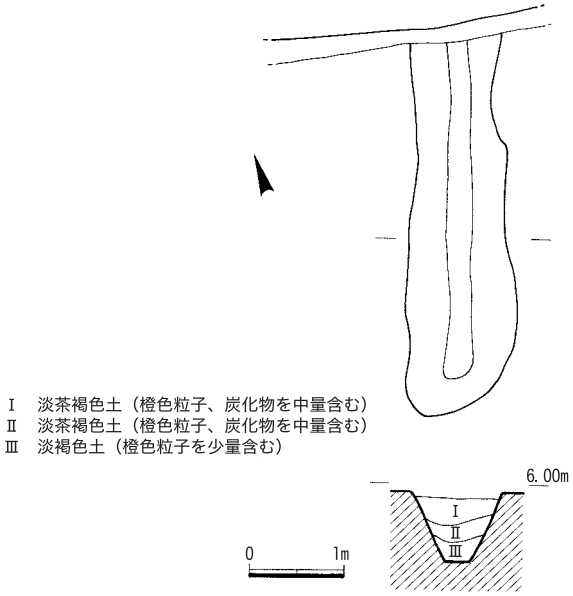
002 は須恵器蓋の端部資料であり、内外面とも淡灰色を呈している。端部形態は逆Ｌ字状に折り曲げたような形状をなしており、器面の調整は回転ナデによる。092SX116から出土している。

これらの資料はいずれも８世紀中頃から後半に帰属するものであり、092SB111の所産年代もほぼこの時期として大過ないものと考えられる。

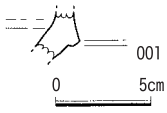
溝状遺構（ＳＤ）

092SD002（第188図）

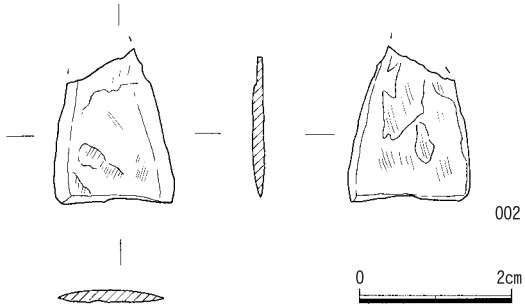
調査区の北西壁際で検出した溝状遺構である。連続はせず、調査区南壁から3.84mの地点で終息し、北側は調査区外にさらに展開する。幅約1.0ｍ、検出面から底面までの現存深度0.75ｍを測り、堆積埋土は３層に分層することが可能であり、堆積状況から自然堆積によるものと推定されるが最上部層のみ炭化物等を比較的多く含み、人為的な埋め戻しによる可能性が示唆される。



第188図　SD002平面・土層断面実測図（1/80）



第189図　SD002出土遺物実測図①（1/4）



第190図　SD002出土遺物実測図②（1/1）

出土遺物（第189・190図）

001 は備前焼擂鉢の口縁部付近の資料である。内外器面ともナデによる調整がおこなわれており、焼成は良好である。屈曲部の状況から、乗岡編年中世３期以降の所産であることが想定される。したがって、092SD002自身もこの擂鉢によって示される年代―15世紀以前に遡ることはなく、これ以降の所産であると考えられる。

002は結晶片岩製の磨製石鏃である。弥生時代中期後半前後に比定されるものであり、直接遺構の帰属年代を示す資料ではない。長軸長2.0㎝、短軸1.6㎝、現存重量0.8ｇを測る。

092SD003（第191図）

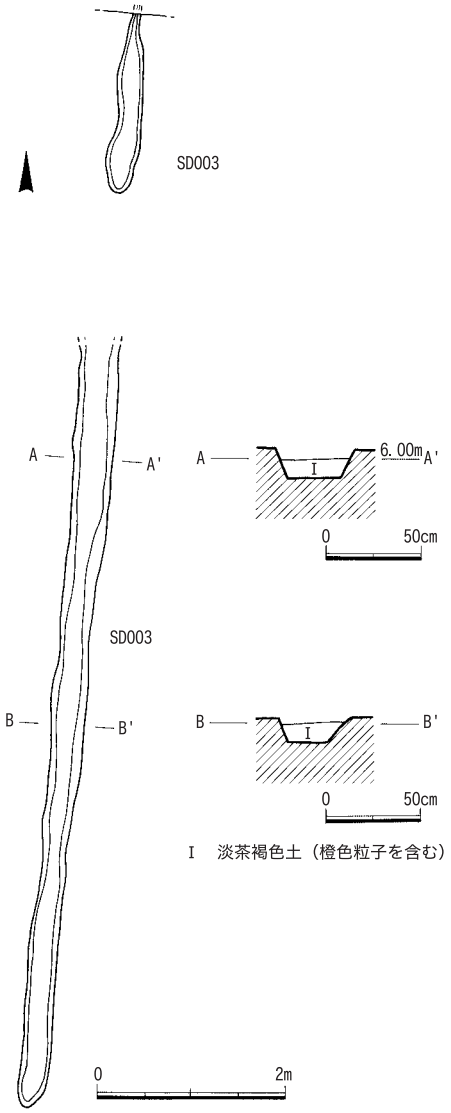
092SD002の東約1.8mの地点で確認した南北溝である。N-５°-Eの方向性を示す。約11.5mについて検出した。溝幅約0.45m、深さ約0.25mを測り断面形状はU字形を呈している。底面はフラットでなく、そのため、検出時にはかろうじて一連の溝状遺構と認識することができていたものが、完掘時には途切れた連続する長土抗のような様態を示すようになる。溝埋土は淡茶褐色土の単一土であり、土層状況から自然堆積により埋没したと考えられる。

出土遺物（第192図）

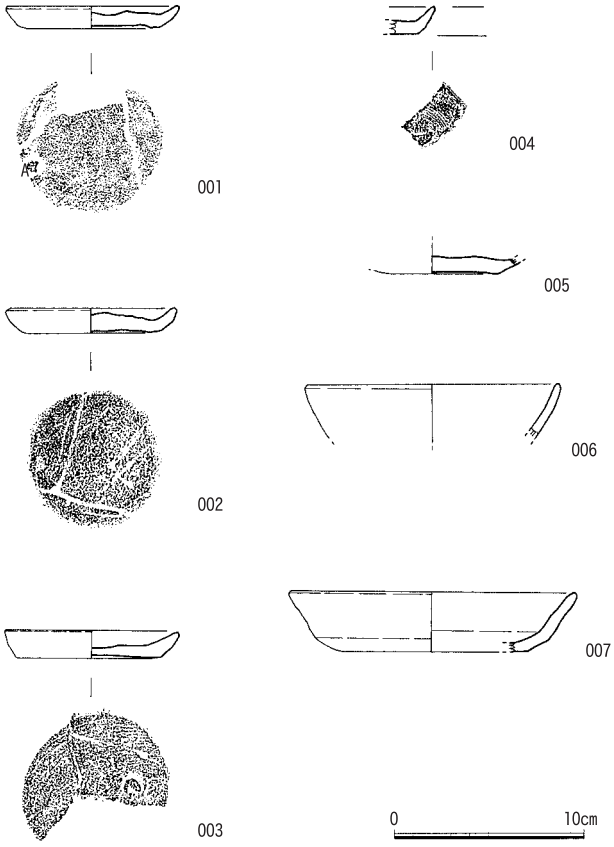
001はほぼ完存する土師器小皿である。口径9.3㎝、器高1.2㎝、底径7.1㎝を測る。外面・淡茶褐色、内面・淡褐色を呈している。胎土中には橙色粒子、白色粒子を含む。底部には糸による切り離し痕が残る。

002も同じく底部に糸切離し痕を残す土師器小皿であり、内外面とも茶褐色を呈している。口径9.0㎝、器高1.3㎝、底径7.0㎝を測る。器面の調整は内外器面ともナデによる。

003は復元口径9.1㎝、器高1.5㎝、復元底径7.2㎝を測る土師器小皿である。内外面とも淡茶褐色を呈



第191図　SD003平面・土層断面実測図
(1/80・1/40)



第192図　SD003出土遺物実測図（1/4）

している。底部には糸切離し痕を残している。

004は内外面とも茶褐色を呈する土師器小皿小片である。底部に糸切離し痕跡を残している。器面の調整はナデによる。

005 は土師器坏の底部資料であり、内外面とも淡茶褐色を呈する。表面が風化しており、底部の調整等については不明である。

006 は土師器坏の口縁部資料であり、内外面とも淡褐色を呈し、ナデによる器面調整がおこなわれる。復元口径13.6㎝を測る。

007は底部に糸切り離し痕を残す土師器坏資料である。復元口径15.4㎝、器高3.2㎝、復元底径10.2㎝を測る。内外面とも淡茶褐色を呈している。

092SD300（第193図）

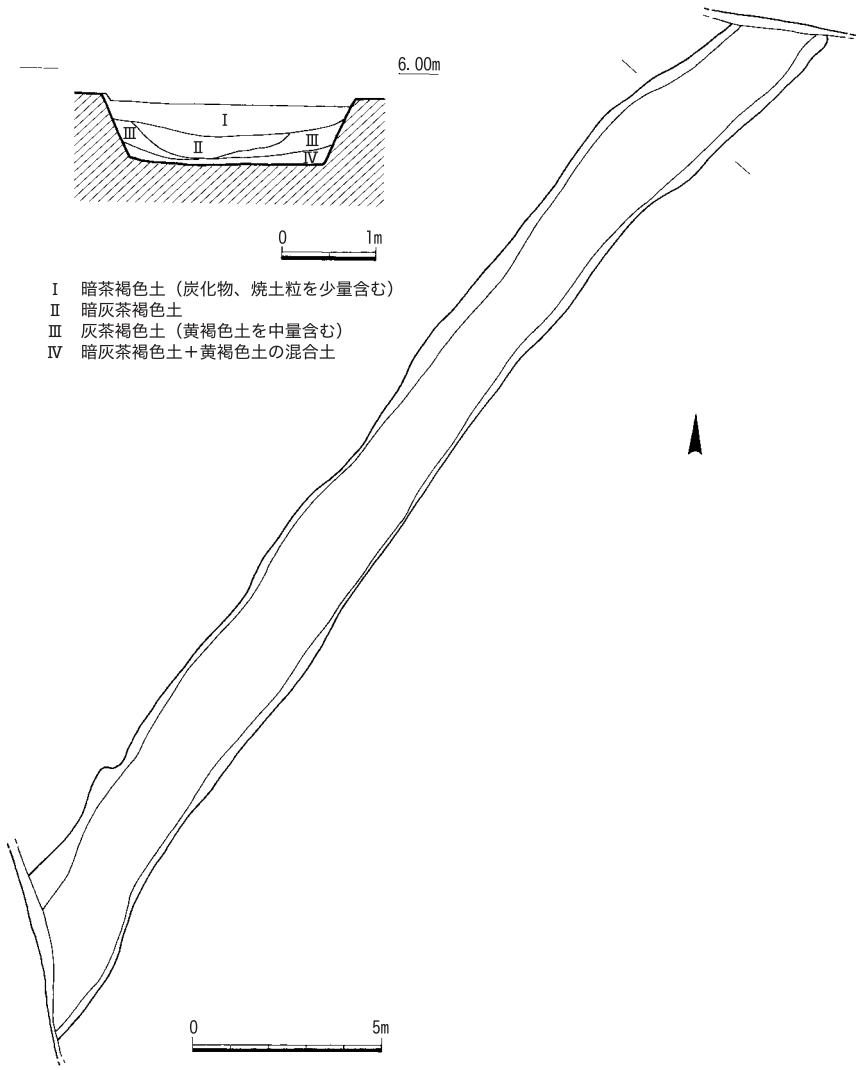
調査区を北東から南西方向、N-35°-Eの方向に掘削された溝状遺構である。約32mについて検出し、完掘した。溝の北端および南端はさらに調査区外に延びている。検出面での溝幅2.7mを測り、底面までの深さは0.76mである。断面形状は逆台形を呈し、底面はフラットに成形される。溝内堆積埋土は上位から第Ⅰ層暗茶褐色土層、第Ⅱ層暗灰茶褐色土層、第Ⅲ層灰茶褐色土層、第Ⅳ層暗灰茶褐色土＋黄褐色

土の混土層により構成される。堆積埋土の中にはラミナ状堆積物のような水性堆積物や滞水を示唆するような土層の堆積は確認できず、流水等があった痕跡は認められない。遺物は主として第Ⅰ層土から出土し、下位層からの出土量は相対的に極めて少ない。また、第Ⅱ層土は溝の掘り返しに伴う堆積埋土と考えられ、溝が自然営力による埋没途上に小規模ながら改修がおこなわれた事実を想定することができる。

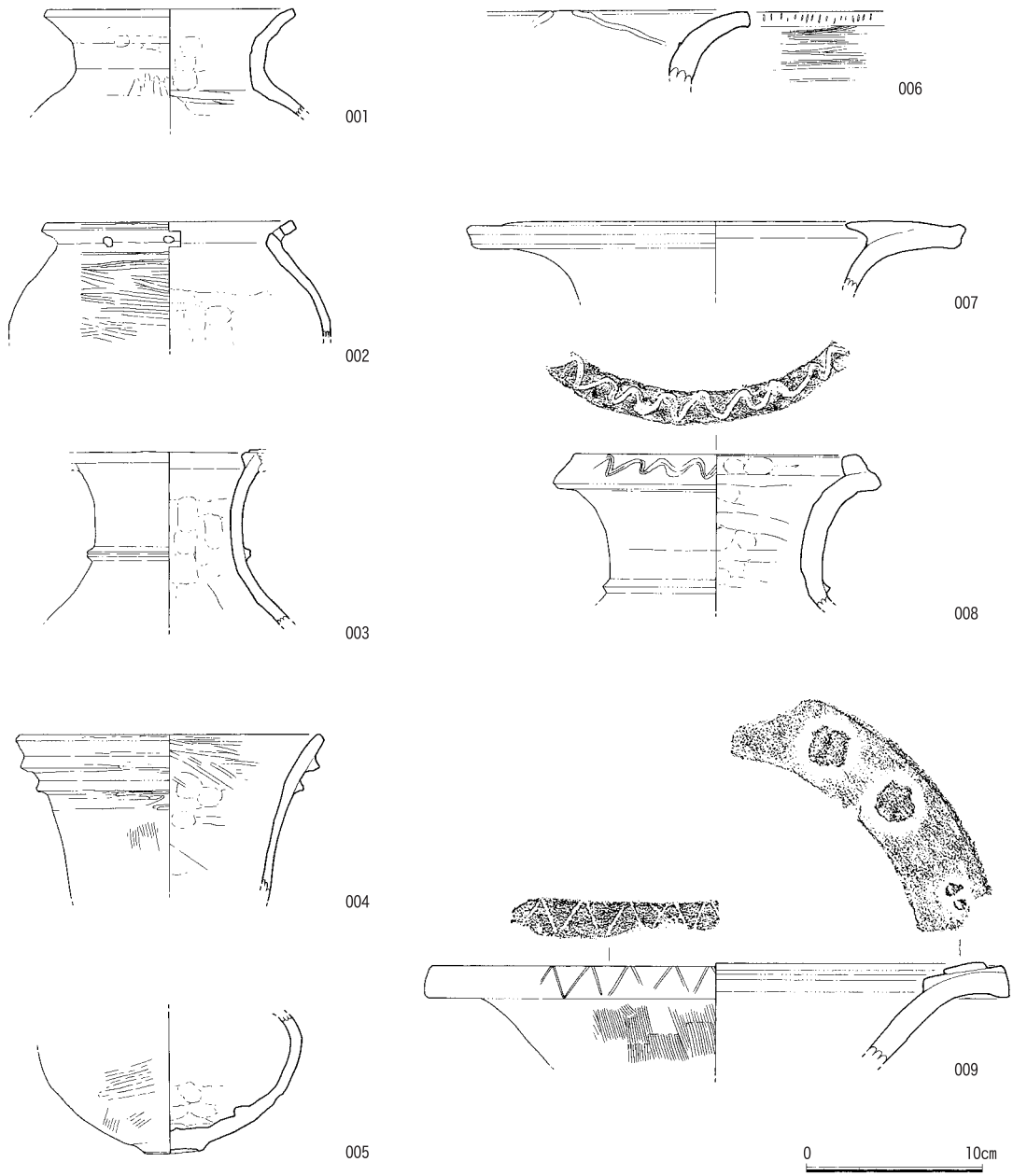
出土遺物（第194～202図）

001は壺の口縁部資料である。口縁部は頸部から直立気味に立ち上がり、口縁端部付近で外方へ大きく開く器形を呈している。内外面とも赤橙色を呈しており、胎土中には角閃石、長石、石英、橙色粒子を含む。復元口径13.8㎝を測り、外器面はヘラミガキとナデにより、内器面はナデによる調整がおこなわれる。

002は壺の上半部の資料であり、復元口径13.8㎝を測る。球形気味の器形に短く「く」字状に外反する口縁部を有する。口縁部上面には２ヶ１組になると推定される紐通しのための穿孔が認められる。器面は内外面とも淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英粒を含んでいる。外器面はヘラミガキとナデに



第193図　SD300平面・土層断面実測図（1/200・1/80）

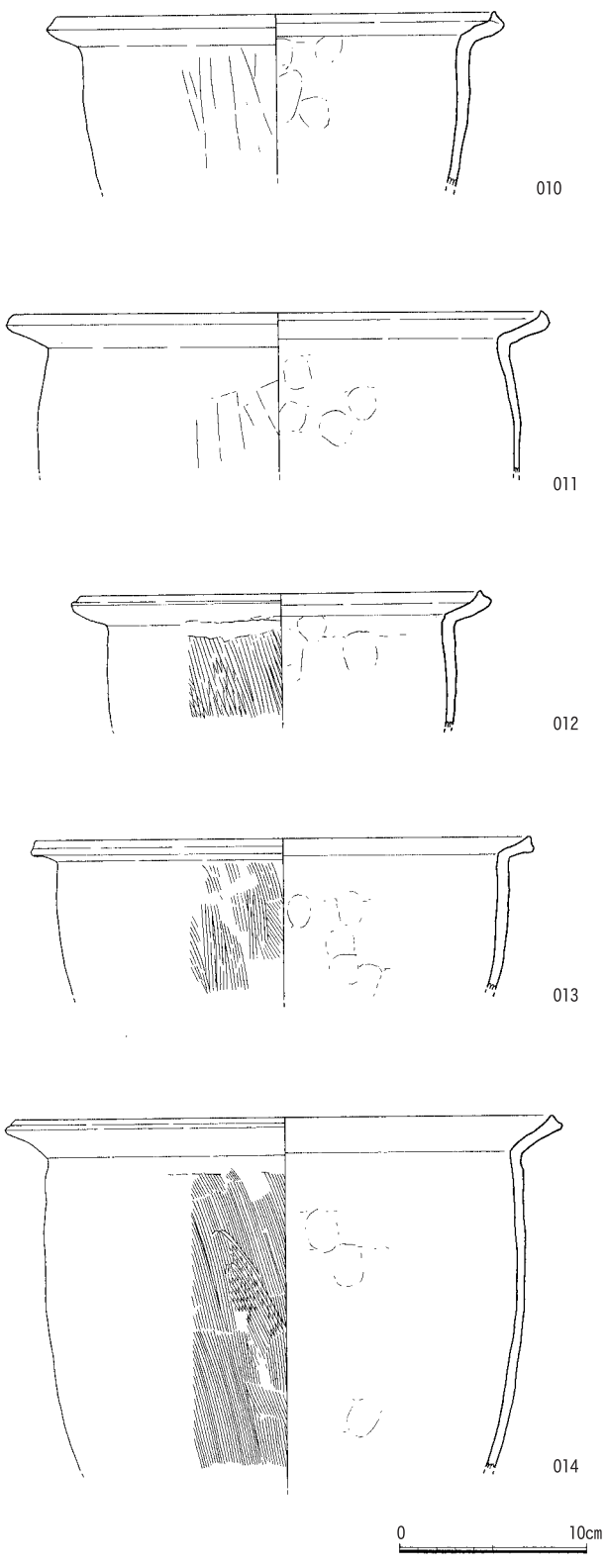


第194図　SD300出土遺物実測図①（1/4）

より調整される。

003は長頸の壺の口縁部資料である。口縁端部を欠損するが鋤先状の口縁を有していたと推定される。また、頸部には断面M字状の突帯を一条貼り付ける。内外面とも淡黄橙色を呈し、内外器面はナデによる調整がおこなわれる。口縁部の上面には浮文が貼付される。

004はラッパ状に開く口縁部をもつ長頸壺の口縁部資料である。復元口径16.8㎝を測り、口縁端部から僅かに下がった位置に二条の三角突帯を貼付する。内外面とも茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石粒を含む。器面の調整は外器面がハケ目とナデ、ヘラミガキ、内器面がヘラミガキとナデによる。



第195図　SD300出土遺物実測図②（1/4）

005 は長頸壺の底部資料である。底部は若干上げ底状を呈する径3.4㎝を測る小さな底部が成形されており、外面・淡黄褐色～淡赤褐色、内面・淡灰褐色を呈している。器面の調整はハケ目とヘラミガキとナデによる。胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子を含んでいる。第Ⅰ層土から出土した。

006 は壺の口縁部資料である。口縁部内面に突帯を貼付する。部分資料のため詳細は不明であるが、突帯は鋸歯状かあるいは、漏斗状に巡るものと推定される。内外面とも赤橙色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子を含む。口縁端部には刻みを施し、外器面・ヘラミガキ、内器面・ナデによる調整がおこなわれる。第Ⅱ層土からの出土である。

007 は鋤先状の口縁部形状を呈する壺口縁部資料である。復元口径28.3㎝を測り、内外面とも淡黄橙色を呈する。器面の調整はナデにより、胎土中には角閃石、長石、石英、橙色粒子を含む。第Ⅰ層土からの出土である。

008 は短小の複合口縁部を貼付する壺口縁部資料である。複合口縁部には単位二条の櫛描波状文が施文される。内外面とも赤橙色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英粒を含んでいる。復元口径16.2㎝を測り、器面の調整はナデによる。第Ⅰ層土からの出土である。

009 は壺口縁部資料である。粘土帯の貼付により口縁部上面に平坦面を形成する。また、口縁端部外面も垂下気味に整形される。口縁部平坦面には浮文が貼付され、端部外面にはヘラ状工具による連続山形文が施文される。外面・淡赤褐色、内面・淡茶褐色を呈する。復元口径33.1㎝を測る。器面の調整はナデによる。

010〜014は東北部九州系の口縁部が「く」字状を呈する甕形土器の口縁部資料である。

010は復元口径23.4㎝を測り、口縁端部は粘土帯の貼り付けとナデにより端部上面を強調する。外面・淡茶褐色〜淡茶黒色、内面・淡赤色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含んでいる。外器面はタテ方向の工具ナデにより調整され、内器面はナデにより仕上げられている。外器面にはススの付着が認められる。第Ⅱ層土からの出土である。

011は強いナデ調整に口縁端部上面を跳ね上げ気味に強調する資料である。外面・淡茶褐色、内面・淡茶白色を呈し、胎土中には長石、角閃石粒を含んでいる。復元口径28.2㎝を測り、外器面はタテ方向の工具ナデ、内器面はナデによる調整がおこなわれる。第Ⅳ層土からの出土である。

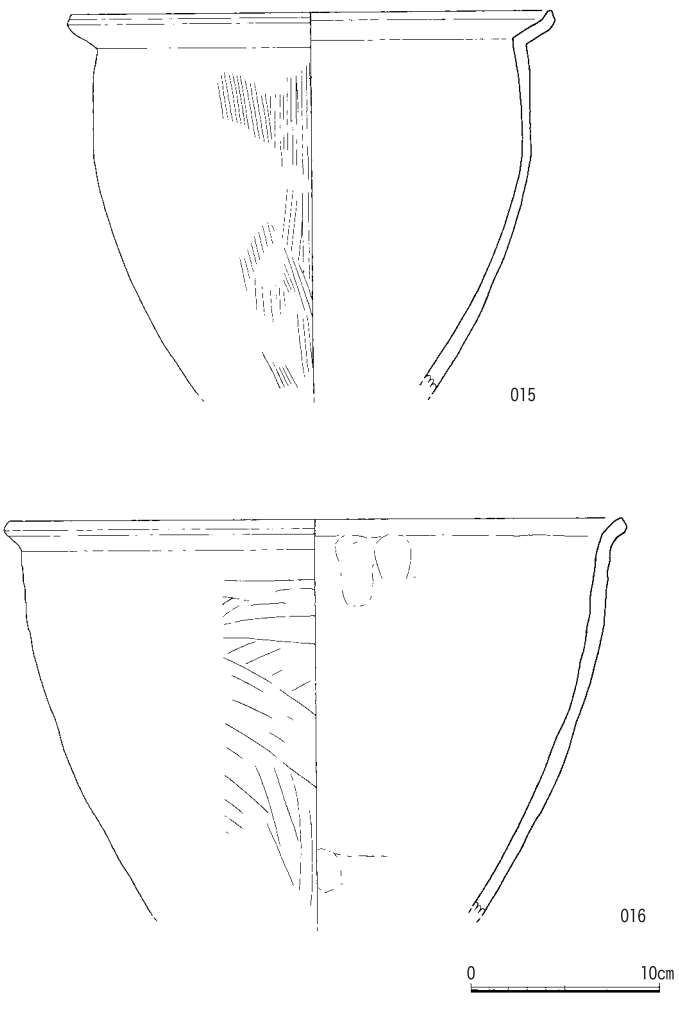
012は復元口径21.4㎝を測る甕口縁部資料であり、外面・淡灰褐色、内面・淡茶灰色を呈している。外器面をタテ方向のハケ目により器面を調整し、内器面はナデによる仕上げがおこなわれる。胎土中には角閃石、長石粒を内包している。第Ⅰ層土からの出土である。

013も同種の東北部九州系甕の口縁部資料である。復元口径26.4㎝を測る。外面・淡茶灰色、内面・淡赤褐色を呈する。外器面はハケ目、内器面はナデによる調整がなされている。第Ⅱ層土から出土した。

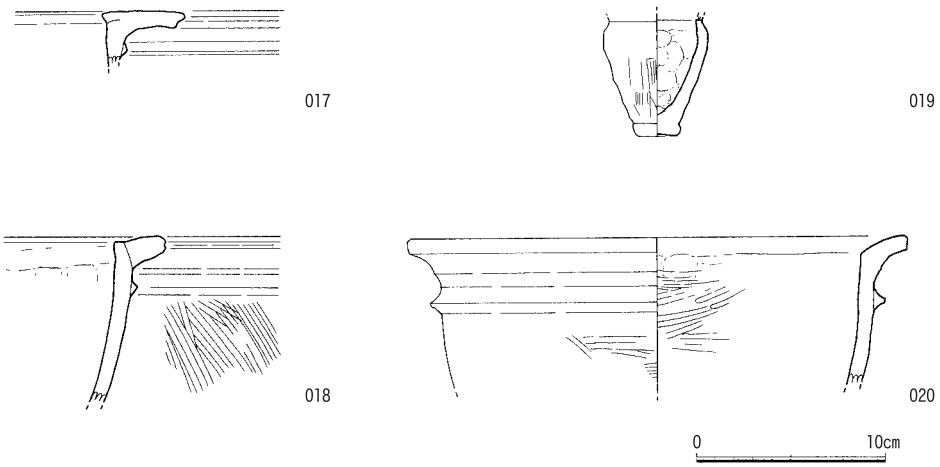
014は復元口径28.8㎝を測り、外面は淡茶褐色を呈し、タテ方向のハケ目により、内面は淡茶色を呈し、ナデによる器面調整による仕上げがおこなわれる。胎土中には角閃石、長石粒を含む。第Ⅰ層土から出土しており、外器面にはススの付着が認められる。

015・016は法量の比較的大きい東北部九州系甕資料である。**015**は復元口径25.8㎝を測り、内外面とも淡赤褐色〜暗茶色を呈する。他の資料と同様に口縁端部上面を強いナデにより強調する。胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子を含む。外器面の一部にはススの付着が認められた。外器面のタテ方向のハケ目調整以外はナデによる器面調整がおこなわれる。第Ⅰ層土からの出土である。

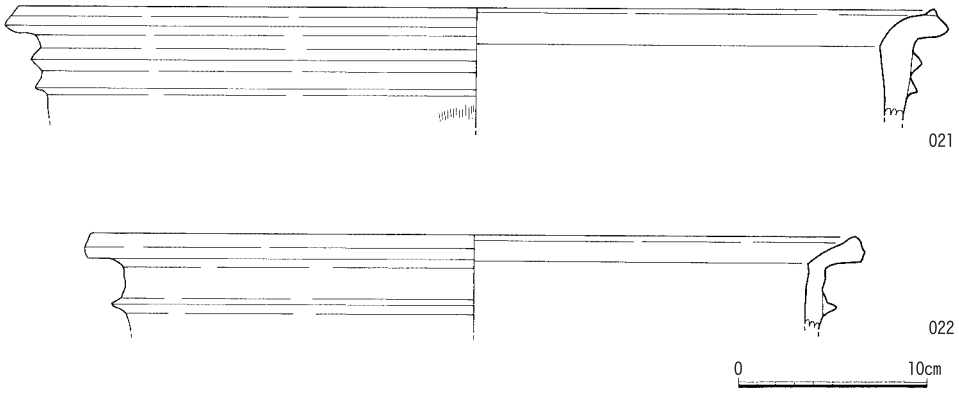
016は口縁端部上面の強調がみられない資料である。復元口径32.4㎝を測る。外面・淡茶灰色、内面・淡茶色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。内外器面の調整は工具ナデとナデによるものである。



第196図　SD300出土遺物実測図③（1/4）



第197図　SD300出土遺物実測図④（1/4）



第198図　SD300出土遺物実測図⑤（1/4）

017 は鋤先状口縁を呈する甕口縁部資料である。外面には赤色塗料痕が認められる、地色は淡黄白色である。胎土には精製土が使用される須玖式系の土器資料である。

018 は口縁端部に台形状の粘土帯を貼り付けて口縁部を形成する甕口縁部資料である。口縁部外面下位には低平な三角突帯が貼付される。内外面とも暗赤褐色を呈し、外器面ハケ目、他の部位はナデにより調整される。

019 は甕のミニチュア土器資料である。約１/３が遺存する資料であり、底部は完存する。口縁部は欠損するが、口縁部下のくびれや上げ底を呈する円盤状の底部など、当該期の甕の特徴をよく示している。内外面とも淡赤褐色を呈し、胎土中には角閃石粒等が内包される。器面の調整はナデを主体とする。底径は2.0㎝を測る。

020 は外方に開き気味に伸張する口縁部をもつ甕口縁部資料であり、外面の口縁部の若干下がった位置に断面三角形の貼り付け突帯を一条貼付する。内外面とも淡黄褐色を呈し、復元口径26.4㎝を測る。器面の調整はナデを主体とするが、最終調整にヨコ方向のヘラミガキが採用される。

021・022は厚手の口縁部を有する東北部九州系甕の口縁部資料である。021は外面に二条、022では一

条の貼り付け突帯を確認できる。

021は内外面とも淡黄白色を呈し、口縁端部上面には粘土帯による跳ね上げ状の隆起帯を形成する。胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。器面の調整は外器面のみタテ方向のハケ目、他はナデ調整による。第Ⅳ層土からの出土であり、復元口径49.8㎝を測る。

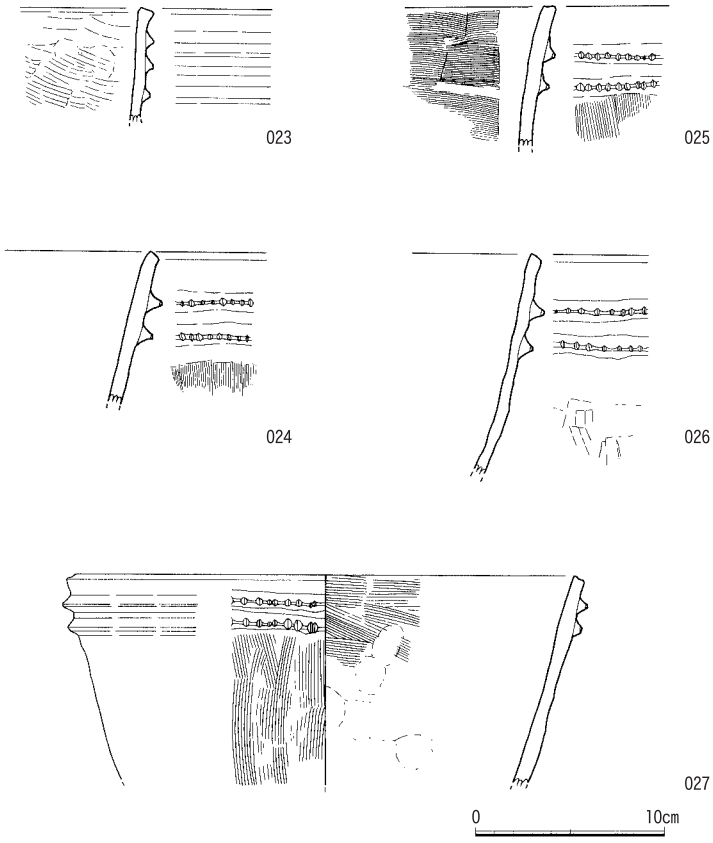
022は第１層土から出土しており、復元口径43.2㎝を測る。内外面とも淡黄褐色を呈し、ナデによる器面調整がおこなわれる。胎土中には角閃石、長石、石英粒を含む。

023～027は複数の突帯を有する下城式の甕形土器口縁部資料である。**023**には三条の三角突帯の貼付が認められる。内外面とも淡茶褐色を呈するが、内外器面の一部には赤色塗彩の痕跡が認められる。外器面はナデ、内器面はヨコ方向のハケ目とナデにより調整される。

024は外面下位に二条の刻目突帯を貼付する口縁部資料である。口縁部は直線的に端部にいたり、端面はナデにより面取り風の平坦面を形成する。内外面とも淡赤褐色を呈し、外器面はタテ方向のハケナデ、内器面は不定方向のナデにより調整される。外器面の一部にはススの付着が認められる。第Ⅰ層土からの出土である。

025もまた、外面下位に二条の刻目突帯をもつ資料である。第Ⅳ層土から出土した。外面・淡赤褐色、内面・淡赤褐色～黄灰色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子を含む。外器面はタテ方向のハケ目、内器面は細密なヨコ方向のハケ目により調整される。

026は第Ⅰ層土から出土した甕口縁部資料である。外面・淡赤褐色、内面・淡黄褐色を呈する。比較的器壁の薄い資料である。外器面の突帯下位はタテ方向のハケ目の後ナデが、内器面はナデによる器面調



第199図　SD300出土遺物実測図⑥（1/4）

整がおこなわれる。

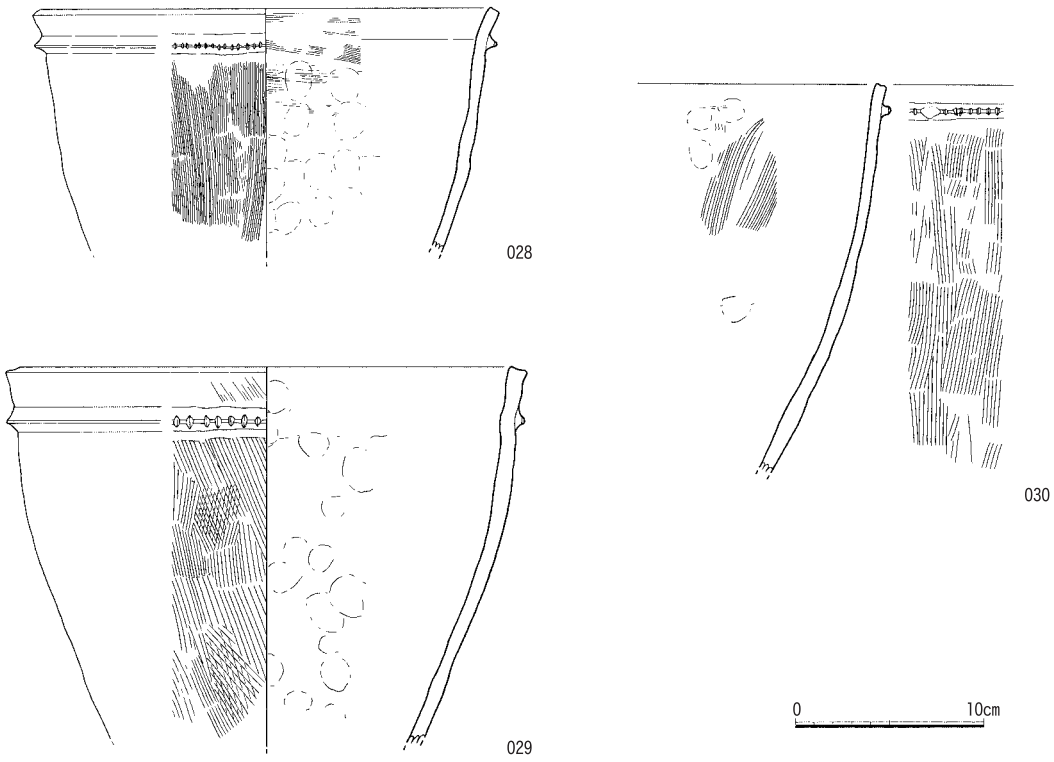
027 は二条の刻目突帯をもち、内外器面ともハケ目による器面調整をおこなう資料である。復元口径26.4cmを測る。外面・暗茶灰色、内面・淡茶褐色を呈する。外器面にはススの付着が認められる。

028～030 は一条の刻目突帯をもつ口縁部資料である。**028** は突帯部分に僅かながら屈曲をもつ資料であり、復元口径23.8cmを測る。外面・淡茶褐色～黒茶褐色、内面・淡茶褐色を呈する。器面の調整は外器面がタテ方向のハケ目、内器面がヨコ方向のハケ目とナデ調整である。

029は復元口径25.8cmを測り、胎土中には長石、角閃石粒を内包する。外器面は他の資料と同様にタテ方向のハケ目、内器面はハケ目による調整後丁寧なナデによりハケ目をナデ消している。

030は外面・暗茶褐色、内面・淡茶褐色を呈し、胎土中には長石、角閃石粒を含む。器面の調整はハケ目とナデによるものであるが、内器面のハケ目調整についても外器面と同じようにタテ方向におこなっている点が他の資料とは異なっている。

031・032は口縁部から底部まで接合し、図上において完形復元が可能であった下城式甕資料である。**031**は復元口径16.6cm、器高17.1cm、復元底径5.2cmを測る。底部は上げ底状となり、裾部は外方へ開く。このような底部形態は、東北部九州系甕にみられる属性であり、本資料は稀少な折衷型式と考えられる。外面・淡赤褐色～暗灰色、内面・淡赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含んでいる。器面の調整は外器面・タテ方向のハケ目、内器面・ケズリ後ナデによる調整がおこなわれる。外面にはススの付着がみられ、煮炊きに使用されたものと推定される。第Ⅳ層土からの出土である。



第200図　SD300出土遺物実測図⑦（1/4）

032 もまた、ススの付着が認められ、煮炊きに使用されたことが知られる資料である。復元口径22.4㎝、器高26.3㎝、復元底径5.4㎝を測り、内外器面ともハケ目とナデによる調整がおこなわれる。外面・淡赤褐色、内面・淡黄茶褐色を呈する。

033 は高坏の口縁部と推定される資料である。内外面とも淡黄橙色～黄白色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子を含んでいる。器面の調整は外器面がナデ、内器面がヨコ方向のヘラミガキによる。

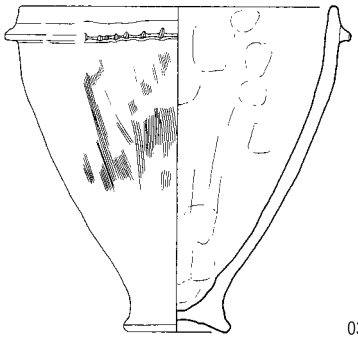
034 は内外面とも赤色に塗彩された高坏資料である。内外器面ともヘラミガキによる調整がおこなわれている。復元口径11.0㎝、器高8.9㎝、復元底径7.4㎝を測る。

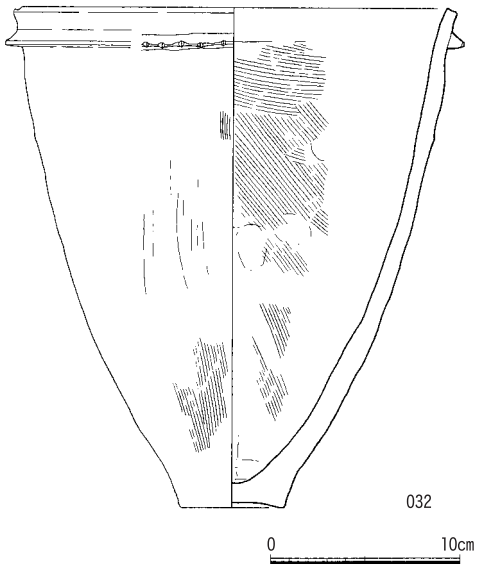
035 は蓋の頂部資料である。内外面とも淡赤橙色を呈する。器面の調整はハケ目とナデにより、胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子を含む。

036 は台付鉢の鉢部と脚部の接合部にあたる部分である。円盤充填技法によって成形されており、接合部の粘土円盤を明瞭に観察することができる資料である。外面には二条の三角突帯が貼付されており、ナデによる調整がおこなわれている。内外面とも淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、橙色粒子を含んでいる。

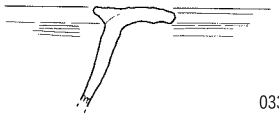
037 は復元口径18.6㎝を測る台付鉢の鉢口縁部資料である。外面・淡茶灰色、内面・淡黄茶色を呈し、胎土中には石英、長石、角閃石粒を含んでいる。器面の調整は外器面がナデ、内器面がケズリ風ナデの後にナデにより調整される。口縁部には２ヶ１組となる穿孔を認めることができる。

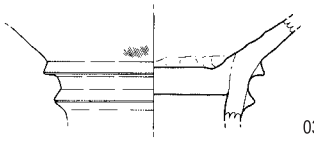
以上が092SD300出土土

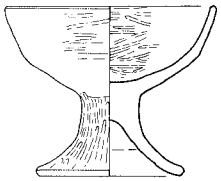


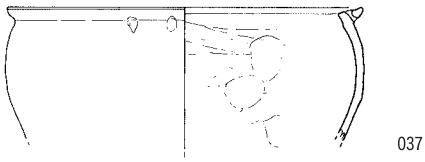


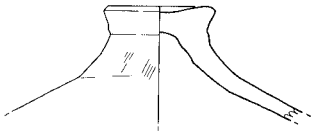
第201図　SD300出土遺物実測図⑧（1/4）





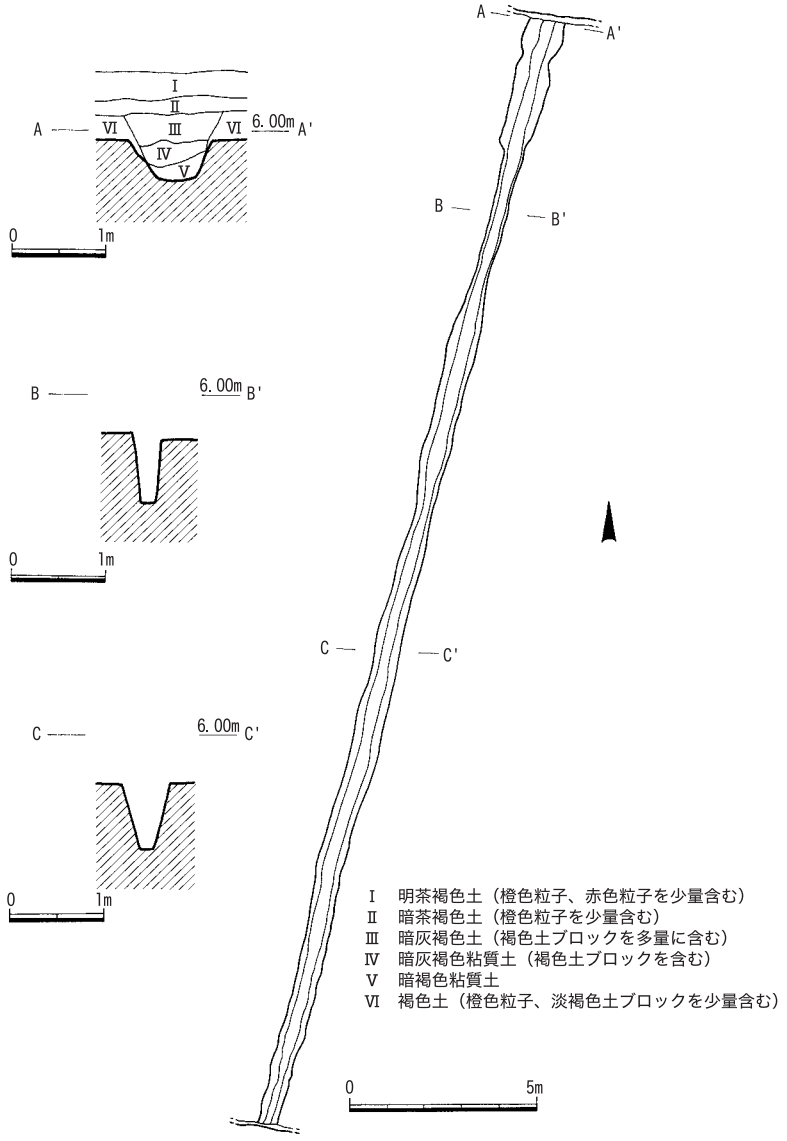




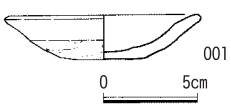


第202図　SD300出土遺物実測図⑨（1/4）

器である。出土土器の大半は上部層からの出土であり、第Ⅳ層等の下位層からの出土遺物は少量である。また、出土土器の主体は弥生時代中期後半から末のものであり、少なくとも下位層から出土する遺物はこの時期のものによって占められるという傾向がある。しかしながら、第Ⅰ層出土土器の中には、初現的な複合口縁壺008や019のミニチュア土器にみられる甕の特徴は弥生時代後期のものであり、下限は弥生時代後期前葉くらいまでを考えておく必要があろう。したがって、溝の掘削は弥生時代中期後半から末の段階におこなわれ、最終埋没は弥生時代後期前葉となる可能性が想定される。



第203図　SD303遺構実測図（1/200・1/80）



第204図　SD303出土遺物実測図（1/4）

092SD303（第203図）

調査区のほぼ中央を南北方向に縦走する溝状遺構である。N-15°-Eの方向を示す。約30mについて検出し、調査をおこなった。溝幅は約1.0ｍを測り、検出面から溝底までの深さ0.7ｍを測る。溝内堆積土層は３層に分層することができるが、上位の２層にはブロック土を大量に内包しており、人為的に埋め戻された状況が想定される。翻って最下層にこうした点が認められない点は、092SD303が機能時に自然堆積による埋没を経過しながら複数回の掘り返しがおこなわれ、最終機能停止の段階に埋め戻された状況を示しているものと考えられる。

出土遺物（第204図）

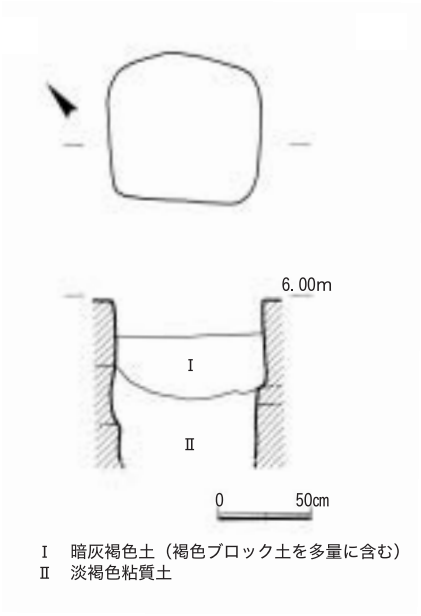
001 は手づくね成形による京都系土師器皿資料である。約1/3が遺存する。復元口径10.0㎝、器高2.3㎝を測る。内外面とも淡茶色を呈し、胎土中には長石粒を含む。器面の調整はナデによりおこなわれている。内面縁部にススの付着が認められ、灯明皿としての使用が想定される。厚手の京都系土師器皿であり、16世紀後半前後の所産年代が考えられる。

井戸跡（ＳＥ）

092SE355（第205・206図）

調査区の中央北寄りにおいて確認した井戸跡である。検出段階の平面プランは隅丸方形を呈しており、裏込め土などが認められない点から素掘りの井戸であったと推定される。平面規模は3.6m×3.8mを測る。検出面から1.84mまで掘り下げたが、井戸底にはいたっていない。

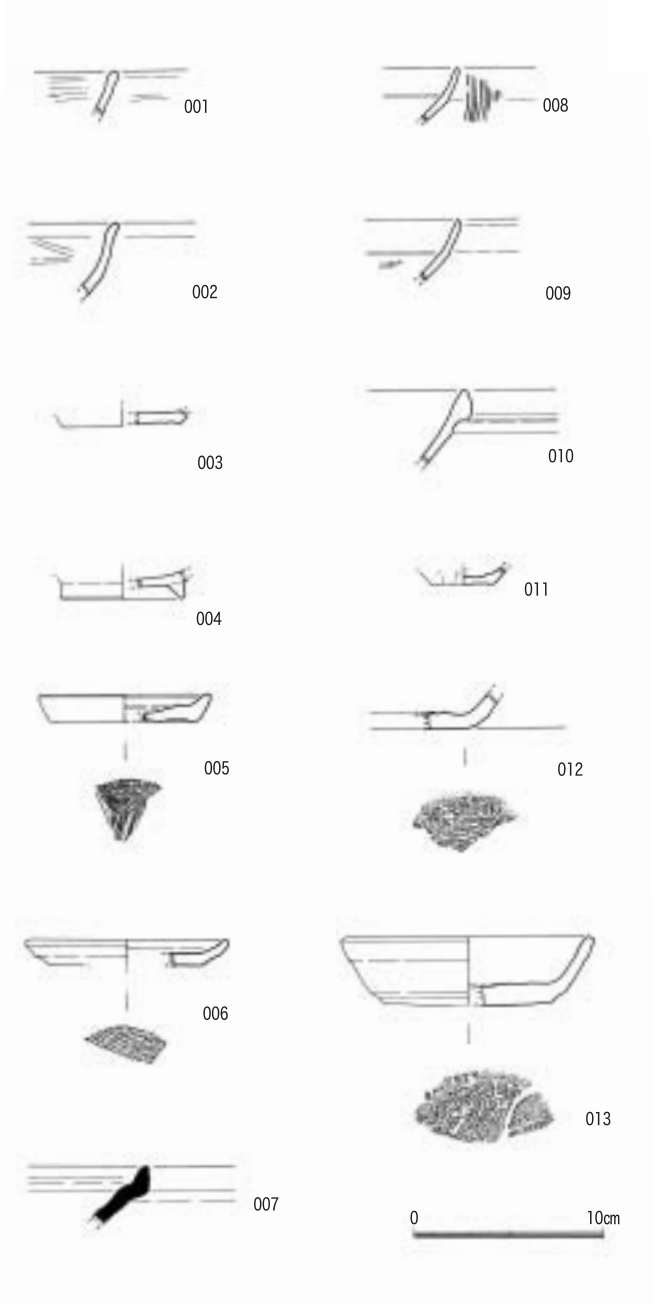
第Ⅰ層とした上部層は褐色土ブロックを多量に含む暗灰褐色土により構成され、井戸の機能停止時に埋め戻すために充填された土壌と判断される。その下位に位置する第Ⅱ層は淡褐色粘質土であり、滞水していた結果生じた土層である。出土遺物の大半はこの第Ⅱ層土から出土する。



第205図　SE355平面・土層断面実測図（1/40）



第206図　SE355土層断面南側（北方向から）



第207図　SE355出土遺物実測図①（1/4）

出土遺物（第207・208図）

001～004は白色研磨土師器椀の破片資料である。**001**は口縁端部資料であり、口縁先端部は玉縁状に丸く整形される。内外面とも淡黄褐色を呈し、ヘラミガキとナデにより調整される。第Ⅰ層土から出土している。

002は口縁端部をＳ字状に緩やかに屈曲させる形状を有し、外面･淡黄白色、内面･淡灰白色を呈する。胎土には精製土が使用され、器表面はヘラミガキとナデにより調整されている。本資料は第Ⅱ層土中から出土した。

003は内外面とも淡黄白色を呈している。底部には形骸化した高台が貼付され、器表面はヘラミガキにより調整される。

004は断面三角形を呈する高台が貼り付けられる資料である。内外面とも黄白色を呈し、ヘラミガキによる調整がおこなわれる。復元底径6.5㎝を測る。第Ⅱ層土からの出土である。

005は土師器小皿資料である。底部に回転糸切り離し痕が残る。口縁端部は断面三角形状を呈するもので、復元口径9.0㎝、器高1.5㎝、復元底径7.8㎝を測る。外面・淡灰白色、内面・淡黄褐色を呈している。

006は低平な器形を呈する土師器小皿である。底部に回転糸切り離し痕を残す資料であり、復元口径10.6㎝、器高1.4㎝、復元底径8.0㎝を測る。内外器面ともナデにより調整され、淡赤褐色を呈している。

007は東播系須恵器鉢の口縁部資料である。第Ⅱ層土から出土ており、内外面とも暗灰色を呈している。口縁部の調整はナデによる。

008は同安窯系青磁碗の口縁部資料であり、大宰府陶磁器分類青磁碗Ⅰ－１ｂ類である。釉調は黄灰色を呈している。

009も008と同じく、同安窯系青磁碗の資料であり、大宰府陶磁器分類青磁碗Ⅰ－１類である。007と同様に第Ⅱ層土中から出土した。

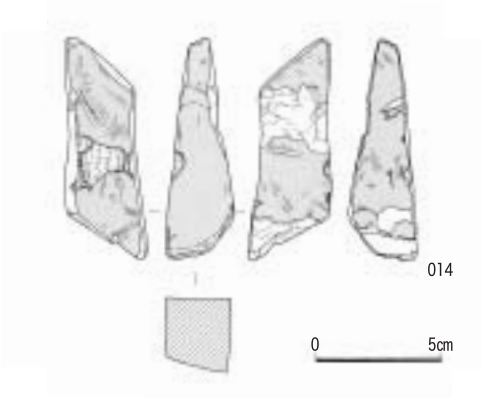
010は大宰府陶磁器分類白磁碗Ⅳ類の口縁部資料である。口縁部は玉縁状を呈しており、施釉される。

011は器種等詳細不明な白磁底部資料である。第Ⅱ層土から出土した。底部は平底をなし、内外面とも施釉されるが、底部は露胎となる。

012・013は土師器坏資料である。**012**は底部に回転糸切り離し痕を残す破片資料である。口縁部は欠損しており、内外面とも淡赤褐色を呈する。
内外器面ともナデにより調整され、胎土中には角閃石、橙色粒子を内包する。

013は第Ⅱ層土から出土した土師器坏資料である。内外面とも暗茶褐色を呈する。復元口径13.3㎝、器高3.7㎝、復元底径8.6㎝を測る。胎土中には角閃石、金雲母、橙色粒子を含む。器面の調整はナデによる。底部には回転糸切り離し痕が残る。

014は砂岩製の砥石である。現存長9.0㎝×2.7㎝×3.0㎝を測る。



第208図　SE355出土遺物実測図②（1/3）

道路状遺構（ＳＦ）

092SF310（第209～211・214図）

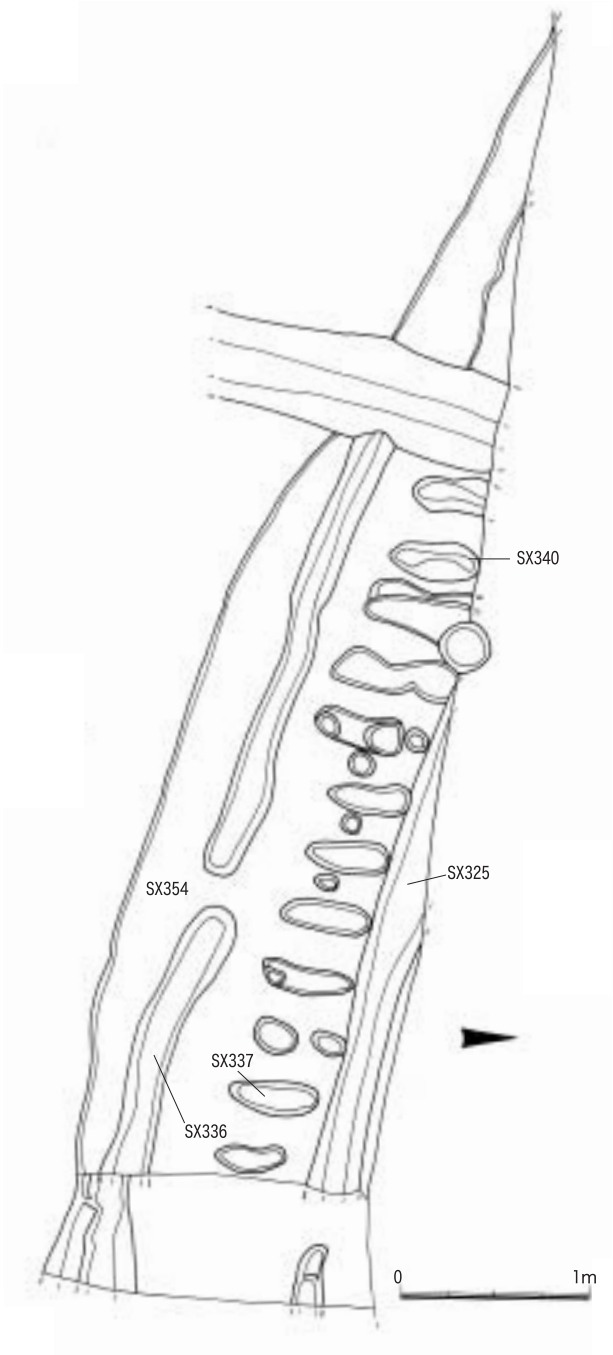
調査区の北東端付近で検出した東西方向に展開する道路状遺構である。調査範囲の制約から、北側部分は調査できておらず全容を把握することはできなかったが、最低３回の路面改修の状況を確認することができた。以下ではこの変遷を時期変遷順に第１段階から第３段階として整理をおこない報告する。なお、各段階ともに共通する構造上の特徴として、路面幅について掘り込みをおこない、構築するという点がある。

第１段階

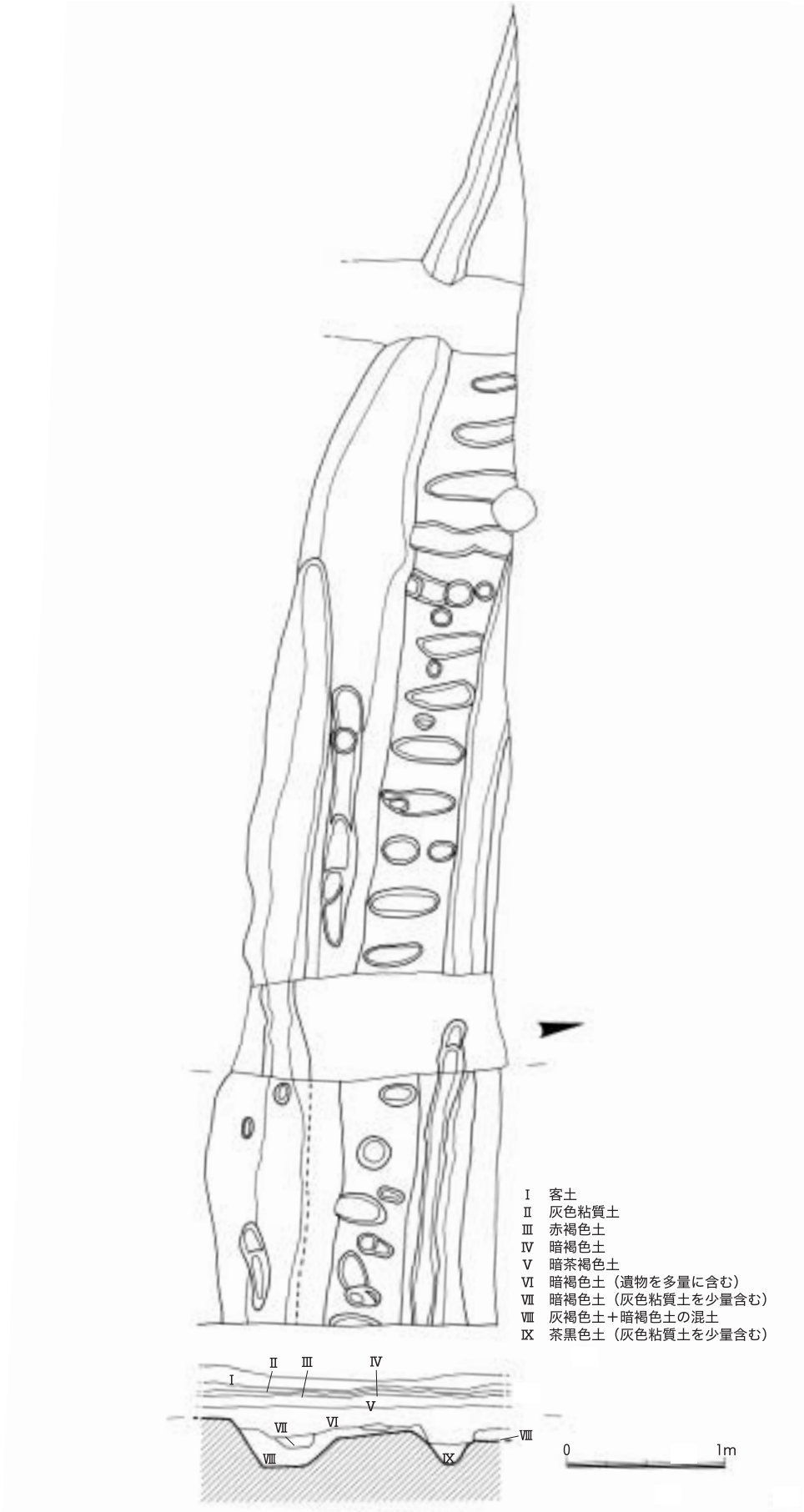
道路状遺構の構築段階である。南北両端に側溝を取り付けることによって路面幅を確保したものと推定されるが、北側の側溝は調査区外に存すると想定され、機能時の路面幅は不明である。道路面については、路面舗装材等に相当する部分が第２段階以降の道路構築に伴い削平されているため詳細を知ることができない。側溝と考えられる南側の溝状遺構は西側へ向かうにしたがい幅を減じるが、調査区東壁付近が最も広く約0.6ｍ、深さ約 0.3ｍを測る。溝は第２段階の道路構築に伴い埋め戻されている。

第２段階

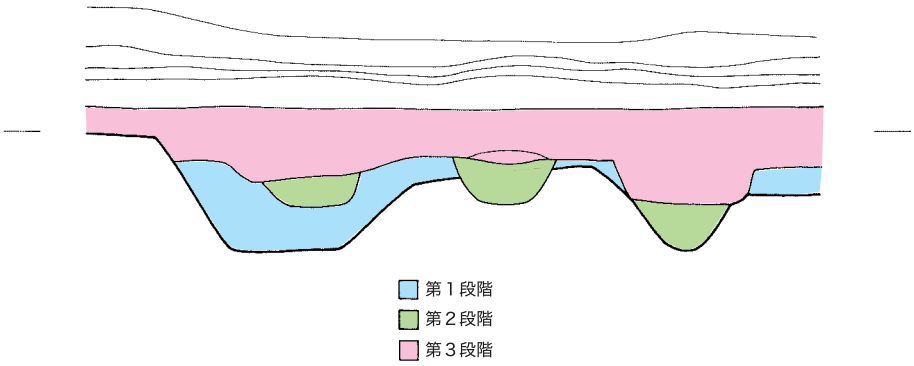
路面幅の縮小段階に相当する。第１段階の南側側溝を人為的に埋め戻し、溝芯々で約1.0ｍを測る北側の位置に側溝を掘削する。路面は２本の側溝に囲まれた部分であり、路床に相当する部分に連続土坑等を構築する。第１段階と比較して路面幅を縮小し、南側に偏って改修された状況を看取することができる。連続土坑内には白色粘質土が充填され、約0.2m間隔で造られている。南側側溝の幅は0.25m、深さ0.12mを測る。側溝は連続した溝形状は示さず、連続長土坑様の形態となっている。北側の側溝は幅約0.3ｍ、深さ0.23ｍを測り、断面U字形を呈している。



第209図　SF310上位面確認遺構（1/40）



第210図　SF310下位面確認遺構（1/40）



第211図　SF310土層模式図

第３段階

当遺構の最終段階に相当する。第２段階検出面直上の混土層上面において、連続土坑が検出されている。この連続土坑は粘質土を充填した後、その上面に土師器、須恵器の小片および小礫を集積する点を特徴とする。連続土坑の北側に溝状遺構を確認することができる。これが道路側溝として機能したものであるのか否かについては判断することができない。溝幅は約0.35m、深さ約0.15mを測り、断面形状は梯形を呈している。



第212図　SX325土層断面（東方向から）

092SX325（第212図）

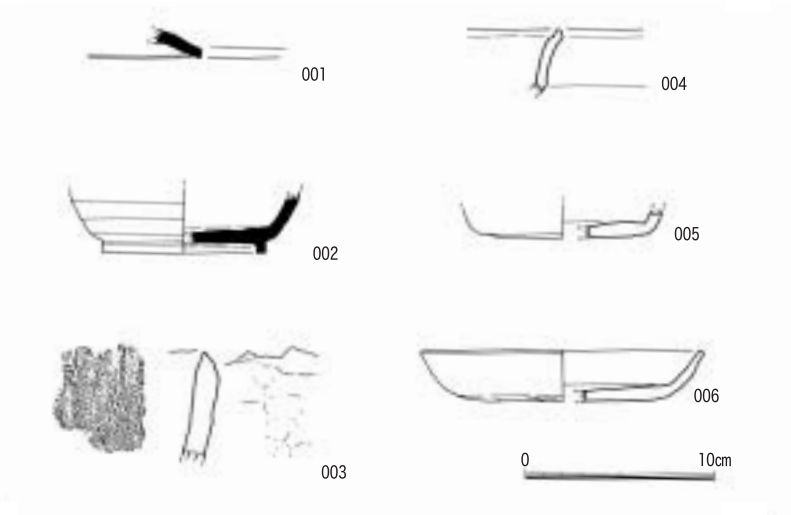
第２段階の北側側溝として機能したと想定される溝状遺構である。上部が最終段階に相当する溝と重複しており、欠失する。現状で確認できる溝の規模は幅約0.3ｍ、深さ0.23ｍを測り、断面U字形を呈しており、茶黒色土を埋土とする。

出土遺物（第213図）

001 は須恵器蓋の端部資料である。口縁端部は折り曲げられ、内器面には沈線状の窪みを有する。内外面とも淡灰褐色を呈している。

002 は須恵器高台付坏の底部資料である、高台は断面方形を呈しており、体部の立ち上がりよりも若干内側に貼付される。復元底径8.6㎝を測り、器面は回転ナデにより調整される。

003 は製塩土器口縁部資料である。口縁部はヘラ切りにより成形



第213図　SX325出土遺物実測図（1/4）

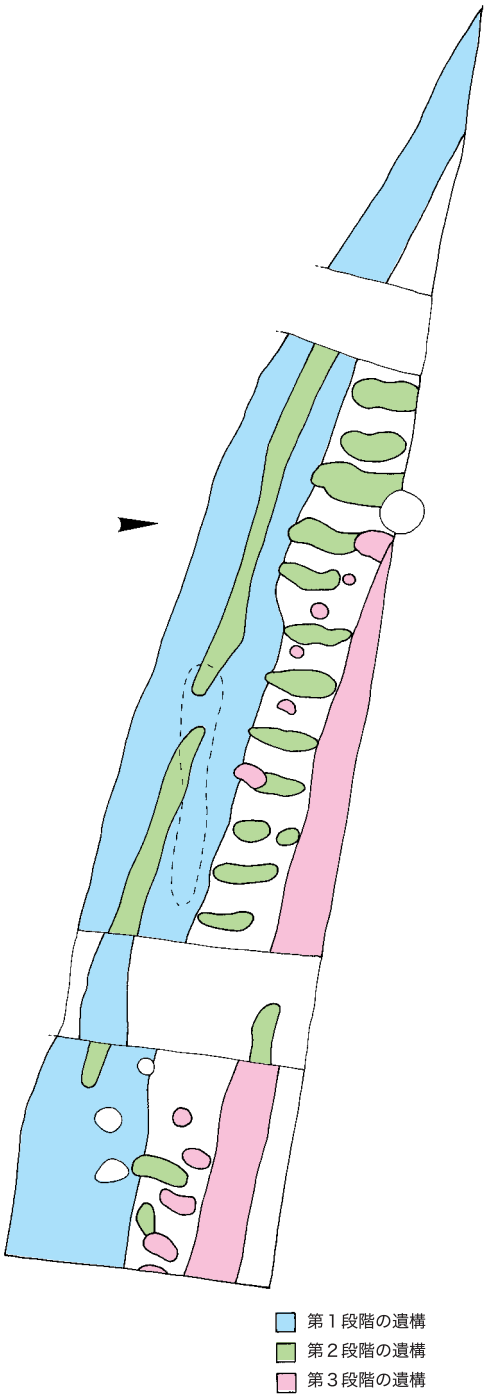
され、未調整のままである。内器面には布目痕が残る。外面・淡赤褐色、内面・暗褐色を呈する。胎土中には石英粒等を含んでいる。

004 は土師器坏口縁部資料である。口縁端部内器面には一条の沈線をめぐらしている。内外面とも淡赤褐色～赤褐色を呈する。器面の調整はナデによる。

005は土師器坏底部資料である。復元底径8.7㎝を測る。外面・赤橙色～赤褐色を呈し、内面・赤橙色を呈している。底面は回転ヘラ切り離しの後ナデにより調整される。

006は復元口径14.4㎝、器高2.7㎝、復元底径11.0㎝を測る。内外面とも淡赤褐色を呈する。体部外器面下半は回転ヘラケズリによる整形がおこなわれ、底面は手持ちヘラケズリによる整形がなされている。器面の調整はナデによる。

以上の資料はいずれも８世紀中頃から９世紀に比定されるものである。



第214図　SF310遺構変遷模式図

092SX336（第215図）

第２段階の南側側溝として機能したと想定される溝状遺構である。幅 0.25 m、深さ 0.12 mを測り、灰褐色土と暗褐色土の混土を埋土とする。連続長土坑様の形態になると推定される。

出土遺物（第216図）

001 は断面三角形を呈する高台を貼付する土師器高台付坏である。復元底径 8.0 ㎝を測る。内外面とも淡茶色を呈し、外器面はナデ、内器面はヘラミガキとナデによる調整がなされている。

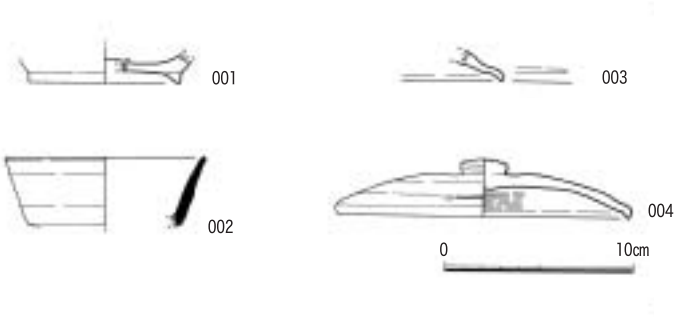
002 は須恵器坏の口縁部資料である。ハコ形を呈するものであるが、高台が貼付されるものか否かについては遺存資料からは判断できない。内外面とも淡灰褐色を呈し、復元口径10.4㎝を測る。器面の調整はナデである。



第215図　SX336土層断面（東方向から）

003は土師器蓋の端部資料であり、端部はＳ字状に屈曲する。内外面とも淡茶色を呈し、ナデによる器面調整がなされている。８世紀後半の所産となるものである。

004 は図上復元の可能な土師器蓋である。口縁端部は短く内側に折り返す形状をなし、頂部のツマミは扁平なボタン様のものが貼付される。復元口径15.4㎝、器高3.0㎝を測る。外面・赤褐色～淡赤白色、内面・赤褐色を呈する。内外器面ともヘラミガキにより調整されている。胎土中には石英粒等を含んでいる。



第216図　SX336出土遺物実測図（1/4）

092SX337（第217図）

第２あるいは第３段階に相当する連続土坑のひとつである。南北に長い長土坑となる形状を示し、遺構の規模は、南北長約0.5m、東西長約0.2m、深さ0.1mを測る。遺構内には白色粘質土が加圧を伴い封入され、上部には土器等を細片化したものを多数充填する。



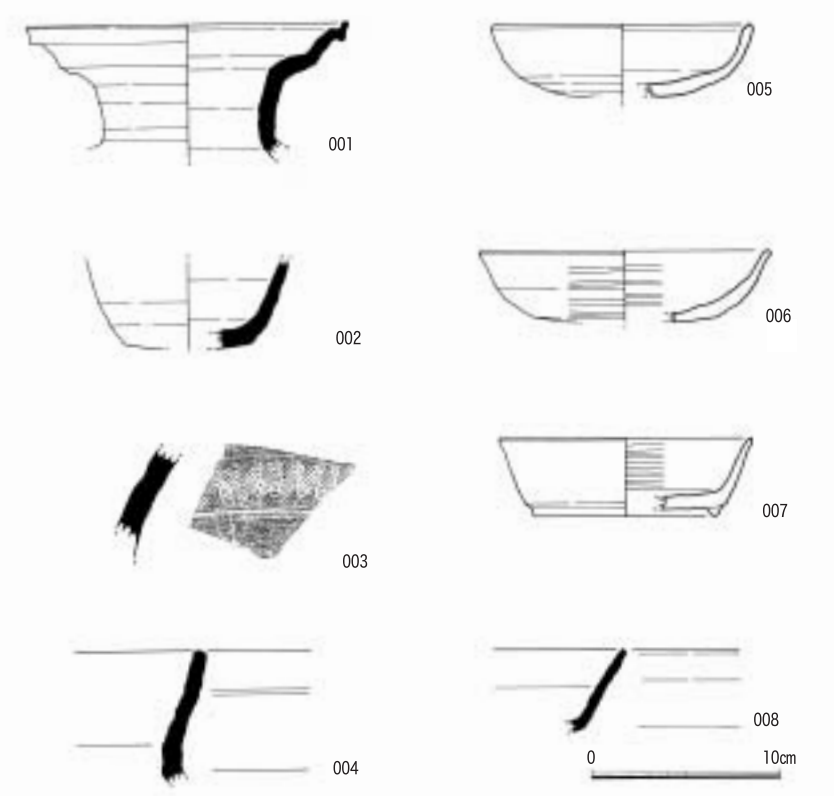
第217図　SX337土層断面（東方向から）

出土遺物（第218図）

001は二重口縁を有し、口縁端部を直立させる須恵器壺Ｆ類に分類される資料である。復元口径16.8㎝を呈し、外面・暗灰褐色、内面・淡灰褐色を呈している。内外器面とも回転ナデにより調整される。

002 は須恵器壺底部資料である。内外面とも淡灰白色を呈する。外器面には回転ヘラケズリが施され、最終調整はナデによる。

003 は須恵器甕の口縁部資料である。端部は欠損する。また、外面沈線間には櫛描波状文が施文される。内外面とも暗灰色を呈している。



第218図　SX337出土遺物実測図（1/4）

004は須恵器口縁部資料である。内外面とも淡灰色を呈し、ナデにより調整される。器種等の詳細は不明である。横瓶等の口縁部である可能性も考えられる。

005・006は土師器坏である。**005**は復元口径13.6㎝、器高3.8㎝を測る土師器坏であり、内外器面ともナデにより調整される。口縁端部内面に斜めの平坦面を形成する。外面・淡黄橙色、内面・赤褐色を呈している。

006 は土師器坏ｄであり、器内外ともミガキａ$_2$による調整がおこなわれている。外面・淡茶色、内面・淡赤色を呈している。胎土中には長石、角閃石粒等を含んでいる。

007 は土師器高台付坏である。底面には断面台形の貼付突帯が付されている。復元口径13.2㎝、器高4.1㎝、復元底径9.6㎝を測る。外面は淡赤褐色を呈しナデにより、内面は淡茶褐色を呈しミガキａ$_2$による器面調整がおこなわれる。

008は須恵器高台付坏の口縁部資料である。内外面とも淡灰褐色を呈し、器面はナデによる調整がおこなわれる。

以上の資料は古い時期のものも含むが、下限は８世紀末から９世紀に比定されるものである。



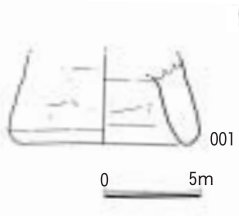
第219図　SX340土層断面（東方向から）

092SX340（第219図）

092SX337と同じく、第２あるいは第３段階に相当する連続土坑のひとつである。南北に長い長土坑様の形状を示し、遺構の規模は、南北長約0.45m、東西長約0.2m、深さ0.1mを測る。遺構内には白色粘質土が加圧を伴い封入され、上部には土器等を細片化したものを多数充填する。

出土遺物（第220図）

001は台付鉢の脚部資料である。器面はナデにより調整され、外面・淡茶褐色、内面・淡茶色を呈する。復元底径9.0㎝を測る資料であるが、時期や器形等の詳細は不明である。



第220図　SX340出土遺物実測図（1/4）

092SX354（第209図）

道路面が掘り込みを伴い、周囲より一段低くなっており、092SX354 はこの掘り込み部に相当する。092SX354は第１段階から第３段階のものすべてを含んでいる。暗茶褐色土により被覆される。検出面での段部から北側調査区北壁まで約1.8ｍを測るが、暗茶褐色土の分布範囲を考慮すると、本来の南側の肩部はさらに南側にあったと想定される。

出土遺物（第221～229図）

001～004は土師器高台付坏資料である。

001は復元底径9.6㎝を測り、内外面とも赤橙色を呈する。ナデにより調整される。底部には断面台形の小さな貼付高台が付されている。底部の約1/5が遺存する資料である。

002は内外器面ともミガキａ$_2$による器面調整がおこなわれる。復元底径11.6㎝を測り、淡茶褐色を呈

している。

003 は断面形状が三角形を呈している貼り付け高台を底部から体部の立ち上がり部よりも若干内側に寄った位置に付した土師器高台付坏である。復元口径14.4cm、器高3.8cm、復元底径10.2cmを測る。内外面とも赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。器面の調整はナデによる。

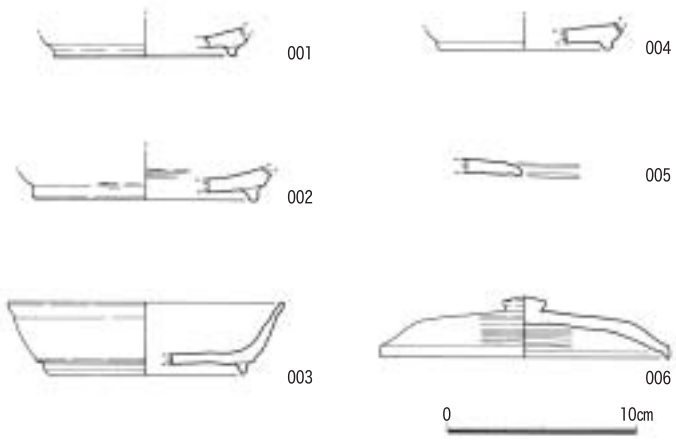
004 は角高台を貼付けする底部資料であり、復元底径 9.0 cmを測る。器面はナデにより調整され、淡茶白色を呈している。

005・006 は土師器蓋資料である。

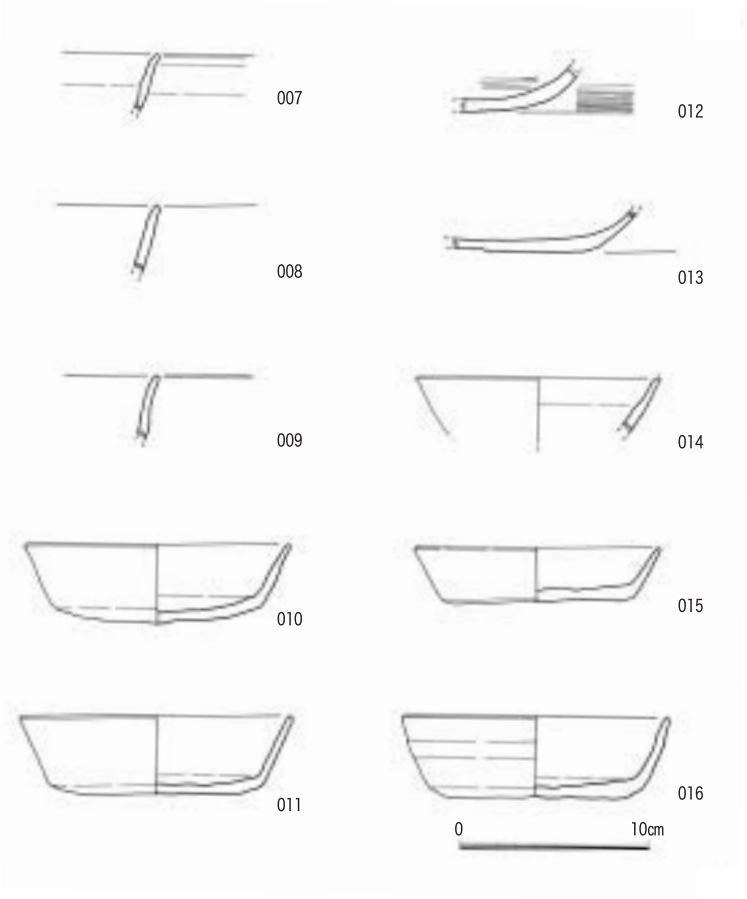
005は口縁部端部資料であり、外面・赤褐色、内面・暗茶褐色を呈し、外器面はミガキa_2、内器面はナデにより調整される。器形は低平な器形を呈すると思われる。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。

006 は図上復元が可能な土師器蓋資料である。内外面とも淡赤褐色を呈し、胎土中には長石、角閃石、石英粒を含んでいる。復元口径15.2cm、器高3.2cmを測り、器表面はミガキa_2による調整がおこなわれる。

007 ～ 016 は土師器坏資料である。



第221図　SX354出土遺物実測図①（1/4）



第222図　SX354出土遺物実測図②（1/4）

007 は坏口縁部資料である。外面・淡赤褐色、内面・淡赤褐色～淡茶褐色を呈している。内外器面ともナデ調整が実施される。

008は端部を舌状に整形する。内外面とも淡赤褐色～淡茶褐色を呈している。器面調整はナデによる。

009は008と同じく口縁端部を舌状に整形する資料であるが、口縁部は底部と体部の境部分から僅かに外反気味に立ち上がる。内外面とも淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含んでいる。

ナデによる器面調整がおこなわれる。

010は約１/２が遺存する土師器坏資料であり、内外面とも淡赤褐色を呈する。口縁部は若干外反気味に立ち上がり、底部は凸部を形成する。底部の成形はヘラ切り離し後手持ちヘラケズリ風のナデにより調整される。口径13.8cm、器高4.2cmを測る。

011は復元口径14.2cm、器高4.2cm、復元底径7.6cmを測る。外面・淡茶色、内面・淡茶白色を呈している。底部の調整は回転ヘラ切り離し後ナデによるものである。器面はナデにより調整され、胎土中には角閃石、石英、長石粒等を含む。

012は坏ｄの体部資料である。内外面とも淡黄褐色を呈し、外器面はミガキａ、内器面はミガキａ$_2$による調整がおこなわれている。胎土中には石英、長石粒等を含んでいる。

013 は赤褐色を呈する土師器坏底部資料であり、内外器面ともナデにより調整される。底部は回転ヘラ切り離し後ナデにより仕上げられている。

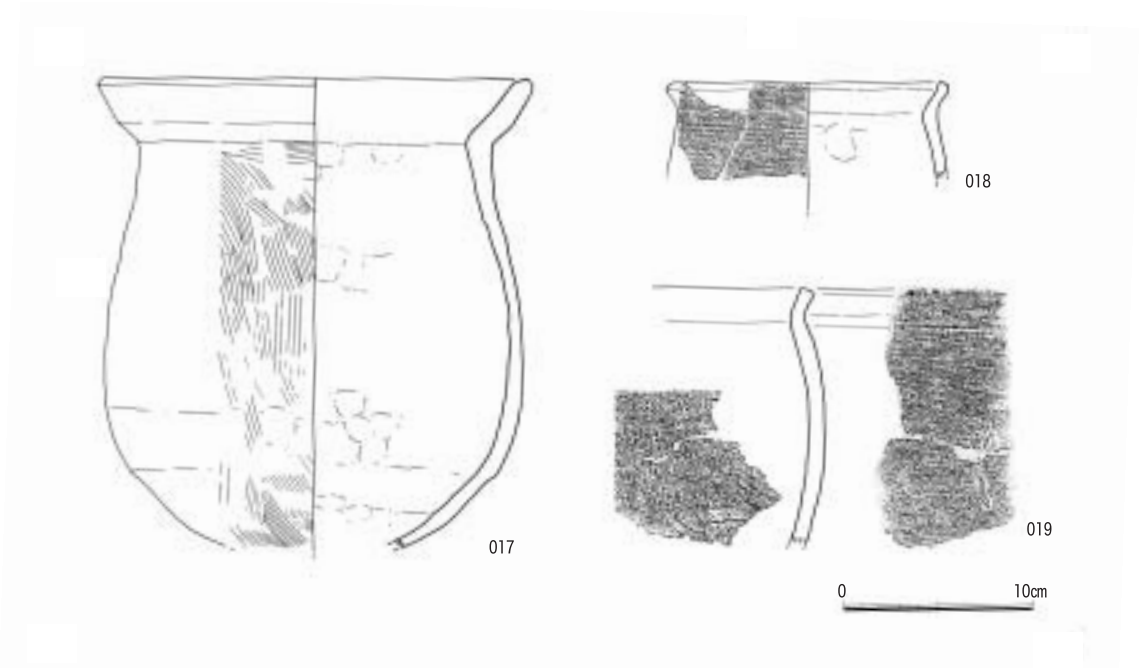
014 は直線的に立ち上がる土師器口縁部資料であり、復元口径12.8㎝を測る。淡黄白色を呈し、胎土中には角閃石、石英粒を含んでいる。

015は口径12.8cm、器高3.0cm、底径8.5cmを測る底部を回転ヘラ切り離しにより成形される土師器坏である。淡茶褐色を呈し、ナデによる調整がおこなわれる。

016は淡茶褐色を呈し、復元口径13.8cm、器高4.3cm、復元底径9.2cmを測る。底面は回転ヘラ切り離し後ナデにより調整されている。胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。

017～019は土師質甕資料である。**017**がいわゆる企救型甕、**018・019**が豊後大分形甕に分類されるものである。

017は復元口径23.0㎝を測る企救型甕資料であり、復元口径23.0㎝を測る。内外器面とも暗赤褐色を呈し、胎土中には石英、金雲母粒等を含んでいる。器面の調整は外器面がタテ方向の粗いハケ目、内器面はナデにより調整される。外器面には帯状にススの付着が認められ、煮炊きに使用されたことを示し

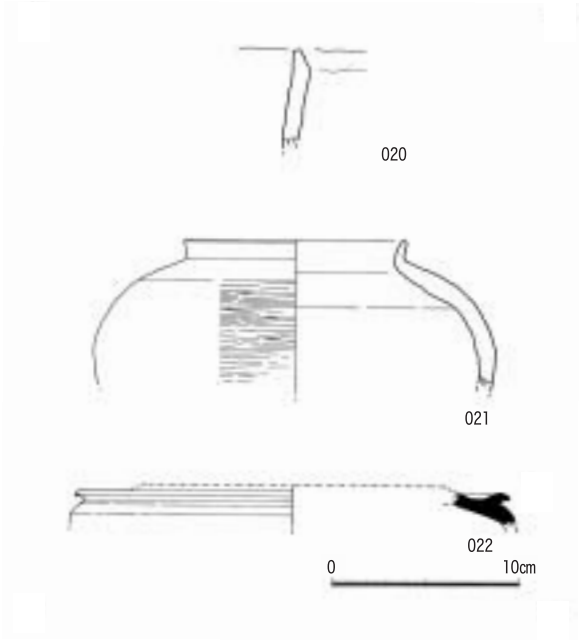


第223図　SX354出土遺物実測図③（1/4）

ている。

018 は豊後大分形甕の口縁部資料であり、長胴気味の体部から短く外方へ延びる口縁部が付けられる。復元口径14.0cmを測り、外面・淡赤褐色、内面・淡茶灰色を呈する。胎土中には角閃石、長石粒等を含み、器面の調整はヨコナデによる。体部上部にはカキ目風のナデ調整がおこなわれている。

019は018と同じく豊後大分形甕の口縁部資料である。内外面とも暗赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、橙色粒子、金雲母を含んでいる。器面の調整はナデによるものであり、体部上半にカキ目風のナデ調整がおこなわれる。器内面には格子目タタキ痕が残っている。



第224図　SX354出土遺物実測図④（1/4）

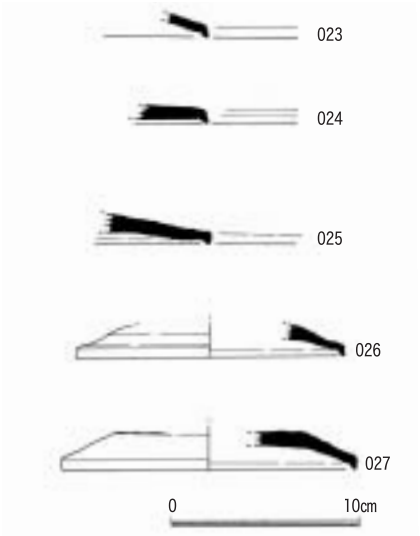
020 は製塩土器口縁部である。内外面とも淡茶褐色を呈し、内器面には布目痕を残す。器面の調整はナデによる。

021 は土師質無頸壺の口縁部資料である。復元口径11.6㎝を測り、内外面とも淡茶褐色を呈している。胎土中には長石、角閃石粒を含み、外器面・ミガキａ、内器面・ナデにより調整される。

022 は須恵器圏足硯と思われる破片資料である。灰茶色を呈する。復元口径23.0cmを測る。ナデによる器面調整がおこなわれる。

023～027は須恵器蓋資料である。端部を折り曲げ、Ｌ字状に口縁部を成形する。**023**は外面・灰色、内面・淡灰色を呈し、内外器面ともナデ調整により仕上げられる。

024 は低平な器形を呈する蓋端部資料であり、内外面とも暗灰色を呈している。



第225図　SX354出土遺物実測図⑤（1/4）

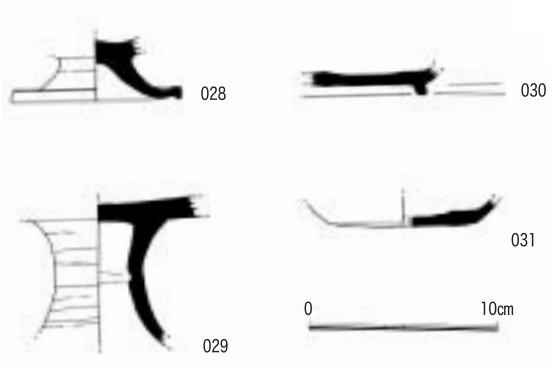
025は須恵器蓋端部資料であり、暗灰色を呈している。ナデにより調整される。

026は復元口径7.0cmを測り、淡灰色を呈する。

027は復元口径15.4cmを測り、淡灰色を呈している。

028は復元底径8.8cmを測る須恵器高坏の脚部片であり、外面・淡灰褐色、内面・淡茶灰色を呈する。脚部形態から陶邑編年Ⅲ０型式１段階のものと推定される。

029 は須恵器高坏脚柱部の破片資料であり、暗灰色を呈し、器面調整はナデにより調整される。



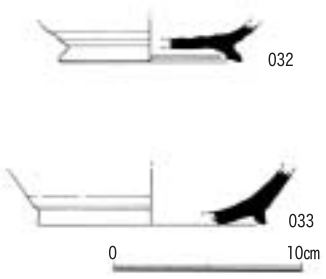
第226図　SX354出土遺物実測図⑥（1/4）

030 は須恵器高台付坏破片であり、断面方形を呈する貼り付け高台が付される。淡灰色を呈し、底部はヘラ切り離し後ナデによる。

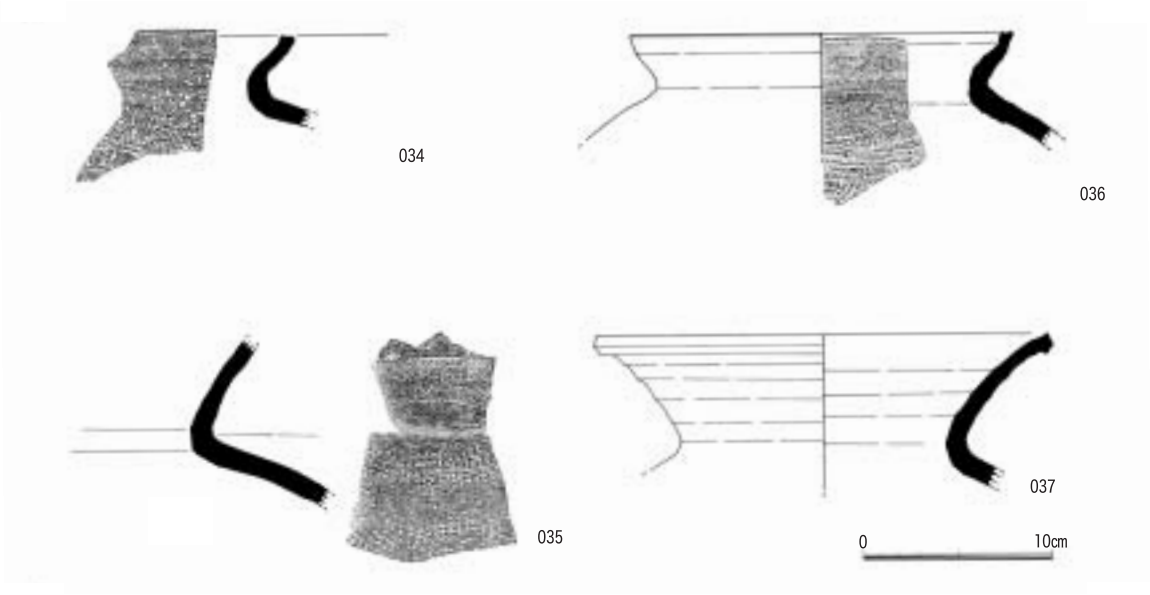
031 は須恵器坏の底部資料である。淡灰白色を呈し、ナデ調整がなされる。底部には回転ヘラ切り離し痕が残っている。

032・033 は須恵器長頸壺の底部資料である。**032** は踏ん張り気味に外方向に開く高台が付せられ、高台内面には突出部が形成されている。淡灰白色を呈し、復元底径9.6cmを測る。

033 は復元底径12.0cmを測り、外面・灰黒色、内面・暗灰色を呈している。底部底面は高台内部で突出し接地する。高台は断面方形のものが貼付されている。



第227図　SX354出土遺物実測図⑦（1/4）



第228図　SX354出土遺物実測図⑧（1/4）

034～037は須恵器甕口縁部資料である。**034・036**は口縁部上端を水平に成形し、上面に沈線状の窪みを設ける資料である。

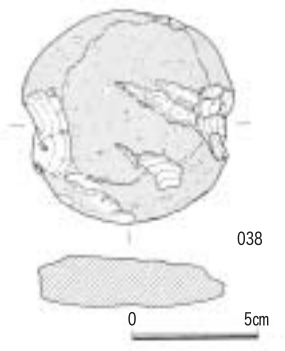
034 は灰褐色を呈し、内外器面ともナデによる調整がおこなわれる。外器面の肩部には格子状のタタキ痕が残る。

035 は口縁端部を欠損する。内外面とも暗灰褐色を呈し、外器面はタタキ後カキ目調整がなされ、内器面にはあて具痕が残っている。

036は復元口径20.0cmを測り、外面・淡灰色、内面・暗灰色を呈する。ナデによる調整がおこなわれる。

037は外方向に大きく開く口縁部を有する甕資料である。口縁端部外面を肥厚させる。内外面とも暗灰褐色を呈し、ナデにより調整される。復元口径23.8cmを測る。

038は凝灰岩製の石錘資料である。8.5cm×8.6cm×2.1cmを測り、



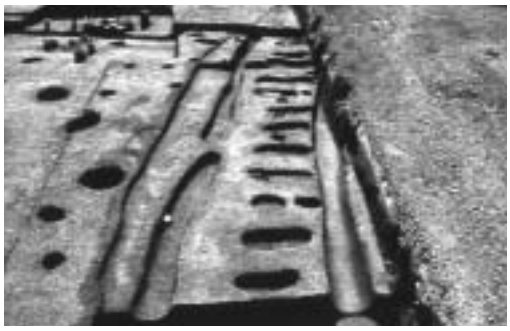
第229図　SX354出土遺物実測図⑨（1/3）

重量125.0ｇを測る。暗灰色を呈している。

以上が092SX354の埋土内から出土した遺物群である。７世紀末から８世紀初頭に比定される資料も含んでいるが、出土遺物の主体と年代的な下限は８世紀後半から９世紀である。

092SF310（第209～211・230図）

ここでは092SF310の路床材、あるいは舗装材中、および上部埋土092SX354から出土した遺物を掲載した。092SX354出土遺物との違いは、出土位置を特定できない遺物群であるという点であり、ここで一括して報告する。



第230図　SF310完掘状況（東方向から）

出土遺物（第231～236図）

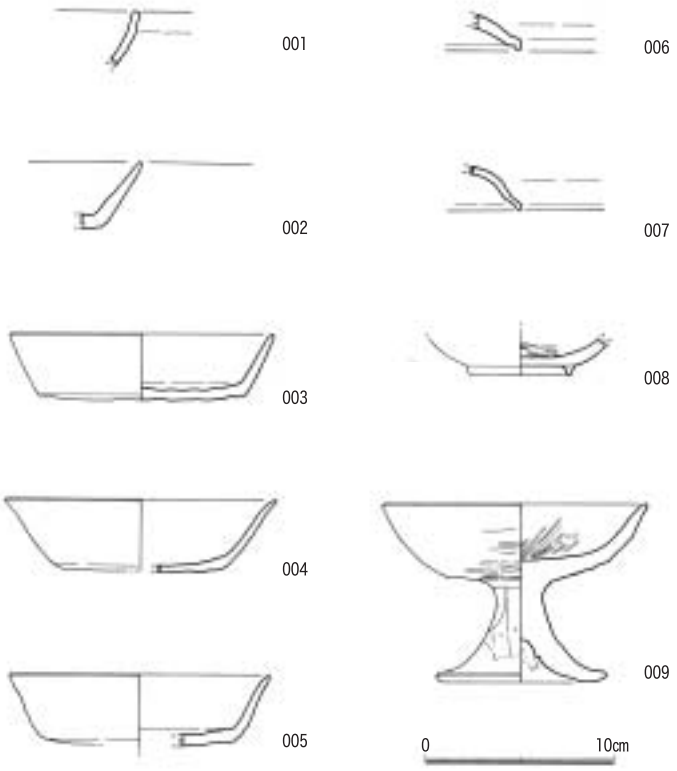
001～005は土師器坏身資料である。

001 は坏口縁部であり、淡橙色を呈する。口縁端部は強いナデにより調整され、角閃石、長石粒を含んでいる。

002 は上方へ直線的に延びる口縁部資料である。ナデによる調整がおこなわれ、淡茶褐色を呈している。

003は復元口径13.8cm、器高3.5cmを測る。外面・淡赤褐色、内面・淡茶褐色～暗茶灰色を呈する。器表面はナデにより、底部はヘラ切り離し後ナデによる調整がおこなわれる。

004 は内外面とも赤茶褐色を呈する。器面のナデによる調整と外底面はヘラ切り離しの後ナデによる調整がおこなわれる。胎土中には長石粒を内包する。復元口径14.2cm、器高3.8cm、復元底径7.6cmを測る。



第231図　SF310出土遺物実測図①（1/4）

005は外面・淡茶褐色、内面・淡茶白色を呈する。口径13.6cm、器高3.8cm、底径9.9cmを測る。底部はヘラ切り離し後ナデによる。

006～007 は土師器蓋の端部資料である。**006** は口縁端部がクチバシ状に屈曲する。器面の調整はナデにより調整され、内外面とも淡橙色を呈している。

007は内外面とも淡橙色を呈し、ナデによる調整がおこなわれる。

008は黒色土器Ａ類椀の底部資料である。復元底径5.4cmを測り、底部には断面三角形を呈する貼り付け高台を付している。外器面はナデ、内器面はヘラミガキによる調整がなされる。外面・淡灰褐色、内

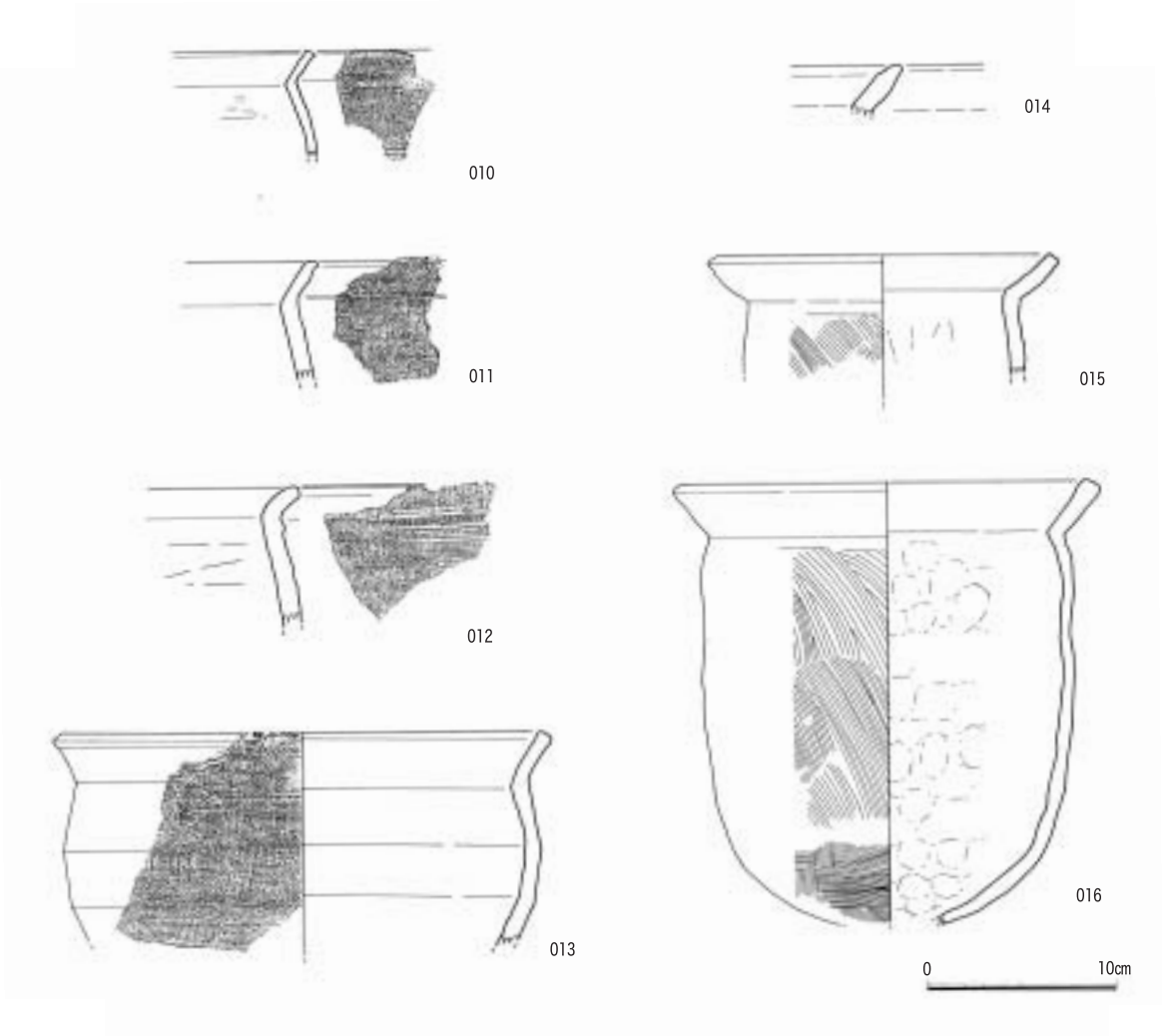
面･淡灰黒色を呈している。体部の球形化が進行しており、９世紀中頃から後半に比定されるものである。

009は土師器高坏資料である。復元口径13.9㎝、器高9.4㎝、底径9.0㎝を測る。器面の調整はナデと工具ナデによる調整がなされるが、坏部のみヨコ方向のヘラミガキが施される。内外面とも淡赤橙色～淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、橙色粒子を含んでいる。坏部内面には放射状の暗文が認められる。

010～013は豊後大分形甕の口縁部資料である。**010**はナデ肩形状を示す体部から短く外方へシャープに延びる口縁部が接続する。外面・淡赤褐色、内面・淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、橙色粒子を含んでいる。器面の調整はナデによるものであるが、口縁部下位、体部上半にはカキ目調整がなされている。

011 は内外面とも淡赤褐色を呈する口縁部資料である。口縁端部上面に平坦面を形成する点を形態上の特徴とする。器面の調整は他の豊後大分形甕と同様にナデ主体の調整がなされ、口縁部外面下位にはカキ目調整がおこなわれている。

012 は同種の甕であり、ナデとカキ目の組み合わせによる調整がなされている。口縁端部は丸くおさめられる。内外面とも淡赤褐色を呈している。



第232図　SF310出土遺物実測図②（1/4）

013は復元口径26.4㎝を測る資料であり、淡赤褐色を呈する。調整パターンは他と同じくナデとカキ目であり、外器面の調整下にはタタキ痕が残る。胎土中には角閃石、石英、橙色粒子、長石粒を含んでいる。

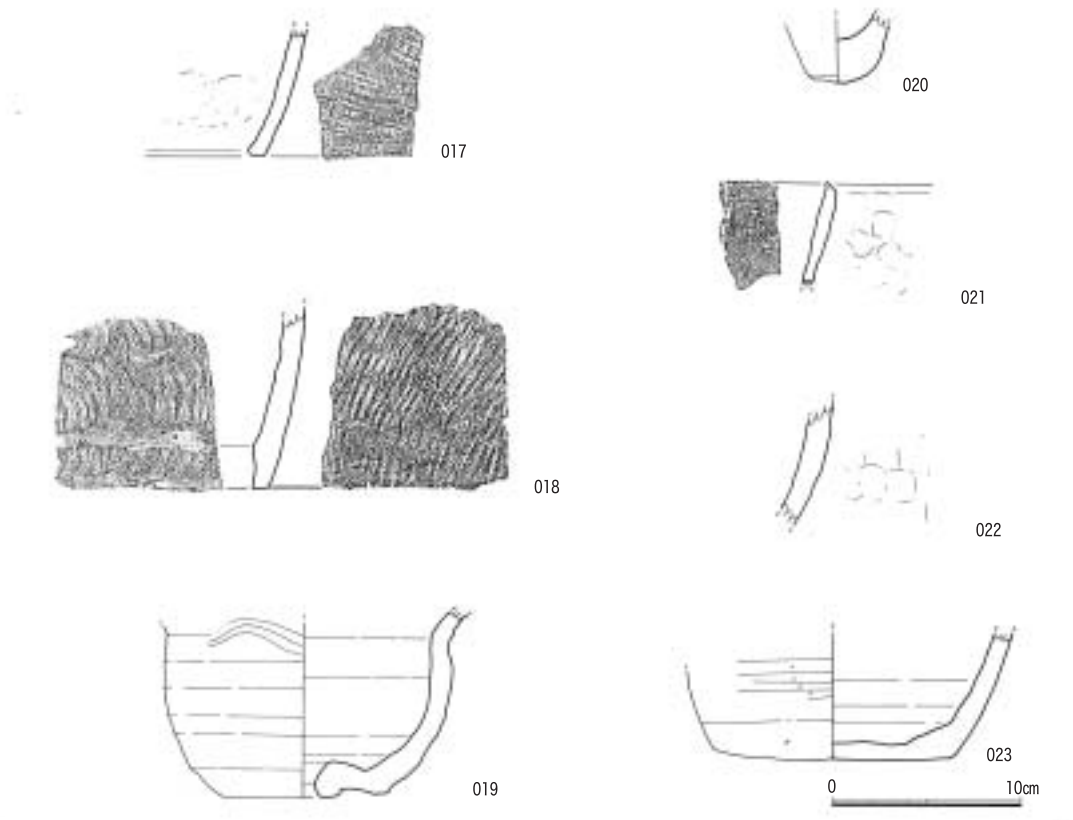
014～016は企救型甕に分類される資料である。**014**は口縁端部資料であり、端部先端は舌状におさめられる。ナデにより仕上げられ、赤褐色を呈する。胎土中には角閃石、長石粒を内包している。

015は端部をナデにより面取り風に仕上げる口縁部資料である。復元口径17.6㎝を測る。器面の調整は外器面は粗いタテ方向のハケ目、内器面はナデによる。赤褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。

016は底部の一部を欠損しているが、ほぼ完形となる資料である。内外面とも茶褐色を呈し、器面の調整は外器面・タテ方向のハケ目、内器面・ナデによる。外器面の大半はタテ方向の粗いハケ目が施され、底面付近は不定方向のハケ目調整がなされている。胎土中には石英粒等が認められ、他に注目されるものとして緑色結晶片岩片の混入がある。

017・018は豊後大分形甑の基底部資料である。**017**は淡赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英、橙色粒子を含む。外器面にはタタキ痕が残り、ハケ目調整がなされる。内器面はナデによる器面調整がなされている。内器面にはかすかにあて具の痕跡が残る。

018は内面基部に平坦面を形成する甑基底部であり、外器面にはタタキ痕、内器面にはタタキあて具痕が残る。内外面とも淡赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、橙色粒子を含んでいる。



第233図　SF310出土遺物実測図③（1/4）

019は底部に焼成前穿孔をもつものであり、内側から底面にあけられる。器種は不明であるが、甑である可能性が高い。淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子を含む。外器面にはヘラケズリ後ナデ、内器面はナデによる調整がおこなわれる。体部から外方向にひろがる部分にヨコ方向の櫛描波状文が施文される。

020〜022は製塩土器資料である。**020**は製塩土器の底部であり、ナデによる器面調整がおこなわれる。表面は被熱しており、外面・淡赤白色、内面・灰黒色を呈する。胎土中には石英粒等を内包する。

021 は口縁部資料であり、内器面に布目痕を残す。内外器面ともナデにより調整され、外面・淡橙灰色、内面・淡橙色を呈している。

022は外面・淡橙色、内面・淡赤褐色を呈する製塩土器の体部破片である。器面はナデにより調整される。

023は土師質壺の底部資料である。外面・淡赤褐色、内面・淡黄褐色を呈し、胎土中に石英、橙色粒子を含んでいる。外器面はヨコ方向の回転ヘラケズリがなされ、他はナデによる器面調整がおこなわれる。復元底径12.4㎝を測り底部は回転ヘラ切り離し後ナデにより調整される。

024〜026 は須恵器甕の口縁部資料である。**024** は口縁部端部外面に粘土帯を貼り付け、肥厚させるタイプの須恵器甕口縁部資料である。内外面とも淡灰色を呈している。

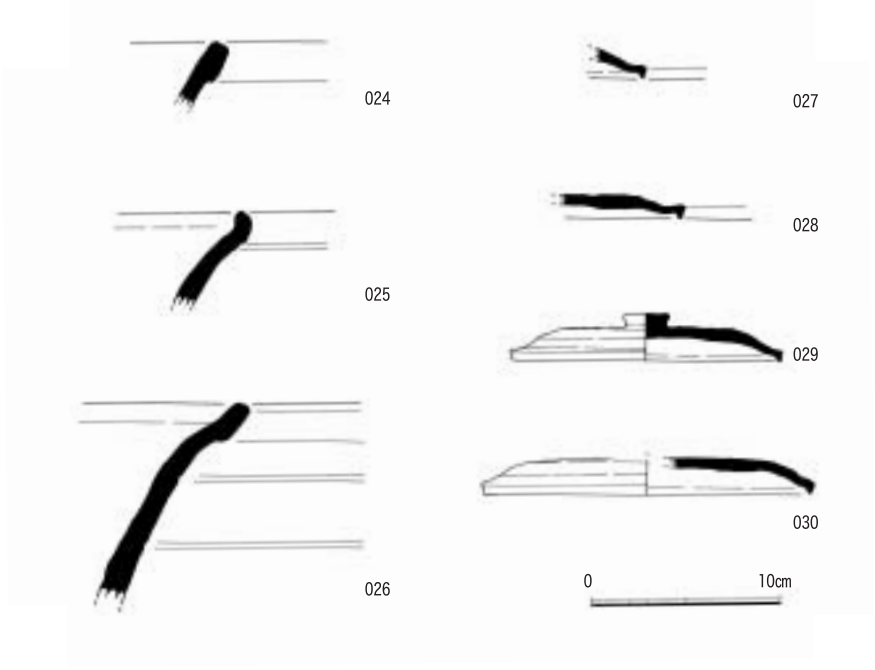
025は口縁端部を短く内湾させる形状を呈する須恵器甕口縁部資料である。外面・淡灰色、内面・灰色を呈し、ナデにより調整される。

026 は外反気味に立ち上がる口縁部の外面に粘土帯を貼り付け肥厚させる須恵器甕口縁部である。外面・淡灰色、内面・灰色を呈している。器面の調整はナデである。

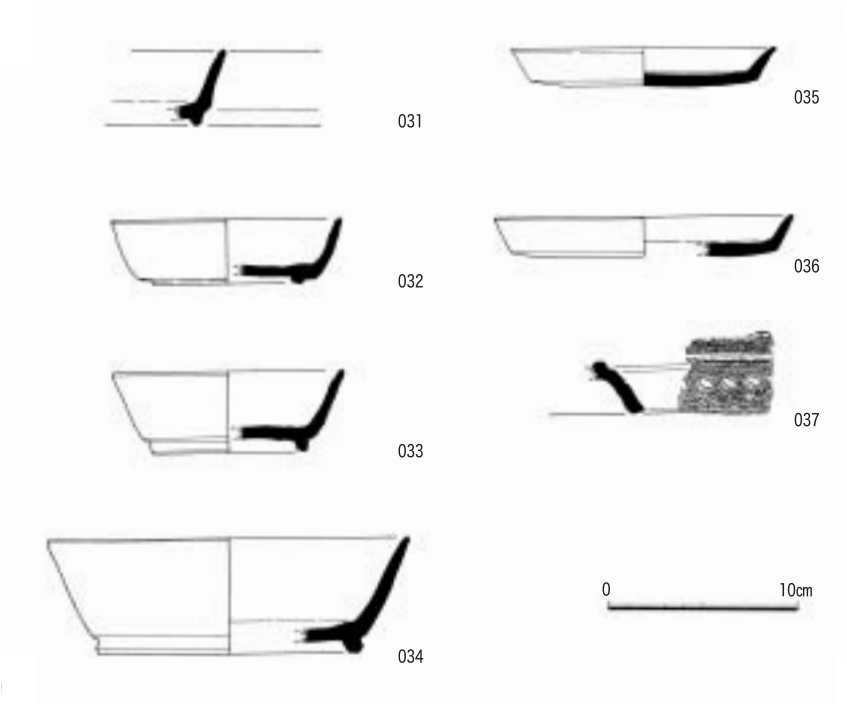
027〜030は須恵器蓋資料である。いずれの資料も口縁端部をクチバシ状に屈曲させる。

027・028は内外面とも淡灰白色を呈し、ナデによる器面調整がおこなわれる。

029 は頂部にボタン状のツマミをもち、器面は内外面とも淡灰色を呈している。復元口径14.0㎝、器



第234図　SF310出土遺物実測図④（1/4）



第235図　SF310出土遺物実測図⑤（1/4）

高2.5cmを測る。

030は口径17.2cmを測り、内外面とも淡灰白色を呈する。ツマミ部を欠損する。器表面の調整はナデである。いずれの蓋資料も８世紀後半から末に比定されるものである。

031～034は須恵器高台付坏である。**031**は口縁端部を舌状に仕上げる高台付坏であり、内外面とも淡灰色を呈する。高台は断面台形のものが、底部から体部への立ち上がりのすこし内側に寄った部分に貼付される。

032は復元口径12.0cm、器高3.4cm、復元底径7.8cmを測る。内外面とも淡灰色を呈している。高台内器面にはヘラ切り離しの痕跡が残り、ナデによる調整がおこなわれている。

033は復元口径12.0cm、器高4.3cm、復元底径8.0cmを測る資料である。淡灰色を呈し、高台内器面には回転ヘラ切り離しの痕跡を残す。

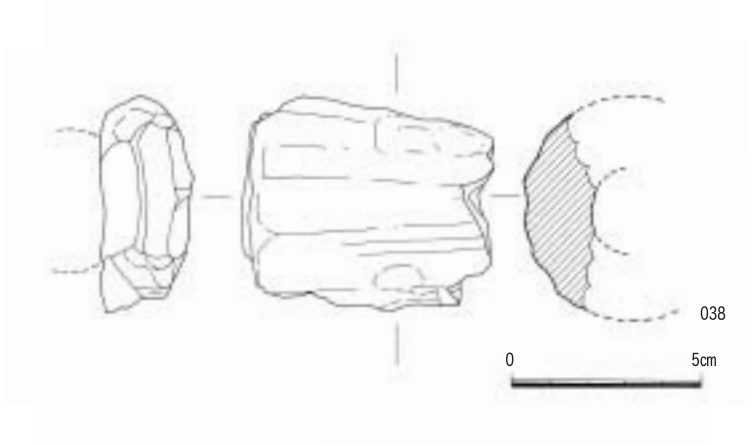
034は復元口径19.0cmを測る少し大ぶりな須恵器高台付坏資料である。器高6.1cm、復元底径13.6cmを測る。外面・淡灰色、内面・淡灰褐色を呈し、器面の調整はヨコナデにより仕上げられる。

035・036は須恵器皿資料である。**035**は底部からやや外反気味に立ち上がる口縁部を有している。復元口径14.0cm、器高2.0cm、復元底径12.0cmを測る。内外面とも暗灰色を呈し、内器面はナデ、外器面は回転ヘラケズリが施されている。

036も035と同種の皿資料である。口縁部の外反度は035に比べ若干にぶい。復元口径15.6cm、器高2.1cmを測る。内外面とも灰色を呈し、ナデによる仕上げがおこなわれる。底部にはヘラ切り離し痕が残る。

037は須恵器硯の脚と思われる資料である。外面・灰黒色、内面・灰色を呈し、器面の調整はナデによる。脚外器面に刺突文が施文される。

038はフイゴの羽口破片である。外面・淡黄白色、内面・淡灰褐色を呈する。胎土中には、角閃石、



第236図　SF310出土遺物実測図⑥（1/2）

石英、長石、橙色粒子を内包する。外器面にはススの付着が認められる。外器面の調整はナデである。

以上が各段階の様相と092SF310、および付属遺構からの出土遺物である。

これらの遺物と段階設定による遺構の所産時期であるが、最も良好な資料に第１段階の側溝埋土から出土した土師器坏、甕（企救型甕）がある。これらの遺物の帰属年代が８世紀末から９世紀初頭前後に想定されることから、第２段階の改修時期をほぼこの時期に推定することができる。最終段階については、土器集積部分から黒色土器Ａ類、緑釉陶器小片などが出土しており、これらの遺物の諸特徴が９世紀代に比定されるものであることから、９世紀中に構築され、廃絶したものと想定される。

竪穴住居跡（ＳＨ）

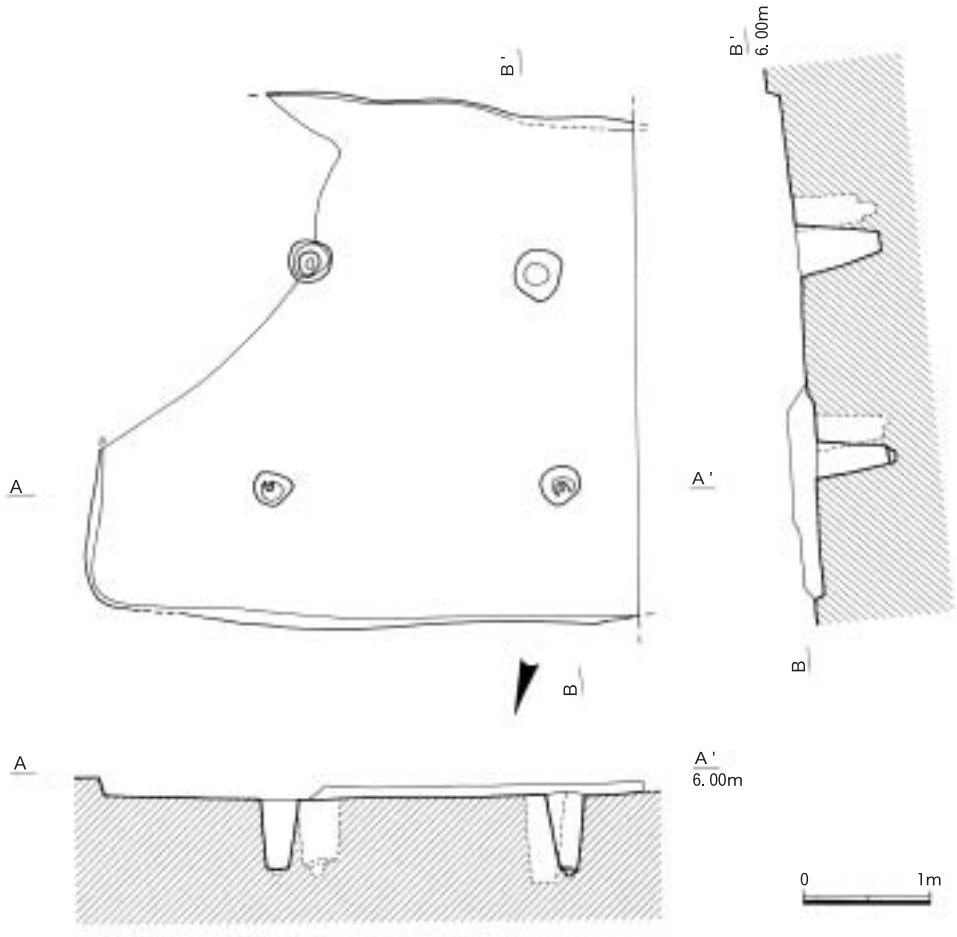
調査区内では、多くの切り合い関係を示しながら19基の竪穴住居跡を検出した。以下においては、各竪穴住居跡について内容を記す。

092SH060（第237図）

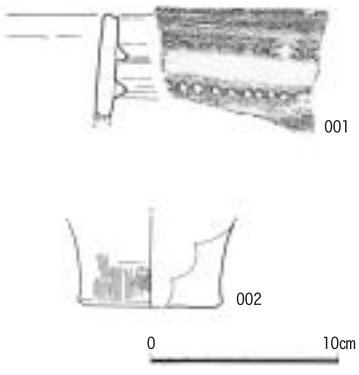
092SH060は、調査区西壁中央付近において確認された竪穴住居跡である。住居西壁側の一部が調査区の外に展開する。また、住居南東角付近は撹乱穴により切られており欠失する。平面プランは方形を呈し、住居規模は4.95m×4.6＋αmであり、現存壁高0.1mを測る。主柱は４本であり、約1.8～2.0mの間隔をもって配置される。柱穴は径0.2～0.25m程度であり、床面からの深さは約0.7m程度である。炉跡や貼り床の痕跡は確認することができなかったが、これは遺構の遺存状況による可能性もある。出土遺物には弥生時代中期に編年されるものが少量出土しているが、遺物の出土量は概して少なく、これをもって所産時期の特定をおこなうのは困難である。

出土遺物（第238図）

001 は下城式甕形土器の口縁部資料である。直立気味に立ち上がる口縁部の外面下位に二条の刻目突帯が貼付される。内外面とも淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。器面の調整はナデによる。



第237図　SH060平面・断面実測図（1/60）

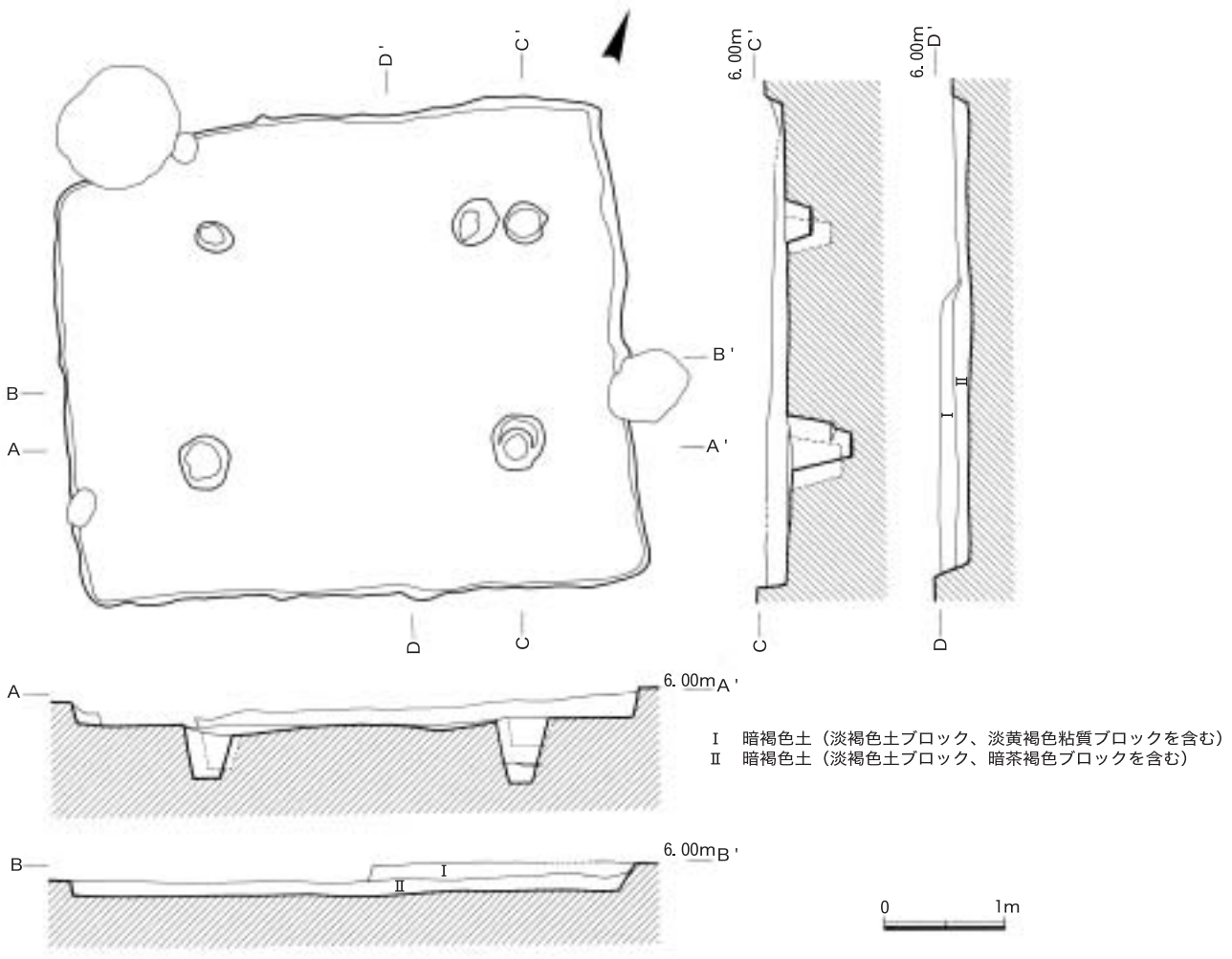


第238図　SH060出土遺物実測図（1/4）

002は復元口底径6.8㎝を測る甕底部資料である。淡茶褐色を呈する。胎土中には長石、石英粒等を含み、外器面はタテ方向のハケ目により調整される。いずれの資料も弥生時代中期に比定されるものである。

092SH070（第239図）

092SH070は調査区北西部で検出した長方形の平面プランを呈する竪穴住居跡である。短辺4.0m×長辺4.6mの規模を有し、検出面から床面までの現存する深さは0.2mを測る。主柱は４本であり、貼床や壁溝などの施設は確認されない。堆積埋土は暗褐色土層により構成されるが、堆積土内に内包されるブロック土の様相から上下２層に分層することが可能である。いずれも多量のブロック土を含んでおり、人為的に埋め戻された状況が想定される。炉跡等についても認められない。

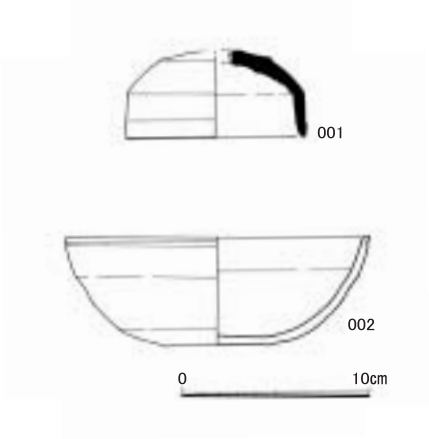


第239図　SH070遺構実測図（1/60）

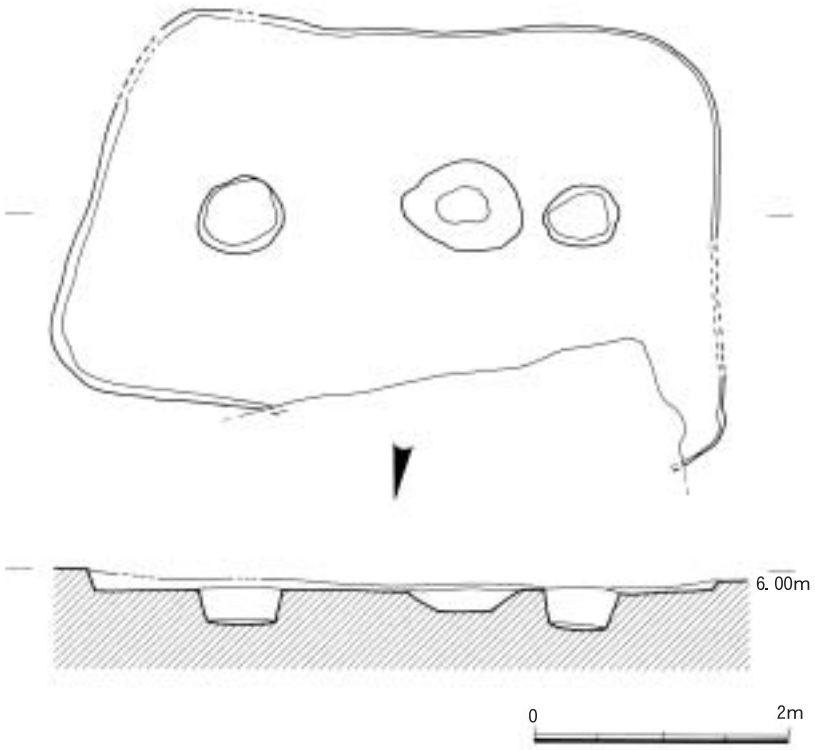
出土遺物（第240図）

出土遺物は概して少なく、図化の可能な遺物は僅かに２点のみである。**001** は須恵器坏蓋であり、内外面とも暗灰色を呈している。器面の調整はヨコナデによりおこなわれるが、頂部には回転ヘラ切り離し痕が残る。約1/3が遺存する。陶邑編年Ⅰ型式４段階に比定されるものであり、５世紀後葉に編年される。

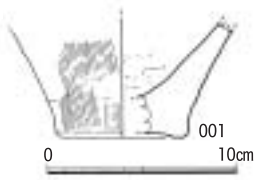
002 は内外面とも赤橙色を呈する土師器椀の資料である。約1/3が遺存する資料であり、復元口径16.0㎝を測る。口縁部外面に沈線状の窪みをもつ点を特徴とする。胎土中には石英、長石粒を含んでいる。８世紀前半から中頃に比定されるものか。



第240図　SH070出土遺物実測図（1/4）



第241図　SH155平面・断面実測図（1/60）



第242図　SH155出土遺物
実測図（1/4）

092SH155（第241図）

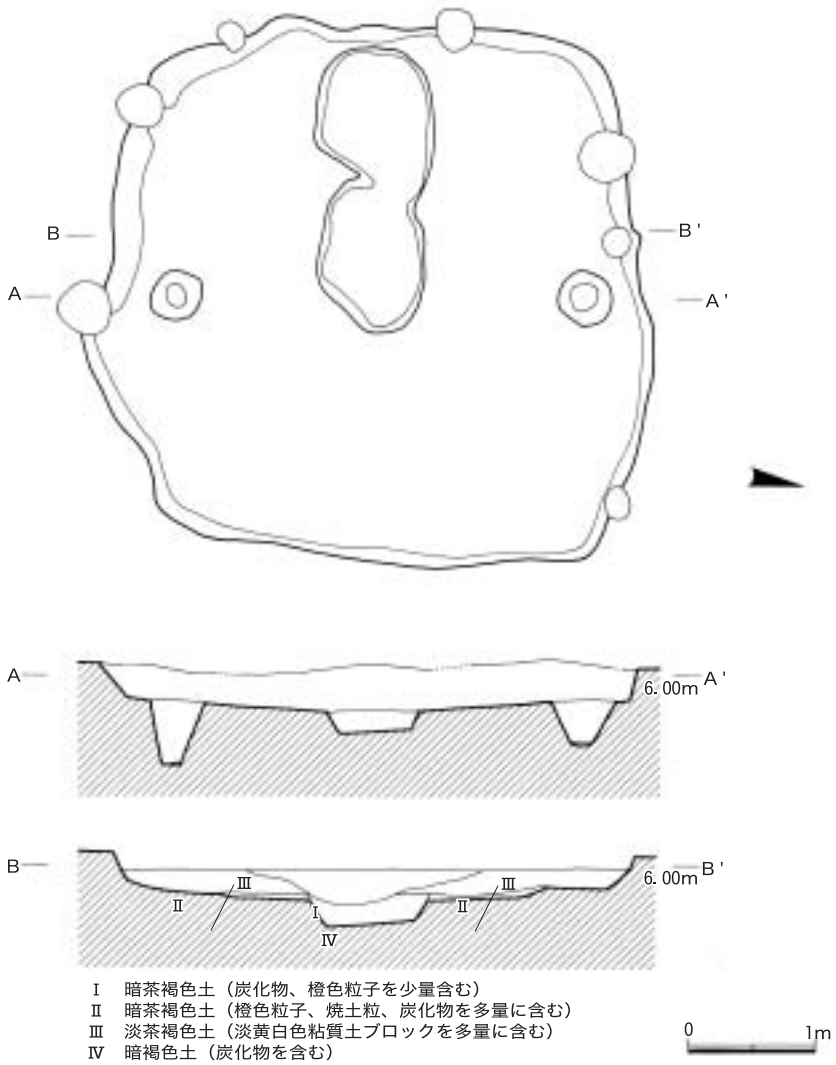
092SH155は092SH070と切り合い関係を有する竪穴遺構である。092SH070の南側に所在する。柱と思われる柱穴を２基確認することができ、東西方向に配置される。竪穴の規模は3.2ｍ×4.9ｍを測り、検出面から底面までの深さは0.15mである。柱穴間の西に寄った部分には長軸0.9ｍ、短軸0.72m、深さ0.18mの土坑が設置されている。柱穴は径0.5m程度のものであり、深さは0.35mと極めて浅い。遺存状況が極めて悪く、堆積埋土等の観察を十分におこなうことができなかったため、確証はないが、あるいは、貼床等が存在し、床面がさらに高かった可能性も残されている。炉跡等の付帯施設は確認されない。

出土遺物（第242図）

001は復元底径6.4cmを測る甕形土器である。外面は淡橙褐色を呈し、ハケ目とナデによる調整がおこなわれる。内面は淡茶褐色を呈しており、全面ナデによる器面調整が実施される。胎土中には長石、角閃石、石英粒を内包する。弥生時代中期後半頃の所産となるものであるが、出土状況、遺存状況等からこの遺物が必ずしも遺構の帰属年代を示しているとは判断し難い。

092SH160（第243図）

092SH160は中央やや北寄りの地点で検出した竪穴遺構である。平面プランは隅丸方形を呈しており、規模は4.15m×4.25mを測る。遺存深度は検出面から最深部まで約0.28mである。竪穴の断面形状は中央が窪む皿状を呈しており、床面レベルを揃えるために中央部付近にのみ淡茶褐色土による貼床がおこなわれている。主柱は２本であり、北壁、南壁に近い中央付近に配置される。また竪穴床面の西側部分には不整長楕円形の土坑が構築されている。長軸2.2m、短軸0.9m程度の規模を有し、炭化物を含む暗褐色土を埋土にもつ。平面プランの形状から複数の小土坑の切り合いも想定されるが、調査では明確な

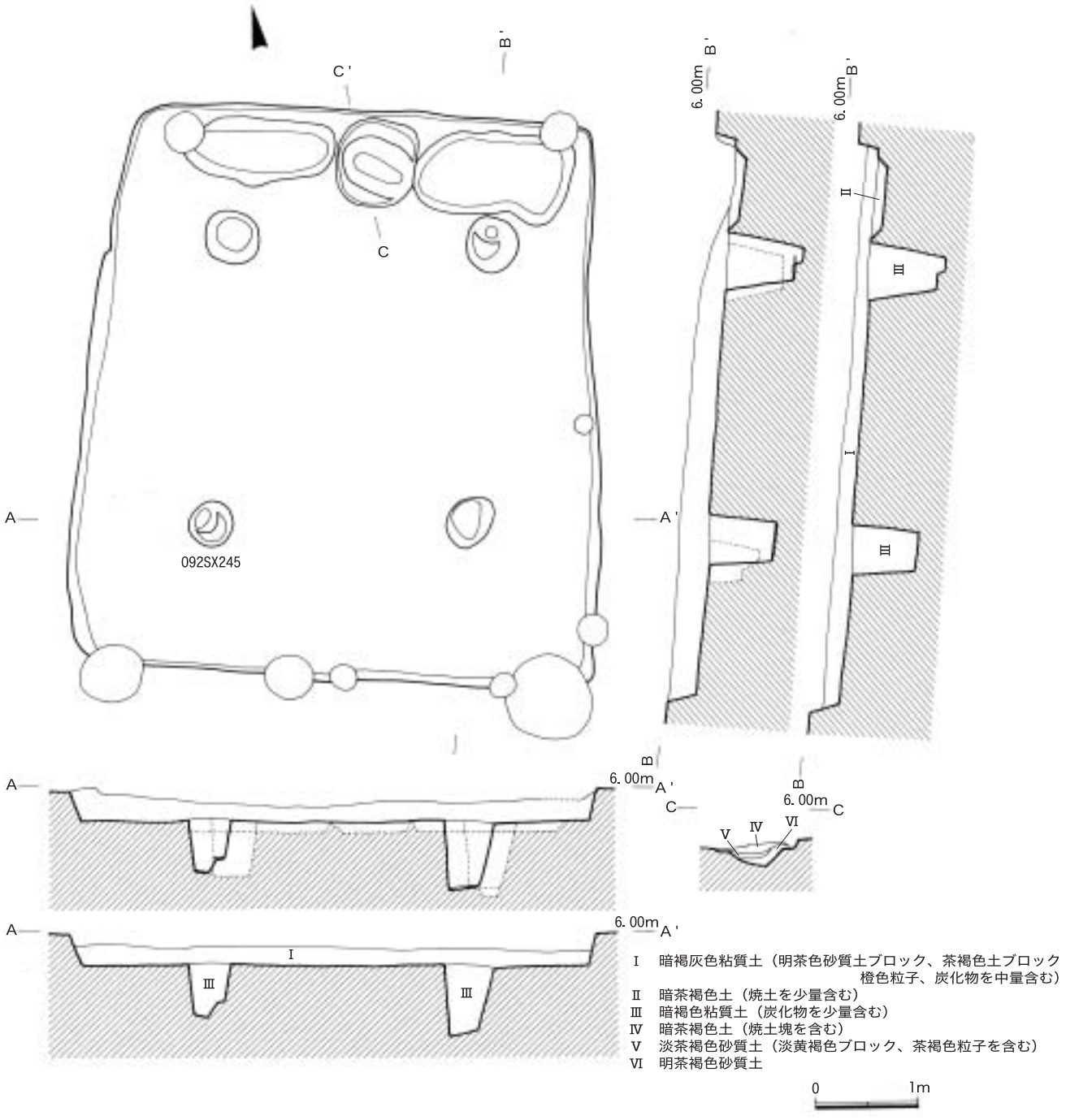


第243図　SH160遺構実測図（1/60）

切り合い関係を把握するにはいたっていない。

竪穴の堆積埋土は、暗茶褐色土により構成され、焼土粒や炭化粒などを比較的多く含んでいる。土層状況から人為的に埋め戻された可能性が想定され、中央部分には土坑状の掘り返しのプランも確認することができる。掘り返しのプランは略円形を呈し、径約1.8m、現存深度約0.25mを測り、炭化物、橙色粒子を含む暗茶褐色土を埋土にもつ。竪穴の床面には前述の土坑と柱穴のみであり壁溝や炉跡などの付帯施設は確認されない。

出土遺物は概して少なく、図化の可能なものはない。埋土中に複合口縁壺と思われる微細片があり、諸特徴から弥生時代終末期に比定されるものと考えられる。



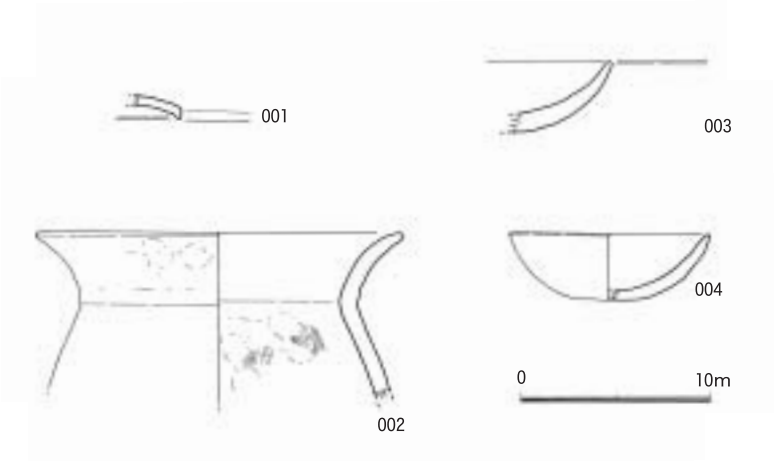
第244図　SH200遺構実測図（1/60）



第245図　SH200完掘状況（南方向から）

092SH200（第244・245図）

092SH200は調査区の南側地域のほぼ中央の位置で検出したプラン方形の竪穴遺構である。南北に若干長い長方形を呈している。南北長5.5m、東西長5.2mを測り、４本の主柱穴が床面に配置される。さらに北側の壁面には、中央に径0.7mの円形土坑を構築し、その両側に長軸1.4m、短軸0.75m程度の長土坑をシンメトリーな位置に配している。中央に造られている土坑は、床面から０.２ｍの程度の深さであり、底面には暗茶褐色砂質土、その上部には淡黄褐色土ブロックなどを含む淡茶褐色砂質土が充填されている。両側に配置される長土坑は約０.１ｍの深度を有し、暗茶褐色土を埋土とする。これらの遺構以外の付属施設は認められない。埋土内には古い遺物も混入するが、出土遺物の様相から８世紀初頭前後の所産になるものと推定される。



第246図　SH200出土遺物実測図①（1/4）

出土遺物（第246・247図）

001は土師器蓋の口縁端部資料である。端部を逆Ｌ字状に屈曲させる点を形態的な特徴とする。外面・淡茶褐色、内面・茶褐色～淡黒色を呈する。内外器面とも回転ナデにより調整される。８世紀前半から中頃に比定される資料である。

002は復元口径19.0cmを測る。内外面とも淡茶褐色を呈し、内外器面ともナデ、内器面の一部はハケナデにより調整される。胎土中には長石、角閃石粒等を含む。弥生時代後期の甕口縁部である。

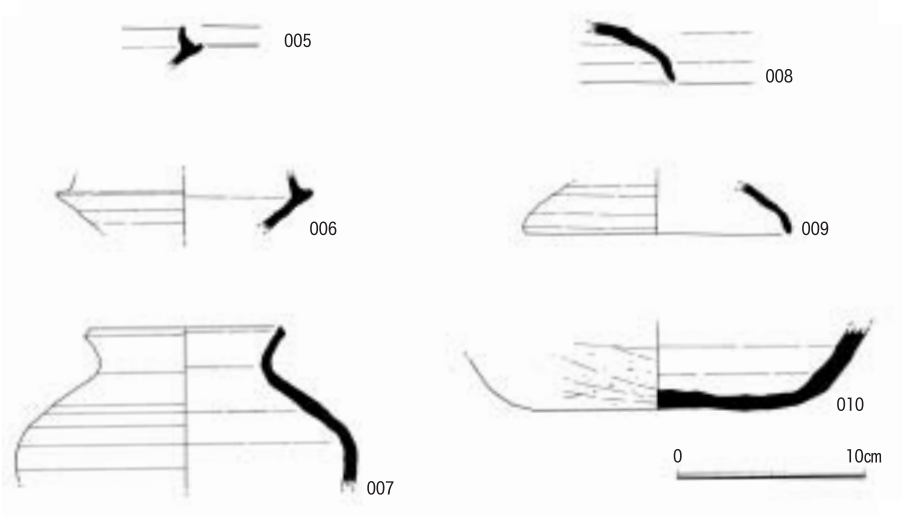
003 は土師器坏の口縁部資料である。器表面は風化のため剥離が進んでおり、調整の詳細は不明である。外面・淡茶褐色、内面・茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石粒を含む。７世紀後半から８世紀前半に比定されるものである。

004は003と同種の土師器坏資料である。内外面とも淡茶褐色を呈し、復元口径10.4cm、器高3.5cmを測る。調整に関しては、器表面が風化しており、調整の詳細は不明である。７世紀後半から８世紀前半に比定されるものであろう。

005・006 は須恵器坏資料である。**005** は内外面とも淡灰色を呈し、回転ナデにより調整される。陶邑編年Ⅱ型式５段階に相当するものであり、６世紀末～７Ｃ初頭に比定されるものである。

006は内外面とも暗灰褐色を呈し、回転ナデによる調整がおこなわれる。口縁端部が欠損しているものの形状からⅡ型式５段階に比定される資料と推定される。

007は、復元口径10.1cmを測る須恵器壺の口縁部から胴部資料である。外面・淡灰褐色、内面・灰褐色



第247図　SH200出土遺物実測図②（1/4）

を呈する。器表面は回転ナデにより調整される。

008は須恵器蓋の端部資料である。暗灰褐色を呈し、ナデによる器面調整がおこなわれる。

009は灰色を呈する須恵器蓋資料である。復元口径14.0㎝を測る。

010は須恵器底部資料であり、器種等の詳細は不明である。外面・淡灰褐色、内面・淡灰色を呈す。ナデによる調整がおこなわれ、底面には手持ちヘラケズリが実施される。器種については平瓶側面部、あるいは壺底部の可能性が考えられる。

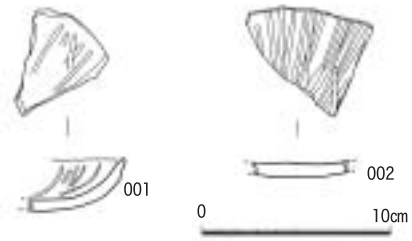
092SX245（第244図）

092SX245は092SH200の床面南西部に配置された主柱穴である。

出土遺物（第248図）

埋土内から少量の遺物が出土している。

001 は内面に放射状暗文を施文する土師器皿の口縁部資料である。口縁端部が舌状に仕上げられる。外器面は手持ちヘラケズリによる調整後ナデによる仕上げがおこなわれ、内器面は強いヨコナデにより調整される。内外面とも淡茶褐色を呈している。

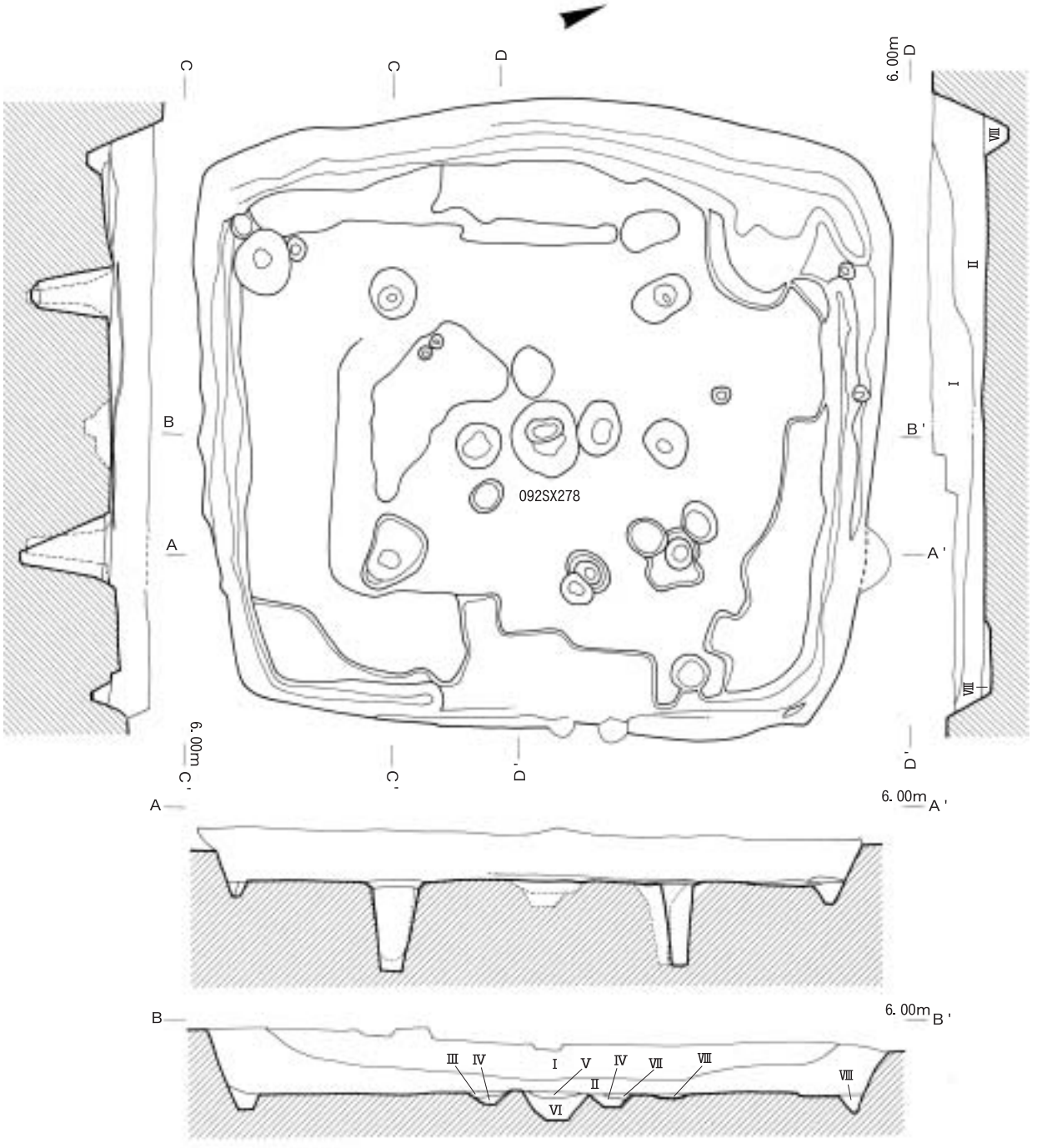


第248図　SH245出土遺物実測図（1/4）

002 は土師器坏の底面破片である。内外面とも淡黄茶褐色を呈し、胎土中には石英、長石、角閃石、橙色粒子、雲母粒を含む。内底面には細密な暗文が施文される。器面の調整は外器面がナデ後手持ちヘラミガキ、内器面はナデにより調整される。

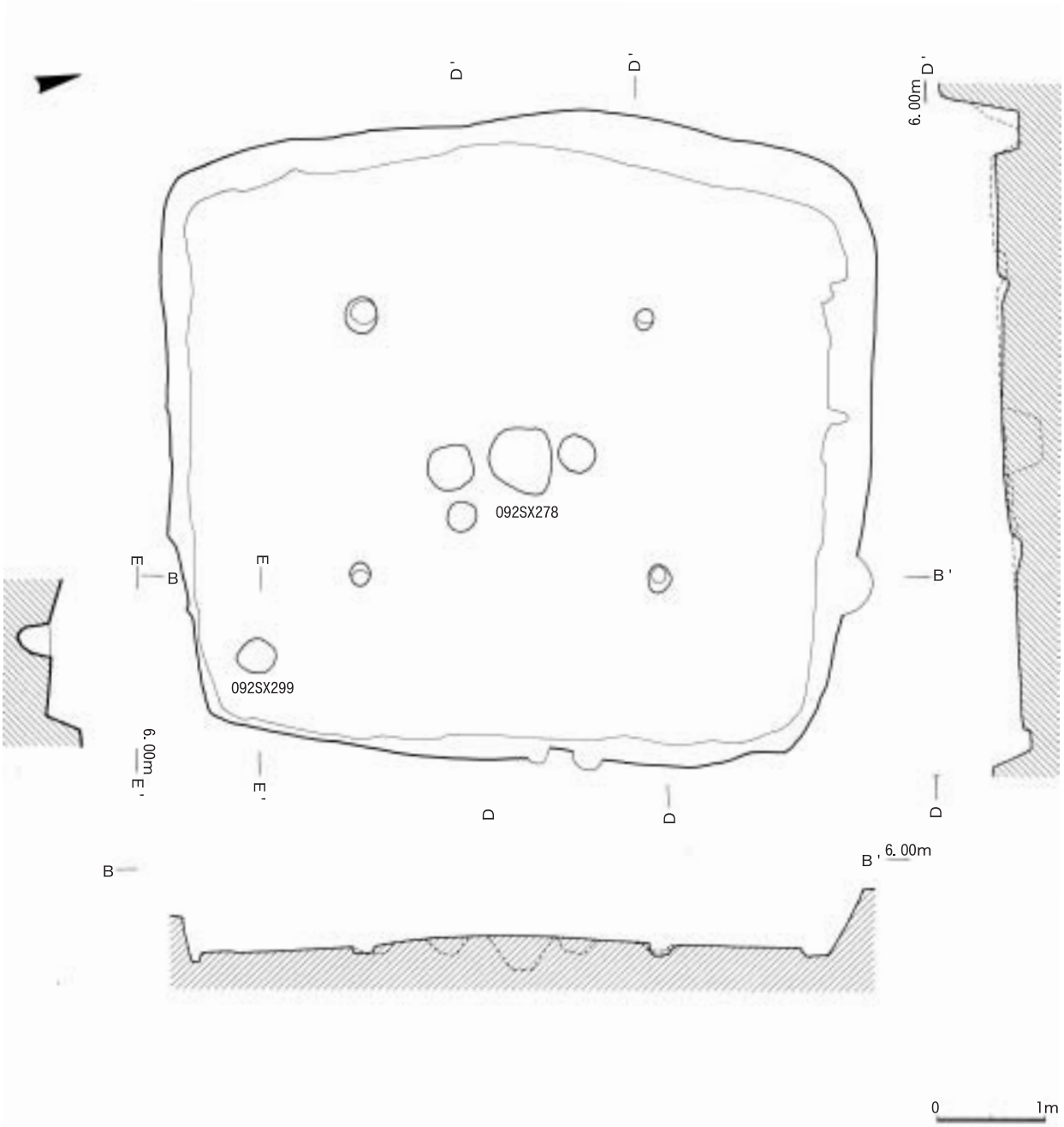
092SH250（第249～251図）

092SH250は南西角で検出した竪穴住居跡である。平面プランは方形を呈し、規模は6.65m×5.95m、底面までの深さ0.5mを測る。柱穴は４本であり、柱を埋設した後に貼床を施しており、柱径を知ることができる。貼床上面で確認できる柱径は0.15mから0.25mである。壁溝は幅0.20mから0.30mを測り、

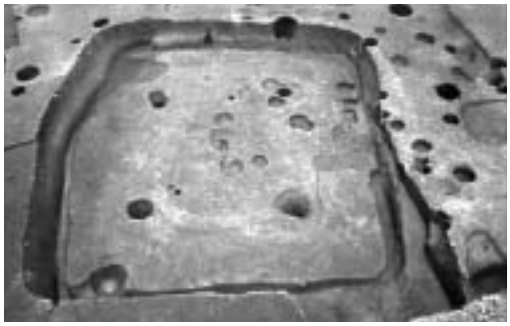


Ⅰ　明茶褐色土（淡黄褐色砂質土ブロック、橙色粒子、炭化物を多量に含む）
Ⅱ　淡茶褐色粘質土（黄褐色粘質ブロック、褐色ブロック、橙色粒子、灰褐色粘質土を含む）
Ⅲ　淡褐色灰色粘質土（炭化物、焼土粒を含む）
Ⅳ　淡茶灰色砂質土（焼土塊、黄茶色砂質粒子を含む）
Ⅴ　淡褐灰色粘質土（炭化物、焼土粒、淡黄茶色砂質土ブロックを含む）
Ⅵ　黒褐色砂質土（炭化物層、焼土粒、淡黄茶色砂質粒子を含む）
Ⅶ　明褐灰色粘質土（炭化物、焼土粒、淡黄茶色砂質粒子を含む）
Ⅷ　暗褐茶色土

第249図　SH250遺構実測図（1/60）



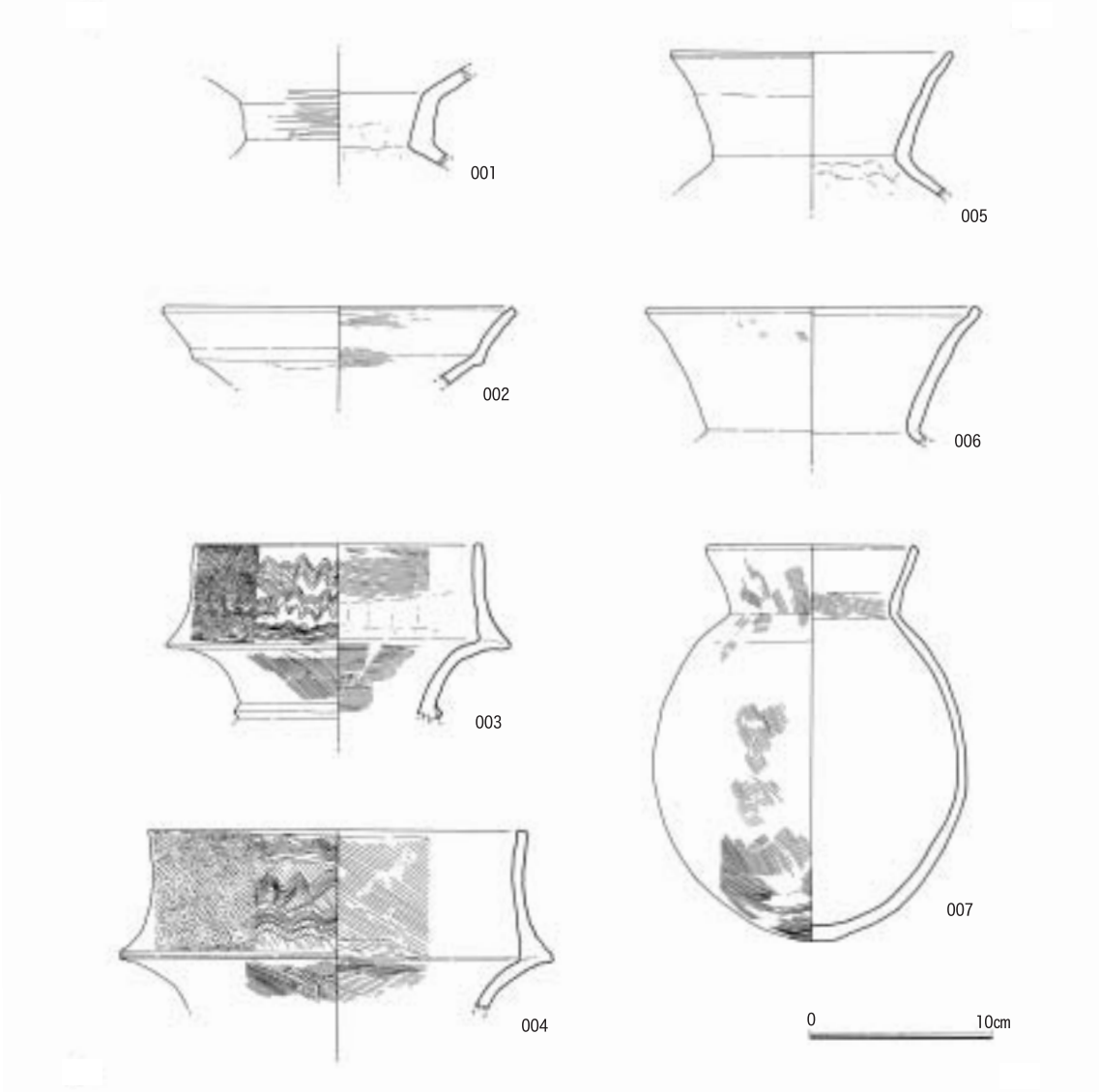
第250図　SH250平面・断面実測図（1/60）



第251図　SH250完掘状況（南方向から）

四周を巡っている。壁溝の深さは約0.15m程度となる。床面の中央には径0.55mの円形ピットが配置され、その南北両端には0.35m程度の小ピットが配される（092SX278）。住居の構築にあたっては、中央部分を最も高く残し、壁面方向の周囲を深く掘り込み暗茶灰色粘質土により貼床をおこなうことで住居床面をフラットに整形する。特に住居北西部と南東部の掘り込みの規模は大きく、最深部は検出面から1.0から1.2mまで掘り込んでおり、これに暗茶灰色粘質土による貼床を実施している。貼床土である暗茶灰色粘質土上面には壁溝が構築されている。貼床土を全面除去すると壁際には溝状に掘り込まれた窪みが確認され、広い部分では0.7m程度の幅を有する。特に北西角付近と東壁際中央付近には溜まり状の窪みが形成されている。住居の堆積埋土は上下二層に分層され、堆積土層の断面観察からは自然堆積と思われるような堆積状況を示すが、いずれの堆積埋土にも粘質土ブロックを内包しており、埋め戻しによるものである可能性も考慮しておく必要がある。

出土遺物に関しては、貼床面上面等から土器資料などが出土しており、これらの出土遺物から住居の帰属年代を古墳時代初頭頃と想定することができる。



第252図　SH250出土遺物実測図①（1/4）

出土遺物（第252～257図）

001 は二重口縁壺の頸部資料である。頸部は体部から直立気味に立ち上がり、口縁端部方向に大きく開く形状を呈している。内外面とも淡茶褐色を呈し、内器面はナデと工具ナデにより、外器面はハケ目調整の後ミガキによる器面調整がおこなわれる。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。

002 は二重口縁壺の口縁部資料である。口縁端部は直線的に短くおさめられ、大きく外反するようなことはない。胎土中には石英、長石粒を含んでおり、外面・淡茶褐色、内面・淡茶白色を呈する。復元口径19.0㎝を測る。器面の調整はハケ目とナデによる。

003 は安国寺式壺形土器の口縁部資料である。複合口縁部には直立気味の比較的大型のタガが貼付され、外器面には３段による櫛描波状文が施文される。復元口径15.6㎝を測る。外面・淡茶褐色、内面・淡茶灰色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。器面の調整はハケ目とナデの組み合わせによる。

004 も安国寺式壺形土器の口縁部資料である。複合口縁部は直立する大型のタガが貼付され、外面には五条１単位の櫛描波状文が施文される。復元口径20.6㎝を測る。外面・淡茶灰色、内面・暗茶褐色を呈し、器面の調整はハケ目とナデによる。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。

005は復元口径15.4㎝を測る壺の口縁部資料であり、外方に直線的に延びる口縁形態をなしている。外面・淡黄茶褐色、内面・淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、橙色粒子、石英粒を含む。器面の調整はナデによる。

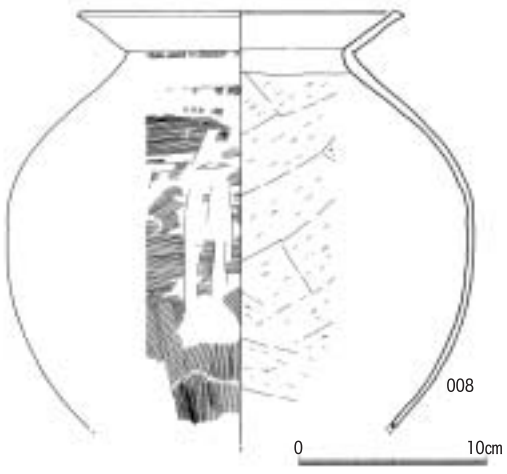
006は005と同様の器形を呈する壺口縁部資料であるが、口縁端部内面に沈線状の窪みを形成する点が異なる。復元口径17.8㎝を測る。内外面とも淡黄褐色を呈し、ナデによる器面調整がおこなわれる。胎土中には石英、金雲母、角閃石粒を含む。外来系の壺資料である。

007は完存する壺資料である。内外面とも淡茶褐色を呈しており、胎土中には石英、角閃石、長石粒を含む。器面の調整はハケ目とナデにより、口径11.2㎝、器高21.6㎝を測る。

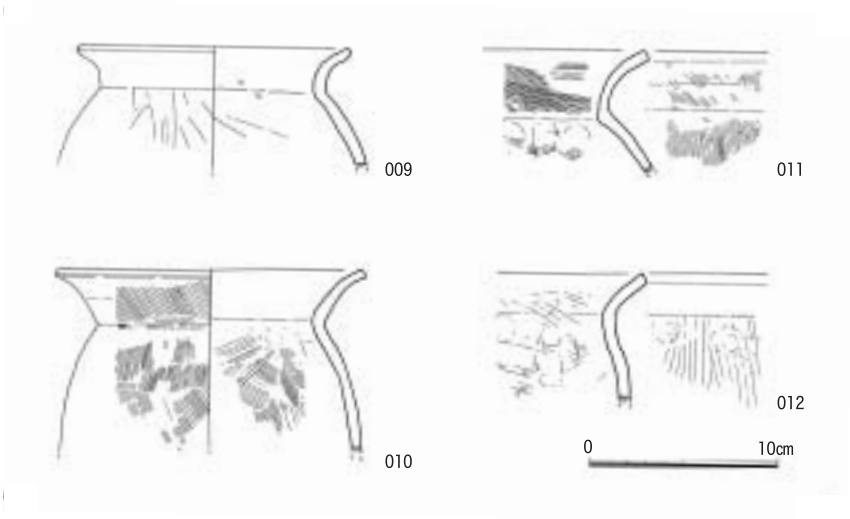
008は布留式系甕資料である。約1/2が遺存する。復元口径16.6㎝を測り、内外面とも淡茶褐色を呈している。口縁端部は平坦に面取りされ、器外面肩部にはヨコ方向のハケ目、ナデによる最終調整が施される。器内面には丁寧なヘラケズリが口縁内面屈曲部よりも若干下がった位置までおこなわれている。胎土中には石英、金雲母、角閃石粒を含み、外器面の一部にはススの付着が認められる。

009～012は在地系甕の口縁部資料である。**009** は復元口径14.0㎝を測り、外面・淡灰色～淡茶色、内面・淡茶灰色を呈する。口縁部は直立気味の立ち上がり部から端部は外反する器形を呈している。器面の調整はナデによる。胎土中には石英、角閃石、長石、橙色粒子を含む。

010 は「く」字形の形状の口縁をもつ甕口縁部であり、内外面とも淡茶褐色を呈している。



第253図　SH250出土遺物実測図②（1/4）



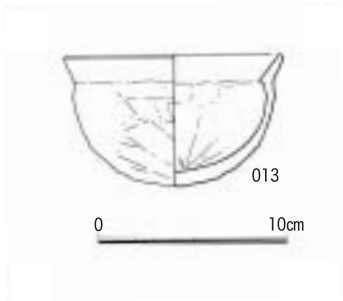
第254図　SH250出土遺物実測図③（1/4）

復元口径16.0㎝を測り、ハケ目とナデによる器面調整がおこなわれる。

011もまた010と同様の甕口縁部資料である。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子、金雲母粒を含む。器面の調整はハケ目とナデによる調整がおこなわれており、内器面の一部にはヘラミガキが認められる。

012は内面屈曲部の稜線が明瞭でなく、外方へ開く甕口縁部である。外面・淡黄褐色、内面・淡黄茶褐色を呈する。調整はナデを主体とするが、外器面にはタテ方向のハケ目による調整が実施されている。弥生時代後期の前葉前後の資料である可能性も考えられる。胎土中には角閃石、石英粒を含んでいる。

013は小型の鉢資料であり、復元口径11.6㎝、器高7.0㎝を測る。淡黄褐色を呈し、ナデ、ハケナデによる器面調整がなされている。胎土中には角閃石、石英、橙色粒子を含んでいる。



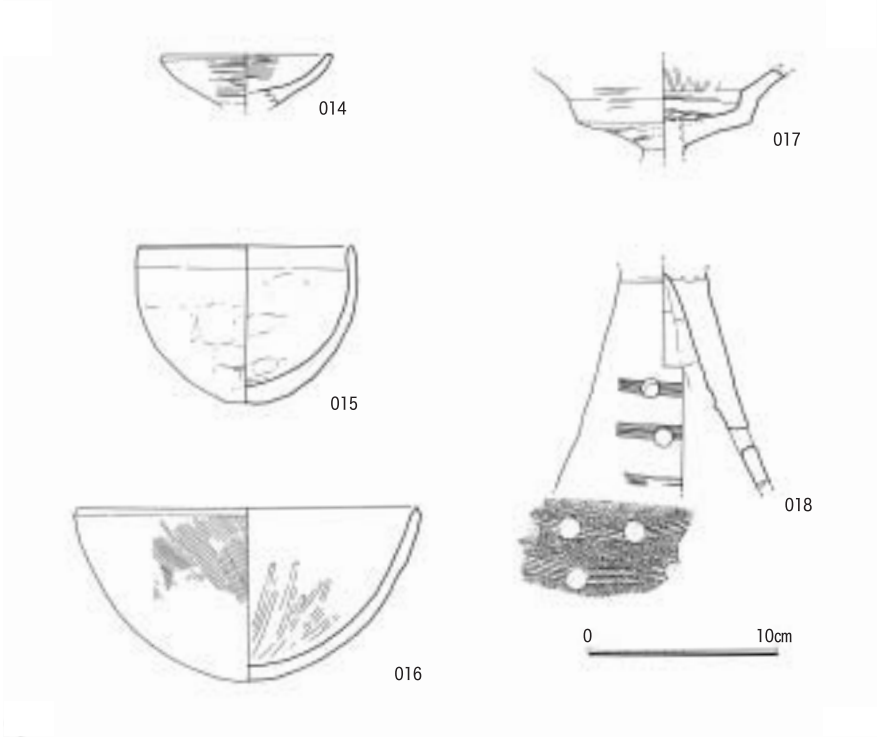
第255図　SH250出土遺物実測図④（1/4）

014 は小型器台の坏部である。脚部を欠損する。口縁端部は僅かに内湾気味に立ち上がる。坏部は完存する。口径8.7㎝を測り、内外器面ともヨコ方向のヘラミガキにより調整される。内外面とも赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。

015は鉢形土器の完存資料であり、口径11.1㎝、器高8.3㎝を測る。内外面とも淡赤褐色～暗茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英粒を含む。器面の調整はナデによる。

016は復元口径17.8㎝、器高9.1㎝を測る鉢形土器である。外面・淡茶褐色、内面・淡茶褐色～淡茶灰色を呈している。外器面はタテ方向のハケ目の後ナデ、内器面にはヘラによるミガキ調整がおこなわれる。

017は坏部に屈曲部を有する高杯の坏部と脚柱部の接続部である。外面・赤褐色～暗茶褐色、内面・暗茶褐色を呈している。器面の調整はヘラミガキとナデによる。坏部内器面には放射状の暗文が施文される。



第256図　SH250出土遺物実測図⑤（1/4）



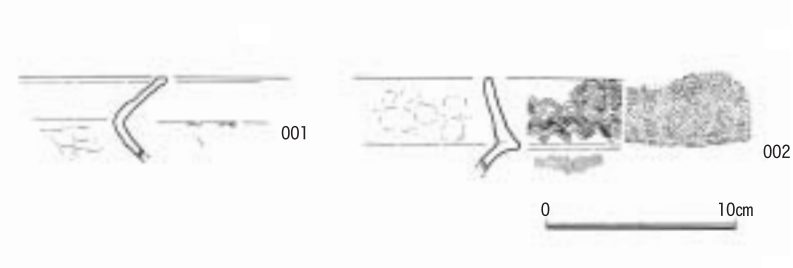
第257図　SH250出土遺物
実測図⑥（1/3）

018は高杯の脚部資料であり、円形の穿孔と四条を１単位の櫛状工具による平行線文を３段施文する。外面は黄褐色、内面は黄茶褐色を呈しており、ナデにより器面の調整がおこなわれる。外器面には一部に赤色塗彩の痕跡が認められる。

019は凝灰質砂岩製の砥石である。３面に磨面を確認でき、他面は欠損している。現存長11.1㎝、幅2.7㎝、厚さ2.2㎝を測る。現存重量95.4ｇである。

092SX278（第249図）

092SX278は、092SH250の床面のほぼ中央において南北方向に３つ連続して検出した小土坑である。中央ピットは0.3ｍの深さを有し、これに対し側面のピットは約0.15ｍ程度の深度である。中央ピットは炭化物、焼土を含む黒褐色砂質土と炭化物、焼土粒、淡黄茶色砂質土ブロックを含む淡褐灰色粘質土が内包されている。これに対し側面のピットには焼土塊、黄茶色砂質粒子を混入する淡茶灰色砂質土が堆積する。地床炉、あるいは灰溜まりとして機能していたものと推定される。埋土内には破片ながら図化



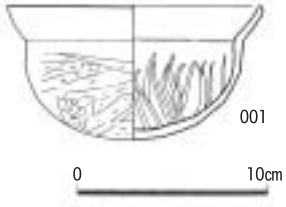
第258図　SX278出土遺物実測図（1/4）

可能な遺物が少量出土している。

出土遺物（第258図）

001は布留式系甕の口縁部資料である。内外面とも淡茶褐色を呈し、ヨコナデにより調整される。器体部内器面には丁寧なヘラケズリがおこなわれ、胎土中には石英、金雲母、角閃石粒を含んでいる。

002は安国寺式壺形土器口縁部である。口縁端部は直線的に内傾し、外器面には櫛描波状文を施文する。淡赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英、橙色粒子を含む。



第259図　SX299出土遺物実測図 (1/4)

092SX299（第250図）

092SH250の床面南東角付近で検出したピット状の遺構である。径0.5ｍを測る。

出土遺物（第259図）

001は口径13.2㎝、器高7.1㎝を測る小型丸底壺である。092SX299の底面近くに埋納されるような状況で出土した。内外面とも淡赤褐色を呈し、胎土中には橙色粒子、長石、金雲母粒を内包する。器面の調整はヨコナデを基本とするが、外器面下半にはナデによる仕上げの後に手持ちヘラケズリがおこなわれている。器内底面には、網目状の暗文が最終段階に施文される。

092SH260（第260図）

調査区の南東部で確認した竪穴遺構である。東西壁面は他遺構に切られており欠失する。南北辺4.95ｍを測り、東西長4.8＋αｍの規模を有し、検出面から底面までの深さ0.15ｍを測る。主柱は４本であり、黒褐色砂質土ブロック、淡褐色粘質土ブロック、明茶褐色土ブロック等を多量に内包する暗茶褐色土の単一土を埋土とし、人為的な埋め戻しがおこなわれた可能性が想定される。

出土遺物が少なく、遺構の帰属年代を厳密に特定することは困難であるが、次項に示す遺物等に示される年代は７世紀末頃であり、本遺構の年代を示している可能性も否めない。

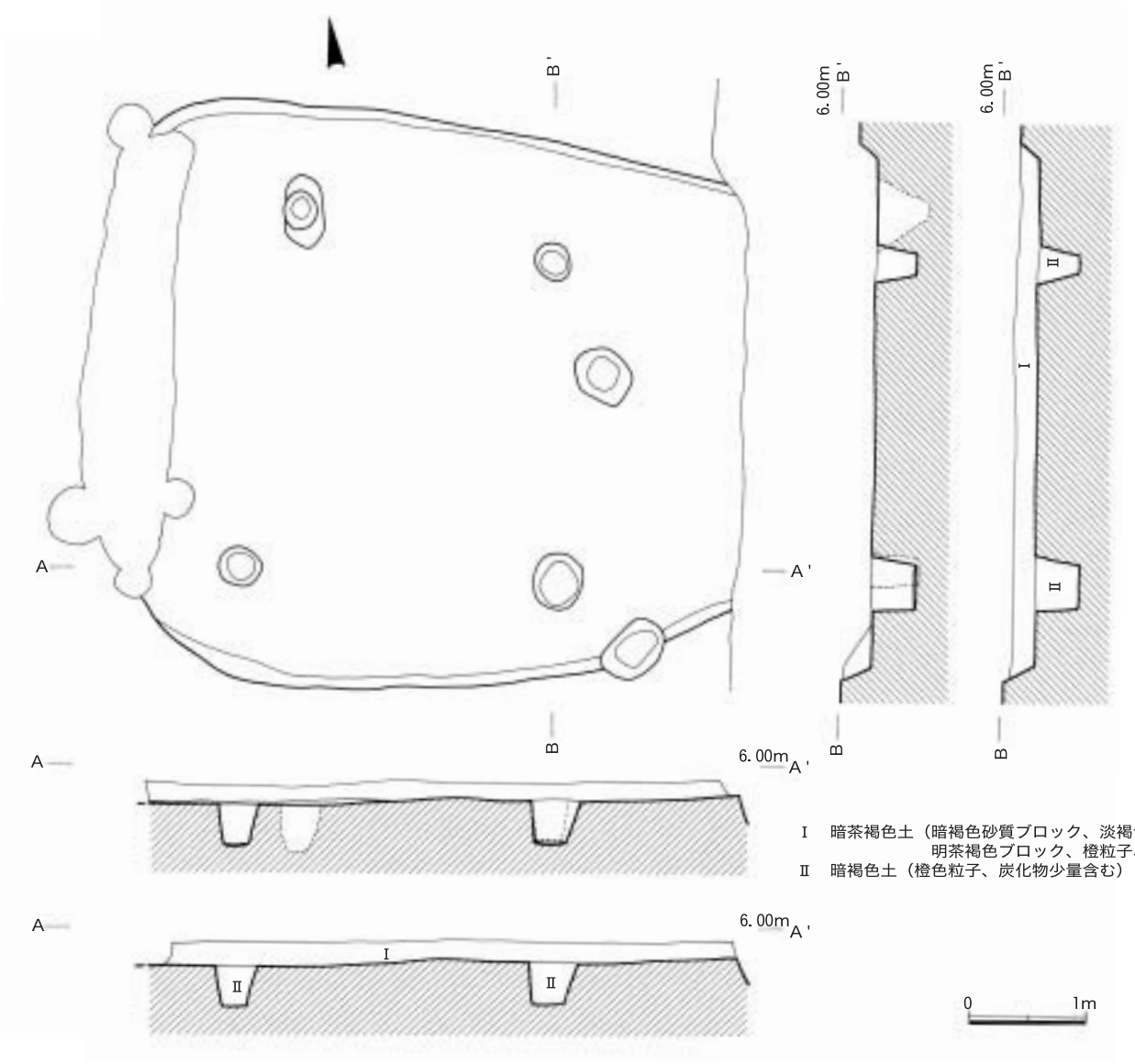
出土遺物（第261図）

001は移動式カマドの基底部片である。外面・淡茶黒色、内面・淡茶色を呈する。器面の調整はナデである。

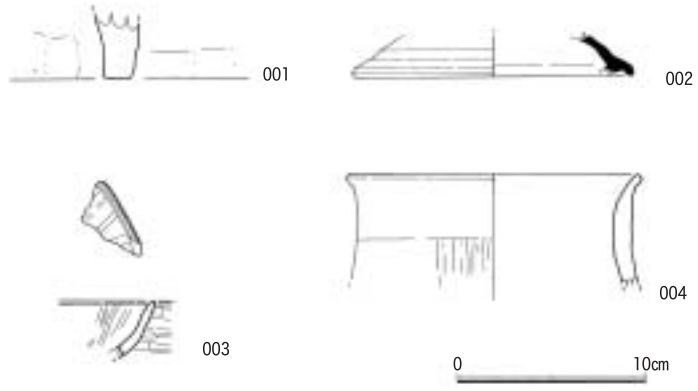
002は須恵器坏蓋の端部資料である。内面返り部分の先端を欠損する。外面・淡灰褐色、内面・淡茶褐色を呈し、器面は内外面とも回転ナデにより調整される。陶邑編年Ⅲ型式３段階に比定されるものであり、７世紀末葉に編年される資料である。

003は都城系土師器の坏と推定される口縁部資料である。内外面とも淡褐色を呈し、胎土中には石英、橙色粒子を含む。体部外面下位には手持ちヘラミガキがなされ、ナデによる器面調整がおこなわれる。内器面には細密な放射状暗文が施文される。口縁端部内面には沈線状の窪みが認められる。

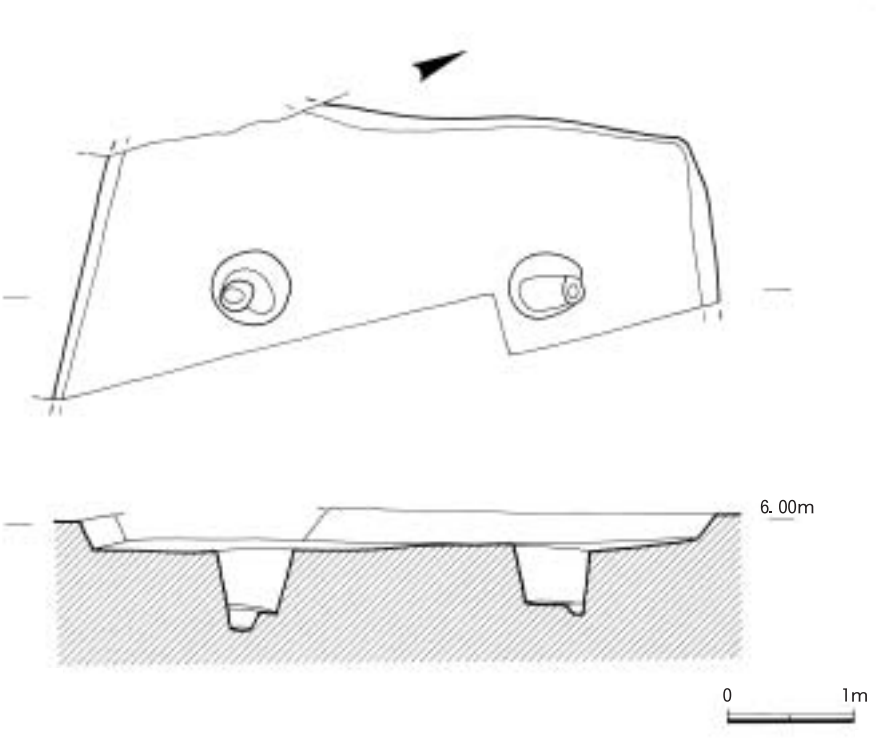
004は土師質甕の口縁部である。体部から直線的に立ち上がり、外方へ僅かに開く器形を呈する。外面は淡茶色を呈し、ヨコナデにより調整される。口縁部下位の体部にはタテ方向のハケ目調整がおこなわれる。これに対して内器面は淡茶褐色を呈し、全面とも器面の調整はナデによる。復元口径15.2㎝を測り、胎土中には長石、角閃石粒を内包している。



第260図　SH260遺構実測図（1/60）



第261図　SH260出土遺物実測図（1/4）



第262図　SH261平面・断面実測図（1/60）



第263図　SH261完掘状況（東方向から）

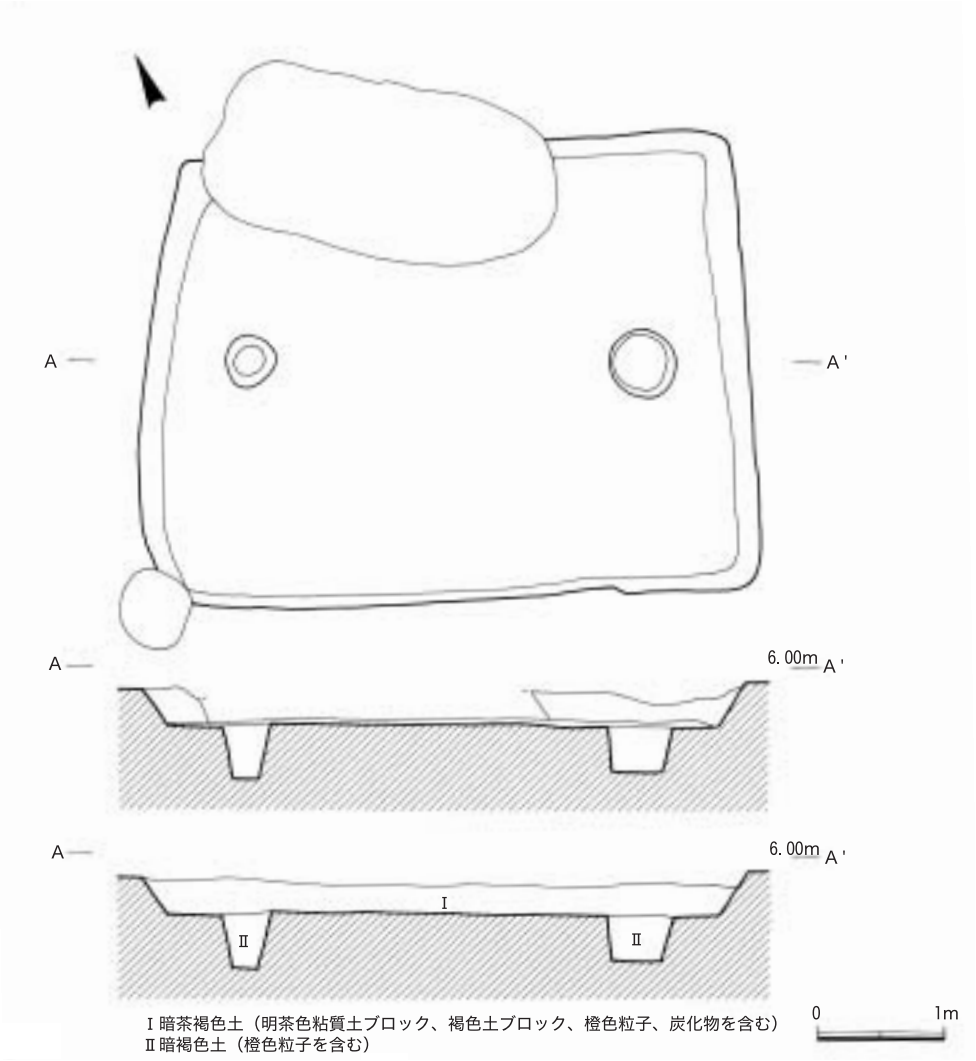
092SH261（第262・263図）

調査区の南東部、西壁部で検出した竪穴遺構である。遺構の東側部は調査区外に展開する。南北長4.95m、検出面から底面までの深さ0.25mを測る。住居の構築軸に沿うように柱穴２基が確認されており、住居床内の位置関係から４基の主柱穴の中の西側の２基に相当するものと考えられる。

出土遺物は僅少であり、小破片ばかりである。須恵器蓋破片、須恵器胴部片、土錘片などが出土しており、これらの遺物から遺構は８世紀代の所産になると考えられる。

092SH265（第264・265図）

092SH265は調査区中央で検出した長方形竪穴遺構である。4.95m×3.6mの規模を有し、現存壁高0.35mを測る。床面中央の東西壁際に径0.4mの柱穴を２基配置する。他に付帯施設は認められない。明茶



第264図　SH265遺構実測図（1/60）



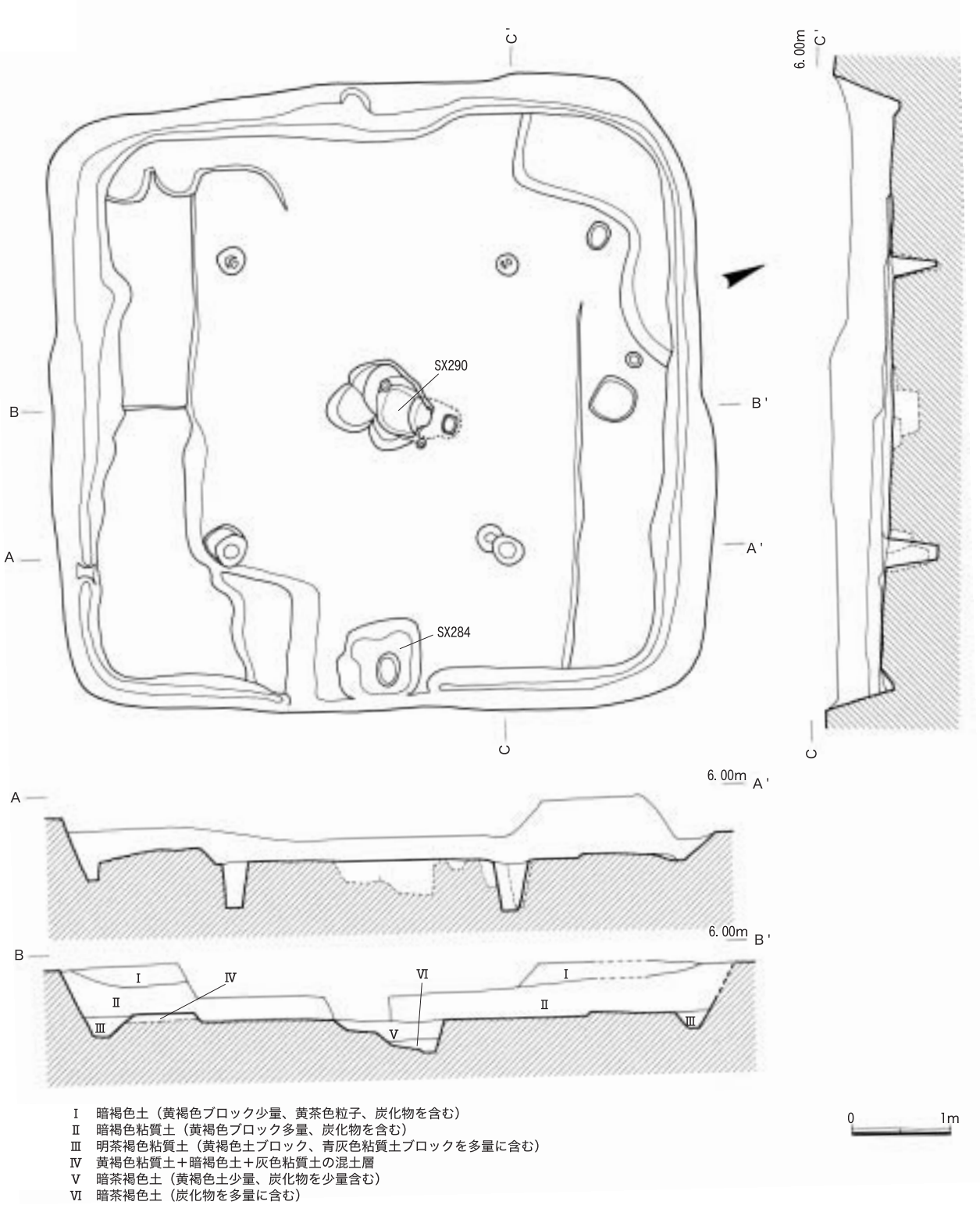
第265図　SH265完掘状況（北西方向から）

色粘質土ブロック、褐色土ブロック、炭化物などを比較的多く含む単一土を埋土としており、土層の状況から人為的な埋め戻しによる機能停止状況が想定される。

出土遺物は概して少なく、細片ばかりである。甕破片、高坏脚部片などが出土しているが、出土状況、出土遺物の状態から遺構の帰属年代の判断は困難である。

092SH270（第266・267図）

092SH270は調査区中央において確認された竪穴住居跡である。平面規模6.4ｍ×6.65ｍを測り、検出面から床面までの深度は0.1ｍを有している。主柱は４本であり、北東、南東部に配された柱穴に造り替えが認められる。住居壁際に幅0.3～0.6ｍの壁溝が巡る。壁溝は住居壁際を全周せず、東壁中央付近



Ⅰ　暗褐色土（黄褐色ブロック少量、黄茶色粒子、炭化物を含む）
Ⅱ　暗褐色粘質土（黄褐色ブロック多量、炭化物を含む）
Ⅲ　明茶褐色粘質土（黄褐色土ブロック、青灰色粘質土ブロックを多量に含む）
Ⅳ　黄褐色粘質土＋暗褐色土＋灰色粘質土の混土層
Ⅴ　暗茶褐色土（黄褐色土少量、炭化物を少量含む）
Ⅵ　暗茶褐色土（炭化物を多量に含む）

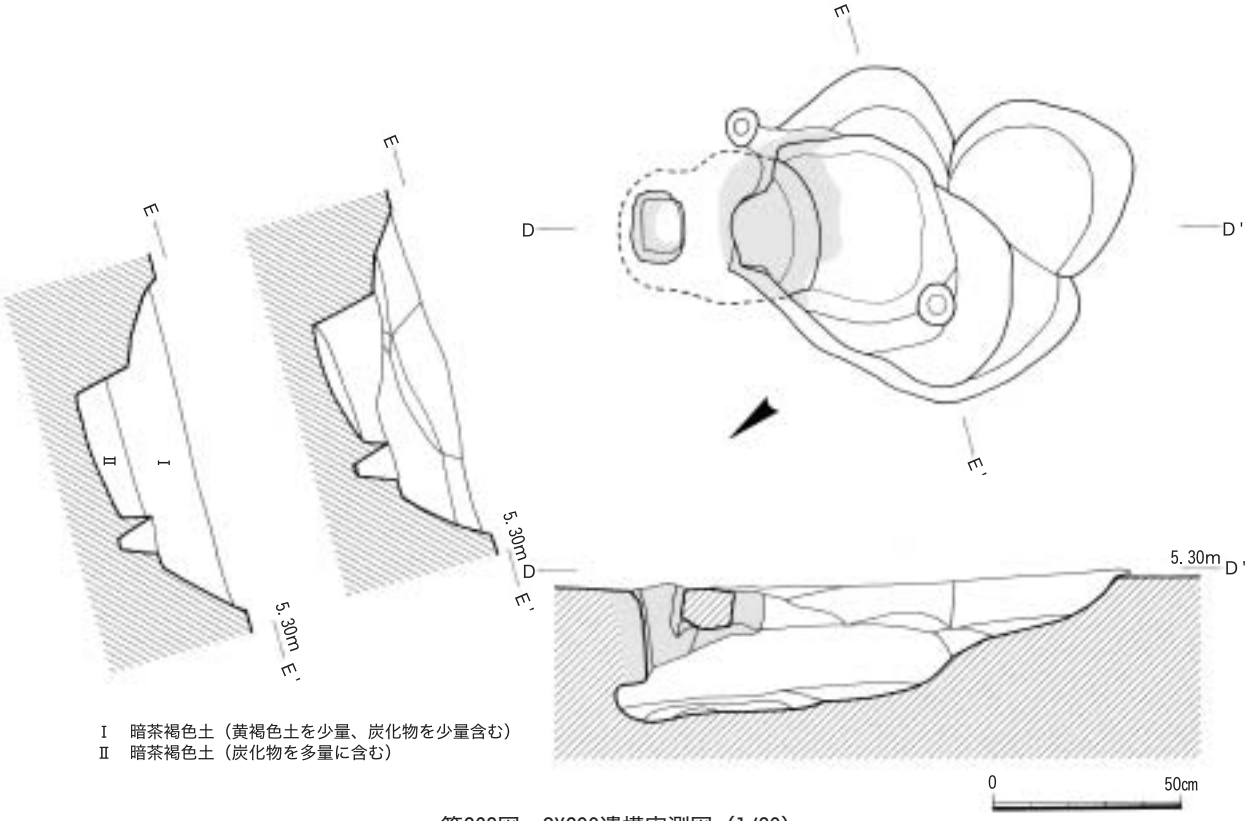
第266図　SH270遺構実測図（1/60）



第267図　SH270完掘状況（南方向から）

で途切れ、途切れた溝間に土坑（092SX284）が構築されている。北壁および南壁に沿って0.8～1.1m、高さ0.1m程度のベット状遺構が付設される。ベット状遺構は黄褐色粘質土、暗褐色土、灰色粘質土の混土の積み上げにより造られている。さらに住居中央には煙突状の構造をもつ土坑（092SX290）が構築されている。

住居内の堆積埋土は上下２層に分層可能であり、両層とも粘土ブロックを大量に含んでおり、人為的な埋め戻しがおこなわれた可能性がある。



Ⅰ　暗茶褐色土（黄褐色土を少量、炭化物を少量含む）
Ⅱ　暗茶褐色土（炭化物を多量に含む）

第268図　SX290遺構実測図（1/20）



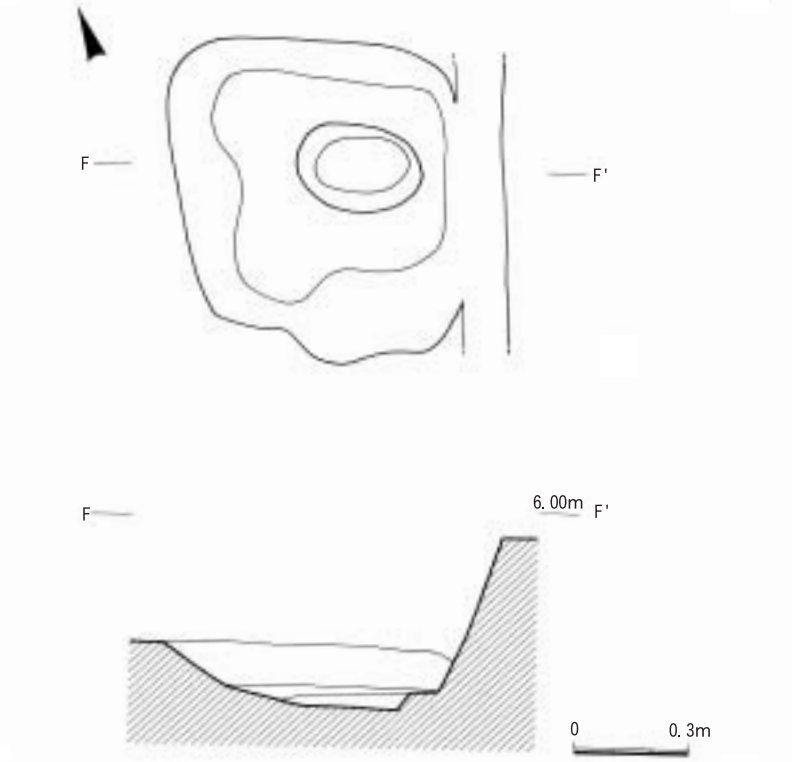
第269図　SH290焼土塊検出時（南方向から）

092SX290（第268・269図）

住居中央床面に構築された土坑である。南側部分に切り合いを有する複数の土坑が掘削されている。最も深く最終的に掘削された中央土坑は径約0.5mを測り、床面からの深さは0.35mを有している。中央土坑は土坑底中央から北北東の方向に抉るように掘り込みをおこない、深部の上方に0.15m×0.10mの方形を呈する煙突状の穴を穿っている。その結

果、中央土坑の北肩から約0.14mの地点にピットが配置される形となり、基盤土を掘り抜いたトンネル様の構造を呈することになる。

ピットの内壁、中央土坑の深部上下面は強い被熱を受けており、赤変し硬化している（図中トーン部）。堆積土層は上下２層に分層することができ、上位層は黄褐色土、炭化物を内包する暗茶褐色土であり、下位層は炭化物を大量に含む暗茶褐色土である。用途・機能等の詳細は不明である。



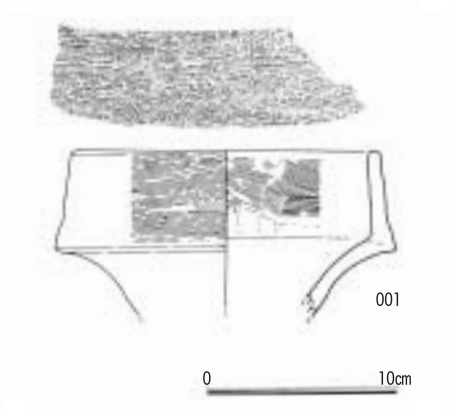
第270図　SX284平面・断面実測図（1/20）

092SX284（第270図）

092SX284は東壁際中央付近で検出した土坑である。隅丸方形プランを呈し、中央部が一段深くなる構造となっている。遺構の平面規模は0.78m×0.75m、深さ0.15mを測る。この土坑の両側において壁溝が終息しており、092SX284は壁溝の途切れる空間に構築されている。暗茶褐砂質土を内包する。屋内貯蔵穴、あるいは位置関係から住居への入口に関連する施設である可能性も考慮される。

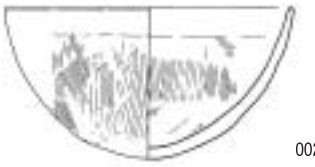
出土遺物（第271図）

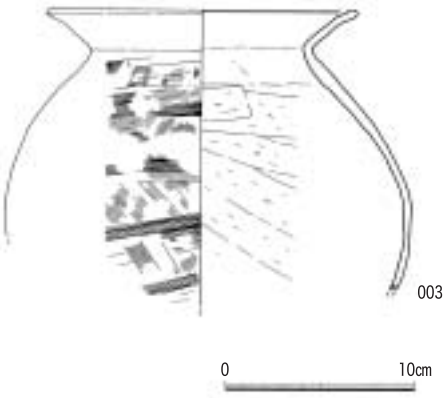
001 は安国寺式壺形土器の口縁部である。複合口縁部は直立気味に大きく立ち上がる形状を呈しており、比較的後出するタイプのものである。複合口縁部外面には器面のハケ目調整に使用されたものと同一と考えられる工具による波状文が多重に施文される。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石粒を内包している。器面の調整はハケ目とナデによりおこなわれている。復元口径15.8㎝を測る。



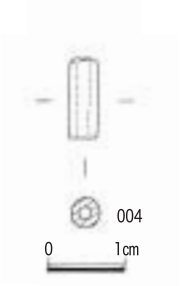
第271図　SX284出土遺物実測図（1/4）



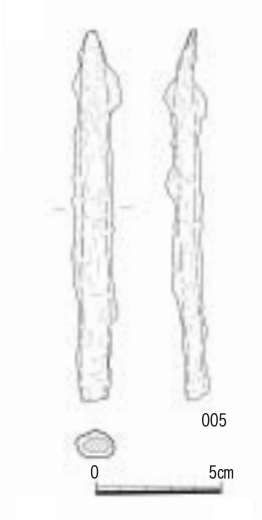




第272図　SH270出土遺物実測図①（1/4）



第273図　SH270出土遺物
実測図②（1/1）



第274図　SH270出土遺物
実測図③（1/3）

出土遺物（第272～274図）

ここに掲載した遺物は092SH270の床面直上あるいはその周辺の埋土中より出土した遺物である。

001は小型器台の脚部片である。外面は淡茶灰色を呈し、ハケ目後ナデによる調整がおこなわれる。内面は淡茶褐色を呈しており、外面と同じくハケ目とナデによる調整がおこなわれる。脚部は「ハ」字形を呈し、復元底径11.2cmを測る。坏部は脚部側面に貼り付ける形で整形されており、接合部が擬口縁として遺存する。

002は口径15.0cm、器高8.0cmのほぼ完存する鉢形土器である。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には橙色粒子、石英、長石粒等を内包している。器面の調整は内外器面ともハケ目後ナデによる調整がおこなわれ、口縁端部内外器面については、強いヨコナデによる最終調整がおこなわれている。

003は口縁端部上面に平坦面を形成する布留式系甕である。内外面ともに淡黄茶褐色を呈し、胎土中には石英、長石粒等を含んでいる。外器面はハケ目後ナデにより調整される。内器面は肩部内面の屈曲部よりも若干下がった位置から下位にヘラケズリが施される。口径16.0cmを測り、外面の一部にはススの付着が認められる。

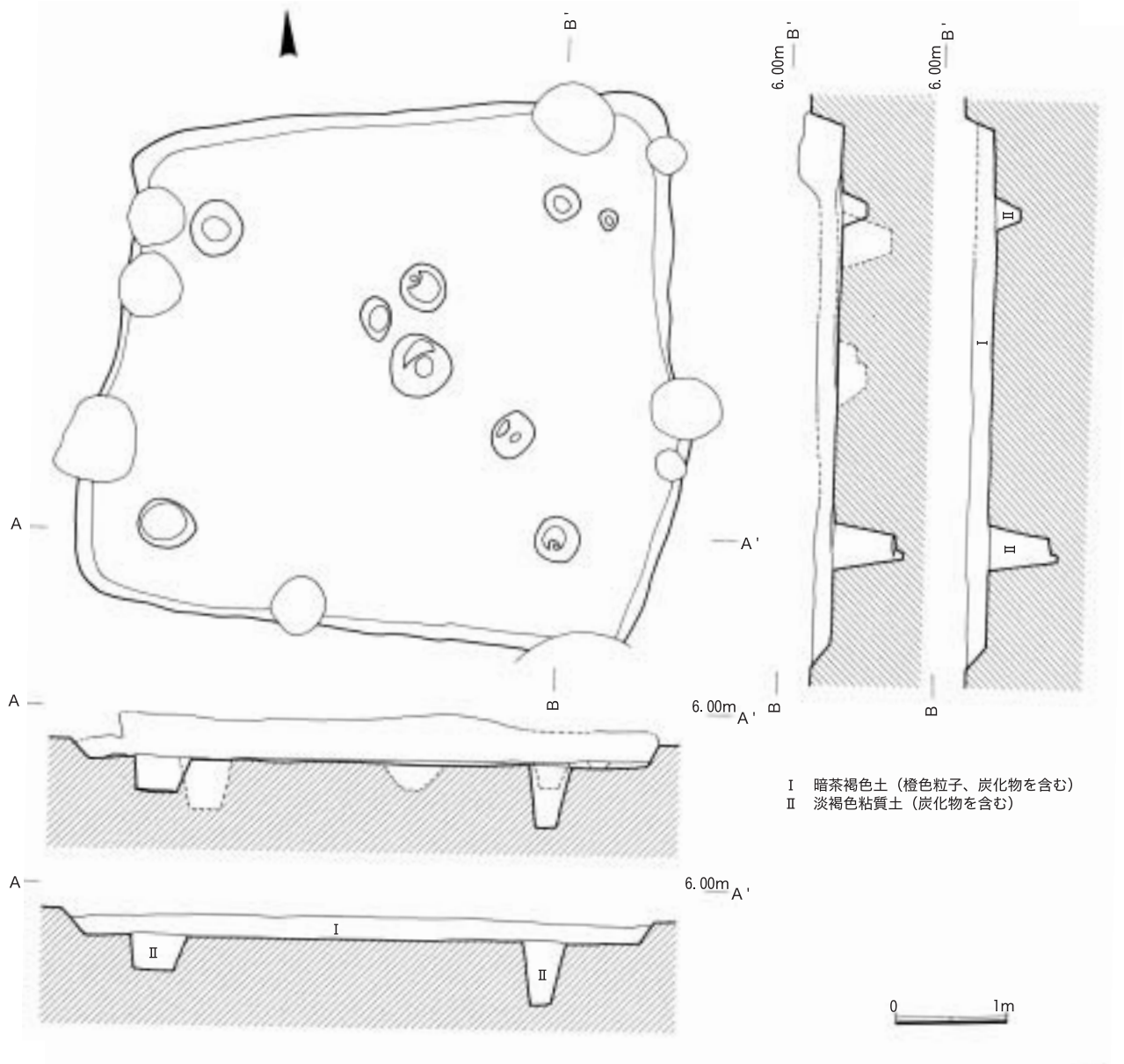
004は暗青緑色を呈する管玉である。1.0cm×0.4cmの法量を示し、0.15ｇを測る。住居床面からの出土である。

005は現存長14.9cmを測る鉄製品である。ヤリガンナであろうか。

090SH280（第275・276図）

092SH280は調査区西壁際南寄りの地点で検出した竪穴遺構である。平面プランは不整方形を呈している。規模は4.7m×5.0mを測り、現存深度は0.2mを測る。主柱は４本であり、床面中央に径0.5mの擂鉢状の土坑を配置する。壁溝や貼床などの施設は確認されない。堆積埋土は暗茶褐色土の単一土により構成されるが、積極的に人為的な埋め戻しを示唆するような所見は認められなかった。

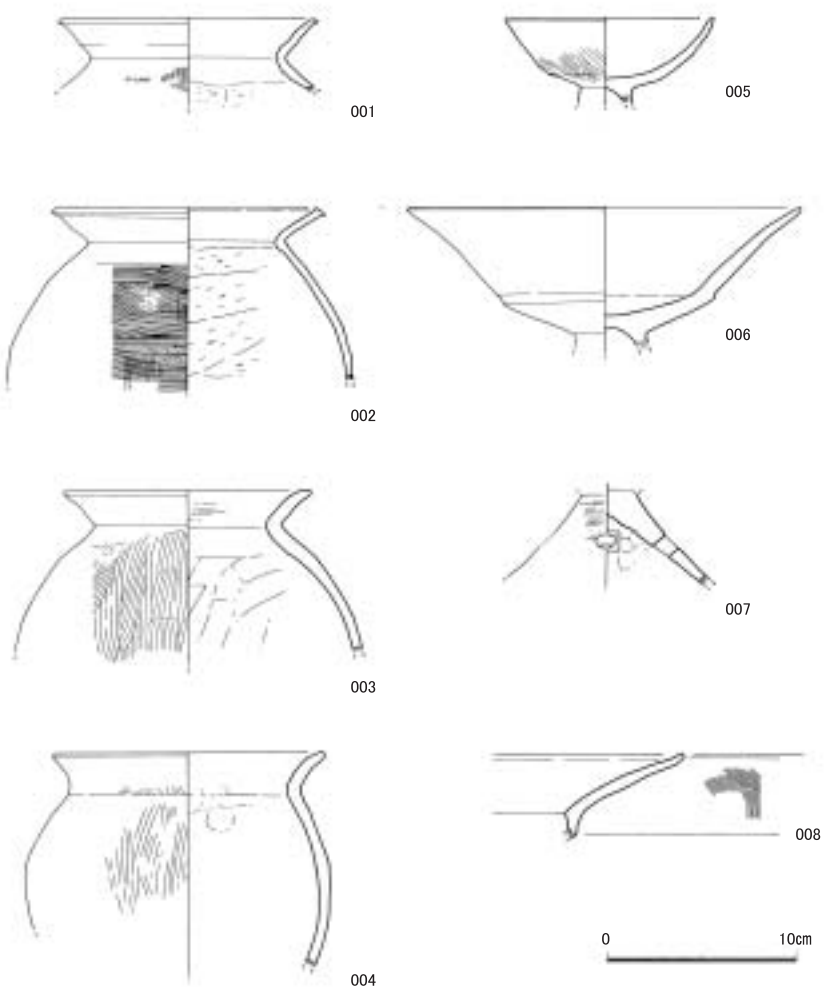
床面付近から出土した遺物の様相から古墳時代初頭頃に比定されると考えられる。



第275図　SH280遺構実測図（1/60）



第276図　SH280完掘状況（東方向から）



第277図　SH280出土遺物実測図（1/4）

出土遺物（第277図）

001・002は布留式系の属性をもつ甕Ｂである。**001**は内外面とも淡黄白色を呈し、胎土中には石英、金雲母、橙色粒子を含む。体部外器面の調整はハケ目後ナデ、口縁部内外器面はヨコナデにより調整される。体部内器面については、屈曲部よりも若干下がった位置からヘラケズリがおこなわれる。復元口径 13.7㎝を測る。

002は口径14.4㎝を測り、外面・淡赤褐色～淡黄褐色、内面・淡赤褐色を呈している。胎土中には角閃石、長石、石英、金雲母、橙色粒子を内包する。器面の調整は、外器面が上位ヨコハケ、下位タテハケが施され、内器面はヘラケズリ痕を残す。外器面肩部には右下がりのタタキ痕が認められる。

003 は在地系の甕と外来の布留式系甕の折衷になる甕Ｃに分類される甕である。器形的な特徴に模倣意識を垣間見ることができるが、整形技法等に関しては、在地色が色濃く残る。それ故に器壁等も極めて厚く、外器面のタテ方向のハケ目調整などは、在来の技法そのままである。淡黄褐色～淡灰褐色を呈しており、胎土中には長石、角閃石、石英、橙色粒子を内包している。内器面にはケズリ風ナデがおこなわれており、ケズリを実施しようという意図はあるものの、器面の成形という本来の目的は達成され

ていない。

004は在来系譜の甕Ａである。口径14.2㎝を測る。内外面とも淡赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、金雲母粒を含む。外器面はタテ方向のハケ目の後ナデ、内器面はナデにより調整される。

005 は土師器高坏の坏部である。椀形状を示す。復元口径11.0㎝を測り、内外面とも淡赤黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、金雲母、橙色粒子等を内包する。器面の調整は、外器面がハケ目とナデ、内器面がナデによる。

006は高坏坏部資料であり、内外面とも淡赤褐色を呈している。器面の調整は内外面ともナデである。口径20.7㎝を測る。

007は小型器台の脚部資料である。「ハ」字に開く形態を呈しており、脚中位には円孔が穿孔される。完存していないため、正確な数は不明であるが、現存する円孔の位置関係から、本来は４ヶ所にあったものと判断される。赤褐色～暗茶褐色を呈している。外器面はヨコ方向のヘラミガキ、内器面はナデにより調整される。胎土中には角閃石、石英、橙色粒子を内包する。また、坏部との接合部は粘土接合部により剥離しており、擬口縁を形成する。

008は器種の不明な口縁部資料である。一応、高坏としているが、断定はできず詳細は不明である。遺存部位から、口縁部下位に段をもつ屈曲部を有することが知られる。外面は淡赤褐色、内面は暗赤褐色を呈している。器面の調整は、外器面の一部にハケ目を認めることができるが、基本的にはナデである。

092SH285

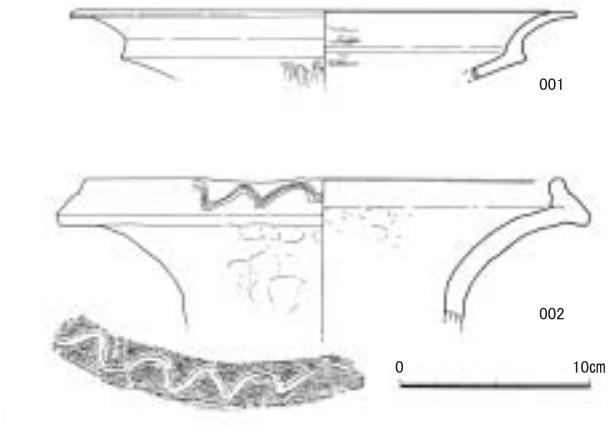
092SH285は調査区南西角付近で確認した竪穴遺構である。平面プランは方形を基調としたものと推定されるが、西壁側は調査区外に展開し、東壁は092SH250により切られており欠失する。僅かに残る北壁と南壁との距離は3.3ｍを測る。底面はフラットに成形されている。

埋土内からの出土遺物には、弥生時代後期に比定される土器資料がある。

出土遺物（第278図）

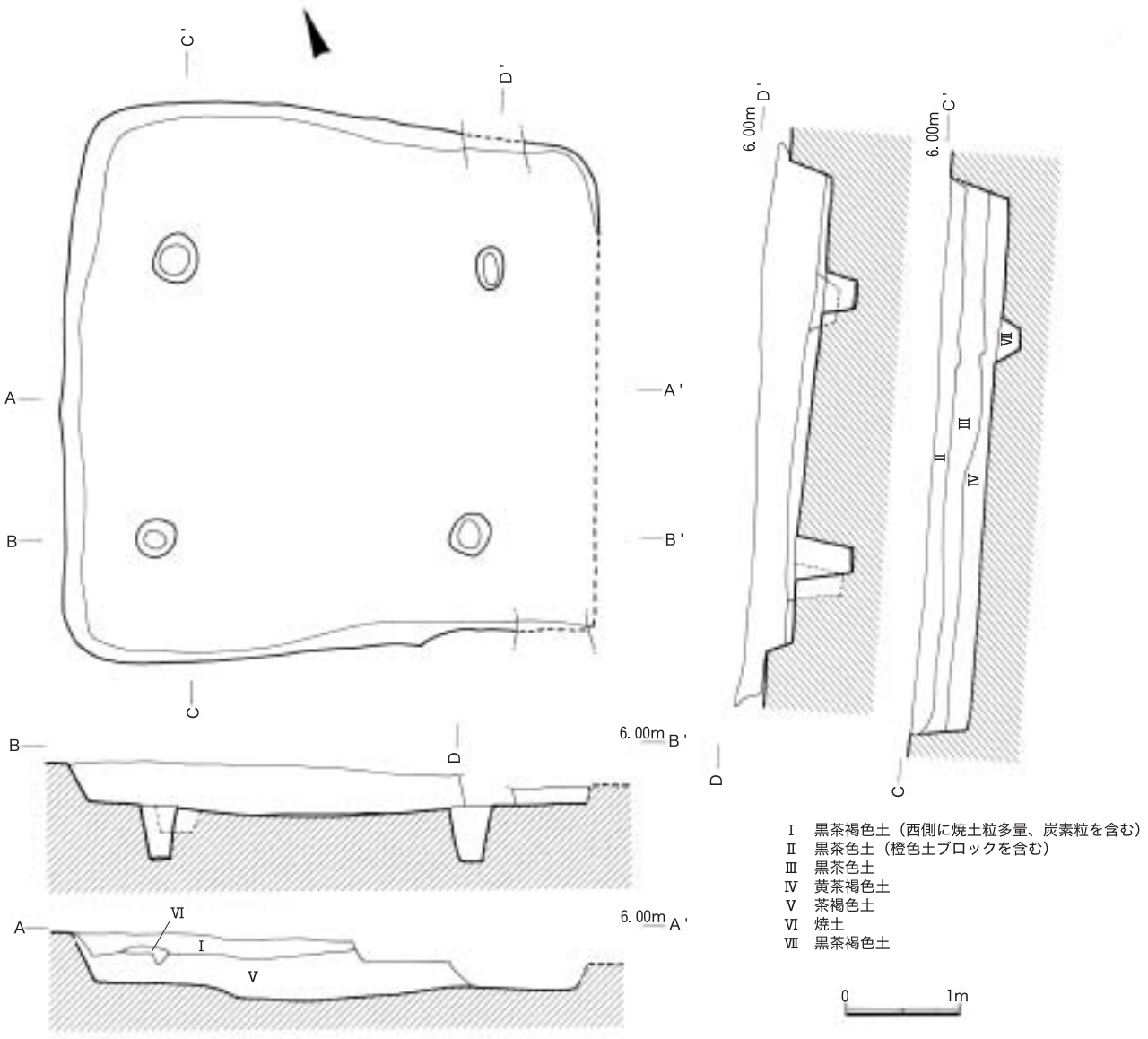
001 は高杯の口縁部であり、内外面とも淡黄茶色を呈している。復元口径26.7㎝を測り、体部中位に段を有している。内外器面ともナデ、ミガキ風ナデ等による調整がおこなわれる。胎土中には角閃石粒を含んでいる。

002 は複合口縁を有する安国寺式壺形土器の口縁部資料である。複合口縁部は断面三角形の粘土紐を貼付し、外器面に一条の櫛描波状文を施文する。復元口径25.2㎝を測り、外面・淡茶褐色、内面・淡黄茶褐色を呈する。



第278図　SH285出土遺物実測図（1/4）

出土遺物が少なく、時期の厳密な確定は困難であるが、図示した資料は弥生時代後期に比定される資料である。



第279図　SH323遺構実測図（1/60）



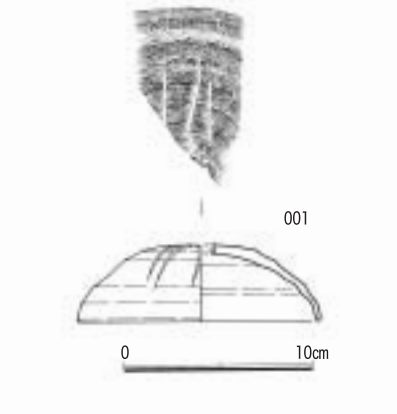
第280図　SH323完掘状況（西方向から）



第281図　SH323焼土土層断面（東方向から）

092SH323（第279～281図）

調査区の中央西寄りの地点で検出した方形竪穴遺構である。平面規模は4.8m×4.7mを測り、検出面から底面までの深さは0.35mを有している。主柱は４本であり、住居床面において主柱穴以外の施設は認められない。住居内の堆積埋土は３層に分層が可能であり、最下位には黄茶褐色土、中位には黒茶色土、最上位には橙色土、ブロック土を含む黒茶色土が堆積する。最上位の土層については、人為的な所作による可能性も想定されるが、下位の土層については、自然堆積による土層の堆積が想定される。



第282図　SH323出土遺物実測図（1/4）

出土遺物（第282図）

出土遺物は概して少なく、図化可能な遺物は図示した須恵器蓋１点のみである。外面・淡茶褐色、内面・淡灰茶色を呈する。土師質から瓦質の胎土を示しており、焼成は極めて不良である。復元口径12.8㎝、器高4.0㎝を測る。内外器面とも回転ナデ調整による仕上げがおこなわれており、頂部付近にはヘラ記号が認められる。

092SH343（第283・284図）

092SH343は調査区の北東地区で検出した不整方形を呈する竪穴遺構である。平面プランは東壁に比して西壁が極端に短くなっており、台形状となっている。東壁長5.15m、西壁長3.80m、北壁長4.8mの長さを測る。主柱は４本であり、中央にかなり寄った位置に配置される。柱穴間も距離は1.4～1.7mである。柱穴の中央には径0.65mの円形土坑が設置される。円形土坑は床面から約0.5m程度掘り込まれており、少量の炭化物を含む黒褐色土が堆積している。竪穴遺構の床面は、この円形土坑を中心に擂鉢状に徐々に深くなっている。堆積埋土は茶黒色土と茶褐色土であり、自然堆積による堆積状況が想定される。

出土遺物（第285～290図）

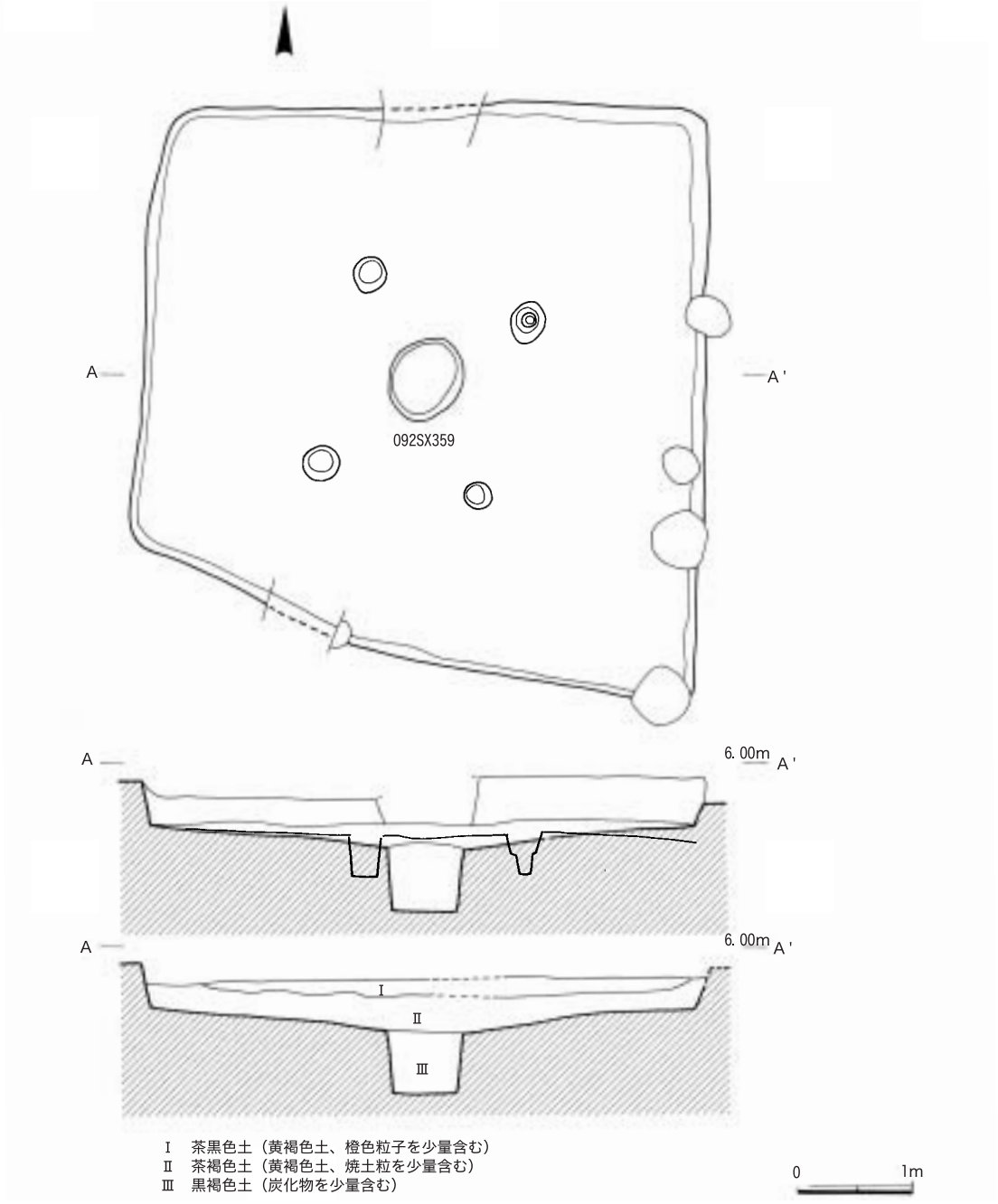
床面近くの埋土中より廃棄状態で多くの遺物が出土している。

001 は弥生時代中期末から後期初頭に編年される長頸壺の口縁部である。他遺構からの混入資料である。口縁端部外面下位に一条の断面三角形の突帯を貼付する。復元口径 9.6 ㎝を測り、内外面とも淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子を含む。住居埋土最上層からの出土である。

002は複合口縁壺の口縁部資料である。複合口縁部は直立気味に立ち上がり、外面に施文はされない。内外面とも淡黄褐色を呈し、胎土中には石英、角閃石粒を内包する。内外器面はハケ目とナデによる調整がおこなわれる。口径14.3㎝を測る。

003は二重口縁壺の肩部資料である。外面・淡橙褐色、内面・淡黒色を呈する。器面の調整は、内外器面ともハケ目によるが、外器面の一部にはタタキ痕が認められる。胎土中には石英粒の他に緑色の結晶片岩片を含んでいる。

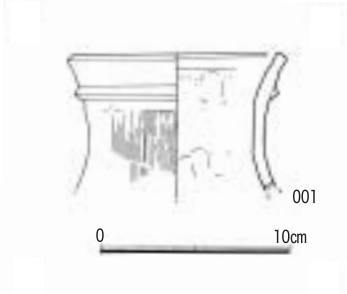
004 は壺の肩部破片である。三角突帯を貼付し、その下位に刺突文を施文する。内外面とも黄白色を呈し、角閃石、石英、橙色粒子を含んでいる。器面の調整はナデによる。



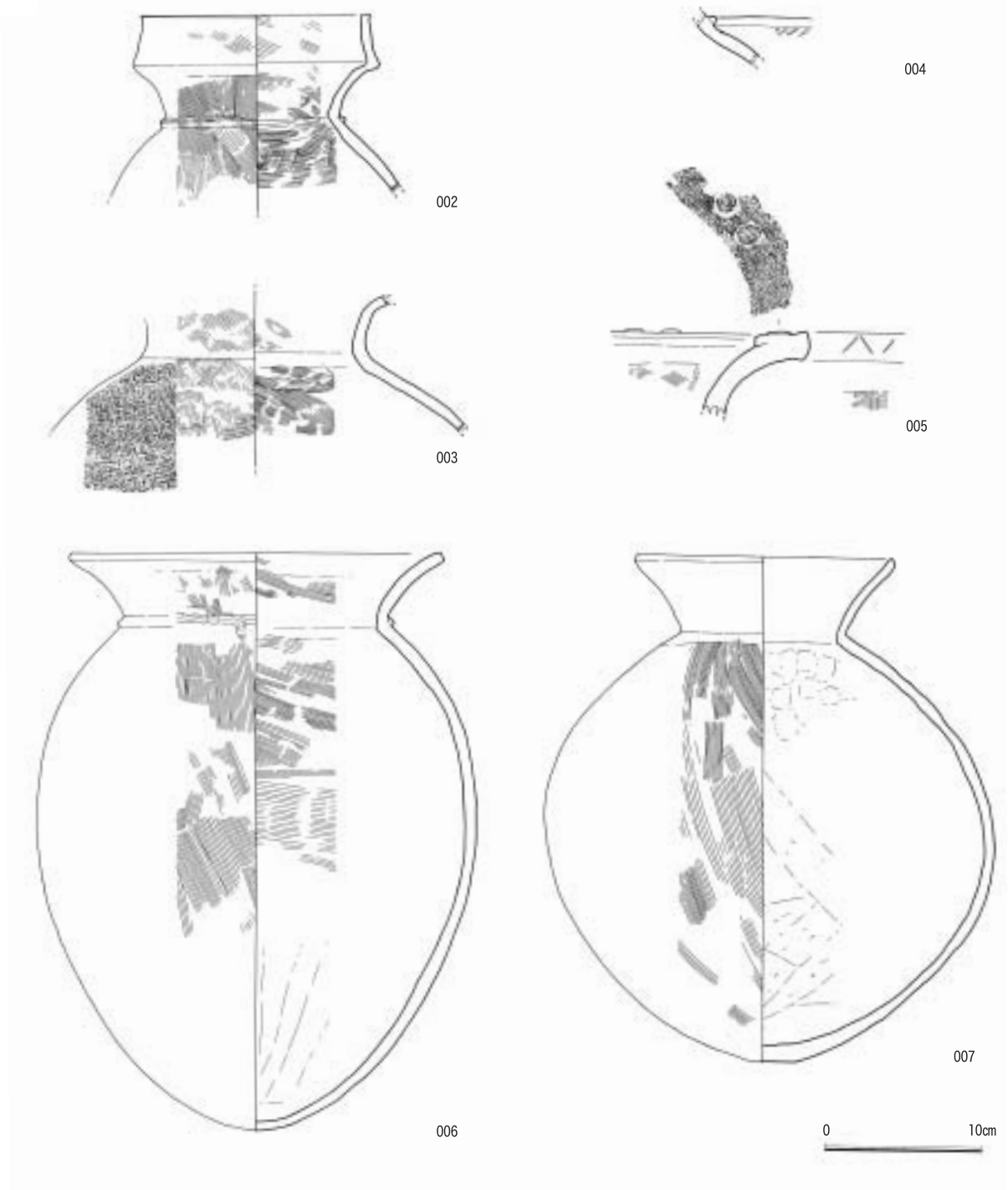
第283図　SH343遺構実測図（1/60）



第284図　SH343遺物出土状況（東方向から）



第285図　SH343出土遺物実測図①（1/4）



第286図　SH343出土遺物実測図②（1/4）

005 は口縁端部を粘土帯により肥厚させる壺口縁部資料である。口縁端部外面にはヘラによる連続山形文を施文し、上面には円形浮文が貼付される。内外面とも淡茶褐色を呈し、ナデ、ハケ目による調整がおこなわれる。004・005は、001と同じく弥生時代中期末から後期前葉頃に比定される資料であり、他遺構からの混入遺物である。

006 は復元口径23.2㎝、器高36.6㎝を測る甕形土器である。丸底を呈し、頸部には一条の貼付突帯が付されている。外面・淡橙褐色、内面・淡茶色を呈し、器面の調整はハケ目とナデによる。胎土中には

長石、角閃石、金雲母粒を含む。外器面には一部にススの付着が認められる。

007は外面・淡赤褐色、内面・淡茶灰色を呈する壺形土器である。復元口径16.0㎝、器高32.0㎝を測る。球形を指向した体部に外傾し、直線的に延びる口縁部が接続する。胎土中には石英、金雲母を含み、外器面はハケ目、ナデ、内器面はヘラケズリとナデによる調整がおこなわれる。外来系の壺形土器である。

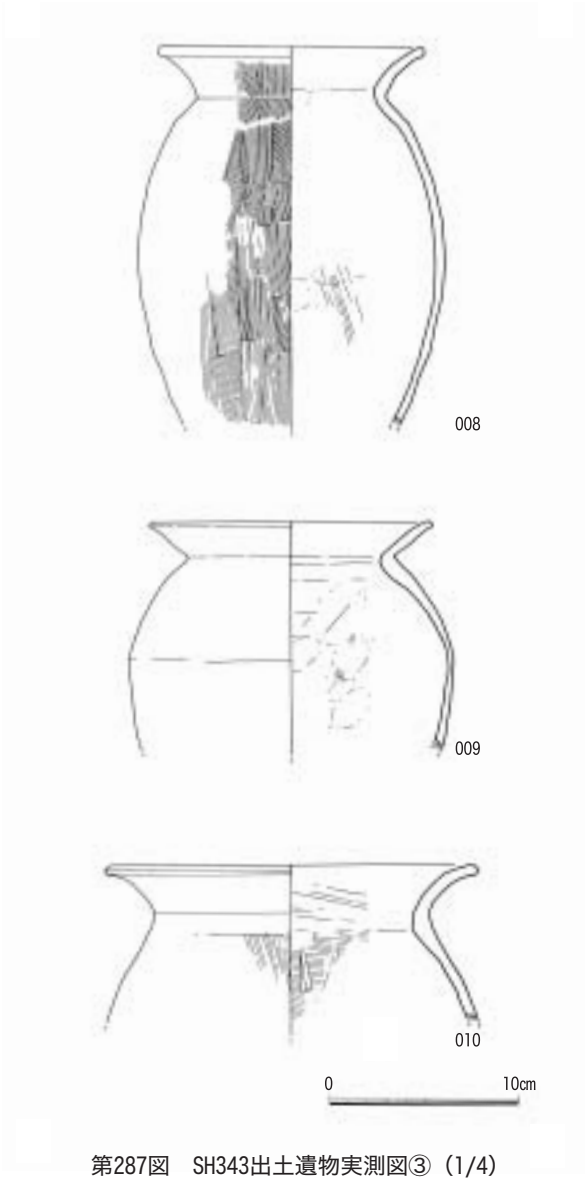
008～010は甕形土器口縁部資料である。**008**は復元口径14.2㎝を測り、内外面とも淡黄褐色～暗褐色を呈している。長胴形態をなし、外器面はタテ方向のハケ目による調整がおこなわれる。胎土中には角閃石、長石、石英粒を含んでいる。器面調整のハケ目は上半部におこなわれる細密なものと下半部に実施される幅の広い２種のハケ目工具による。

009は球形気味の体部から短く外方へ開く口縁部を有する甕である。復元口径14.7㎝を測る。淡茶褐色を呈し、胎土中には長石、角閃石粒を含む。

010は復元口径19.6㎝を測り、内外面とも淡黄褐色を呈している。胎土中には角閃石、石英、長石粒等を含む。器面の調整はハケ目、ナデによりおこなわれるが、一部にヘラミガキが実施されている。内器面に赤色塗彩と思われる痕跡が認められる。

011～019は布留式系に分類される甕Ｂ資料である。**011**は口縁部資料であり、外面・赤褐色、内面・暗灰色を呈し、器表面はナデにより調整される。胎土中には角閃石、石英粒を含む。

012は外方へ大きく開く口縁部を有する資料であり、内外面とも淡茶褐色を呈している。復元口径14.2㎝を測り、精製土が使用される。石英、金雲母、橙色粒子、白色粒子等を含む。器面の調整は丁寧なナデによる。

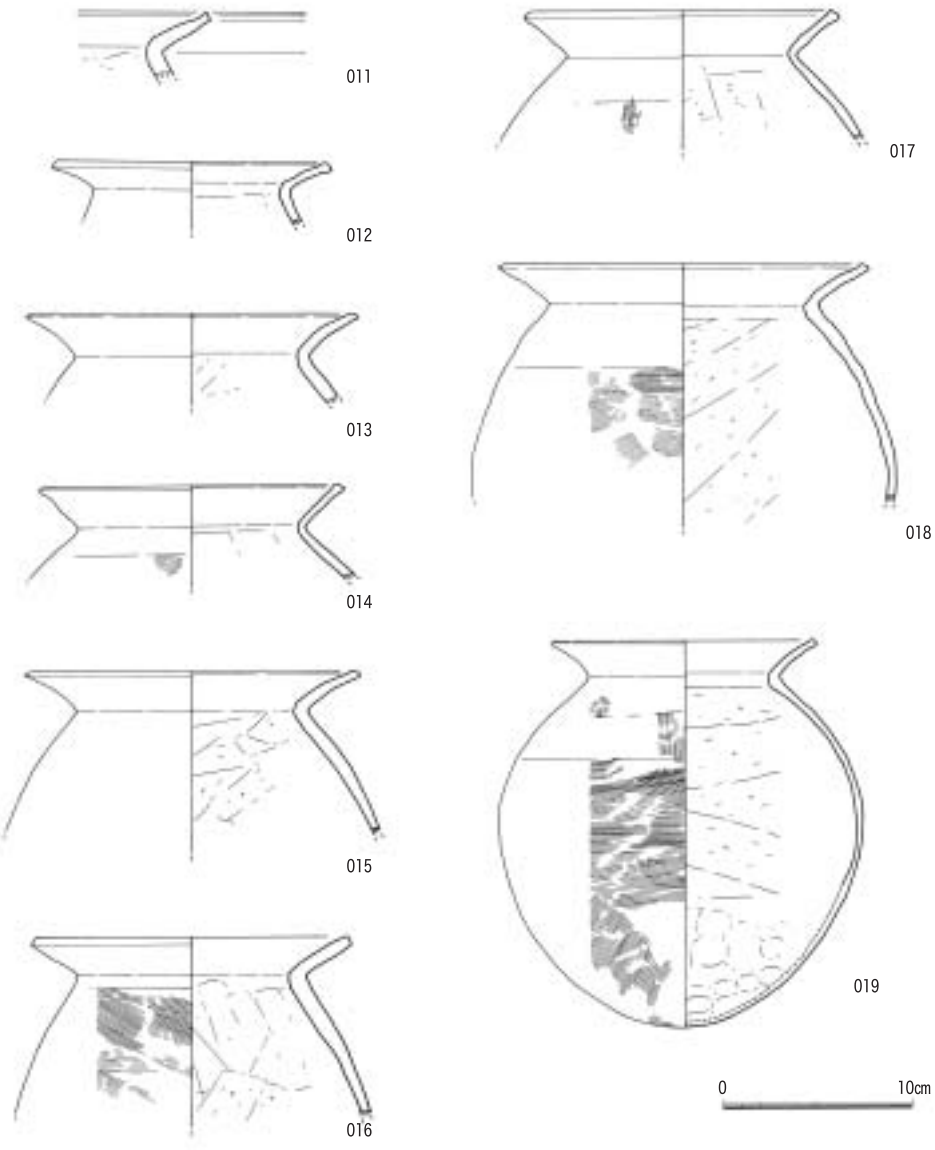


第287図　SH343出土遺物実測図③（1/4）

013は復元口径16.8㎝を測り、外面・淡茶褐色、内面・暗茶褐色を呈する。胎土中には角閃石、石英、長石、白色粒子を含んでいる。内器面にはヘラケズリ痕が認められる。

014は口縁端部上面に平坦面を形成する口縁部資料であり、丁寧なナデにより整形される。淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、金雲母、白色粒子を内包する。復元口径15.4㎝を測り、外器面はナデとハケ目、内器面はナデとヘラケズリによる器面調整がおこなわれる。

015は体部上半部の破片資料であり、肩部はなで肩形状を呈している。復元口径17.6㎝を測り、口縁端部には丁寧なナデ調整により平坦面を形成する。内外面とも淡黄褐色を呈し、器面の調整に関しては、



第288図　SH343出土遺物実測図④（1/4）

外器面はナデ、内器面はケズリとナデによる。

016は015と同様になで肩傾向の強い肩部をもつ資料である。復元口径16.4㎝を測る。外面は淡茶色～淡茶褐色を呈し、ヨコ方向のハケ目とナデにより、内面は淡茶灰色を呈しヘラケズリが実施される。胎土中には角閃石、長石、石英、金雲母、白色粒子を含んでいる。

017は復元口径16.6㎝を測る口縁部資料であり、口縁部は内外器面とも丁寧なナデによる器面調整がおこなわれる。外面色調は赤黄褐色を呈し、内面は赤褐色を呈している。胎土中には石英、金雲母、角閃石粒を含んでおり、外器面はナデとハケ目、内器面はヘラケズリ、工具ナデ等により調整される。

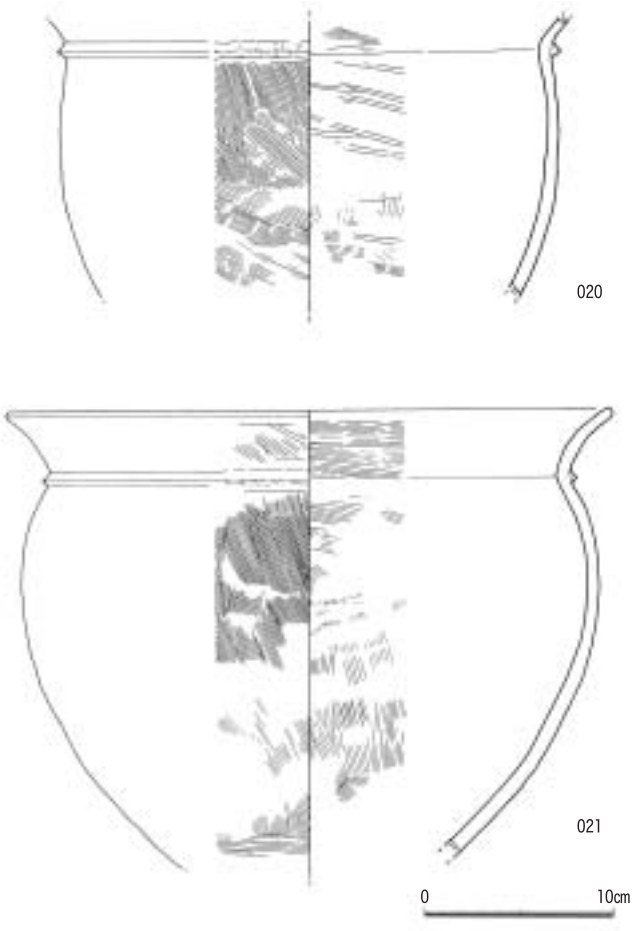
018は復元口径18.6㎝を測る比較的大ぶりな資料であり、口縁端部上面には強いヨコナデによりシャープな平坦面を形成している。内外面とも茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英、橙色粒子を含んでいる。体部外器面の調整はヨコ方向のハケ目の後、肩部には丁寧なヨコナデによる器面調整がおこなわれる。内器面はヘラケズリが全面に実施されている。

019はほぼ完形に復元することのできた甕資料である。復元口径13.5㎝、器高20.5㎝を測る。外面･淡茶褐色、内面・茶褐色を呈し、胎土中には石英、金雲母、長石、角閃石粒を含む。器面の調整は、外器面がハケ目後ナデ、内器面にはヘラケズリがおこなわれ、特に外器面肩部には最終的に丁寧なヨコナデによる仕上げがおこなわれている。底部内器面には無数の指頭痕が認められる。

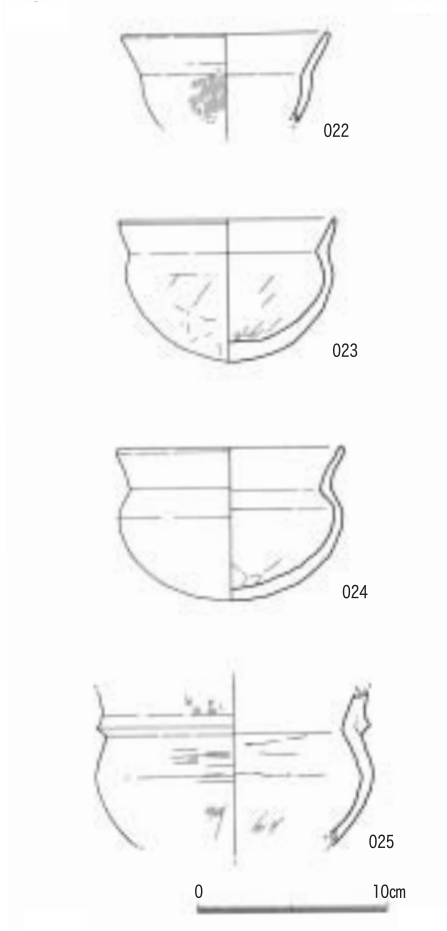
020・021 は大型の鉢形土器である。**020** は口縁部と底部を欠損する。体部から口縁部への立ち上がり部に断面三角形の突帯を一条貼付する。内外面とも淡茶褐色を呈し、外器面はハケ目調整とナデ、内器面はハケ目の後ヨコ方向を主体とするヘラミガキによる器面調整がおこなわれている。胎土中には角閃石、長石粒を内包する。

021 は底部を欠損する。体部と口縁部の境に断面三角形の突帯を一条貼付する。復元口径32.0㎝を測る。外面は赤褐色を呈し、ハケ目とナデによる器面調整がおこなわれる。内面は淡黄褐色を呈し、ハケ目後にナデを主体とする器面調整が実施されている。胎土には角閃石、石英、長石、金雲母、橙色粒子を含む。外器面には黒斑が認められる。また、外面頸部に貼付された突帯の下部には貼付の際の工具痕と思われる窪みが全周にわたって認められる。

022～025は小型丸底鉢資料である。**022**は復元口径10.9㎝を測り、内外面とも淡茶褐色を呈しており、胎土中には角閃石、長石粒を内包する。外器面はハケ目、内器面はナデによる器面調整がおこなわれる。



第289図　SH343出土遺物実測図⑤（1/4）



第290図　SH343出土遺物実測図⑥（1/4）

023は約2/3が遺存する資料であり、復元口径11.4㎝、器高7.5㎝を測る。淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、金雲母粒を含む。器面の最終調整は内外器面とも工具ナデによる。

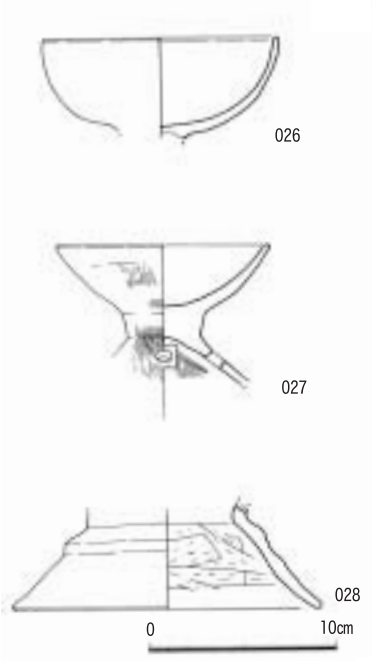
024は復元口径11.8㎝、器高8.0㎝を測る。内外面とも淡茶色を呈し、丁寧なナデ調整がおこなわれる。胎土中には角閃石、長石、石英粒を含んでいる。

025は口縁部、底部を欠損する資料であり、口縁部外面に粘土帯を貼り付け肥厚させ、その下部を突帯風に成形する点を特徴とする。外面は茶褐色～暗茶褐色を呈しハケ目後ナデにより調整される。内面は淡茶褐色を呈しており、ハケ目による器面調整後にナデによる最終仕上げがおこなわれている。胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含んでいる。山陰系のものであろうか。

026 は高杯の坏部資料である。脚部との接合部から剥離する。口径12.4㎝を測り、内外面とも淡茶褐色を呈している。器面の調整はナデによるものと思われるが、表面が風化しており詳細は不明である。

027 は復元口径11.0㎝を測り内外面とも赤褐色を呈する器台資料である。器面の調整は基本的にハケ目とナデによる。胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子を内包している。脚部には４ヶ所の穿孔が認められる。

028は鼓形器台の脚部資料である。底径16.2㎝を測る。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には白色粒子、長石、石英、金雲母粒を内包する。器内面にはヘラケズリ痕を明瞭に残す。器面調整は基本的にナデによる。



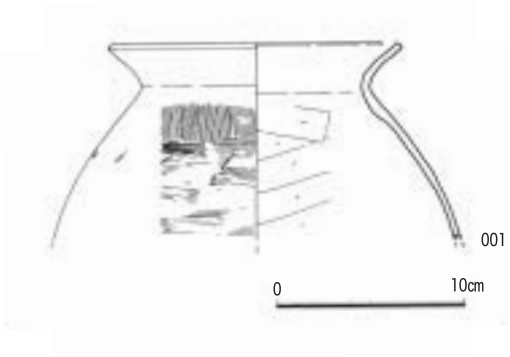
第291図　SH343出土遺物実測図⑦ (1/4)

090SX359（第283図）

092SH343の床面中央において検出したピット状の遺構である。径0.4ｍを測る。

出土遺物（第292図）

001は布留式系甕の上半部の破片資料である。復元口径15.0㎝を測り、内外面とも淡黄白色を呈している。胎土中には石英、金雲母、白色粒子等を含んでいる。口縁端部内面はわずかに突出し、丁寧なヨコナデにより調整されている。外器面はヨコ方向のハケ目調整とナデによる仕上げをおこなった後に、上位部に部分的にタテ方向のハケ目調整を実施する。また、最終段階にヘラ状工具による刺突文を施文する点も本資料の特徴といえる。内器面は頸部の屈曲部からわずかに下がった位置から下位にヘラケズリが実施される。



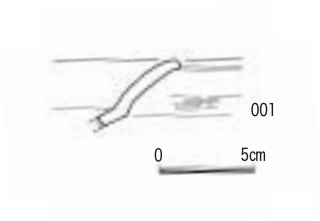
第292図　SX359出土遺物実測図（1/4）

092SX388

092SX388は092SH343の主柱穴である。径0.25mを測り、深さは0.28mと極めて浅い。このような深度で屋根を支えきれたのかどうかは疑問であるが、床面の複数回におよぶ精査においても他に該当する遺構を確認することはできなかった。また竪穴の外周についてもこれらに代わり主柱穴となりそうなピットを探索したが、相当するような遺構の存在を確認することはできなかった。

出土遺物（第293図）

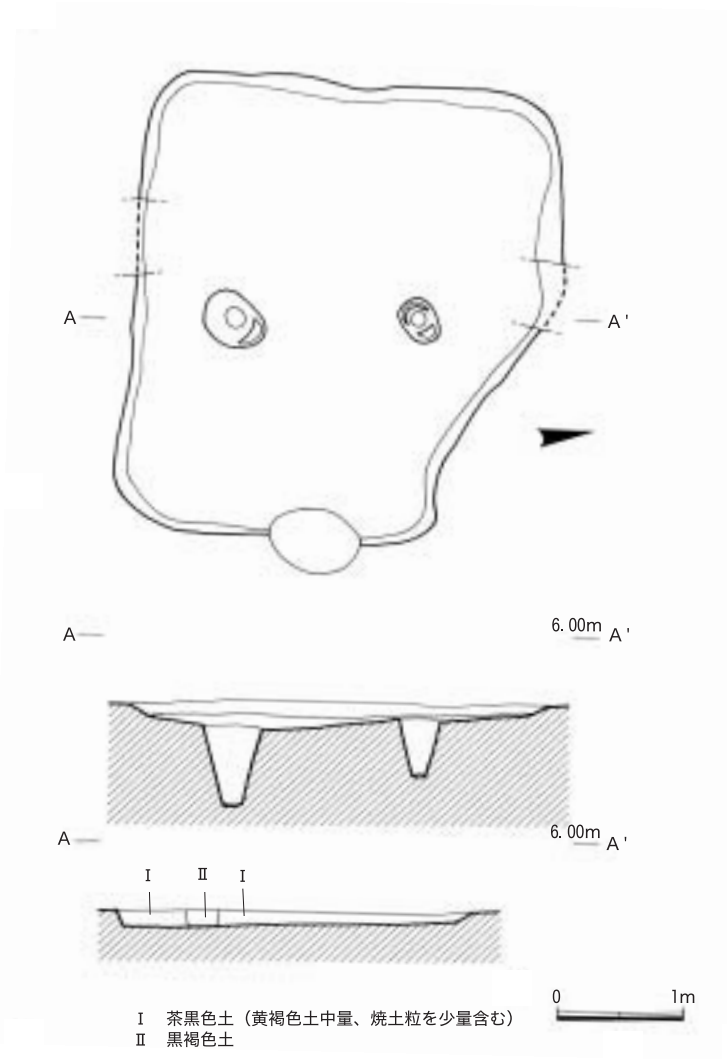
001は高杯の口縁部資料である。外面・淡赤褐色、内面・淡黄褐色を呈している。胎土中には長石、角閃石、石英粒を含んでいる。器面の調整は、外器面はナデとヘラミガキ、内器面はナデにより調整される。



第293図　SX388出土遺物実測図（1/4）

092SH360（第294図）

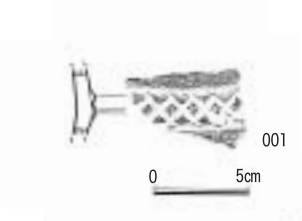
092SH360は092SH343の床面検出時に確認することのできた竪穴遺構である。上位面を092SH343により切られ欠失するため、遺存状況は極めて悪く、本来は3.65m×3.45mの規模の長方形プランを呈するものであるが、プラン検出時には北東角部が欠けた形状で確認された。壁高も最も残りの良好な部分であっても、わずか0.12mである。主柱は２本であり、床面南北方向に配置される。堆積埋土は茶黒色土の単一土による。



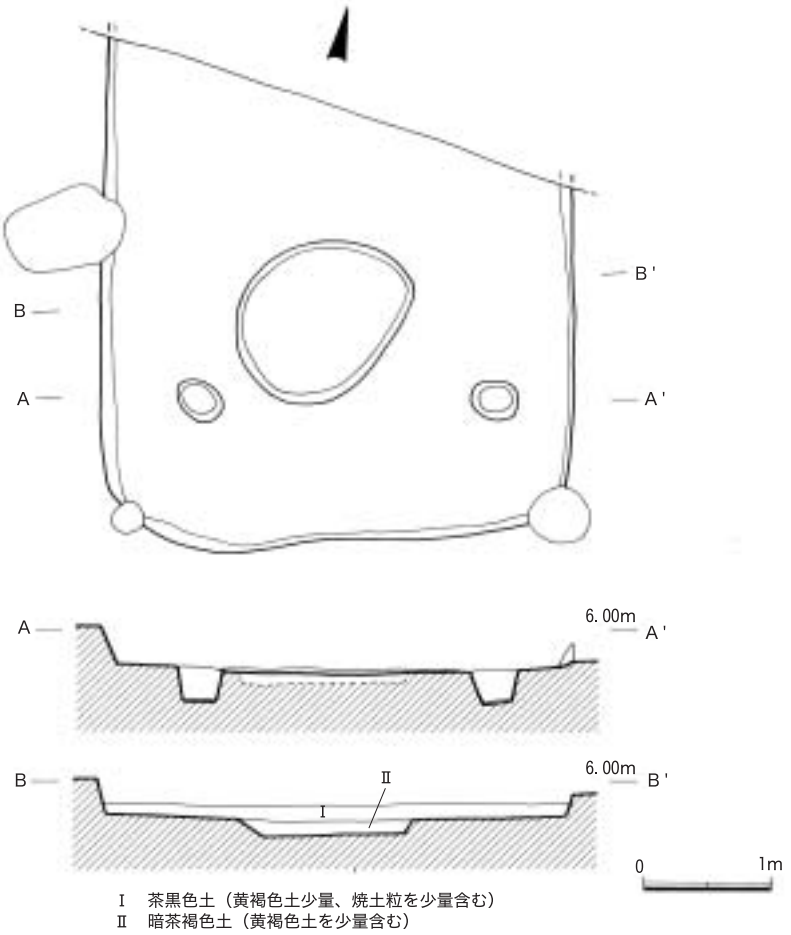
第294図　SH360遺構実測図（1/60）

出土遺物（第295図）

001は、幅広の突帯に格子状の刻みを施文する、いわゆるベルト状突帯と呼称している壺の胴部突帯資料である。内外面とも淡黄褐色を呈し、ナデによる仕上げがおこなわれている。胎土中には長石、角閃石、橙色粒子を含んでいる。同種の資料は、安国寺式壺形土器に貼付される例が多く、弥生時代後期終末時期のメルクマールのひとつとなっている。

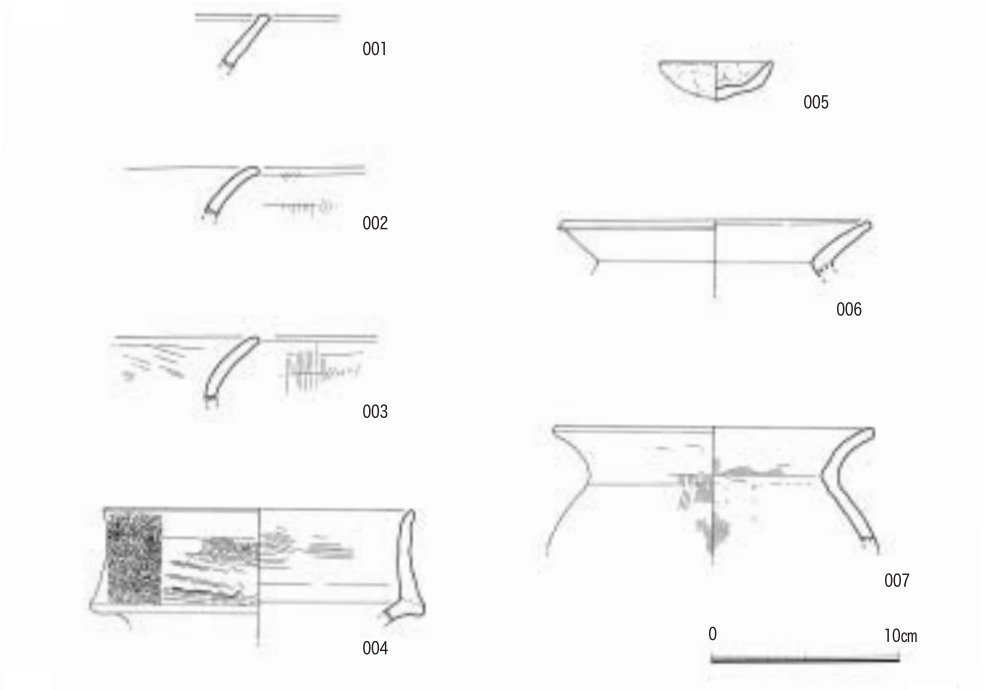


第295図　SH360出土遺物実測図（1/4）



Ⅰ　茶黒色土（黄褐色土少量、焼土粒を少量含む）
Ⅱ　暗茶褐色土（黄褐色土を少量含む）

第296図　SH365遺構実測図（1/60）



第297図　SH365出土遺物実測図（1/4）

092SH365（第296図）

092SH365は調査区北壁の中央付近で確認した竪穴遺構である。北側部分は調査区外に展開する。遺構の平面規模は3.8m×4.2＋αmであり、南側に配置された柱穴２基を検出している。本来は４基程度の主柱が配置されているものと推定される。現存壁高は0.25mを測り、遺構内には茶黒色土が堆積する。柱穴間には1.5m×1.15mの楕円形土坑が配置される。土坑は深さ0.1mであり、暗茶褐色土を埋土とする。

出土遺物（第297図）

001 は布留式系の甕Ｂの口縁端部資料である。口縁端部内面に突出部を形成し、上面には平坦面を形成する。内外器面とも丁寧なナデにより調整され、胎土中には金雲母、角閃石粒を含んでいる。

002 は甕Ａの口縁端部片であり、内外面とも淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、金雲母を含んでいる。外器面はハケ目とナデ、内器面はナデにより調整される。

003も002と同じく甕Ａの口縁部破片である。内外面とも淡黄灰色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を含む。

004 は安国寺式壺形土器の口縁部資料であり、淡黄茶褐色を呈する。複合口縁部の内器面はハケ目により調整され、外器面には櫛描波状文が施文され、上端部には丁寧なヨコナデがおこなわれる。胎土中には角閃石、石英、金雲母粒を内包している。復元口径 16.4㎝を測る。

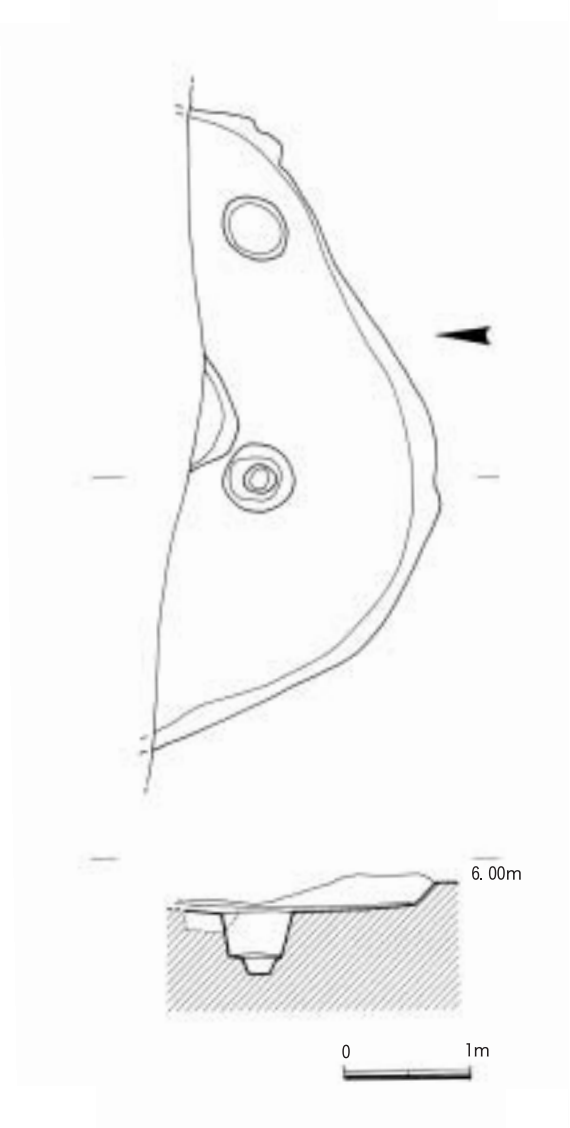
005 は完存するミニチュア土器である。口径5.9㎝、器高2.0㎝を測る。淡黄灰色を呈しており、ナデによる器面の調整がなされている。胎土中には、長石、角閃石、橙色粒子を含んでいる。

006 は甕Ｂの口縁部資料であり、強く丁寧なヨコナデによる器面調整により仕上げがおこなわれている。内外面とも淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子を内包している。

007は甕Ａ資料である。復元口径16.6㎝を測り、外面・淡黄茶褐色、内面・淡赤褐色を呈しており、胎土中には角閃石、石英、白色粒子、橙色粒子が認められる。器面の調整はハケ目とナデによる。

092SH370（第298図）

092SH370は調査区北壁の中央付近、092SH365の西隣に位置する竪穴遺構である。遺構の大部分は調査区外へと延びている。検出プランから推定される遺構形状は隅丸方形を呈するものと推定され、今次の



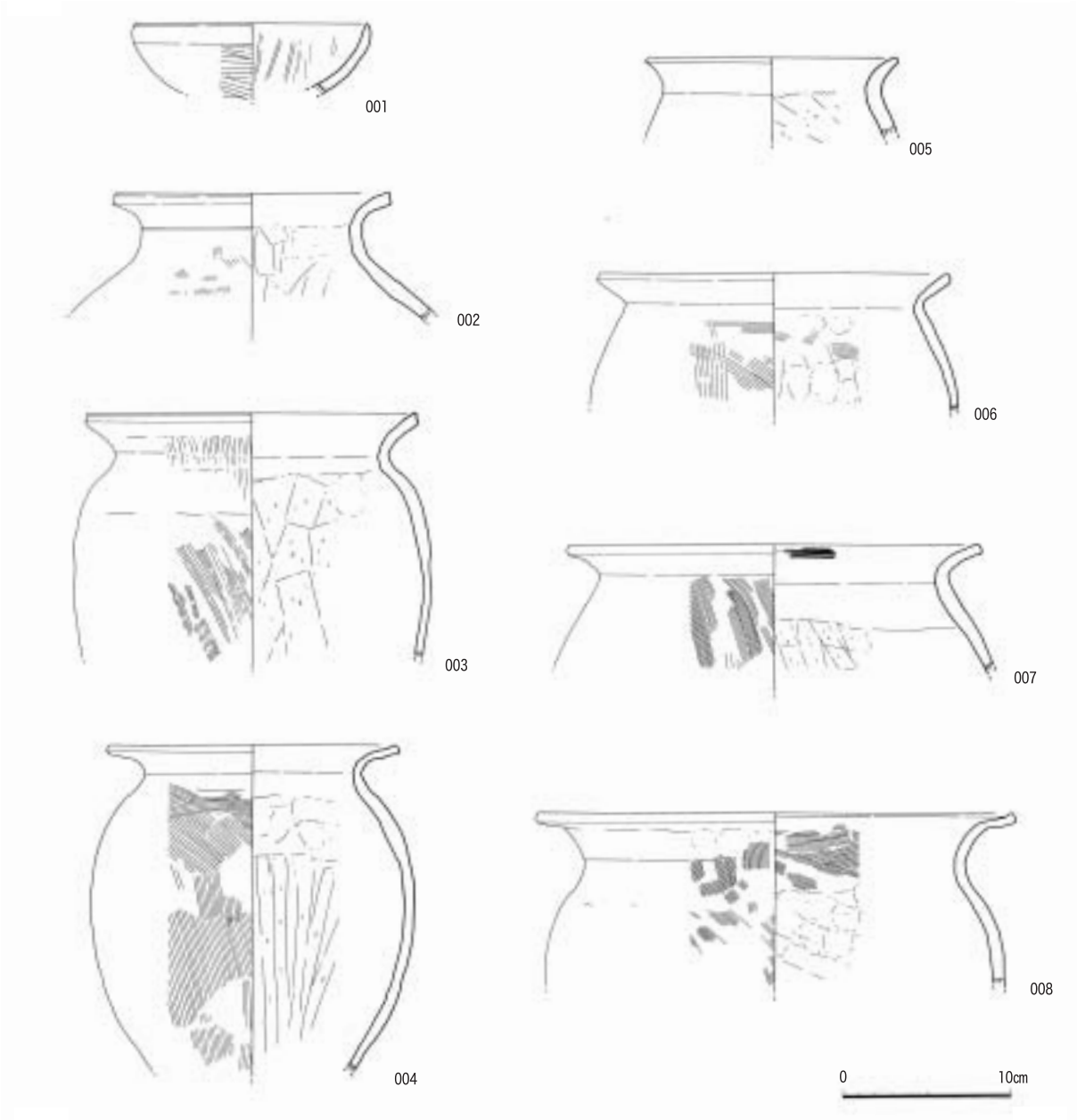
第298図　SH370平面・断面実測図（1/60）

調査では南西角部を確認したことになる。検出プランの床面には主柱穴のひとつになると考えられる径0.45mの柱穴１基を確認しており、その東隣接部には楕円形状をなす土坑の一部を検出している。土坑は0.12mの深さを有し、推定される主柱穴の配置位置との関係から、大分平野の当該期の多くの住居遺構にみられる灰溜まり土坑と考えられているものである可能性がある。

出土遺物（第299図）

001は鉢口縁部であり、内外面とも淡赤褐色を呈している。復元口径13.6㎝を測り、ヘラミガキによる器面の調整がおこなわれ、最終段階に口縁端部に丁寧なヨコナデを実施する。内器面には暗文が施文される。

002は壺口縁部であり、復元口径16.2㎝を測る。外面・淡茶色、内面・淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒等を内包する。器面の調整は外器面がハケ目とナデ、内器面が工具ナデとヨコナデにより



第299図　SH370出土遺物実測図（1/4）

仕上げられる。弥生時代後期前葉前後に比定される資料である。

003は頸部の締まる甕資料である。底部は欠失する。復元口径19.4㎝を測り、淡赤褐色を呈している。外器面はハケ目後ナデによる調整がおこなわれる。これに対して内器面はヘラケズリの後、ナデにより仕上げられる。

004は外方に長く延びる形態をもつ口縁を有する甕資料である。底部は欠損する。淡茶褐色を呈し、胎土の中には角閃石、長石粒を内包する。器面の調整に関しては、外器面がハケ目、内器面は棒状工具によるケズリ後未調整となっている。復元口径17.0㎝を測る。

005 は短く外反する口縁部形状を呈する甕資料である。復元口径 14.6 ㎝を測り、色調は淡赤褐色を呈し、長石、角閃石、橙色粒子を内包する。外器面はナデ、内器面はナデ調整とヘラケズリによる。これらの特徴を有する土師質甕は大分平野部では古墳時代後期に顕著であり、当該期のものである可能性がある。

006は復元口径20.6㎝を測る甕資料であり、外面・淡赤褐色、内面・淡茶白色を呈している。外器面はハケ目後ナデ、内器面は上端部がハケ目後ナデ、体部内器面については工具ナデとナデによる仕上げがおこなわれている。胎土中には長石、角閃石、橙色粒子を内包している。

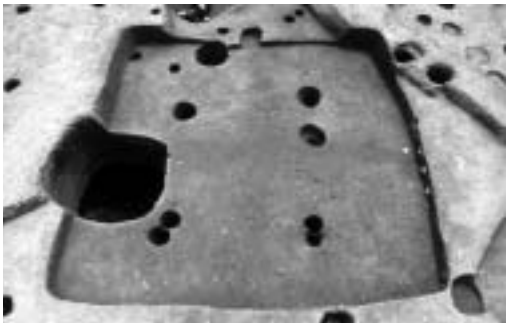
007は復元口径24.2㎝を測る甕資料である。外面・淡茶褐色、内面・淡茶褐色～淡灰色を呈している。外器面はハケ目後ナデ、内器面はナデとケズリ風ナデによる器面調整がおこなわれる。各種特徴から弥生時代後期前葉前後の所産であろう。

008 は薄く、さらに外方に長く延びる特異な形態をなす甕形土器である。復元口径 28.2 ㎝を測り、外面・淡黄茶色、内面・淡黄茶褐色を呈する。器面の調整については、外器面がハケ目後ナデ、内器面がハケ目、ナデ、工具ナデによる仕上げがおこなわれる。

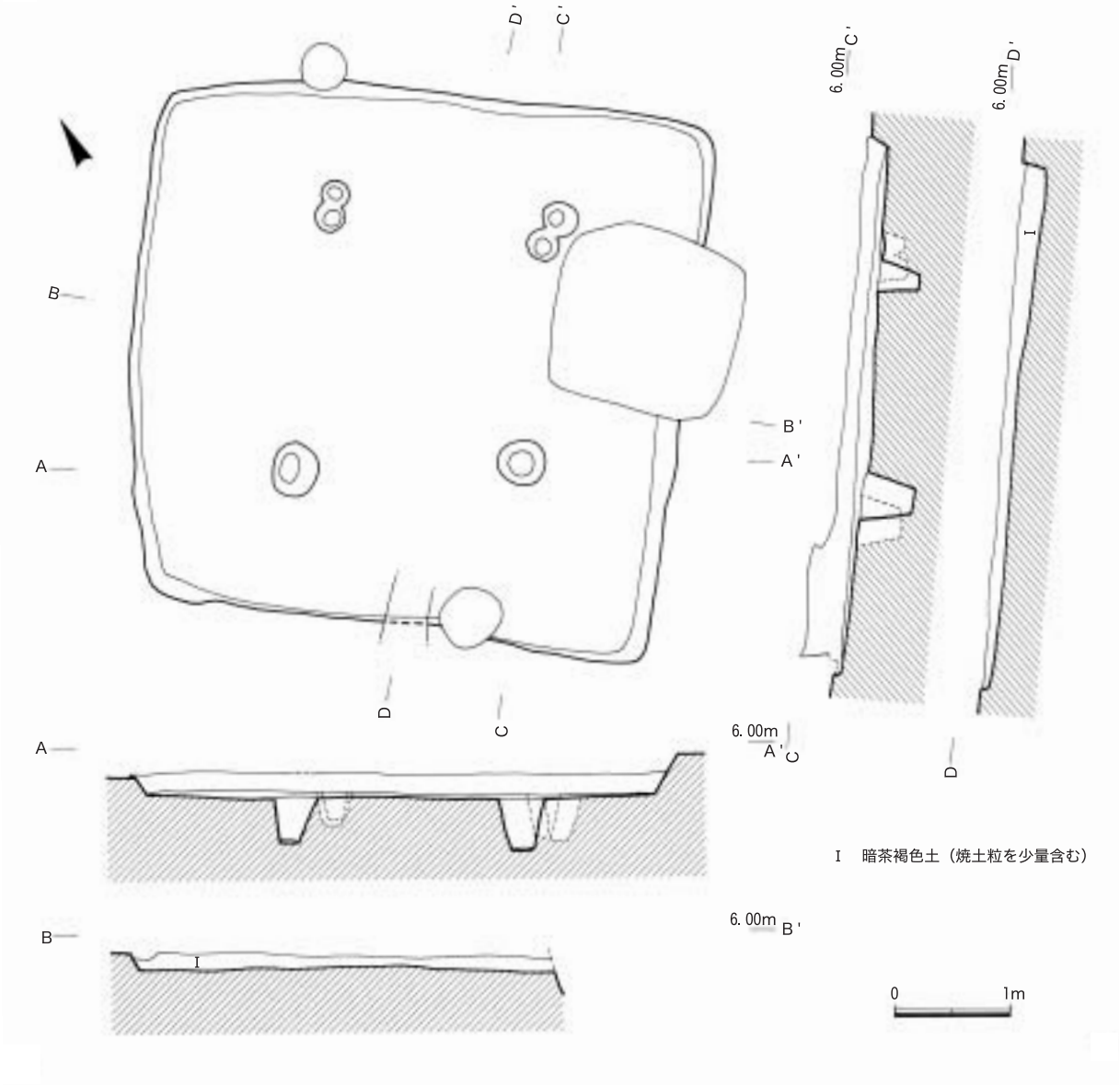
以上が埋土内から出土した資料であるが、出土遺物の帰属年代には弥生時代後期前葉前後、古墳時代初頭、古墳時代後期に比定される可能性を有する資料がある。出土資料が細片であることから、断定は困難であるが、遺構自身の帰属年代を古墳時代後期とする可能性も考慮される。

092SH380（第300・301図）

092SH380 は調査区北側中央付近において確認した竪穴遺構である。遺構の規模・形状は 4.65ｍ×4.7ｍの方形プランを呈している。主柱は４本であり、約 1.3ｍの間隔をもって配置される。東側の２基には柱穴の重複が認められ、機能時に造り替えがおこなわれたことを示している。現存壁高 0.3ｍを測り焼土粒を含む暗茶褐色土を埋土にもつ。



第300図　SH380完掘状況（北方向から）



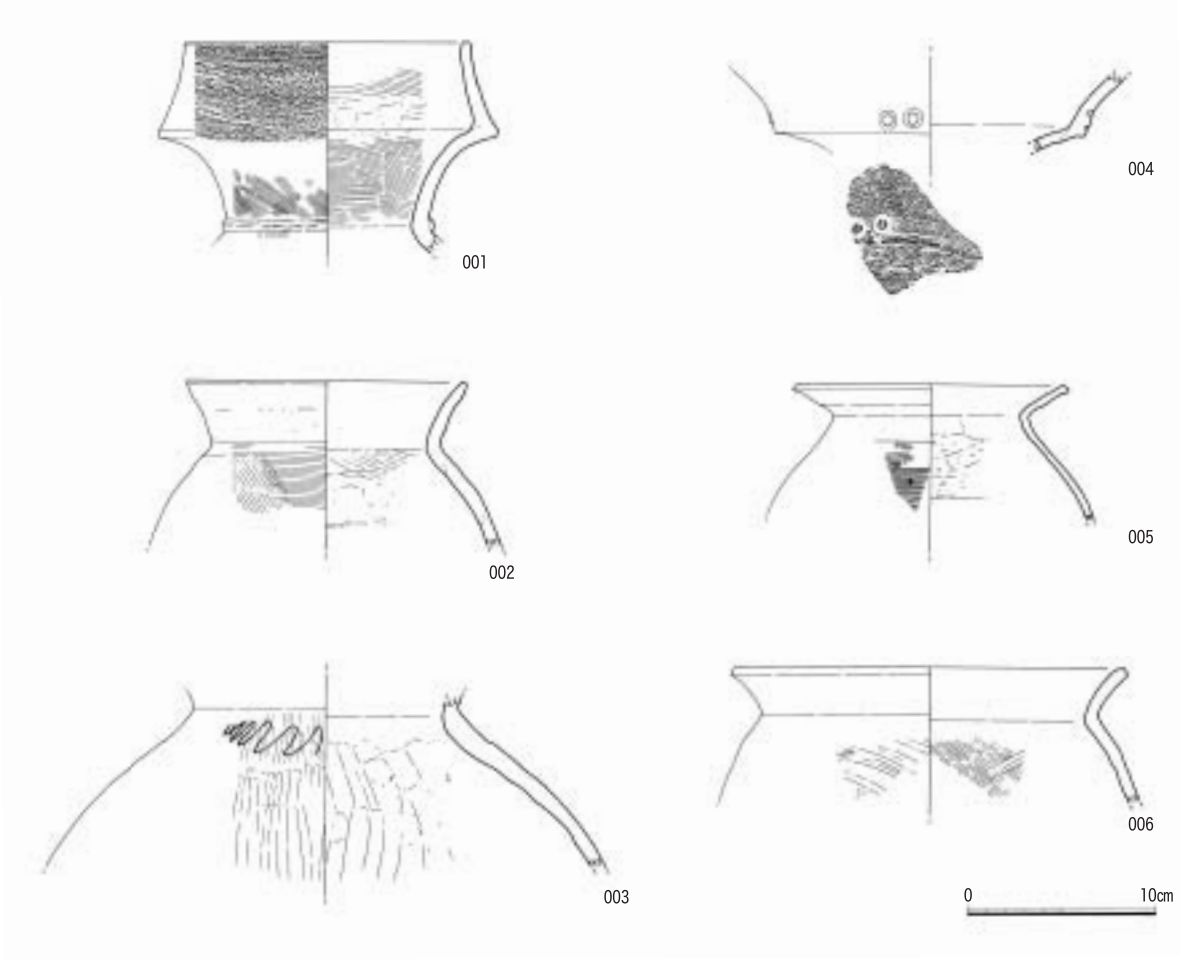
第301図　SH380遺構実測図（1/60）

出土遺物（第302・303図）

001 は安国寺式壺形土器の口縁部資料である。頸部に一条の突帯を貼付し、複合口縁部には櫛状工具による波状文（小波波状文）を全面に施文する。外器面は淡茶色を呈し、ハケ目とナデにより調整される。内器面は暗茶褐色を呈し、器面はヨコ方向のハケ目とナデにより仕上げられる。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。

002は甕A、あるいは甕Cと考えられる甕資料である。外面・淡茶褐色、内面・淡赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒等を含んでいる。復元口径14.6㎝を測る。器形、成形技法等は在地の甕の系譜を引くものであることは明らかであるが、肩部のヨコ方向のハケ目調整は、在地の甕にはあまり認められない用法であり、甕Bからの影響も考慮される資料である。内外器面ともハケ目とナデによる調整がおこなわれている。

003は壺形土器の肩部資料であり、肩部にヘラ描きによる波状文を施文する。器面は淡茶褐色を呈し、



第302図　SH380出土遺物実測図①（1/4）

工具ナデとナデにより調整される。胎土中には石英、白色粒子等を含んでいる。弥生時代後期前葉前後の時期に比定されるものであり、他遺構からの混入遺物と判断される。

004は二重口縁壺の口縁部破片である。端部を欠損する。外面・淡茶色、内面・淡茶白色を呈し、胎土中には橙色粒子、長石、角閃石粒を内包する。二重口縁の屈曲部には竹管状の工具による刺突文を２個認めることができる。

005 は内外面とも淡茶褐色を呈し、復元口径14.0㎝を測る甕Ｂ資料である。体部外器面上半には細密なヨコ方向のハケ目調整とナデが実施される。内器面はヘラケズリ実施後未調整である。胎土中には石英、金雲母粒を含んでいる。

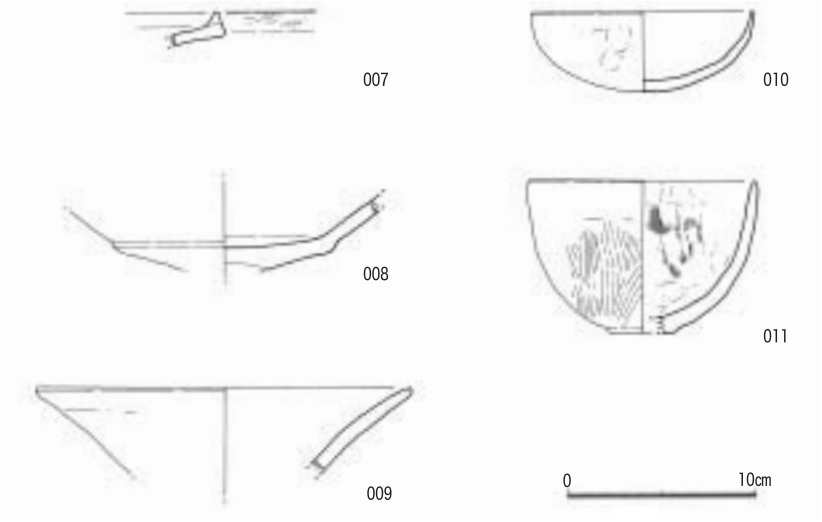
006 は甕Ａの口縁部破片であり、復元口径20.4㎝を測る。内外面とも暗茶褐色を呈しており、胎土中には長石、白色粒子、橙色粒子、石英、角閃石、金雲母粒を内包する。

007 は高杯の口縁端部資料であり、内外面ともに赤色塗彩がなされている。口縁端部上面には粘土帯が貼付され、これにより拡張された口唇部分には櫛描波状文が施文される。器面の調整はヘラミガキによる。

008は高杯坏部の脚部との接合部であり、脚との接続部で剥離している。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英粒を含んでいる。器面の調整はナデによるものである。

009 は器種の詳細は不明であるが、遺存部から器台と推定される資料である。内外面とも淡黄褐色を呈し、ナデによる調整が実施される。復元口径19.8㎝を測り、胎土中には角閃石、石英、長石、金雲母粒を内包する。

010 は底部が丸底を呈する鉢である。復元口径11.6㎝、器高4.2㎝を測る。外面・黒色～淡茶褐色、内面・淡茶褐色を呈し、器面の調整はナデによる。



第303図　SH380出土遺物実測図②（1/4）

011 は小さな平底気味の底部をもつ鉢形土器である。口径11.8㎝、器高8.0㎝、底径3.4㎝を測る。外面・淡茶灰色、内面・淡茶褐色を呈し、内外器面ともハケ目とナデによる器面調整がおこなわれている。

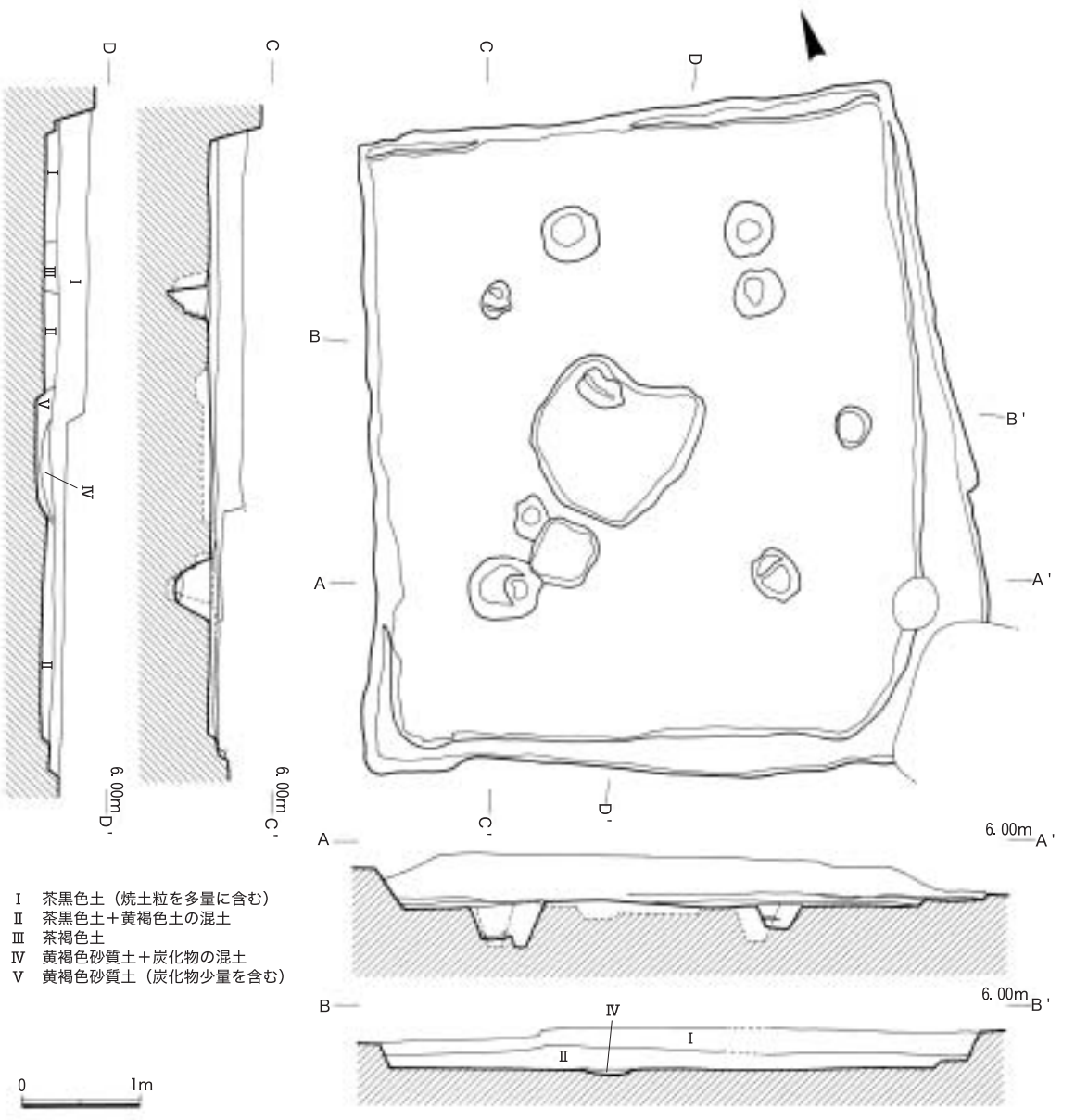
以上が出土遺物の概要であるが、弥生時代の遺物の混入も認められるものの、遺物の主体は古墳時代初頭頃に編年されるものであり、遺構の帰属年代をほぼこの時期として大過ないものと判断される。

092SH385（第304・305図）

092SH385は092SH365・092SH380と重複関係を有する竪穴遺構である。5.5ｍ×5.05ｍの規模を測る長方形プランを呈している。主柱は４本であり、床面中央に径約1.4m、深さ約0.15ｍの不整円形土坑を配置する。さらに北壁面の一部、東壁、南壁の際には高さ0.05m程度、幅0.1～0.3ｍの基盤土の削り残しによる微隆起帯が設置され、基本的にはこの高さに合わせて住居内部に茶黒色土と黄褐色土の混土を充填し、貼床を形成している。遺構内の堆積埋土は焼土粒を多量に含む茶黒色土であり、床面中央の土坑には黄褐色砂質土が堆積しており、上部には多くの炭化粒を含んでいる状況を確認することができた。



第304図　SH385完掘状況（東方向から）



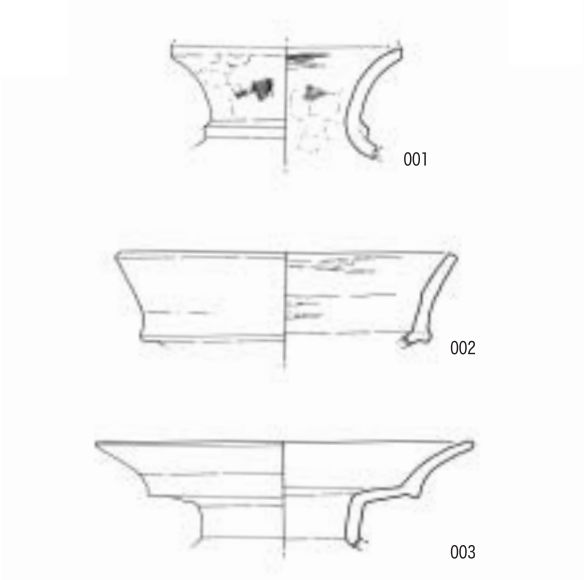
第305図　SH385遺構実測図（1/60）

出土遺物（第306～316図）

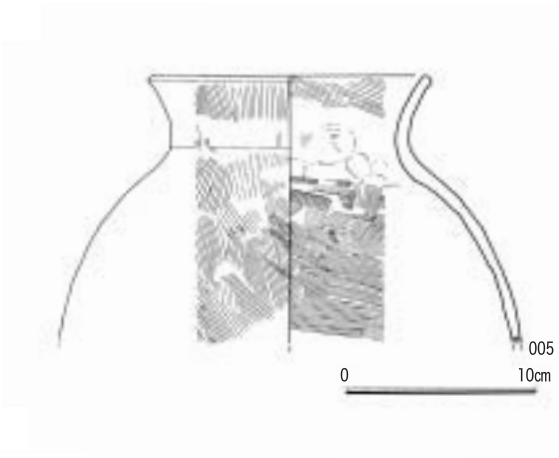
001～004は壺形土器資料である。**001**は淡茶褐色を呈し、頸部に一条の三角突帯を貼付ける複合口縁壺である。複合口縁部を欠損する。内外器面ともハケ目とナデによる器面調整がおこなわれ、胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子を含んでいる。

002は二重口縁壺の口縁部であり、復元口径17.4㎝を測る。器面の調整はナデを主体とし、内器面のみにヘラミガキによる調整が認められる。淡茶褐色を呈し、胎土中には長石、角閃石、石英粒を内包する。

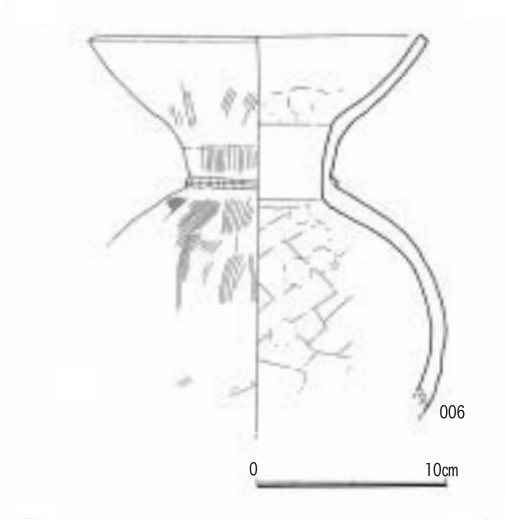
003は段をもって外方へ大きく開く二重口縁壺である。口縁部分は完存する。口径19.8cmを測り外面・淡黄茶色、内面・淡黄灰色を呈し、胎土中には角閃石、石英粒を確認することができる。住居床面直上



第306図　SH385出土遺物実測図①（1/4）



第307図　SH385出土遺物実測図②（1/4）



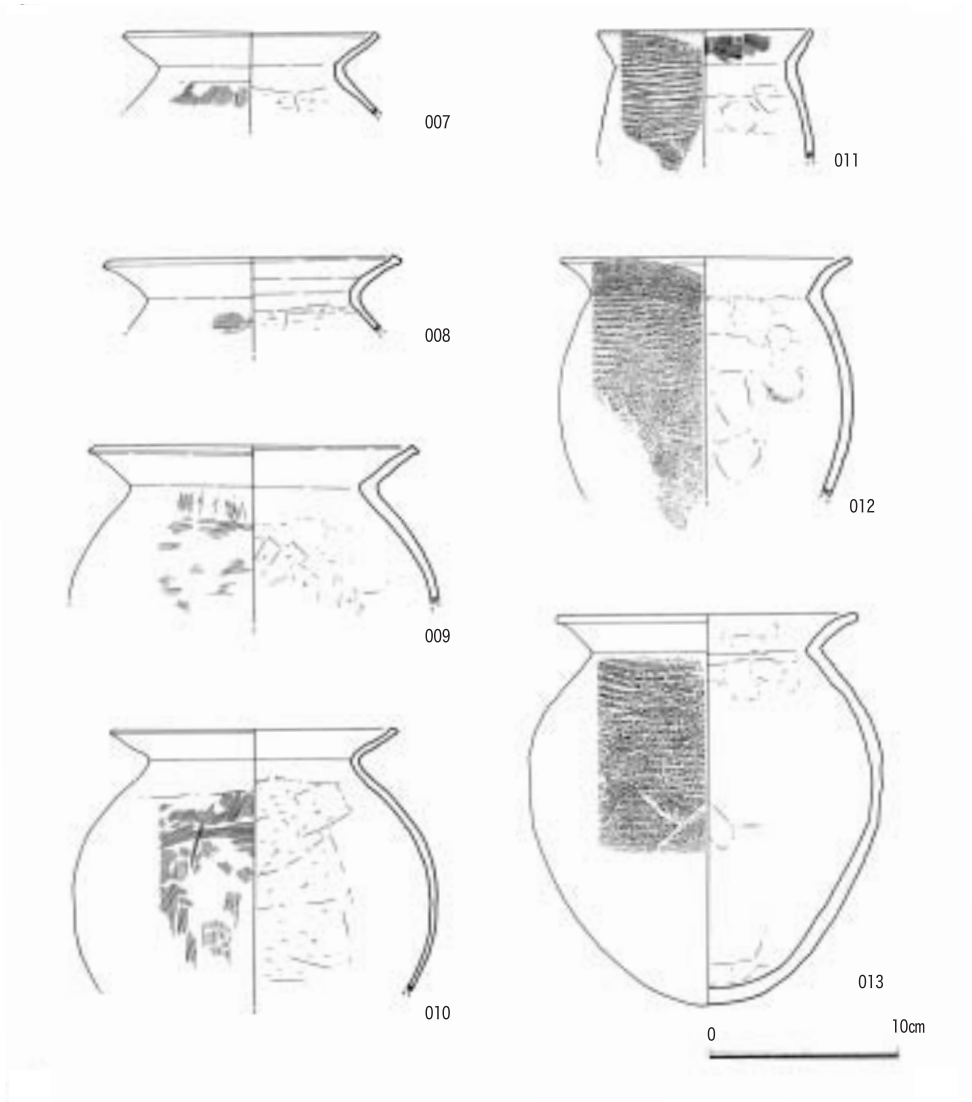
第308図　SH385出土遺物実測図③（1/4）

から出土した。古墳時代初頭に位置づけられる資料である。

004は肥厚口縁をもつ壺口縁部資料である。口縁部内面に粘土帯を貼付し、平坦面を形成する。さらにこの平坦面には２ヶ１組の円形浮文を貼付するとともに、口唇部にはヘラ状工具による連続山形文を施文する。淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、長石、角閃石粒を内包する。復元口径23.0cmを測る。器面の調整は、内外器面ともハケ目とナデによる調整がおこなわれている。弥生時代後期前葉～中葉に比定される資料であり、重複関係を有する092SD300からの掻きあげ遺物と判断される。

005は外面・淡茶褐色、内面・淡茶灰色を呈する壺形土器資料である。復元口径14.4cmを測る。内外器面ともハケ目による調整がおこなわれ、胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。

006 は二重口縁壺を意識して製作されたと想定される壺形土器である。頸部に断面三角形を呈し、指により上下に摘まむことで、装飾効果を加えた突帯を一条貼付する。肩部から頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部は頸部からラッパ状に開く形状をなす。器面は淡茶褐色を呈し、外器面はハケ目後ナデによる仕上げがおこなわれ、内器面は工具ナデにより平滑に仕上げられている。口径17.2cmを測り、胎土



第309図　SH385出土遺物実測図④（1/4）

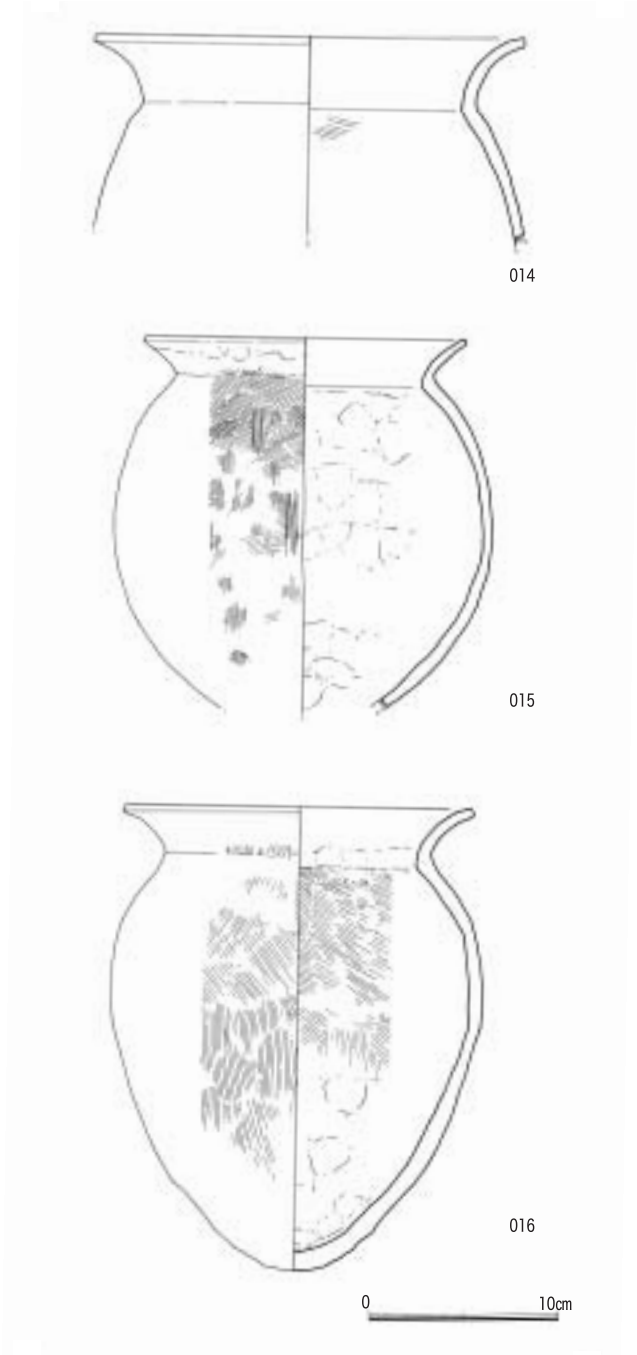
中には角閃石、長石、橙色粒子、石英粒を含んでいる。

007～010は布留式系の甕であり、甕Ｃに比定される資料である。**007**は口縁部資料であり、復元口径13.0cmを測る。口縁端部は丁寧なヨコナデにより調整され、体部外器面はハケ目、内器面はヘラケズリが施されている。淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、金雲母粒を含んでいる。

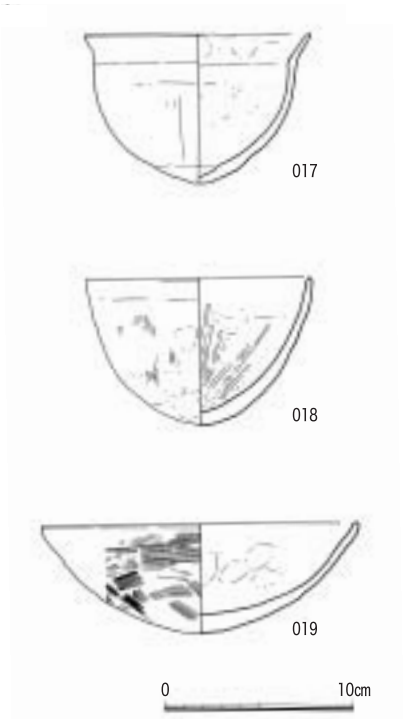
008は端部外面に面取り風の平坦面を形成し、ヨコナデによる調整がなされている。淡茶灰色を呈し、胎土には金雲母、石英、長石、白色粒子を含む。復元口径15.0cmを測る。内器面はヘラケズリ、外器面にはタテ方向のハケ目の後にヨコ方向のハケ目による器面調整がなされている。

009は復元口径16.8cmを測る甕資料である。外面・明茶褐色、内面・淡茶灰色を呈しており、内器面をヘラケズリ、外器面をハケ目後ナデにより調整する。胎土中には石英、角閃石、長石粒を含んでいる。

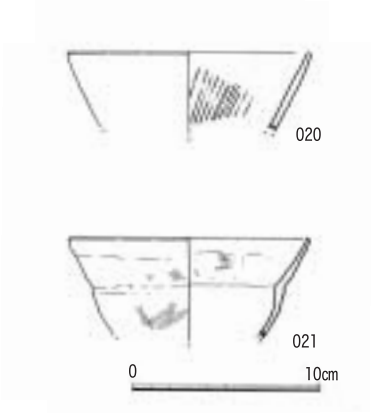
010は復元口径14.6cmを測り、外面・淡茶褐色、内面・淡茶灰色を呈する甕資料である。外面の一部に赤彩の痕跡が認められる。胎土中には石英、金雲母粒が認められる。体部内器面はヘラケズリとナデ、体部外器面にはタテ方向のハケ目の後にヨコ方向のハケ目調整が実施されている。外器面の一部にはス



第310図　SH385出土遺物実測図⑤（1/4）



第311図　SH385出土遺物実測図⑥（1/4）



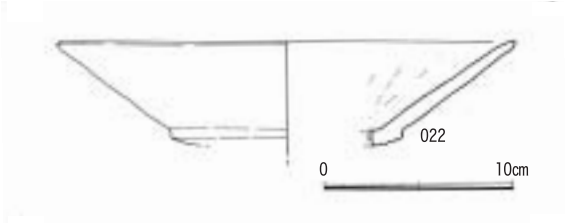
第312図　SH385出土遺物実測図⑦（1/4）

スの付着が認められる。

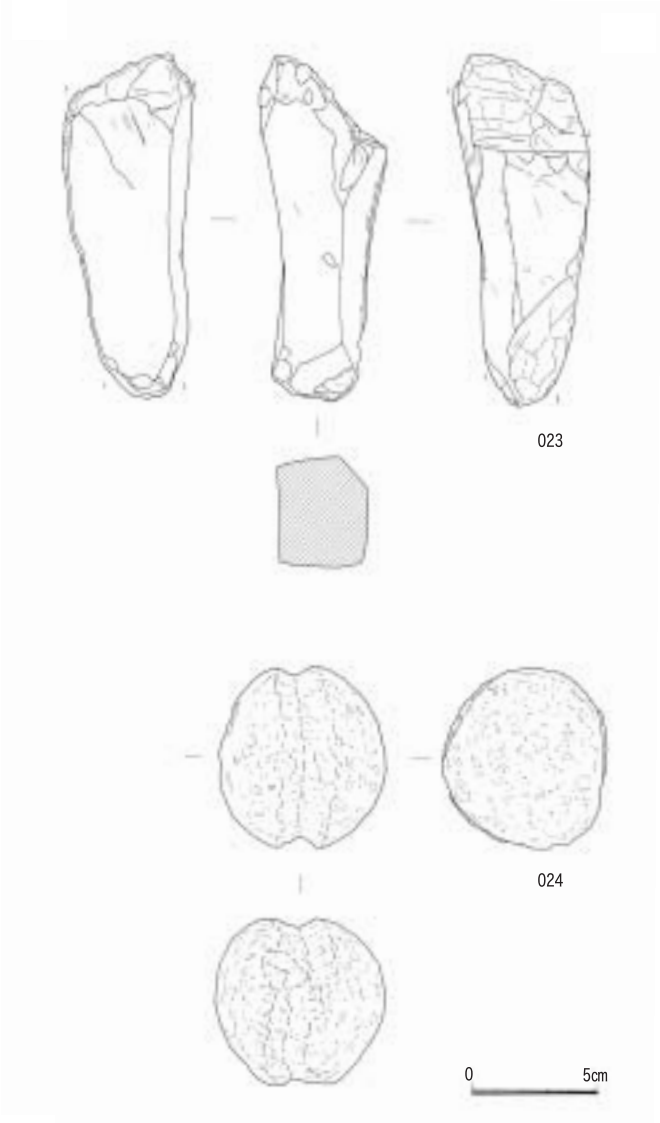
011～013は外器面にタタキ痕を残す甕資料である。**011**は淡赤灰色を呈し、「く」字状に屈曲する口縁を有している。復元口径11.2cmを測る。内器面の調整はハケ目とナデである。

012は復元口径15.0cmを測り、茶褐色を呈する資料であり、胎土中には長石、角閃石粒を内包する。器内面はナデにより平滑に仕上げられている。内器面の一部に接合痕を認めることができる。

013は住居床面直上から出土した資料であり、完存する。口径16.0cm、器高20.5cmを測る。内外面とも淡赤褐色～暗茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、橙色粒子を内包する。器内外面ともにススの付着がみられる。



第313図　SH385出土遺物実測図⑧（1/4）



第314図　SH385出土遺物実測図⑨（1/3）

014～016は在地系の甕資料である。**014**は内外面とも淡茶白色を呈し、胎土中には角閃石、長石、橙色粒子、石英粒を含んでいる。復元口径22.6㎝を測り、外器面はナデ、内器面はハケ目とナデにより調整される。

015 は胴部の張りが大きく、球形化を指向する。外面・淡茶褐色、内面・淡茶白色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英粒を内包する。体部外器面はハケ目とナデ、体部内器面はナデによる器面の調整がおこなわれている。復元口径16.8㎝を測る。

016 は住居床面直上から出土した。復元口径 18.4㎝、器高24.7㎝を測る甕形土器である。外面・赤褐色～暗茶褐色、内面・淡黄褐色～赤褐色を呈し、器面の調整は内外器面ともハケ目とナデによる。

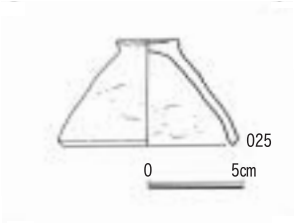
017～019は小型の鉢資料である。**017**はほぼ完存する資料であり、口径11.8㎝、器高7.9㎝を測る。器面は淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英粒を含んでいる。

018は淡赤褐色を呈し、復元口径11.8㎝を測る丸底の鉢形土器である。器面の調整に関しては、外器面が工具ナデ後ナデ、内器面がナデによる調整をおこなった後に放射状のヘラミガキが施される。

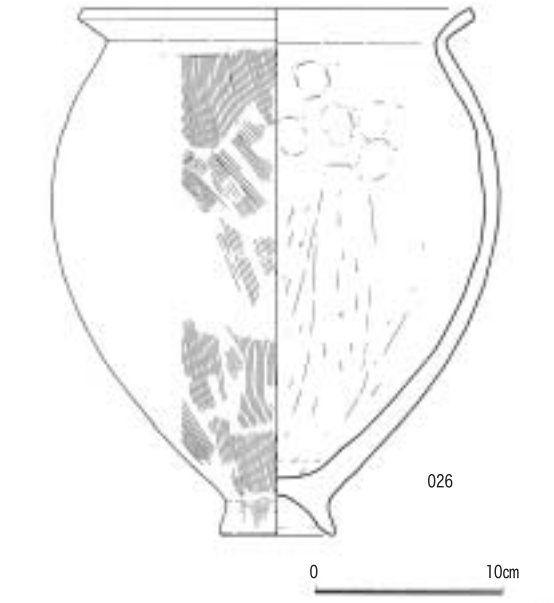
019は復元口径16.6㎝、器高5.8㎝を測る浅手の鉢形土器である。外面は暗茶褐色を呈し、ハケ目調整後にナデによる最終仕上げがおこなわれる。内面は淡赤褐色を呈し、ナデにより平滑に仕上げられる。胎土中には角閃石、長石、白色粒子を含んでいる。

020・021は小型丸底壺である。**020**は復元口径12.8㎝を測り、淡黄橙色を呈する小型丸底壺口縁部資料である。内外器面ともナデによる器面調整がおこなわれ、内器面には放射状の暗文が施文される。

021は復元口径12.6㎝を測り、外面・淡赤褐色、内面・淡茶褐色を呈している。外器面はハケ目後ナデ、内器面はナデによる器面調整がおこなわれる。胎土中には角閃石、長石、石英粒が含まれている。



第315図　SH385出土遺物実測図⑩（1/4）



第316図　SH385出土遺物実測図⑪（1/4）

022は復元口径24.0㎝を測る高杯坏部資料である。色調は茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英粒を含んでいる。器面の調整はナデによるものであり、内器面には放射状の暗文が施文されている。

023は砂岩製の砥石であり、現存長13.8㎝×3.8㎝×3.6㎝、現存重量330.0ｇを測る。

024 は凝灰岩製の石錘である。球形に加工後に中央部において紐懸け用の溝を彫りこんでいる。法量は 7.3㎝×6.5㎝、径6.6㎝、重量340.0ｇを測る。

025 は小型の蓋形土器である。外面は淡黄褐色を呈し、ナデにより調整される。これに対して内面に関しては淡茶褐色を呈し、外器面と同じくナデによる器面の調整がおこなわれている。胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子を含む。口径8.9㎝、器高5.6㎝を測る。弥生時代のものであり、他遺構からの混入である。

026は復元口径20.4㎝、器高28.0㎝、復元底径5.8㎝を測る甕形土器である。底部は中空の脚台状をなしている。内外面とも淡赤褐色を呈しており、胎土中には角閃石、長石粒を内包する。外器面にはタテ方向のハケ目、内器面はケズリ調整による器面の調整が実施されている。弥生時代後期前葉前後の資料であり、他遺構からの混入資料と判断される。

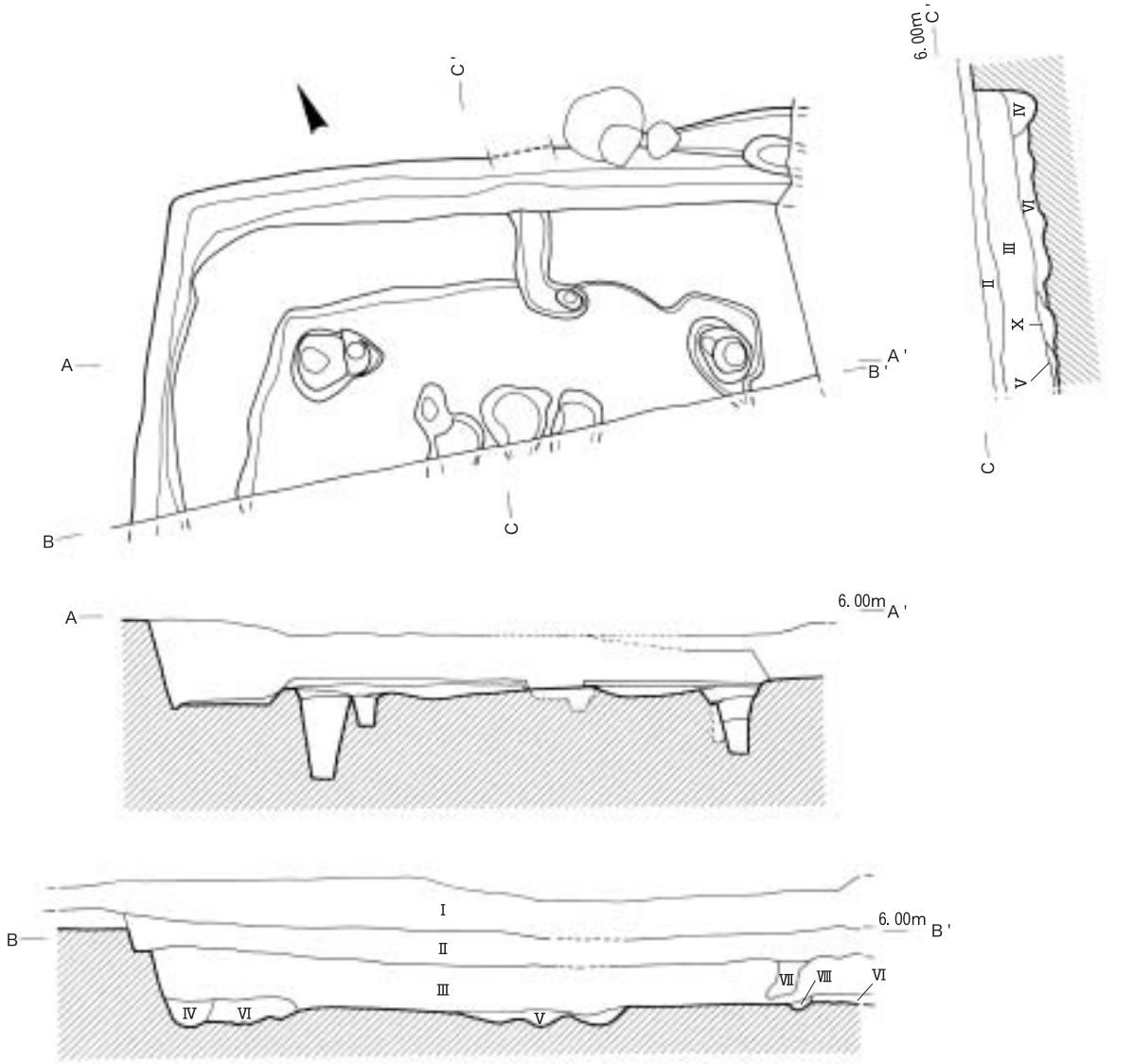
092SH400（第317・318図）

092SH400は調査区南壁部において検出した竪穴遺構である。遺構の南半および東端は調査区外に存する。現状での規模は2.6＋αｍ×5.55＋αｍである。検出面から床面までの深さは0.65ｍを測る。調査対象範囲内において主柱穴になると推定される柱穴２基を確認しており、これらの位置関係から本来は４本主柱を有する竪穴住居跡と想定される。床面中央付近と考えられる部分には黄褐色粘質土ブロックを含む暗茶灰色砂質土を内包する三連の土坑が配置される。また、北壁方向からＬ字状に延びる間仕切り溝なども認められる。

住居床面の構築に際しては、壁面際に幅 0.7ｍ、深さが0.15ｍ程度の溝を掘り、中央部を削り残すような状況で成形する。その後周囲の溝部に茶褐色粘質土ブロック、淡青灰色粘質土ブロックを含む淡灰褐色粘質土を充填し床面を整形し、その上で壁際に幅 0.3ｍの壁溝を改めて構築している。



第317図　SH400完掘状況（北西方向から）



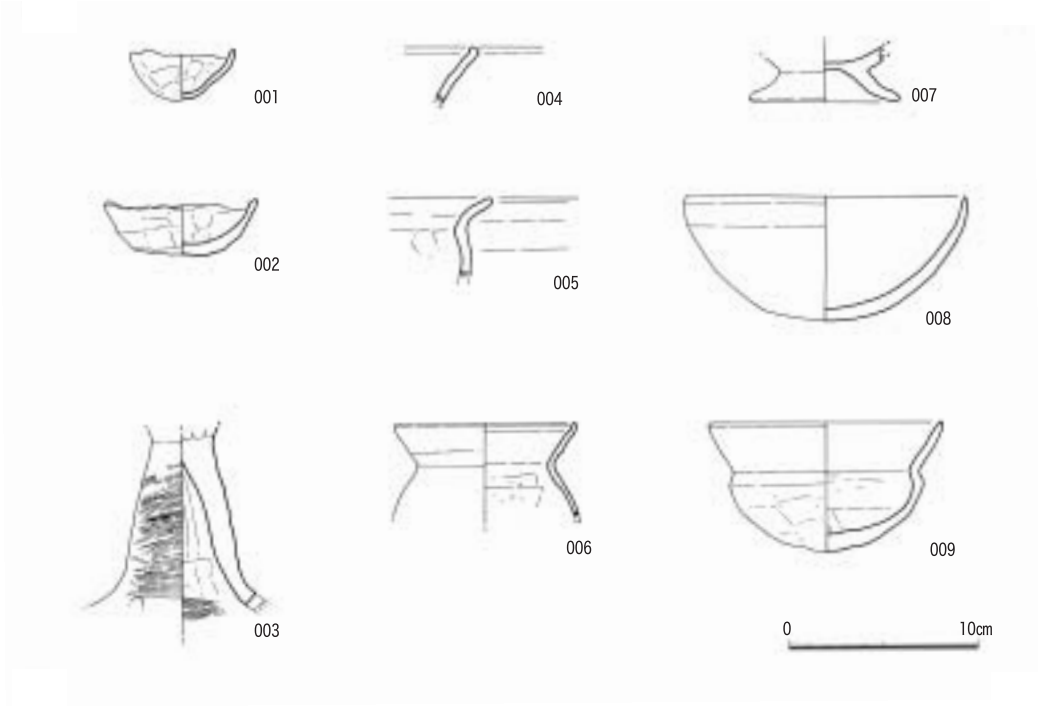
Ⅰ　明茶褐色土
Ⅱ　暗黒褐色土（茶褐色土ブロック、橙色粒子、炭化物含む）
Ⅲ　暗褐茶色土（黄褐色粒子、橙色粒子、炭化物、赤茶褐色粒子を少量含む）
Ⅳ　暗茶灰色粘質土（緑灰色粘質土ブロック、黄褐色粒子、炭化物、橙色粒子を含む）
Ⅴ　淡黒灰褐色粘質土（炭質、炭化物、焼土粒を多量に含む）
Ⅵ　淡灰褐色粘質土（茶褐色粘質土ブロック、淡青灰色粘質土ブロック、明黄褐色粒子を含む）
Ⅶ　暗褐色土（淡茶褐色土ブロック、黄褐色粒子、橙色粒子を含む）
Ⅷ　淡褐色土（炭化物、橙色粒子を含む）
Ⅸ　褐色土
Ⅹ　暗茶灰色砂質土（黄褐色粘質土ブロックを少量含む）

第318図　SH400遺構実測図（1/60）

出土遺物（第319・320図）

001は淡茶褐色を呈するミニチュア土器である。鉢形を呈している。口径5.3cm、器高2.8cmを測り、器面はナデにより調整される。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。

002は001に比して少し大ぶりな同型のミニチュア土器である。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を内包する。口径7.8cm、器高3.0cmを測る。外面の一部にススの付着が認められる。



第319図　SH400出土遺物実測図①（1/4）

003は高杯脚柱部片である。坏部および脚裾部は欠損する。内外面とも淡橙褐色を呈し、胎土中には長石、角閃石粒を内包している。外器面の調整はハケ目後ヨコ方向の細密なヘラミガキが実施される。脚内器面はハケ目調整の後にナデによる器面調整がおこなわれる。

004 は住居埋土第Ⅱ層土中から出土した布留式系甕の口縁部片資料である。端部内面に突出部を形成し、丁寧なヨコナデにより仕上げられる。内外面とも淡茶褐色を呈している。

005は淡茶褐色を呈する甕口縁部資料である。器面の調整はナデによるものであり、胎土中には長石、角閃石、橙色粒子を内包する。

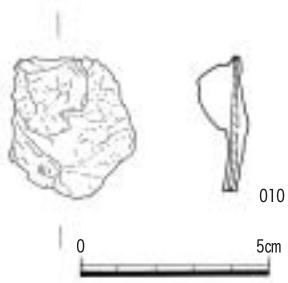
006は復元口径9.4cmを測り淡茶褐色を呈する小型の甕である。体部内器面にはヘラケズリが施され、器面の調整にはナデによる仕上げがおこなわれている。胎土中には金雲母が散見される。

007 は台付鉢の脚部片である。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土中には石英、長石粒等を内包している。ナデにより調整される。

008は復元口径14.8cm、器高6.6cmを測る鉢である。内外面とも淡橙褐色を呈し、器面の調整はナデによる。特に舌状に成形された口縁端部付近には丁寧なヨコナデ調整がおこなわれている。

009は約1/3が遺存する小型丸底壺である。復元口径12.2cm、器高6.8cmを測る。内外面ともに淡茶褐色を呈し、器面は丁寧なナデにより調整される。

010 は遺構埋土内から出土した鉄製品である。薄い板状を呈している。現状での大きさは3.7cm×3.3cmを測る。用途、内容等の詳細については不明である。



第320図　SH400出土遺物実測図②（1/2）

その他の遺構（ＳＸ）

092SX020（第183図）

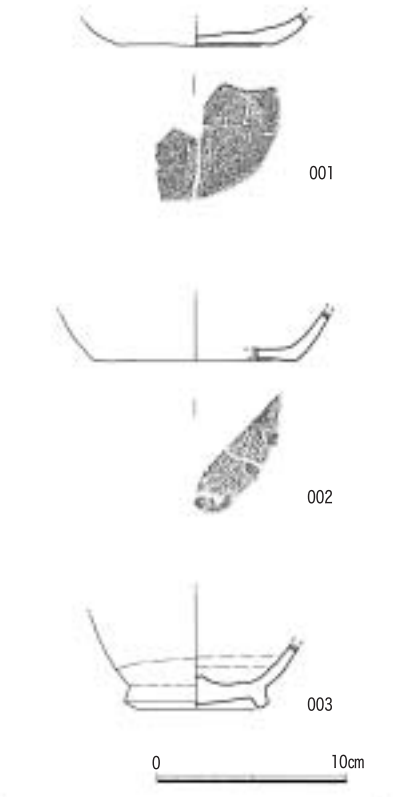
調査区西壁際の南寄りの地区において検出した土坑である。遺存状況は良好でなく、遺構の現存深度は僅かに0.45mである。遺構プランは径0.8ｍを測る円形であり、埋土内に遺物小片を内包する。

出土遺物（第321図）

001 は土師器坏の底部資料であり、内外面とも淡茶褐色を呈する。復元底径8.2cmを測り、底部には回転糸切り痕が残る。器面の調整はナデによる。

002 は内外面とも淡茶褐色を呈する土師器坏底部資料である。底部には回転糸切り離し痕が残り、器面の調整はナデによる。復元底径10.8cmを測る。胎土には精製土が使用されている。

003は白磁壺の底部である。底径6.5cmを測る。内外面とも施釉されるが、高台部内面、内底面の一部などは露胎となる。露胎部は淡黄褐色を呈している。



第321図　SX020出土遺物実測図（1/4）

092SX021（第183図）

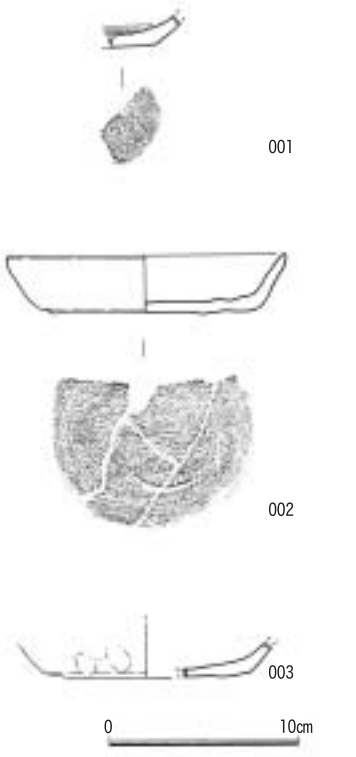
092SX020と切り合い関係を有する。092SX020に大半を切られている。現状から推定される遺構規模と形状は径0.5ｍの円形ピット状の遺構であり、現存深度0.4mを測る。

出土遺物（第322図）

001 は底部に回転糸切り離し痕を残す土師器坏の底部資料である。内外面とも淡茶褐色を呈し、器面の調整はナデによる。

002は口径14.6cm、器高3.0cm、底径10.5cmを測る土師器坏である。内外面とも茶褐色を呈し、ナデによる調整がおこなわれている。器形および法量から13世紀の所産になるものと推定される。

003 は内外面とも茶褐色を呈する土師器坏資料であり、底部は回転ヘラ切り離し後に手持ちヘラケズリによる調整がなされる。これらの特徴から８世紀代の所産になるものと推定される。



第322図　SX021出土遺物実測図（1/4）

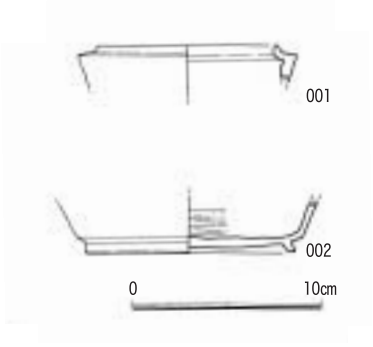
092SX041（第183図）

調査区西壁の中央付近で検出した柱穴状の遺構である。径0.6m、現存深度0.47mを測る。

出土遺物（第323図）

001 は土師質小壺の口縁部資料である。復元口径9.5㎝を測り、内外面とも茶褐色を呈する。器面の調整は回転ナデによる。

002 は土師器高台付坏の底部資料であり、内外面とも茶褐色を呈している。底径11.1㎝を測り、ミガキａ$_2$による調整がおこなわれる。以上の資料は８世紀中頃から後半頃に比定されるものである。



第323図　SX041出土遺物
実測図（1/4）

092SX090（第183図）

調査区中央の西壁付近で検出した長土坑である。長さ2.8m、幅1.3m、深さ1.1mを測る。破片資料であるが、遺物が比較的まとまって出土している。

出土遺物（第324図）

001 は須恵器高台付坏の口縁部資料である。内外面とも暗灰色を呈し、器面は回転ナデにより調整される。

002は淡灰白色を呈する須恵器坏資料であり、復元口径12.8㎝、復元底径9.6㎝を測る。器面の調整はナデによる。

003～005は土師器坏である。**003**は復元口径13.8㎝、器高3.8㎝、復元底径10.0㎝を測る土師器坏である。内外面とも赤橙色を呈し、底部はヘラ切り離し後ナデによる調整がなされている。

004 もまた、底部を回転ヘラ切り離し後ナデにより調整をおこなう土師器坏であり、外面・淡赤褐色～赤橙色、内面・淡赤褐色を呈している、復元口径13.0㎝、器高4.4㎝、復元底径10.7㎝を測る。胎土中に角閃石、石英、長石粒を含んでいる。

005 は口縁部を若干外方へ反転させる土師器坏であり、底部は003・004と同じくヘラ切り離し後ナデによるものである。内外面とも赤橙色を呈し、復元口径14.8㎝、器高4.0㎝、復元底径11.3㎝を測る。器面の調整は内外ともナデである。

006は口径19.6㎝を測る土師器坏である。器高4.9㎝、底径12.3㎝を測り、体部下半には回転ヘラケズリが施される。赤橙色を呈し、器面の最終調整は外面・ミガキａ$_2$、内面・ミガキａによる。

007は土師器皿資料であり、約1/2が遺存する資料である。復元口径21.3㎝、器高2.6㎝、復元底径19.6㎝を測り、口縁端部内面に一条の沈線を有する点を特徴とする。外面・淡赤褐色～赤褐色、内面・淡赤褐色を呈す。器面の調整は内器面はナデ、外器面はミガキａによる。

008～010は土師器高台付坏である。**008**は内外面とも淡赤褐色を呈し、ミガキａ$_2$により調整される。復元口径13.2㎝、器高3.5㎝、底径10.2㎝を測る。ミガキは底部内面にまで比較的丁寧に施されている。胎土中には角閃石、石英、長石、金雲母粒等を含む。

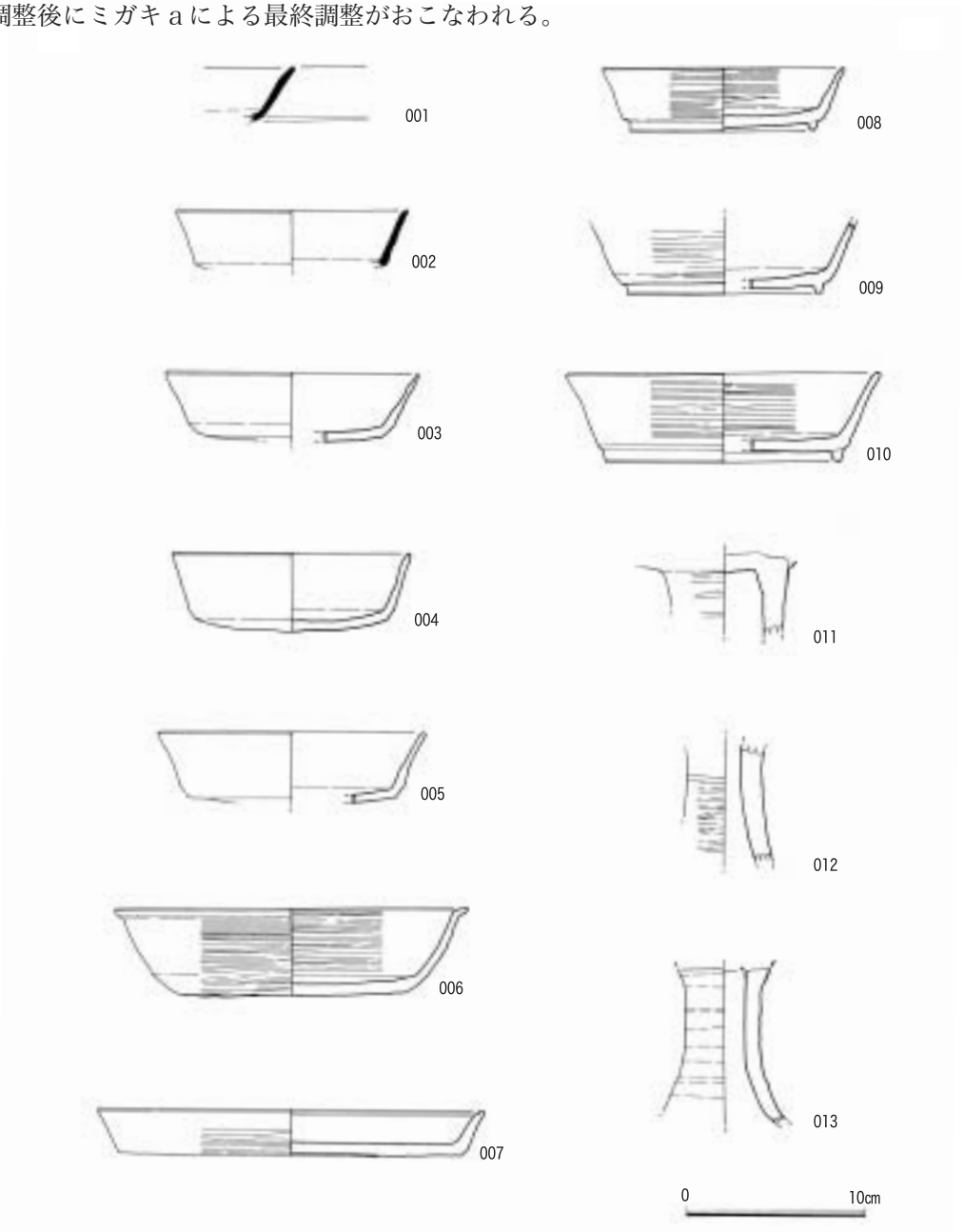
009は復元底径10.8㎝を測る底部資料である。外面・淡赤褐色～赤橙色、内面・赤橙色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石、金雲母粒等を含む。器面の調整は内外面ともミガキａ$_2$による。

010は復元口径17.2cm、器高5.0cm、復元底径12.9cmを測る。胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子、金雲母粒を含む。内外面とも淡赤褐色～赤橙色を呈し、ミガキａ$_2$による器面調整がおこなわれる。

011～013は土師器高坏の脚部資料である。**011**は外面・淡赤橙色、内面・暗灰色を呈し、外器面にはヨコ方向のミガキａ$_2$による器面調整がおこなわれる。他の部位はナデによる。上部は坏部との接合部で欠損し、接合部は擬口縁を形成する。

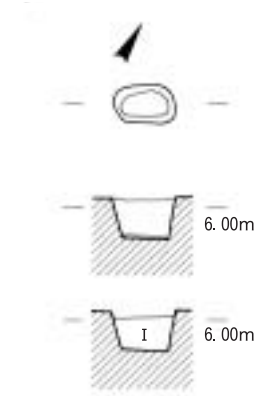
012は内外面とも赤橙色を呈する脚部資料であり、円柱状の形態をなす。胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子、金雲母粒を内包し、外器面の調整はヨコ方向のミガキａである。外器面にヨコ方向の一条の沈線が施文される。

013 も円柱状を呈する高坏脚柱部資料である。上端部は坏部接合部から剥離しており、擬口縁を形成する。内外面とも赤橙色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子、金雲母粒を含む。器面はナデ調整後にミガキａによる最終調整がおこなわれる。

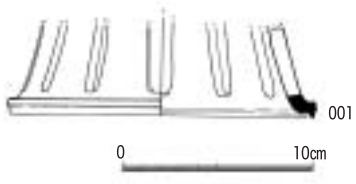


第324図　SX090出土遺物実測図（1/4）

以上の遺物は８世紀後半を中心とするものであり、遺構の帰属年代もほぼこの時期として大過ないであろう。



第325図　SX100遺構実測図（1/80）



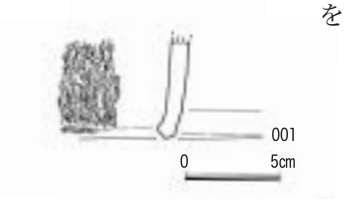
第326図　SX100出土遺物実測図（1/4）

092SX100（第325図）

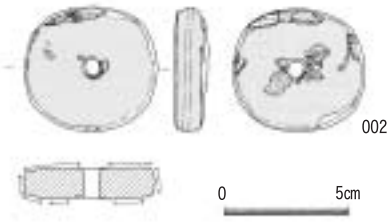
調査区南西隅で検出した楕円形を呈する小土坑である。長軸0.6m、短軸0.4mを測り、現存深度0.4ｍを測る。遺構埋土は暗茶褐色土の単一土であり、堆積土層中には淡褐色ブロック、褐色粒子、炭化物などを内包している。

出土遺物（第326図）

001は須恵器圏足硯の脚部であり、脚部には長楕円形の透かしを有する。外面・淡灰色、内面・暗灰褐色を呈し、内外器面ともヨコナデにより仕上げられる。器表面には内外面とも自然釉の付着が認められる。復元底径16.0㎝を測る。



第327図　SX130出土遺物実測図①（1/4）



第328図　SX130出土遺物実測図②（1/3）

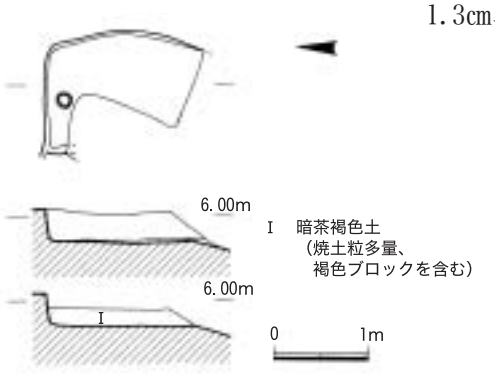
092SX130（第183図）

調査区中央西寄りにおいて検出した土坑である。北側を撹乱坑により切られており欠失する。現状での最大長軸2.7m、短軸0.7m、最深部での現存深度0.1mを測る。出土遺物には、須恵器坏、豊後大分形甑、須恵器甕破片、石製紡錘車などが出土している。

出土遺物（第327・328図）

001 は豊後大分形甑の基底部破片であり、外面・淡茶褐色、内面・淡茶灰色を呈する。内器面にあて具痕が残っている。器面の調整はナデであり、胎土中には角閃石粒を内包する。基部の返りの形骸化が進行しており、８世紀末前後の所産になるものと推定される。

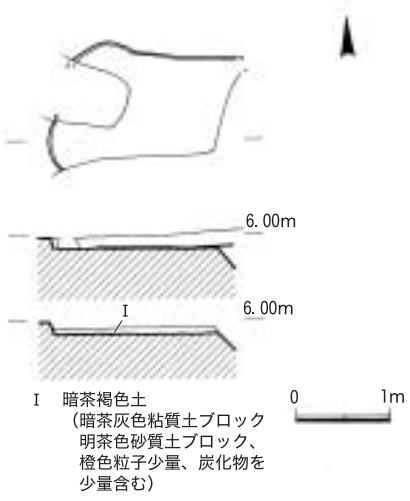
002は完存する石製紡錘車である。長径5.2㎝、短径4.9㎝、厚さ1.3㎝、重量68.0ｇを測る。緑色結晶片岩製である。



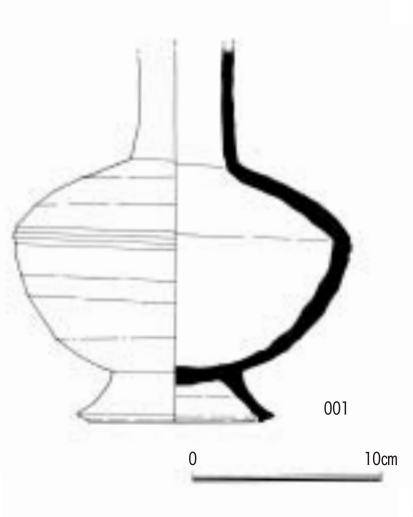
第329図　SX140遺構実測図（1/80）

092SX140（第329図）

調査区中央西寄りにある撹乱坑の北側に位置し、南端部をこの撹乱坑により切られ欠失する。現状で南北長1.6m、東西長1.15mを測る。底面はフラットに成形され、暗茶褐色土の単一土を埋土とする。堆積土層中には褐色土ブロックや焼土粒などを含み、堆積土層の状況から人為的に埋め戻された可能性が高い。出土遺物には土師器高台付坏や甕



第330図　SX145遺構実測図（1/80）



第331図　SX145出土遺物実測図（1/4）

などがあり、８世紀後半前後の所産年代が推定される。

092SX145（第330図）

092SX140に西接する土坑である。南側を撹乱坑に、東側を092SX140によって切られており欠失する。底面はフラットであり、現存深度0.2mを測り、暗茶褐色土を堆積埋土とする。埋土中には暗茶灰色粘質土ブロックや明茶色砂質土ブロック、炭化物などを含んでおり、092SX140と同様に人為的に埋め戻された可能性が想定される。

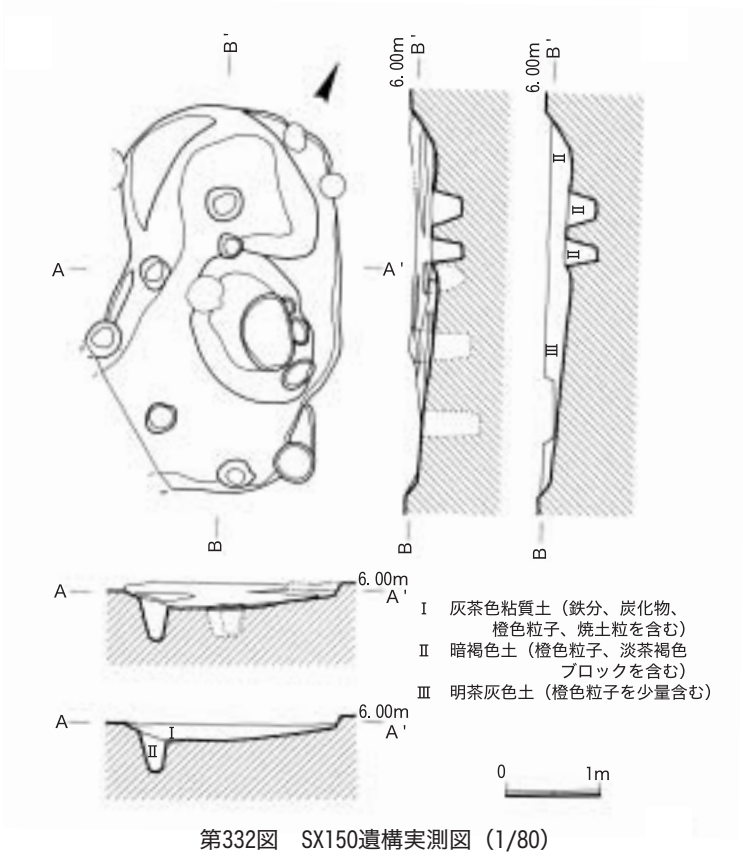
出土遺物には、須恵器長頸壺、土師質甑把手などが底面付近よりまとまって出土しており、埋置されていた可能性も想定される。

出土遺物（第331図）

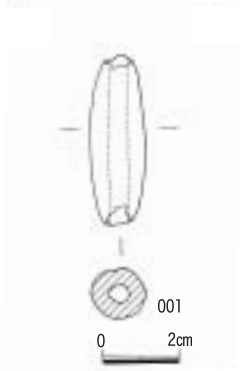
001は須恵器長頸壺であり、口縁部を欠損するが他部位は完存する資料である。胴部最大径17.7㎝、底径9.0㎝を測る。内外面とも暗灰色を呈し、体部外面下半に回転ヘラケズリがおこなわれ、一部に黒色の自然釉の融着が認められる。７世紀末から８世紀初頭前後の所産年代が想定される。

092SX150（第332図）

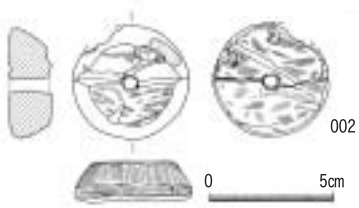
調査区中央付近で検出した不定形の土坑である。南北長軸4.0m、東西長2.2mを測り、遺構底面は皿状を呈し、最深部の深さは検出面から0.25ｍを測る。遺構底面において多くの柱穴等を確認しているが、土層断面観察等の結果から、その多くは092SX150と切り合い関係を有するものであると考えられる。さらに、平面的に把握することができなかったが、092SX150自身も複数の土坑の掘り返しによるものである点が判明しており、092SX150は複数遺構の複合体であることが明らかとなった。しかしながら、それぞれの埋土の差異は微細であり、各遺構が一定範囲の中におさまっている点や細片を含む出土遺物に時期差を積極的に認めることができる状況が確認できないなどの点から、複数回におよぶ掘り返しは短期間の内に行われたものと推定される。出土遺物には、須恵器坏、土師器坏、甕、企救型甕、高坏、滑石製紡錘車などがある８世紀後半前後の所産と推定される。



第332図　SX150遺構実測図（1/80）



第333図　SX150出土遺物実測図①（1/2）



第334図　SX150出土遺物実測図②（1/3）

出土遺物（第333・334図）

001は土錘である。淡茶褐色を呈し、胎土中には橙色粒子を含む。長さ4.5㎝、最大径1.5㎝、重量7.1ｇを測る。

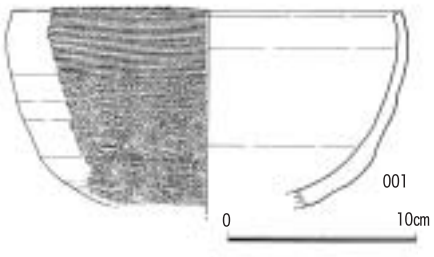
002は滑石製の石製紡錘車である。淡灰褐色を呈し、最大径4.5㎝、現存重量51.0ｇを測る。

092SX158（第183図）

調査区中央北寄りの地点において確認された小土坑である。径0.5m、現存深度0.3mを測る。

出土遺物（第335図）

001 は土師質鉢であり、内湾気味の形状を呈する口縁部を有する。復元口径 20.4 ㎝を測り、外面・淡赤褐色、内面・淡茶褐色を呈する。胎土中には角閃石、橙色粒子、長石、石英粒を含んでいる。器面の調整は内器面がナデにより仕上げられるのに対して、外器面は口縁付近がカキ目、下半部が手持ちヘラケズリ後ナデによるものであり、須恵器と土師器の整形技法が混在する資料として注目される。８世紀中頃前後の所産になるものと推定される。



第335図　SX158出土遺物実測図（1/4）

092SX173（第183図）

先述の092SX158の北側に位置する小土坑である。長軸径0.7m、短軸径0.3m、検出面からの現存深度

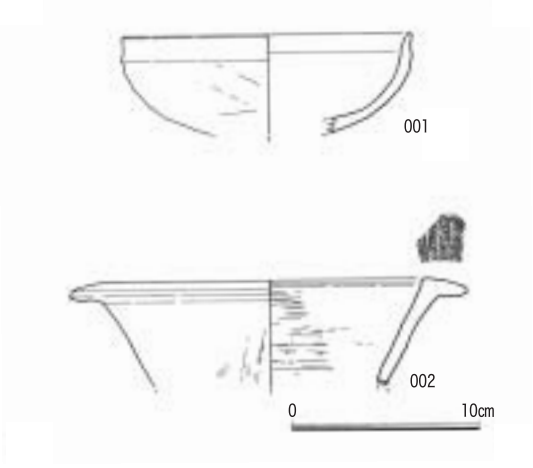
0.45mを測る。

出土遺物（第336・337図）

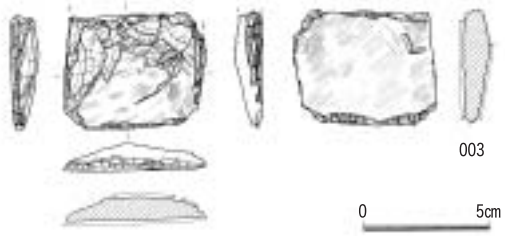
001は土師質鉢である。ヨコナデ調整により口縁部の端部を舌状に整形する。復元口径15.0cmを測り、内外面とも淡茶褐色を呈する。器面の調整は基本的にナデによるものであるが、外器面の底部付近には手持ちヘラケズリによると思われる痕跡が部分的に認められる。８世紀前半から中頃に比定されるものであろう。

002 は弥生土器壺の口縁部資料である。口縁部上面は逆Ｌ字状に平坦面を形成し、口縁部上面の一部には３本を１単位とするヘラ描き沈線が施文される。内外面とも淡茶色を呈し、器面の調整はヨコ方向のヘラミガキとナデによりおこなわれている。弥生時代中期の所産となるものである。

003は、磨製石斧の一部と推定される資料である。石材は蛇紋岩と推定されるが、かなり結晶片岩化が進んでいる。現状での大きさ4.6cm×5.8cm、厚さ1.1cm、現存重量44.8ｇを測る。



第336図　SX173出土遺物実測図①（1/4）



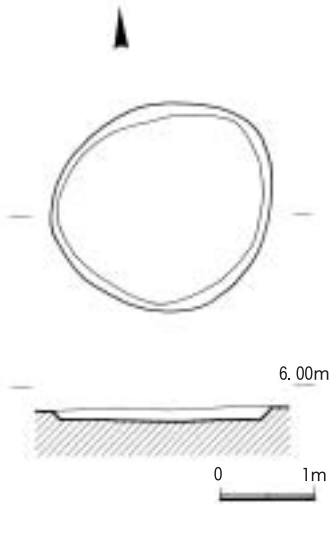
第337図　SX173出土遺物実測図②（1/3）

092SX230（第338図）

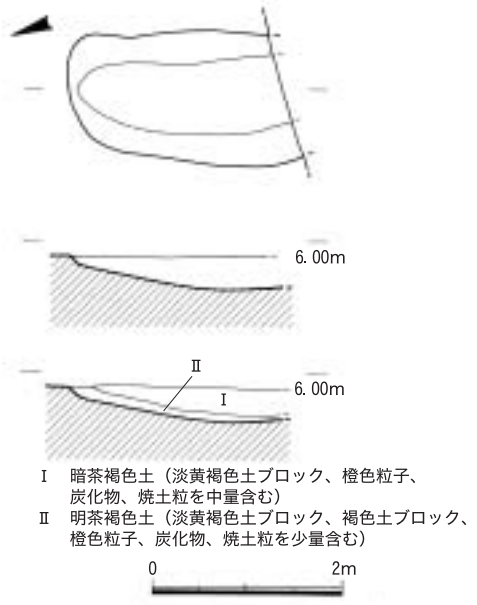
調査区中央南寄りで検出した円形土坑である。長径2.4m、現存深度0.2ｍを測る。底面はフラットに成形される。埋土は暗茶褐色土の単一土であり、遺物小片を内包する。出土遺物には、須恵器坏、須恵器甕、土師器坏、弥生土器などがある。遺物様相から８世紀以降の所産となるものと推定される。

092SX240（第339図）

調査区南壁際で検出した長土坑である。遺構の南側は調査区外に展開する。現存長2.2＋αｍ、幅1.4ｍを測る。底面は南側にむかって深くなっており、南壁際での現存深度0.3ｍを測る。堆積埋土は上下二層に分層することができる。上位層はブロック土や炭化物、焼土粒などを内包す



第338図　SX230平面・断面実測図
(1/80)



第339図　SX240遺構実測図
(1/80)

る暗茶褐色土であり、下位層は同じくブロック土を含む明茶褐色土である。いずれも人為的に埋め戻されたような状況を示しており、自然堆積によるものではないと推定される。したがって、上位層は掘り返し埋土である可能性が示唆される。

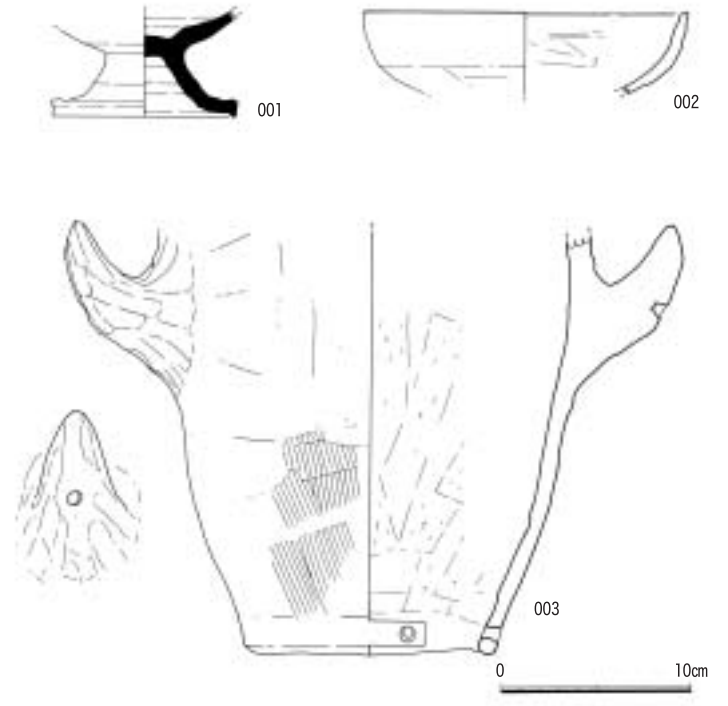
出土遺物には、土師器椀片、須恵器高坏片、甑片などがあり７世紀後半以降の所産年代が推定される。

出土遺物（第340図）

001は須恵器高坏である。底径9.6cmを測る。外面・淡灰白色～暗灰色、内面・淡灰白色を呈する。７世紀代に比定されるものである。

002は土師器椀であり、復元口径17.0cmを測る。外面・淡赤褐色、内面・淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英粒を含む。外面下半は手持ちヘラケズリによる整形がおこなわれ、他の部位は工具ナデによる調整がおこなわれる。

003 は土師質甑資料である。口縁部を欠損する。牛角状の把手を有し、把手下端には棒状工具による刺突がみられる。また、基底部に２ヶ所の穿孔をもつ点も本資料の大きな特徴といえる。内外面とも淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英、長石、橙色粒子を含む。外器面はハケ目後ナデによる調整がおこなわれ、内器面はヘラケズリによる整形がおこなわれている。



第340図　SX240出土遺物実測図（1/4）

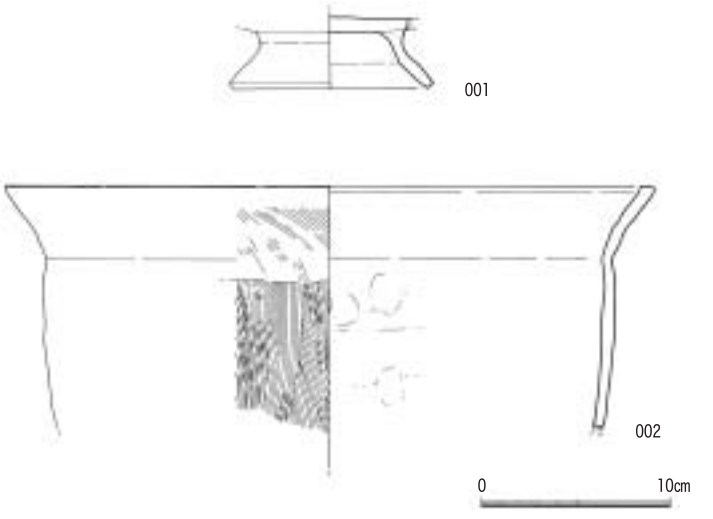
092SX195

092SX230と切り合い関係を有する柱穴状の土坑である。径０.４ｍを測る。

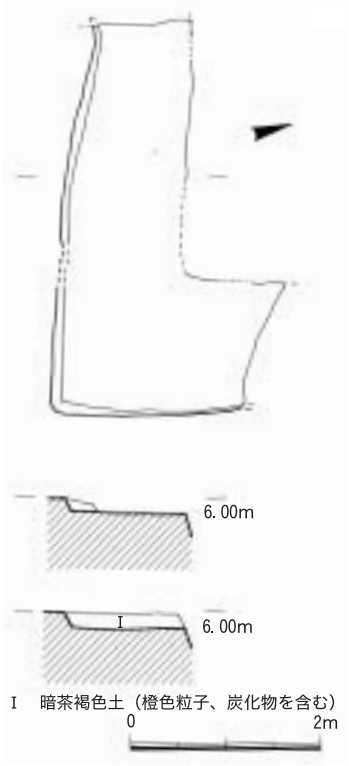
出土遺物（第341図）

001 は土師質台付鉢あるいは皿の脚部片であり、復元底径10.4cmを測る。内外面とも淡黄茶色を呈し、胎土中には角閃石粒を含んでいる。器面の調整はナデによる。

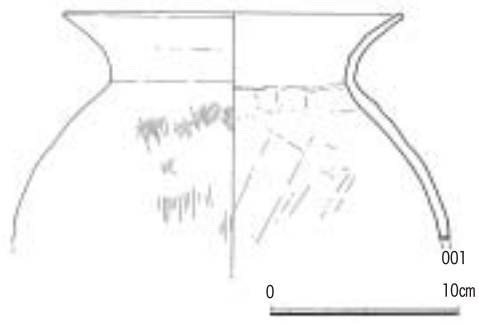
002 は土師質甕の口縁部資料である。復元口径34.2cmを測り、胎土中には長石、角閃石粒を含む。外面・



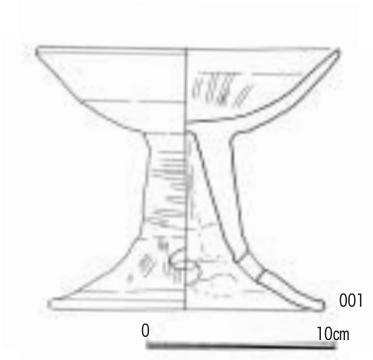
第341図　SX195出土遺物実測図（1/4）



第342図　SX205遺構実測図（1/80）



第343図　SX205出土遺物実測図（1/4）



第344図　SX258出土遺物実測図（1/4）

淡茶褐色、内面・淡黄茶褐色を呈している。器面の調整は外器面・タテ方向のハケ目、内器面・ナデによる。口縁端部上面に平坦面を形成する器形的特徴、および外器面のタテ方向のハケ目調整の状況から、Ａ類甕（企救型甕）とＢ類甕（豊後大分形甕）の融合・折衷タイプと考えられ、９世紀前半頃の所産年代が想定される。

092SX205（第342図）

調査区西壁中央付近で検出した卵形の土坑である。径1.8ｍ、現存深度0.37ｍを測る。出土遺物は少なく、図化可能なものは甕口縁部資料１点のみである。

出土遺物（第343図）

001は甕口縁部資料である。外面・淡茶褐色、内面・黒茶色を呈し、胎土中には角閃石粒を含む。復元口径18.0㎝を測り、外器面はタテ方向のハケ目とナデ、内器面は工具ナデとナデによる器面調整がおこなわれる。形態的特徴から弥生時代終末から古墳時代初頭のものと推定される。

092SX258（第183図）

調査区南壁付近で検出した遺構である。プランから竪穴住居跡の一部とも考えられるが、大半を他の住居跡に切られており、詳細は不明である。また、主柱穴となる遺構も確認されていない。現状での東西長 4.2 ｍ、南北長 2.4 ｍ、検出面からの深さ0.2ｍを測る。底面はフラットに成形され、暗茶褐色土の単一土を埋土とする。

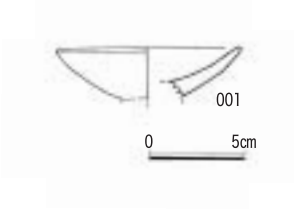
出土遺物（第344図）

001は高坏資料であり、口径16.0㎝、器高13.8㎝、底径14.6㎝を測る。内外面とも淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英、橙色粒子、金雲母を含む。外器面の脚柱部はヨコ方向のヘラミガキによる器面調整がおこなわれ、他はナデによる。脚裾部には焼成前に外方向から内方向へ穿孔された円孔が４ヶ所認められる。坏部内器面には

放射状の暗文が施文される。

092SX295（第183図）

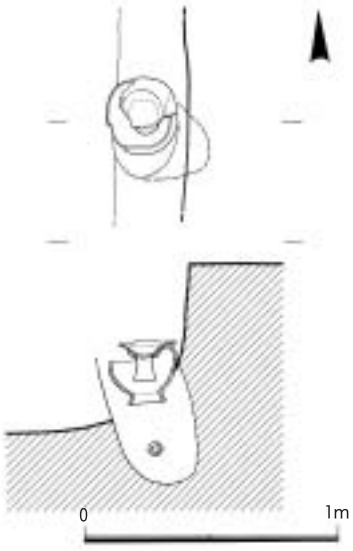
調査区南壁際で検出した遺構である。092SH400と切り合い関係をもち、明らかに092SH400よりも後出するものであることが明らかである。遺構の遺存状況は悪く、検出面から僅かな深さを有する。次項に示す小型器台の破片や小型丸底壺の破片などが出土するが、図化が困難なほど小片ながら、７世紀以降に比定される須恵器高坏の破片などがあることから、図示した遺物は下位にある092SH400資料からの混入である。



第345図　SX295出土遺物
実測図（1/4）

出土遺物（第345図）

001は小型器台の坏部である。口径9.6㎝を測り、内外面とも淡茶褐色を呈している。胎土中には長石、角閃石、金雲母、橙色粒子を含み、内外器面ともナデにより調整されている。古墳時代初頭に比定されるものであり、前述のように092SH400内包資料からの掻きあげによる混入遺物と考えられる。



第346図　SX390平面・断面
実測図（1/30）

092SX390（第346図）

092SX390は調査区の中央北側にあり、092SD300の東側肩部に位置している。092SD300の掘り下げ途中において確認されたが、土層の観察の結果から、092SD300が埋没途上において構築されたものと考えられる。遺構は径0.3mの柱穴状を呈しており、中位まで土を充填した後に土器が埋置されている。下位に高坏の脚部片１点（004）が出土しているが、これに埋置の意識を読み取ることはできず、土の充填中に混入したものと考えられる。土器の埋置は、最下段に底部を欠いた壺（006）を逆位に置き、その中に裾部を欠いた高坏（005）を正位置に置いて据えている。さらに、その上部に甕の破片を置くといった状況が認められる。



第347図　SX390遺物出土状況（西方向から）

出土遺物（第347・348図）

001はいわゆる下城式甕形土器の口縁部資料であり、二条の刻目突帯を貼付する。内外面とも淡茶色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。器面の調整はナデによる。刻みは二条の突帯上の他、口縁端部外面にも施文される。

002は甕形土器資料である。復元口径20.5㎝を測る。内外面とも淡赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英粒等を含む。器面の調整はナデによるものである。

003 は底部が欠損するが、上半部はほぼ完存する甕形土器資料である。外面・淡赤褐色～淡黒色、内面・淡橙褐色～暗茶褐色を呈し、器面は工具ナデによる調整がおこなわれる。口径18.1㎝を測り、外器

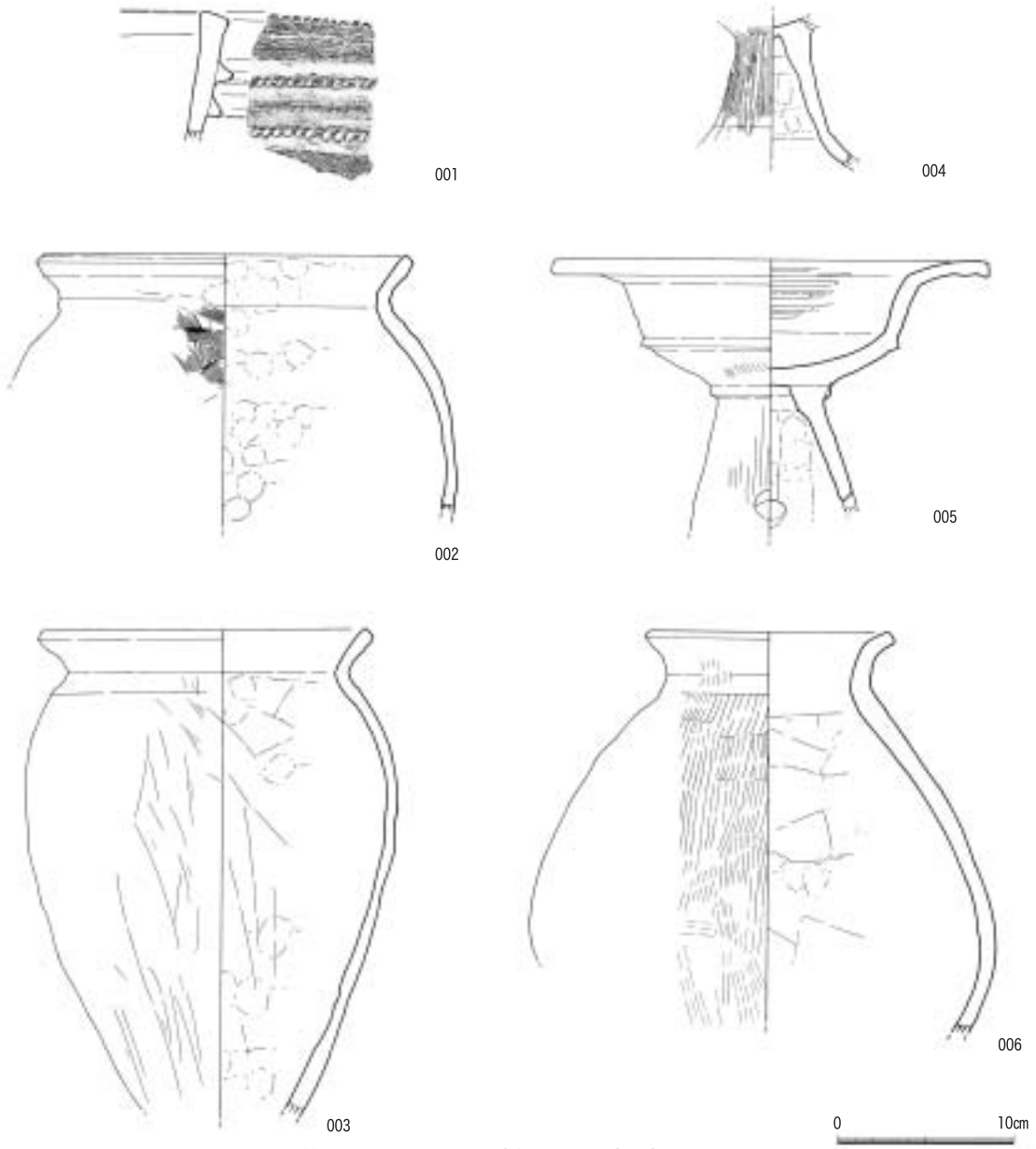
面にはススの付着が認められる。

004 は高坏の脚柱部資料である。内外面とも淡橙褐色を呈し、器面の調整はタテ方向のヘラミガキによる。胎土中には角閃石、長石粒を含む。

005 は脚裾部の欠損する高坏資料である。復元口径24.8㎝を測る。坏体部には段を有し、段部を三角突帯風に成形する。また、坏部と脚部との接合部には断面三角形の突帯が貼付される。赤橙色を呈し、胎土中には長石、角閃石、石英粒等を含む。脚部には外方向から内方向へ焼成前にあけられた円孔が４ヶ所認められる。

006は胴部最大径が下位にある扁平な壺形土器である。口径13.5㎝を測る。内外面とも淡茶色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒を含む。内器面は工具ナデ、外器面はタテ方向のハケ目により調整される。

これらの土器は、出土状況から、001・004を除く４点は極めて高い一括性を有しており、甕の形態的特徴から、弥生時代後期前葉から中葉に比定される資料と判断される。



第348図　SX390出土遺物実測図（1/4）

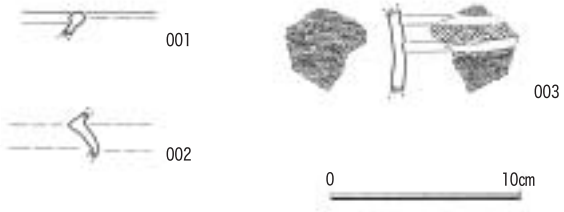
表土出土遺物（第349～367図）

本項では、遺構検出時、あるいは、表土、包含層から出土し、遺構への帰属が困難な遺物についての報告をおこなう。

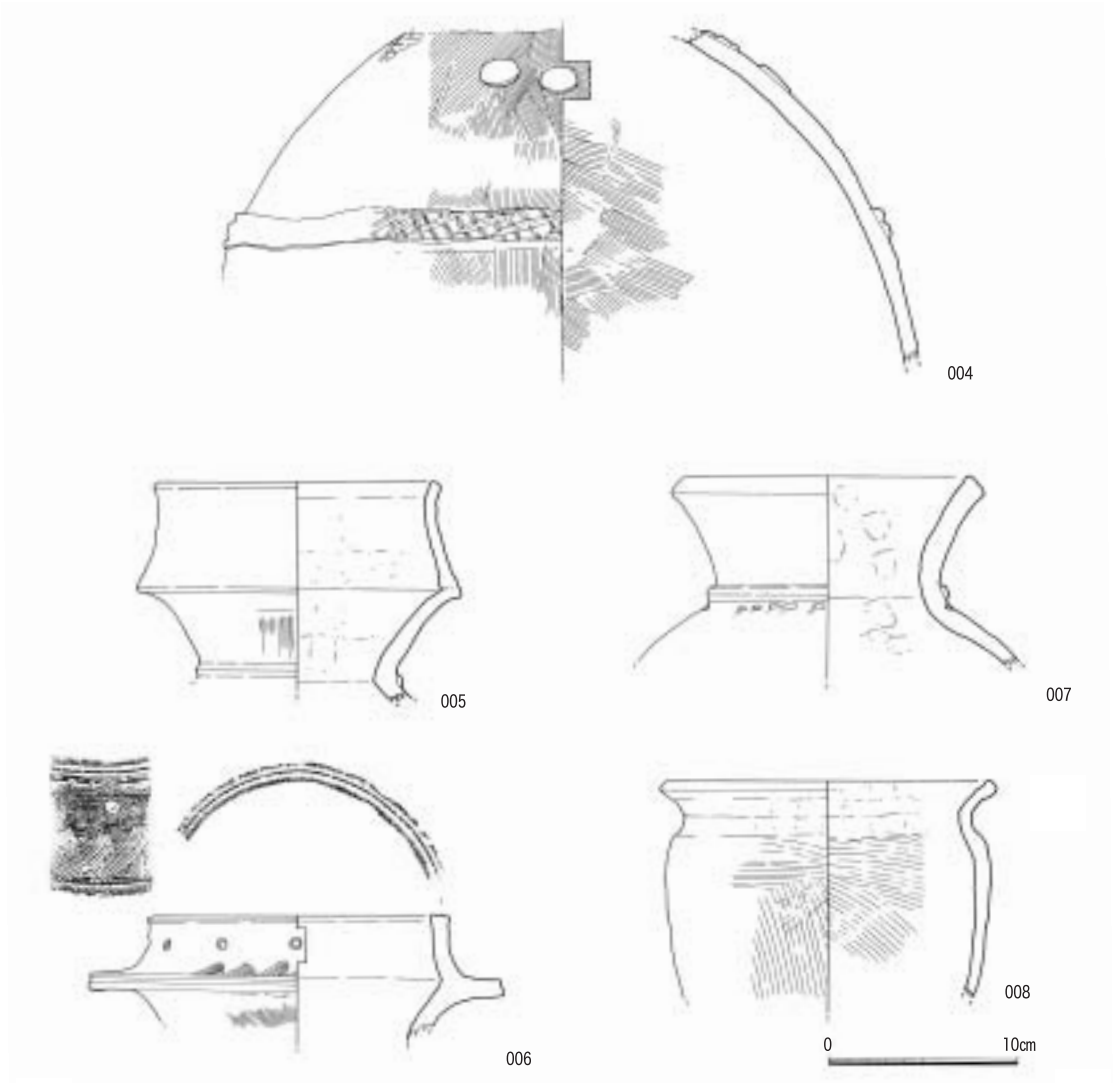
001は縄文土器浅鉢の口縁部資料である。外面・淡茶褐色、内面・淡茶灰色を呈し、ヨコナデによる調整がなされる。縄文時代晩期に比定されるものである。

002 は内外面とも淡茶灰色を呈する縄文土器浅鉢である。体部から口縁部への屈曲部の破片資料であり、器面はヨコナデにより調整される。縄文時代晩期の所産となるものである。

003 は縄文時代後期に比定される磨消縄文土器浅鉢の体部破片資料である。外面・茶褐色、内面・淡茶灰色を呈する。器表面の調整は内外ともナデによりおこなわれている。



第349図　表土出土遺物実測図①（1/4）



第350図　表土出土遺物実測図②（1/4）

004〜008は弥生時代後期から古墳時代初頭の時期に比定される土器資料である。

004は複合口縁壺の肩部資料であり、頸部にはタテ方向の刻みを有する粘土帯、その下位には円盤状の浮文が貼付される。さらに胴部最大径の上位にあたる位置に、幅広の突帯に斜格子状に刻みをいれたベルト状の突帯が貼付される。内外面とも赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英粒等を含んでいる。器面の調整はハケ目後のナデ調整を基本とするが、部分的にヘラミガキが認められる。

005は複合口縁壺の口縁部資料である。外面・淡茶褐色、内面・茶褐色を呈する。ナデによる調整がおこなわれ、複合口縁部には文様等は施文されない。口径14.4㎝を測る。また、頸部には一条の断面三角突帯が貼付される。

006 は複合口縁壺の口縁部資料である。大きく外反する口縁部に直立気味に立ち上がる二重口縁部が接続する。外面・淡赤褐色〜淡赤黄色、内面・淡赤褐色を呈し、器面の調整はハケ目とナデによりおこなわれるが、複合口縁部には多彩な文様が施文される。複合口縁部の口唇部には擬凹線状の沈線が施文され、口縁外面には11ヶ所の刺突による竹管文が施文される。その下位に単位五条の櫛描文が施文される。胎土中には石英、長石粒等を内包する。

007は単口縁の壺口縁部資料であり、口縁部は外方へ開く器形をなす。口縁端部は、ナデによる最終調整により面取り状に仕上げられる。頸部には突帯が一条貼付され、その下位に刺突連点文を施文する点を大きな特徴とする。内外面とも淡赤褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英粒等を含む。復元口径15.0㎝を測る。

008は甕資料であり、口縁部下位にくびれ部を有する器形を呈している。外面・淡茶褐色〜淡黒色、内面・淡茶褐色を呈する。器表面は粗いハケ目により調整される。胎土中には角閃石、橙色粒子を含んでいる。復元口径16.8㎝を測り、外器面にはススの付着が認められる。

009〜023は、口縁端部内面に沈線、あるいは面取り風の平坦面を有する土師器坏資料である。**009**は内外面とも淡橙褐色を呈する。口縁端部内面に平坦面を形成する。

010 は口縁部内面に沈線状の窪みを形成する土師器坏資料である。復元口径14.2㎝を測る。内外面とも淡茶褐色を呈し、ヨコナデによる器面調整がおこなわれる。胎土中には角閃石、長石、金雲母粒を含んでいる。

011 も口縁内面に斜め方向の平坦面を形成する土師器坏口縁部資料である。器面の調整はナデによるもので、色調は淡赤褐色を呈している。胎土中には角閃石、石英粒等を含む。

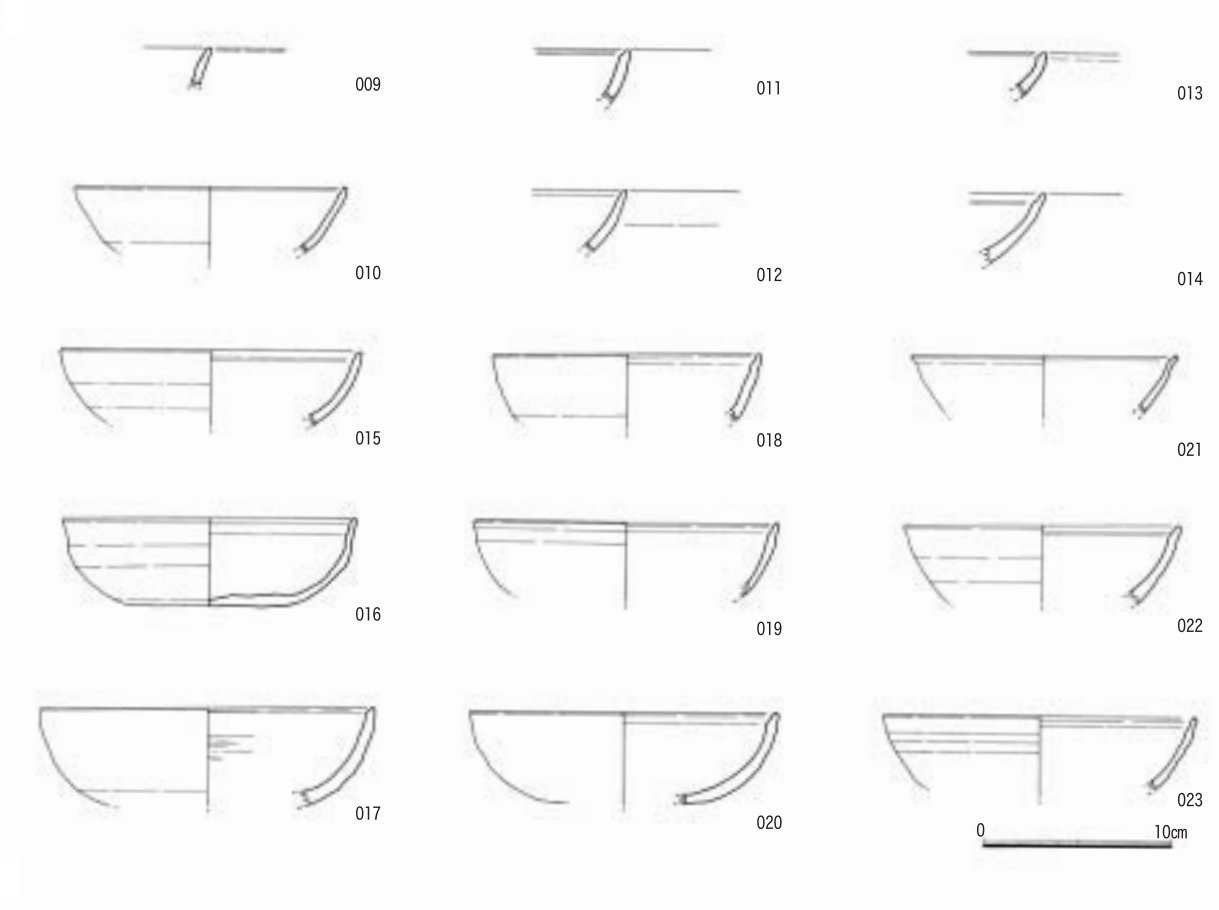
012もまた同種の口縁部資料である。淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、石英粒を含む。体部外器面下半には回転ヘラケズリによる調整痕を認めることができる。

013は内湾気味に立ち上がる口縁形状を示すものであり、内外面とも淡赤褐色を呈している。器面調整はナデによりおこなわれ、胎土中には角閃石粒等を内包している。

014は口縁端部内面に凹線状の窪みを有する口縁部資料である。内外面とも淡茶褐色を呈しており、ナデによる器面の調整がおこなわれる。

015は口縁端部内面に一条の沈線を有する土師器坏口縁部資料である。復元口径15.8㎝を測り、外面・赤橙色、内面・淡茶色を呈する。体部外面下半には回転ヘラケズリが施されている。器面はナデにより調整され、胎土中には長石、角閃石粒を内包する。

016は復元口径15.4㎝、器高4.6㎝を測る土師器坏資料である。口縁部内面に凹部状の窪みをもつ資料



第351図　表土出土遺物実測図③（1/4）

である。外面・淡橙褐色、内面・淡橙褐色～淡茶灰色を呈する。内外器面ともヨコナデにより調整される。

017は復元口径17.4cmを測る土師器坏資料であり、内外面とも赤橙色を呈している。外器面はナデ、内器面の一部にはナデ後にヘラミガキが施された痕跡が認められる。

018は外面・茶褐色、内面・淡茶褐色を呈する土師器坏である。復元口径14.0cmを測る。

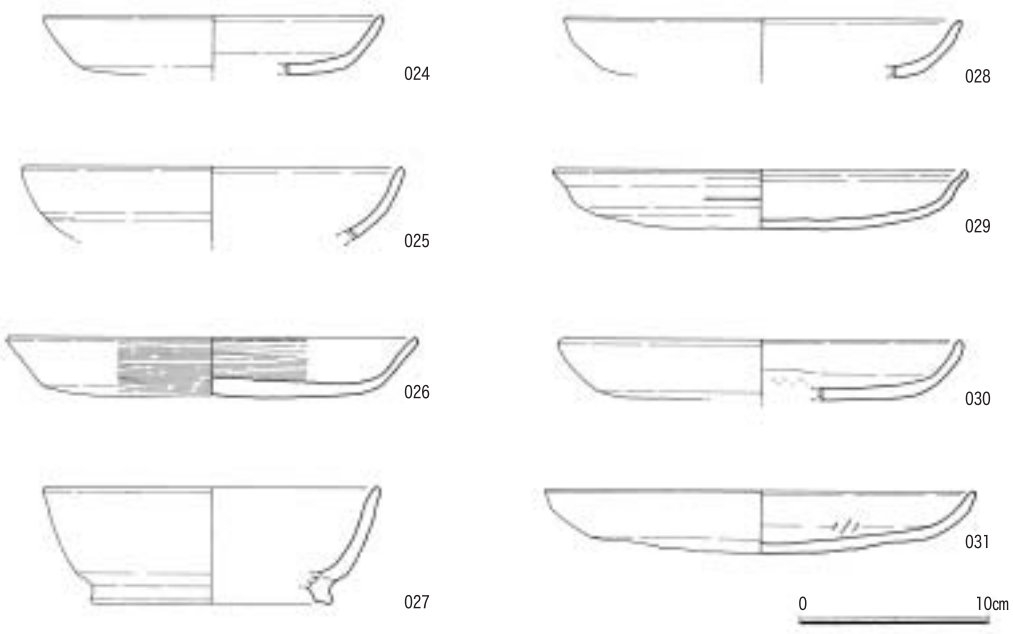
019は口縁端部内外面に凹線状の窪みを形成する資料であり、外面・茶褐色、内面・淡茶褐色を呈している。復元口径15.9cmを測り、胎土中には角閃石粒を含む。器面の調整はナデによるものであるが、外面の一部に赤色塗彩と思われる痕跡が認められる。

020は復元口径16.2cmを測る資料であり、外面・淡橙褐色、内面・淡橙色を呈している。器面の調整は内外器面ともナデによる。

021 は外面口縁部下位に凹線状の窪みを形成後に、口縁端部を外方へ折り曲げる形状を呈する資料である。外面・淡赤褐色、内面・淡赤褐色～淡黄白色を呈している。

022 は口縁端部内面を折り曲げ、さらにナデにより平坦面を形成する土師器坏資料である。復元口径14.4cmを測る。内外面とも淡赤橙色を呈し、ナデにより調整される。

023は口縁端部の内外器面にナデにより凹線状の窪みを形成する資料であり、復元口径16.4cmを測る。外面・淡橙褐色、内面・淡黄褐色を呈する。ナデにより調整され、胎土中には角閃石、長石、石英粒を含んでいる。



第352図　表土出土遺物実測図④（1/4）

024〜026・028〜031は土師器皿資料である。**024**は復元口径17.8cmを測り、外面・淡橙色、内面・淡茶白色を呈する。胎土中には長石、角閃石粒等を含み、器面はナデによる調整がおこなわれるが、底部は不明瞭ながら手持ちヘラケズリの痕跡が残る。

025 は他のものに比して深く、坏とするのが妥当な資料かもしれないが、ここでは一応皿として報告をおこなう。復元口径20.0cmを測り、外面・赤橙色、内面・淡黄褐色を呈している。器面の調整はナデによる。

026は内外面とも淡橙褐色を呈し、器面の内外をミガキａにより調整する資料である。口径21.4cm、器高3.2cmを測り、胎土中には長石、角閃石粒を含む。

027は土師器高台付坏である。復元口径17.6cm、器高6.1cm、復元底径12.4cmを測る。角閃石粒を含み、内外面とも淡茶褐色を呈している。器形的な特徴から８世紀中頃から後半に比定される資料と推定される。

028 は土師器皿の口縁部資料である。復元口径20.8cmを測る。外面・淡茶灰色、内面・淡茶橙色を呈し、ナデによる器面調整が実施される。胎土中には長石粒等を内包する。

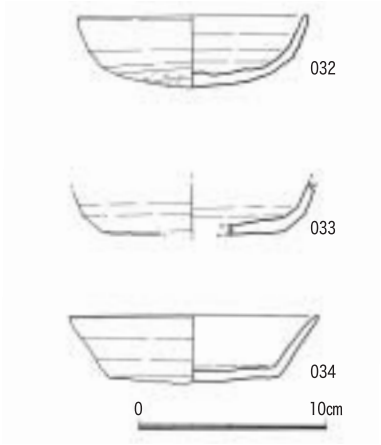
029は内外面とも淡茶褐色を呈する資料であり、口縁端部が屈曲しており、蓋とする見解もあるが、ここでは便宜的に皿として報告しておく。復元口径21.8cm、器高3.1cmを測る。器面調整の詳細は剥離等のため不明であるが、部分的にヘラミガキと考えられる器面調整を認めることができる。

030は内外面とも淡黄橙色を呈し、復元口径21.0cm、器高3.2cm、復元底径17.0cmを測る。底面は手持ちヘラケズリによる。内器面には明瞭でないが、暗文と思われる痕跡の一部を認めることができる。

031は復元口径22.6cm、器高3.3cm、復元底径10.0cmを測り、外面・淡橙褐色、内面・淡黄褐色を呈する。胎土中には角閃石、長石粒を含んでいる。底部は手持ちヘラケズリによる調整がなされ、内器面には暗文の痕跡が残っている。

032は土師器坏である。外面・淡茶褐色、内面・淡茶橙色を呈している。口径12.0cm、器高3.8cmを測り、器面の調整はナデによる。底部には丁寧な手持ちヘラケズリがおこなわれている。

033 は土師器坏底部資料である。内外面とも淡赤褐色を呈しており、ナデにより調整される。復元底径は 9.6 cmを測り、底部はヘラケズリ後ナデによる調整がおこなわれている。



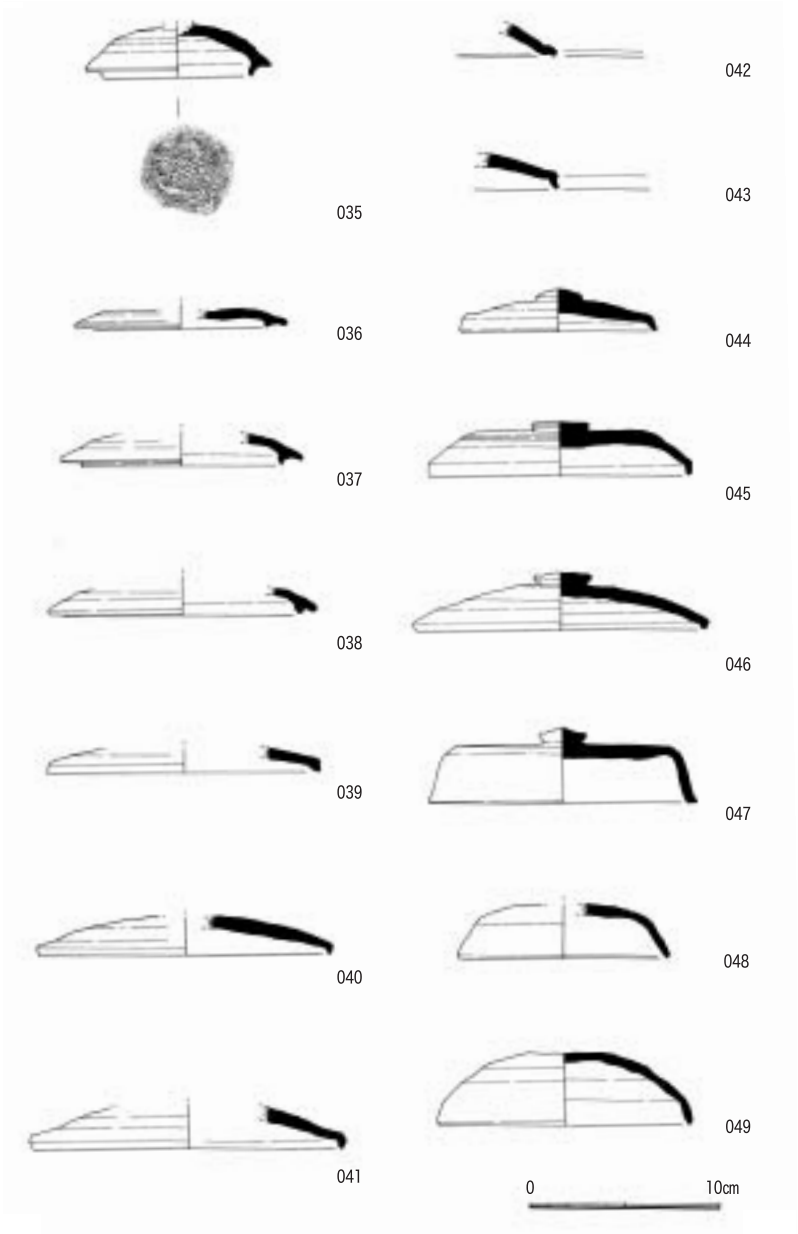
第353図　表土出土遺物実測図⑤（1/4）

034 は完存する土師器坏資料である。外面・淡茶橙色～淡茶白色、内面・淡茶橙色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒等を含む。底部はヘラ切り離し後ナデによるものである。口径13.0cm、器高3.7cmを測る。

035～049は須恵器坏蓋資料である。**035** は外面・灰赤色、内面・淡灰色を呈し、内外器面はナデにより仕上げられる。ツマミ部は欠損するが、他は完存する資料である。口径 7.8 cmを測る。内器面には「×」のヘラ記号が認められる。陶邑編年Ⅲ型式の１段階に相当する。

036は外面・淡灰色、内面・淡茶灰色を呈する。端部には矮小化した返りが貼付される。器面の調整については、内器面はナデ、外器面には回転ヘラケズリが認められる。復元口径 9.1 cmを測る。７世紀中頃に比定される資料である。

037は内外面とも灰色を呈し、器面はナデにより調整される。復元口径10.6cmを測る。陶邑編



第354図　表土出土遺物実測図⑥（1/4）

年Ⅲ型式２段階前後に比定される資料である。

038は端部を丸く仕上げた形骸化した返りを有する須恵器蓋資料である。復元口径12.4㎝を測り、内外面とも灰色を呈し、器面調整についてはナデによる調整がおこなわれる。

039は口縁端部を折り曲げ状に成形する須恵器蓋資料である。復元口径14.2㎝を測る。外面・暗灰色、内面・淡灰色を呈し、ナデによる器面調整がおこなわれる。扁平なツマミが貼付されていたものと推定され、８世紀中頃前後の所産年代が想定される。

040は039と同様の形態を呈する須恵器蓋片資料である。復元口径15.4㎝を測る。頂部には回転ヘラケズリが施される。内外面とも淡灰色を呈している。

041 は若干の歪みと仕上げの精粗の差があるものの、基本的には039・040と同種の型式となる須恵器蓋資料である。復元口径16.4㎝を測り、内外面とも淡灰色を呈する。器面の調整はナデ仕上げである。

042 は口縁端部がクチバシ状に屈曲する須恵器蓋の端部資料であり、039～041の資料に比して新出の属性要素をもっている。外面・茶灰色、内面・淡茶灰色を呈する。８世紀後半前後の所産となるものである。

043は039等と同種の蓋資料であり、外面・淡灰色、内面・淡茶灰色を呈する。器面の調整はナデによるものである。

044は口径10.3㎝、器高2.2㎝を測る須恵器蓋資料であり、頂部にはボタン状の扁平なツマミが貼付されている。内外面とも灰色を呈し、ヨコナデによる器面調整がおこなわれる。

045は復元口径13.8㎝、器高2.8㎝を測る。頂部には044と同様に扁平なボタン状のツマミが貼付されている。内外器面とも灰色を呈する。

046は全体の約2/3が遺存する資料である。淡灰色を呈し、口径15.2㎝、器高3.0㎝を測る。頂部付近には回転ヘラケズリが施されている。

047は扁平な宝珠形のツマミをもつ須恵器蓋資料であり、約１/２が遺存する。復元口径14.2㎝、器高4.0㎝を測る。体部はハコ形を呈しており、壺の蓋として使用されたと推定される。内外面とも淡灰色を呈し、ナデにより器面を仕上げている。ツマミのある頂部付近には回転ヘラケズリの痕跡を認めることができる。

048・049は陶邑編年Ⅱ型式５段階前後に相当する須恵器坏蓋資料であり、６世紀末頃の年代が想定される。**048**は灰褐色を呈し、復元口径11.0㎝を測る。

049は内外面とも灰色を呈し、復元口径13.2㎝、器高3.8㎝を測る。頂部付近に回転ヘラケズリ痕跡が認められる。

050～065 は須恵器坏身資料である。**050～057** は高台付坏であり、高台が中央付近に寄る古相のものと、より外側に貼付される新相のものがある。いずれも８世紀代の所産となるものである。

050は底部から体部への立ち上がり部の破片資料であり、内外面とも淡灰色を呈する。

051は若干外方向に開き気味の角高台が貼付される資料であり、底径6.4㎝を測る。器面はヨコナデにより仕上げられる。高台内の底部には回転ヘラ切り離しの痕跡が残る。

052もまた、外方へ開き気味の高台が貼付される資料である。内外面とも淡灰色を呈し、ヨコナデにより調整される。復元口径10.4㎝を測る。

053 は高台内面にナデによる張り出し部を有する資料である。内外面とも暗灰黒色を呈し、復元口径

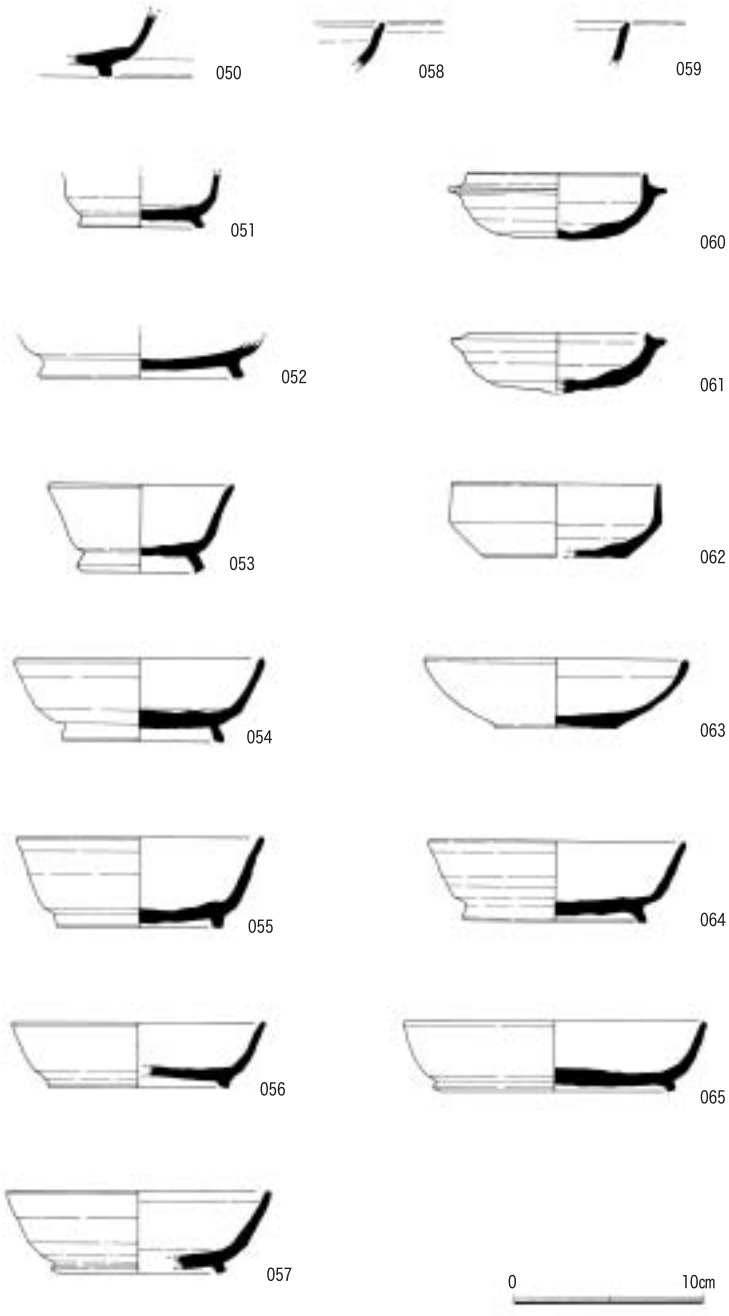
9.6cm、器高4.6cm、復元底径5.8cmを測る。

054 はほぼ完存する資料であり、口径13.0㎝、器高4.4㎝、底径8.4㎝を測る。淡灰色を呈し基本的にはナデにより調整されるが、外器面の下端には回転ヘラケズリ痕が認められる。高台は比較的長く、中央寄りに貼付されるなど、古い様相を示す。また、底部から体部への立ち上がりは、段を有するもののハコ形にはならず、曲線を描く点なども古い器形上の特徴といえる。

055 はハコ形を呈する体部に角高台が貼付される資料である。復元口径12.8cm、器高4.7㎝、復元底径8.6㎝を測る。内外器面ともヨコナデによる調整がなされ、灰色を呈している。

056 も器高は低くなっているが、ハコ形の体部に角高台を貼付する坏資料である。外面・暗灰色、内面・灰色を呈している。復元口径13.2cm、器高3.4cm、復元底径9.4cmを測る。

057 は全体の約１/２が遺存する資料である。復元口径13.8㎝、器高4.3㎝、復元底径8.4㎝を測る。内外面とも淡灰色を呈している。本資料も体部に曲線感が残り、高台が外にふんばり気味に付けられる点など、比較的古相の属性が遺存している。



第355図　表土出土遺物実測図⑦（1/4）

058・059は須恵器坏の口縁部資料である。口縁内面端部に強いナデにより沈線上の段を有する点を特徴とする。このような属性は、８世紀中頃以降の当地域で盛行する土師器坏、あるいは鉢と共通する要



第356図　底部手持ちヘラケズリ痕を残す須恵器（060）

素であり、その関連性が注目される資料である。

058は外面・淡茶灰色、内面・淡灰色、**059**は内外面とも灰色を呈している。両者とも口縁部付近は丁寧なヨコナデによる調整がなされている。

060・061は、古墳時代の須恵器坏身の資料である。

060はほぼ完存する資料であり、口径9.4㎝、器高3.5㎝を測る。内外面とも淡灰色を呈し、器面の調整は基本的にナデにより仕上げられるものの、底部には、須恵器では通常みられない手持ちヘラケズリがなされている。

061 は灰色を呈する資料であり、底部には回転ヘラ切り離し痕跡が残っている。復元口径 9.4 ㎝を測る。

062は特異な形態を示す須恵器坏資料である。「く」字状に屈曲する体部に安定した底部を有する。底部には回転ヘラ切り離し痕が認められる。内外面とも灰色を呈する。復元口径10.9㎝、器高3.9㎝、復元底径7.2㎝を測る。

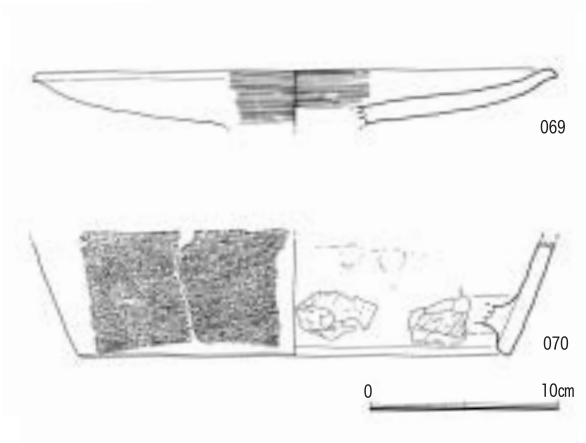
063は復元口径13.8㎝、器高3.7㎝、復元底径6.5㎝を測る須恵器坏資料である。底部はヘラ切り離しによるものであり、内外面とも淡灰色を呈する。口縁部は丁寧なナデ調整により丸く仕上げられている。所産時期等は不明である。

064・065 は高台付坏資料である。**064** はハコ形の体部に貼付高台が付けられるものであり、復元口径13.3㎝、器高4.2㎝、底径9.5㎝を測る。内外面とも淡灰色を呈している。

065 は底部から体部について丸みをもって立ち上がる。底部には小さな角高台が貼付される。復元口径15.8㎝、器高3.7㎝、復元底径12.0㎝を測る。



第357図　表土出土遺物実測図⑧（1/4）



第358図　表土出土遺物実測図⑨（1/4）

066は須恵器甕口縁部資料である。内外面とも灰色を呈し、ヨコナデによる器面調整がなされている。

067は須恵器長頸壺の底部資料である。外面・淡灰白色、内面・淡灰褐色を呈している。外器面には回転ヘラケズリがなされている。復元底径9.5cmを測る。

068 は須恵器坏の高台部を利用した転用硯である。側面は丁寧に打ち欠きされている。高台内の使用面にはスリ痕が残り、平滑となっている。径10.8cm、器高2.0cmを測る。また、使用面には墨痕と考えられるものの痕跡も一部に認められる。

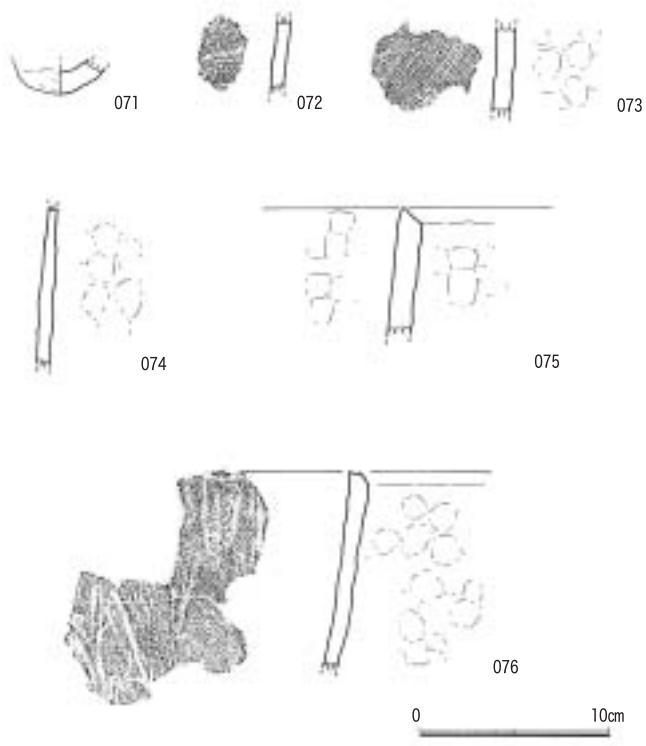
069 は土師器高坏の坏部資料である。内外面とも橙茶褐色を呈し、ヘラミガキによる調整がなされている。復元口径27.0cmを測る。８世紀代の所産となるものである。

070 は土師質甑の底部片であり、内外面とも淡赤褐色を呈する。底部付近に橋状の突起の貼付痕が認められ、底部の受けになるものと推定される。胎土中には石英、長石粒等を含み、外器面はカキ目、内器面はナデにより調整される。復元底径23.0cmを測る。

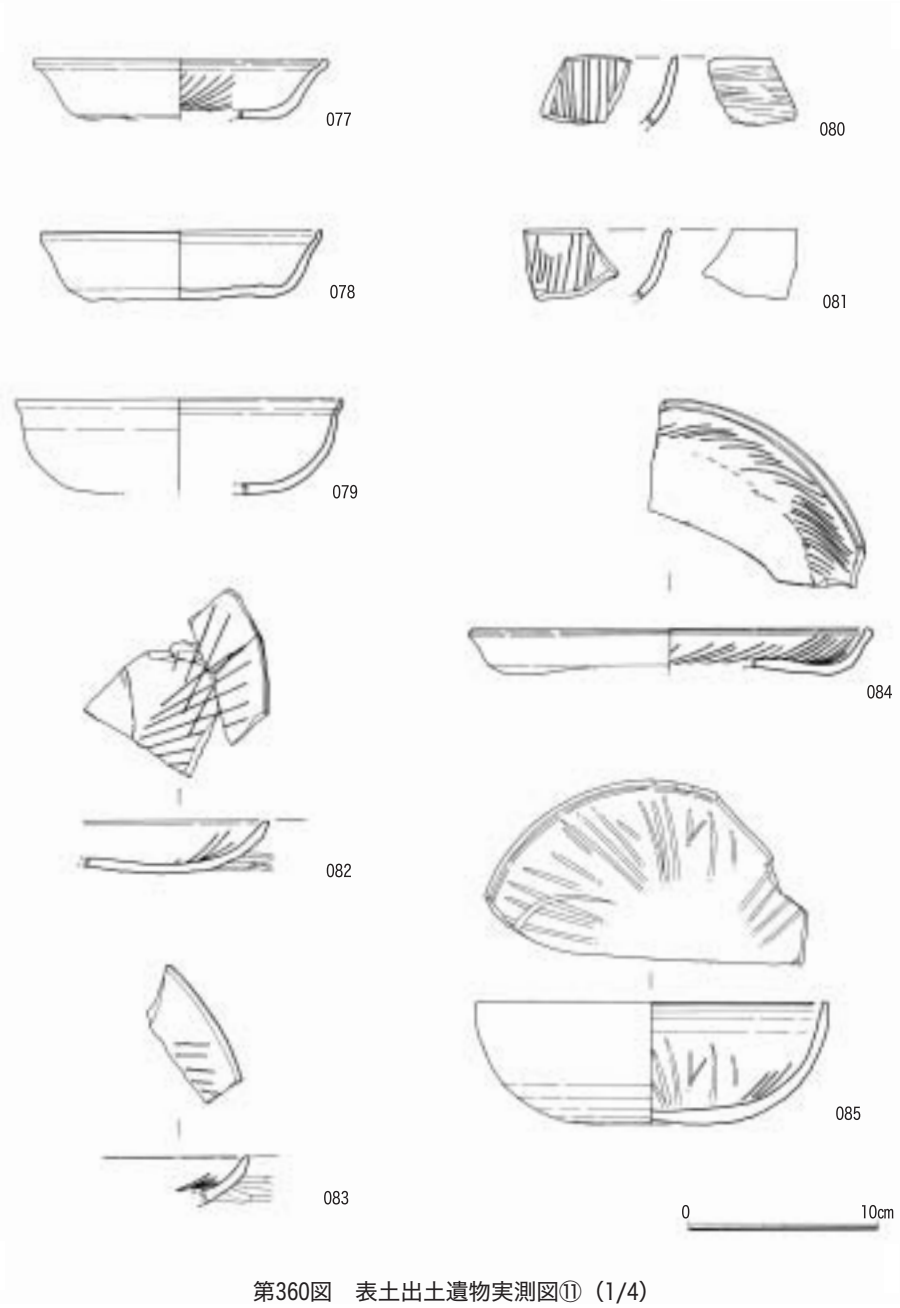
071〜076は製塩土器資料である。**071**はいわゆる砲弾形を呈する製塩土器の底部資料である。外面･淡茶褐色、内面・茶褐色を呈し、内外器面ともナデによる調整がおこなわれる。器表面は二次被熱を受けている。

072・073・074は製塩土器の体部破片である。**072**は外面・暗灰色、内面・淡茶褐色を呈する。外器面はナデによる調整がなされ、内器面には布目痕が認められる。

073は外面･淡茶灰色、内面･淡茶褐色を呈する資料であり、072と同じく内面に布目痕が認められる。胎土中に緑色結晶片岩片を内包する点を特徴とする。



第359図　表土出土遺物実測図⑩（1/4）



第360図　表土出土遺物実測図⑪（1/4）

074は外面・淡橙褐色、内面・淡茶褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石粒等を含む。器表面は強い被熱により剥離する。

075・076は製塩土器の口縁部資料である。**075**は外面・淡赤褐色～淡灰白色、内面・暗茶褐色を呈し、胎土中には石英粒を含んでいる。口縁端部はヘラ切りによるものであり、未調整である。

076 は比較的薄手の資料であり、外面・淡茶灰色、内面・淡茶褐色を呈している。口縁部には外傾する斜め方向の平坦面が形成されるが、この部分も未調整である。外器面は多くの指オサエ痕がみられ、ナデにより調整される。内器面には布目痕が認められる。

077～085はいわゆる都城系と称される土師器の一群である。

077は復元口径15.6㎝、器高3.2㎝、復元底径11.2㎝を測る土師器坏資料である。内外面とも淡橙褐色

を呈し、器面の調整には丁寧なナデ調整がなされている。胎土中には長石粒を含み、内器面には放射状暗文が認められる。

078は内外面とも淡赤橙褐色を呈し、口径14.8㎝、器高3.6㎝、底径10.0㎝を測る。底部には回転ヘラ切り離し後にナデによる調整がおこなわれており、明らかに回転台使用による成形がなされているが、口縁端部の内湾する器形等に都城系の影響が認められる。胎土には精製土が使用される。

079もまた、口縁端部形態に都城系土師器の影響がみられる資料であり、復元口径17.4㎝を測る。内外面とも暗黄褐色を呈し、胎土中には金雲母、角閃石、石英粒を含む。器面の調整は丁寧なナデによるものである。

080・081は口縁部資料である。

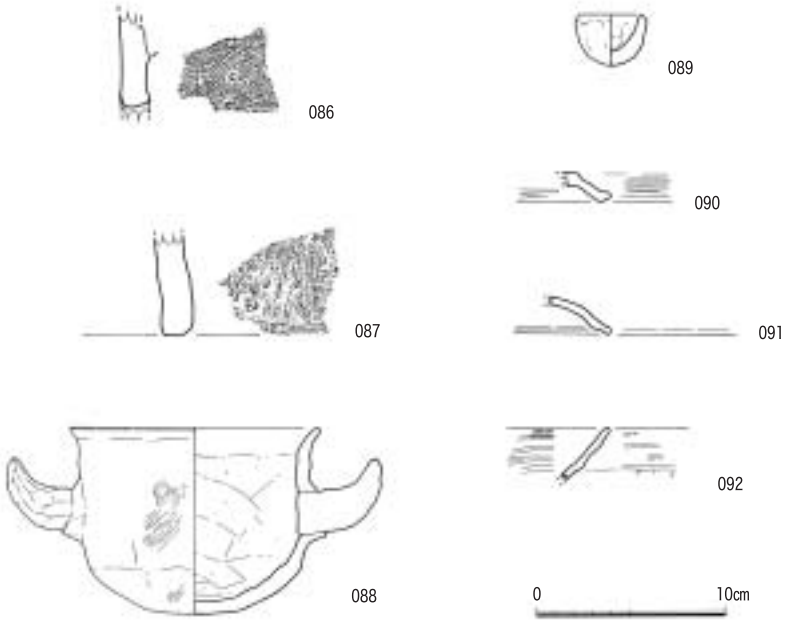
080 は内外面とも淡赤褐色を呈し、ヨコナデによる調整がおこなわれている。内器面には暗文がみられ、外器面は手持ちヘラミガキによる調整がおこなわれる。

081 は内外面とも明橙褐色を呈する。内器面に放射状暗文が認められる。一部外面に赤色塗彩が認められ、精製土が使用される。

082 は土師器皿資料である。内外面とも淡褐色を呈する。口縁端部は舌状に仕上げられている。内器面には２段の斜放射暗文が施文されている。器面の調整はナデによるが外器面下端には手持ちヘラケズリの後にヘラミガキが施されている。精製土が使用されている。

083 もまた、口縁端部を舌状に成形する土師器資料である。皿形を呈している。外面・淡橙褐色、内面・淡褐色を呈している。内器面には放射状の暗文がみられ、外器面には手持ちヘラミガキによる調整がおこなわれている。

084は復元口径20.7㎝、器高2.5㎝、復元底径17.8㎝を測る。胎土には精製土が使用され、内外面とも



第361図　表土出土遺物実測図⑫（1/4）

明橙色を呈している。内器面には放射状の暗文が施文され、内面見込み部に暗文施文時に付けられたと考えられる割り付け痕かと思われる刺突痕が認められる。外器面の調整は基本的にはヨコナデによるものであるが、一部にヘラミガキによる部分がある。

085 は内外面とも暗茶褐色を呈し、胴部の下端を回転ヘラケズリによる整形を実施した後にミガキａによる器面調整がおこなわれる。器内面には放射状暗文が施文される。

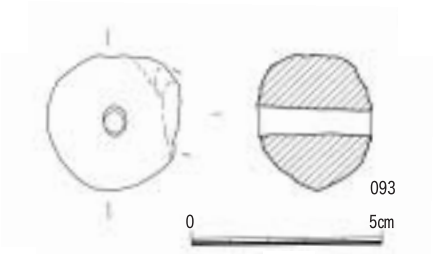
086・087は円筒埴輪と推定される資料である。

086は外面・淡茶褐色、内面・茶褐色を呈している。外器面は斜方向のハケ目、内器面はナデにより調整される。胎土中には長石、角閃石粒を含んでいる。穿孔の一部が確認でき、把手がはずれたと思われる痕跡が残る。

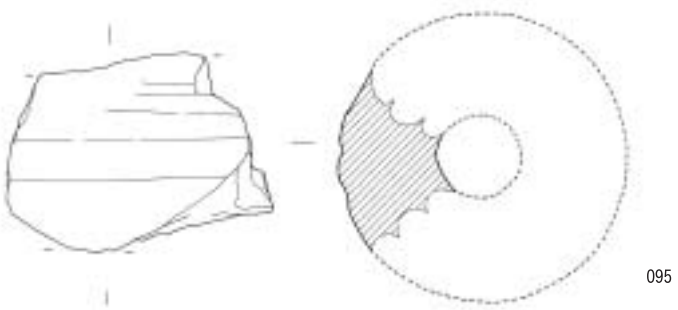
087は基底部資料である。内外面とも淡茶褐色を呈し、外器面をタテ方向のハケ目、内器面をナデにより調整する。胎土中に角閃石、長石粒を含む。

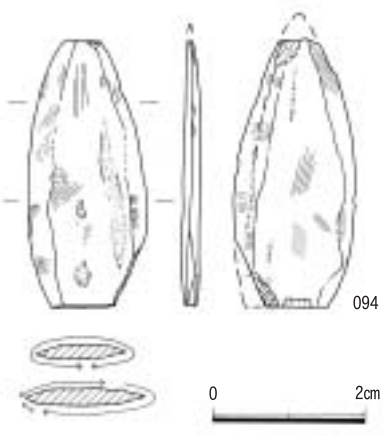
088は土師質把手付鉢資料である。口縁端部は外方に短く屈曲する器形をなし、ヨコナデにより調整される。胴中位には差し込み式の牛角状の把手が付けられ、外器面はハケ目後ナデ、内器面は工具ナデによる調整がなされている。復元口径13.0㎝、器高9.8㎝を測り、胎土中には長石、角閃石粒等を含んでいる。

089はミニチュア土器である。外面・茶褐色、内面・淡茶褐色を呈し、内外器面ともナデにより仕上げられる。

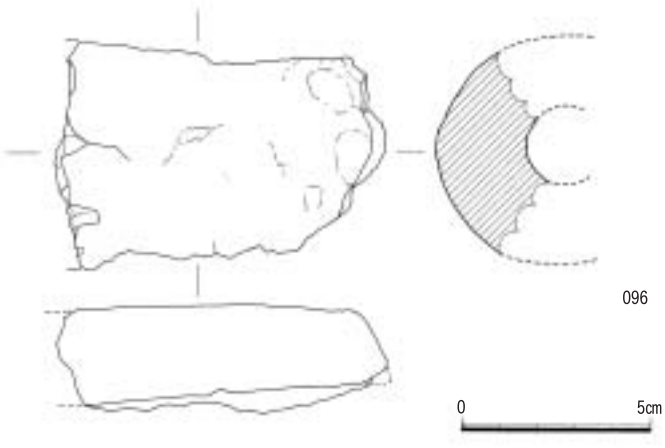


第362図　表土出土遺物実測図⑬（1/2）





第363図　表土出土遺物実測図⑭（1/1）



第364図　表土出土遺物実測図⑮（1/2）

090・091は土師器蓋資料である。090は内外面とも淡茶色を呈し、ミガキａ$_2$によって調整される。胎土中には長石、角閃石粒を含んでいる。

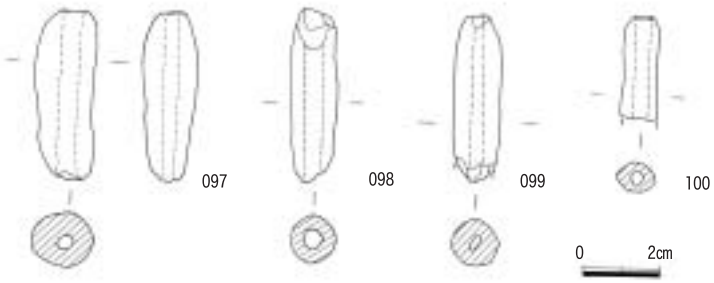
091は土師器蓋の端部資料であり、内外面とも淡茶褐色を呈し、ナデによる調整がおこなわれている。

092は和泉型瓦器椀の口縁部片である。内外面とも灰色を呈し、ナデとヘラミガキにより調整される。内器面には暗文が施文される。

093は土製勾玉の頂部破片である。現状は3.0㎝×3.6㎝、現存重量40.0ｇを測る。穿孔がなされている。

094は結晶片岩製の磨製石鏃である。先端部が欠損する。現存長軸3.5㎝、幅1.6㎝、厚さ0.3㎝、現存重量2.3ｇを測る。

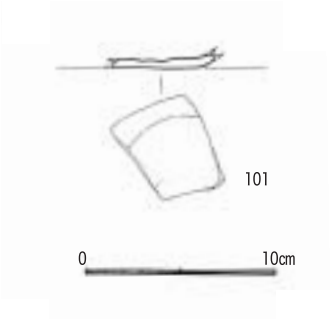
095・096はフイゴの羽口片である。**095**は外面・淡茶白色、内面・淡茶色を呈する。内外器面ともナデにより調整され、胎土中には角閃石、石英粒等を含んでいる。



第365図　表土出土遺物実測図⑯（1/2）

096は外面・淡赤褐色～淡灰褐色、内面・淡赤褐色を呈し、ナデにより仕上げられている。

097～100は土錘資料である。**097**は長さ4.5㎝、幅1.6㎝、現存重量9.1ｇを測る。淡茶褐色を呈している。



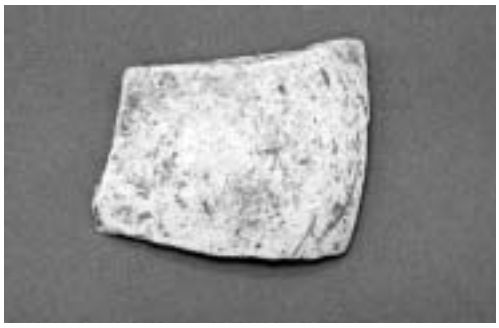
第366図　表土出土遺物実測図⑰（1/4）

098は淡茶褐色を呈し、現存長4.6㎝、幅1.3㎝、現存重量5.6ｇを測る。胎土中には角閃石、長石粒を含む。

099は現存長4.4㎝、幅1.3㎝、現存重量6.1ｇを測る土錘であり、淡茶褐色を呈する。

100は半分以上を欠損する資料であり、現存長2.7㎝、幅1.0㎝、現存重量2.1ｇを測る。胎土中には石英、角閃石粒を含み、淡茶褐色を呈している。

墨書土器（第367図）



第367図　墨書土器（101）

101は墨書土器である。土師器坏の外底部に墨書されており、字体はかろうじて確認することができる状態であり、書かれている内容は不明である。色調は内外面とも淡黄褐色を呈し、胎土中には角閃石、長石、石英、橙色粒子を含んでいる。外底面は回転ヘラ切り離し後ナデにより調整される。それに対して内底面はナデの他にミガキの痕跡が認められる。

（4）小　結

－第92次調査の遺構変遷・大分市域で確認されている古代の竪穴遺構－

下郡遺跡群第92次調査では、弥生時代から近世の遺構を確認した。これらの遺構群は、遺跡の連続性という観点から区分すれば、以下の６時期に分類することが可能である。

下記にはそれぞれの時期別の遺構概要を示し、さらにこられの中で注目される事象（古代の竪穴遺構）について整理を行いまとめとしたい。

第92次調査の遺構変遷

第１期　弥生時代中期後半から後期前葉
第２期　弥生時代後期終末から古墳時代前期
第３期　古墳時代後期を中心とする時期
第４期　７世紀末から９世紀の時期
第５期　12世紀から13世紀の時期
第６期　中世後期から戦国時代に相当する時期

第１期

検出遺構には、溝状遺構、竪穴遺構がある。溝状遺構に関しては、092SD300が相当し、調査区を北東方向から南西方向に斜走する。竪穴遺構に関しては、弥生時代中期の遺物を埋土内から出土し、溝の掘削は弥生時代中期後半から末の段階におこなわれたと想定されるものの、最終埋没は弥生時代後期前葉前後になるものと考えられる。竪穴遺構には092SH060、092SH155があるが、出土遺物は少なく、確実に当該時期のものかという点については検討を要する遺構である。単体の土坑資料には092SX390がある。先述の092SD300の埋没途中に構築されたものであり、土器破片を積み上げるという特殊な様相を示す。何らかの祭祀に伴うものと考えられる。

第２期

大形の遺構の検出が最も多い段階であり、竪穴遺構が中心である。いずれの資料も平面プランは方形基調を示すものであり、主柱が２本のものと４本のものがある。第２期はある程度の時間幅を見込んでいるが、出土遺物様相から、竪穴遺構の主体は古墳時代初頭から前期に比定されるものが主体である。092SH160、092SH360などのように出土遺物が極めて少なく、当該時期への比定の確実性に疑問がのこるものもいくつかある。最も遺存状況のよい竪穴遺構には092SH250、092SH270がある。092SH250は竪穴の遺存状況の割に出土遺物の量は少ない。出土遺物に布留式系のものがあり、すでに古墳時代に移行した時期のものであることを示している。住居内の周囲に壁溝を構築し、粘土による厚い貼り床が施されている。当該期の典型的な住居構造を示す資料である。092SH270は092SH250と同じく壁際に壁溝を有しているが、全周せず、東壁面の中央付近で途切れる。また、北壁、南壁にはベット状遺構が付設されている。当遺構の構造で最も注目されたのが、床面中央で検出した土坑（092SX290）である。土坑の北方向にトンネル様の穴を掘り、煙突状の構造を呈している。しかも、このピットの内壁、土坑深部には強い

被熱痕が認められ硬化していた。通常の地床炉とは大きく異なっており、その機能が注目されるところであるが、これまでの下郡遺跡群内の調査においても例がなく、管見でも他遺跡での同時期の検出事例を知らない。それ故、用途・機能等の詳細については不明であり、今後の課題となる。

092SH280は埋土中に破片資料ながら布留式系土器を含んでおり、092SH270と近接する時期所産が想定される。092SH343では遺構の埋没途中段階の窪み中に遺物が比較的まとまって出土した。092SH343の底面で検出した遺構内からは布留式系土器が出土しており、遺構の機能停止後に廃棄された遺物群との時間差は大きいものではなく、遺物群と竪穴とも古墳時代前期の比較的早い段階のものであることを示している。092SH360出土遺物の中に布留式系土器の出土が認められている。092SH380、092SH385の出土遺物に関しても弥生時代後期の遺物混入もみられるが、主体は古墳時代前期の範疇のものである。092SH400に関しても埋土内の出土遺物は古墳時代前期に比定されるものであり、竪穴遺構の大半が第２期でも新相を示すものであることを示している。

土坑には当該期のものである可能性を有するものに092SX205、092SX258、092SX295等がある。092SX205では甕が１点出土しているのみであり、092SX258では高坏が１点、092SX295では器台の坏部小破片が１点出土しているのみといった状況であり、いずれの土坑も出土遺物が極めて少ないため、詳細な時期、性格等については不明である。

第３期

当該時期の遺構は少ない。僅かな出土遺物から判断したものまで含めても092SH323、092SH370の２基のみである。092SH323は方形の竪穴遺構であり、４本の主柱をもつ。東壁面を欠失しており、カマドの有無については不明である。出土遺物には頂部にヘラ記号をもつ須恵器蓋がある。６世紀頃の所産になるものである。092SH370は隅丸方形を呈すると推定される竪穴遺構である。検出が一部であるため、全体形状は不明である。出土遺物には弥生時代後期前葉前後、古墳時代初頭前後の遺物を含む中で、当該地域の古墳時代後期に通有な特徴をもつ甕が１点出土していることから、現状では第３期の可能性を考慮した資料である。

第４期

検出遺構には掘立柱建物跡、竪穴遺構、土坑、道路状遺構がある。時代順に大きく３段階に分けることができる。すなわち、４－Ⅰ期は７世紀末から８世紀前半頃、４－Ⅱ期は８世紀中頃から後半頃、４－Ⅲ期は８世紀末から９世紀に比定されると考えられるものであるが、当然ながら、各時期の境界付近に位置付けられるものは厳然と分別されるものではない。

第４－Ⅰ期

第４－Ⅰ期の時期所産になると推定される比較的古相を示すものに竪穴遺構等があり、092SH070、092SH200、092SH260、092SH261が相当すると考えられる。いずれの竪穴遺構からもカマドの検出はない。092SH070は方形プランを有し、４本の主柱をもつ竪穴遺構であるが、壁溝などは持たない。出土遺物には須恵器蓋の他、８世紀前半から中頃に比定される回転台を使用した土師器椀が出土しており、４－Ⅰ期のものと判断した。092SH200は方形プランを呈し、４本柱をもつ遺構である。北側壁面の中央付

近に焼土を含む円形土坑があり、カマドであった可能性も考えられる。出土遺物の様相から８世紀初頭前後の時期所産が想定される竪穴遺構である。092SH260は略方形プランを呈し、４本の主柱をもつ竪穴遺構である。出土遺物から７世紀末前後の時期と想定できる遺構である。092SH261は方形プランを呈する竪穴遺構である。検出が部分的であるため、主柱の数、配置等の詳細は不明である。出土遺物も極めて僅少ながら、埋土中から出土した遺物細片から８世紀代の所産と想定した資料である。

当該時期には他に土坑資料があり092SX145、092SX240などが該当する可能性がある。092SX145は須恵器長頸壺が１点出土しており、７世紀末から８世紀初頭の年代比定が可能な土坑である。092SX240は出土遺物から７世紀後半以降の所産と考えられ、４－Ⅰ期に比定した。

第４－Ⅱ期

４－Ⅱ期には掘立柱建物跡の他、多くの土坑資料がある。

掘立柱建物跡では、092SB111から８世紀中頃から後半の土器資料が柱穴内から出土しており、当該時期のものと想定される。092SB110からも底部ヘラ切り離し調整をおこなう土師器坏破片などが出土しており、近接する時期のものである可能性を想定した。

第４－Ⅲ期

092SX195、092SF310等が当該時期のものである。092SX195は柱穴状の土坑であり、台付皿の底部破片、土師器甕口縁部等が出土している。092SF310は東西方向に展開する道路状遺構であり、３回以上の路面改修状況を確認することができた。各段階とも路面幅について掘り込みをおこない路面の形成をおこなう「豊後大分型道路」である。出土遺物の様相から８世紀末か９世紀の比較的早い段階に構築され、９世紀代に廃絶したものである。

第５期

第５期のものには、092SD003、092SX020、092SX021、092SE355がある。092SD003は南北方向に延びる溝状遺構である。出土遺物から12世紀後半～13世紀に比定される遺物の出土が認められる。溝は調査区の南側まで連続せず、途中で終息する。092SX020は埋土内から土師器坏や白磁壺の底部等を内包しており、第５期に帰属するものであると判断される。092SX021は092SX020と切り合い関係を有する土坑であり、当該期の土師器坏資料を出土する。092SE355は調査区の中央北寄りの地点において検出した井戸跡であり、方形プランを呈する素掘りの井戸跡である。埋土中の出土遺物様相から13世紀代の所産年代が想定される。

第６期

当該時期に比定される遺構には092SD002、092SD303が相当する。他時期に比べ、遺構数は多くない。092SD002 は途中で途切れる溝状遺構であり、出土遺物から15世紀よりも遡ることはない。断面Ｖ字形を示す。092SD303は調査区のほぼ中央を南北方区に延びる溝状遺構である。溝幅の割に深さを有する点を特徴とする。手づくね成形による厚手の京都系土師器皿が出土しており、16世紀後半の所産になるものと判断された。

以上が第92次調査における遺構変遷である。第92次調査地周辺は、下郡遺跡群内において最も遺構の遺存状況が良好な地点である。調査では６段階の遺構変遷を確認することができたが、この６段階の変遷が、基本的には下郡遺跡群全体の主要な遺跡時期の変遷にほぼ対応する。

他遺跡で確認されている古代の竪穴遺構

猪野新土井遺跡では、当該期の竪穴遺構が複数確認されている。いずれの竪穴遺構とも方形プランを呈しており、７世紀後半のものと８世紀後半から末の２時期のものがある。前者については、SH006、SH008が相当し、SH006にはカマドの付設が確認されている。出土遺物には都城系暗文土師器椀や製塩土器などがある。SH008は大半を他遺構に切られているため詳細は不明であるが、出土した須恵器蓋から当該時期と判断される。遺存部位から主柱は４本であった可能性が高いと考えられる。

後者の資料にはSH002、SH005がある。SH002はカマドが付設され、４本の主柱を有する。出土遺物には土師器坏（坏ｄ）、製塩土器などがあり、出土土器の中には１点のみの出土であるが、底部に回転糸切り離し痕を残すものがあり注目される。出土遺物から８世紀末頃に比定される遺構であり、当地域での確実な竪穴住居跡としては、最新の資料である。SH005はSH002と同規模の方形プランを呈する竪穴遺構であるが、カマド設置の有無、主柱配置等は不明である。出土遺物から８世紀後半から末の年代が想定されている。

上記が大分平野で確認されている７世紀後半から８世紀に比定される竪穴遺構の状況である。第92次調査の竪穴遺構の検出は、これまでの検出事例に新たな資料を追加することなり、４－Ⅱ期以後に展開する陶硯や石帯等の官衙的な遺物を伴う掘立柱建物跡群との時間的、空間的な関係の検討が今後の課題となろう。

註１　大分市教育委員会　1996「横尾遺跡群第43次調査Ｄ－39、Ｅ地点（有田遺跡）」『大分市埋蔵文化財 調査年報 vol.７ 1995年度』

註２　大分市教育委員会　1997「猪野新土井遺跡第１・２次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報 vol.８ 1996年度』

　　大分市教育委員会　1998「猪野新土井遺跡（第３次調査）」『大分市埋蔵文化財調査年報 vol.９ 1997年度』

第47表　遺物観察表①

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SB110-001	185	土師器	皿・坏	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色 ～淡茶白色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し				(12.6)	底部	
092SB111-001	187	土師器	坏	角閃石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
092SB111-002	187	須恵器	蓋	長石	淡灰色	淡灰色	ナデ 回転ナデ	回転ナデ					口縁部片	
092SD002-001	189	陶磁器												別表
092SD002-002	190	石器												別表
092SD003-001	192	土師器	小皿	白色粒子 橙色粒子	淡褐色	淡茶褐色	回転ナデ	ナデ 回転糸切り離し	9.3	1.2		7.1	完存	
092SD003-002	192	土師器	小皿	石英	茶褐色	茶褐色	回転ナデ	ナデ	9.0	1.3		7.0	口縁部～底部	
092SD003-003	192	土師器	小皿	白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ナデ	回転ナデ 回転糸切り離し	(9.1)	1.5		(7.2)	口縁部～底部	
092SD003-004	192	土師器	小皿	白色粒子	茶褐色	茶褐色	回転ナデ	回転ナデ 回転糸切り離し		1.4			全体片	
092SD003-005	192	土師器	坏	白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ナデ	不明					底部	
092SD003-006	192	土師器	坏	白色粒子	淡褐色	淡褐色	回転ナデ	回転ナデ	(13.6)				口縁部	
092SD003-007	192	土師器	坏	白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	回転ナデ 回転糸切り離し	(15.4)	3.2		(10.2)	口縁部～底部	
092SD300-001	194	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	赤橙色	赤橙色	ヨコナデ 指オサエ 工具ナデ	ヨコナデ 指オサエ ミガキ後ナデ	(13.8)				口縁部～肩部	
092SD300-002	194	弥生土器	壺	石英 角閃石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ミガキ ミガキ後ナデ	(13.8)				口縁部～胴部	外面黒斑 穿孔２ヶ所
092SD300-003	194	弥生土器	壺	石英 角閃石 橙色粒子	淡黄橙色	淡黄橙色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部～肩部	長頸壺 鋤先状口縁壺
092SD300-004	194	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ 指オサエ ミガキ	ミガキ後ナデ ハケ目後ナデ	(16.8)				口縁部	長頸壺 ハケ目（6本/cm）
092SD300-005	194	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡灰褐色	淡黄褐色 ～淡赤褐色	指オサエ 指ナデ	ナデ ミガキ ハケ目後ナデ				3.4	底部	長頸壺 ハケ目（4～5本/cm） 外面黒斑
092SD300-006	194	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	赤橙色	赤橙色	ナデ	ミガキ					口縁部片	
092SD300-007	194	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄橙色	淡黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	(28.3)				口縁部	鋤先状口縁壺
092SD300-008	194	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石	赤橙色	赤橙色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ	(16.2)				口縁部	複合口縁壺
092SD300-009	194	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡赤褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ナデ	(33.1)				口縁部	ハケ目（7～8本/cm）
092SD300-010	195	弥生土器	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡赤色	淡茶褐色 ～淡茶黒色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ ヨコナデ 後工具ナデ 工具ナデ	(23.4)				口縁部～胴部	東北部九州系 外面スス
092SD300-011	195	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡茶白色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ 工具ナデ	(28.2)				口縁部～胴部	東北部九州系
092SD300-012	195	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡茶灰色	淡灰褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ	(21.4)				口縁部～胴部	東北部九州系 ハケ目（約5本/cm）
092SD300-013	195	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡赤褐色	淡茶灰色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ	(26.4)				口縁部～胴部	東北部九州系 ハケ目（5～6本/cm）

第48表　遺物観察表②

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SD300-014	195	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡茶色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ	(28.8)				口縁部～胴部	東北部九州系 ハケ目（8～10本/cm） 外面スス
092SD300-015	196	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色 ～暗茶色	淡赤褐色 ～暗茶色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	(25.8)				口縁部～胴部	東北部九州系 ハケ目（5～6本/cm） 外面スス
092SD300-016	196	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡茶色	淡茶灰色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	工具ナデ 後ヨコナデ 工具ナデ	(32.4)				口縁部～胴部	東北部九州系
092SD300-017	197	弥生土器	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄白色	淡黄白色							口縁部片	須玖式系 鋤先状口縁壺 精製土 外面赤色塗彩
092SD300-018	197	弥生土器	甕	角閃石 長石	暗赤褐色	暗赤褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（4～5本/cm）
092SD300-019	197	弥生土器	甕	角閃石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ハケナデ				2.0	頸部～底部1/3	ミニチュア土器 外面黒斑
092SD300-020	197	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ミガキ	ナデ ヨコナデ ミガキ後 ナデ	(26.4)				口縁部1/6	
092SD300-021	198	弥生土器	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	(49.8)				口縁部1/10	東北部九州系 ハケ目（7本/cm）
092SD300-022	198	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ヨコナデ	(43.2)				口縁部	東北部九州系
092SD300-023	199	弥生土器	甕	長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ ハケ目後 ナデ	ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（4～5本/cm） 内外面赤色塗彩
092SD300-024	199	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ヨコナデ ハケナデ					口縁部片	下城式 外面スス
092SD300-025	199	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色 ～黄灰色	淡赤褐色	ハケ目	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目（内面10～11本 外面8～9本/cm） 内面黒斑
092SD300-026	199	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 白色粒子	淡黄褐色	淡赤褐色	ナデ	ヨコナデ ハケ目後 工具ナデ					口縁部～胴部	下城式 ハケ目（2～3本/cm）
092SD300-027	199	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	暗茶灰色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ	(26.4)				口縁部～胴部	下城式 ハケ目（5～6本/cm） 外面スス
092SD300-028	200	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色 ～黒茶褐色	ハケ目 指オサエ ナデ後ミガキ	ハケ目 ヨコナデ	(23.8)				口縁部～胴部	下城式 ハケ目（10～12本/cm） 外面スス
092SD300-029	200	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡赤褐色 ～淡茶灰色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ハケ目後 ヨコナデ	(25.8)				口縁部～胴部	下城式 ハケ目（4～7本/cm）
092SD300-030	200	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	暗茶褐色	指オサエ ハケ目後 ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部～胴部片	下城式 ハケ目（6～7本/cm）
092SD300-031	201	弥生土器	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色 ～暗灰色	指オサエ ケズリ後 ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	(16.6)	17.1		(5.2)	口縁部～底部	下城式と東北部九州系の折衷 ハケ目（10～12本/cm） 外面スス
092SD300-032	201	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡黄茶褐色	淡赤褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(22.4)	26.3		(5.4)	口縁部～底部	下城式 ハケ目（8～10本/cm） 外面スス
092SD300-033	202	弥生土器	高坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄橙色 ～黄白色	淡黄橙色 ～黄白色	ナデ ミガキ	ナデ					口縁部片	内外面黒斑
092SD300-034	202	弥生土器	高坏	角閃石 長石	淡茶色	赤色	ナデ ミガキ	ミガキ	(11.0)	8.9		(7.4)	口縁部～脚部	内外面赤色塗彩

第49表　遺物観察表③

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SD300-035	202	弥生土器	蓋	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤橙色	淡赤橙色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ					頂部	ハケ目単位不明
092SD300-036	202	弥生土器	台付鉢	石英 角閃石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ ハケナデ					鉢部と脚部の接合部	下城式 ハケ目（6～7本/cm）
092SD300-037	202	弥生土器	台付鉢	石英 角閃石 長石	淡黄茶色	淡茶灰色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ケズリ風 ナデ	ナデ	(18.6)				口縁部～胴部	穿孔
092SD303-001	204	土師器	皿	長石	淡茶色	淡茶色	ナデ	ナデ ヨコナデ	(10.0)	2.3		(4.6)	全体1/3	京都系 内面スス
092SE355-001	207	土師器	椀	石英 角閃石	淡黄褐色	淡黄褐色	ミガキ	ナデ ミガキ					口縁部片	白色系研磨土師器
092SE355-002	207	土師器	椀		淡灰白色	淡黄白色	ミガキ	ナデ					口縁部片	白色系研磨土師器 精製土
092SE355-003	207	土師器	椀	石英	淡黄白色	淡黄白色	ミガキ	ナデ					底部	白色系研磨土師器
092SE355-004	207	土師器	椀	橙色粒子	黄白色	黄白色	ミガキ	ナデ				(6.5)	底部	白色系研磨土師器
092SE355-005	207	土師器	小皿	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ 回転糸切り離し	(9.0)	1.5		(7.8)	全体1/5	
092SE355-006	207	土師器	小皿	角閃石 長石	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ	回転ナデ 回転糸切り離し	(10.6)	1.4		(8.0)	全体1/6	
092SE355-007	207	須恵器	鉢	石英 白色粒子	暗灰色	暗灰色	ヨコナデ 後ナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	東播系
092SE355-008	207	陶磁器												別表
092SE355-009	207	陶磁器												別表
092SE355-010	207	陶磁器												別表
092SE355-011	207	陶磁器												別表
092SE355-012	207	土師器	坏	角閃石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ヨコナデ 回転糸切り離し					底部片	
092SE355-013	207	土師器	坏	角閃石 橙色粒子 金雲母	暗茶褐色	暗茶褐色	ヨコナデ 回転ナデ	ヨコナデ 回転糸切り離し	(13.3)	3.7		(8.6)	全体1/5	
092SE355-014	208	石器												別表
092SX325-001	213	須恵器	蓋	石英 長石	淡灰褐色	淡灰褐色	回転ナデ	回転ナデ					口縁部片	
092SX325-002	213	須恵器	高台付坏	石英 白色粒子	暗灰色	暗灰色	ナデ 回転ナデ	ナデ 回転ナデ				(8.6)	底部1/3	
092SX325-003	213	製塩土器		石英 白色粒子	暗褐色	淡赤褐色	布目	ナデ 指オサエ					口縁部片	
092SX325-004	213	土師器	坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色 ～赤褐色	淡赤褐色 ～赤褐色	ナデ	ヨコナデ					口縁部片	
092SX325-005	213	土師器	坏	石英 角閃石	赤橙色	赤橙色～ 赤褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ				(8.7)	底部	
092SX325-006	213	土師器	皿	石英 角閃石	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 手持ちヘラケズリ後ナデ	(14.4)	2.7		(11.0)	全体1/4	
092SX336-001	216	土師器	高台付坏	角閃石	淡茶色	淡茶色	ナデ ミガキ	ナデ				(8.0)	底部	
092SX336-002	216	須恵器	坏	長石	淡灰褐色	淡灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	(10.4)				口縁部	
092SX336-003	216	土師器	蓋	角閃石 長石	淡茶色	淡茶色	ナデ	ナデ					口縁部片	
092SX336-004	216	土師器	蓋	石英 角閃石 長石 橙色粒子	赤褐色	赤褐色～ 淡赤白色	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	(2.4)	3.0		(15.4)	頂部～口縁部	※口径はツマミ径・底径は口径
092SX337-001	218	須恵器	壺	長石	淡灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	(16.8)				口縁部1/2	壺F類
092SX337-002	218	須恵器	壺	角閃石	淡灰白色	淡灰白色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ				(6.4)	底部	
092SX337-003	218	須恵器	甕	長石	暗灰色	暗灰色	ナデ	ナデ					口縁部片	
092SX337-004	218	須恵器	不明	角閃石 長石	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	ナデ 回転ナデ					口縁部片	

第50表　遺物観察表④

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SX337-005	218	土師器	坏	石英 角閃石 橙色粒子	赤褐色	淡黄橙色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(13.6)	3.8			口縁部～底部	
092SX337-006	218	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡赤色	淡茶色	ミガキa2	ミガキa2	(15.2)				口縁部～底部	坏d
092SX337-007	218	土師器	高台付坏	角閃石 長石	淡茶褐色	淡赤褐色	ミガキa2	ナデ ヨコナデ	(13.2)	4.1		(9.6)	口縁部～底部	
092SX337-008	218	須恵器	高台付坏	長石	淡灰褐色	淡灰褐色	回転ナデ	回転ナデ					口縁部片	
092SX340-001	220	土師質	台付鉢	石英 角閃石	淡茶色	淡茶褐色	ナデ	ナデ				(9.0)	脚部	
092SX354-001	221	土師器	高台付坏	角閃石 長石	赤橙色	赤橙色	ナデ	ヨコナデ				(9.6)	底部1/5	
092SX354-002	221	土師器	高台付坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ミガキa2	ミガキa2				(11.6)	底部	
092SX354-003	221	土師器	高台付坏	角閃石 長石	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ	(14.4)	3.8		(10.2)	全体1/5	
092SX354-004	221	土師器	高台付坏	長石	淡茶白色	淡茶白色	ナデ	ナデ				(9.0)	底部	
092SX354-005	221	土師器	蓋	角閃石 長石	暗茶褐色	赤褐色	ヨコナデ	ミガキa2					口縁部片	
092SX354-006	221	土師器	蓋	石英 角閃石 長石	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ ミガキa2	ナデ ミガキa2	(2.2)	3.2		(15.2)	頂部～口縁部	※口径はツマミ径・底径は口径
092SX354-007	222	土師器	坏	石英 角閃石	淡赤褐色 ～淡茶褐色	淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
092SX354-008	222	土師器	坏	角閃石 長石	淡赤褐色 ～淡黄褐色	淡赤褐色 ～淡黄褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	
092SX354-009	222	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	
092SX354-010	222	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後手持ちヘラケズリ風ナデ	13.8	4.2		10.8	全体1/2	
092SX354-011	222	土師器	坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶白色	淡茶色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	(14.2)	4.2		(7.6)	全体3/4	
092SX354-012	222	土師器	坏	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ミガキa2	ミガキa					体部片	坏d 外面黒斑
092SX354-013	222	土師器	坏	石英 角閃石 長石	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ					底部片	
092SX354-014	222	土師器	坏	石英 角閃石	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ	ヨコナデ	(12.8)				口縁部	
092SX354-015	222	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	12.8	3.0		8.5	口縁部～底部	
092SX354-016	222	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	(13.8)	4.3		(9.2)	口縁部～底部	
092SX354-017	223	土師質	甕	石英 白色粒子 橙色粒子 金雲母	暗赤褐色	暗赤褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ 指オサエ	(23.0)				口縁部～胴部	企救型 ハケ目（4～5本/cm） 外面スス
092SX354-018	223	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶灰色	淡赤褐色	ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ カキ目風ナデ	(14.0)				口縁部～肩部	豊後大分形
092SX354-019	223	土師質	甕	石英 角閃石 橙色粒子 金雲母	暗赤褐色	暗赤褐色	ヨコナデ タタキ後ナデ	ヨコナデ カキ目風ナデ	(23.0)				口縁部～胴部片	豊後大分形
092SX354-020	224	製塩土器		白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	布目	ナデ					口縁部片	
092SX354-021	224	土師質	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 回転ナデ	ナデ ミガキa	(11.6)				口縁部～胴部	無頸壺

第51表　遺物観察表⑤

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SX354-022	224	須恵器	圏足硯	石英	灰茶色	灰茶色	ヨコナデ	ヨコナデ ヘラ切リ ヘラ切リ 後ヨコナデ	(23.0)				上部	
092SX354-023	225	須恵器	蓋	長石	淡灰色	灰色	ナデ	回転ナデ					口縁部片	
092SX354-024	225	須恵器	蓋	石英 白色粒子	暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	(11.6)				口縁部片	
092SX354-025	225	須恵器	蓋	白色粒子	暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ					口縁部片	
092SX354-026	225	須恵器	蓋	角閃石 長石	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ	(7.0)				口縁部	
092SX354-027	225	須恵器	蓋	長石	淡灰色	淡灰色	ナデ 回転ナデ	回転ナデ	(15.4)				口縁部	
092SX354-028	226	須恵器	高坏	角閃石	淡茶灰色	淡灰褐色	ナデ 回転ナデ	回転ナデ				(8.8)	脚部	陶色編年Ⅲ型式１段階
092SX354-029	226	須恵器	高坏	石英 白色粒子	暗灰色	暗灰色	ナデ ヨコナデ	回転ナデ					脚部	
092SX354-030	226	須恵器	高台付坏	長石	淡灰色	淡灰色	ナデ	ヨコナデ 回転ヘラ 切り離し 後ナデ					底部片	
092SX354-031	226	須恵器	坏	長石	淡灰白色	淡灰白色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ 切り離し	(7.8)				底部	
092SX354-032	227	須恵器	壺	白色粒子	淡灰白色	淡灰白色	ハケナデ	回転ナデ ヘラケズリ				(9.6)	底部	長頸壺
092SX354-033	227	須恵器	壺	石英 白色粒子	暗灰色	灰黒色	ナデ	ヨコナデ 回転ナデ				(12.0)	底部	長頸壺
092SX354-034	228	須恵器	甕	白色粒子	灰褐色	灰褐色	ヨコナデ	回転ナデ 後タタキ					口縁部～頸部片	
092SX354-035	228	須恵器	甕	白色粒子	暗灰褐色	暗灰褐色	ヨコナデ あて具痕 後ナデ	ヨコナデ タタキ後 カキ目					頸部片	
092SX354-036	228	須恵器	甕	白色粒子	暗灰色	淡灰色	回転ナデ タタキ後 ナデ	回転ナデ	(20.0)				口縁部～頸部	
092SX354-037	228	須恵器	甕	白色粒子	暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	(23.8)				口縁部～頸部	
092SX354-038	229	石器												別表
092SF310-001	231	土師器	坏	角閃石 長石	淡橙色	淡橙色	ナデ	ヨコナデ					口縁部片	
092SF310-002	231	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	
092SF310-003	231	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色 ～暗茶灰色	淡赤褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ 切り離し 後ナデ	(13.8)	3.5		(11.0)	全体1/3	
092SF310-004	231	土師器	坏	長石	赤茶褐色	赤茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ 切リ離し 後ナデ	(14.2)	3.8		(7.6)	口縁部～底部	
092SF310-005	231	土師器	坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶白色	淡茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ 切り離し 後ナデ	13.6	3.8		9.9	口縁部～底部	
092SF310-006	231	土師器	蓋	角閃石 長石	淡橙色	淡橙色	ナデ	ヨコナデ					口縁部片	
092SF310-007	231	土師器	蓋	長石	淡橙色	淡橙色	ナデ	ナデ					口縁部片	
092SF310-008	231	土師器	椀	角閃石 長石 橙色粒子	淡灰黒色	淡灰褐色	ミガキ	ナデ				(5.4)	底部	黒色土器A類
092SF310-009	231	土師器	高坏	石英 角閃石 橙色粒子	淡赤橙色 ～淡黄褐色	淡赤橙色 ～淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ミガキ 工具ナデ	(13.9)	9.4		9.0	口縁部～脚部	暗文
092SF310-010	232	土師質	甕	石英 角閃石 橙色粒子	淡黄褐色	淡赤褐色	ナデ	ヨコナデ カキ目					口縁部～肩部片	豊後大分形
092SF310-011	232	土師質	土師質	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ヨコナデ カキ目					口縁部～肩部片	豊後大分形

第52表　遺物観察表⑥

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SF310-012	232	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	工具ナデ	ナデ ヨコナデ カキ目					口縁部～肩部片	豊後大分形
092SF310-013	232	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ タタキ カキ目	(26.4)				口縁部～胴部	豊後大分形
092SF310-014	232	土師質	甕	角閃石 長石	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	企救型
092SF310-015	232	土師質	甕	石英 角閃石 長石	赤褐色	赤褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	(17.6)				口縁部～胴部	企救型 ハケ目（5～6本/cm）
092SF310-016	232	土師質	甕	石英 長石 白色粒子 緑色結晶 片岩片	茶褐色	茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ	(21.0)				口縁部～底部	企救型 ハケ目（3～4・5～6本/cm）
092SF310-017	233	土師質	甑	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ タタキ					底部片	豊後大分形 ハケ目（7～8本/cm）
092SF310-018	233	土師質	甑	石英 角閃石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ あて具痕	タタキ					底部片	豊後大分形
092SF310-019	233	土師質	不明	角閃石 石英 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ヘラケズリ後ナデ					底部のみ	焼成前穿孔
092SF310-020	233	製塩土器		石英 白色粒子	灰黒色	淡赤白色	ナデ	ナデ					底部	
092SF310-021	233	製塩土器		角閃石	淡橙色	淡橙灰色	布目	ナデ 指オサエ					口縁部片	
092SF310-022	233	製塩土器		白色粒子	淡赤褐色	淡橙色	ナデ	ナデ 指オサエ					体部片	
092SF310-023	233	土師質	壺	石英 橙色粒子	淡黄褐色	淡赤褐色	ナデ	ヨコナデ 工具ナデ 回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り離し後ナデ				(12.4)	底部	
092SF310-024	234	須恵器	甕	長石	淡灰色	淡灰色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
092SF310-025	234	須恵器	甕	長石	灰色	淡灰色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
092SF310-026	234	須恵器	甕	長石	灰色	淡灰色	ナデ	ヨコナデ					口縁部片	
092SF310-027	234	須恵器	蓋	長石	淡灰白色	淡灰白色	ナデ	ナデ					口縁部片	
092SF310-028	234	須恵器	蓋	長石	淡灰白色	淡灰白色	ナデ	ナデ					口縁部片	
092SF310-029	234	須恵器	蓋	長石	淡灰色	淡灰色	ナデ	ナデ	(2.4)	2.5		(14.0)	頂部～口縁部	※口径はツマミ径・底径は口径
092SF310-030	234	須恵器	蓋	長石	淡灰白色	淡灰白色	ナデ	ナデ	17.2				口縁部	
092SF310-031	235	須恵器	高台付坏	長石	淡灰色	淡灰色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					全体片	
092SF310-032	235	須恵器	高台付坏	長石	淡灰色	淡灰色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	(12.0)	3.4		(7.8)	口縁部～底部	
092SF310-033	235	須恵器	高台付坏	白色粒子	淡灰色	淡灰色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	(12.0)	4.3		(8.0)	口縁部～底部	
092SF310-034	235	須恵器	高台付坏	白色粒子	淡灰褐色	淡灰色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(19.0)	6.1		(13.6)	口縁部～底部	
092SF310-035	235	須恵器	皿	白色粒子	暗灰色	暗灰色	ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	(14.0)	2.0		(12.0)	全体1/5	
092SF310-036	235	須恵器	皿	長石	灰色	灰色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し	(15.6)	2.1		(14.0)	口縁部～底部	
092SF310-037	235	須恵器	硯	長石	灰色	灰黒色	ナデ	ナデ					脚部片	
092SF310-038	236	土師質	羽口	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡灰褐色	淡黄白色		ナデ					一部片	外面スス

第53表　遺物観察表⑦

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SH060-001	238	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式
092SH060-002	238	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石	不明	淡茶褐色	不明	ハケ目 ナデ				(6.8)	底部	ハケ目（5～6・約9本/cm） 外面剥離
092SH070-001	240	須恵器	蓋	角閃石 白色粒子 橙色粒子	暗灰色	暗灰色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ 回転ヘラ切り離し	(9.4)				全体1/3	陶邑編年Ⅰ型式4段階
092SH070-002	240	土師器	椀	石英 長石	赤橙色	赤橙色	ナデ	ナデ	(16.0)				全体1/3	
092SH155-001	242	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡橙褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ				(6.4)	底部	ハケ目（約6本/cm）
092SH200-001	246	土師器	蓋	長石	茶褐色～ 淡黒色	淡茶褐色	回転ナデ	回転ナデ					口縁部片	
092SH200-002	246	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ハケナデ	ナデ ヨコナデ 指オサエ	(19.0)				口縁部～肩部	
092SH200-003	246	土師器	坏	石英 角閃石 長石	茶褐色	淡茶褐色	ナデ	不明					口縁部片	外面剥離
092SH200-004	246	土師器	坏	長石	淡茶褐色	淡茶褐色	不明	不明	(10.4)	3.5			全体1/3	内外面剥離
092SH200-005	247	須恵器	坏	長石	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ					口縁部片	陶邑編年Ⅱ型式5段階
092SH200-006	247	須恵器	坏	長石	暗灰褐色	暗灰褐色	回転ナデ	回転ナデ					体部	陶邑編年Ⅱ型式5段階
092SH200-007	247	須恵器	壺	白色粒子	灰褐色	淡灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	(10.1)		(18.0)		口縁部～胴部	
092SH200-008	247	須恵器	蓋	長石	暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ					口縁部片	
092SH200-009	247	須恵器	蓋	長石	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	(14.0)				口縁部	
092SH200-010	247	須恵器	不明	長石	淡灰色	淡灰褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ 手持ちヘラケズリ				13.8	底部	
092SX245-001	248	土師器	皿	石英 長石	淡茶淡茶	淡茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 後ナデ					口縁部片	暗文
092SX245-002	248	土師器	坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子 雲母	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ後手持ちヘラミガキ					底部片	都城系 精製土 暗文
092SH250-001	252	土師質	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ 工具ナデ	ミガキ ハケ目後 ミガキ					頸部	二重口縁壺 ハケ目単位不明
092SH250-002	252	土師質	壺	石英 長石	淡茶白色	淡茶褐色	ハケ目後 ナデ	ヨコナデ	(19.0)				口縁部	二重口縁壺 ハケ目（3～5本/cm）
092SH250-003	252	土師質	壺	角閃石 長石	淡茶灰色	淡茶褐色	ハケ目 指オサエ ハケ目後 ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ ハケ目後 ヨコナデ	(15.6)				口縁部	複合口縁壺 安国寺式 ハケ目（8～10本/cm）
092SH250-004	252	土師質	壺	角閃石 長石	暗茶褐色	淡茶灰色	ハケ目 ハケ目後 ナデ	ハケ目 ヨコナデ	(20.6)				口縁部	複合口縁壺 安国寺式 ハケ目（内面4～6本　外面3～5本/cm）
092SH250-005	252	土師質	壺	石英 角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	淡黄茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ	(15.4)				口縁部～肩部	
092SH250-006	252	土師質	壺	石英 角閃石 金雲母	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ナデ ハケ目後 ヨコナデ	(17.8)				口縁部	外来系 ハケ目単位不明
092SH250-007	252	土師質	壺	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ハケ目後 ヨコナデ	ハケ目 ハケ目後 ヨコナデ ハケ目後 ナデ	11.2	21.6	17.2		完存	ハケ目（内面6～7本　外面6～7・約7～8本/cm） 外面黒斑
092SH250-008	253	土師質	甕	石英 角閃石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ ケズリ	ハケ目後 ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(16.6)		(24.6)		口縁部～胴部1/2	布留式系 ハケ目（10～12本/cm） 外面スス

第54表　遺物観察表⑧

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SH250-009	254	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶灰色	淡灰色～ 淡茶色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(14.0)				口縁部～肩部	在地系
092SH250-010	254	土師質	甕	石英 角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後 ヨコナデ	(16.0)				口縁部～胴部	在地系 ハケ目（内面８～９本　外面８～10本/cm）
092SH250-011	254	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ ハケ目後 ナデ ハケ目後 ミガキ	ハケ目 ハケ目後 ヨコナデ					口縁～頸部片	在地系 ハケ目（７～８本/cm）
092SH250-012	254	土師質	甕	石英 角閃石	淡黄茶褐色	淡黄褐色	ナデ ハケ目後 ナデ	ナデ ハケ目後 ナデ					口縁～頸部片	在地系 ハケ目（３～４本/cm）
092SH250-013	255	土師質	鉢	石英 角閃石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ハケナデ	(11.6)	7.0			口縁部～底部	外面黒斑
092SH250-014	256	土師器	小型器台	角閃石 長石	赤褐色	赤褐色	ミガキ	ミガキ	8.7				坏部	
092SH250-015	256	土師器	鉢	石英 角閃石 長石	淡赤褐色 ～暗茶褐色	淡赤褐色 ～暗茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ 指オサエ	11.1	8.3			完存	
092SH250-016	256	土師器	鉢	角閃石 長石	淡茶褐色 ～淡茶灰色	淡茶褐色	ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(17.8)	9.1			口縁部～底部	ハケ目（５～６本/cm）
092SH250-017	256	土師器	高坏	石英 角閃石 橙色粒子	暗茶褐色	赤褐色～ 暗茶褐色	ミガキ	ナデ ミガキ					坏部と脚部の接続部	暗文
092SH250-018	256	土師器	高坏	角閃石 長石 橙色粒子	黄茶褐色	黄褐色	ナデ 指オサエ	ナデ					脚部	穿孔 外面赤色塗彩
092SH250-019	257	石器												別表
092SX278-001	258	土師質	甕	石英 角閃石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ ハケ目後 ヨコナデ					口縁部片	布留式系 ハケ目単位不明
092SX278-002	258	土師質	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目 ハケ目後 ナデ					口縁部片	複合口縁壺 安国寺式 ハケ目（９～12本/cm）
092SX299-001	259	土師質	壺	長石 橙色粒子 金雲母	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ケズリ	13.2	7.1			口縁部～底部	小型丸底壺 暗文
092SH260-001	261	土師質	竈	角閃石	淡茶色	淡茶黒色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ					底部片	移動式
092SH260-002	261	須恵器	蓋	角閃石	淡茶褐色	淡灰褐色	回転ナデ	回転ナデ					口縁部	陶邑編年Ⅲ型式３段階
092SH260-003	261	土師器	坏	石英 橙色粒子	淡褐色	淡褐色	ナデ ヨコナデ	手持ちヘラミガキ					口縁部片	都城系 精製土 暗文
092SH260-004	261	土師質	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	(15.2)				口縁部	ハケ目（４～５本/cm）
092SX284-001	271	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ	(15.8)				口縁部	複合口縁壺 安国寺式 ハケ目（８～10本/cm）
092SH270-001	272	土師器	小型器台	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶灰色	ハケ目 ナデ	ナデ ハケ目後 ナデ				(11.2)	脚部	ハケ目(内面８～10本　外面10～12本/cm）
092SH270-002	272	土師器	鉢	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目 ヨコナデ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	15.0	8.0			完存	ハケ目（８～10本/cm）
092SH270-003	272	土師質	甕	石英 長石 白色粒子	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ ハケ目後 ヨコナデ ハケ目後 ナデ	16.0				口縁部～胴部	布留式系 ハケ目（10～12本/cm） 外面スス
092SH270-004	273	管玉												別表
092SH270-005	274	金属												別表
092SH280-001	277	土師質	甕	石英 橙色粒子 金雲母	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(13.7)				口縁部	布留式系 ハケ目（12～15本/cm）

第55表　遺物観察表⑨

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SH280-002	277	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡赤褐色	淡赤褐色 ～淡黄褐色	ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ タタキ	14.4				口縁部～胴部	布留式系 ハケ目（7～8･11～12本/cm）
092SH280-003	277	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色 ～淡灰褐色	淡黄褐色 ～淡灰褐色	ナデ ハケ目後ナデ ケズリ風ナデ	ヨコナデ ハケ目後ナデ	(13.0)				口縁部～胴部1/4	在地系と布留式系の折衷 ハケ目（5～6本/cm）
092SH280-004	277	土師質	甕	石英 角閃石 金雲母	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケ目後ナデ	14.2		15.9		口縁部～胴部	在地系 ハケ目（4～5本/cm）
092SH280-005	277	土師器	高坏	石英 角閃石 橙色粒子 金雲母	淡赤黄褐色	淡赤黄褐色	ナデ	ナデ ハケ目後ナデ	(11.0)				坏部	ハケ目（4～7本/cm） 内面黒斑
092SH280-006	277	土師器	高坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ 指ナデ	ヨコナデ	20.7				坏部	
092SH280-007	277	土師器	小型器台	石英 角閃石 橙色粒子	赤褐色～ 暗茶褐色	赤褐色～ 暗茶褐色	ナデ 指オサエ	ミガキ	14.2		15.9		脚部	穿孔
092SH280-008	277	土師器	不明	石英 角閃石 長石	暗赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ハケ目 ナデ					口縁部片	ハケ目（11～12本/cm）
092SH285-001	278	弥生土器	高坏	角閃石	淡黄茶色	淡黄茶色	ミガキ風ナデ	ナデ ミガキ	(26.7)				口縁部	
092SH285-002	278	弥生土器	壺	角閃石 長石	淡黄茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ 指オサエ	(25.2)				口縁部	複合口縁壺 安国寺式
092SH323-001	282	須恵器	蓋	白色粒子	淡灰茶色	淡茶褐色	回転ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ	(12.8)	4.0			頂部～口縁部	外面ヘラ記号
092SH343-001	285	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケ目後ナデ	(9.6)				口縁部	長頸壺 ハケ目（6～7本/cm）
092SH343-002	286	弥生土器	壺	石英 角閃石	淡黄褐色	淡黄褐色	ハケ目 ハケ目後ナデ ハケナデ	ハケ目 ナデ ハケ目後ナデ ハケナデ	14.3				口縁部～肩部	複合口縁壺 ハケ目（8～9本）
092SH343-003	286	弥生土器	壺	石英 白色粒子 緑色結晶片岩片	淡黒色	淡橙褐色	ハケ目 ハケ目後ナデ	ハケ目 タタキ後ハケ目					頸部～肩部	二重口縁壺 ハケ目（内面5～9･約8本 外面約6本/cm）
092SH343-004	286	弥生土器	壺	石英 角閃石 橙色粒子	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ					肩部片	
092SH343-005	286	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目後ナデ	ハケ目 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（内面7～8本　外面9本/cm）
092SH343-006	286	土師質	甕	角閃石 長石 金雲母	淡茶色	淡橙褐色	ハケ目 ハケ目後ナデ 工具ナデ	ハケ目 ナデ ハケ目後ナデ	(23.2)	36.6	(27.8)		口縁部～底部	ハケ目（内面4～6本　外面7～9本/cm） 外面スス
092SH343-007	286	土師質	壺	石英 金雲母	淡茶灰色	淡赤褐色	ナデ ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(16.0)	32.0	28.4		口縁部～底部	外来系 ハケ目（8本/cm）
092SH343-008	287	土師質	甕	石英 角閃石 長石	淡黄褐色 ～暗褐色	淡黄褐色 ～暗褐色	ヨコナデ ハケ目後ナデ	ハケ目 ナデ	(14.2)		(16.3)		口縁部～胴部1/2	ハケ目（7～8･10～11本/cm）
092SH343-009	287	土師質	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ 指オサエ 工具ナデ	ヨコナデ	(14.7)				口縁部～胴部	外面剥離
092SH343-010	287	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ ミガキ ハケ目後ナデ	ヨコナデ ハケ目後ナデ	(19.6)				口縁部～肩部	ハケ目（6～7本/cm） 内面赤色塗彩 内面黒斑
092SH343-011	288	土師質	甕	石英 角閃石	暗灰色	赤褐色	ナデ	ヨコナデ					口縁部片	布留式系

第56表　遺物観察表⑩

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SH343-012	288	土師質	甕	石英 白色粒子 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(14.2)				口縁部1/6	布留式系 精製土
092SH343-013	288	土師質	甕	石英 角閃石 長石 白色粒子	暗茶褐色	淡茶褐色	ナデ ケズリ	ヨコナデ	(16.8)				口縁部～肩部	布留式系
092SH343-014	288	土師質	甕	石英 白色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(15.4)				口縁部～肩部	布留式系 ハケ目（約7本/cm）
092SH343-015	288	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ケズリ	ナデ ヨコナデ	(17.6)				口縁部～胴部	布留式系
092SH343-016	288	土師質	甕	石英 角閃石 長石 白色粒子 金雲母	淡茶灰色	淡茶色～ 淡茶褐色	ナデ ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(16.4)				口縁部～胴部1/4	布留式系 ハケ目（7～8本/cm）
092SH343-017	288	土師質	甕	石英 角閃石 金雲母	赤褐色	赤黄褐色	ナデ 工具ナデ ケズリ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(16.6)				口縁部～肩部	布留式系 ハケ目単位不明
092SH343-018	288	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	茶褐色	茶褐色	ナデ ケズリ	ナデ ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(18.6)				口縁部～胴部	布留式系 ハケ目（約7本/cm）
092SH343-019	288	土師質	甕	石英 角閃石 長石 金雲母	茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ ハケ目後 ヨコナデ	(13.5)	20.5	19.1		完存	布留式系 ハケ目（8～10･9～10本/cm） 外面スス
092SH343-020	289	土師質	鉢	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ハケ目後 ミガキ	ハケ目 ナデ					頸部～胴部	ハケ目（7～9本/cm）
092SH343-021	289	土師質	鉢	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡黄褐色	赤褐色	ハケ目後 ナデ	ハケ目 ナデ ハケ目後 ナデ	(32.0)		(30.4)		口縁部～胴部	ハケ目（内面6～7本　外面5～6･7･10～11本/cm） 外面黒斑
092SH343-022	290	土師質	鉢	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ハケ目 ヨコナデ	(10.9)				口縁部～体部1/8	小型丸底鉢 ハケ目（6～7本/cm）
092SH343-023	290	土師質	鉢	石英 角閃石 金雲母	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ 工具ナデ	ナデ 工具ナデ	(11.4)	7.5			全体2/3	小型丸底鉢 外面黒斑
092SH343-024	290	土師質	鉢	石英 角閃石 長石	淡茶色	淡茶色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(11.8)	8.0			全体1/3	小型丸底鉢 外面黒斑
092SH343-025	290	土師質	鉢	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	茶褐色～ 暗茶褐色	ナデ ハケ目後 ナデ	ヨコナデ ハケ目後 ヨコナデ ハケ目後 ナデ					頸部～胴部	小型丸底鉢 ハケ目（8～9本/cm）
092SH343-026	291	土師器	高坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	不明	不明	12.4				坏部	外面黒斑
092SH343-027	291	土師器	小型器台	石英 角閃石 長石 橙色粒子	赤褐色	赤褐色	ナデ ハケ目後 ナデ	ハケ目後 ナデ	(11.0)				坏部～脚部	ハケ目（8～9本/cm） 穿孔4ヶ所
092SH343-028	291	土師器	器台	石英 長石 白色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ				16.2	脚部	鼓形
092SX359-001	292	土師質	甕	石英 白色粒子 金雲母 砂粒	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(15.0)				口縁部～胴部	布留式系 ハケ目（9本/cm）
092SX388-001	293	土師器	高坏	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡赤褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ ミガキ					口縁部片	
092SH360-001	295	弥生土器	壺	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ					胴部片	
092SH365-001	297	土師質	甕	角閃石 金雲母	淡茶橙色	淡茶橙色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	布留式系

第57表　遺物観察表⑪

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SH365-002	297	土師質	甕	角閃石 金雲母	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ハケ目後 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（5本/cm）
092SH365-003	297	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄灰色	淡黄灰色	ハケ目	ヨコナデ ハケ目後 ヨコナデ					口縁部片	ハケ目（5本/cm）
092SH365-004	297	弥生土器	壺	角閃石 石英 金雲母	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	ハケ目	ヨコナデ	(16.4)				口縁部	複合口縁壺 安国寺式
092SH365-005	297	土師質	鉢	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄灰色	淡黄灰色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	5.9	2.0			完存	ミニチュア土器
092SH365-006	297	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部	
092SH365-007	297	土師質	甕	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	淡赤褐色	淡黄茶褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ	(16.6)				口縁部～肩部	ハケ目（4～6本/cm）
092SH370-001	299	土師器	鉢	長石	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ヨコナデ ミガキ	(13.6)				口縁部1/6	暗文
092SH370-002	299	弥生土器	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶色	ヨコナデ 工具ナデ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(16.2)				口縁部～肩部	ハケ目（6～7本/cm）
092SH370-003	299	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ハケ目後 ナデ	(19.4)				口縁部～胴部	ハケ目（5～6･10～14本/cm） 外面スス
092SH370-004	299	土師質	甕	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ケズリ	ハケ目 ナデ	(17.0)				口縁部～胴部	ハケ目（5～6本/cm）
092SH370-005	299	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ ケズリ	ナデ	(14.6)				口縁部～頸部	
092SH370-006	299	弥生土器	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶白色	淡赤褐色	ヨコナデ 指オサエ ハケ目後 ナデ 工具ナデ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(20.6)				口縁部～胴部	ハケ目（4～5本/cm）
092SH370-007	299	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡茶褐色 ～淡灰色	淡茶褐色	ナデ ハケ目後 ナデ ケズリ風 ナデ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(24.2)				口縁部～胴部	ハケ目（9本/cm）
092SH370-008	299	弥生土器	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄茶褐色	淡黄茶色	ハケ目 ヨコナデ 指オサエ 工具ナデ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(28.2)				口縁部～胴部	ハケ目（10～12本/cm）
092SH380-001	302	弥生土器	壺	角閃石 長石	暗茶褐色	淡茶色	ハケ目 指オサエ ヨコナデ 後ハケ目	ヨコナデ ヨコナデ 後ハケ目	(15.0)				口縁部	複合口縁壺 安国寺式 ハケ目(内面8～10本　外面9～10本/cm)
092SH380-002	302	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡茶褐色	ハケ目 ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ヨコナデ 指オサエ	(14.6)				口縁部～肩部	ハケ目（5～6本/cm）
092SH380-003	302	弥生土器	壺	石英 角閃石 白色粒子 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	指ナデ	工具ナデ 後ヨコナデ 工具ナデ					頸部～胴部	
092SH380-004	302	土師質	壺	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶白色	淡茶色	ナデ	ヨコナデ					口縁部	二重口縁壺
092SH380-005	302	土師質	甕	石英 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(14.0)				口縁部～胴部	ハケ目（10～12本/cm）
092SH380-006	302	土師質	甕	石英 角閃石 長石 白色粒子 橙色粒子 金雲母	暗茶褐色	暗茶褐色	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	(20.4)				口縁部～肩部	ハケ目（4～6本/cm）
092SH380-007	303	土師器	高坏	角閃石 長石	赤色	赤色	ミガキ	ミガキ					口縁部片	内外面赤色塗彩
092SH380-008	303	土師器	高坏	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ ヨコナデ					坏部	

第58表　遺物観察表⑫

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SH380-009	303	土師器	器台	石英 角閃石 長石 金雲母	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	(19.8)				口縁部	
092SH380-010	303	土師器	鉢	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	黒色～淡茶褐色	ナデ	ナデ 指オサエ	(11.6)	4.2			口縁部～底部	外面黒斑
092SH380-011	303	弥生土器	鉢	角閃石 白色粒子 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶灰色	指オサエ ハケ目後 ナデ	ナデ後ハケ目	(11.8)	8.0		(3.4)	口縁部～底部	ハケ目（4～6本/cm） 外面黒斑
092SH385-001	306	土師質	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	指オサエ ハケ目後 ナデ	ナデ 指オサエ ハケ目後 ナデ					口縁部～頸部	複合口縁壺 ハケ目（15本/cm）
092SH385-002	306	弥生土器	鉢	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ後ミガキ	ナデ ヨコナデ	(17.4)				口縁部	二重口縁壺
092SH385-003	306	土師質	壺	石英 角閃石	淡黄灰色	淡黄茶色	ヨコナデ	ヨコナデ	19.8				口縁部	二重口縁壺
092SH385-004	306	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	ナデ ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(23.0)				口縁部	ハケ目（6～8本/cm）
092SH385-005	307	土師質	壺	角閃石 長石	淡茶灰色	淡茶褐色	ハケ目 指オサエ ハケ目後 ナデ	ハケ目	(14.4)				口縁部～胴部	ハケ目（内面8～9本　外面5～6本/cm）
092SH385-006	308	土師質	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ 工具ナデ	ハケ目後 ナデ	17.2				口縁部～胴部	ハケ目（4～6本/cm）
092SH385-007	309	土師質	甕	石英 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(13.0)				口縁部～肩部	布留式系 ハケ目（13本/cm）
092SH385-008	309	土師質	甕	石英 長石 白色粒子 金雲母	淡茶灰色	淡茶灰色	ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(15.0)				口縁部～肩部	布留式系 ハケ目（9～10本/cm）
092SH385-009	309	土師質	甕	石英 角閃石 長石	淡茶灰色	明茶褐色	ナデ ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(16.8)				口縁部～胴部	布留式系 ハケ目（9～10本/cm）
092SH385-010	309	土師質	甕	石英 金雲母	淡茶灰色	淡茶褐色	ヨコナデ ケズリ	ハケ目 ヨコナデ	(14.6)				口縁部～胴部	布留式系 ハケ目（9～10本/cm） 外面赤色塗彩 外面スス
092SH385-011	309	土師質	甕	石英 角閃石 長石	淡赤灰色	淡赤灰色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ナデ タタキ	(11.2)				口縁部～胴部	ハケ目（約20本/cm）
092SH385-012	309	土師質	甕	角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ナデ ヨコナデ	指オサエ タタキ後 ヨコナデ タタキ	(15.0)				口縁部～胴部	外面剥離
092SH385-013	309	土師質	甕	石英 角閃石 橙色粒子	淡赤褐色 ～暗茶褐色	淡赤褐色 ～暗茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ タタキ	16.0	20.5	18.8		完存	内外面スス
092SH385-014	310	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶白色	淡茶白色	ナデ ハケ目後 ナデ	ナデ	(22.6)				口縁部～胴部	在地系 ハケ目（5本/cm）
092SH385-015	310	土師質	甕	石英 角閃石 長石	淡茶白色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(16.8)		(20.0)		口縁部～胴部	在地系 ハケ目（7・10本/cm）
092SH385-016	310	土師質	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡黄褐色 ～赤褐色	赤褐色～ 暗茶褐色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	(18.4)	24.7	(19.5)		口縁部～底部	在地系 ハケ目（内面6～7本　外面6～7・9～10本/cm） 外面剥離
092SH385-017	311	土師質	鉢	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ	11.8	7.9	(20.0)		完存	
092SH385-018	311	土師質	鉢	角閃石 長石	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ 指オサエ ナデ後ミガキ	ヨコナデ 指オサエ 工具ナデ後ナデ	11.8	7.8			口縁部～底部	在地系 ハケ目（5本/cm）
092SH385-019	311	土師質	鉢	角閃石 長石 白色粒子	淡赤褐色	暗茶褐色	ナデ 指オサエ	ハケ目後 ナデ	(16.6)	5.8			口縁部～底部	ハケ目（8～10本/cm）

第59表　遺物観察表⑬

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SH385-020	312	土師質	壺	石英 橙色粒子	淡黄橙色	淡黄橙色	ナデ	ナデ	(12.8)				口縁部	小型丸底壺 精製土 暗文
092SH385-021	312	土師質	壺	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡赤褐色	ナデ 指オサエ ハケナデ	ハケ目後 ナデ	(12.6)				口縁部～肩部	小型丸底壺 ハケ目（9本/cm）
092SH385-022	313	土師器	高坏	石英 角閃石 長石	茶褐色	茶褐色	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(24.0)				坏部	暗文
092SH385-023	314	石器												別表
092SH385-024	314	石器												別表
092SH385-025	315	弥生土器	蓋	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡黄褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	3.1	5.6		8.9	頂部～口縁部	※口径は頂部径・底径は口径
092SH385-026	316	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ 指オサエ ケズリ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	(20.4)	28.0	(23.5)	(5.8)	口縁部～底部	ハケ目（6～8本/cm）
092SH400-001	319	土師器	鉢	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	5.3	2.8			口縁部～底部	ミニチュア土器 外面黒斑
092SH400-002	319	土師器	鉢	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ	7.8	3.0			口縁部～底部	ミニチュア土器 外面スス
092SH400-003	319	土師器	高坏	角閃石 長石	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ ハケ目後 ナデ	ナデ ミガキ ハケ目後 ミガキ					脚部	穿孔 ハケ目（約6本/cm）
092SH400-004	319	土師質	甕	長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ヨコナデ					口縁部片	布留式系
092SH400-005	319	土師質	甕	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ナデ ヨコナデ					口縁部～肩部片	
092SH400-006	319	土師質	甕	金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ ケズリ	ナデ ヨコナデ	(9.4)				口縁部～肩部	
092SH400-007	319	土師質	台付鉢	石英 長石 白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ	(7.6)				脚部	
092SH400-008	319	土師質	鉢	長石	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ナデ	(14.8)	6.6			口縁部～底部	
092SH400-009	319	土師質	壺	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	工具ナデ	ナデ ヨコナデ	(12.2)	6.8			全体1/3	小型丸底壺 外面黒斑
092SH400-010	320	金属												別表
092SX020-001	321	土師器	坏	石英 角閃石	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ナデ	回転ナデ 回転糸切り離し				(8.2)	底部1/4	
092SX020-002	321	土師器	坏		淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ 回転糸切り離し				(10.8)	底部1/8	精製土
092SX020-003	321	陶磁器												別表
092SX021-001	322	土師器	坏	白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	回転ナデ	回転ナデ 回転糸切り離し					底部片	
092SX021-002	322	土師器	坏	橙色粒子	茶褐色	茶褐色	回転ナデ	回転ナデ 回転糸切り離し	14.6	3.0		10.5	全体2/3	
092SX021-003	322	土師器	坏	白色粒子	茶褐色	茶褐色	ヨコナデ	指オサエ 回転ヘラ切り離し後手持ちヘラケズリ				(10.8)	底部	
092SX041-001	323	土師質	小壺	白色粒子 橙色粒子	茶褐色	茶褐色	回転ナデ	回転ナデ	(9.5)				口縁部	
092SX041-002	323	土師器	高台付坏	石英 角閃石 白色粒子	茶褐色	茶褐色	ミガキa2	ミガキa2				11.1	底部	
092SX090-001	324	須恵器	高台付坏	石英 白色粒子	暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ					口縁部片	
092SX090-002	324	須恵器	坏	石英 角閃石	淡灰白色	淡灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	(12.8)			(9.6)	口縁部1/6	
092SX090-003	324	土師器	坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	赤橙色	赤橙色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	(13.8)	3.8		(10.0)	全体1/6	

第60表　遺物観察表⑭

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SX090-004	324	土師器	坏	石英 角閃石 長石	淡赤褐色	淡赤褐色 ～赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	(13.0)	4.4		(10.7)	全体1/5	
092SX090-005	324	土師器	坏	石英 角閃石 長石	赤橙色	赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	(14.8)	4.0		(11.3)	全体1/6	
092SX090-006	324	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	赤橙色	赤橙色	ミガキａ 回転ナデ	ミガキa2 回転ヘラケズリ	19.6	4.9		12.3	全体2/3	
092SX090-007	324	土師器	皿	石英 角閃石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色 ～赤褐色	回転ナデ	ミガキａ 回転ナデ	(21.3)	2.6		(19.0)	全体1/2	
092SX090-008	324	土師器	高台付坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡赤褐色	淡赤褐色	ミガキa2 ミガキ後ナデ	ミガキa2	(13.2)	3.5		10.2	全体3/4	在地系 ハケ目（内面6～7本　外面6～7・9～10本/cm） 外面剥離
092SX090-009	324	土師器	高台付坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	赤橙色	淡赤褐色 ～赤橙色	ミガキa2	ミガキa2				(10.8)	底部1/4	
092SX090-010	324	土師器	高台付坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡赤褐色 ～赤橙色	淡赤褐色 ～赤橙色	ナデ ヨコナデ ミガキa2	ヨコナデ ミガキa2	(17.2)	5.0		(12.9)	全体1/3	
092SX090-011	324	土師器	高坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	暗灰色	淡赤橙色	ナデ	ナデ ミガキa2					脚部	
092SX090-012	324	土師器	高坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	赤橙色	赤橙色	回転ナデ	ナデ ミガキａ					脚部	
092SX090-013	324	土師器	高坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	赤橙色	赤橙色	回転ナデ	ナデ後ミガキａ					脚部	
092SX100-001	326	須恵器	圏足硯	石英	暗灰褐色	淡灰色	ヨコナデ	ヨコナデ				(16.0)	脚部1/7	内外面自然釉
092SX130-001	327	土師質	甑	角閃石	淡茶灰色	淡茶褐色	あて具痕	ナデ ヨコナデ					底部片	豊後大分形
092SX130-002	328	石器												別表
092SX145-001	331	須恵器	壺	石英 長石	暗灰色	暗灰色	ナデ	ナデ ヨコナデ 回転ヘラケズリ後ナデ			17.7	9.0	頸部～底部	長頸壺 外部自然釉融着
092SX150-001	333	土錘												別表
092SX150-002	334	石器												別表
092SX158-001	335	土師質	鉢	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡赤褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ カキ目 手持ちヘラケズリ後ナデ	(20.4)				体部	
092SX173-001	336	土師質	鉢	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	(15.0)				口縁部	
092SX173-002	336	弥生土器	壺	角閃石 長石	淡茶色	淡茶色	ミガキ	ヨコナデ ハケ目後ナデ	(16.2)				口縁部	ハケ目単位不明
092SX173-003	337	石器												別表
092SX240-001	340	須恵器	高坏	石英	淡灰白色	淡灰白色 ～暗灰色						9.6	底部	
092SX240-002	340	土師器	椀	石英 角閃石 長石	淡茶褐色	淡赤褐色	ナデ 工具ナデ	ナデ 手持ちヘラケズリ	(17.0)				口縁部	

第61表　遺物観察表⑮

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SX240-003	340	土師質	甑	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ケズリ	工具ナデ ハケ目後 ナデ				(12.4)	胴部～底部1/2	ハケ目（4～5本/cm） 穿孔2ヶ所
092SX195-001	341	土師質	台付鉢・皿	角閃石	淡黄茶色	淡黄茶色	ナデ	ナデ ヨコナデ				(10.4)	底部1/2	
092SX195-002	341	土師質	甕	角閃石 長石	淡黄茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ハケ目後 ヨコナデ	(34.2)				口縁部～胴部	ハケ目（4～5本/cm）
092SX205-001	343	土師質	甕	角閃石	黒茶色	淡茶褐色	ヨコナデ 指オサエ 工具ナデ	ヨコナデ ナデ後ハケ目後ナデ	(18.0)				口縁部～胴部	ハケ目（4～6本/cm）
092SX258-001	344	土師器	高坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ケズリ後 ナデ	ヨコナデ ミガキ後 ナデ	16.0	13.8		14.6	口縁部～脚部	暗文 内面黒斑 穿孔4ヶ所
092SX295-001	345	土師器	小型器台	角閃石 長石 橙色粒子 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ	9.6				坏部	
092SX390-001	348	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡茶色	淡茶色	ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ					口縁部片	下城式 ハケ目単位不明 外面黒斑
092SX390-002	348	弥生土器	甕	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ ハケナデ 指ナデ	(20.5)				口縁部～胴部	
092SX390-003	348	弥生土器	甕	角閃石 長石	淡橙褐色～暗茶褐色	淡赤褐色～淡黒色	ナデ ヨコナデ 工具ナデ	ヨコナデ 工具ナデ	18.1		20.9		口縁部～胴部	外面スス
092SX390-004	348	弥生土器	高坏	角閃石 長石	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ ミガキ	ミガキ ミガキ後 ヨコナデ					脚部	
092SX390-005	348	弥生土器	高坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	赤橙色	赤橙色	ナデ 指オサエ ミガキ後 ナデ 指ナデ	ヨコナデ ハケ目後 ナデ	(24.8)				口縁部～脚部	穿孔4ヶ所 ハケ目（3～4本/cm）
092SX390-006	348	弥生土器	壺	角閃石 長石	淡茶色	淡茶色	ナデ 工具ナデ	ハケ目 ハケ目後 ヨコナデ	13.5		26.4		口縁部～胴部	ハケ目（2～4本/cm）
092SZ000-001	349	縄文	浅鉢	長石	淡茶灰色	淡茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
092SZ000-002	349	縄文	浅鉢	長石	淡茶灰色	淡茶灰色	ヨコナデ	ヨコナデ					体部片	
092SZ000-003	349	縄文	浅鉢	角閃石	淡茶灰色	茶褐色	ナデ	ナデ 縄文					胴部片	磨消縄文
092SZ000-004	350	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 橙色粒子	赤褐色	赤褐色	ハケ目 ナデ	ミガキ ハケ目後 ナデ					肩部～胴部	複合口縁壺 ハケ目（5～6本/cm）
092SZ000-005	350	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 白色粒子 橙色粒子	茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ 指オサエ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	14.4				口縁部	複合口縁壺 ハケ目（10～11本/cm）
092SZ000-006	350	弥生土器	壺	石英 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色～淡赤黄色	ナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ 指オサエ	16.0				口縁部	複合口縁壺 ハケ目（7～8本/cm）
092SZ000-007	350	弥生土器	壺	石英 角閃石 長石 白色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ 指オサエ	ナデ	(15.0)				口縁部～肩部	
092SZ000-008	350	弥生土器	甕	角閃石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色～淡黒色	ハケ目 ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ ハケ目後 ナデ	(16.8)				口縁部～胴部	ハケ目（内面約3本　外面3～4本/cm） 外面スス
092SZ000-009	351	土師器	坏	石英 角閃石	淡橙褐色	淡橙褐色	不明瞭	ヨコナデ					口縁部片	
092SZ000-010	351	土師器	坏	角閃石 長石 金雲母	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	(14.2)				口縁部	
092SZ000-011	351	土師器	坏	石英 角閃石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	

第62表　遺物観察表⑯

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SZ000-012	351	土師器	坏	石英 角閃石	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	回転ヘラケズリ					口縁部片	
092SZ000-013	351	土師器	坏	角閃石 白色粒子 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
092SZ000-014	351	土師器	坏	角閃石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
092SZ000-015	351	土師器	坏	角閃石 長石	淡茶色	赤橙色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	(15.8)				口縁部	
092SZ000-016	351	土師器	坏	角閃石 長石	淡橙褐色 ～淡茶灰色	淡橙褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	(15.4)	4.6			口縁部	
092SZ000-017	351	土師器	坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	赤橙色	赤橙色	ナデ ヨコナデ ミガキ	ナデ ヨコナデ	(17.4)				口縁部	
092SZ000-018	351	土師器	坏	角閃石 長石	淡茶褐色	茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	(14.0)				口縁部	
092SZ000-019	351	土師器	坏	角閃石	淡茶褐色	茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(15.9)				口縁部	外面赤色塗彩
092SZ000-020	351	土師器	坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡橙色	淡橙褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(16.2)				口縁部	
092SZ000-021	351	土師器	坏	石英 角閃石 橙色粒子	淡赤褐色 ～淡黄白色	淡赤褐色	ナデ	ナデ	(13.9)				口縁部	
092SZ000-022	351	土師器	坏	角閃石 長石	淡赤橙色	淡赤橙色	ナデ	ナデ	(14.4)				口縁部	
092SZ000-023	351	土師器	坏	石英 角閃石 長石	淡黄褐色	淡橙褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(16.4)				口縁部	
092SZ000-024	352	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶白色	淡橙色	ナデ	ナデ 手持ちヘラケズリ	(17.8)				口縁部	
092SZ000-025	352	土師器	皿	角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	赤橙色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(20.0)				口縁部 1/8	
092SZ000-026	352	土師器	皿	角閃石 長石	淡橙褐色	淡橙褐色	ミガキ a	ミガキ a	21.4	3.2			全体 4/5	
092SZ000-027	352	土師器	高台付坏	角閃石	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	(17.6)	6.1		(12.4)	口縁部～底部	
092SZ000-028	352	土師器	皿	長石 橙色粒子	淡茶橙色	淡茶灰色	ナデ	ナデ	(20.8)				口縁部	
092SZ000-029	352	土師器	皿	石英 長石 白色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	不明	ミガキ	(21.8)	3.1			口縁部～底部	外面剥離
092SZ000-030	352	土師器	皿	長石 橙色粒子	淡黄橙色	淡黄橙色	不明	手持ちヘラケズリ	(21.0)	3.2		(17.0)	全体 1/5	暗文の痕跡
092SZ000-031	352	土師器	皿	角閃石 長石	淡黄褐色	淡黄褐色	ミガキ？	手持ちヘラケズリ	(22.6)	3.3		(10.0)	口縁部～底部	暗文の痕跡
092SZ000-032	353	土師器	坏	石英 角閃石	淡茶橙色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	12.0	3.8			完存	
092SZ000-033	353	土師器	坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ナデ ケズリ後ナデ				(9.6)	底部	
092SZ000-034	353	土師器	坏	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶橙色	淡茶橙色 ～淡茶白色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	13.0	3.7			完存	
092SZ000-035	354	須恵器	蓋	長石	淡灰色	灰赤色	ナデ	ナデ	7.8				頂部～口縁部	内面ヘラ記号 陶邑編年Ⅲ型式１段階
092SZ000-036	354	須恵器	蓋	長石	淡茶灰色	淡灰色	ナデ	ナデ 回転ヘラケズリ	(9.1)				口縁部	
092SZ000-037	354	須恵器	蓋	長石	灰色	灰色	ナデ	ナデ	(10.6)				口縁部	陶邑編年Ⅲ型式２段階
092SZ000-038	354	須恵器	蓋	長石	灰色	灰色	ナデ	ナデ	(12.4)				口縁部	
092SZ000-039	354	須恵器	蓋	長石	淡灰色	暗灰色	ナデ	ナデ	(14.2)				口縁部	

第63表　遺物観察表⑰

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SZ000-040	354	須恵器	蓋	長石	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	(15.4)				口縁部	
092SZ000-041	354	須恵器	蓋	長石	淡灰色	淡灰色	ナデ	ナデ	(16.4)				口縁部	
092SZ000-042	354	須恵器	蓋	長石	淡茶灰色	茶灰色	回転ナデ	回転ナデ					口縁部片	
092SZ000-043	354	須恵器	蓋	長石	淡茶灰色	淡灰色	ナデ	ナデ					口縁部片	
092SZ000-044	354	須恵器	蓋	長石	灰色	灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	2.3	2.2		10.3	頂部～口縁部	※口径はツマミ径・底径は口径
092SZ000-045	354	須恵器	蓋	長石	灰色	灰色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(3.0)	2.8		(13.8)	頂部～口縁部	※口径はツマミ径・底径は口径
092SZ000-046	354	須恵器	蓋	長石	淡灰色	淡灰色	ナデ 回転ナデ	ナデ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	3.0	3.0		15.2	全体2/3	※口径はツマミ径・底径は口径
092SZ000-047	354	須恵器	蓋	白色粒子	淡灰色	淡灰色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラケズリ後ナデ	(2.5)	4.0		(14.2)	全体1/2	※口径はツマミ径・底径は口径
092SZ000-048	354	須恵器	蓋	角閃石	灰褐色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	(11.0)				全体1/5	陶邑編年Ⅱ型式5段階前後
092SZ000-049	354	須恵器	蓋	白色粒子	灰色	灰色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラケズリ後ナデ	(13.2)	3.8			頂部～口縁部	陶邑編年Ⅱ型式5段階前後
092SZ000-050	355	須恵器	高台付坏	長石	淡灰色	淡灰色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					底部片	
092SZ000-051	355	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	暗灰色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ				6.4	底部	
092SZ000-052	355	須恵器	高台付坏	長石	淡灰色	淡灰色	ナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ				(10.4)	底部	
092SZ000-053	355	須恵器	高台付坏	長石	暗灰黒色	暗灰黒色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(9.6)	4.6		(5.8)	口縁部～底部	
092SZ000-054	355	須恵器	高台付坏	白色粒子	淡灰色	淡灰色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ 回転ヘラケズリ	13.0	4.4		8.4	完存	
092SZ000-055	355	須恵器	高台付坏	長石	灰色	灰色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(12.8)	4.7		(8.6)	口縁部～底部	
092SZ000-056	355	須恵器	高台付坏	長石	灰色	暗灰色	ナデ ヨコナデ	ナデ	(13.2)	3.4		(9.4)	口縁部～底部	
092SZ000-057	355	須恵器	高台付坏	長石	淡灰色	淡灰色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(13.8)	4.3		(8.4)	全体1/2	
092SZ000-058	355	須恵器	坏	長石	淡灰色	淡茶灰色	ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
092SZ000-059	355	須恵器	坏	長石	灰色	灰色	ナデ	ヨコナデ					口縁部片	
092SZ000-060	355	須恵器	坏	角閃石	淡灰色	淡灰色	ナデ	ナデ 手持ちヘラケズリ	9.4	3.5			完存	
092SZ000-061	355	須恵器	坏	長石	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り離し	(9.4)				全体1/2	
092SZ000-062	355	須恵器	坏	長石	灰色	灰色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し	(10.9)	3.9		(7.2)	口縁部～底部	
092SZ000-063	355	須恵器	坏	長石	淡灰色	淡灰色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し	(13.8)	3.7		(6.5)	口縁部～底部	
092SZ000-064	355	須恵器	高台付坏	石英 白色粒子	淡灰色	淡灰色	ナデ 回転ナデ	ナデ 回転ナデ	(13.3)	4.2		9.5	口縁部～底部	
092SZ000-065	355	須恵器	高台付坏	長石	淡灰色	淡灰色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	(15.8)	3.7		(12.0)	口縁部～底部	
092SZ000-066	357	須恵器	甕	長石	灰色	灰色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ					口縁部片	
092SZ000-067	357	須恵器	壺	石英 角閃石	淡灰褐色	淡灰白色	ナデ	ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ				(9.5)	底部	長頸壺
092SZ000-068	357	須恵器	硯	石英	淡灰白色	明灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	10.8	2.0		10.0	底部	転用硯 内面墨痕
092SZ000-069	358	土師器	高坏	角閃石 長石	橙茶褐色	橙茶褐色	ミガキ	ミガキ	(27.0)				坏部1/4	

第64表　遺物観察表⑱

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SZ000-070	358	土師質	甑	石英 角閃石 長石	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ 指オサエ	カキ目				(23.0)	底部	
092SZ000-071	359	製塩土器		角閃石 長石	茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ 指オサエ					底部	
092SZ000-072	359	製塩土器		長石	淡茶褐色	暗灰色	布目	ナデ					体部片	
092SZ000-073	359	製塩土器		緑色結晶片岩片	淡茶褐色	淡茶灰色	布目	ナデ 指オサエ					体部片	
092SZ000-074	359	製塩土器		角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡橙褐色	不明	指オサエ ナデ					体部片	内面剥離
092SZ000-075	359	製塩土器		石英	暗茶褐色	淡赤褐色 ～淡灰白色	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ					口縁部片	
092SZ000-076	359	製塩土器		長石	淡茶褐色	淡茶灰色	布目	ナデ 指オサエ					口縁部片	
092SZ000-077	360	土師器	坏	長石	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	ナデ 指オサエ	(15.6)	3.2		(11.2)	全体1/14	都城系 精製土 暗文
092SZ000-078	360	土師器	坏	石英 角閃石 橙色粒子	淡赤橙褐色	淡赤橙褐色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ	14.8	3.6		10.0	口縁部～底部	都城系 精製土
092SZ000-079	360	土師器	坏	石英 角閃石 金雲母	暗黄褐色	暗黄褐色	ナデ	ナデ	(17.4)	5.0		(5.8)	全体1/4	都城系 精製土
092SZ000-080	360	土師器	坏	橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 手持ちヘラミガキ					口縁部片	都城系 精製土 暗文
092SZ000-081	360	土師器	坏	雲母	明橙褐色	明橙褐色	ナデ ミガキ	手持ちヘラミガキ					口縁部片	都城系 精製土 暗文 外面赤色塗彩
092SZ000-082	360	土師器	皿	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡褐色	淡褐色	ナデ	ヨコナデ 手持ちヘラケズリ後ナデ後ミガキ		2.7			全体片	都城系 精製土 暗文
092SZ000-083	360	土師器	皿	石英 角閃石	淡褐色	淡橙褐色	ナデ	ヨコナデ 手持ちヘラミガキ					口縁部片	都城系 精製土 暗文
092SZ000-084	360	土師器	皿	石英 角閃石 長石 橙色粒子	明橙色	明橙色	ヨコナデ	ヨコナデ ミガキ	(20.7)	2.5		(17.8)	全体1/4	都城系 精製土 暗文
092SZ000-085	360	土師器	坏	長石	暗茶褐色	暗茶褐色	回転ナデ	回転ヘラケズリ後ミガキa 回転ヘラケズリ後ナデ	(18.6)	6.5			全体1/2	都城系 精製土 暗文
092SZ000-086	361		円筒埴輪	角閃石 長石	茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ハケ目					一部片	ハケ目（約6本/cm） 穿孔
092SZ000-087	361		円筒埴輪	角閃石 長石	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ハケ目					底部片	ハケ目（約6本/cm）
092SZ000-088	361	土師質	鉢	角閃石 長石 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 工具ナデ	ヨコナデ ハケ目後ナデ	(13.0)	9.8			口縁部～底部	ハケ目（約7本/cm）
092SZ000-089	361	土師質	鉢	角閃石 長石	淡茶褐色	茶褐色	ナデ 指オサエ	ナデ	(3.2)	2.7			口縁部～底部	ミニチュア土器
092SZ000-090	361	土師器	蓋	角閃石 長石	淡茶色	淡茶色	ミガキa2	ミガキa2					口縁部片	
092SZ000-091	361	土師器	蓋	石英 橙色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ヨコナデ					口縁部片	
092SZ000-092	361	瓦器	椀	長石	灰色	灰色	ナデ	ナデ ミガキ					口縁部片	和泉型 暗文
092SZ000-093	362	勾玉												別表
092SZ000-094	363	石器												別表
092SZ000-095	364		羽口	石英 角閃石 橙色粒子	淡茶色	淡茶白色	ナデ	ナデ					一部片	

第65表　遺物観察表⑲

遺物番号	挿図番号	器種		胎土	色調		器面調整		法量（cm）				遺存率	備考
		種類	器種		内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大胴部	底径		
092SZ000-096	364		羽口	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡赤褐色	淡赤褐色～淡灰褐色	ナデ	ナデ					一部片	
092SZ000-097	365	土錘												別表
092SZ000-098	365	土錘												別表
092SZ000-099	365	土錘												別表
092SZ000-100	365	土錘												別表
092SZ000-101	366	土師器	坏	石英 角閃石 長石 橙色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ後ミガキ	回転ナデ 回転ヘラ切り離し後ナデ					底部片	外面墨書

第66表　陶磁器観察表

遺物番号	挿図番号	器種		装飾		法量（cm）			産地	備考
		種類	器種	絵付 釉薬	文様	口径	器高	底径		
092SD002-001	189	焼締	擂鉢						備前	
092SE355-008	207	青磁	碗		外柳目文				中国産	同安窯系 大宰府陶磁器分類碗Ⅰ－1b類
092SE355-009	207	青磁	碗		内点描文				中国産	同安窯系 大宰府陶磁器分類碗Ⅰ－1類
092SE355-010	207	白磁	碗							大宰府陶磁器分類碗Ⅳ類
092SE355-011	207	白磁	不明					3.3		
092SX020-003	321	白磁	壺					6.5		

第67表　石器観察表

遺物番号	挿図番号	器種	石材	法量（cm）				備考
		種類		長さ	幅	厚さ	重さ(g)	
092SD002-002	190	磨製石鏃	結晶片岩	(2.0)	1.6	1.1	(0.8)	
092SE355-014	208	砥石	砂岩	(9.0)	(2.7)	(3.0)	(77.5)	
092SX354-038	229	石錘	凝灰岩	8.5	8.6	2.1	125.0	
092SH250-019	257	砥石	粘板岩	(11.1)	2.7	2.2	(95.4)	
092SH385-023	314	砥石	砂岩	(13.8)	3.8	3.6	(330.0)	
092SH385-024	314	石錘	凝灰岩	7.3	6.6	6.5	340.0	※幅に径記入
092SX130-002	328	紡錘車	緑色結晶片岩		5.2	1.3	68.0	※幅に径記入
092SX150-002	334	紡錘車	滑石		4.5	1.6	51.0	截頭円錐形 ※幅に径記入
092SX173-003	337	磨製石斧	蛇紋岩	(4.6)	5.8	1.1	(44.8)	
092SZ000-094	363	磨製石鏃	結晶片岩	(3.5)	1.6	0.3	(2.3)	

第68表　金属製品観察表

遺物番号	挿図番号	器種	素材	法量（cm）				備考
		種類		長さ	幅	厚さ	重さ(g)	
092SH400-010	320	不明	鉄	(3.7)	3.3	0.2	(11.2)	

第69表　土錘観察表

遺物番号	挿図番号	器種	胎土	法量（cm）			備考
		種類		長さ	径	重さ(g)	
092SX150-001	333	土錘	橙色粒子	4.5	1.5	7.1	完存
092SZ000-097	365	土錘	石英 角閃石	4.5	1.6	9.1	完存
092SZ000-098	365	土錘	角閃石 石英	(4.8)	1.3	(5.6)	
092SZ000-099	365	土錘	角閃石 長石 橙色粒子	(4.4)	1.3	(6.1)	
092SZ000-100	365	土錘	石英 角閃石	(2.7)	1.0	(2.1)	

第70表　土製品観察表

遺物番号	挿図番号	器種	胎土	法量（cm）			備考
		種類		長さ	径	重さ(g)	
092SZ000-093	362	勾玉	角閃石	3.0	3.6	(40.0)	

第71表　金属製品観察表

遺物番号	挿図番号	器種	素材	法量（cm）				備考
		種類		長さ	幅	厚さ	重さ(g)	
092SH270-005	274	不明	鉄	(14.9)	1.5	1.0	(40.5)	

第72表　玉類観察表

遺物番号	挿図番号	器種	素材	色調	法量（cm）			備考
		種類			長さ	径	重さ(g)	
092SH270-004	273	管玉		暗青緑色	1.0	0.4	0.15	

第Ⅳ章　総　括　－調査成果の整理とまとめ－

第１節　調査成果の時代別整理

本書には、これまでの137地点におよぶ下郡遺跡群の調査の中で、第90次・第91次・第92次調査の３地点の調査成果を掲載した。これらの中でも特に第90次・第92次調査の調査では、比較的広範な面積を調査することができたこともあり、集落域内の時期変遷をある程度把握することが可能となった。加えて第90次調査地点と第92次調査地点は隣接しており、両者の遺構変遷を突合することで、より具体的な変遷を押さえることができる。下記では、こうした点に着目し、両地点の画期の様相をみる。

第90次調査地点では、弥生時代、古墳時代、古代、中･近世におよぶ時期の遺構を確認した。これに、第92次調査での６期区分を採用し、時期区分を再編すると第０期から第Ⅶ期の８時期に区分することができる。この８期区分を具体的に示すと下記のようになる。

第０期　弥生時代（中期）　　090SD201……第Ⅰ期に含まれる可能性もあり。
　　第92次調査には該当なし。
第Ⅰ期　第92次の第１期に相当（弥生時代中期後半から後期前葉）
　　後期前葉～中葉　　090SH069・090SJ398
第Ⅱ期　第92次の第２期に相当（弥生時代後期終末から古墳時代前期）
　　弥生時代終末～古墳時代初頭　090SH020
　　古墳時代前期初頭～前半　　090SH200・090SH094・090SX464
第Ⅲ期　第92次の第３期に相当（古墳時代後期を中心とする時期）
　　090SH173（中期末前後）
第Ⅳ期　第92次の第４期に相当（７世紀末から９世紀の時期）
　　８世紀中頃～後半　　090SA007・090SB008・090SB294
　　９世紀初頭　　090SD076
第Ⅴ期　第92次の第５期に相当（12世紀から13世紀の時期）
　　13世紀前後　　090SB003・090SB009・090SB178
第Ⅵ期　第92次の第６期に相当（中世後期から戦国時代に相当する時期）
　　第90次検出遺構には該当なし。
第Ⅶ期　近世　　18世紀～幕末　　090SX004

当該地点は、下郡遺跡群内においても、水田耕作地の造成時の影響が比較的少ない地点にあたり、他の調査地点に比して遺構の遺存状況が良好な地域である。併せて上述の時期が下郡遺跡全体における遺跡動態のピークとほぼ一致する。

第２節　出土遺物について

１．090SH020出土土器の時間的位置づけについて

第90次、第92次調査では、弥生時代終末～古墳時代初頭に比定される多くの土器資料が出土した。なかでも090SH020からは完存資料を多く含む良好な資料が多量に出土しており、本項では090SH020の時間的位置づけについて検討する。

まず、豊後地域における当該期の土器編年概要について整理をおこなおう。

近年、当該期の豊後地域の土器編年に関する論考には玉永光洋・小柳和宏氏によるものがある[註１]。

玉永・小柳氏等は弥生時代終末から古墳時代前期の間を４期区分し、Ⅰ期～Ⅳ期とした。第Ⅰ期は弥生時代終末に相当するとし、甕・壺ともに球胴化・丸底化への指向がはじまる時期とする。続く第Ⅱ期は、将来的に２小期に分別できる可能性を示唆しながら、守岡遺跡Ⅰ区19号住居跡出土資料等を指標とし、古墳時代初頭に位置付けている。布留式（系）土器の最古式のものに少量の庄内式（系）土器が伴い、在来の壺･甕も大半が丸底化を遂げる段階である。第Ⅲ期は典型的な布留式土器が伴う段階であり、全体組成の１割にも満たなかった外来系土器が一定量を占めるようになり、前代までの土器様相が一変する。第Ⅳ期は布留式土器が量・地域とも拡大をみせる時期とする。いわゆる布留２式に併行する段階に相当するものと考えられる。

以上が近年の研究状況の中での土器編年概要である。これらの編年の枠組を踏まえつつ090SH020出土土器の編年的な位置づけを検討する。

090SH020出土遺物の大半は、本文中でも指摘したように、第１層の黒色土部分からの出土であり、住居埋没途中に廃棄されたものである。したがって、直接住居跡に帰属する資料は少なく、その多くは090SH020が機能を停止した後、それもある程度埋没し、住居中央付近に窪み状の凹部が形成された段階で廃棄されたものである。しかも、土器資料間に堆積した黒色の腐食土の状況から、廃棄の開始と最終廃棄段階には一定程度の時間幅を見込む必要があると推定される。

分　類

090SH020出土土器には、壺、甕、鉢、台付鉢、高坏、器台、小型器台、ミニチュア土器、製塩土器がある。第368図はそれぞれの機種ごとの分類を示したものである。

壺形土器

壺は形態からＡ類からＩ類に分類した。

壺Ａ：いわゆる「安国寺式壺」の系譜をひく複合口縁壺である。胴部突帯を有する大型品と突帯をもたない小型品の２種がある。体部の形態は倒卵形を基調とし、体部に一条の貼り付け突帯を有する資料（ＡⅠ類）と持たないもの（ＡⅡ類）がある。

壺Ｂ：弥生時代後期から続く球形の胴部をもち、短く外反する口縁部を有する壺形土器である。大分市賀来中学校遺跡出土土器の分類[註２]においてⅢ類壺としたものの系譜上にある壺である。

壺Ｃ：外方へ大きく開く素口縁を有する壺形土器である。胴部は倒卵形を基本とする。

壺Ｄ：直立気味に立ち上がる素口縁を有する壺形土器であり、体部は長胴のものが主体を占める

が、中には球形化が進んだ資料も散見することができる。

壺Ｅ：壺Ｄと同様に直立気味に立ち上がる素口縁を有する壺形土器であるが、体部は球形化が進展している。器内面にはヘラケズリが実施される資料もあり、口縁端部内面を肥厚させる資料もある。

壺Ｆ：直立気味に立ち上がる頸部の上部に二重口縁を有する壺形土器。ごく少量であるが、二重口縁部に櫛描波状文を施文するものもある。

壺Ｇ：球形胴化の進んだ体部を有し、外反気味に開く口縁部を有する壺形土器であり、体部内面にヘラケズリが施される。

壺Ｈ：倒卵形の体部を有し、二重口縁を想起させる短く外反する口縁部をもつ壺形土器。

壺Ｉ：小型丸底壺の一群である。小型丸底鉢と呼称した方が良いと思われる資料も一括している。これらの資料群の中には、外部の影響により祭祀専用具として新たに創出されたものと、弥生時代の「く」字形口縁をもつ小形鉢から発展したもの、あるいは、両者の影響下に成立したものを含んでいる。将来的には細分されることが望ましいが、今回は資料数が少ないため一括して扱った。

甕形土器

甕は、本文中でも触れたように次の３種に分類することができる。

甕Ａ（Ａ類甕）：弥生時代以来の系譜上にある甕である。胴部は長胴形を基本とする。底部は凸レンズ状、あるいは丸底を呈する資料である。

甕Ｂ（Ｂ類甕）：器形上は長胴形態を呈するが、内面にヘラケズリなどの新来の技術導入がなされているもの。後述する甕Ｃと甕Ａの折衷形態ともいえる。

甕Ｃ（Ｃ類甕）：布留式（系）甕の技術導入と模倣を意図して製作されたと考えられるもの。胴部は球形を基本とし、器内面はヘラケズリにより薄壁に仕上げられる。口縁端部は、つまみ上げたように肥厚させたものが多く、体部外面の調整はタテ方向のハケ目調整後、胴部上半部にヨコ方向のハケ目調整を施す。一部の資料に、ヘラ状工具により刺突文を部分的に配したものや、櫛描波状文を施文するものがある。

鉢形土器

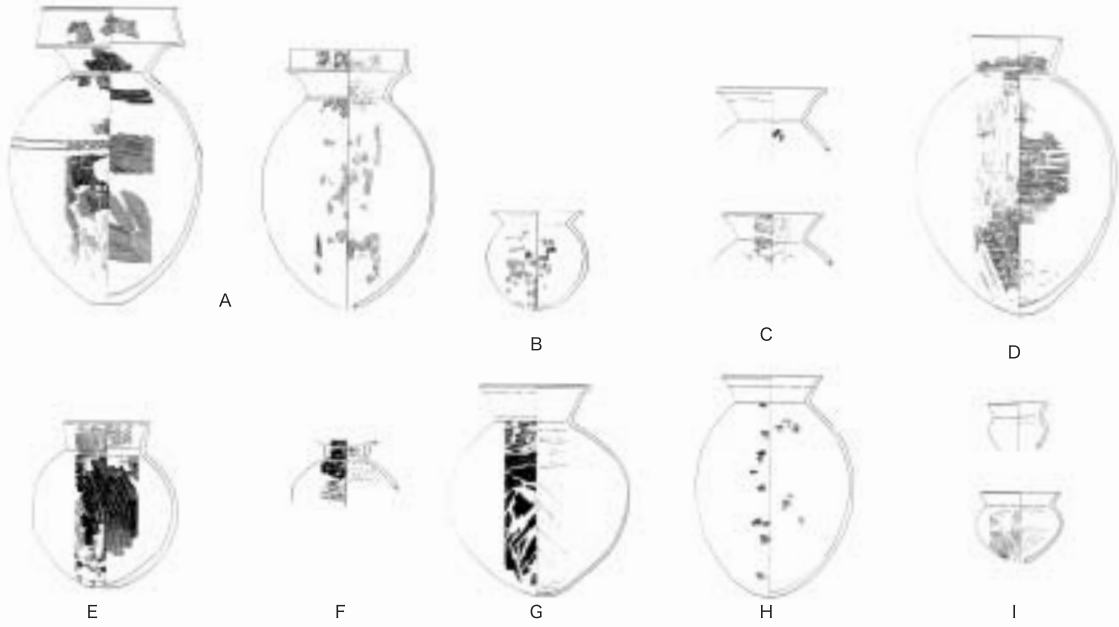
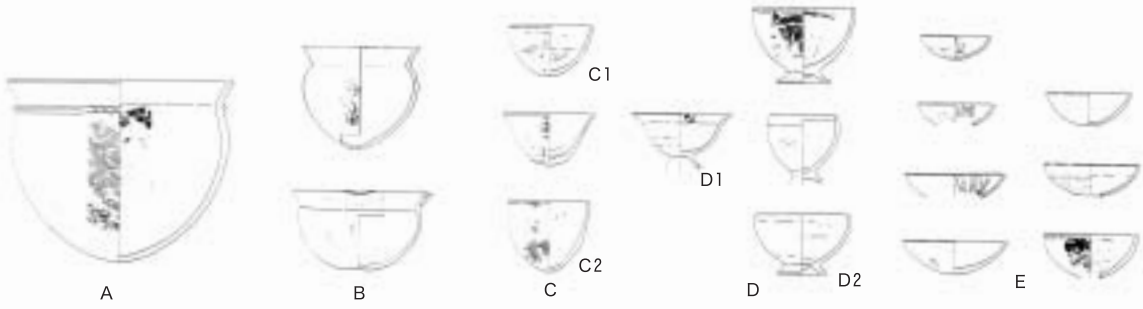
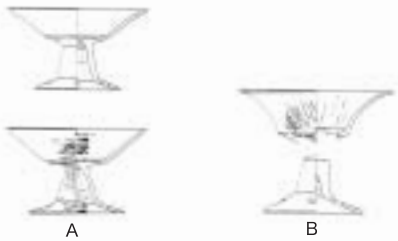
鉢Ａ：口径が30㎝内外を測る大型の鉢であり、球形の体部に外方へ開く口縁部が接続する。頸部に突帯を貼付するものとそうでないものの２種がある。底部は丸底を基本とする。

鉢Ｂ：全体形状は鉢Ａと共通するが、口径が20㎝内外を測る中型品である。底部は丸底を基本とし、片口を有するものや、底部に焼成前の穿孔が認められるものもある。

鉢Ｃ：底部が凸レンズ状、あるいは丸底を呈する鉢形土器である。法量の上で口径10㎝前後のものと、20㎝弱のものがある。

鉢Ｄ：台付鉢である。坏形状にバリエーションが認められる。口縁部の形態により下記の二種に分類することができる。

鉢Ｄ１：屈曲部をもって外方へ開く器形を呈するもの

壺	
甕	
鉢	
高杯	
小型器台	
器台	

第368図　090SH020出土土器分類表

鉢Ｄ２：口縁部が内湾気味に立ち上がるもの

鉢Ｅ：坏状の浅い器形を呈する鉢である。精製土が使用される例が多く、丁寧なナデやミガキにより調整される資料である。中には放射状の暗文を内面に施すものもある。

高坏形土器

高坏は坏部と脚部の組み合わせによって分別される。坏部は形状が逆「ハ」字形を呈し、坏底部から直線的に口縁部へいたる資料（Ａ類）と大きく外反する口縁部を有するもの（Ｂ類）に大別される。脚部は柱部に対して裾部が明瞭に屈曲するもの（ａ類）と、緩やかに外反することで柱部と裾部の区別が明確にないもの（ｂ類）に二種がある。本文中でも触れたように、当該遺構からはこれらの組み合わせによりその存在が予見される４種のうち、２種のみを確認することができた。すなわち、Aa 類と Ba 類である。

高坏Ａ：上記のＡａ類に相当するものである。坏部が逆「ハ」字形をなし、口縁部は坏部見込み部から直線的に立ち上がる。脚部は柱部と裾部の境において明瞭に屈曲する。

高坏Ｂ：上記のＢａ類に該当するものである。坏部が外方へ大きく展開する口縁部を有しており、脚部は柱部と裾部との境に明瞭な屈曲を有するものである。

小型器台

小型器台は１点のみ出土している。図示したものは、円盤状を呈する皿様の坏部をもち、逆台形状の脚部を有している。

器台

器台についても１点のみの出土である。「ハ」の字状の脚部に直立する胴部を有する資料である。

時間的位置付けの検討

上記の分類を踏まえ、これらの土器群の時間的な位置づけを検討する。

まず壺についてみると、壺Ａや壺Ｄ、壺Ｅ等の底部形態に①僅かに平底を残すもの。②凸レンズ状を呈するもの。③凸レンズ状の形態の名残を残すもの。④丸底を呈するもの。の大きくは４種を認めることができる。これらの底部形態は、弥生時代後期からの型式変化の方向性を考慮すると①→②→③→④の変遷を想定することができるが、こういったものが混在する090SH020出土資料の位置づけをどのように考えるべきなのか。具体的には、一括性を保持した同時期の状況と考えられえるのか、あるいはある程度の時間幅の中での現象であるのかといったいずれかになろう。

甕に関しては、新来の布留式系である甕Ｃを除く甕Ａ、甕Ｂに帰属すると考えられる底部形態をみると、①尖底の名残を残す丸底。②凸レンズ状を呈するもの。③凸レンズ状の名残を残す丸底の３種がみられる。このような状況は、先述の壺と同様に連続はするものの、型式的に幅を有する一群である。

小型の鉢については、他器種に先んじて弥生時代後期の段階から丸底を指向し変化することが知られているため、今回の検討の参考にはならない。鉢Ａとした大型のものには凸レンズの名残を残す丸底のものが多い傾向を看取することができる。

高坏には、本文中でも触れたように、坏部形態に２種、脚部形態に２種が認められた。これらを先にみた玉永、小柳両氏の時期区分の様相に照応すると、主体は第Ⅱ期と第Ⅲ期に認められるもので占められるようである。

具体的には、090SH020-081の坏部形態や090SH020-086の脚部形態は第Ⅱ期以前に多く認められる資料であり、090SH020-080、090SH020-084は第Ⅲ期資料にみられる資料である。なかでも、090SH020-080の脚部のように、脚柱部がエンタシス状の膨らみを有する形態は、第Ⅲ期の指標ともなる資料である。したがって高坏資料からは、第Ⅱ期から第Ⅲ期のものを含み、主体は第Ⅲ期にあるという印象を強くする。しかしながら、破片資料のため詳細は不明であるが、090SH020-083の高坏脚部は、次代（Ⅳ期）に盛行するすらっと延びた脚柱部をもつ高坏である可能性が高く、一部に第Ⅳ期の様相を認め得る可能性がある。

小型丸底壺の形態には第Ⅱ期～Ⅲ期段階に認められるものが多い。

以上の各器種の検討を踏まえると、出土状況から推定したように、連続はするものの、３型式以上の型式を含むことから、一括廃棄ではなく、ある程度の時間幅を見込む必要があろう。その幅は第Ⅱ期～Ⅳ期であり、量的には第Ⅲ期のものが最も多い。

註１　玉永光洋・小柳和宏　1993「豊後豊前の庄内式土器」月刊考古学ジャーナル No.363　㈱ニューサイエンス社
註２　大分市教育委員会　1992『賀来中学校遺跡』－大分市賀来中学校プール移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２．都城系暗文土器について－下郡遺跡群での出土様相について－

下郡遺跡群の所在する下郡地区は、「こおり」地名を有することなどから、古くから古代大分郡衙の有力な推定地と考えられてきた。昭和62年から開始された当該地域の発掘調査においても８世紀中頃を契機に遺跡の大規模化が看取され、大型掘立柱建物跡、道路跡等が検出される他、官衙遺跡に通有な陶硯、墨書土器、刻書土器、石帯などの遺物が各所で確認されている。

こうした官衙的な遺物に類するものに「都城系暗文土器」(註３)がある。

林潤也氏等は、豊後における「都城系暗文土器」の出土状況を整理し、これが中央と地方の関わりを探す手段として有効である点を指摘した。さらに、その消長に関して、７世紀後葉に最も盛行し、回転台技法が導入される以前の８世紀前葉以降に諸属性が変化し、これ以後は出土遺跡数についても激減することを示した。

下郡遺跡群でも多くの都城系暗文土器の出土が認められ、今次の調査（第90次・第92次）でも数点の出土が確認されている。

下郡遺跡群内での出土状況を概観すると、７世紀末から８世紀初頭に位置づけられる一群と、８世紀中頃以降に編年される回転台技法の導入を伴う資料群の大きくふたつの時期のものが存在し、量的には後者が前者を圧倒的に凌駕する状況が認められる。

ところで、先の林氏等による県内の出土事例の集成をみると、現在までのところ、８世紀中頃以降の都城系暗文土器の出土が確認されているのは、下郡遺跡群が唯一の例であり、加えて出土量についても、前段階の他遺跡の出土量を大きく上回る状況が注目されている。

林氏等は、この突出した在り方を遺跡の性格に起因したものと理解し、下郡遺跡群の特殊性を示唆し

ている(註6)。

豊後大分平野の８世紀後半段階には、大宰府系坏の地域変容形と考えられる豊後型坏ｄ(註5)が存在する。その成立に関して、大宰府系坏（坏ｄ）とその前段階に存在していた口縁内面に一条の沈線をめぐらす土師器坏（椀）との融合により成立した可能性を示したことがある(註6)。あわせて豊後型坏ｄに認められる内面の面取り風の段の成因について、この内面に一条の沈線をめぐらす土師器坏（椀）からの型式変遷を想定し、その出自を畿内系土師器（本項での都城系土師器）に求めた。

都城系暗文土器の８世紀前半からの存在状況は、上述の口縁部内面に一条の沈線をめぐらす土師器坏（椀）との時間軸上での消長様相から、密接な関係を想定することができる。すなわち、豊後では８世紀前葉の段階で回転台を使用する在地色の強い都城系暗文土器が、７世紀末段階からの変遷の中で成立し、その直後に内面に一条の沈線をめぐらす土師器坏（椀）が出現した可能性が高いと考えられる。加えて、当該期の都城系暗文土器に口縁部内面に一条の沈線をめぐらす口縁部形態を有するものが一定量存在する点を考慮すれば、内面に一条の沈線をめぐらす土師器坏（椀）が当該期の都城系暗文土器の強い影響の下で成立したとする想定を首肯するものといえよう。あわせて、下郡遺跡群が大分郡衙の可能性も含めた古代官衙遺跡であるというひとつの証左ともなりえるものである。

参考文献

註１　玉永光洋・小柳和宏　1993「豊後豊前の庄内式土器」月刊考古学ジャーナル No.363　㈱ニューサイエンス社

註２　大分市教育委員会　1992『賀来中学校遺跡』－大分市賀来中学校プール移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

註３　林　潤也・中西武尚・今田しのぶ　2001「豊後における都城系土師器について」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会

上記文献内においては、林ら３氏はこれまで「畿内産土師器」、「畿内系土師器」、「丹塗り暗文土師器」といった類似する用語を整理し、「都城系土師器」を「形態および製作技法の一部が在来の系譜に求められず、畿内産土師器に共通あるいは類似する在地産の土師器を指すもの」とした。

註４　註１文献に同じ。

註５　坪根伸也　1995「Ⅰ－２　豊後型坏ｄの成立に関する一試案」『羽田遺跡Ⅱ』－大分市営羽田住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（２）－　大分市教育委員会

註６　豊後型坏ｄは、体部外面に回転ヘラケズリを施し、器表面に回転ヘラミガキをおこなうという大宰府系坏との共通属性に加え、口縁部内面に面取り風の段を形成する点や回転ヘラミガキが導入当初より空隙を伴うミガキａ２であるという差異を有する。註５文献参照。

第３節　大分県内出土の製塩土器について

井口　あけみ

大分県内において、脚台付製塩土器は、古墳時代前期前半の布留式古段階に一斉に出現している。器形は、底部が「ハ」字状を呈する低い脚台部から鉢部が伸びる形の器種が大部分を占めると考えられる。胴部や口縁部の出土は少ないが、三反田遺跡出土の胴部（第370図26～28）や北原遺跡31号住出土の口縁部を参考にすればやや丸みを帯びた鉢形が想定できる。成形技法としては、体部脚台部一体づくり、体部底粘土充填、体部外面タタキ成形、脚台部指押さえ作りなどがみられる。

大分県教育委員会の田中裕介氏は『日本土器製塩研究』で、大分県内の出土傾向を概観した上で脚台付製塩土器を「備讃瀬戸内と大阪湾岸に集中していた弥生系土器製塩が弥生時代末から古墳時代前期にかけて日本各地に広がる際の西方への拡大のひとつの様相を示す物」としている（田中1994）。下郡遺跡群第90次調査において脚台付製塩土器が３個体みられた。近年、遺跡発掘調査の増加に伴い脚台付製塩土器の出土遺跡も増加していることから第370・371図のように大分県内の集成を試みた。2002年現在29遺跡で出土している。第369図は、県内出土地点の位置図を示している。大分県において土器製塩をおこなったと判断される遺跡はいまだ確認されていない。

製塩土器の出土傾向を見てみると大野川中流域と大分川上流域での出土が目立っていたが調査件数の増加の伴い大分市域での出土が増す傾向が見られる。県内での出土遺跡の分布としては、①別府湾から豊後水道沿岸地域、②周防灘南部沿岸から国東半島北部沿岸地域、③県南部の臼杵川流域、④大野川中流域、⑤大分川上流域の５箇所に大きくまとめられる。

①別府湾から豊後水道沿岸地域

大分川や大野川の下流域地域である大分平野が中心である。玉沢地区条里跡は大分川の支流である沖積低地に立地している。条里跡から住居や溝から脚台付製塩土器が出土している。同様な立地にある下郡遺跡群や賀来中学校遺跡・毛井遺跡でも出土している。また、亀塚古墳や羽田遺跡の水田跡からも出土しており、遺構を問わず脚台付製塩土器の出土が見られるが、多量には出土しない。毛井遺跡第371図64の口縁部は、形状が変わっており、台付ではない可能性も考えられる。亀塚古墳は、古墳時代中期初頭に築造されており、出土の製塩土器は県内では新しい時期の器形といえよう。

②周防灘南部沿岸から国東半島北部沿岸地域、

脚台付製塩土器の出土は極端に少なく小部遺跡、古城得遺跡、横須遺跡に見られる程度である。海岸線に近い場所でありながら見られないのは､調査数の違いによるものの可能性もあり今後の課題となる。

③県南部の臼杵川流域

県南部にあたり、臼杵川沿いの標高30ｍの台地上に展開する荒田遺跡、下中尾遺跡、田篠台遺跡があげられる。拠点集落からの出土であるが出土数は少ない。

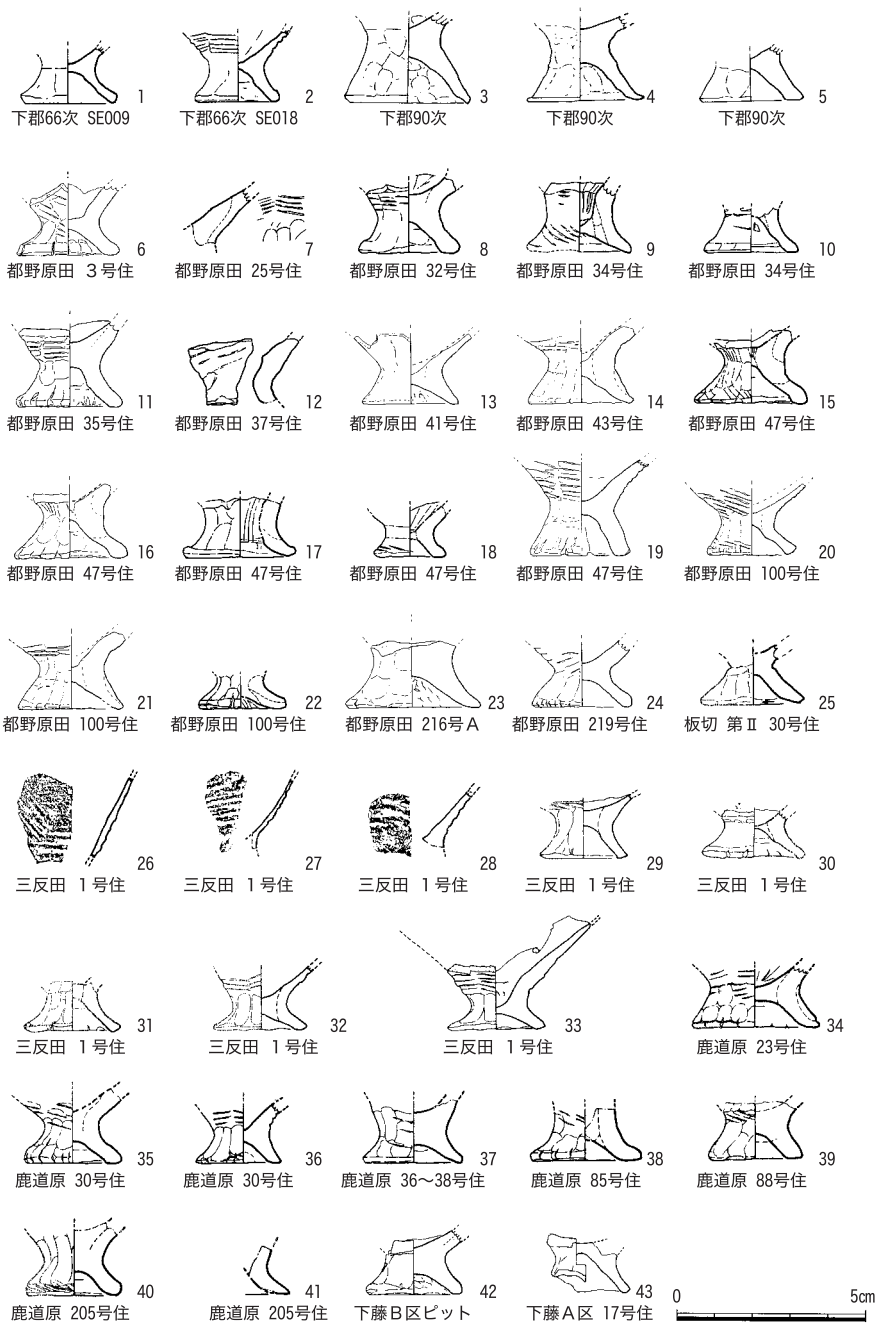
④大野川中流域

大野川の中流域あたる。大野川の支流の野津川沿いに立地する下藤遺跡、大野川沿いの舞田原遺跡、



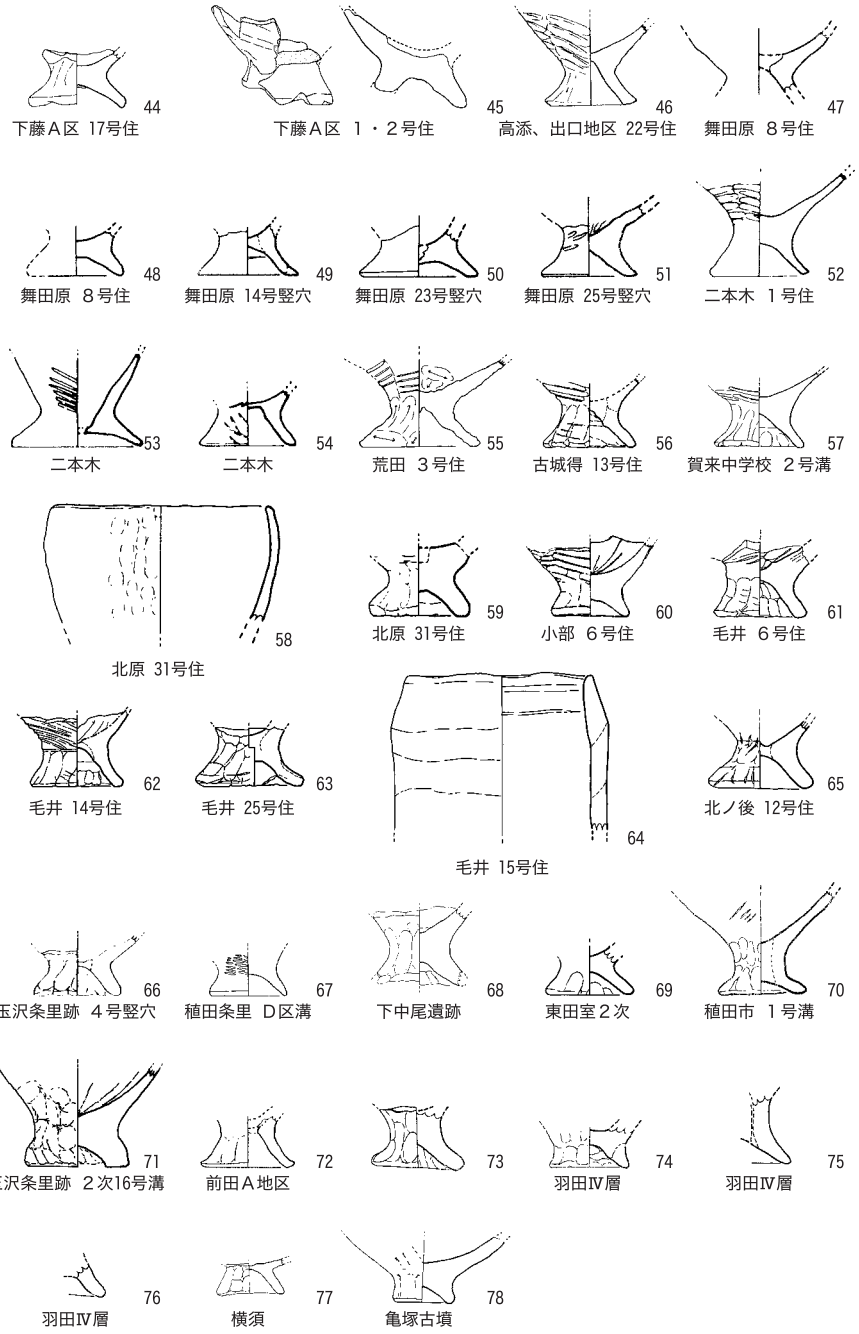
1 下郡遺跡群
2 羽田遺跡
3 東田室遺跡第2次調査
4 尼ヶ城遺跡
5 賀来中学校遺跡
6 北原遺跡
7 北ノ後遺跡
8 稙田条里遺跡
9 稙田条里跡第2次調査
10 稙田市遺跡
11 玉沢地区条里跡　田中地区
12 亀塚古墳
13 毛井遺跡
14 荒田遺跡
15 下中尾遺跡
16 田篠台遺跡 西の原地区
17 下藤遺跡
18 舞田原遺跡
19 鹿道原遺跡
20 高添遺跡
21 二本木遺跡
22 三反田遺跡
23 前田遺跡
24 板切第Ⅱ遺跡
25 都野原田遺跡
26 長者原遺跡
27 小部遺跡
28 横須遺跡
29 古城得遺跡

第369図　古墳時代製塩土器出土位置分布図（1/80万）



第370図　県内出土の脚台付製塩土器実測図①（1/3）

鹿道原遺跡、高添遺跡、二本木遺跡があげられる。二本木遺跡は中流域でも内陸部よりで標高も 250 m 前後であり、最も下流に位置する舞田原遺跡は標高80mであるが、ほとんどの遺跡は約100～200mの標高上に位置する。古墳時代前期に最盛期を迎える拠点集落遺跡の住居跡からの出土であり、出土個数も比較的多い。



第371図　県内出土の脚台付製塩土器実測図②（1/3）

⑤大分川上流域

標高が200m以上の大分川の上流域にあたる。出土状況は、大野川中流域に似た傾向を示している。久住町都野原田遺跡は、標高550mを超える丘陵上に立地する。弥生時代中期～古墳時代中期に営まれた集落遺跡で古墳時代前期前葉～中葉に竪穴住居が50軒ほど営まれている。この時期に脚台付製塩土器が見られる。また、板切遺跡も弥生時代後期後半～古墳時代前期に営まれた集落跡で竪穴住居跡が58軒検出されている。当遺跡は標高660mの高地にあり、製塩土器出土遺跡のなかでは、もっとも高い位置から

の出土例といえる。前田遺跡Ａ地区出土資料を除きほとんどが住居跡からの出土である。大野川中流域や大分川上流域出土の脚台付製塩土器の胎土には石英や結晶片岩を含むことや、日常土器の特徴や土器の胎土は、大分平野と共通点を持つものも含まれることから、下流域の大分平野からの持ち込みである可能性が高いと考えられる。

これまで大分平野の海岸線近くに所在する古墳時代の遺跡の調査数はあまり多くなかったが、都市再開発に伴う調査の増加に伴い、今後調査事例が増える事が予想される。こうした傾向から大分平野において、製塩遺構はいまだ発見されていないが、今後製塩遺跡が発見される可能性は高いと考えられる。

大野川上流域の竹田地方や、筑後川上流域である玖珠地方では脚台付製塩土器の出土は今の所認められていない。大野川上流域は圃場整備に伴う調査が数多く実施されており、当該期の遺跡として古賀遺跡、楠野遺跡、中山遺跡、小園遺跡、石井入口遺跡など大型の拠点集落が挙げられる。しかも大分平野からの持ち込みと考えられる鉄製品や甕などの土器類が多数存在し、大分平野との活発な交流を示しているにもかかわらず、脚台付製塩土器の出土は認められていない。脚台付製塩土器が大分川上流域や大野川中流域まで持ち込まれていながら大野川上流域で出土が認められない事実は、単に遺跡の立地によるばかりでなく、塩そのものの流通形態に起因する可能性も考えられよう。今後の課題である。

参考文献

坪根　伸也　1993『羽田遺跡』大分市営住宅に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　大分市教育委員会
坪根　伸也　1992『賀来中学校遺跡』大分市賀来中学校プール移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　大分市教育委員会
宮内　克己　1994『北原遺跡』挾間町文化財調査報告書１　挾間町教育委員会
染谷和徳他　1999『馬姓遺跡・北ノ後遺跡・乙院屋敷遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(13)大分県教育委員会
小柳　和宏　1997『ガランジ遺跡　稙田市遺跡　稙田条里遺跡』国道210号バイパス（木の上工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　大分県教育委員会
荻　幸二他　2002『稙田地区条里跡遺跡　第２次発掘調査報告書』玉沢土地区画整理事業及び大規模店舗建設に伴う発掘調査　大分市教育委員会
吉田　　寛　1994『稙田市遺跡』七瀬川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　大分県教育委員会
讃岐　和夫　2000『国指定史跡　亀塚古墳整備事業報告―保存整備事業（ふるさと歴史の広場事業)』大分市教育委員会　2000
綿貫俊一・五十川雄也　2002『毛井遺跡Ｂ地区』国道197号大分南バイパス工事に伴う発掘調査報告書第135輯　大分県教育委員会
神田　高士　2001『荒田遺跡』東九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　臼杵市教育委員会
田中　裕介　1993　下中尾遺跡「大分県沿岸部採集の製塩土器２例―東九州古墳時代前中期の製塩土器の年代と系譜―」『おおいた考古　第６集』大分県考古学会
神田　高士　1994『田篠台遺跡Ⅱ』西の原地区発掘調査概報　臼杵市教育委員会
高橋　信武　1984「新生遺跡･下藤遺跡」『野津川流域の遺跡Ⅴ』大分県野津地区土地改良事業関係遺跡群発掘調査報告書　野津町教育委員会
清水宗明・栗田勝弘・城戸誠　1985『舞田原』大分県大野郡犬飼町所在の弥生時代・古墳時代集落跡発掘調査報告書　犬飼町教育委員会
栗田　勝弘　2001『鹿道原遺跡』千歳村文化財発掘調査報告書　千歳村教育委員会
坂本　嘉弘　1988『高添遺跡』－出口地区―　大分県大野郡千歳村高添地区所在遺跡の調査報告書　千歳村教育委員会
清水　宗明　1980『大野原の遺跡』大分県大野郡大野町所在遺跡群発掘調査報告書　大野町教育委員会
渋谷忠章・吉武学　1985『三反田遺跡発掘調査概報』直入町教育委員会
高橋　信武　1989「前田遺跡」『直入地区遺跡群発掘調査概要Ⅰ』直入町教育委員会
宮内　克己　1999『板切遺跡群（第Ⅰ～Ⅴ）小原田遺跡』県担い手育成基盤整備事業都野西部地区に伴う発掘調査報告書　久住町教育委員会
宮内　克己　2001『都野原田遺跡』大分県文化財調査報告書第128輯　久住町文化財調査報告書
佐藤良二朗「小部遺跡第７次調査」『宇佐地区発掘調査概報』宇佐市教育委員会
田中　裕介　1993「大分県沿岸部採集の製塩土器２例―東九州古墳時代前中期の製塩土器の年代と系譜―」『おおいた考古　第６集』大分県考古学会
小柳和宏他　1996「古城得遺跡・小川原遺跡」大田村文化財調査報告書　第４集　大田村教育委員会

近藤　義郎　1962「縄文時代における土器製塩の研究」『学術紀要第15号』岡山大学法文学部
森田　　勉　1983「焼塩壺考」『大宰府古文化談叢下巻』 吉川弘文館
近藤　義郎　1988『日本塩業大系史料編　考古』考古学ジャーナル
亀田　　妥　1992「北九州市内出土の古代の製塩土器について」『研究紀要第６号』北九州市教育文化事業団
山口　信義　1993「北部九州沿岸の丸底製塩土器」『研究紀要第７号』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
大久保哲也　1994「古墳時代の土器製塩」『吉備の考古学研究下巻』
間壁　葭子　2000「師楽式土器再考」『神女大史学』神戸女子大学史学会
大分県教育委員会　2000『玉沢地区条里跡　ガランジ地区　茨川原近世墓地　田仲地地区』一般国道442号（木の上Ⅰ区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
九州古文化研究会　八峠興 2000「因幡・伯耆の製塩土器に関する一予察」『古文化談叢』第44集
「東田室遺跡第２次調査」 2001年大分市教育委員会が調査を行った。
「尼ヶ城遺跡」1976年大分市教育委員会が調査を行った。

写真図版CDの使い方

●必要環境

ソフトウェア：　Windows95以上　または、MacOS9以上
Microsoft Internet Explorer（以下IEと略す）5.0以上
Netscape Communicator（以下NCと略す）5.0以上のWebブラウザが必要です。

ディスプレイ：　解像度1024×768（16ビット）以上の表示可能なディスプレイ（32ビット推奨）

CD-ROMドライブ：　上記基本ソフトウェアに対応したCD-ROMドライブ

※注〔WebブラウザはIEで最適化しています。NCの場合、一部ご使用になれない機能もありますので、IEの使用をおすすめします。〕

● 起動方法

Windows

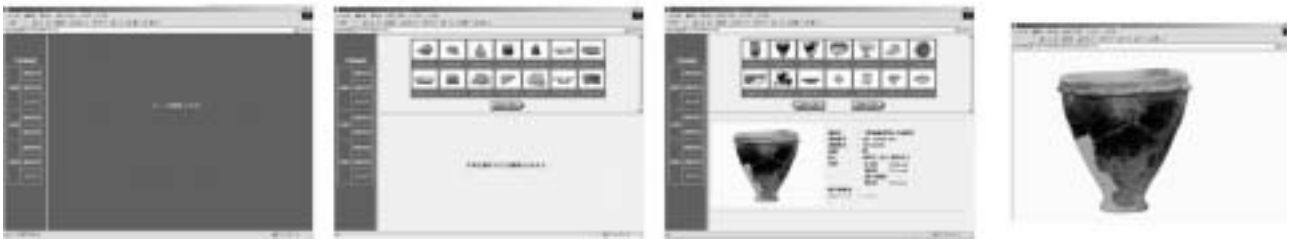


1.「下郡遺跡群Ⅰ」ＣＤをＣＤ－ＲＯＭドライブにセットします。
2.ＣＤ－ＲＯＭドライブ「下郡遺跡群Ⅰ」フォルダを開きます。
3.ウインドウ内の「OPEN.HTM」を開きます。

Mac

1.「下郡遺跡群Ⅰ」ＣＤをＣＤ－ＲＯＭドライブにセットします。
2.「下郡遺跡群Ⅰ」アイコンを開いて下さい。
3.ウインドウ内の「OPEN.HTM」アイコンを開きます。

● 使用方法



1.起動すると画面左に各調査区のメニューが表示されます。
2.各調査区の遺構・遺物写真をクリックすると画面にインデックスが表示されます。
3.インデックスから目的の画像をクリックすると詳細画面が表示されます。
4.詳細画面の写真を再度クリックすると画像が別画面で拡大表示されます。

※注 本CD図版は“JavaScript”を使用しておりますので、正常に表示する為には設定を“ON”にしておいて下さい。
通常、初期設定は“ON”になっていますので変更する必要はありません。）

Summary

The Shimogori sites are located at Shimogori, Oita City, in Oita Prefecture, Japan.

The main excavation of the site began in fiscal year 1987 based on the confirmation of the existence. It is located on the natural embankment of the Oita River at an elevation of 5.0 meters above the sea level

The investigation has already been executed at 137points.

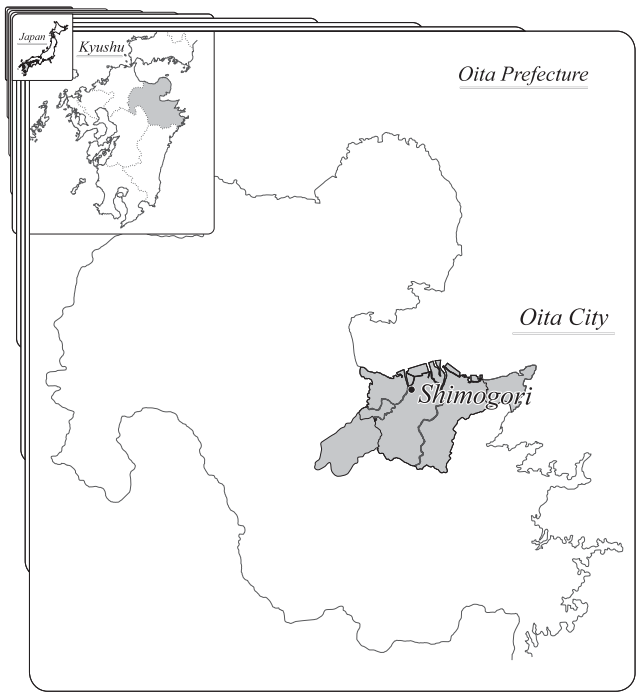
This report is based on results of the 90th investigation, the 91st investigation, the 92nd investigation.

The Contents of this book focus on the ruins of settlements in Yayoi period.

From the voluminous Yayoi pottery and unglazed earthenware excavated from various locations,there are evidences showing that exchanges had taken place between Northern Kyushu and the Inland Sea region. These are concrete and important evidences proving that the people living in Shimogori region had been actively engaging in trade with the neighboring region from Yayoi period.

From repeated invetigations on the Shimogori ruins, it is reaffirmed that these consist of mixed heritage from Jomon period to the present age.

The excavated relics from the various investigated locations show that the Shimogori ruins in a center of research of all periods. In the light of its relations with the other ruins in its period, there is a need, for its continued analysis and investigation.



報 告 書 抄 録

ふ り が な	しもごおりいせきぐん いち
書 名	下郡遺跡群Ⅰ
副 書 名	大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	—
シ リ ー ズ 名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第40集
編 集 者 名	坪根伸也・井口あけみ・宮成美恵
編 集 機 関	大分市教育委員会
所 在 地	〒870-8504　大分市荷揚町２番31号　ＴＥＬ（097）534-6111
発 行 年 月 日	西暦 2002 年 3 月 29 日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下郡遺跡群第90次調査	大分市下郡	44201	322137	33°14'42"	131°37'57"	19970402～ 19970804	1,315	区画整理
下郡遺跡群第91次調査	大分市下郡	44201	322137	33°14'46"	131°37'58"	19970107～ 19970205	80	区画整理
下郡遺跡群第92次調査	大分市下郡	44201	322137	33°14'42"	131°38'01"	19970520～ 19970803	850	区画整理

所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
下郡遺跡群第90次調査	集落跡	弥生～古墳・奈良	住居跡、溝状遺構、土坑、甕棺墓、掘立柱建物跡、土器焼成坑	甕型土器、製塩土器、円面硯、瓦、須恵器、土師器、陶磁器	
下郡遺跡群第91次調査	集落跡	弥生～古墳	竪穴式住居跡、貯蔵穴、屋内土坑	器台、壺型土器、複合口縁壺、須恵器甕片	
下郡遺跡群第92次調査	集落跡	弥生～古墳・奈良	溝状遺構、竪穴式住居跡、土坑、道路状遺構	滑石製紡錘車、企救型甕、緑釉陶器片、京都系土師器皿	

下郡遺跡群　Ⅰ

―大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１―

2002年３月29日

発行　大分市教育委員会
大分市荷揚町２－３１